
IS ~インフィニット・ストラトス~ 自由の戦士と永遠の歌姫

剣の舞姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）自由の戦士と永遠の歌姫

【Nコード】

N0006S

【作者名】

剣の舞姫

【あらすじ】

メサイア攻防戦から一年半、戦争を終戦へと導いた英雄キラ・ヤマトとラクス・クラインはオーブからの依頼で月面裏の宙域に向かった。

だが、そこに発生した重力場に囚われ、気がつくときウサミミ？

プロローグ（前書き）

本来は暇つぶしに書いてたのですが、思っていたより執筆が進むんです。

プロローグ

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

プロローグ

ギルバート・デュランダルが提唱したデステイニープランを阻止すべく、ラクス・クラインが乗る高速戦艦エターナルを中心に始まったメサイア攻防戦、人類の未来を左右する戦争はデュランダルの死という形で終結し、戦争を終わらせた英雄として最強のMSストライクフリーダムとそのパイロットであるキラ・ヤマトは、地球圏で知らぬ者なしという程の有名人となった。

戦争が終わってからプラント最高評議会議長に就任したラクスは、恋人であるキラをザフト軍に招きいれ、一部隊を任せる白服に任命、同時にフェイスの証を与えた。

正式にオーブ軍准将からザフト軍白服になったキラはこの日、オーブからの情報で月面裏の宙域で奇妙な磁場が発生しているというポイントに来ていた。

エターナルに乗り、カガリからの依頼という事でラクスも休暇だった為一緒だ。他にもバルトフェルドやダゴスタ、正式にエターナルのクルーとなったメイリン・ホークも乗っている。

「そろそろポイントだな・・・キラ、そろそろフリーダムに乗って待機だ」

「了解、それじゃラクス・・・行ってくるよ」

「はい、いつてらっしゃっ!？」

ストライクフリーダムに乗り込んで待機する為、ブリッジを出ようとしたキラにラクスがいつてらっしやいと言おうとした時だった。突如エターナルの船体が大きく揺れ、各計器が異常を知らせる警報を鳴らしている。

「何だ!？」

「目標ポイントより強力な磁場が発生! そんな・・・まだ離れてるのに、ここまで影響が出るなんて!!」

バルトフェルドの声に反応してメイリンが現状を報告する。磁場が発生しているというポイントからはまだかなりの距離があるというのに、そのポイントで丁度発生した磁場の影響がここまで出てくるのだ。

「くそっ! エターナル緊急退避!! 直ぐにこの場を離脱する!」

「了解!」

「キラ、お前はラクスを連れて先にフリーダムで逃げろ!」

「バルトフェルドさん!？」

「早く! 最高評議会議長のラクスをこれ以上危険に合わせる訳にいかない! 後方の緊急ハッチを開けるから、其処から脱出して先にプラントへ行け! 俺たちも直ぐに追う!」

エターナルよりフリーダムの方が速い、そう判断しての決断だ。

プラントにとって今やラクスの存在は無くしてはならない存在、だからこの場でラクスを最優先で逃がすのは絶対であり、それが可能なのはキラとフリーダムだ。そして同時にキラも、ラクス同様にプラントの重要人物でもあるので、この二人は早く逃げてもらわないと困る。

「わかりました、バルトフェルドさん、後で必ず!」

「必ず、生きて会いましょうね」
「ああ、必ず会おう！」

ラクスの手を引いてキラはブリッジを飛び出した。

真っ直ぐ格納庫に向かい、格納庫の一角にて威風堂々と佇む灰色の巨人・・・ストライクフリーダムのコックピットに乗り込んだ。流石にパイロットスーツに着替えている時間は無いので、軍服のままだが、問題は無い。ラクスを膝の上で横抱きにして、ハッチを閉じるとOSを立ち上げた。

「バルトフェルドさん！」

『乗り込んだな？ ホーク！ 後部緊急着艦用ハッチを開放しろ！』

『了解！ 後部緊急着艦用ハッチ開放！ X-20Aストライクフリーダム発進、どうぞ！』

「キラ・ヤマト、フリーダム・・・行きます！！」

ストライクフリーダムが射出されると、目の前にミーティアがあった。もうフリーダムがドッキングするだけの状態になっており、これも使って最速で逃げろという事なのだろう。

ミーティアにフリーダムをドッキングさせたキラは直ぐに発進させようとペダルを踏み込んだ。だが・・・エターナルの時同様にフリーダムも揺れだし、何かに引っ張られ始めた。

「な、何だ！？」

「キラ！」

『おいキラ！ 何があった！？ フリーダムがドンドン目標ポイントの方に引っ張られているじゃねえか！』

ミーティアのブースターを全力で吹かしているのにも関わらず、機体は前に進まない。ドンドン磁場のあったポイントに引っ張られ

ていく。

そして遂に、エターナルから離されたフリーダムは完全に磁場に捕まってしまった。更に追い討ちを掛ける様にフリーダムの後方に空間の裂け目が生まれた。

「何・・・あれ・・・」

「キラ・・・あれに飲み込まれたら」

如何なるかは判らない。そう言っている内にミーティアを含むフリーダムの全体が裂け目に飲み込まれていく。

飲み込まれ始めた瞬間からエターナルとの通信も繋がらなくなり、ブースターは意味を成さない。ミーティアをパージしようとも思っただが、磁場の影響でシステムが壊れたのか、ミーティアからフリーダムを切り離す事も出来ない。最早絶体絶命、助かる見込みは無いのだ。

「ラクス・・・ごめん、こんな所で終わりなんて、君を助けられなくて」

「大丈夫です・・・私は、キラが傍に居てくださるのなら、それで満足ですわ」

操縦桿から手を離れたキラは正面からラクスを抱きしめた。これが人生最後だとしたら、せめて最期はラクスの温もりを感じていたい。

「ラクス・・・愛してるよ」

「私も・・・キラ、愛してますわ」

二人の唇がそっと重なった瞬間、キラとラクスの意識は完全に途絶えた。

フリーダムは完全に裂け目に飲み込まれ、ミーティアのビームソードの部分が完全に裂け目に入った瞬間、裂け目は閉ざされ、磁場も消えてしまった。

C・E・75年、プラント最高評議会議長ラクス・クラインと、大戦の英雄キラ・ヤマトはM I A認定され、翌年死亡扱いとなるのだった。

ラクスとキラの死は多くの人間が悲しみ、嘗ての戦友や学友達も全員が葬儀に参列、嘗て敵であったシン・アスカはキラと共に新しい未来を築き上げていく事を夢見ていたのもあって、その悲しみは一入だ。

こうして、C・E・76年にラクスに変わる新しい議長が就任・それは大戦期からキラとラクスを見てきた男、彼等の兄とも言える存在、アンドリユー・バルトフェルドだった。

バルトフェルドは目の前で消えて行ったキラとラクス・・・弟分と妹分の死を未だに信じられず、議長となつてからも、彼等が夢見た世界を作り上げる努力の片隅で、二人の搜索を続ける。

だが、バルトフェルドの生涯を掛けての搜索も空しく、彼は86歳でこの世を去り、後の世にこついい残した。

「嘗ての大戦の英雄は必ず生きています。自由の翼と永遠の歌姫はきつと何処かで生きています筈だ・・・どうか彼等の生を諦めず、いつの日か必ず見つけて欲しい。キラ・ヤマトとラクス・クラインの兄として心から願う」

プロローグ（後書き）

今回はSEEDとのクロスでありがちなIS学園に現れるというものでありません。

第一話 「知らない世界」 (前書き)

天才と天才が出会います。

第一話 「知らない世界」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第一話

「知らない世界」

IS・・・インフィニット・ストラトスとは宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツの事だ。

だが、ISのコアを開発した篠ノ之束博士が引き起こしたと思われる白騎士事件によって従来の兵器を遥かに凌駕する性能を見せ、宇宙進出よりもパワード・スーツとしての軍事運用が始まった。だが、篠ノ之博士はISのコアを467個を作った時点でそれ以上の製造を止め、行方を眩ませてしまったのだ。

故にISの絶対数は467機、現在世界中で篠ノ之博士の捜索は行われているが、一向に行方不明。その為、専用のISを持つ事が許されるのは政府や企業の関係者の中でも、選ばれた者のみになってしまった。

しかし、ISは一見高性能な兵器に思えるが、その実、決定的な欠点があった。それは女性にしか起動できないという点、それにより社会情勢は大きく変わり、女尊男卑が当たり前の世の中になってしまっている。

某国の隠れ家にて、この世にISを生み出した世紀の大天才、篠ノ之束は友人から送られて来た手紙を読んで、友人やその弟の近況を知り、笑みを浮かべていた。

「そつかぁ・・・ちーちゃんもいつくんも、元気そうで良かったぁ」

友人も、その弟も元気になっている。それが判って満面の笑みを浮かべた束は何となく空を見たくなり、窓を開けた。

「・・・？」

窓を開けて庭を見た時、空から何か降ってくるのが見えた。しかも二人・・・。

「って、不味いよ!？」

慌てて束は手元にあつたスイッチを押す。すると庭の・・・二人が落下する地点に大きな網が出てきて、落ちてきた二人は地面に激突する事はなかった。

庭が血溜まりにならなくて済んだ事にホッとした束だが、すぐに庭に出ると、落ちてきた二人を網から下ろしてベッドまで運んだ。

茶色の髪の少年と、ピンク色の髪の少女、何者かは判らないが、気を失っている以上、目を覚ますのを待つしかない。

「んん？ これ・・・」

少年を運んでいる時、束は少年の手首に巻いてある翼をモチーフにした青いブレスレットを見て首を傾げた。如何見ても自分が開発したISの待機状態なのだ。

「うつむ・・・ちょっと借りるよ? って、気を失ってたら返事できないよね」

二人をベッドの上に寝かせると、束は少年の持っていたISの解

析を始めた。

解析して先ず判った事、それは少年の名前、ISの名称、武装などのスペック、そして……。

「これ、私が作ったコアじゃない？ んんん？ 変だねえ……467機しか作ってないし、この束さん以外にコアを作れる人っていない筈なんだけどなあ」

作った覚えの無いコア、存在するはずの無い468機目のコアは、だが確かに此処に存在している。

「ふむふむ、あの男の子の名前はキラ・ヤマト……名前は日本人っぽいけど、外国人？ ISはストライクフリーダム……うそっ！？ なにこのスペック！？ 動力にハイパーデュートリオンエンジンと小型のレーザー核融合炉エンジン……え、何このオーバーテクノロジーの塊」

他にも天候に左右されないビームを発射する高エネルギービームライフル、ビームシールド、クスイファイアス3レール砲、カリドウス複相ビーム砲、シュペールラケルタビームサーベル、スーパードラゴンビーム突撃砲、ヴォワチュール・リュミエールシステム、スーパードラゴン機動兵装ウイング、近接防御機関砲、ワンオフアビリティーにはミーンティアというデカイ武装が追加されるという規格外すぎるスペック。

更には装甲にも驚きだ。フルスキン 全身装甲の装甲で、表面にはヴァリアブルフェイスソフト VPS装甲という物理兵器……実弾や実剣などを無効化する特殊装甲を採用している。

「今、開発してる白式や紅椿より高性能……第5世代って言うっても良いISだよ」

天才の束ですらここまで高性能、オーバーテクノロジーなISは作れない。一体何者が作ったと言うのか……。

「うーん……本当は他人に関わりたくないけど……このISの事は知りたいし、聞いたら出てつてもらえば良いかな」

いつまでも他人を自分の場所（世界）に置いておきたくはない。だから知りたい事を教えてもらったなら早急に出て行ってもらおう事にした。

ベッドに寝かされていた少年と少女……キラとラクスは漸く目を覚ました。

目が覚めて数瞬だけ状況を判断出来なかったが、見知らぬ部屋という事に気付いて警戒する。ザフトの白服のキラと議長になって着るようになった黒い服のラクスだが、銃はストライクフリーダムのコックピットにある専用の収納ケースに入れていた為、持っていない。更には自分達が乗っていた筈のストライクフリーダムが行方不明となれば、危険な状況だ。

「あ、何だ……目が覚めたんだ」

扉が開いて女性が入ってきた。

頭に機械的なウサミミを着けた髪の長い日本人女性、見た感じでは何処かの軍の人間には見えないし、研究者と言うには雰囲気かミスマッチだろう。

「それで、君がキラ・ヤマト君で良いのかな？」

「何故……僕の名前を？」

名乗っても居ないのに見知らぬ女性が自分の名を知っていた事に警戒心を露わにしたキラとラクス、もしかしたら本当に研究者か軍人なのかもしれない。

「君の持ってたISのデータに持ち主である君の名前があったからね」

「・・・IS?」

IS、初めて聞く名だった。しかもキラが持っていたと言つが、キラはそんなものを持っていた覚えは無い。

「あの・・・僕とラクスが乗ってたMSは・・・」

「はあ? MSって何? 君達は空から降ってきたんだけど」

「空から・・・ですか? キラ・・・私達、確かにフリーダムに乗ってましたわよね?」

「その筈、ここは地球みたいだから、多分落ちてきたのかもしれないけど」

ならばフリーダムが無いのはおかしい。

「それで、MSって何? フリーダムって名前みたいだけど、それって君が持ってたISの名前だよな」

「あの、ISって何ですか?」

「知らないの? 今の時代、知らない人なんていないと思っただけどなあ」

如何にも互いの認識に違いがある。MSを知らない女性、知らぬ者はいないというISの存在、勿論キラとラクスはISなんて聞いた事もない。

「すいませんが、中立国オーブ、プラント、ザフト軍、地球連合軍
つて言葉に聞き覚えは……？」

「知らない。何それ？」

「……」

キラが言った名前は誰もが知っている筈の国、軍の名前だ。それ
を知らないという事は……。

「もしかしたら、僕達はこの世界の人間じゃないかもしれません」

「……はあ？」

キラとラクスが語りだしたのは自分達の世界の事、年号や、各国、
戦争やMSの存在、コーディネイターとナチュラル、全てを語った。

「ふうん……それで、君の持ってたIS、ストライクフリーダム
は君が乗っていたMSって事？」

「はい……それで、この世界の事を教えてもらっても良いですか
？」

「え〜メンドイなあ……まあ、話も進まないし仕方ないか」

彼女が話すのはこの世界の事、彼女……篠ノ之束が作り出した
インフィニット・ストラトス
ISの存在により世界情勢が変わった事、9年前の白騎士事件、そ
の他色々……。

「そのISを作り出したのがこの篠ノ之束さんな訳だけど、理解出
来た？」

「はい」

「宇宙進出を目的としたパワードスーツが、兵器になり、今はスポ
ーツへとなった……ですか、女尊男卑はアレですが……」

キラとラクスは東に案内されてMSからISになってしまったストライクフリーダムが置いてあるラボに来た。

ラボの中央には青いプレスレット、ISの待機状態らしいが、これがストライクフリーダムなのだからか。

「それで、これがスペックなんだけど・・・間違いない？」

「はい・・・間違いありません」

「私も設計に少し携わりましたから、内容は知ってます。間違いありませんわ」

「そう、ならこれは返すね」

東にプレスレットを渡されたキラは、取り合えず腕に巻き、その翼をモチーフにした飾りを眺める。

「使い方は・・・はい、ISの説明書あげるから」

「すみません・・・何から何まで」

「別に、さっさと出てって欲しいからしてるだけだよ」

先ほどから感じていたが、随分とキラとラクスを拒絶しているみたいだ。・・・いや、他人を拒絶していると言った方が正しいのかもしれない。

「・・・ん？」

キラが取り合えず御礼でもと思ったのか頭を下げようとした時、その視界に設計中であるうISのデータが入った。

白式と紅椿、第4世代型ISと銘打たれたデータには、その二機的设计資料が載っている。

「あ、勝手に見ないでよ！ それは開発中のISなんだから」

「す、すいません。ただOSに少し興味があつて……」

「OSに……？ 君、プログラミング出来るの？」

「ええ、僕もラクスもコーディネイターですから、特に僕は専門の学校にも通つてましたし、MSのOSも開発した事があります」

「……ほほう」

キラの言葉に東が天才としてのプライドに火を点けた。

「じゃあちよつと、この白式のOSを見て、どこか問題は見つけれぬかな？」

「えつと……」

東に言われてOSデータを見る。並行して白式のスペック、武装データにも目を通すと、いくつか発見した。

「これ、スペック上の最高速度を出す為のプログラムが未完成ですね……それから零落白夜？ ですか……これにシールドエネルギーを回す為のOSも構築が出来てません。回路も構築はされているみたいですけど、効率的なエネルギー転換をするには不十分で、多分ですけど、想定通りの事はまだ出来ない状態ですか？ 既存の物はあるみたいですけど、それを更に発展させようとしている風に見えます」

「わお、凄いな……まさか素人が初めて見ただけで東さんも苦労している所を見つける事が出来るなんて」

「キラはプログラミング関係では天才と言って良い程ですから……ザフト軍でも次世代型MSのOS開発に関わっていましたし」

「ほへえ……これは、もしかして良い拾い物したかも？」

本来であれば他人なんて傍に置いておきたくない東だが、正直な

話、白式の開発が難航している。

一人で完成させたいのだが、このままでは何年掛かる事やら・・・ならばOS関係においては東クラスの天才と見たキラと意見交換しながらするのも手かもしれない。

「むう、でもそれだと・・・」

自分の矜持を曲げる事になる。しかし開発中の白式も紅椿も、後一年以内に完成させておきたいのも事実だ。

「しょうがないか・・・君、えつと・・・キラ・ヤマトだっけ？ そっちの子も、暫く此処に置いたげる」

「まあ、宜しいのですか？」

「その代わり、キラ・ヤマトには東さんの手伝いをしてもらうから。ラクス・クライン？ も家事とか代わりにしてくれるなら良いよ」

有難い事だ。此処で暫く住み込みで働くと考えれば無一文の現在では助かる。

「お願いします」

「お願いしますわ」

「うんうん、素直なのは良いけど、早速手伝ってもらおうよ」

こうして、キラとラクスの二人は篠ノ之東の下で暮らす事になった。

暫くは東も他人行儀な態度しか取らなかったが、半年も経てばキラの頭脳やラクスの人柄に慣れ、いつの間に関に入られていたのか、キー君、ラーちゃんと呼ばれる様になる。

二人の戸籍に関してはキラが持ち前の技術でハッキングを施し、東の故郷である日本国籍で戸籍を偽造した。

そして二人がこの世界に来てから一年後、日本にあるIS学園というIS操縦者養成学校に束の親友の弟が、世界初の男でISを使える人間として入学する事が決まり、束がキラとラクスにも同時期に入学しろという無茶苦茶を言ってくるのだった。

「あの、束さん・・・僕もラクスも、高校生という年齢ではないんですが・・・」

ラクスは既に21歳だが、キラも今年で21歳、流石に高校生一年生というのは無理があるような気がする。

「え〜？ まあキー君は束さんがISの知識を教えたから問題無いとは思うけど・・・いつくんが心配なんだよねえ」

「大事な幼馴染の弟であるからこそ・・・僕に守ってもらいたい、ですか？」

「だ〜いせ〜か〜い！！ それでねそれでね！？ キー君が二人目のISを動かせる男って事で声明出しちゃったから、ラーちゃんと一緒に入学してきてくれるかなあ？」

キラにはIS操縦者として、ラクスにはIS管制として、それぞれ学ぶ為にと偽って束の幼馴染、織斑一夏の護衛をしてほしいのだ。

「はあ・・・束さんのビックリ発言は今に始まった事ではありませんし、僕は良いですよ？ ただ、白式と紅椿の開発は如何しますか？ もう佳境ですし・・・」

「それは束さんにお任せだよ〜！ キー君は気にせず安心して入学してくれたまへ！」

「キラ、こうなつては束さんも聞きませんし・・・諦めましょう？」

「・・・そうだね」

見れば束は既に二人の入学願書控えを差し出している。用意周到
というか、何と言うか・・・・・・・・。。

「あ、ラーちゃんにはもう一つおねがい」

「なんですか？」

「二人の制服姿を写真に撮って送ってくれと嬉しいなあ」

「わかりました・・・」

珍しく呆れたという様子を見せるラクスは、束から彼女手作りの
高性能・高画質デジタルカメラを受け取り、キラと共にIS学園に
行く準備を始めるのだった。

第一話 「知らない世界」 (後書き)

東さんのキャラが難しい……。

一応、彼女がキラとラクスを認めたのはキラだと同じ天才故に波長が合うから、ラクスは歌や人柄ですね。……無理があるでしょうか？

設定（前書き）

設定を載せました。

設定

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

設定

主人公：キラ・ヤマト

年齢：20歳（今年で21歳）

身長：172cm

体重：59kg

誕生日：5月18日

血液型：A型

出身：アメリカ（偽造）

国籍：日本（偽造） ただし、国籍は日本でもヤマト・キラにはしないので、キラ・ヤマトのままに

IS適正ランク：S

専用機：ZGMF-X20A ストライクフリーダム

IS：ストライクフリーダム

使用者：キラ・ヤマト

動力：ハイパーデュートリオンエンジン、小型レーザー核融合炉エンジン

武装：高エネルギービームライフル

シュペールラケルタビームサーベル

クスイファイアス3レール砲

カリドウス複相ビーム砲

近接防衛機関砲

スーパードラゴンビーム突撃砲

ビームシールド

推進システム：スーパードラグーン機動兵装ウイング

ヴォワチュールリユミエールシステム

装甲：全身装甲タイプ

フルスキ
ヴァリアブルフェイズシフト

VPSS装甲

ワンオフアビリティ
単一仕様能力：ミーティア

詳細：本来はMSだったストライクフリーダムがISに変化した物。MSの時と装備、動力、その他は変わらない為、普通のISと比べるとチート全開な機体になる。

世代としては白式や紅椿よりも更に完成された機体であるので、第5世代型ISに便宜上だが分類されている。

ワンオフアビリティ
単一仕様能力のミーティアは高エネルギービームライフルとスーパードラグーンビーム突撃砲、シュペールラケルタビームサーベルを封印する事で使用可能になる設定になっており、ミーティアを発動させると通常のストライクフリーダムの全距離対応広域殲滅型から遠距離広域殲滅特化型になる。

一応ビームソードもあるのだが、そのデカイ図体のおかげで小回りが利かなくなり、キラの得意とする遠距離を重視した戦いがメインとなった。

動力にハイパーデュートリオンエンジンと小型レーザー核融合炉エンジンを積んでいる為、機体エネルギー及びシールドエネルギーは無限となる為、試合や模擬戦の時はリミッターを掛けて、シールドエネルギーを上限無限から上限1500まで抑えている。このリミッターを解く事を許される場面は実戦のみ。

ヒロイン：ラクス・クライン

年齢：21歳

身長：161cm

体重：46kg

誕生日：2月5日

血液型：B型

出身：アメリカ（偽造）

国籍：日本（偽造） キラと同じ

IS適正ランク：A

専用機：オルタナティヴ

IS：オルタナティヴ

使用者：ラクス・クライン

動力：ハイパーデュートリオンエンジン

武装：単装エネルギー収束火線砲

連装レールガン

ミサイル発射管

C I W S

ビームシールド

ナノマシン生成ファクトリー

推進システム：ヴオワチュールリュミエールシステム

ヴァリアブルフェイスソフト

装甲：V P S 装甲

特殊システム：ミーティア・リンク・システム（通称：M L S）

ワンオフアビリティ

単一仕様能力：歌姫

詳細：ラクス専用にと束が開発した世界初のオペレーター専用IS。

ストライクフリーダムヴァリアブルフェイスソフトのデータが多く使われており、動力と装甲に

関しては束が再現したハイパーデュートリオンエンジンとV P S 装

甲を採用しているのだが、流石にオリジナルより出力は劣る。

この機体はオペレーター専用のISというコンセプトで造られてい

るので、武装は付いていてもあくまで自衛用、装甲も当然だが自衛

用の物、その本領は仲間のISのオペレート能力にある。

通常のISの3倍以上はあるハイパーセンサー、そして特殊なナノ

マシンがオルタナティヴの本領である。

ワンオフアビリティ

単一仕様能力である歌姫は正にコンセプト通りのモノで、搭乗者で

あるラクスが歌っている間だけ、自分の周りにナノマシンを散布した特殊フィールドを展開、その中に入った味方のエネルギーを全回復したり損傷、ダメージを修理・回復する事が出来る。当然、フィールド内にいる自分のエネルギーや損傷を修理・回復する事も可能で、発動中に何度でも自分や味方の回復が可能であるので、回数制限を気にしなくて済む。

しかし、これでもオルタナティブの能力はおまけ程度でしかなく、その本当の使い方はストライクフリーダムとの共同運用にある。ストライクフリーダムの単一仕様能力であるミーティアとのリンクがあり、ストライクフリーダムがミーティアを使っていない時に限り、ミーティアを自分の目の前に出して使用する事が出来る。

各関節部は高機動時にストライクフリーダムの黄金の関節と同じように、フェイズソフト 紅いメタリックの輝きを放つ。関節部にPS装甲を使っているので、この現象は起きるのだが、機体表面の殆どはストライクフリーダムと同じ造りになっている。

設定（後書き）

次回はどうなるのかな？ とりあえずセシリアは涙目wwだって障
害物にすらならないんだもん！

第二話 「IS学園」(前書き)

IS学園入学です！

第二話 「IS学園」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第二話

「IS学園」

IS学園、それは世界各国からIS操縦者候補を集め、ISの知識、技能を学ぶ日本の教育機関である。

ISを扱えるのは女性だけ、つまりIS学園は本来なら女子校だったのだが、今年になってISを動かせる男が二人、現れた。

一人は受験会場に置いてあったISを偶然動かしてしまった織斑一夏。第一回モンドグロツソというISの世界大会優勝者である織斑千冬の弟であり、世界で最初のISを動かせる男性として注目を受けた。

そして、もう一人は現在行方不明中の篠ノ之束が発表したもう一人のISを動かせる男性、キラ・ヤマト。今年21歳になる歳ではあるが、IS学園で織斑一夏との比較データを取るといふ名目で入学する事が決まったのだ。

現在、IS学園1年1組の教室にて、キラとラクスは隣同士の席で雑談しながら副担任らしい童顔の先生、山田真耶のSHRを受けていた。同時に、最前列の教卓前の席に座る織斑一夏の観察もしている。

キラもだが、彼もまた周りの女子の視線を一身に受けていて萎縮しているのか、心成しか後姿が小さく見えてしまう。

「織斑君？ 織斑君！」

「は、はい!？」

「あ、大声だしちゃってごめんなさい! お、怒ってる? 怒ってるかな? ごめんね! ごめんね!? あのその・・・自己紹介、”あ”から始まって、今”お”の織斑君なんだけど、織斑君、自己紹介・・・してくれるかなあ?」

「は、はい。織斑一夏です、よろしくお願いします・・・」

簡単な自己紹介、当然だがそれで周りの女子達が納得する筈も無く、不満気な空気が出来上がる。

「えっと・・・以上です!」

ガタンっという音と共にクラスの大半分が椅子から転げ落ちた。何を言うのか期待してみれば、何も言わずに自己紹介を終わらせてしまったのだから、当然の反応と言えばそれまでなのだが・・・。だが、それに納得しなかった者が一人、一夏の後ろに立って、手に持った出席簿で彼の後頭部を思いっきり殴る女性がいた。

「つてえ!?! つて、げえ!?! 関羽!?!」

一夏がそう言った時、再び彼の後頭部に出席簿が叩き込まれた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

痛みに身悶えている一夏を放置して、その女性は教壇、山田先生の横に立つ。

「織斑先生、会議は終わられたのですか?」

「ああ、山田先生、クラスへの挨拶を押し付けて申し訳ございません」

「いえ、副担任としてこれくらいはしないと」

「どうやらこの女性が担任らしい。一夏への態度から見ると、キラは東が言っていた“ちーちゃん”がこの女性なのだろう。」

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。だから私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。理解出来ない者は出来るまで指導してやる。私の仕事は若干15歳から16歳までを鍛えることだ。だから逆らっても良いが、私の言う事だけは聞け、いいな」

まるで軍隊の教官みたいな挨拶だが、東から聞いたところによると千冬は少し前までドイツ軍IS部隊の教官をしていたらしい。

なるほど確かに、軍の教官をしていたというだけあって、纏っている雰囲気、視線、口調の鋭さ、何もかもが軍教官のそれだ。

当然、IS学園に入学したての普通の女の子ならば萎縮してしまうのが普通なのだが、織斑千冬はその雰囲気打ち消す程の人気がある。

「キャーキャーキャー!!! 千冬様! 本物の千冬様よ!!!」

「私、ずっとファンでした!!!」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に入学したんです! 北九州から!!!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです!」

「私、お姉さまの為なら死ねます!!!」

まるでアイドルを目の前にしたファンクラブみたいな反応を示す。思わず頭を抱えてしまうキラとラクスだが、どうやら千冬も同じらしい。彼女もあまりの状況に頭を抱えていた。

「毎年、よくもまあこんな馬鹿者共が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

それもあるのかもしれない。ドイツ軍教官をしていたのだから、この程度の馬鹿を矯正するのは赤子の手を捻るより簡単だろう。

「……で？ お前は挨拶も満足に出来んのか、お前は」「いや、千冬姉、俺は……っ」

再び出席簿が一夏の頭に落ちた。

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「……はい、織斑先生」

一夏が千冬の弟だという事でクラスが再び騒がしくなったものの、千冬が出席簿を教卓に叩きつける事で沈静化、自己紹介が進み、次は“く”の人間、つまりラクスだ。

「ラクス・クラインです。出身はアメリカですが、国籍は日本になっていますわ。IS学園では操縦者ではなく、ISのオペレーターを学ぶつもりでいます。どうぞ、よろしくお願いします」

東と共にキラとラクスの戸籍を偽造した時、キラは日本系のアメリカ出身、ラクスは英国系のアメリカ出身の日本国籍として作った。両親は既に死亡している事にして、二人ともアメリカで生まれて日本で育ったという風に偽っている。

そして自己紹介は進み、次は“や”……つまりキラだ。

「キラ・ヤマトです。一応、織斑君と同じくISを動かせる男って

事になってます。ラクスもなんですけど、僕達は現在、皆さんより年上で、今年21歳になります。えっと、年齢の事とかは気にしないで接してくれると嬉しいですよ」

その瞬間、教室が黄色い悲鳴に包まれた。

年上の男、中性的な美形の顔、柔らかく儂げな笑顔、綺麗なアメジスト色の瞳、艶やかな栗色の髪、170cmを超える高い身長、無駄な脂肪も無く引き締まっていて尚細い身体、女性にとって理想的な男性を表したかのようなキラの容姿に年頃の女子達は皆一様に見惚れてしまう。

「さあ、いつまで騒いでいる！ SHRは終わりだ。諸君等にはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか？ いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。以上だ」

SHRが終わって直ぐ、一夏がキラの所に来た。

「よお、ヤマトだったけ？ 俺は織斑一夏だ。同じ男同士、よろしくな」

「よろしく織斑君、僕の事はキラで良いよ」

「そっか、なら俺も一夏で良いぜ・・・っと、そっいや年上だったけ？ でも年齢気にしないですって言ったから、このままで良いか？

敬語とか苦手です」

「うん、僕もその方が親しみやすいし」

早速友達になってしまった。

何となく、一夏は誰とでも直ぐに仲良くなれる才能があるのではと思ったが、この時キラは、彼の才能が実は女性にのみ、その力が

倍増されるとは思っていなかった。

「あら？ キラ、もう織斑さんと仲良くなられたのですか？」

「ああラクス、うん」

「えっと、クラインさんだっけ？」

「はい、ラクス・クラインですわ。キラと同じ歳です」

「二人って、知り合いなのか？」

自己紹介の時も、考えればキラはラクスをファーストネームで呼んでいた気がする。

「うん、ラクスは僕の恋人だから」

「こ、恋人お！？ マジかよ・・・」

彼女いない歴〃年齢の一夏、キラとラクスが恋人同士だということに驚き、そして珍しいモノを見る様な目を向けてくる。

「どうしたの？」

「いや、俺の周りに付き合ってる奴っていないくてさ・・・珍しくて」

「そうなんだ・・・一夏は？ 恋人とかいないの？」

「いやいや、いねえよ。俺ってそんなにモテないしな」

少なくとも、このIS学園ではキラと一夏が唯一の男子なのだから、恋人のいるキラより一夏の方が出会いに恵まれている筈だ。

「そっぴやキラがIS動かせるって、東さんが発表したんだよな？」

「東さんの知り合い？」

一応、惚けてみた。東から一夏の事を護衛する様に言われたとは言えない。

「ああ、千冬姉の親友だからな。歳は離れてるけど、俺も幼馴染み
たいなものさ」

「そうなんだ・・・東さんとは一年前からの付き合いでね。彼女の
下でISが動かせるって判ったんだ」

「一年前・・・よく東さんに認められたなあ」

「あはは・・・最初はまともに話も出来なかったけどね」

流石に、幼い頃からの知り合いと言うだけあって、東の性格を把
握している。

「あれ？ ってことは東さんの居場所とか、知ってんのか？」

「いや、僕達がここに来る時に引越しちゃったから、それ以降の
居場所は知らない」

これは事実だ。

「そっか・・・」

行方不明のお姉さんの事が心配なのか、少し心配という表情をす
るが・・・。

「まあ、東さんなら心配するだけ無駄か。あの人は千冬姉がIS使
って攻撃しても死なないだろう人だし」

「それ、既に人じゃないですよ？」

何気に酷かった一夏の東像だった。

「ちよつといいか・・・？」

その時、三人で話していると横から話しかけてくる者がいた。そちらに目を向けると、長い艶やかな黒髪をポニーテールにした釣り目の少女・・・篠ノ之束の妹である篠ノ之箒が一夏に目を向けている。

「あ、箒？」

「ヤマト、クライン、悪いが・・・ちょっと一夏を借りても良いだろうか？」

「良いよ、一夏から聞いたけど、幼馴染なんですよ？ 積もる話もあると思うし、お好きなだけ」

「感謝する」

箒と一夏が教室を出たのと入れ違いで千冬が入ってきた。

「ヤマトとクラインはいるか？」

「はい？」

「ああ、二人とも・・・悪いが職員室に来てくれ。話したいことがある」

「かしこまりましたわ」

千冬と共に職員室に移動する、のかと思えば向かったのは職員室ではなく生徒指導室だ。

「ここなら誰にも聞かれないだろう」

「あの、織斑先生？」

「ん？ ああ済まない。人には聞かせられない話だから・・・二人の事は束から聞いている。IS学園に入学した理由もな」

「あ、そういう話ですか」

どうやら束が前以て千冬に連絡していたらしい。

「特にヤマトには、弟の事で色々と迷惑を掛けてしまう事になるからな・・・これだけは言っておきたかった。ヤマト、一夏の事を・・・どうか頼む」

そう言つて、千冬は頭を下げた。大事な弟を護衛する為に来てくれたキラに対する最大限の礼儀と感謝を込めての行動なのだろう。千冬の表情を見ればそれがよく判る。

「頭を上げてください先生、僕はもう一夏の友達ですから、友達を守るのは当然のことです」

「そうか・・・何かあったら何でも言ってくれ、出来る限り最大限の協力は惜しまないつもりだ」

「いえ、私も何かと先生には協力いたしますわ。お相子です」

キラとラクスの言葉に安心したという表情を見せた千冬は改めて二人と向き合った。そこにいるのは弟の身を案じる姉としてではなく、一教師としての雰囲気纏った千冬だ。

「実は二人を呼んだ理由なのだが・・・クラインの事だ」

「私・・・ですか？」

「ああ、クラインは一応、ISオペレーター志望という形で入学しているのだが・・・入学試験でISを動かしたのは覚えているな？」

「はい・・・あの、それが何か・・・？」

確かに、入学試験の時にキラもラクスもISを使った。

キラはストライクフリーダムを、ラクスはラファール・リヴァイヴを使って試験を行っている。

「クラインの試験結果なのだが・・・IS適正ランクがAだと判明

した。これは国家代表や国家代表候補生レベルの適正だ……もしかしたら、ISオペレーター志望と言っても適性レベルで問題が出てくるかもしれない。正直、何処の国も適正レベルの高いIS操縦者は求めているからな、一応、その事を頭に入れておいてくれ」

つまり、日本だけでなく、様々な国からラクスをISオペレーターとしてではなく、IS操縦者としてスカウトしてくる可能性が高いという事だ。

IS適正ランクAの者は何処の国でも操縦者として国家代表や軍に欲する人材だ。それをISオペレーターとして遊ばせている余裕は無いという事でもある。

「わかりました。僕もラクスも、その辺には気をつけておきます」

「ああ、そうしてくれ・・・正直、私は一介の教師でしかない。国家や学園上層部には表立って逆らえんからな」

IS学園の学生は何処の国家・組織にも属さず、介入もされないという校則があるのと、裏から手を回してくる国家や組織は存在する。

IS学園の学生だからと言って安心は出来ない。だからこそキラが一夏の護衛として来たというのもあるのだが。

「話は以上だ。そろそろ教室に戻れ」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

「それでは」

生徒指導室から出て教室に向かう途中、キラとラクスは先ほど千冬から聞いた事を思い返していた。

ラクスのIS適正ランクが国家代表や代表候補生と同等のAを出している。それによってオペレーター志望という名目で入学したラ

クスを何とかIS操縦者にしようと学園上層部や日本、他国が暗躍してくる可能性がある。

キラは一夏の護衛をする事にはなっているが、ラクスのことも守らなければならぬ。その決意の下、ラクスの手を握ったキラを、ラクスは微笑み、そっと握り返すのだった。

第二話 「IS学園」(後書き)

今のところキラとラクスが恋人だという事を知っているのは千冬、真耶、一夏、束だけです。

これからですwwこれからクラス中に広がりますよ！

第三話 「女尊男卑」(前書き)

初登場！ イギリスのお嬢様！！

第三話 「女尊男卑」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三話

「女尊男卑」

IS学園入学後、最初の授業は山田先生によるISの基礎知識になった。

ISに関して、女子は殆どが大なり小なり勉強はしているだろうが、これはその復習も兼ねた授業なので大事な事だ。

「はい、ここまでで何か質問はありますか？」

凡その基礎知識となる所を進行していた山田先生が質問はあるかと振り返った。

そして、数多くいる生徒達の中から小さく手を上げている生徒を見つめる。その生徒とはIS学園初の男子で、史上初の最初の男性IS操縦者となった織斑一夏だ。

「はい、織斑くん？ 何でしょうか？」

「えっと・・・そ、その・・・」

「はい？」

「殆ど、全く解りません・・・」

「・・・え？」

一瞬、山田先生は一夏が何を言っているのか理解出来なかった。確かに一夏は男子で、今までISに触れる機会なんて無かったの

だから、理解出来ない所が多少あっても可笑しくはなかったのだが、基本的にIS学園に入学する者には入学前にISの基礎知識が書かれた参考資料が配布されている。

配布資料を読んでもいれば少なくとも基礎知識の中の、それこそ基礎の基礎くらいは解る筈なのに、それが解らないとは・・・如何いう事なのか。

「ま、全く!？ これっぽっちもですか!？」

「はい、全く、これっぽっちも・・・」

「織斑」

山田先生では荷が重いと思ったのか、教室の後ろで授業を見ていた千冬が一夏に声を掛けた。その口調と表情は心なし厳しい。

「入学前に配布された参考資料は読んだか？」

「え？ 参考資料ってあれだろ？ あの分厚いやつ・・・あれなら読まずに間違えてタウンページと一緒に捨てちゃった」

その瞬間、千冬の持つ出席簿が一夏の頭に落ちて、本当に出席簿で頭を叩いた音なのだろうかと思うほど激しい音が教室に響き渡った。

「馬鹿者、表紙に必読と書かれてあっただろうが！ 後で再発行してもらってから、一週間以内に覚えろ、いいいな？」

「い、いや・・・一週間であの厚さはちよつと・・・」

「・・・やれと言っている」

「・・・はい、やります」

千冬の鋭い眼光が一夏を射抜き、逆らう事は許さないと言葉に出さずとも語っていた。一夏は退路を断たれたのか、頂垂れながら了

解の言葉を返すしかない。

「ヤマト、後でこの馬鹿に基礎知識を叩き込んでおけ、同じ男同士の方が捗るだろう」

「わかりました」

一夏には後で配布される資料で勉強してもらおう事にして、授業は取り合えず通常通りに進んだ。ただ、その間、一夏は内容が全く解らず頭から煙を出していたのは・・・言うまでも無いだろう。

休み時間になり、キラとラクスは頭を抱えている一夏の所に集まっていた。

「悪いなキラ、迷惑掛けて」

「気にしないで、友達が困ってるなら力になるのは当然だよ」

「私も協力しますわ。頑張りましょう？」

「ほんとにサンキューなキラ、クライン」

「あら、私もラクスで宜しいですよ？ 私ももうお友達でしょう？」

「そっか、なら改めてサンキューなキラ、ラクス」

心優しい友人二人に心が和む一夏と、それを見て微笑むキラとラクスだったが、その三人の間に割り込んでくる者がいた。

「ちょっとよろしくて？」

「んあ？」

「ん？」

「はあ？」

話しかけてきたのは金髪の長い髪の少女、見た感じだとヨーロッパ系の人間だろうか。

「まあ！？ 何ですのそのお返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応態度があるのではないかしら？」

「悪いな、俺、君が誰なのか知らないし」

「いや、一夏・・・自己紹介聞いてなかった？ イギリスから来たセシリア・オルコットさんだよ」

「ああ・・・自分の事で精一杯だったから聞いてなかったかも・・・で？ そのオルコットさんが何か用か？」

ふてぶてしい態度だが、別にそれでも構わないだろうとキラも一夏も思った。セシリアからは何処かキラと一夏を見下しているような雰囲気を感じられ、相手が見下しているのなら、別に敬意を払う必要など無い。

「わ、私を知らないなんて・・・イギリス代表候補生にして入試主席の、このセシリア・オルコットを！？」

「なあキラ、代表候補生つて何だ？」

「国家代表IS操縦者の候補生、読んで字の如くね」

「ふうん、何か凄いのか？ それ」

「そうですね、代表候補生は簡単には選ばれないものですわ。人数に限りがありますし、IS適正レベル、教養、技術、それぞれが優れていなければ代表候補生になれないのです。更に代表候補生には国家や企業から専用機・・・つまり専用のISが支給されているのですわ」

「そう！ つまりはエリートですわ！！」

一タイライラする事を言うセシリアだが、キラもラクスも、なるべく視界に入れないようにして、スルーしていた。

「へえ、エリートねえ・・・」

「そうですね！ 私のような選ばれたエリートと同じクラスになれたのは正に奇跡！ その幸運をもう少し喜んでいただけませんか？」

「そうか・・・それは光栄だ」

「うん、光栄だね」

「光栄ですわね」

「・・・馬鹿にしていますの？」

キラ、ラクス、一夏の棒読みの賛辞に不満を持ったセシリアが不機嫌だと言わんばかりの表情で、主にキラと一夏を睨みつけた。

「・・・（ああ、なるほど・・・女尊男卑の影響なんだ）」

セシリアはキラと一夏を見下していたのではない、男という存在そのものを見下していたのだ。

「だいたい、何も知らないくせによくこの学園に入学してこれましたわね。男性初のIS操縦者と言うから少しは期待していたのに、ヤマトさんはそれなりの知識はあるご様子ですが、織斑さんは期待外れですわ」

明らかに一夏を馬鹿にしていた。口にはしていないがキラの事も、馬鹿にしているのは態度に出ている。大方、同じ男なのにキラの華奢な身体で、IS操縦も大した事はないと思っっているのだろう。

だが、セシリアは考え方がやはり子供だ。

一夏がこの学園に入学出来た事に知識は関係無い。男性初のIS操縦者という事で様々な国家・企業・組織が一夏を狙っている。

もしIS学園に入学していなければ今頃、彼は間違はなく実験のモルモットになっているか、解剖でもされているかのどちらかだった

ただらう。

「まあでも、私は優秀ですから、織斑さんの様な方にも優しくしますわよ？ 解らない事があればまあ、泣いて頼まれれば教えて差し上げて宜しくつてよ？ ヤマトさんも流石にエリートである私ほどの知識は御座いませんでしようし・・・何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？ 俺も倒したぞ教官」
「僕も倒したよ」

「私の実技試験はオペレーターのものでしたから、関係ありませんわね」

ラクスの実技試験はオペレーター希望だったので、オペレーターの基礎技能の試験と、ISを動かせるかどうかの確認だけだったので、この場合は関係無い。

キラは教官を務めた山田先生を相手にストライクフリーダムで開始3秒後に完勝している。

「はあ！？」

「倒したっていうか・・・いきなり突っ込んできたのをかわしたら、壁にぶつかって動かなくなっただけだ」

「特に強いとは思わなかったし、苦戦する程じゃなかったかな僕の場合」

「私だけと聞きましたが・・・っ」

「女子の中ではってオチじゃないのか？」

恐らくそうだろう。

「あなた方も教官を倒したっていうの！！？」

「え、えっと・・・落ち着けよ、な？」

セシリアが詰寄ってきたが、椅子に座っている一夏は避けられない。

キラは立っていたので少し後ろに下がれば問題無かった為、一夏の冥福でも祈っていた。

「こ、これが落ち着いていられ」

そこでチャイムが鳴った。休み時間が終わり、次の授業が始まる合図だ。

「話の続きはまた改めて！ 宜しいですわね!？」

そう指差しながら宣言して自分の席に戻ったセシリアの後姿を眺めながら、キラとラクスは一夏に自分達も席に戻ると伝え、席に戻っていった。

一日の授業が終わり、それぞれが寮の自室に帰宅する中、キラとラクスは再び千冬に呼ばれて職員室に来ていた。

「悪いな一日に何度も呼び出して」

「いえ」

「どうされたのですか？」

一夏の事なら朝に聞いた。他に何の用があるのだろうか。

「IS学園の学生は基本的に寮に入る事になっているのは知っているな？」

「はい」「はい」

「それで、東からの要請もあつたが、私も考えてな。お前達には相室になつてもらふ」

「僕とラクスがですか？」

「そうだ。ヤマトとクライン、二人が一夏の護衛だと聞いているからな。二人揃つて同じ部屋の方が何かと都合が良いだろう」

なるほど、確かにその方が都合が良い。お互いに別々の部屋で、同室の人間が居ては護衛の事で話をするのに不便だ。

「二人の部屋は一夏の部屋の向いにある。これが鍵だ」

千冬が差し出してきた二本の鍵を受け取ったキラとラクスは、それを失くさない様に確りと鞆の中に入れる。

「それとな・・・お前たちは21歳になるとは言え、この学園の学生だ。淫行には充分気をつけておけよ？」

「っ！？ せ、先生！！」

「ははは、すまん。だが本当に気をつける？ 本来なら男女同室は問題があるんだ。何かあればお前達を別々の部屋にしなければならなくなるからな」

「・・・わかりました」

言いたい事は理解出来るのだが、何故か釈然としない。

千冬は至つて真面目な顔をしているが、その瞳の奥ではキラとラクスをからかつて面白がっているという感情を隠しきれていないのだ。

「それでは失礼します」

「ああ、明日も遅刻はするなよ？」

「それでは」

職員室から出て二人は寮に向かった。

IS学園の敷地内にある学生寮、食堂や大浴場も完備した小さなホテル並の大きさを誇る寮の一室、一夏の部屋だと言う1025室の向いにある1035室、そこがキラとラクスの部屋だ。

部屋の中に入ったキラとラクスは部屋の設備に驚いた。千冬から聞いた話だが、二人の部屋は特別仕様になっており、部屋にあるパソコンは他の部屋のパソコンより高性能なキラに合わせた仕様となっている。

更に部屋の壁は完全防音に優れており、窓も特殊対弾ガラスでいざという時の要塞も兼ねた作りになっているらしい。

「僕は早速パソコンを確認するけど、ラクスは如何する？」

「私はシャワーを浴びてきます。少し汗をかいてしまいましたから」
「そう」

荷造り等は既に女性の業者が終わらせてくれている。ラクスはクローゼットから着替えとバスタオルを取り出してバスルームに入っていた。

それを見送ったキラは早速パソコンを起動、メールを設定すると束の秘密アドレスにメールを送り、イギリス政府のコンピュータにハッキングを開始して、今日話しかけてきたセシリアの事を調べ始める。

「セシリア・オルコット、15歳、イギリス名門貴族オルコット家の長女で、イギリス代表候補生。使用ISはイギリスが開発した第三世代兵器であるBT兵器の試験機を搭載した射撃型IS“ブルー・ティアーズ”、BT兵器はビットと呼ばれる誘導兵器の事か・・・フリーダムのドラグーンみたいなものかな」

ただし、ブルー・ティアーズに搭載されているBT兵器、ブルー・ティアーズは射撃しか出来ない。フリーダムドラグーンは射撃の他にもビームソードを展開して近接戦にも使えるので、どちらが高性能かと問われれば、言うまでも無い。

「それに、イギリス本国でのデータではブルー・ティアーズを操作している時は他の動作・・・攻撃も移動も出来ないみたいだ。特殊な空間把握能力は持っていないんだね」

キラやラクスの世界の誘導兵器、ドラグーンでもカオスやレジエンドに使われていた空間把握能力に依存しない第二世代のドラグーンのような物でなければ、セシリアにはBT兵器は使いこなせない。

「まあ、こんな所かな」

パソコンの電源を落とし、キラは窓から外を眺め始めた。夕暮れに照らされるIS学園の敷地全域が見渡せて、良い景色だった。

「明日はどうなるかな・・・?」

今日のセシリアの態度を見る限り、恐らく明日にでもセシリア関連の事で何か起きる気がする。

「・・・・・・・・」

だが、そんな事は関係無い。何かあると、キラにはラクスと、相棒であるストライクフリーダムがいる。

だから、特に大きな心配も無いだろうと考えを締めくくり、そろそろシャワーを浴び終わるだろうラクスの後にシャワーを浴びる為、自分のバスタオルと着替えを用意するのだった。

第三話 「女尊男卑」 (後書き)

次回、遂にセツシーが喧嘩売りますよ！ しかも売ってはいけない相手に。

第四話 「無謀な決闘」 (前書き)

とある読者の方の為にもう一話投稿しました！

第四話 「無謀な決闘」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四話

「無謀な決闘」

入学二日目の朝、キラとラクスは二人揃って学生寮の食堂に来ていた。

流石は国から資金が出ているIS学園の学生寮内食堂というだけあって、メニューは豪勢かつ豊富で、キラやラクスの好きな料理も数多くある。

キラは和食系朝食メニューの焼鮭定食を、ラクスは洋食系朝食メニューのクロワッサンとサラダ、スープのセットを頼み、座る席を捜していた。

「ん？ おーい！ キラ！ ラクス！」

「あ、一夏？」

「篠ノ之さんも一緒にすわね」

キラとラクスを見つけた一夏が呼んでいたのも、近づけば一夏の隣二つが空いていたので、そこに座ることにした。

「おはよう一夏、篠ノ之さんも」

「おはようございます、お二人とも」

「おう、おはようキラ、ラクス」

「・・・おはよう」

一夏の隣、キラとは反対側には篠ノ之箒が座っており、一夏と箒は先に来て朝食を食べ始めていたらしい。既に二人の朝食は半分ほどが無くなっていった。

「あ、キラ、ラクス、改めて紹介するぜ。俺の幼馴染の篠ノ之箒だ。箒、こっちは昨日友達になったキラ・ヤマトとラクス・クラインな」

「よろしくね篠ノ之さん」

「よろしくお願いします」

「よ、よろしく・・・」

箒の事は一夏からもだが、東からも聞いている。それはもう自慢の妹らしく、箒がどう可愛いのかなどを耳にタコが出来るくらい聞いていた。

「キラ、お前の朝食ってそれだけ？」

「うん」

「ラクスは判るけど、お前は大丈夫か？ そんな朝食が少なくて」

「キラは小食ですから、朝から沢山食べたなら動けなくなってしまっんです」

その事でキラはバルトフェルドからよく注意されていた。MSパイロットが朝から朝食が少なすぎる、もっと食べないと戦いの時に力が入らないだろう、と・・・。

「それより一夏、早く食べないと遅刻するよ？」

先に来て食べていた一夏だが、キラが来たときから減っていない。逆にキラとラクスがもう直ぐ食べ終わりそうになっていた。

「うお！？ ま、マジかよ！」

見れば箸もそろそろ食べ終わる。慌てて一夏も朝食の残りを食べ終え、そこで寮長でもある千冬が食堂に入ってきた。

「いつまで食べてる！ 食事は迅速に摂れ！」

白いジャージ姿ではあるが、朝から変わらず凜とした雰囲気です。凛々しいお姿だ。

「あれ？ 千冬姉って寮長だったのか」

「らしいよ？ 僕とラクスも昨日聞いたんだけど」

まあ、朝食は四人とも食べ終えたので、トレーを片付けて食堂を出た。

朝のHRが始まった。昨日は千冬が職員会議でいなかったの、副担任の山田先生がやっていたが、今日は担任である千冬がHRを進行している。

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める！ クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会の出席などの、まあクラス長と考えて良い。自薦他薦問わない、誰かいないか？」

明らかに面倒な仕事だ。クラス代表対抗戦に出られるのは実戦経験を積めるという意味で魅力を感じるが、生徒会の会議や委員会の出席は流石に誰もが遠慮してしまう。

「はい！ 織斑くんを推薦します！」

「あ、私も私も！」

「じゃあ私はヤマトくんを推薦しまあす！」

「ヤマトくんに私も一票！」

一夏とキラに推薦が入った。しかし、キラがクラス代表になるのは少し不味い。キラは一夏の護衛をやらなければならず、クラス代表になってしまえば一夏の護衛に支障を出す可能性が出てくる。

千冬もそれを理解しているのか、少し困った顔をしていたが、表立ってそれを言う訳にもいかず、かといって自分のやり方ではキラに推薦が入った以上、それを無効にする訳にはいかない。

「納得がいきませんわ!!！」

「（助かった？）」

突然叫び、立ち上がったのはセシリアだった。机を思いっきり叩いて立ち上がった為か、手が痛くなったのだろう、少し涙目になっている。

「そのような選出は認められません！ 男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか!?!？」

キラや一夏、セシリアが見下す存在が自分の所属するクラスの代表になるなど、セシリアのプライドが許さなかった。

その視線はキラと一夏を捉えており、鋭く睨みつけている。

「そもそも！ 文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと事態、私には耐え難い苦痛で・・・っ!!！」

「イギリスだつて大したお国自慢無いだろう」

「そうだね、食事の不味い国ナンバーワンを何年連続で更新してる

「んだらうね」

「イギリスの見所など、ビックベンくらいでしょうか？ それ以外は古いだけの国ですわ」

「っ！ あなた方、私の祖国を侮辱しますの！？」

イギリスを侮辱されたと思ったのか、先ほどよりも更に鋭い眼光でキラ、ラクス、一夏を睨みつけるセシリア、その眼光には殺意すら浮かびかけていた。

しかし、若干15歳程度の、本物の戦争を知らない小娘の殺意など、一夏には怯む要因になると、キラやラクスにとっては微風にもならない。

「先に日本を侮辱したのはオルコットさんだよ。それにさっきから僕や一夏を見下した態度、それが英国淑女のマナー？ なら英国とというのは随分と程度の低い国なんだね」

「そうだな、同じお嬢様系でもラクスとは大違いみたいだ。ラクスの方がお淑やかな本物のお嬢様って感じた」

「な、な・・・っ！ よろしいでしょう、そこまで仰るのなら、決闘ですわ！！」 キラ・ヤマト、貴方のイギリスを、英国淑女を侮辱したその言葉、後悔させてさしあげますわ！！！！」

よりもよってキラに喧嘩を売ってきた。

キラは決闘という言葉聞いて、今まで抑えてきた戦士として、軍人としての自分を表に出し始めた。キラの眼光はセシリアの怒りと殺意に燃える鋭さではなく、冷たい殺気を宿し、心臓を鷲掴みされたかのような錯覚を覚えるほど強烈な圧力を全身から放っていた。

「ならば一週間後、ヤマトとオルコット、そして勝った方と織斑の模擬戦を行う。それで勝った者がクラス代表だ、ヤマトとオルコット、織斑はそれぞれ準備をしておく様に」

「上等ですわ！」

千冬が何とか場を仕切ってくれた。

キラとセシリアの決闘は一週間後、第三アリーナを使って行われ、どちらか勝った方が一夏と戦い、そして勝利した方がクラス代表になる。

「それとヤマト、せめて手加減くらいはしてやれ・・・流石にオルコットが哀れだ」

「はぁ！？ 織斑先生まで私を侮辱なさるのですか！？ 私が男、それもこんなヒョロヒョロしたもやし男に負けると仰る御つもりで！？」

「当然だ。お前ではヤマトの本気には勝てん、瞬殺どころか勝負にすらならん。相手にも障害物にもなりはしない」

これがキラや一夏の言葉なら教室中が笑いに包まれていただろう。だが、千冬は冗談を言うような性格をしていないのは火を見るより明らかだ。

「手加減など無用ですわ！ そもそも代表候補生である私が、男に負けるなどありえませんか！」

「そうか、ならせめて試合まで良い夢でも見ているのだな」

結局、それでHRは締め切った。

ただ、その日から決闘当日までセシリアのキラと一夏を見る目が鋭く、かつ今まで以上に見下した色を秘めていたのは、言うまでも無い。

決闘が決まった後、キラは一夏を連れて千冬の所に来ていた。

「織斑、お前に学園側から専用機を用意する事になった」

「専用機？ ってあれだよな、あのセシリアとかみたいな代表候補生が持つ事を許されるってやつ……」

「正解、よく覚えてたね」

「キラの説明が上手いからな、結構覚えやすかったぜ」

一夏は時間が余れば暇を見てキラにISの事を教わっていた。

元々キラは束にISの事を習っていたので、知識に関しては束クラス、説明も判りやすいので、一夏も多少の勉強で要点を覚える事が出来たのだ。

「そのISだがな、届くのは一週間後、つまりは決闘の日だ。先にヤマトとオルコットから試合を始めるから、試合の間に初期化と最適化フォーマット
フイ
ツテイングをしてもらう事になる」

「えっと、キラの試合中に届いたISを俺に合わせて調整するって事で良いんだよな？」

「そうだ、ちゃんと勉強しているみたいだな」

どうやら一夏のIS……束がキラと共に開発していた“白式”が完成したらしい。後は最終調整をして送ってくるだけになっているようだ。

「……（紅椿はもう少し掛かるのかな？ 白式以上に難しいからね）」

もう一つのIS、白式の兄妹機である紅椿は完成までもう少し掛かるのだろう。

「……（後は、束さんから預かってきた“アレ”、いつ織斑先生

に渡そうかな)」

キラは一夏と千冬が話している様子を眺めながらポケットに入れている“ソレ”にそつと手を添えた。

「白式と紅椿のプロトタイプ・・・か」

二人に聞こえない様に呟きながら、キラは職員室の窓から見える空を見上げた。・・・人参型のロケットが見えた気がしたが、気のせいだろうと無視したのは、特に問題は無いだろう。

昼休み、キラ達お馴染みの4人は食堂で昼食を摂っていたのだが、やはり一夏は決闘の事が気掛かりなのか、食事が中々進まないでいた。

「なあ、キラは決闘如何するんだ？ 俺には何か専用機が用意されるみたいだけど、キラは？」

「僕は始めから専用機を持つてるから、問題無いよ」

そう言っつて袖を捲り、待機状態になっているキラ専用機、ストライクフリーダムを見せた。

「マジかよ・・・あれ？ でも専用機つて国家代表とか代表候補生みたいな奴じゃないと貰えないんじゃないのか？」

「一夏さん、私達は束さんの所にいたんですわよ？」

「っ！ ね、姉さんの所にだと？」

ラクスの上葉に一夏ではなく箒が反応した。そして、箒は急いで食べ終わると、そそくさと立ち去ろうとしてしまう。

「ああ、大丈夫だよ篠ノ之さん・・・別に東さんの話をしたい訳じゃないし」

「・・・ほ、本当なのか？ 姉さんの所にいたというのは」「うん、一年ほどね。ISとかは東さんに教えてもらっていたんだ」

そうか、と言って静かに座りなおした篤は、コップに残っていた麦茶を飲み始める。

「それで、一夏・・・一夏はISの連続稼働時間はどれ位？」

「ん？ 入試の時だけだから・・・30分も稼働させてない気がする、20分位か？」

「あら、それだとIS連続稼働時間でセシリアさんに負けていますわね」

「そうなのか？」

代表候補生ともなればIS連続稼働時間が何百時間と多い。

キラも束の下にいた時はISの訓練でストライクフリーダムを何度も稼働させていたので、一年で連続稼働時間が500時間を余裕で超えている。

「キラ、もし良ければISの訓練とかしてくれないか？」

「良いけど・・・一夏の専用機はまだ来てないよ？ 学園の訓練機も打鉄やラファール・リヴァイヴがあるけど、一年のこの時期だと貸し出しに時間が掛かるから」

「な、なら私が鍛えてやる！」

如何するかと悩んでいたら、篤が鍛えると言い出した。確か篤は去年の剣道全国大会で優勝していたし、一夏の専用機になる機体の特性はキラも熟知している・・・適任かもしれない。

「良いかも知れませんが、一夏さんは剣道をやっていたらいいですし、篝さんに鍛えなおしてもらうのも一つですわ」

「え、でもISの訓練に剣道って関係あるのか？」

「ISは乗り手の思うとおりに動くから、機体が良くても乗り手が悪ければ性能は極端に落ちる。逆に機体性能が低くても乗り手が良ければ格上の性能の相手に勝てるんだ。だから乗り手自身が生身の肉体を鍛えるのは重要な事だよ」

「ヤマトの言うとおりで！ 早速、今日の放課後に剣道場に来いー夏！」

付け焼刃になるかもしれないが、一夏の専用機の事を考えるのなら一夏の剣の腕を鍛えておくに越したことはない。

何故なら一夏の専用機は彼の姉の嘗ての専用機と全く同じ武装しか積んでいないのだから。

「き、キラは剣道とかやらないか・・・？」

「僕は射撃型メインだからね。接近戦もやるけど、一番のメインはって問われるとやっぱり射撃になるから、剣道は遠慮しておくよ」

「そ、そうか・・・」

せめてキラも巻き込もうと思ったのだろうが、キラが射撃型だと言われ、仲間（生贄）はいなくなつた。

ラクスはIS操縦者ではなくオペレーター専攻だと言っていたので、期待は出来ないもので、結局放課後の剣道を一緒にやってくれる者は一人もいない。

放課後に待っているだろう地獄に、一夏は今から青褪め、ガツクりと肩を落とすのであつた。

第四話 「無謀な決闘」(後書き)

次回は……セッシー、君の無謀に敬礼!!

第五話 「クラス代表決定戦」(前書き)

セッシー対キラ！ まあ、結果は見るまでもないと思いますが、見てやってください。

第五話 「クラス代表決定戦」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五話

「クラス代表決定戦」

セシリアとの決闘の日、既にキラとラクスは第三アリーナのピットに来ていた。既に搬入されている一夏の専用機を、一夏が来る前に点検する為でもあり、キラ自身が開発に携わっていたのもあるので、完成状況を見ておきたかったのだ。

「OSは完成されているね。まだ一次移行はフェースト・シフトしていないから初期設定のままだけど、零落白夜の為の回路も完成しているし、最高速度を出す為のOS構築も完璧・・・うん、流石は束さんだ」
『ヤマト、そろそろ織斑が来る。その辺で終わらせておけ』
「了解です。僕もそろそろISスーツに着替えてきます」

管制室にいる千冬の声に、一夏の専用機に繋いでいたコードを引き抜き、点検を終えると、ロッカールームに入っていた。

その様子を管制室から見ていたラクスはキラから送られてきた完成品のOSを確認する。

「それが織斑の専用機のOSか？」
「はい、キラと束さんが手掛けた最新式のOSですわ」
「そうか・・・アレの開発にはヤマトも携わっていたと聞いているが・・・ISのOSも作れるとはな」

随分と多芸なキラに苦笑する千冬だが、その話を聞いていた真耶が素っ頓狂な声を上げた。

「ええええ！？ ヤマト君とクラインさんって篠ノ之博士と一緒にいたんですか！？」

「はい、一年間だけでしたが・・・」

「じゃ、じゃあ今どこにいるのかは・・・」

「残念ですが、私達がここに来る時に引っ越してしまったので、現在の居場所は不明です」

一応、携帯電話の電話番号とメールアドレスは知っているが、機密扱いしているので、明かす事は出来ない。

ラクスは一夏専用機のOS画面を閉じると、今度は別のISのOS画面を開いて千冬に見せた。

「これは？」

「一夏さんのISのプロトタイプ機のOSです。一応、見せておこうかと思ひまして」

「プロトタイプだと・・・？」

怪訝な顔をしてOS画面を見る千冬だったが、何かに気付いたのか驚愕を露わにしてラクスを見る。

「ま、さか・・・これは」

「本当に必要だと思った時は仰ってください。キラが持っていますわ」

「・・・そうならない事を祈ろう」

まるで懐かしむかの様に、そして遠い過去になった物を見るかの様に、千冬はそのOSから目を逸らすのだった。

キラが一夏専用機の調整を終えて少しすると、漸く一夏と篤がピットに来た。

一夏達が来る頃には説明の為に千冬もピットに来ており、遅れてきた一夏と篤の頭を出席簿で叩く。

「遅いぞ馬鹿者共、ヤマトは直ぐに試合があるというのに、あまり待たせるな」

「ご、ゴメンキラ、千冬姉・・・」

再び出席簿が一夏の頭に炸裂、学習しない男だった。

「織斑先生だ」

「す、すいません、織斑先生・・・」

「まったく、それよりも来たぞ・・・お前の専用機が」

「あ・・・」

一夏の視線の先には、固定されている彼の専用機・・・白式の姿があった。

「一夏、これが君の専用機・・・白式だよ」

「白式・・・これが、俺の専用機・・・」

これから自分の専用機となる白式に見とれている一夏だが、時間はかなり押しているのを忘れているのだろうか。

結局、何もしないで白式に目を奪われている一夏の頭に千冬が出席簿を落とす事で覚醒させた。

「さっさと乗れ、ヤマトの試合の間に初期化と最適化を済ませておフォーマット フィッティング

け

「りよ、了解……」

一夏が白式に乗り込んだのを見届けて、キラは右手首に巻きつけているブレスレットに左手を添えた。

「ヤマト、お前もそろそろ行け。オルコットが待ちくたびれている筈だ」

「はい……じゃあ、行こうか、ストライクフリーダム」

その瞬間、ブレスレットが輝き、0.3秒という時間でキラの全身を灰色の装甲が覆いつくした。

キラの顔のみを残して全身を装甲で覆った全身装甲タイプフルスキンのIS、MS時代のストライクフリーダムをそのまま小さくしてISにしたかのような機械的なIS、それがストライクフリーダムだ。

「全身装甲タイプだ！？　ね、姉さんが作ったIS、なのか……これが」

初めて見る全身装甲タイプフルスキンのISに驚きを隠せない筈、そしてストライクフリーダムを作ったと思っている人物の手腕を、改めて凄いと思うのと同時に、やはりそんな姉への嫌悪が隠せなかった。

「すげえ……カッコイイなキラのIS！」

「ありがとう、それじゃあ言ってくるよ……」

キラはピットから管制室の窓を見上げた。そこにはラクスが手を振っており、それにキラも手を振り替えてカタパルトにストライクフリーダムを固定させる。

『カタパルトシステム、オールグリーン。進路クリア、X20Aストライクフリーダム、発進どうぞ!』

ピット内に響くラクスが発進合図、それと共にキラは下半身に力を入れた。

「キラ・ヤマト、フリーダム! 行きます!!」

発進したカタパルトに乗って、ストライクフリーダムがアリーナに飛び出した。

飛び出して直ぐにバレルロールをしながら上空に上がり、その最中にVPS装甲がONになり、白と黒のボディ、黄金の関節、青い翼が太陽光に照らされて鮮やかに輝く。

「ふ、全身装甲フルスキムタイプ・・・ですって!? なんなんですか!?!? そのISは!?!?」

既にアリーナに出ていた青い機体・・・イギリスの第三世代型IS、ブルーティアーズに乗るセシリアが、見た事も無い全身装甲フルスキムのISに驚愕する。

だが、すぐに気を取り直してキラを小馬鹿にした態度になり、ブルーティアーズの主砲であるライフル、スターライトmk?をストライクフリーダムに向けて構えた。

「随分と遅かったみたいですね。まさか逃げ出したのではと思いましたが、安心しましたわ!」

「遅れたのは謝罪するよ・・・でも、友達の為だからね」

「あら、汗臭い男の友情という奴でしょうか? お友達思いの優しい男性ですわねヤマトさんは」

「友達は大事にするのって、普通じゃないかな?」

「そうですね。しかし、そのままお友達とご一緒にいらっしやれば宜しかったのに・・・どうせあなた方が束になって掛かってきても私の勝利は揺らぎませんからね！」

スターライトmk?のセーフティを解除しながら、セシリアはキラに最後通告をした。

「これが最後ですわ! この決闘、既に私の勝利は絶対のもの! 素直に泣いて謝るというのでしたら、まあ許して差し上げないこともございませんことよ?」

「随分と自分の力を過信しているみたいだけど・・・足元掬われても大口叩けるのかな?」

「っ! でしたら・・・ここでお別れですわね!」

スターライトmk?の銃口から一直線にストライクフリーダムへ向けてレーザーが発射された。それと同時に試合開始の合図が出て観客は皆、この一撃がストライクフリーダムに直撃すると確信していた。

しかし、歴戦の戦士であるキラにとって、実に教科書通りの真っ直ぐなレーザーなど、何ら脅威足りえない。

余裕を持ってレーザーをかわしたキラはスーパードラゴン機動兵装ウイングを広げてハイマツトモードに移行すると、高速機動をしながら両手の高エネルギービームライフルを構えた。

「は、速い!? 防御特化型のISではなかったんですの!? い、いえ・・・たとえ速くても、それだけですわ! 踊りなさい! 私とブルーティアーズが奏でる円舞曲^{フルツ}を!!!」

どうやらセシリアはストライクフリーダムを全身装甲タイプである事から防御に特化した機体だと思っ^{フルスキ}ていたらしい。

防御特化の機体だと、どうしても重くなつてスピードが遅くなる。そうならばセシリアの射撃の的だと思つていたのだろつが、残念ながらストライクフリーダムは高速機動全距離対応広域殲滅型のISだ。相手の見た目だけで性能を決め付けている様では・・・まだまだ2流である。

「くうっ！ ちょこまかと!!」

そして、ストライクフリーダムがスピードを主体とした機体であると考えたのか、スターライトmk?を連射したが当たらない。

スターライトmk?だけでは不利だと思つたのか、誘導兵器・・・ブルーティアーズ4基を射出してストライクフリーダムを追わせるが・・・。

「誘導兵器の動きも教科書通りだね・・・甘いよ」

両手のビームライフルを左右二発ずつ、合計四発だけ発射する。

ブルーティアーズと同数の黄緑色のビームが一発たりとも外れる事なく、一瞬でブルーティアーズを破壊してしまつた。

「そ、そんな!?!」

まさか一瞬で4基全てが落とされるとは思わなかつたセシリアはスターライトmk?を再び構えてレーザーを連射するが、尽くがストライクフリーダムの高速機動によつてかわされ、一発も当たらない。

するとストライクフリーダムのウィングからブルーティアーズと同系の兵器と思しき誘導兵器・・・スーパードラグリーンが8基射出され、ビームライフルとドラグリーンから連射されるビームにセシリアは翻弄されてしまふ。

「な、何て出鱈目な処理能力をしているんですの！？ 誘導兵器を8基も操りながら自身も高速機動して、尚且つ両手のライフルを連射してくるなんて!？」

ビームが当たり過ぎてシールドエネルギーが残り70を切った。装甲もボロボロで、スラスタにも異常が出始めてしまったブルーティアーズは……満身創痍だろう。

「そろそろ……かな」

両手のビームライフルを腰にマウントして、ドラグーンもウイングに戻したキラはシュペールラケルタビームサーベルを二本、両手に握ってセシリアに急接近してきた。

しかし、セシリアはこの時を待っていたのだ。まだセシリアは使っていない武装が二つ……。

「掛かりましたわね！ ブルーティアーズは……」

腰にある残りの装備……。

「6基ありましてよ!!」

ミサイル型のブルーティアーズが発射され、キラに迫る。

だが、そのミサイルがキラに命中する事は無かった。トップスピードですらISの特殊加速技能……イグニッションブースト 瞬時加速と同等のスピードだというのに、そのストライクフリーダムが瞬時加速に入った。

更に、その瞬時加速の途中でミサイルを切り裂き、セシリアの横を大きく横切った瞬間、イグニッションブースト 瞬時加速の中で更に瞬時加速に入るといダブルイグニッションブーストう神業……二重瞬時加速に入り、一瞬でブルーティアーズに接近し

た。

「ダブルイクニツシヨンプーリスト二重瞬時加速ですって！？ 織斑先生以外にそんな絶技が出来る人がいるなんて！？」

「戦闘中だよ」

「っ！？」

キラの見たダブルイクニツシヨンプーリスト二重瞬時加速、それは本来、織斑千冬が現役時代に使用した絶技であり、織斑千冬にしか出来ないと言われていた最強の加速だ。

それをキラが使った事に驚いたセシリアは、決定的な隙を見せてしまう。当然、その隙を見逃すキラではなく、接近した瞬間に二刀流にしているビームサーベルを振るった。

「きゃああああああああっ！！！！？」

刹那の斬撃、それによってブルーティアーズの全身の装甲と、スターライトmk?が破壊され、シールドエネルギーも0になってしまった。

【ブルーティアーズ、シールドエネルギーエンプティ、勝者キラ・ヤマト】

ブルーティアーズのシールドエネルギーが0になった瞬間、キラの勝利が決まった。

キラはハイパーデュートリオンエンジンと小型レーザー核融合炉エンジンと、各種武装出力にリミッターを掛けた状態で、更に一夏フォーマットが白式の初期化と最適化を修了させ、フィッティング一次移行を終えるであろう時間まで時間稼ぎするという手加減をした状態でありながら、この試合の被弾は0だ。

キラとセシリアの実力差が、はっきりと現れた瞬間でもあった。

「そんな……この私が、一撃も与えられずに、敗北してしまうなんて……」

「君は、慢心が過ぎたんだ……女性だから男性より強いのは当たり前前、代表候補生だから強くて当たり前前、そんな考えに縛られていたから僕に攻撃を掠らせる事も出来なかった」

「……っ」

「オルコットさん、君は確かに強いと思うよ……15歳でここまで戦えるのなら充分凄いと思つ。でもね、慢心は成長を阻害するんだ……君が慢心を捨て去り、成長しようという気持ちを確りと持てば、まだまだ強くなれる余地が残ってるから」

そこまで言つて、キラはストライクフリーダムの右手を差し出した。

「また、試合しよう？ 今度は、もっと強くなった君と、ブルーテイアーズを僕に見せて？」

「……わかりましたわ。私、もっと強くなりますわ！ 強くなつて、そして……“キラさん”に認められるようなIS操縦者になつてみせます!!」

「……うん、今の君なら出来るよ。だから、強くなつて、そしてその力で守りたいモノを守る本当の強さを、僕に見せてね」

「はい！」

キラの言葉を確りと心に刻み込み、セシリアは晴れ晴れとした表情で返事を返した。

キラも、その返事に満足したのか、セシリアに微笑み返して次の一夏の試合までの30分間に休憩する為、ピットに戻って行く。

セシリアは、そんなキラの後姿を先ほどの微笑みによって朱に染

まった頬を隠す事無く、熱の籠もった瞳で見つめながら、自分もピットに戻るのだった。

第五話 「クラス代表決定戦」(後書き)

あれ？ セシリアと一夏のフラグが消えた……。

第六話 「自由に挑む嘗ての騎士」(前書き)

噛ませ犬との戦いが終わり、次は嘗ての騎士との戦いです。

第六話 「自由に挑む嘗ての騎士」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第六話

「自由に挑む嘗ての騎士」

キラとセシリアの試合が終わり、30分の休憩時間が設けられた。既に一夏と白式の初期化と最適化は終わっているのだが、流石にキラに休み無く連続で試合をさせるといふのは学園側が問題だと言っているので、キラはピットに戻ってから一度シャワーを浴びに行っている。

「それにしても、キラ・・・強かったな」

「ああ、射撃の腕もそうだが・・・近接戦も相当の腕だ。二刀流は難しいと言われているのに、更にそれを実体を持たないビームサーベルでこなしてしまうとは・・・」

キラが射撃型だと聞いていた筈は、その近接技能の高さに一種の憧れのようなモノを抱いていた。剣道をやっている身であるからこそ、筈にはキラの剣の腕がどれ程のモノか理解出来るし、それが筈自身の剣の腕を大きく上回っているという事に気付いているのだ。

「一夏、お前の機体は近接ブレード一本しか武装が無い」

「ああ・・・」

「正直、ヤマトの射撃能力は桁違いだ・・・神業の如き射撃の嵐を潜り抜け、懐に潜り込まなければ勝負にはならん」

「だけど、懐に潜り込んでもビームサーベルの二刀流が待っている・

・・・か・・・・・・・・勝てる気がしねえな」

射撃も格闘も完璧、キラに苦手な距離は存在していなかった。

「ヤマトの機体は恐らく高速機動全距離対応型だろう・・・いや、あの誘導兵器を見ると広域殲滅も可能かもしれない・・・」
「高速機動か・・・あの速度に追い付けなければ接近戦は出来ないな」

「何とか足止めでも出来れば良いのだが・・・」

誘導兵器を扱いながら自身も攻撃や移動が出来るほどの並列処理能力が高いのだ。正直な話、キラの機動を止める術が見つからない。

「やあ一夏、そろそろ時間だよ？」

「キラか・・・ああ、わかった！」

キラがシャワーから戻ってきた。
時計を見ればもう一夏とキラの試合の時間が迫っていて、そろそろアリーナに出ていないと不味い。

「じゃあ、先に行くから」

再びキラがストライクフリーダムを展開すると、カタパルトまで移動する。

ストライクフリーダムの足がカタパルトに固定されたのを管制室から見ていたラクスがマイクに口を近づけ、発進の合図を出した。

『進路クリアー、X20Aストライクフリーダム、発進どうぞ！』

「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きますー！！」

キラが発進して、先ほどと同じ鮮やかなバレルロールをしながら
ヴァリアブルフェイスソフト
VPS装甲を展開してアリーナに出るのを見送りながら、白式を力
タパルトへ移動させていた一夏は、キラの発進時の掛け声を思い出
して、何となくだけど気合を入れる為に真似をしたくなっていた。

「えっと、確か名前を言つて、機体名を言つんだよな……」

キラが言っていたのを思い出しながら、言うべきセリフを頭に纏
める。

『カタパルト接続、進路クリアー、白式、発進どうぞ！』

「よっし！ 織斑一夏！ 白式！ 行くぜ！！」

キラの真似だが、確かに気合が入った一夏はカタパルトに引かれ、
アリーナに飛び出た。

既にアリーナ中央には宙に浮かびながら背中のスーパードラゲー
ン機動兵装ウィングを広げて、両手のライフルを構えたストライク
フリーダムを身に纏うキラの姿があり、一夏も白式の武装である近
接ブレード、雪片式型を構える。

「じゃあ、始めようか一夏」

「ああ、勝てないまでも、一撃くらいは入れて見せるぜ！！」

圧倒的に一夏の方が劣っているのは理解している。だけど、それ
でも一撃くらいは入れるという意気込みで向かって行く。そんな決
意が瞳に力強さを与えていた。

「良い瞳をしてるね……そういう気持ちは戦いには必要な事だよ」

「そうか……なら、最初から最後までキラに一撃だけでも入れる
つもりで全力を出し切る！！」

試合開始の合図が出た瞬間、ストライクフリーダムの両手に握られたビームライフルから連射されたビーム数十発が白式に迫る。

迫り来るビームの嵐を今の一夏が出せる最高スピードで避けながら、接近しようとしたのだが・・・、その移動する先々にビームが、まるで読んでいたかのようなタイミングで迫ってくるのだ。

「き、キラ!? お前まさか未来が見えてるとか言わねえよな!？」
「未来は見えないけど、これくらいは基本だよ?」

ビームライフルだけでなく、スーパードラグーンまで射出してビームの嵐を降らせるキラ、一瞬で何百という数のビームが降り注ぐ中、一夏は何とか接近を試みるも、かわすので精一杯になり、遂にはかわし切れずに被弾が増えてしまった。

【白式、シールドエネルギー残量170】
「も、もうこれしか残ってないのか!」

このままではキラに一撃浴びせる事も出来ずにシールドエネルギーが0になって負けてしまう。何とかキラに接近出来ないかと思っ
て周囲に目を向けた。

相変わらずドラグーンは素早く移動しながらビームを発射していて、とてもではないが切りに行くのは無理、ビームの嵐の中を残りのシールドエネルギーで突っ切るのは不可能、打つ手無しに思えたが………。

「一か八か!」

見えた。キラの発射するビームの嵐の中に、一箇所だけ白式が通れるだけの隙間が存在していたのだ。

命中したレール砲、零落白夜によって残り40まで減っていたシールドエネルギーが今の一撃によって0になってしまふ。

【白式、シールドエネルギーエンプティ、勝者キラ・ヤマト】

シールドエネルギーが0になった事で零落白夜は強制解除され、呆然とした表情で一夏はキラの顔を見ていた。

「お疲れさま、最後の追い上げは凄かったよ。僕も驚かされたから」「くそつ、結局一撃も入れられなかったのかよ・・・」

「あはは・・・でも、良い経験にはなったでしょ？ ビーム、射撃の嵐の中を如何戦えば良いのか、ヒントにはなるんじゃないかな？」「そつか・・・今日の戦いを振り返って攻略法を考えれば次は対処出来るな！」

キラにとっては全力の20%程度しか出していない試合だったが、一夏にとっては良い経験になった筈だ。

「それに、雪片式型は千冬姉が使っていた武器なんだ・・・千冬姉の名前を汚さない為にも、俺はこの雪片式型と一緒に強くないとな」

「大丈夫、一夏なら必ず強くなるよ」

「なら、キラに頼みがある」

真剣な表情でキラの顔を見る一夏に、キラもまた真剣に聞き返した。

「俺を、鍛えてくれ・・・お前に頼めば、俺は強くなれる気がするんだ」

「・・・そう、なら明日から放課後は一夏の為に空けとかな

いとね

「っ！ サンキュー！！」

ピットに戻りながら、一夏はキラに弟子入りする事が決定する。ストライクフリーダムと白式、夕方の時間になり、夕日に照らされる二つの白い機体は・・・キラキラと、幻想的に輝いていた。

翌日、朝のSHRの席で山田先生がクラス代表の発表を行っていた。

「と、いうわけで！ クラス代表は織斑一夏くんに決まりましたあ

！！！」

「……は？」

何を言っているのだこのおっぱいは、などと思っていた一夏だが、その内容を理解していく内に如何いう事態なのかを悟った。

「はああああああああつ！！！！？」

その瞬間、一夏の頭に出席簿が落ちる。

「静かにしろ馬鹿者」

「い、いや千冬姉！ 何で俺が！！」

再び出席簿が一夏の頭に落ち、その痛みに一夏が悶え苦しんだ。

「織斑先生だ、何度も言わせるな馬鹿者」

「お、織斑先生・・・なんで俺がクラス代表なんですか？ 勝ったのキラなのに・・・」

「僕が辞退したからね」

キラの言葉に一夏は思いっきり身体ごと振り返る。何故キラがそんな真似を仕出かしたのか、それを問い詰めなければならぬ。

「一夏、君はまだまだISの初心者だよ。だからこそ、伸び代が大きい。クラス対抗戦は一夏にとっては良い経験になると思うよ？」

「い、いや・・・確かにキラとの試合は良い経験になったし、また試合とかはしてみたいと思ってたけどさ・・・」

「それに・・・」

「それに・・・？」

他にも何か理由があるのか、と聞き返す一夏に、キラは女性なら誰もが見惚れる最高の笑顔を浮かべる。

「僕が面倒臭いって思ったから断ったんだ」

「それが本音かああああああああああああああああ！！！！」

「！！！！」

「おりむー呼んだ？」

クラスメートの一人、のほほんさん（本名が本音）が何か言っていたが、それを華麗にスルーしてキラに詰寄る一夏だが、キラは変わらず微笑んでいるだけだった。

「い、いや！ 俺じゃなくてももう一人適任者いるだろ！？ オル

コツトとか！！」

「申し訳ございません“一夏さん”、私も辞退しましたの・・・“キラさん”に教わりたい事が沢山ありますし」

「そ、それじゃあ・・・」

「他に立候補者はいない。大人しくクラス代表になれ」

千冬の言葉がトドメとなり、一夏は絶望した。箒を見ても、気ま
ずそうに目を逸らされてしまい、味方は誰一人としていない。

「そ、そんなあああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

「だから、静かにしろ馬鹿者」

最後に出席簿が一夏の頭に叩き落され、クラス代表を巡る争いは
終結を迎えた。クラスは笑いに包まれ、キラもそれを微笑みながら
見ていたが、ふとラクスがキラの裾を引っ張るのに気が付く。

「……どうしたの？」

「明日の放課後、千冬さんがお話があるそうですわ」

「……わかった」

それだけで、ラクスが何を言いたいのか理解出来たので、キラは
そっとポケットの上から“ソレ”に触れる。

「その内、出番があるかもね………暮桜・改」

嘗ての相棒を待つ“ソレ”は、キラの言葉に一瞬だけキラリと光
って応える。

キラはそれに気付かず、今はただ……クラスの笑顔をラクスと
共に静かに微笑みながら眺めるのであった。

第六話 「自由に挑む嘗ての騎士」(後書き)

最後に出てきた白式と紅椿のプロトタイプの名前、あれは暫定的なモノです。

読者の方に新名を募集したいと思います。

第七話 「判明したバカップル」(前書き)

少し短いです。

第七話 「判明したバカカップル」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七話

「判明したバカカップル」

クラス代表が決まり、翌日の授業からISの実習が始まった。

キラ達1年1組の生徒はグラウンドに出てセシリア、キラ、ラクス以外は学校支給のISスーツを、セシリアはイギリスで使っていた青いスーツを、キラは束が作ってくれた空色のスーツで、一夏は物とは違ってお腹は出ていない。オーブ軍時代に使っていたパイロットスーツに似ている。

残るラクスはISを殆ど使わないのだが、キラ同様の束特性、桜色のISスーツを着ていた。

「それでは本日よりISの実習授業を始める。まずは専用機を持っている者に見本を見せてもらおう、織斑、オルコット、ヤマト、前が出る」

千冬に言われて前に出た一夏とセシリア、キラの三人はISを展開する様に言われ、言われた通りに展開するのだが・・・一夏がもたついていた。

「何をやっている織斑、熟練のIS操縦者なら展開に1秒と掛からんぞ」

「う、えっと・・・来い！ 白式！..」

漸く一夏も白式を展開したので、キラはストライクフリーダムの
ヴァリアブルフェイスシフト
VPS装甲をONにした。

「うわぁ、ヤマト君のIS……色が変わった!？」

「すごぉい……綺麗……」

クラスメート達が色が変化したストライクフリーダムに驚くが、
白と黒、青のトリコロールカラーが鮮やかで、関節の黄金部分の輝
きにつつとりしていた。

「では三人とも、武装を……つと、ヤマトのISは最初から展開
されていたな。織斑、オルコット、武装を展開しろ」

「はい!」

「りよ、了解!」

雪片式型を展開した一夏と、スターライトmk?を展開したセシ
リアだが、タイムはセシリアの方が速く、0.5秒で、一夏は0.
7秒も掛かってしまっている。

戦場ではその0.2秒は大きく、命取りになる事をキラもラクス
も、そして千冬もよく知っていた。だからこそ、一夏の現状はあま
り宜しくない。

「遅いぞ織斑! 0.5秒で出せる様になれ!」

「はい……」

「オルコットさんは速いね。代表候補生って言うだけあって0.5
秒ピツタリでライフルを展開出来る」

「そ、そうですね? まあ、私ほどになれば当然ですわ!」

「ああ、確かに流石だがなオルコット、銃口を真横に展開する癖は
直せ。ヤマトを撃つ気か?」

見ると、確かに千冬の言うとおりスターライトmk？は真横に向けて展開されており、銃口はキラの姿を捉えている。

「で、ですがこれは、私のイメージを纏める為に必要な・・・」

「直せ・・・いいな？」

「は・・・はい・・・」

流石にセシリアでも千冬には逆らえない。あの鋭い眼光で睨まれれば15歳の小娘程度、萎縮するのも当然だった。

「次だ、オルコットは近接武器を展開しろ」

「りよ、了解ですわ・・・ふん！・・・むん！・・・あ、あれ？くぬぬぬ・・・」

ブルーティアーズに唯一搭載されている近接武器、インターセプターを展開しようとしたセシリアだが、遠距離主体の彼女は近接武器の扱いに慣れていないため、展開が中々出来ないでいる。

「ああもつ！インターセプター！！」

やっと展開出来たみたいだが、あまりに遅すぎる。

「何秒掛かっている馬鹿者、それでは敵に接近された時に直ぐ落とされるぞ」

「じ、実戦では接近なんてさせませんわ！！」

「ほう、ヤマトの機動に追いつけず簡単に接近を許した者の言葉とは思えんな」

「う・・・」

遠距離の人間が遠距離だけを鍛えれば良いという訳ではない。

寧ろ遠距離主体だからこそ、接近された時の事を考えて近接技能を鍛えておく必要がある、セシリアみたいに接近戦武器の展開にもたついていては簡単に落とされてしまう。

「次はISの基本的な飛行操縦を実演してもらおう。ヤマト、織斑、オルコット、その場から急上昇しろ」

「……はい！」

セシリアが先に飛び立ち、キラも膝を折り曲げて地面を蹴る様に急速上昇した。そしてそれに続いて一夏も急上昇したのだが、随分と遅い。

『何をのろろしている！ ストライクフリーダムは兎も角、スペック上の出力はブルーティアーズより白式の方が上だぞ！』

そうは言われても、一夏は白式に乗るのは今日が二回目で、それでスペック上の出力を全力で出せと言われても無理がある。

「ええつと……急上昇は確か前方に角錐を展開するイメージで……」

必死に教科書に載っていた事と、キラに言われていた事を思い出しながら飛行をするが、中々思うようにいかない。

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ」

「そうそう、教科書に書いてある事や僕が教えた事は所詮は模範的な事だから、一夏は自分に合った方法を模索した方が建設的だよ」

「キラ、セシリア……そうは言ってもな、大体……空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。どうやって浮いてるんだ、これ？」

セシリアはイギリスですつと訓練していたから自分なりのイメージを浮かべる事が出来るし、キラもMSに乗って飛び回っていた経験から、空を飛ぶイメージは簡単に掴める。

しかし、一夏は今までISに触れたことも、ましてやMSなどという存在を知らないのだから、イメージがまだ掴めていないのも無理は無い。

「どうやって浮いてるか説明してもいいけど、長くなるよ?」

「ええ、反重力力翼と流動波干涉の話とか・・・」

「うっ・・・いや、説明はいい」

聞きなれない名称を聞いただけで意味不明なのに、更に詳しく説明なんてされたら頭がパンクしてしまう。

『一夏っ!! いつまでそんな所にいる! 早く降りて来い!!』

「箒だ・・・何してるんだ? あいつ・・・」

ハイパーセンサーを駆使して地上を見れば、山田先生からインカムを奪い取って一夏を睨んでいる箒の姿が見えた。

ただ、すぐに千冬に頭を叩かれてインカムを山田先生に返していたが・・・。

「しっかし、すげえなISって・・・こんなに離れてるのに箒の睫毛までくつきり見える」

「あら、当たり前ですわ!」

「一夏、ISは元々、宇宙空間での活動を想定して束さんが作ったんだよ? 当然、宇宙空間では何万キロも離れた星の位置で自分の居場所を確認しないといけないから、これ位はハイパーセンサーにとつて大した距離にはならないんだ」

「へえ・・・」

因みに、この状態でもかなりの機能制限が掛かっているらしい。キラも何となくハイパーセンサーを使って地上にいるラクスの顔を見た。真っ直ぐキラを見上げて、僅かに微笑みながら小さく手を振っている。

そんなラクスに対してキラも微笑みながら手を振り返すと、それを見ていたセシリアが不機嫌そうな表情で二人の様子に疑問を持った。

「（な、何なんですの！？ キラさんとクラインさんの雰囲気は！
！ま、まるでこ・・・恋人同士ですわ！？）・・・ま、負けてられませんか」

「？ セシリア、如何したんだよ？」

「っ！ な、何でもございませぬわ！！？」

『織斑、オルコット、いつまで私語をしているつもりだ！ 次は急降下と完全停止だ！ 目標は地表から10cm、ヤマト、オルコット、織斑の順番で降りて来い！』

千冬からの指示が来た。

最初に急降下実演をする事になったキラはハイマットモードの状態を維持したまま一瞬でトップスピードになりながら急降下して、地上すれすれの所まで近づくと急停止を掛ける。

ラクスと千冬以外の誰もが地面と激突すると思ったが、見事ストライクフリーダムは地表3cmの所で完全停止していた。

「見事だな・・・目標は10cmと言ったが、やはりお前なら10cmでは物足りないか？」

「お望みでしたら後2、5cm縮めて停止する事も出来ますよ？」

「ふん、それはまた今度見せてもらおう。次！ オルコット！」

今度はセシリアが急降下してきて、地表10cmの所で急停止する。その操縦に危なっかしさは存在せず、実に安定した急降下と急停止だった。

「うむ、流石だな。地表10cmぴったりに止めたか」

「これくらい朝飯前ですわ!」

「次! 織斑!!」

そして最後、一夏が急降下してきたのだが……最初は良かった。だけど途中でバランスを大きく崩して安定性を失い、落下速度そのままグラウンドに突っ込みんで地面と激突、グラウンドに大穴開ける結果となってしまった。

「馬鹿者……グラウンドに穴を開けてどうする! 誰が地面に激突しろと言った?」

穴の中で地面に頭を埋める一夏に容赦無い千冬の激怒が飛んだ。何とか頭を引っ張り出した一夏だが、白式が解除されて地面に座り込んでしまう。何処か落ち込んでいる様に見えるのは気の所為ではないだろう。

「一夏、大丈夫?」

「ああ、キラ……わるい、折角色々教えてもらったのに失敗しちゃった」

「仕方ないよ。一夏はまだ白式に乗って2日目だから、慣れるまで少し掛かるよ」

キラの優しさに心救われた気分になったのか、少し元気になった一夏は勢い良く立ち上がる。

「織斑、自分で開けた穴は自分で埋めておくように・・・ヤマトに頼るなよ?」

「はい・・・」

相変わらず厳しい千冬だが、キラとラクスは一夏に背を向けた後の千冬の表情を見て悟った。一夏に怪我が無い事に安心して、少しホツとした表情を浮かべているのだ。

何となく、素直じゃない千冬に、苦笑しながらキラはラクスの傍に歩み寄る。既にストライクフリーダムは解除しているので、授業も終わったので一緒に校舎に戻る為だ。

「あら、もう宜しいのですか?」

「うん、一夏も怪我は無いし・・・戻ろう?」

「はい」

微笑合い、一足先に更衣室に戻ろうとしたキラとラクスの背中に一人の少女の声が掛かる。何処か焦った様な、不機嫌な様な、悲しそうな・・・そんな声だ。

「オルコットさん? 如何されましたの?」

「オルコットさん?」

「あ、えつと・・・わ、私の事はセシリアで宜しいですわ! 私もキラさんと呼んでますし、クラインさんの事もラクスさんで宜しいですか?」

「ええ、構いませんわ」

周りのクラスメートが何事かと集まってきた。一夏と篤も何事だろうと穴埋めそっこのけで聞き耳立てているのだ。

「そ、それで・・・その、キラさんとラクスさんは、仲が宜しいみ

たいですけど・・・どの様な関係なのでしょう？」

「僕とラクス？・・・恋人、だよ」

「はい、キラとはお付き合いをしていますわ・・・もう5年になりますわね」

「こ、こい・・・」

『恋人おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおっ！！！？？』

『そ、そんなあああああああああつ！！！？？』

「一夏・・・お前は知ってたのか？」

「あ、ああ・・・前に聞いてな」

「そ、そうなのか・・・（クラインに、アドバイスを貰えば、私も・・・）」

クラス中が大きなショックを受けていた。IS学園にたった二人しか存在しない男子、その片割れであり、年上で美男子で、笑顔が素敵なキラが、ラクスというお似合い過ぎる女性と恋人同士と判り、キラに魅了されていたお年頃の乙女達はショックも当然だろう。

何より、キラに惹かれていたセシリアは呆然としてしまい、目の前が真っ暗になって、足元が覚束なくなるほどのショックを受けていた。

「騒がしいぞ馬鹿者共！！」

結局、千冬のお怒りが飛んできて、罰として次の授業まで1年1組の生徒全員はグラウンドをランニングする事になってしまうのだ。

第七話 「判明したバカップル」(後書き)

次回は出るかなあ？ セカンド幼馴染。

第八話 「現れたセカンド幼馴染」(前書き)

厳選した結果！ 暮桜・改の名前は暮桜・真打に決定しました！！
作者は、るろ剣好きですww

第八話 「現れたセカンド幼馴染」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第八話

「現れたセカンド幼馴染」

一夏がグラウンドに大穴開けて、キラとラクスが恋人同士だという事がクラス全体に知れ渡った日の放課後、キラとラクスの二人は千冬と共に生徒指導室に来ていた。

「それで、ヤマト・・・束から預かってきているな？」

「ええ・・・これが白式のプロトタイプIS・・・そして織斑先生の嘗ての愛機を改良した第4世代型IS・・・暮桜・改・・・通称、暮桜・真打です」

キラがポケットから取り出したのは桜の花の形をしたペンダントだ。これが白式のプロトタイプ、そして嘗て千冬が現役時代に乗っていた暮桜を改良した第4世代機の試作型、暮桜・真打である。

「暮桜・・・真打・・・まさか、束に返した筈の暮桜が、こんな形で戻ってくるとはな・・・」

「しかし、束さんにはこれを織斑先生が本当に必要とした時に返してくれと言われています」

「織斑先生・・・先生がこれを必要とする日は来ると思いますか？」
「・・・正直な話、今の状況では必要無い。今の私はIS操縦者ではなく、一教師でしかないのだから」

寧ろ、来て欲しくない。再び、嘗ての世界最強が己の剣を取り戻す日など・・・来ない方が良いのだ。

「それでは、これはラクスに預けておきます。もし、先生が必要とする時が来たら・・・ラクスから受け取ってください」
「・・・わかった」

キラから暮桜・真打を受け取ったラクスは、それを自分の制服のポケットに入れると、改めて千冬の方を向いた。

「それでは、一時だけです・・・お預かりいたしますわ」
「ああ、使う日が来ない事を祈るよ」
「そうですわね」

話はそれで終わり、キラとラクスは帰路に着いた。

「あ、キラ・・・布仏さんから誘いがあつたはずですわ」
「？ ああ、確か一夏のクラス代表就任記念パーティーだっけ？寮の食堂の一角を借りてやるって言ってたね」

ならば少し急いだ方が良かったろう。駆け足気味に寮へ戻ったキラとラクスは玄関で待っていたクラスメートに案内され食堂に入った。食堂には既に1年1組の生徒達が全員揃っていて、キラとラクスも案内された席・・・キラが一夏の隣に座り、そのキラの横にラクスが、キラの向いにはセシリアが座り、一夏の反対側には篁が座っている。

「よう、遅かったな」

「ちよつと織斑先生と話があつたからね」

「千冬姉と？ まあいいか、それよりそろそろ始まるみたいだぞ？」

確かに、キラとラクスの前にジュースが置かれ、クラスメイト全員がクラッカーを持って構えていた。

「それでは！ 織斑君のクラス代表決定おめでとうーっ！！」
『おめでとー！ー！！』

クラッカーが鳴り響き、それぞれが手に持ったグラスで乾杯をするとパーティーが始まった。

テーブルには皆が持ち寄ったの様々なお菓子やジュースが並んでおり、自由に取って食べるといふ形になっているらしい。

「織斑くん頑張ってるね！」

「応援してるよ！」

「あ、ありがとう……」

女子たちがパーティーという事で妙にハイテンションになっている所為か、一夏がそのテンションに付いて行けず少し引いている。もともと、キラも少しそのテンションは苦手なのか苦笑しながらジュースを飲み終えて珈琲を淹れているのだが。

「あれ？ ヤマト君は珈琲派？」

「うん、ラクスは紅茶が好きだけど……僕は珈琲が好きかな。僕の兄みたいな人が好きだったから、その影響で」

脳裏に浮かぶのは自身が恋人を殺して片腕と片目の視力を奪ってしまった兄の様な人……バルトフェルドだ。

二年、彼と一緒に過ごしている内に、いつの間にか一緒に珈琲を飲んだり、ブレンドしてみたり、珈琲に凝ってしまう様になった自分がいいた。

「そう言えばヤマト君とクラインさんって・・・本当に付き合っているの?」

「ええ、私はキラの恋人ですわ」

「うん、5年前から・・・ずっと変わらない。僕が護るべき存在だよ」

お互いがそう言い合って、そしてお互いに見つめ合い微笑み合う。それだけでも絵になる美形のカップルに、隙は無かった。

そして、それを目の前で見ていたセシリアは落ち込み、暗くなってしまうが・・・それでも自身の胸の内に芽生えた気持ちを諦められなかった。

セシリアにとってキラは初恋で、初めて出会った理想の男性で、強く、気高く、何よりもセシリアの心を振るわせる言葉を投げ掛けた初めての男性だ。簡単に諦められるほど、セシリアの気持ちは軽くないし、何よりも簡単に諦めるなどセシリアのプライドが許さなかったのだ。

「あつ！ いたいた・・・ 織斑く〜ん！ ヤマトく〜ん！」

「ん?」

誰かに呼ばれた気がして、声がした方を見ると・・・廊下の向こうから恐らく二年生であろう色のリボンを胸元で結んだ制服姿の眼鏡を掛けた女生徒の姿があった。

「話題の新入生のインタビューに来ました！ 新聞部副部長二年の黛薫子です。はいこれ名刺！ よろしくね〜！」

薫子が差し出した名刺を受け取り、キラは何となくだけど予想していた事が起きたなと思ってしまうた。

史上初の男性IS操縦者が二人、IS学園に入学してきたのだから、学園でも話題にならない筈がない。間違いなく新聞部か何かの部活に取材を受ける事になるだろうとは思っていたのだ。

「まず織斑君に、ずばりクラス代表になった感想とか聞かせてくれるかな？」

「まあ・・・何と言うか・・・頑張ります」

「えー、それだけ？ ま、いつか・・・そこは適当に捏造するか良いとして」

捏造するのか・・・。。。。。。それで良いのだろうか新聞部。

「次はヤマト君に！ 何でクラス代表を降りちゃったの？」

「一言で言うのなら一夏にISでの戦闘をクラス代表対抗戦で経験してもらったのかな？ 一夏は僕やセシリアさんとは違って、一夏はISの稼働時間が圧倒的に少ないし、戦闘経験も少ない。だから良い経験になると思ったんだよ」

「おー・・・こりゃ捏造する必要無さそうねえ」

キラの完璧すぎる回答に捏造する点が見つからなかったのか、薫子はちよつと残念そうな表情をした。・・・。。。。。。そんなに捏造したいのだろうかこの子は。

「じゃ、次はセシリアちゃんね。ヤマト君と試合して負けた訳だけど、何か思うところはあるかな？」

「わ、私ですか・・・？ そうですわね・・・。。。。。。キラさんの試合は、私にとって今までの経験を改めて見直す良い機会になりました。そ、それで・・・。」

「あー、後は良いよ適当に捏造してヤマト君に惚れたからって書いてくから」

「ちよつ!？」

慌ててセシリアがキラの方を向くが、当のキラは珈琲片手にラク
スと雑談して聞いて聞いていなかった。

安心した様な、残念な様な・・・複雑な心境でセシリアは頬を膨
らませるのだが、それに気付いたキラが疑問符を浮かべて首を傾げ
てしまう。

「じゃあ最後に写真撮らせてよ。1年1組の専用機持ち三人の写真
! はい三人とも並んで」

何故かキラを真ん中にして右にセシリア、左に一夏が並んだ。

「じゃあ、真ん中で手を結んでくれると良い絵になるかな？」

そう言われて三人は真ん中で右手を重ね合わせると、真っ直ぐカ
メラのレンズを見る。

「はい、それじゃあ・・・3、2、1・・・」

シャッターが切られる瞬間、筈が一夏の横に立ち、ラクスがキラ
の前に立って頭をキラの胸に預け、クラスメート全員が枠に収まる
様に乗りに出してきた。

「な、何でみんな写ってるんですの!？」

一夏がいるとは言え、折角キラの横で写真を写せるチャンスだっ
たのに、見事に邪魔されてしまってセシリアが憤慨した。

筈も一夏が鼻の下を伸ばしている様に見えたのか鋭い眼光で彼を
睨みつけていて、キラとラクスはそんな様子を眺めながら、どこか

やんちゃな妹達と弟を見ている気持ちで微笑んでいるのだった。

パーティーが終わって部屋に戻ってきたキラとラクスは順番にシャワーを浴び終わるとラクスは寝る前の紅茶を飲み、キラはパソコンに向かっていた。

「楽しかったですわね」

「そうだね・・・みんな元気だった」

「私たちがあの位の歳の時は・・・楽しむ暇は御座いませんでしたものね」

そうだ、キラやラクスが15〜16歳の時は丁度、連合とザフトの戦争中で、キラはストライクのパイロット、ラクスは議長の娘として、心休まる時間など殆ど無かった。

キラは常に戦場に出て、命のやり取りをしていたし、ラクスは政治の道具にならない為に色々と能天気の裏で画策する毎日・・・それを考えると、IS学園の生徒は本当に平和で、毎日が楽しいので、少し羨ましいと思ってしまう。

「でも、彼女たちもいつかは・・・ISの操縦者として戦場に立つ日が来る」

「今のままで行くと・・・世界は必ずISによる世界大戦が起きてしまう・・・悲しいことです」

「東さんは興味無いって言ってたけど・・・僕はこの世界で世界大戦が起きると言うのなら、止めたい」

しかし、この世界でキラとラクスは無力だ。

確かにキラにはストライクフリーダムがあるから、戦場に立てば戦争を止められるかもしれない。しかしそれでは駄目なのだ。所詮、

個人の力は国には通用しないのが道理で、真理なのだから。

「キラ・・・あの計画はどの位進んでいるのですか？」

「一応、島自体は買い取ったけど・・・まだまだやる事が山積みでね。後何年掛かるか・・・」

「人材が欲しいですわね」

本当に必要となる日が来るのなら、計画は早めておく必要があるけど・・・世界大戦なんてまだまだ何年先になるか判らない。なら、無理に急ぐ必要は無いのだけど、出来るだけ世界大戦が起きる頃には全ての準備を終わらせておきたい。

「うん、取り合えず今日はこの話もお終い。明日も早いから・・・もう寝よう？」

「ええ」

二人とも自分のベッドに入ると、リモコンで部屋の電気を消して就寝する。

明日は、何か起きそうな予感がして、悪い予感ではないので何となくだけど、楽しみにしながら・・・。

翌朝、教室ではとある噂が広まっていた。

何でも隣の2組に転校生が来るとい話らしい。それも中国の代表候補生らしい。

「中国の代表候補生ですか・・・私の存在を危ぶんでの転入かしら」
「このクラスに転入してくるわけではないのだから？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

セシリアと箒はあまり興味が無さそうだ。キラモラクスも特に興味を惹かれる内容ではないが、まあ一夏にとつては丁度良い刺激にはなるか、という程度の認識しかない。

「代表候補生か・・・どんなやつなんだろうな」

「一夏、興味あるの？」

「ん？ ああ・・・少しな」

「今のお前に女子を気にする余裕はないぞ！ 来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

確かに、箒の言うとおり今の一夏に他のクラスの人間の事を気にしている余裕は無い。只でさえ実戦経験もIS操縦技術も不足しているのに、他の事に気を取られてる暇なんて無いのだ。

「そうそう！ 織斑くんには是非勝って貰わないと！」

クラスの女子がハイテンションなのはクラス対抗戦優勝賞品である学食デザート半年無料パス券があるからだ。

しかもクラス全員分があるというのなら、当然スイーツ大好きな女子はテンションも上がるだろう。

「まあうちには専用機持ちが三人もいるし、楽勝だよ！ ね！ 織斑くん！」

「えっ・・・ああ・・・」

「その情報、古いよ！」

突然、教室の入り口から会話に乱入してくる者が現れた。IS学園の制服を着た小柄なツインテールの女生徒、アジア系の顔付きだが日本人とは少し違う所を見ると、中国かその辺りの人間だろう。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの！　そう簡単には勝てないから！」

「お前・・・鈴・・・・・・・・お前、鈴か！？」

一夏の知り合いらしい。二組の専用機持ち・・・一年で専用機を持っている人間がいるのは一組と四組だけの筈だが、二組の専用機持ちという事は、彼女が中国の代表候補生という事になる。

「そうよ！　中国代表候補生、鳳　鈴音！　久しぶりね・・・一夏」

昨夜にキラが感じた予感、それが現実になった。

どうも一夏の知り合いみたいだから、筈の事も考えると・・・本当に面白い事になりそうだと思い、キラとラクスは顔を見合わせて苦笑するのだった。

第八話 「現れたセカンド幼馴染」 (後書き)

出てきた鈴、キラにはフラグ立たないので：影薄くなりそうww
だってキラにしてみればセシリアと同じで鈴程度は路肩の石程度の
実力なんだもん！

第九話 「特訓！」 (前書き)

鈴、書きやすいW W

第九話 「特訓！」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第九話

「特訓！」

「久しぶりね・・・一夏」

「鈴・・・」

どうやら二組の転校生と一夏は知り合いらしい。

「何かツッコつけてるんだ？ すっげー似合わないぞ！」

「っ！ な、なんてこと言うのよ！ あんたは!!！」

その時だった。鈴音の後ろに立つ一人の女性・・・その女性が鈴音の頭に拳を落とした。

「っ!?! いったく・・・何すんの!?! うっ・・・・・・・・!!?!」

「もうSHRの時間だぞ」

「ち、千冬さん・・・っ！」

千冬だった。一夏の知り合いなら当然だが千冬とも知り合いという事になる。そして様子を見る限り、彼女は千冬に苦手意識を持っているみたいだ。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

「す、すいません・・・・・・・・また後で来るからね！ 逃げないで

よ一夏！」

自分の教室に戻って行った鈴音に教室中が啞然とする中、一夏は何処か懐かしそうな顔をして、キラとラクスは新たな騒動の予感に・
・チラツと箒に目を向けて、心の中で黙禱を捧げるのだった。

昼休み、キラとラクスはお馴染みのメンバーである一夏と箒にセシリアを加え、途中で二組の転校生である鈴音と共に食堂に来ていた。

キラとラクス、セシリアは洋風ランチセットを頼み、一夏と箒は和風ランチセットを、鈴音は醤油ラーメンを頼んだ。

「で、いつ代表候補生になったんだよ？」

「あんたこそ、ニュースで見た時はビックリしたじゃない！」

「俺だって、まさかこんなトコに入るなんて思わなかったからな」

「入試の時にIS動かしちゃったんだって？　なんでそんな事になっちゃったのよ？」

キラの場合は東が発表して世界中に知られたのだが、一夏の場合は何でも高校入試の時に入試会場である私立の多目的ホール内で道に迷い、偶々入った部屋の中に置いてあったIS、打鉄を動かしてしまっただけが原因らしい。

「そういえば一夏以外にもいたわよね？　ISを動かせる男・・・その人？」

「ああ、そうだ。キラ・ヤマトってんだ」

「よろしく」

「よろしく、確かアンタはアレよね？　篠ノ之博士が発表したんだよね」

「うん、一年ほど東さんと一緒にいたからね。その時に」

へえ〜、と相槌を打った鈴音だが、直ぐに興味が無くなったのか再び一夏の方に集中し出してしまった。

だが、そろそろ我慢の限界が来てしまった筈が立ち上がり、一夏の前まで回ってくると、テーブルを叩いて一夏を睨みつける。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが!? ま、まさか一夏・・・こいつとっつき・・・付き合っているのではなかるうな!？」

「べ、べべべ別に・・・!」

何故か鈴音の方が狼狽した。当の一夏は何言っているのだと言わんばかりに笑い、それを完膚なきまでに否定する。

「落ち着けてて筈、何を興奮してるのか解んねえけど、鈴は只の幼馴染だよ」

「むう・・・」

今度は鈴音の機嫌が悪くなった。いくらなんでも一夏の言葉は彼に恋している乙女の前で言うべき台詞ではない。

「幼馴染・・・?」

「あゝ、えつとだな・・・」

筈の場合、幼稚園の頃から小四の終わりまで一緒だったが、筈が引越してからの小五の頭に鈴音が引越して、中二の終わりに国に帰った。丁度入れ違いで一夏と一緒にいた幼馴染になるのだ。

「鈴、こいつが篠ノ之 筈、前に話しただろ? 筈はファースト幼馴染で、お前はセカンド幼馴染ってとこだ」

「ファースト……」

「ふん、そうなんだ……初めまして、これからよろしくね？」

「ああ……こちらこそ」

何故だろう、箒と鈴音のバックにトラと龍が睨みあっている絵が見えるのは……。箒と鈴音は互いに笑っているが、その間にはバチバチと火花が散っている。

「コホンツ、私の存在を忘れてもらっては困りますわ！ 中国代表候補生、鳳 鈴音さん！ 私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ！」

「一夏、あんた一組の代表になつたんだって？」

「ああ……キラに押し付けられてな」

「人聞き悪いね……」

「事実だろうが！ お前が面倒だって言っただけ勝手に押し付けたんだろっか！！」

まだ根に持っていたらしい。っていうか、誰もセシリアの話聞いていないのが笑えてくる。

「一夏、何ならアタシが見てあげようか？ ISの操縦の！」

「あ、いや……俺はキラに見てもらおうと思っただけ……」

「って、ちよつと！！ 聞いていらっしやいますの！！？」

遂にセシリアが切れた。誰も聞いていなかった事に気付いて涙目になっているのは、些か哀れに思ったのか、箒が肩を叩いて宥めていた。

「ごめん、あたし……興味ないから」

「なっ！？」

「一夏に教えるのは私とヤマトの役目だ！ 部外者は引っ込んでい
てもらおう！」

「あたしは一夏と話してんの！ 関係ない人は引っ込んでよ」

「関係ないだと!？」

「後から割り込んできて、何をおっしゃってますの!？」

「後からじゃないけどね・・・あたしの方が付き合い長いんだし」

とは言うが、鈴音と一夏の付き合いは三年、箒と一夏の付き合いの方が長い。一夏自身、どちらの家でも食事を食べた事があるので、アドバンテージにはならないだろう。

「親父さん、元気にしてるか？」

「あ・・・っ、うん・・・元気だと思う」

そこで鈴音の表情が若干だが暗くなった。とは言っても気付けたのはキラとラクスだけなので、一夏も箒もセシリアも鈴音の表情の変化を知らない。

「そ、それより如何なのよ？ ISの操縦・・・一応は代表候補生だし、そのファースト幼馴染やもう一人の男のIS操縦者より強いし、上手だと思うけど？」

「あゝいや・・・いくら鈴が代表候補生でも、キラには勝てないだ
ろ」

「は？ 何よ一夏・・・あんだ、まさかあたしが負けるとでも思っ
てんの？」

しかし、一夏自身、キラの試合を見て、自身も戦ったからこそ判
るのだ。今、ラクスと一緒に食後の珈琲を楽しんでいるキラの・・・
実力が、遙か雲の上を更に越えている事が・・・。

「ああ、鈴には悪いと思うけどさ・・・キラは多分だけど千冬姉より強いぜ。だからキラに教わるうと思ってるんだ」

「はあ！？ 千冬さんより強い！？ あんな細いもやしみたいな男が！？ 馬鹿言わないでよ！ 代表候補生でもないのに、専用機も持つてる代表候補生のあたしが負けるっての！？」

「いや、キラも持つてるんだ・・・専用機、それも束さんが自ら作ったISを」

話を聞いていたキラが珈琲片手に袖を捲ってストライクフリーダムの待機状態であるブレスレットを見せた。

ラクスはキラの横で紅茶を飲みながら読書をしている。

「篠ノ之博士が作ったIS・・・で、でもね！ 機体が良くても操縦者はそうとは限らないでしょ？」

「キラ、お前は千冬姉に勝てるか？」

「・・・？ 昔の試合の映像は見た事があるけど・・・そうだね、30分もあれば勝てるかな」

「正確には30分〜35分ですね」

「・・・な？ お前は千冬姉に勝てるのか？」

「・・・っ」

勝てない。例え強がりでも千冬に勝てるなんて言える人間は現在のIS操縦者に存在しないのだ。

だが、キラは勝てると言った。しかも瞳を見れば判る、あれは強がりでもなんでもなく、明らかな確信を持った言葉だという事が。

「というわけで、ゴメンな？」

「ふ、ふん！ 後で後悔しても知らないんだから！」

丁度チャイムが鳴ったので、話もそこまでにしてトレーを下げる

と教室に戻って行った。ただ、鈴音はキラの方を見る度に敵意の籠もった目で睨みつけていたのだが・・・まあキラは特に問題とはしていないので、特別なにかあったとは言えなかった。

放課後、キラとラクス、セシリア、一夏、箒は第三アリーナに来ていた。だが、少し用事があると言って箒とラクスは二人で貸し出し用IS管理室に行っているの、三人しか第三アリーナにいない。早速、キラとセシリア、一夏の三人はストライクフリーダム、ブルーティアーズ、白式を展開、直ぐにキラのストライクフリーダムはVPS装甲が展開されて白と黒と青のボディーカラーに変わる。
ヴァリアブルフェイスシフト

「前から聞きたかったんだけどさ、キラのIS、何で色が変わるんだ？」

「そうですね、何か意味があるんですの？」

「これ？ これはVPS装甲を展開して色が変わったんだ。この装甲を展開する事で実体兵器・・・例えば実弾とか実剣とかの攻撃を一切無効化する事が出来るんだよ」

実体兵器の無効化、それはつまり現存する全ての第二世代型ISと一部の第三世代型ISの兵器による攻撃を無効化出来るという事だ。

そんなトンでもない装甲が存在していた事に驚く一夏とセシリアだったが、二人はストライクフリーダムを束が作ったのだと思っているので、そこまで大袈裟に驚く事は無かった。

「キラ、お待ちせしましたわ」

「あ、ラクス・・・来たん、だ・・・」

キラが振り向くと、打鉄に乗った箒と、ラファール・リヴァイヴ

に乗ったラクスがいた。

箒は別に問題無い。だが、ラクスの場合は意外過ぎて言葉を失うキラだった……。何故ならラクスは入試の時以外にISに乗った事は無いし、ランクAはなるべくなら隠しておきたかったのもある……。何より、キラはラクスに兵器に乗って欲しくなかったという気持ちもあつたので、尚更だ。

「ら、ラクス……。何でラファール・リヴァイヴに乗ってるの？」

「一夏さんの訓練にご協力しようかと思ひまして……。一人でも対戦相手は多い方が宜しいと思つたのです」

「だからって！」

「キラ……。大丈夫ですわ」

「……。ラクス」

「訓練の時だけですから」

「……。」。」

恐らく、ラクスにラファール・リヴァイヴの貸し出し許可が簡単に出た理由はランクだろう。ランクAなのにISオペレーター志望というラクスに、IS学園側としては是非ともIS操縦者になつて欲しいという思いがある。

だからラクスがISを動かすのなら好きなだけ乗せて、そして自分から操縦者になりたいと思えるようにしたいのだろう。

箒の場合はランクCだが、IS開発者である篠ノ之 束の妹だから特例というのがある。勿論、学園側としてはその事を箒には伝えていないだろうが、間違いない。

「一夏の訓練の時だけだよ？」

「ええ、勿論です」

しかしラファール・リヴァイヴの色はラクスに似合っていないと

斉射、ラクスの銃弾の嵐、箒の斬撃の嵐が一夏に襲い掛かり、訓練が終わる頃には心身ともに消耗し切った一夏がアリーナ中央で虫の息になっているのだが、キラはそれを見ても良い笑顔で、一夏は頼む相手間違えたかな？ と若干だが後悔するのだった。

第九話 「特訓！」（後書き）

一夏の地獄は始まったばかりww

次回は：クラス対抗戦になるのかな？ キラとストライクフリーダ
ムの見せ場が！！

第十話 「始まるクラス対抗戦」 (前書き)

始まりましたクラス対抗戦！

第十話 「始まるクラス対抗戦」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十話

「始まるクラス対抗戦」

一夏の訓練が終わってからキラとラクスは部屋に戻ってパソコンの前に座っていた。調べているのはキラが中国のホストコンピュータにハッキングして得た鈴音の情報だ。

「中国代表候補生、鳳 鈴音、15歳……使用ISは近接格闘型パワータイプの第三世代機“甲龍”、武装は大型の青龍刀である双天牙月が二本、これは柄の部分連結する事で投擲武器としても扱える」

「それと中距離用の武器もありますわ……龍砲、空間自体に圧縮を掛けて銃身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲ですか……
……砲身の限界角度は無く、砲弾や銃身自体が見えないのは厄介ですわね」

幸いとして、甲龍の装備はこれしか無いのだが、どちらとも強力な武装である事には変わりはない。特に龍砲が厄介と言えるだろう、死角の無い衝撃砲は攻略法を見つけづらいのだから。

「もし一夏が彼女と戦うとしたら……やっぱり白式の高速機動と瞬間加速を使用したかく乱の後、一気に懐に飛び込んでの零落白夜しかないかな？」

「そうですね、甲龍は白式と比べるとスピードは落ちますし……

それが一番確実な方法かと思えますわ」

だが鈴音とて自身のISの攻略法くらい考えているし、それに対する戦法も用意してあるだろう。後は一夏が如何にその状況で判断して動けるか、だ。

「少し対近接戦用の戦闘訓練に切り替えようか・・・僕達全員が近接戦を一夏に仕掛けて、時々中距離攻撃が飛んでくる様にして・・・」

明日から一夏は別の地獄を味わう事が決定した。

丁度その頃、一夏の部屋では彼の目の前で箒と鈴音が言い争っていたのだが、突然一夏の背筋にゾクリと来るモノがあつて、ブルブル震えたのを言い争っていた二人が不思議そうに見ていたのは・・・関係無いだろう。

数日後、クラス対抗戦のトーナメント表が掲示された。それまでの間、キラ達は対近接戦を想定した訓練をメインに一夏を虐め・・・鍛えてきた。

そして運命のトーナメント第一回戦、一夏が代表を務める1組の対戦相手は・・・2組、鈴音だった。

「と、言うわけで・・・早速一夏は鳳さんと戦う事になったから、今日から訓練の密度を更に高くしようと思っんだ」

「・・・おいこら」

突然笑顔でトンでもない事を言い出したキラに一夏がツッコミを入れたが、当の本人はその程度どこ吹く風、明日から使用出来なくなるアリーナの使用申請を終わらせていた。

「あのさ、キラ・・・流石に俺もこれ以上密度を上げられたら死ぬる自信がある」

「何言ってるの？ 死ぬ訳ないでしょ・・・生かさず殺さずを維持しながら調整してるんだから」

「今聞き捨てならない事聞いたぞ!？」

今までの地獄の訓練で死ななかった自分は奇跡だと思っていた一夏だが、まさかキラが死なない程度に、しかし生きた心地がしない様に調整していたと言っただ。

「さあ、セシリア、篠ノ之さん、ラクス、準備は良い？」

「・・・勿論（だ）（です）（ですわ）!!!」

「俺に聞くべき事だろ!？」

一夏を引きずってアリーナに入ったキラ達だが、その時、アリーナの中に人影が見えた。それも小柄なツインテールの人影が。

「一夏!」

「鈴・・・!？ お前、俺の事避けてたんじゃ・・・」

何があつたのだろう。明らかに一夏に好意を寄せているであろう鈴音が一夏を避けるなど、恥かしいからなんて言っただけ避けるような性格にも見えないし、見れば鈴音の表情は何処か不機嫌そうで、それに関係しているのだろうか。

「じゃあ一夏・・・僕とラクスは向こうで準備してるから、話し合いいしておくよ良いよ」

「は・・・？ あ、ああ、わかった」

キラとラクスが少し離れた所に移動して準備を始めようとすると、セシリアも此方に来た。彼女も特に興味が無かったのだ。

「キラさん、ラクスさん、お手伝いしますわ」

「手伝いつて言ってもね・・・今日は一夏に瞬間加速の発展系を教えようと思ってるんだけど・・・セシリア、瞬間加速は苦手でしょう？」

「う・・・た、確かに」

セシリアも瞬間加速の理論は理解しているし、発展系も知っているが、そもそも加速系ブースト操作の基礎である瞬間加速が苦手なセシリアでは見本を見せる事が出来ない。

「それにしても、瞬間加速の発展系ですと・・・教えるのは二重瞬間加速ダブルイグニッションブーストですか？」

「今日は連続での瞬間加速と攪乱加速を教えようかと思ってね」

「どちらもキラは出来ますし、丁度良いかと思ひまして」

連続の瞬間加速イグニッションブーストなら少し練習すれば出来る芸当なので特に驚く事はなかったが、攪乱加速テンベストブーストという言葉には驚いた。それはIS学園の一年生ではまだ教えない加速技術の一つで、何よりそれをキラが出来るという事に驚かされる。

何か言おうと、口を開きかけたセシリアだったが、その途中で背後から轟音が響き渡った事で慌てて口を閉じた。

「~~~~~っ!？」

が、その所為で舌を噛んだらしい。声にならない悲鳴を上げて涙目になりながら口を押さえてしまった。

キラはセシリアの姿に苦笑しながら音がした方向を見ると、一夏がアリーナの床に座り込んでいて、それを支える筈と、立ち去る鈴音の後姿が見えた。

「……………何があったの？」

「さあ…………？」

「……………じゃあ？」

遂にクラス対抗戦が始まった。会場である第一アリーナの席は既に満員で、一回戦第一試合の一夏VS鈴音の戦いを今か今かと皆、待ちわびている。

選手控え室では試合に出る一夏がISスーツを着て、画面に映る観客席の様子に圧倒されているが、傍に控えていた筈、セシリア、キラ、ラクスのお蔭なのか、比較的落ち着いていると言えるだろう。

「じゃあ一夏、最後のおさらいね……鳳さんのISは中国の第三世代機、燃費と安定性を第一に開発された“甲龍”、メイン武装は二本の青龍刀“双天牙月”と二門の衝撃砲“龍砲”、パワー型の中近距離戦用だよ」

「燃費が非常に宜しい機体ですから、試合時間が長引けば白式が不利になりますわ。ですからキラさんが教えた加速を使いながら接近して、短期決戦を挑むのが建設的ですよ」

キラとセシリアが甲龍のスペックデータを展開して一夏に相手の詳細と戦法の確認を行っていた。一夏も勝つために一切を聞き逃すまいと必死に聞かされた事を頭に叩き込んで行く。

「イクニッションブースト
「瞬時加速で近づいて零落白夜を使えば良いんだよね？ とにかく攻撃を避けまくってシールドエネルギーの消費を抑えながら」

「そう、作戦の要は一夏の被弾率が10%以下である事と、イグニッションブ瞬時加速¹3回以内に決める事、この二つだけ」

この日の為に一夏にはイグニッションブ瞬時加速の完全習得を果たさせ、テンベストブ攪乱加速を教えてきたのだ。勝ってもらわないと教えた甲斐がないというもの。

「なあキラ、テンベストブ攪乱加速はどのタイミングで使うべきかな・・・？」
「なるべく序盤では使わない様にして・・・最後の決める直前に使えば零落白夜の命中率も格段に上がると思うよ」
「成る程な・・・」

その為の攪乱なのだから、それが現状ではベストだろう。
そして、遂に試合時間が間近に迫ってきた。ラクスは管制室に向い、一夏と篝、セシリア、キラはピットに入り、準備を進める。

「来い、白式!!」

一夏が白式を展開したのを確認したキラは最後の仕上げとばかりに白式とパソコンを繋ぎ、束ク拉斯のキータッチでOSを弄りだした。

「・・・すつげえ速え」

「姉さんと同じだ・・・」

「流星はキラさんですわ!!」

三人の声が聞こえないほど集中していたキラだが、最後にenterキーを押して作業を終わらせる。

「これで大丈夫、最高速度を出した時のエネルギー消費量を落とせ

るだけ落としてみたから、少しは余裕が持てる筈だよ」

「サンキューなキラ！」

「しかし・・・大丈夫なのか？ 白式は学園が用意した機体だと聞いている。生徒でしかないヤマトが勝手にOSを弄っても・・・」
「それは問題ないよ、白式の製作者に許可は貰っているから」

勿論、束からだ。

「さあ一夏、時間だよ」

「ああ！ じゃあ・・・勝ってくる！」

カタパルトに白式を接続させた一夏は深呼吸を一度、更にもう一度して、真っ直ぐ前を見た。

『カタパルトオンライン、進路クリアー、白式・・・発進どうぞ！』
管制をしているラクスの方がピットに響き、それを待ってましたとばかりに一夏は下半身に力を入れる。

「織斑一夏、白式！ 行くぜ！！」

気合と共に発進した一夏を見送り、ピットにいるキラ達はアリーナの映像に視線を移した。

その映像には、既にアリーナでスタンバイしていた甲龍を纏う鈴音と、丁度ピットから飛び出した白式を纏う一夏が映し出されている。

「一夏・・・」

心配そうな筈の声だけが響く中、キラとセシリアは静かに映像を

見ていた。一夏と鈴音の試合、彼は如何に戦うのか、二人の興味はそれしか無いのだから。

「嫌な予感がするね……………」

だが、キラは先ほどから妙な胸騒ぎがしていた。何か良くない事態が起こりそうな、軍人としての勘が、アリーナに入った瞬間から危険信号を発している。

「いざという時は…………使おうかな」

ストライクフリーダムの…………ワンオフアビリティ単一仕様能力を…………。

第十話 「始まるクラス対抗戦」 (後書き)

次回！ ストライクフリーダムワンオフアビリティの単一仕様能力の公開と、原作にも出てきたアレが……。

第十一話 「舞い降りる予感」(前書き)

来ました！ クラス対抗戦の開始と、ヤツの登場！！

第十一話 「舞い降りる予感」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十一話

「舞い降りる予感」

【一組 織斑一夏 二組 鳳 鈴音 両者、所定の位置まで移動してください】

アリーナ中央、そこには白式を纏う一夏と甲龍を纏う鈴音が向かい合って雪片式型と双天牙月を構え合っていた。

お互いに真剣な表情で、睨み合い、試合開始の時を待っている。

「逃げないで来たのね、今謝れば少しは痛めつけるレベルを下げてあげるわ！」

「手加減なんていらねえよ、ずっとキラ達に鍛えて貰って来たんだ・
・ 真剣勝負、全力で来い！」

「どうあっても気は変わらないって事ね・
・ なら容赦はしない・
・ あんなもやし男程度に鍛えられたからって図に乗っているみたい
だけど、その自信と一緒にこの甲龍で叩きのめしてあげるわ」

未だに鈴音はキラの事を侮っていた。確かに千冬に勝てると言った時のキラの瞳は冗談でも、慢心でもなかったが、それは男だからISの事を知らないからだと納得した。束の所に居たからって、実際にISに乗るのと勉強するのと、訳が違う。

つまり、キラは只ISの知識が普通の男子より高い程度の素人では
はなく、鈴音の方が強いというのは当然であり、道理なのだと思

える。

【それでは両者・・・試合】

遂に、来た・・・お互いに武器を深く握りこみ、開始の瞬間の一撃を狙う。

【開始！！】

始まった瞬間、両者の武器はぶつかり合い、ガギンツ！ という音と共に激しく火花を散らした。

激しい鏝迫り合い。だが先に離れたのは一夏だった。その判断は正解だ、パワー型の甲龍に白式が力比べをするのは愚かな事だから、あえて距離を取り、この後は一撃離脱にシフトするか、作戦通りに行くしかない。

「ふうん・・・初撃を防ぐなんてやるじゃない」

「・・・どうも」

「あ、そうだ・・・あなたの機体の簡単なスペックデータは見させてもらったわ。確かに・・・雪片のバリアー無効化攻撃は強大だわ・・・でもね、雪片じゃなくても攻撃力の高いISなら絶対防御を突破して本体に直接ダメージを与えられるのよ。勿論この、甲龍もね・・・つまり」

一夏と鈴音の条件は互角、どちらが先にバリアーを突破してシルドエネルギーを消費させるのが勝敗を左右する。

鈴音が一夏に接近して双天牙月を振るおうとしたが、一夏は今までの訓練を思い出し、瞬く間に白式のトップスピードで離脱、甲龍の周囲を旋回し始めた。

「距離を取って様子見って作戦かしら？ でも甘い！！」

甲龍の非固定浮遊部位アンロックユニットとなっている両肩の武装・・・龍砲から衝撃砲が発射され、不可視の弾丸が二発、一夏に向かった。

しかし、龍砲の存在はキラがハッキングして得た情報で一夏も知っている。知らなかったらかわせなかつただろうが、知っているのなら当然だが警戒しているので、避けるのは容易い。

「っ！？ 初見で龍砲を避けた！？」

まさか外れるとは思っていなかった鈴音は慌てて龍砲を連射する。しかし、その尽くを一夏に避けられ、若干だが焦りが出始めた。

そんな中、一夏は鈴音との試合で3回までと決めていた瞬間加速イグニッションブーストの一回目をおうとしたのだが・・・その時、異変は起きた。

突然、アリーナの遮断シールドの一部が揺らいだかと思えば、一夏と鈴音の間に何か激突して砂埃を巻き上げる。

「な、何だ！？」

「何！？」

その瞬間、アリーナに非常警報が鳴り響き、観客席に物理遮断障壁が下りて避難命令が出た。明らかに異常事態が起きたという証だが、その答えは砂埃から出てきた存在が物語っている。

「何だ・・・？ あのIS・・・」

管制室では山田先生を始めとして、管制をしている他の先生や生徒が大慌てになっていた。

所属不明ISが落ちてきた瞬間、非常事態警報を鳴らし、一般生

徒に避難命令を出して、更に穴の開いたアリーナの遮断シールドが再び展開された事に混乱しているのだ。

「織斑君！ 鳳さん！」

『山田先生！？』

「織斑君！ 今すぐ鳳さんを連れてアリーナから脱出してください！！ 直ぐに先生たちが制圧に行きます！！」

『いや・・・先生達が来るまで俺達が食い止めます』

「織斑君！？」

まだ山田先生の所にはアリーナの遮断シールドが展開・・・しかも最高レベルである5に次ぐ強度を誇るレベル4に設定されている事が伝わっていないらしい。

今の状況では一夏も鈴音も逃げる事が出来ないし、先生たち鎮圧部隊もアリーナに入る事が出来ないのだ。

未だに説得を続けようとした山田先生だが、所属不明ISが一夏と鈴音に攻撃を開始してしまったため、二人との通信が途絶えてしまった。

「織斑君！ 鳳さん！ 聞こえてます！？ もしもし！ もしもし！！」

「落ち着け！」

「ひゃうっ！？」

繋がらない通信にいつまでも叫び続ける山田先生のおでこに千冬がでこピンをする事で何とか静めた。

そしてアリーナの状況を示す画面を見せる事で、現状を何とか理解させる。遮断シールドの事、更にはステージに通じる扉が全て口ツクされている事、全てを教え、これが所属不明ISの仕業であるうということ伝える。

「シールドの解除を三年の精鋭たちに任せているが、あと何分掛かるか判らない。政府に援助の連絡を入れたが・・・それもすぐには来ないだろう。しばらく二人には・・・持ちこたえて貰わねばならない」

「そんな・・・」

「大丈夫ですわ山田先生・・・一夏さんはキラが頑張って鍛えましたから、簡単に負けたりなんてしません」

ラクスの言う通り、一夏の実力はこの短期間で目覚ましい成長を見せている。だから今出来る事は先生方に生徒を屋外に避難させる事だけだ。

「織斑先生」

その時、ピットにいたキラとセシリア、篝が管制室に入ってきた。そしてキラが何を言いたいのかは、千冬なら目を見れば解る。

「任せても良いな？」

「はい」

「お待ちください！ キラさんお一人で危険な場所に行かせるわけにはいきませんわ！ 私も一緒にいきます！！」

「オルコットは待機している、お前ではヤマトの足を引っ張るだけだ」

「しかし！」

確かに、セシリアではキラの足を引っ張るだけだろう、それはセシリア自身も理解している。だけど、自分が好意を寄せる男を危険な場所へ一人で行かせるなんてセシリアには耐えられなかった。

「ならば聞くが、ヤマトや織斑、鳳との連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ ヤマトのドラグーンもある中、お前のビットを如何いう風に使う？ 連携訓練での連続稼働時間は？」
「……っ、わかりましたわ……」

完全に論破されてしまった。これ以上、セシリアは反論する事が出来ず、涙を呑んでキラを見送る事しか出来ない。

「ではヤマト、アリーナの外から出撃してくれ」
「了解」

「ちょ、ちょっと待ってください織斑先生！ ヤマト君も！ まさか本当にヤマト君一人でアリーナに入る気ですか！？ シールドもあるのにどうやって！？ たとえ入れたとしても所属不明ISに挑むなんて危険すぎます！」

「問題ない、ヤマトの実力は私の知る限り学園どころか世界一だ。あの程度の木偶の坊の攻撃ではヤマトに中てるどころか掠らせる事すら出来ん」

山田先生はキラの実力は確かに見ているし、実際に相手をしたから知っている。だけど、それはあくまでリミッターを掛けた状態でのストライクフリーダムとキラの実力だ。

「ヤマト……一夏を、頼む」

「うん……ああ、そうだ。篠ノ之さん、もう僕の事はキラで良いよ……友達なんだから、帰ってきた時には、そう呼んでね？」

「……あ、ああ！ わかった！ ならばお前も、帰ってきたら篝と呼べ！ クライン……いや、ラクスもだ！」

「光栄ですわ、篝さん」

今度こそ、キラは管制室の出入り口から出ようとしたが、最後に

一度振り返り、ラクスと目を合わせる。

ラクスもそれに応え、目を合わせて微笑みながらも確りと頷き、キラも同じく微笑んで頷き返し、管制室を出て行った。

アリーナ外、避難してきた生徒と、避難誘導をしている先生方で溢れる場所から少し離れた所にキラは立っている。

そして、ゆつくりと待機状態にしているストライクフリーダムを巻いている右腕を天に向かって伸ばし、己が最強の・・・自由の名を冠する翼を呼び出した。

「ストライクフリーダム、起動！！」

ブレスレットが光り輝き、その光が止んだ後には全身装甲のIS、ストライクフリーダムを身に纏ったキラが立っていた。

キーパネルをタッチしてリミッターを解除すると、VPS装甲を展開してバレルロールをしながら一気に空へと舞い上がる。

「単一仕様能力発動・・・ミーティア、リフトオフ！！」

アリーナ上空で停止したキラはストライクフリーダムの単一仕様能力を起動させる。

ストライクフリーダムの武装の内、高エネルギービームライフル二挺とスーパードラゴン、シユペールラケルタビームサーベル二本が封印され、背中に巨大補助武装がドッキングされた。これこそがストライクフリーダムの単一仕様能力にして、元の世界の戦争でも活躍した巨大兵装だ。

ミーティアをドッキングする事でビームライフルとビームサーベル、ドラゴンの三種類の武装が封印される代わりに、ミーティアに搭載されている武装・・・高エネルギー収束火線砲が4門、MA

- X200 ビームソードが2つ、エリナケウス 対艦ミサイル発射管が77門の使用が可能となった。正直、対大多数用の武装である。

「フルバースト一点集中砲火・・・的は、所属不明機が破った場所
で!」

ミーティアの全ての砲門が開き、ストライクフリーダムの両腰に装備されたレール砲も展開された。そして・・・全てのストライクフリーダムが現在使える武装の内、ビームソード以外の全てが一齐に発射され、本来は他方向に向かって行く筈の攻撃が遮断シールドの一点に集中して命中、遮断シールドを完全に破壊するのだった。

「ワンオフアビリティ単一仕様能力終了。キラ・ヤマト、フリーダム! 行きます!」

ミーティアとのドッキングを解除して、ミーティアが消えるのと同時に全スラスタを全開で吹かし、イグニッションブースト瞬時加速を併用しながらビームライフルを腰にマウントすると、所属不明ISに近づいた瞬間にビームサーベルを抜刀した。

遮断シールドが破壊された刹那の出来事だった。轟音と共に遮断シールドが完全破壊された瞬間、所属不明ISが突然左肩を切断されて吹き飛んだのは。

「き、キラ!」

「な、何なのよ・・・このISは」

ストライクフリーダムを知る一夏はキラの登場に助かったとばかりに大喜びするが、鈴音は初めて見るストライクフリーダムの姿に圧倒されていた。

「一夏、鳳さん、後は任せて・・・あれは、僕が倒す」

所属不明ISがゆっくりと立ち上がり、残った右腕のレーザーを
発射したが、キラはビームサーベルを持っていない左腕からビーム
シールドを展開してそれを防ぐ。

同時にビームサーベルを腰に戻してビームライフルを両手に持つ
と、ドラグーンをパージしながら、相手である所属不明ISを睨ん
だ。

「正体は判ってるよ・・・無人機なら、僕も遠慮無く破壊できる！
」

始まる。戦いにすらならない一方的な破壊という名の、大天使の
舞いが・・・。。。

第十一話 「舞い降りる予感」(後書き)

次回、無人機は破壊への一方通行アクセラレータWW

第十二話 「世界最強の実力」 (前書き)

無人機…ゴーレム?との戦いは瞬殺で終わりです。

第十二話 「世界最強の実力」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十二話

「世界最強の実力」

アリーナに突如現れた所属不明IS、教師の応援が駆けつけるまで応戦していた一夏と鈴音だったが、所属不明ISはスピード、パワー、防御、何もかもが高く、二人掛りでも苦戦を強いられてしまっていたのだ。

しかし、その時現れたのは所属不明ISと同じ全身装甲タイプフルスキムのIS、ドラグーンを展開しているが故に輝く8枚の青い翼を広げて二人の前に立つその姿は宛ら大天使の如く、二人を護る為にストライクフリーダムは舞い降りた。

「キラ！」

「一夏、君は鳳さんと一緒に離れてて、アレの相手は僕がやる」

「ちよつと待ちなさいよ！ あれを一人で相手するっての！？ 無茶苦茶強いよあいつは！ あたしと一夏二人掛りでも苦戦したのに、アンター一人で戦って、勝てるわけないじゃない！！」

確かに、普通なら鈴音の言う事は正しいだろう。だが・・・事、キラに関しては普通など当て嵌まらない。それ以前に普通のIS操縦者・・・特にIS学園の生徒の普通など通用しないのだ。それは・・・実戦経験と殺し合いの経験から来る絶対的で圧倒的な実力の差だ。

「大丈夫、あの程度なら僕一人で・・・勝てる」

言うや否や両手のビームライフルを構えて翼を広げ、ハイマツトモードの加速に加えて瞬間加速も加わった超音速のスピード、一瞬にして一夏と鈴音、更に所属不明機のカメラからも姿を消したストライクフリーダムだが、その一瞬で所属不明機の頭部と両足、残った片腕が吹き飛んだ。

「うそ・・・あたしと一夏でも苦勞した相手を、一瞬で・・・それに、何なのよ・・・あの異常なまでのスピードは」

いつの間にかドラグーンを戻して所属不明機の上に浮いていたストライクフリーダムから感じられた絶対的な威圧感を、漸く自覚した鈴音は悟った。

このISには、キラ・ヤマトとストライクフリーダムには、自分では何をしても勝つ事は出来ない。彼にとって鈴音など路肩の石に等しい力でしかないのだと。

「両手両足、頭も失ったのに、まだ動くんだね・・・ゴーレム？」

キラがゴーレム？と呼んだその所属不明機・・・頭を潰されても動いている事から無人機と思われるソレは・・・動く術も、攻撃する術も、敵を捉える術も失ったというのに、まだ動くこともがいてる。

「東さん・・・貴女は何をしたいんですか？」

そう呟いたキラだったが、直ぐに表情を引き締め、両手のライフルを縦に連結させて銃口をゴーレム？に向けた。

「これで、終わりだよ」

通常のビームよりも強力なビームが発射され、ゴーレム？の胴体を貫いた。コアは避けて撃つたが、ISとしての中枢機能を完全に破壊したので、これ以上動く事が出来なくなったゴーレム？は、その動作を完全に停止させるのだった。

IS学園地下、最高機密室の管制室にキラとラクス、千冬と真耶は来ていた。

管制室のガラスの向こう・・・メカニックルームのようになった場所には、先の所属不明機、ゴーレム？が解析をされている。

「どうだ？」

「やはり無人です・・・コアも調べてみましたが・・・どこ
の国家にも登録されていないものです」

つまり、ゴーレム？に使われているコアは、束が作った467個
のコアとは別の・・・468個目のコアという事だ。

「やはり・・・ですか」

「ヤマト君、何か心当たりでも？」

「・・・いえ、特には」

しかし、心当たりなんて聞かなくても真耶だって気付いている。

コアを作る人間なんてこの世に一人しか存在していないのだから。

「ヤマト、話がある、付いて来い・・・クラインも同席してくれ」

「はい」

「わかりましたわ」

この場を真耶に任せて、千冬はキラとラクスを連れて別室に移動した。その部屋にある椅子に三人とも座ると、備え付けのインスタントコーヒーを淹れて少し、落ち着く。

「私もだが、ヤマトとクラインにはアレが何なのか・・・見当は付いているのだろうか？」

「はい・・・一応、設計図は見た事がありますので」

「私も、キラと一緒に見ましたから」

「そうか・・・やはり束だな？」

当然、千冬も気付いていた。しかし、束が何のつもりでこんな真似をしたのかは、流石に解らない。

「アレの名称は？」

「ゴーレム？です」

「？という事は？と・・・それ以降もあるのか？」

「私たちが見ただけでは？まででしたが・・・」

束ならそれ以上を作っている可能性が高い。

「つまり、あの馬鹿はまだ未登録のコアを2つは作っているという事か」

「そうなりますわね」

頭が痛い。本気で頭痛がしてきた千冬だが、それ以上に胃が痛くなりそう・・・思わず全身から殺意が溢れ出しそうになった。

「ともかく、この話は最高機密事項として扱う。ヤマトとクラインは、ここでの話は絶対他言無用だ」

「了解」

「かしこまりました」

国家最高機密クラスの内容になってしまつので、これは当然の事
だろう。

それから、今後も東関連の事で何か起きる可能性があり、それ
が何の目的なのかを聞かなければならなくなった。

一度地上に戻つたキラとラクスは自分達の部屋に戻り、携帯電話
の電話帳から東の名前を出すと、通話ボタンを押した。

『もすもすひねもす〜？ はあい！ みんなのアイドル、篠ノ之
束ちゃんだよ〜？』

「……今日、ゴーレム？が来たんですけど」

『スルー！？ 酷いよキー君！ キー君にスルーされると地味に傷
つくよ！？』

「あれ、束さんが送り込んだんですよね？」

『……まあね、確かにゴーレム？は束さんが送つたよ。誰にも強奪
されていないもん』

やはりそうだった。

「あれは明らかに一夏を狙ってましたけど、何故……ゴーレム？
を？」

『キー君、いつくんはね……これから様々な人、組織、国に狙わ
れる。それに、キー君が予想した第三次世界大戦……第一次IS
世界大戦だっけ？ が起きた時、いつくんは必ず世界中から狙われ
る事になるよ……だからね、いつくんには成長してもらい
たかつたんだ。自分の身と、いつくんが選んだ大切な人を護れる強

さに』

「そのために・・・実戦経験を積みませよう？」

確かに、今後の世界の事を考えれば一夏の立場は危うい。何処かの組織、国に所属したとしても、世界で二人しかいないISを操縦できる男、世界大戦が起きれば間違いなく命を狙われる対象となる。それも、真っ先に・・・。

『いつくんは、私にとっても大切な弟みたいな子・・・だから絶対に馬鹿な人間の思惑で死んで欲しくないんだ。だから、今からでも兎に角強くなってもらいたい・・・誰にも負けない力を得て私とキー君が作った白式で、何にも負けない強い存在に』

「そうですか・・・なら、鍛えるのは僕の仕事ですね」

『うんうん、それと強くなるまでの護衛』

そして、実戦経験を積むのに・・・邪魔をしてはいけない。

『あ、でも亡国機業が出てきたら遠慮無くキー君が叩き潰してね？あそこは今のいつくんには手に負えないし、今の状態では下手したら殺されちゃうから』

「勿論です。僕もあそこの事は調べてますけど・・・正直な話、殆ど解らないですし」

『天才束さんと同じく天才キー君でも調べきれないからねえ。厄介だよ』

「ただ、もう一つ・・・問題が出てまして」

ラクスの事だ。キラはラク스에電話を代わり、彼女自身に説明させる。

「お電話代わりましたわ」

『あ〜ラーちゃん！ 制服の写真ありがとっね！ すっごく似合ってたよ〜！』

「ありがとうございます。それで・・・私の問題なのですが・・・適正ランクがAと出ましたわ」

『おやおや〜？ それは東さんも予想外だよ！ それじゃあオペレーター志望っていうのが返って不味い事態になりそうだね』

既に色々と来ている。学園の教師の中にはラクスをIS操縦者にならないか？ と直接聞いてくる者もいるし、しつこく操縦者として勧誘してくる教師もいる。

「キラが護ってくれてますけど・・・その」

『まあ、いつかは限界が出てくるよねえ。個人では企業や組織、国には勝てないところも出てくるもん』

「はい・・・」

『ふんふん・・・よし！！ 東さんが一肌脱ぐとしますか！』

嫌な予感がした。東が一肌脱ぐなんて言うと、碌な事にならない気がするのだ。

「東さん？ 紅椿の事もあるのですから、無理はしないでくださいね？」

『問題な〜し！ ぜえんぶ東さんにお任せ！！ それじゃあアイデアを纏めたいから切るね！？ ちーちゃんやいっくん、篝ちゃんに宜しく〜!!』

「あ、あの・・・！！・・・切られましたわ」

「東さん・・・なんだって？」

「何か、いいアイデアがあるとか・・・」

激しく嫌な予感がする。東のアイデアが良い方向へ流れた事なん

てキラとラクスが知る限りでは数える程しかなかったのだ。

「しょうがない・・・悪い方向へ流れない事を祈ろう」

「ですわ、ね・・・」

この日、悪い予感を拭い去る為、二人がベッドに入ってから寝るまで3時間は掛かったとだけ、記しておこう。

クラス対抗戦は中止となった。所属不明IS・・・ゴーレムの出現によってトーナメント所ではなくなったので、優勝賞品であるスーツ無料パスも当然だが無し、全学年の女子が嘆いたのは当然の結果だろう。

「はい、皆さんにお知らせがあります！ 今日から転校生が来ますよ！...」

朝のHRで、副担任の真耶がそんな事を言ってきた。この時期に転校生・・・2組の鈴音みたいに他国の代表候補生なのだろう。

「じゃあ、入ってきてください！」

教室の入り口、ドアが開かれて入ってきたのは二人・・・片方は眼帯をした銀髪の少女で、もう片方は・・・。

「うそ・・・」

キラですら予想出来なかった存在の登場、果たしてそれは何を意味するのか、今はまだ・・・わからない。

第十二話 「世界最強の実力」(後書き)

て、テンションが上がってきたあああああ!!!

今回は、お待たせしました!!!! フランスからやってきた!

あのお方!!!!

皆もお祭だぜええええええええ!!!!

第十三話 「フランスから来た貴公子？」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十三話

「フランスから来た貴公子？」

キラが所属するIS学園1年1組、今日そこに転校生が二人来た。片方はドイツから、もう片方がフランスから、二人ともそれぞれの国の代表候補生であるのだが、問題はフランスから来た転校生だ。何故なら……。

「うそ……男？」

「綺麗な髪……」

「美形……」

そう、フランスから来た転校生が着ている制服はキラや一夏と同じ男子用の制服だったのだ。

「シャルル・デュノアです、フランスから来ました。みなさん、どうぞよろしくお願いします」

見た目は女顔のブロンド髪を後ろで縛った美形男子、背はそんなに高くないので、女子から見れば守ってあげたくなるタイプの男の娘だ。

「きゃああああ！ 男の子よ！ 男の子！！」

「しかも！ 織斑君やヤマト君とは別の守ってあげたくなる系！！」

「えつと……こちらに僕と同じ境遇の方が二人いると聞いたんですけど……」

誰も聞いていない。寧ろ男にしては妙に高い声が更に歓声を呼んでしまう結果になってしまった。

それから、もう一人、ドイツから来た転校生はと言つと……。

「……」

「ラウラ、挨拶しろ」

「はい、教官……ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

千冬に言われて漸く自己紹介をしたが、非常に簡素。更に、千冬とは顔見知りらしいのだが……、以前に束が言っていた千冬がドイツで教官をしていた時の教え子なのだろう。

そのラウラが驚くべき事を仕出かした。クラスの男子の中から一夏を探し、その目の前まで移動すると、突然引つ叩いたのだ。

「な、何をする!?!」

「……認めない、貴様が教官の弟だなんて、絶対に認めてなるものか!」

「な……っ」

何を持って一夏を認めないと言つのか、それは判らないが、これは調べる必要性がありそうだ。

突然ラウラが一夏を引つ叩いたことで教室が騒がしくなったが、それもすぐに千冬の一喝で収まった。

「静かにせんか! 次の授業は実習だ、全員着替えてグラウンドに集合しろ! 遅刻した者はグラウンド10周だ!」

そう言い残して真耶と共に教室を出て行った千冬。残された生徒達は皆一様に急いで着替える準備に入った。

「デュノアさん、急いで更衣室に行くよ？ 遅刻したら不味いから」

「あ、えっと、ヤマト君だよな？ その・・・」

「ほらキラとデュノア！ 急ぐぞ！！」

如何したものと迷っていたシャルルをキラが急かし、更にその二人を一夏が急かした。千冬の授業を遅刻したら最後、地獄が待っているのはクラス谁也が知っている。

何より、このままこの場に残っていたら女子の着替えを見えしもう事になるのだ。

「それと僕はキラで良いよ」

「俺も、一夏でいいぜ」

「あ、それじゃあ僕の事はシャルルで良いよ」

教室を出て、急ぎ足で更衣室に向かう途中に自己紹介を済ませ、シャルルの呼び方、シャルルからキラと一夏を呼ぶ時の呼び方を決めた。

そして、このまま更衣室に無事に辿り着くのかと思えば、シャルルの存在をどこで聞きつけたのか他のクラスの女子生徒が廊下に出てきて三人を見つけると大騒ぎを始めたのだ。

「見て！ ヤマト君と織斑君よ！！」

「転校生の男の子もいるわ！！」

「きゃああああ！！ こうして三人並ぶと絵になる〜！！！！」

女子生徒が皆、三人を追いかけてきた。流石に相手をしていると遅刻してしまうので、別の道から逃げる為にキラはシャルルの手を

取り、一夏にも急ぐよう声を掛けてスピードを上げる。

キラと一夏だとキラの方が身体能力が上なので、当然だが走るスピードもキラの方が上、シャルルは見た感じだと二人より足は遅いだろうから、キラが引っ張る事にしたのだ。

「あ、あああああ！？ き、キラあ！？」

「ごめん、でも急がないと遅刻するから」

結局、シャルルは更衣室に着くまでキラに手を握られ、何故かその頬を薄く赤らめていたのだが、その理由は定かではない。

更衣室に着いて直ぐにキラと一夏は自分達のロッカーを開け、制服の上着を脱いで着替えを始めた。

シャルルも着替えを始めようとしたのだが、上半身裸のキラと一夏の姿が目に入り、顔全体を真っ赤に染め上げる。

「？ シャルル？」

「どうしたんだよシャルル？」

「え！？ い、いや！ 何でも！？」

如何も様子がおかしいのだが、今はそれ所ではない。二人はシャルルから目を離し、下も脱ぐとISスーツに着替える。

「って、シャルル早ええ！ もう着替えちまったのか！？」

確か、キラと一夏が上を脱いだときにはまだ制服を着ていた筈のシャルルが、もう一度目を向けるとISスーツに着替え終わっていたのだ。

「う、うん、まあね・・・」

「早いね、まるで制服の下にISスーツを予め着込んでいたみたいだ」

「っ！ ま、まさかあ！ あ、あははは・・・」

本当に妖しい。少なくとも、一夏は騙せてもキラは騙しきれる筈がない。シャルルの様子、仕草、随分と怪しすぎた。

「（これは後で調べる必要があるかな）まあ、兎に角急ごう？ もうすぐ授業開始時間だ」

「おう！ 遅刻したら洒落にならん」

「う、うん！」

シャルルの事は後で調べるとして、今は授業の方が大事だ。三人とも駆け足でグラウンドに向い、何とか授業には間に合う事が出来たのだった。

グラウンドには合同授業の為、1組と2組の生徒が集まって整列していた。

「よし、今日は実際にISに乗ってもらおう事にする！ その前にISの実戦演習をしよう」

生徒達の前に立ち、千冬が本日の実習内容を述べた。真耶は何処に行ったのだろうか。

「あの、織斑先生・・・実戦演習って言っても相手は誰が？」

「鳳か、それなら既に用意してある。実戦演習の相手を務めるのは・

・・・」

そこまで言った所で空からISの駆動音が聞こえてきた。同時に、女性と思しき悲鳴も。

「きゃあああああ！？ どいてくださーい！！」

見てみれば簡単、ラファール・リヴァイヴに乗った真耶が回転しながら落ちてきているのだ。それも生徒達が密集している中に向つて。

他の生徒達が慌てて離れていく中、キラは咄嗟にストライクフリーダムを起動、一瞬でVPS装甲を展開して飛び上がると、回転しているラファール・リヴァイヴの腕をキャッチ、慣性によって少しストライクフリーダムも回転してしまったが、キラは冷静に制御しながら着地するのだった。

「あ、ありがとうございます、ヤマト君」

「いえ、山田先生は大丈夫ですか？」

「あ、はい！ それは勿論！」

なら問題なし、キラはストライクフリーダムを解除してラクスの隣……シャルルの隣でもあるが、そちらに移動した。

「すまんなヤマト。それで、実戦演習の相手は山田先生が務める……

・鳳、オルコット、二人で相手をしる」

「わ、私たち二人ですの！？」

「いやあ、いくらなんでも2対1じゃ、ねえ？」

「安心しろ……今のお前たちではすぐ負ける」

不敵な笑みを浮かべながらした千冬の宣言、それが二人のプライドに火を点けた。セシリアも鈴音もそれぞれのISを起動させると、

若干の怒りを滲ませた表情で戦う意欲を見せ、それを見た千冬が薄らとだが黒い笑みを浮かべた・・・気がする。

「そこまで言われるのでしたら仕方ありませんわ!」

「言っておくけど、手加減なんてしないからね!」

「お手柔らかにお願いしますね?」

千冬の合図と共に空へ飛び上がった三人を眺めながら、キラはとある情報を思い出していた。

「そう言えば山田先生って、元代表候補生だったんだよね・・・日本の」

「それも代表に選ばれはしなかったものの、実力的には代表と言って良い実力の持ち主だったらしいですわね」

それを隣で聞いていたシャルルと一夏、筈は表情を引きつらせる。元とは言え、それだけの実力者だったのなら、今でも実力に若干の衰えはあると、セシリアと鈴音では相手にならないのではないかと・・・。

「デュノア、山田先生が使っているISについて説明してみる」

「は、はい! えっと、山田先生のISはデュノア社製ラファール・リヴァイヴです、第二世代開発最後機ですが、そのスペックは初代第三世代にも劣らないものです。現在配備されてる量産ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、装備によって格闘、射撃、防御といった全タイプに変更可能です」

流石はデュノア社社長の息子、自分の父親の会社で作ったISの事はよく知っている。

丁度シャルルが説明を終えた時、上空では決着が着いたのか、一

際大きな煙の中からブルーティーズと甲龍が纏めて落下してきた。

「ま、まさかこの私が・・・」

「あ、あんたねえ！ なに面白いように回避先読まれてるのよ！」

「鈴さんこそ！ 無駄にバカス力撃つからいけないのですわ！！」

ISを纏ったまま手足が絡まっている二人は中々動く事が出来ないみたいだが、そもそも解除すれば簡単なのに、何故それに気付かないのだろうか。

「これで諸君にも、教員の実力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接する様に」

最も、例外としてキラは教員ですら相手にならない实力を持っているのだが、元々キラ自身は目上の者に対する敬意は持ち合わせているので、特に問題は無い。

「次に、グループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事、では分かれる！」

専用機持ちはキラ、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラ、一夏の6人だ。

キラのグループにはラクスを含めた女子数人が、一夏のグループには篝を含めた女子数人、シャルルにも同じ位で、セシリアと鈴音が少しすくない位、ラウラのグループには誰も来なかった。

「馬鹿者、それぞれのグループから何人かボーデヴィツヒのグループに移動しろ」

渋々だが女子の何人かがラウラのグループに移動して、それぞれ

のグループに学園の量産機が宛がわれる。

一夏と鈴音、ラウラの所は純日本製の打鉄、キラとセシリア、シヤルのグループにはフランスのデュノア社製ラファール・リヴァイヴだ。

「それじゃあ、先ずは実際に装着してみようか・・・順番は出席番号順だね」

この後、授業は特に問題なく進み、一夏も珍しく授業中だというのに千冬に怒られる事なく終わるのだった。

第十三話 「フランスから来た貴公子？」（後書き）

次回は早くも…、ラクスがパネエWWという状況に。

第十四話 「デュノア社の娘」(前書き)

ラクスがすげえ…、観察眼って魔眼か何かなんですか？

第十四話 「デュノア社の娘」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十四話

「デュノア社の娘」

二人の転校生が来た日の放課後、キラはラクスと共に寮の自室でお馴染みのハッキングをしていた。

ハッキング先はドイツとフランス、先に一夏の事があるのでドイツから調べている。

「あつた。ラウラ・ボーデヴィツヒ、15歳でドイツ軍IS部隊“シュヴァルツェア・ハーゼ”の隊長を務めている。階級は少佐、更にドイツの代表候補生であり、専用機はドイツ第三世代機のシュバルツェア・レーゲン」

「あら、シュヴァルツェア・レーゲンも中々の機体ですわ。大型レールカノン、ワイヤーブレード、プラズマ手刀、更にAIC（慣性停止境界）も搭載されています」

正に一対一においては最強を誇る機体だろうが、弱点も簡単に見つかった。

「AIC（慣性停止境界）は確かに強力だろうけど、それは一つの敵に集中していなければ使えないから、複数の敵だったり、多方向からの同時攻撃に弱く、特性上エネルギー兵器にも効果が無い」

「ストライクフリーダムとブルーティアーズはこの機体の天敵ですね。逆に、白式だと勝てませんわね」

随分と強力な機体だが、対抗策があるストライクフリーダムの敵ではない。しかし問題なのは一夏なのだ、彼では一対一で勝つのは難しい。

「ん？ これは・・・ヴォーダン・オージェ？ ……つ！
これは！！」

「っ！ 人体実験です、ね」

ラウラの事で少し深く調べていたら、驚くべき事が判明した。
ラウラが眼帯をして隠している左目、そこには人体実験によって
擬似ハイパーセンサーを植え付けられているのだ。

「いるんだね・・・同じ人間にこんな事をする人間って、どこの世
界にも」

「悲しい事です」

とりあえず、ラウラの事はこれで良いとして、次はシャルルの事
を調べる番だ。

フランスにハッキングをして、代表候補生の名簿からシャルル・
デュノアの名前を探す・・・のだが、何故かシャルル・デュノアと
いう名前は検索されない。

「あれ？ シャルルの名前、出てこないね」

「キラ、もしかしたら名前が違うのではないのですか？」

「名前が？」

「ええ、シャルルはフランス名で男性に付ける名前ですわ・・・で
もデュノアさん、女性の方ですわよ？」

「・・・えっ!？」

ラウラの左目の時以上に驚いた。確かに男らしさが無いとは思っていたし、どこか疑っていたのは確かなのだが、本当に女性だったとは……。

「ラクス、いつ気付いたの？」

「最初に、一目見て気付きましたわ」

「・・・本当に、ラクスの人を見る目は恐れ入るよ」

良く見れば判った筈だ。シャルルは男にしては肩幅が狭いし、喉仏も出ていない。更には骨盤の形も外見から男性らしさは無かった上に、若干だが内股気味だったのだから、確信を持てなかったキラは少し己の観察眼を恥じた。

「じゃあ、シャルル・デュノアじゃなくて・・・シャルルの女性名だから」

「確か、シャルロットがそうです」

フランスで、シャルルの女性名であるシャルロットで検索してみたら、ビンゴ。

「出た。シャルロット・デュノア、15歳、フランスの代表候補生であり、デュノア社社長の娘・・・あ、本妻の子じゃないみたいだ」

「愛人の子、ですか」

「うん、彼女の雰囲気から察すると、父親からの愛情は無かったんじゃないかな」

愛人の子なんて得てしてそんなものだろう。

「えっと、専用機は第二世代型ラファール・リヴァイヴ・カスタム？、量産機であるラファール・リヴァイヴをカスタム化した機体で、

基本装備の一部を外して、後付装備の為に拡張領域を原機の2倍まで追加している」

「武装は20種類まで及び、ラビット・スイッチ高速切替を使う事で戦闘を行いながら武装を交換出来る為、距離を選ばない戦いが可能ですわ。万能型ですわね」

「主に彼女が使っている武装はアサルトカノン“ガラム”、連装ショットガン“レイン・オブ・サタデイ”、近接ブレード“ブレット・スライサー”、切り札として69口径のパイルバンカー、グレー灰色の鱗殻、通称、シールド・ピアース盾殺しを使っている」

第二世代ではあるが、戦い方によっては第三世代にも負けないスペックと武装だ。

「でも、何でシャルル・・・シャルロットは名前と性別を偽って転校してきたんだろう？」

「愛人の子とは言え、デュノア社社長の娘ですからね・・・」

発覚したらかなりの問題になると思うのだが、そんなリスクを犯してまで性別を偽る理由、何かがあるのだろう。

「本人から聞くしか、ないかな」

「どうします？」

「呼ぶよ、今は筈と入れ替わって一夏の部屋にいる筈だから、呼んでみよう」

そう言ってパソコンの電源を落とし、席を立ったキラはラクスに紅茶の準備を頼むと、部屋を出て向かいの部屋の扉をノックした。

『はい？』

「あ、一夏？ キラだけど」

『キラ？ ちょっと待って』

扉が開いて、中から一夏が出てきた。後ろにはシャルルの姿も見える。

「どうした？ お前が来るなんて珍しいよな」

「ちょっとシャルルに話があつてね」

「僕に？」

「うん、ちょっと一夏には内緒で話があつて」

一夏には内緒、それを聞いて一夏は訓練の事でも想像したのか、顔を青褪めている。何を想像したのか、凄く読みやすい。

「ま、まさかキラ・・・シャルルも訓練に参加させる、気か？」

「そうだね、そうしようと思つて、一夏には内緒で内容を考えようかと思うんだ」

「そ、そうなんだ・・・うん、いいよ」

青褪めたままプルプル震える一夏を放置してシャルルと共に自室へと戻ったキラは、室内の適当な椅子にシャルルを座らせ、自分もその向かいに座る。

その際、シャルルは部屋にラクスがいる事に驚き、何故ラクスがこの部屋にいるのかを聞いて来た。

「相部屋だからね」

「相部屋だからですわ」

「相部屋って・・・男と女で！？」

まあ、言いたい事は理解出来るが、キラとラクスが何故相部屋なのかは話す訳にいかない。適当な理由で誤魔化す事にして、本題に

入った。

「それでシャルル、君に聞きたい事がある」

「聞きたい事？」

「シャルル、君は・・・何故、名前と性別を偽っているの？」

「っ！？ な、何を、言ってるの・・・？」

一瞬、驚愕に表情を変えたが、すぐに若干青褪めているものの、平静を装った顔で惚けて見せたシャルルだが、キラとラクスを観察眼を誤魔化すのは無理だ。

「デュノア社長にシャルルという息子は存在しない。シャルロットという名の娘ならいるけどね・・・フランス代表候補生シャルロット・デュノア、専用機の名前はラファール・リヴァイヴ・カスタム？、シャルル・・・君のISの事だよね？」

「・・・」

完全に沈黙した。キラもラクスもここまで知っているのなら、もう誤魔化しなんて通用しないだろうし、何より・・・シャルル自身の胸の内にあつた性別や名前を偽っている事への罪悪感が、それを許さなかったのだ。

「凄いなキラって、今日会ったばかりなのに、ここまで調べちゃうなんて」

「最初に君が女性だって気付いたのはラクスだよ。君を一目見て女性だって気付いたみたいだから」

「そうなんだ・・・、結構練習したんだけどなあ、男の子っぽい振る舞いとか口調とか」

確かに、シャルルの演技は完璧だっただろう。しかし、身体的な

面は隠しきれないもので、ラクスの鋭い観察眼がそれを見抜いただけの事だ。

「それで、君は如何するの？」

「女性だという事がバレたのでしたら、本国の方で何かあるのでしょうか？」

「うん、多分バレたって事は強制送還になって、良くて牢屋に幽閉かな」

何処か諦めたというような、悟りきつた表情で述べたシャルルだが、キラはシャルルをそんな目に合わせる気なんて無い。

「それは無いよ。僕は友達がそんな目に合うなんて許せる様な人間じゃない」

「私もですわ」

「でも、もう無理だよ・・・僕は父には逆らえない。愛人の子で事で本妻の人にも負い目があつて、お母さんが死んでから引き取られて、邪魔者でしかなかった僕にIS適正があるって判った時から、僕は父にとって道具でしかなかったんだから」

「それは違うよシャルル、君の人生は君のモノだ。決して、君のお父さんのモノではない」

そう、シャルルの人生はシャルル自身のモノであつて、シャルルの父が好き勝手して良いモノではない。自分以外の人間の人生を、親だからと言って勝手な事で狂わせて良いモノではないのだ。

「あなたのお父様の事は関係ありません。貴女は如何したいのですか？ この学園に来て、まだ一日とは言え、キラや一夏さんとお友達になり、もう離れたくないなんて、思つてなどおりませんわよね？」

「それは、そうだけど・・・でもお！」

「シャルル、IS学園特記事項にはこう書かれてるよ。“本学園における生徒は、在学中においてありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない”って、つまりこの学園にいる間はシャルルの父親であっても、国に強制送還なんて出来ないんだ」

そう、IS学園に在籍している限り、シャルルはフランスに強制送還される事は無い。もしも強引にやろうモノならフランス、デュノア社は世界から弾圧を受ける事になるのだ。

「ですから、シャルルさんはここに居ていいのですわ。卒業までに、貴女のこれからの事を考えれば宜しいのですから」

「・・・僕は、ここに居て、良いの？」

「うん、当然だよ。言っただでしょ？ 君の人生は、君だけのモノだつて。だから、君のやりたい様にやれば良いんだ。誰に言われたからじゃない、君自身の意思で」

気が付けば、シャルルは涙を流していた。

シャルルの人生はシャルル自身のモノ、そんな事、今まで母親以外に言われた事が無く、母が死んで父に引き取られてからは泥棒猫の娘と呼ばれ罵倒される毎日、父からは愛情を受けられず道具の様な扱い、それが全てだったシャルルに温かい言葉を投げ掛けてくれる二人、そんな存在は初めてなのだ。

「僕、ここに居たい・・・キラや一夏と、友達になれたのに、離れたくない！」

「なら、ここに居たら良い。僕もラクスも、君がここに居る事を否定しないし、君自身の意思で決めた事を、無下にしないよ」

キラとラクスの優しい言葉、眼差し、その全てがシャルルの胸を暖め、その全てを占めていった。

「あのねキラ、クラインさん」

「あら、私ももうシャルルさんのお友達なのですから、ラクスで宜しいですわ」

「あ、じゃ、じゃあラクス・・・その、僕が何で男の子の振りをして来たのか、話すよ」

「良いの？」

「うん、二人には、知っていて欲しい」

シャルル・・・シャルロットが名前と性別を偽ってIS学園に来た理由、それは簡単に言えばスパイ活動の為だ。

世界初のISを操縦出来る男であるキラと一夏、その二人のISのデータを取って報告する為と、もう一つはデュノア社の広告塔となる為。

「そういえばデュノア社っていうかフランスって未だに第三世代の開発が進んでないんだっけ？」

「そう、確かにラファール・リヴァイヴが世界第三位のシェアを誇っている、世界は今や第三世代の開発に進んで、イギリス、ドイツ、アメリカ、イスラエル、日本、中国、ロシア、イタリア、これだけの国が既に第三世代の試作機の開発に成功している」

「でも、フランスは未だに第二世代止まりですから、フランスのIS開発予算が国際IS委員会から減らされる。その影響で、このままだとデュノア社はIS開発権限を国から剥奪される可能性があるのですわね？」

そういう事だ。だからデュノア社はシャルロットをシャルルと偽り、世界で三人目の男性IS操縦者としてIS学園へ送り込んだ。

広告塔として送り込み、それと同時にシャルロットには一夏の白式、キラのストライクフリーダムデータを盗ませようとした。そ

うすれば第三世代の開発も大きく進むから・・・最悪の手段ではあるのだが、確実な方法だろう。

「でも、もう僕はそんな事をしなくても良いんだよね？ だって、僕はそんな事、したくないんだもん。だから、僕はしたくない事なんてしないで、友達と一緒に学園生活を楽しむよ！」

「僕も、友達だからね。シャルルと、ううん、シャルロットと、これからも仲良くしたい」

「私もですわ。お友達ですもの」

シャルル・デュノアとしてではなく、シャルロット・デュノアとしての初めての友達になったキラとラクス。シャルロットも、シャルロットとしての初めての友を喜び、そして何より居場所と、生きる意味を教えてくれた二人に多大な感謝の気持ちを持った。

「これからも宜しくね、シャルロット」

「宜しく願いますわね、シャルロットさん」

「うん！ これからも、よろしく！！ キラ！ ラクス！」

第十四話 「デュノア社の娘」(後書き)

キラとラクス、そしてシャル、実はこの先…。

セツシーが空気になりかけてる気がするwwまあ、勝てない勝負な
んだけどね。

第十五話 「ドイツの黒い兎」 (前書き)

—夏の地獄は始まったばかりWW

第十五話 「ドイツの黒い兎」

IS〈インフィニット・ストラトス〉
自由の戦士と永遠の歌姫

第十五話

「ドイツの黒い兎」

シャルルが女だという事がキラとラクスにバレて、改めてシャルロットとして二人と友人になった日の翌日、各生徒の練習時間を利用してキラのお馴染みメンバーに鈴音とシャルロットを加えた7人は他の生徒が打鉄で素振りをしている所から少し離れて一夏の訓練に時間を割いていた。

「一夏の白式は高機動近接攻撃特化型だから、一番有効な戦法はヒットアンドアウェイになるんだ。通常、その方法としては瞬間加速イクニッションブーストを多様しながら攪乱加速テンベストブーストを併用したものが一般的なんだけど」

「一夏さんの場合、これは当て嵌まりませんわ。エネルギー消費率が高いので、瞬間加速イクニッションブーストの多用は一撃必殺であり、トドメとして使う零落白夜の使用を不可能にしてしまう可能性が出てきます」

「ふんふん」

基本的に、教師役は白式の事を熟知しているキラとラクスが行い、それを一夏が聞く。他のメンバーは一夏と同じように聞きながら、訓練の際の対戦相手として一夏の戦い易い方法や戦い難い方法を使って戦える様にしていく。

「なので、一夏は基本的に一試合で使える瞬間加速イクニッションブーストの数は3回が限界、それも被弾無しの時に限るけど、被弾したら数は減るし、あま

り酷いと一試合に一度も使えなくなる」

「攪乱加速は一試合に一度か二度が限界ですわね。余り使いすぎると相手に見抜かれてしまいます」

「成る程な、便利だからこそ使いすぎに注意って事か」

イグニッションブースチンベストブースト

「瞬時加速と攪乱加速の使用制限をした状態でのヒットアンドアウェイ、それを行うには如何するのか、簡単な話だが、実際にやってみると難しい方法でもある。」

「一夏にはこれからも瞬時状況把握能力を高めてもらうよ、それと飛行速度の上昇や三次元機動の習得、戦闘視野の拡大、分割思考を最低でも一度に3つは出来る様になってもらわないといけない」

「うわぁ・・・多すぎる。キラ達も出来るのか？ これ」

「僕は出来るよ。分割思考も調子の良い時で最高10以上くらいかな？」

キラは元の世界でもMSを操縦して戦闘をしながらOSの書き換えをしたり状況判断をしたりドラゴン操作など、一つの思考では絶対に不可能な事をしてきたのだ。だからこそ分割思考は多いし、他の事もスーパーコーディネーターである以上、習得は簡単だった。

「私も凡そは出来ますし、分割思考は最高でも4つですわね！」

セシリアも流石はエリート、これくらいは出来て当たり前だろう。鈴音もセシリアとほぼ同じで、シャルロットは分割思考が5つ、箒は2つが限界だった。

「分割思考は鍛えればいくらでも増やせるから、頑張ってね」

「まじかよぉー!!」

一夏の悲痛な叫びが響く中、突然クラスメート達が騒がしくなつた。

その視線の先を見てみると、ビットの出口であるカタパルトの上に立つ一機の黒いIS、ドイツ第三世代ISシュヴァルツェア・レーゲンがそこにいたのだ。

「あ、あれは!？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

「何! あいつなの!? 一夏を引っ叩いたっていうドイツの代表候補生って」

ラウラはアリーナにいるクラスメート達を一通り眺めると、キラ達と共にいる一夏の姿を発見して、挑発的な笑みを浮かべる。

「織斑一夏、貴様も専用機持ちだそうだな、ならば話が早い。私と戦え!」

「いやだ、理由がねえよ」

「貴様には無くても、私にはある」

「今でなくても良いだろ? もうすぐクラスリーグマッチなんだから、その時で」

「……ならば」

何の警告も無しに右肩のレールカノン砲を一夏に向けて発射してきた。

だが、一夏の隣でストライクフリーダムを展開していたキラが前に出て、ビームシールドを展開すると砲弾を弾いて落とす事で防ぐ事が出来た。

「随分な挨拶だよな、ドイツではこういうのが流行ってるの?」

「キラ・ヤマト……貴様は教官から世界最強とまで評価されてい

るらしいな、ならば貴様も、私の敵だ！」

もう一発レールカノン砲を放ってきたが、キラは音速で飛んでくる砲弾をビームライフルで打ち落とし、ビームライフルを撃った瞬間には既にドラグーンをパージしてシユヴァルツエア・レーゲンを包囲していた。

「っ！ 馬鹿な・・・、この私が一瞬で包囲されただと？」

「これが一斉射をしたら、君のISの特殊武装でも防ぐのは不可能・・・チエックメイトだよ」

ラウラとしてはキラがレールカノン砲を防ぐなり避けるなりしてその隙を狙おうと思っていたのだろうが、まさか音速を超えるスピードで飛来する砲弾をビームライフルで打ち落とすとは思ってもなかった。

それ故に生じた隙は、キラ相手に致命的で、あつと言う間にドラグーンに包囲されるのを許してしまうのだ。

「相手と自分の力量差を測れないなら、君はまだまだ2流、ひよっこだよ。もう少し自分の腕を磨いて出直してくる事だね」

ドラグーンを戻してストライクフリーダムを解除した時、丁度騒ぎを聞きつけた教員の放送が入った。

『その生徒！ 何をやっている！！』

「・・・っ、ふん、今日の所は引いてやる」

興が削がれたのか、それともキラにあっさりと敗北した事を屈辱に思ったのか、ISを解除したラウラはビットの中に戻って行った。それを見送るクラスメイト達とキラ達は暫く呆然としていたが、

そろそろ終わりの時間が近づいてきたので、後片付けをしてアリーナを出る。

「流石はキラさんですわ！ 音速を超える砲弾を撃ち落とすなんて！」

「うん、凄いよキラ！ 僕でも音速を超える砲弾は防御するので精一杯なのに、撃ち落とすちゃうんだもん」

セシリアとシャルロットに挟まれながら賞賛を受けるキラは何処か引きつった笑みを浮かべ、その後ろで箒の隣を歩くラクスは、あらあらと珍しいキラの様子に愉快そうな笑みを浮かべる。

「ねえキラ、アンタのIS、ストライクフリーダムだっけ？ それって篠ノ之博士が作ったのよね？」

「うん、そうなるね」

鈴音の質問に一応は肯定しておいた。

「でもさ、ストライクフリーダムって第三世代って感じしないのよねえ、ずっと高性能じゃない」

「そういえば、そうだ。姉さんが作ったからってだけでは説明が……」

「簡単ですわよ。ストライクフリーダムは第五世代型のISですわ」
『第五世代！？』

皆、一様に驚く。未だに世界中では第三世代の実験が始まり、試作機の試験運用が始まったばかりだというのに、一つ飛び越えて第五世代なんてものが出来ていたなんて思わなかったのだろう。

「因みに、第四世代もあるよ。一夏の白式、それは第四世代のIS

だから」

「白式が!？」

「白式の持つ雪片・式型は第四世代の装備である展開装甲の技術を使って作られた展開装甲の試作型武装、白式は第三世代の機体に第四世代の武装を持たせたISなんだ」

一夏は改めて腕に巻きつけているガントレットを眺めた。まさか自分の使っているISがそんな凄い物だったとは思わなかったのだ。

「し、しかし何故キラがそんな事を知っているのだ？」

「だって、白式も東さんが作ったんだよ？ 開発には僕も携わっていたし」

「うそ・・・キラさん、ISの開発も出来るんですの？」

「凄すぎるよ・・・」

考えてみれば、このメンバーはある意味凄いと言える。

第五世代のストライクフリーダムに乗るキラ、第四世代の白式に乗る一夏、第三世代のブルーティアーズと甲龍にはセシリアと鈴音、第二世代ラファール・リヴァイヴ・カスタム?のシャルロット、更には専用機を持っていないがISランクAを出したラクスに篠ノ之東の妹である篤、本当に凄いメンバーだ。

「何かさ、あたし達全員で世界落とせそうよね」

「っていつかキラ一人で出来そうなのがするぜ」

「いや、無理だよ。個人では国には勝てないから」

とりあえず失礼な事を言った一夏には明日の訓練を5倍にするとして、それぞれシャワーなり何なりで分かれる事にした。

ただ、キラとラクスは自分達の部屋でシャワーを浴びるので、シャルロットと一緒に先に帰る事にした。シャルロットはキラとラク

スに女性だとバレた日からシャワーを浴びる時はキラ達の部屋で浴びる様にしているのだ。

「じゃあ、僕、先にシャワー借りるね？」

「あら、折角ですし一緒にしませんか？」

「え、ラクスと？ うん、良いよ」

「じゃあ、僕はちょっと調べ物があるから、上がったら教えてね」

部屋に着いて、シャルロットはラクスと一緒にシャワー室に入った。

キラはそれを見届けてからパソコンの前に座り、いつものハッキングを始めた。調べる内容は東と共に協力しながらやっている亡国機業の調査だ。

「第二回モンドグロツソの時の一夏誘拐事件、犯人は亡国機業だって話だった…、だけど何故一夏を誘拐したんだろう？ その当時はまだ小学生だった一夏にIS適正があるなんて判らなかつたのに、織斑先生の二連覇阻止にはちよつと理由が薄いし」

過去の亡国機業がやったと思われる事件を調べても、その犯行動機は曖昧で、決定的な目的に繋がっていない。

「手遅れになる前に、少しでも情報が欲しいけど」

本当に手遅れになる前に、何とかしなければならぬ。

その時、キラの携帯に電話が掛かってきた。開いてみると相手は東だったので、急いで通話ボタンを押す。

『はろはろ〜、キー君！ 皆のアイドル、東さんだよ〜！』

「こんな時間に如何したんですか？」

「ちよ〜つとキー君の耳に入れて欲しい情報があったんだよねえ」
「情報？」

「イギリスの事なんだけど〜」

イギリス、セシリアの出身国だが、そこで何かあったのだろうか。

「イギリスで開発している第三世代型のIS、キー君も知ってるでしょ？」

「セシリアの使っているブルーティーズですね。確か2号機があるみたいですけど」

「そうそう！ その2号機、サイレント・ゼフィルスなんだけどね？ 盗まれたみたいなんだよねえ」

「盗まれた!？」

更に、アメリカの第二世代型のISアラクネも盗まれたらしい。

「犯人は亡国機業の人間みたいなんだけど、イギリスの方でサイレント・ゼフィルスを盗んだと思われる人間が問題でねえ」

「問題、とは・・・？」

「監視カメラに映像が残ってたんだけど、イギリスでは解析出来なかったみたいで、ちよこつとハッキングしてその画像を入手してみました〜！」

「・・・それで、解析したんですよね？」

「まあね、それで解析して犯人の顔まで判明したんだけど、流石に東さんも驚いたよお」

今からキー君のパソコンに送るね〜、と言われたので、メール受信画面を開くと丁度、東からのメールを受信した所だった。

「・・・これはっ!？」

『やっぱりキー君も気付くよね、そこに映ってる顔』

「織斑、先生・・・？ でも年齢が」

『今のいつくんより年下かなあ？ でも確かに顔はちーちゃんなんだよ』

その画像に映っていたのは、一夏より年下であろう少女の姿だ。しかし、その顔は間違いなく千冬の顔で、今の千冬より若干だが幼くした様な感じだった。

『可能性としては・・・』

「クローン、ですね」

『まさか東さんもクローンを出してくるとは思わなかったなあ。やってくれるよ、ちーちゃんの顔で犯罪を犯させるなんて』

実に忌々しいという口調で吐き捨てた東だが、その気持ちはキラにも理解できた。キラから見ても許せるものではない。

「もし、学園を襲撃してきたら」

『生け捕りかなあ？ その辺はキー君に任せるよ！』

「はい」

また何か判ったら電話すると言って東は電話を切ったので、携帯を机の上に置くと送られて来た画像をもう一度確認してみる事にした。

犯人の少女の顔を拡大して修正すると、間違いなくそこには千冬の顔が映っているのだ。

「クローン、か・・・」

クローンという言葉で思い出すのは二人の男、キラ自身の手で殺

した仮面の悪鬼ことラウ・ル・クルーゼと、悲しい運命の果てに確かな幸せを得て死んだレイ・ザ・バレルの姿だ。

「この少女も、彼等みたいな悲しい運命を背負っているのだろうか」

キラの眩きは、誰にも聞かれる事なく、部屋の空気に溶け込んで、静かに消えていくのだった。

第十五話 「ドイツの黒い兎」(後書き)

さて、どうなる次回！ それは作者も判らないWWW

第十六話 「タッグマッチ」(前書き)

タッグペアが意外な展開に。

第十六話 「タッグマッチ」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十六話

「タッグマッチ」

リーグマッチが近づいてきた。

現在、一年の間では何故かリーグマッチで優勝したら一夏と付き合えるという噂が広まっており、女子達の視線が休み無く一夏に集中している。

「大変だね一夏」

「キラは良いよなあ、ラクスと付き合ってるから変な噂を流される事も無いし」

既にキラとラクスが付き合っているという事は学園中に広まっており、昨日はシャルロットがその事実を確認に来て、事実だと知ると意気消沈していた。

「そう言えば、一夏はリーグマッチのペアは決めた？」

「ペア？ いや、ただだけど・・・そっか、ペアを決めないとなあ」

「僕はもうシャルルと組む事になってるから、一夏も早く決めた方が良いよ？」

「あゝ・・・」

リーグマッチがペアでの出場と判って、キラは直ぐにラクスと相談すると、シャルロットと組む事になったのだ。

今のところシャルロットが女だと知っているのはキラとラクスだけなので、万が一の時の事を考えてキラが組む事になったのだが、ISオペレーター志望のラクスは出場しないと知った女子達が随分と残念そうにしていた。

「鈴か箒かセシリアだな・・・」

「あら、私がどうかしまして？」

「あ、セシリア・・・まだ一夏のペアが決まってなくてね」

「あらまあ」

如何したものかと思っていたのだが、セシリアもまだ決まっていないみたいなので、これは丁度良いかもしれない。

「良かったらセシリア、一夏と組んであげて？」

「私のですの？」

「前の決闘から、それなりに経ったし、今のセシリアの実力を試合で見たいし・・・良ければ一夏と組んで、そして僕と試合で戦おう」

「・・・わかりましたわ！一夏さん！私が組んで差し上げますから、何が何でもキラさんと戦うまで勝ち進みますわよ!？」

「うへえ・・・」

俄然、やる気を出したセシリアに項垂れる一夏だが、セシリアと一夏のコンビは中々良いコンビだ。近接型の一夏と、後方射撃型のセシリアならペアとしての相性は良い。

これが箒や鈴音だと、箒の場合は完全に一夏と同じ近接戦闘型、ペアとして組むには些かバランスが悪い。鈴音も中距離は出来るが、どうしても彼女も近接戦をメインにしているので、やはり一夏のペアではバランスは悪い方だ。

「となると、一夏には射撃武器の特性も学んでもらわないといけなくなるかな・・・よし、今日の放課後の訓練は一夏に僕やシャルル、セシリアの射撃武器を使って実際に射撃武器の特性を味わってもらおうかな」

「射撃武器か・・・面白そうだな」

一夏もゲームセンターで射撃ゲームをした経験がある。何となくだがISでの射撃にも憧れが無かったとは言わない。

「じゃあ、放課後を楽しみにしててね」

「おう！」

今までの地獄の訓練と比べれば楽しい訓練になりそうなので、何処か余裕のある笑みを浮かべた一夏だったが、この時はまだ知らなかった。射撃のプロフェッショナルであるキラが訓練をする以上、楽な訓練になる筈が無いという事を。

放課後になり、使用許可を貰った第三アリーナに来たキラ達一向は早速だが一夏の射撃武器の勉強会になった。

「まず、射撃武器なんだけど、これは大まかに分けて三種類。第二世代が主に使う実弾兵器、それとセシリアが使うレーザー兵器、そして僕が使うビーム兵器、これが主な種類になるんだ」

「ほうほう、ビーム兵器ってまだどこも実用化してないよな？」

「そうだね、今のところはストライクフリーダムだけだよ」

だからこそ、ストライクフリーダムのビーム技術を欲する企業や国が多いのだが。

「じゃあ、まずはシャルル、ライフルを一夏に」
「わかった」

キラに言われてラファール・リヴァイヴ・カスタム？を展開していたシャルロットはライフルを一丁取り出して白式を展開している一夏に渡した。

「あれ？でも他のISの武装って使えるのか？」

「あ、うん大丈夫だよ。このライフルは持ち主である僕がアンロックしてあるから、登録している人なら誰でも使える様にしてあるから」

「そっか、なら！」

早速ライフルを受け取った一夏はキラに指導されながら構えを取り、射撃用のシューティングターゲットに銃口を向ける。

「っ！」

引き金を絞り、発射された弾丸は的の中心から少し離れた所を撃ち抜き、次々と現れるターゲットを一夏は同じ要領で撃ち、トータルを出す。

「うん、実弾兵器は光学兵器よりも反動が大きいから、初めてならこんなものかな」

スコアを確認したキラは次にセシリアに指示を出して、スターライトmk？を一夏に持たせた。

「今度はレーザー兵器だから、実弾より反動は少ないけど、だからこそ余計に集中しないと命中しなくなるから」

「おっけー、つとー！」

ライフルをシャルロットに返して、今度はセシリアから受け取ったスターライトmk?を構え、新たに現れたターゲットに向けて撃つ。

「うわ、反動少なくて逆に撃った気がしないな・・・」

「ビームはこれより更に反動が無いからね」

「まじかよ・・・」

スターライトmk?での射撃結果は実弾ライフルより少し下程度だった。反動が無い分、扱いやすいと思われ易い光学兵器だが、その実、実弾兵器よりも難しいのだ。それが結果として出たので、一夏もこれで理解出来ただろう。

「じゃあ、最後は僕のビームライフルね。片方を貸してあげるから撃ってみて」

高エネルギービームライフルを片方受け取った一夏はもう一度ターゲットに向けて構え、そして撃った。

「これ、本気で反動がねえのな・・・レーザーより撃ちにくい」

「撃った感触が感じ難いでしょ？ まあ、その辺は如何でもいいんだけど、如何？ 銃を撃ってみた感想は」

「ああ、まあそうだな・・・とりあえず無茶苦茶速いってのが感想かな」

確かに、そうだろう。実弾、光学、どちらでも銃というのは速い。そしてそれを避けるには撃たれてから避けていては到底回避不可能なのだ。

「こりゃあれだ。相手が引き金を引く瞬間に動かないと避けられないな」

「一夏、それ正解」

「へ？ マジ？」

「うん、銃を避ける簡単な方法は相手の銃口を見て、引き金が引かれる瞬間に避けるのが一番なんだ。勿論、実戦ではそんな事をしてる暇なんて無いから、実戦ではどうやって避けるのか、防御するのか、それを教えていくよ」

この後、一夏は只管キラとセシリア、シャルロットの的にされ、兎に角、回避や防御を徹底的に鍛え上げられる事になるのだった。

「や、やっぱり鬼だ……」

翌朝、タッグマッチの組み合わせとトーナメント組み合わせが発表された。

注目の第一回戦第一試合はキラ、シャルロット組VS鈴音、二組の女子の試合で、第二試合は一夏、セシリア組VSラウラ、幕組の試合となった。

「へえ、鈴となんだ」

「頑張ろう！ キラ」

キラとシャルロットはやる気充分、お互いにオールラウンダーのペアながら、優勝候補とも言えるペアは自信満々だ。

一夏とセシリアのペアは幕とラウラが相手という事で、何か因縁めいたものを感じている。

「一夏さん、篤さんは私がお相手いたします。あなたはボーデヴィツヒさんと存分に戦いなさいませ」

「良いのか？」

「あの方はキラさんも侮辱したのですから、本当でしたら私が戦いたいところですが、あなたは織斑先生の事もありますし、御自分で決着を着けたいでしょう？」

「ああ、ありがとう」

セシリアはキラをも侮辱した態度を見せるラウラに引導を渡してやりたい所だが、一夏も大きな因縁があるみたいなので、ここは手柄を一夏に譲る事にした。

勿論、一夏一人だと勝てる相手でも無いので、篤をさっさと倒してセシリア自身も一夏の手助けをするつもりだ。その為に今日までキラ指導の下、一夏との連携訓練もしてきたのだから。

「必ず勝って、二回戦のキラさんとシャルルさんとの試合まで進みますわよ！」

「おう！ 必ずセシリアをキラと戦わせてやるぜ！！」
「期待してますわ！」

一夏がラウラと戦うのにセシリアが協力して、セシリアがキラと戦うのに一夏が協力する。利害が一致しているこの二人は、中々良いコンビだった。

そして、遂にリーグマッチ開催の日になった。

この日の為に各生徒は訓練をして、己が腕を磨いてきた。その成果が今日、ここで試される事になる。

既に一回戦第一試合のキラとシャルロットはビットに待機しており、対戦相手の情報を確認していた。

「鈴のデータはクラス代表対抗戦での試合があるから問題無いね。衝撃砲に注意していれば後は問題ない」

「ペアの子はラファール・リヴァイヴみたい。リヴァイヴの性能は僕が熟知しているから、こっちは僕が戦うね」

「うん、それで良いよ。僕は鈴と戦う」

そろそろ時間だ。キラとシャルロットはISを展開してキラから順番にカタパルトに接続する。

「じゃあ、先に」

「うん」

『カタパルトオンライン、進路クリアー、X20Aストライクフリーダム、発進どうぞ！』

管制室にいるラクス声を聞き、キラは両足に力を入れ、発進する。

「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きます！！」

発進したキラに続き、シャルロットもカタパルトに接続すると、先ほどのキラが発進するときに言っていた事を思い出した。

「僕も、言ってみようかな・・・」

『続いてラファール・リヴァイヴ・カスタム？、発進どうぞ！』

「シャルル・デュノア、ラファール・リヴァイヴ・カスタム?! 行きます!!」

リーグマッチの幕開け、果たしてどのような結果が待ち受けているのか、それはまだ、誰にも判らない。

第十六話 「タツゲマツチ」 (後書き)

セツシー、好きな人のペアになれない運命WW

第十七話 「第一試合、射撃王」 (前書き)

鈴、頑張ったんだけど…。

第十七話 「第一試合、射撃王」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第十七話

「第一試合、射撃王」

アリーナではキラのストライクフリーダムとシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？、鈴音の甲龍、鈴音のパートナーのラファール・リヴァイヴが向かい合っていた。

リーグマッチ一回戦第一試合から早速激戦を予想させるメンバーだ。

「キラ！ 言うておくけど手加減なんてしないわ！！ あんたが強いのはよく解ってるし、あたしがあんた相手に何処まで通用するか試させてもらっから！」

「わかった。僕も全力で相手をするよ」

試合開始のコールと共に全機が動いた。

シャルロットはラファール・リヴァイヴへ向けて両手に展開したライフルを乱射しながら鈴音と引き離し、キラと鈴音は互いにぶつかり合った。

キラのビームサーベルと鈴音の双天牙月が時にぶつかり、時に避けられるが、状況は鈴音が不利だ。キラの高速機動に鈴音は目では何とか追えるものの、身体の反応、思考速度が追い付いていかない。

「ああん、もう！！ なんて速さなのよキラは！！」

衝撃砲を放つても当たらない、切りかかろうと近づいても直ぐ離されるどころか、まず追いつけない。

「っていうか、あんな機動していてキラって何で意識を保っていられるのかしら？　いくらISがGを殺していても限界はあるのに」

ISの飛行時、基本的に重力制御によって体に掛かるGは殺されているので、基本的に操縦者が高機動をしてもGを感じない。

しかし、それにも限界はあって、今のキラの様な超高速機動をしていたらGを殺しきれない、相当な大きさのGがキラの全身を襲っている筈なのだ。

「でもキラの機動を見る限りじゃ、Gがキツイって感じじゃないし・・・」

そもそも、そんな機動をしながら戦況を瞬時判断して、ドラグーンを操作しながら自身も攻撃をするなんて普通ではない。

「って、今はそんな事を考えてる場合じゃないわね！」

衝撃砲をもう一度、今度は連射しながら放ち、キラと戦う為に会得した瞬間加速イグニッションブーストを使いながら接近する。

キラは接近してきた鈴音を操作するドラグーンで迎え撃ちながら両手のビームライフルを上空へ放り投げた。

「何をやってんのか知らないけど、チャンス！！」

試合中なのに武器を放り投げ、ビームサーベルを抜こうとしないのを見てチャンスと思ったのか、被弾を覚悟でドラグーンが放つビームの嵐の中を突っ切り、双天牙月を上段から振り下ろした鈴音だ

つたが、驚くべき光景が目に見えび込んできた。

キラは双天牙月を白刃取りで受け止め、腰のレール砲を至近距離から放って甲龍に大ダメージを与えたのだ。

「~~~~~っ!? 絶対防御が無けりゃ、死んでたっつて言いたい!? あんたは!」

確かに、絶対防御が無ければ今の攻撃、鈴音は死んでいた。

鈴音が衝撃で離れた瞬間、放り投げて落ちてきたビームライフルをキャッチしたキラはフルオートモードでビームを連射する。

レール砲の一撃でバランスを崩していた鈴音は、ビームを逃げ切る事が出来ずに被弾して、シールドエネルギーが残り40まで減らされてしまった。

「くうっ! あたし、まだキラに一撃も与えてないのに!」

せめてもの抵抗として衝撃砲を最大出力で放った鈴音だったが、そこには既にキラは居らず。背後から気配を感じた鈴音は咄嗟に双天牙月の刃ごと振り返って、振り返り様に切ろうとしたのだが・・・。

「うそ・・・」

確かにキラは背後に居た。だが、双天牙月がストライクフリーダムの装甲に接触しようとした瞬間、ストライクフリーダムの姿がぶれて、三体に分身したかの様な、嵐の様な機動で回避して、その三体からのビームサーベルによる同時攻撃で甲龍のシールドエネルギーは0になるのだった。

「テンベストブースト攪乱加速・・・、何であたしと同じ一年のキラがそんな高等加速

技術を使えるのよ」

キラが今使った分身を出す加速、それは一夏にも教えた加速技術の一つであり、IS学園でも二年生になれば教えるが、実際に使える人間はそんなに多くない高等技術、テンベストブースト攪乱加速だ。

『試合終了、キラ・シャルルペアの勝利』

いつの間にか、シャルロットが2組のラファール・リヴァイヴを撃破していた。シャルロットに被弾らしい被弾は一切無く、キラとシャルロットはお互いに被弾0で一回戦を勝ち進んだペアという事になったのだ。

実質、今大会の優勝候補筆頭に早速名が挙げられるような快挙であり、他の出場生徒、各国の来賓、学園教師、誰もが注目してる。

「ほほう、デュノアの娘のペアである生徒・・・篠ノ之博士が発表した男だったな。是非ともフランスに招き、我が国の力になってもらいたいものだ。ストライクフリーダムというISと共にな」

タッグマッチを見に着ていた主賓の一人、フランス政府の役人がシャルロットとキラの試合を見て、シャルロットと組んでいるキラに興味を示した。

キラの実力もそうだが、キラの乗るストライクフリーダムにも^{ヴァリアブルフェイスシフト}ドラグーンの存在、IS初のビーム兵器、VPS装甲、そして脅威の超高速機動、何もかもが現行第三世代ISを上回る高性能機なのだ。

「彼がフランスに来てくれれば、フランスはIS開発面で他の国を圧倒的に上回る事が出来る。何が何でも彼をフランス所属にしなければならぬな」

フランスの策略は始まる。しかし、それが自身の国の未来を暗くする要因になる等とは、この時、彼もフランス政府も、そして国際ＩＳ委員会を含む全ての世界も、まだ知る事は無かった。

試合を終えたキラとシャルロットはピットに戻って来て先ほどの試合の反省会を始めた。

次の一夏とセシリアが出る第二試合まで少し時間があるので、これくらいの時間的余裕はまだある。

「キラは流石だね。中国代表候補生の鈴に余裕で勝っちゃったもん」
「シャルロットも流石だよ。ラファール・リヴァイヴの性能は父親の会社で作っただけはあるって完全に把握している」

「僕の機体も元々はリヴァイヴをカスタムしたものだからね」

何より、シャルロットはフランスの代表候補生だ。それだけの実力もあるので、リヴァイヴを使う、ただの生徒に負ける筈もない。

「でも、リヴァイヴをカスタムした機体の性能を正確に把握して、自分の長所でもって相手の弱点を的確に突けるのはシャルロットの才能だと思うよ」

「そ、そうかなあ？ えへへ」

キラの賞賛に頬を染めて喜ぶシャルロットだが、実際キラから見たシャルロットの実力は決して低くない。

たとえカスタム化していても、第二世代に違いないラファール・リヴァイヴ・カスタム？を扱う彼女の實力は相手が第三世代機であるうとも引けを取らないであろうものだ。

もしもシャルロットが第三世代機に乗った場合、どれ程の實力を

発揮するのかを想像すると、薄ら寒いモノを感じる。

「ねえキラ、実は僕ね、イグニッションブースト 瞬時加速を覚えたんだよ」

「いつの間に？」

「さっきの試合で、イグニッションブースト 鈴の瞬時加速を見て、やってみたんだあ。一夏やキラがやってるのは何度か見てたからやり方自体は何となく理解してたし」

イグニッションブースト 瞬時加速は代表候補生なら大体は教える国が多いが、実際の話、出来る者と出来ない者もいる。

元々、加速系が得意ではない機体の者や、加速が苦手な者もいるので、教えてもらっても出来ないという例があるのだ。セシリアはその例の一つだろう、彼女はイギリスの代表候補生だがイグニッションブースト 瞬時加速の原理は理解していても実行は出来ない。

シャルロットの場合、元々はフランスでISのテストパイロットだったので、代表候補生になったのはつい最近の話、イグニッションブースト まだ瞬時加速は教えられていないのだが、それを短期間で覚え、実行出来る様になるなどは、才能の成せる業なのだろう。

「じゃあ、次の相手は一夏とセシリアのペアか、それともラウラ・ボーデヴィツヒと篝のペアとの試合になる。充分に戦力を分析しておかないとね」

「うん！ 僕も手伝うよ！！」

どちらも、油断して良い相手ではない。篝とラウラのペアも、一夏とセシリアのペアも、どちらも前衛と後衛がそろっているので、戦術としては向こうの方が立てやすいし戦いやすいのだ。

「でも、だからこそ攻略もしやすいんだけどね」

キラは前衛と後衛がハツキリとした敵軍と戦った経験も幾度とある。ストライクに乗っていた頃から一人で前衛のデュエル、後衛のバスター、中距離のイージス、強襲型のブリッツと、正に完璧な布陣と戦っていたのだ、そういった相手の攻略法など熟知していても不思議ではない。

「まあ、次の試合を見て、色々と考えよう？」

「うん！　じゃあ観客席に行こうよ！」

ラクスは管制をしていなければならないので、誘う事も出来ない。キラとシャルロットは二人で観客席に向かい、丁度空いていた席に座ると、第二試合が始まるうとしているところだった。

「さあ、ドイツ軍少佐とドイツ最新鋭機を相手に、何処まで戦えるか・・・見せて貰うよ、一夏」

今正に、一夏とラウラの因縁の対決が、始まるうとしていた。

白式とブルーティアーズ、シュヴァルツエア・レーゲン、打鉄の四機がアリーナ中央の空中に静止して、それぞれ武器を構え合っている。

『一回戦第二試合、織斑一夏、セシリア・オルコット対ラウラ・ポードヴィツヒ、篠ノ之箒の試合を始めます』

モニターに四人の顔写真が映し出され、それぞれの機体の名前が写真の下に表示された。

『試合、開始！』

第十七話 「第一試合、射撃王」(後書き)

今回は原作より強くなった一夏とセシリアのペアVS原作通りのウラと原作より若干強くなった箒のペアの試合です。

第十八話 「第二試合、最強の後継」(前書き)

今回は一夏オンリーです。原作よりも強くなった一夏が如何に戦うのか!!

第十八話 「第二試合、最強の後継」

IS〈インフィニット・ストラトス〉
自由の戦士と永遠の歌姫

第十八話

「第二試合、最強の後継」

一回戦第二試合、一夏とセシリアのコンビVS箒とラウラのコンビの対決。機体は白式、ブルーティアーズ、シュヴァルツエア・レーゲン、打鉄と、第一試合に勝るとも劣らない豪華な面々となった。

「セシリア、作戦通りラウラは俺が足止めをしておく。その間に箒を倒してくれ」

「判ってますわ。箒さんを倒すまで持ちこたえてくださいませね？」

「ああ！」

ラウラの機体、ドイツの第三世代型ISシュヴァルツエア・レーゲンのスペックはキラから聞いている。AICは確かに前までの一夏にとっては厄介な武装だろうが、今の彼にはAICに対抗する手段があるのだ。

「私も、キラさんとの訓練のお蔭でブルーティアーズを二機までなら動かしながら機動や攻撃が出来る様になりましたから、苦戦はしませんわよ！」

セシリアも弱点を克服してきているのだから、苦戦はしないだろう。

【試合、開始】

試合が始まった。一夏は現在出せる最大速度でラウラに突っ込み、セシリアはブルーティアーズを開放して箒を包囲しながらレーザーを発射する。

見事、二手に分かれた試合、早速だが展開は動きだした。四方向からのレーザーが箒の動きを制限して、彼女がセシリアに接近しようにも、その隙が見つからない。

そうこうしている内に被弾が増え、シールドエネルギーは一気にレッドゾーンに到達してしまったのだ。

「箒さん、貴女の剣の腕は確かに凄いですわ。それに関しては素直に高評価いたします。もしも貴女が専用機持ちでしたら脅威足りえたのかもしれませんが・・・学園支給の量産機では限界がありますわ!!」

箒の腕は決して悪くない。確かにISランクこそだが、持ち前の剣道で鍛えた剣の腕は確かなもので、剣に限定してしまえば箒は一夏より強いのだ。

しかし、これは生身の戦いではない。機体の性能差は腕でカバーする事も出来るだろうが、残念ながら箒にそこまでの力は無い。

「さあ、踊りなさい！ セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる、真の円舞曲^{ワルツ}で!!」

一夏とラウラの戦いも白熱していた。

方や、雪片式型一本で近接戦闘を挑む一夏と、AICを基本に様々な武装を使って中距離を保つラウラだが、一見するとラウラが優勢に見えるだろう、しかしラウラ当人の表情は一向に優れない。何

故ならA I Cを使って一夏の動きを止めようとしても、キラから教わったヒットアンドアウェイ戦闘をしている一夏を中々捕らえられずにいたのだ。

確かに一夏の攻撃はラウラに届いていない。だが、ラウラの攻撃も一夏に中らず、近づいては離れを繰り返す彼に困惑している。

「貴様っ！ まともに戦う気は無いのか！？ よくそれで教官の弟だなどと言えるな！！」

「へっ！ そんな俺に攻撃も中てられない癖に何言ってるんだか！」

ならばと、ワイヤーブレードを放ったラウラだったが、そこで一夏が大きく動き出した。

飛来する何本ものワイヤーブレードの間隙を縫うようにイグニッションブースト瞬時加速で飛びながらラウラ目掛けて急降下してくる一夏、今度こそ捕らえらるるばかりにA I Cを一夏が目の前に来た瞬間に展開しようと構えたラウラだったが、一夏が目の前に来たその時、驚くべき光景を目にする。

「なっ！？」

第一試合の時のキラと同じ、白式に乗った一夏がラウラの目の前で3人に分身したのだ。

三人に分身した一夏は三方向から同時に雪片式型を振り、一方向にししか展開出来ないA I Cでは防御は不可能、発動していた零落白夜によって大きくシールドエネルギーを削られてしまう。

「馬鹿な、貴様がデシベトブースト攪乱加速を使うなどとは・・・データには無かったぞ！」

「ああ、公式試合で使ったのはこれが初めてだからな。キラとの地獄の訓練で会得した、現状で俺が使える近接戦の切り札だ」

先の試合でキラは今の一夏と同じ三人に分身したが、キラは更に三人、合計六人に分身出来るが、今の一夏には三人が限界だ。だが、それでも一夏にとっては十分な切り札になりえる。

「A I Cだっけ？ 集中している事と、一人の相手に限定して使えるお前の機体の切り札だったな。攪乱^{テンベスト}加速は充分、天敵だろ？」

確かに、分身されてはどれが本物か判断するのは難しい。A I Cは完全に封じられてしまったも同然で、更には零落白夜を発動してのバリア無効化攻撃というコンボに繋がられたら、ラウラでなくても脅威だ。

「さあて、そつちは終わったみたいだな？」

「ええ、箒さんは向こうでお休み中ですわ」

いつの間に終わったのか、セシリアが一夏の後ろに立っていた。セシリアの後ろを見ると、既に機能停止した打鉄に乗って頂垂れている箒の姿がある。如何やらセシリアに一撃も与えられずに敗北した事を落ち込んでいるのだろう。

「さてと、二対一だぜ。ブルーティアーズを操るセシリアと、攪乱^{テンベスト}加速を使う俺という天敵二人を相手に、まだやる気か？」

「・・・っ！ 調子に乗るな！！」

レールカノンを放ち、ワイヤーブレードをセシリアに発射しながらスラスターを全開にして接近してくるラウラ、両手のプラズマ手刀で一夏に切りかかる。

だが、レールカノンは避けられ、ワイヤーブレードはB T兵器で全て落とされてしまい、プラズマ手刀は一夏の雪片式型で弾かれた。

「っ！ 何故だ・・・何故、貴様がこれほど!!」

「俺はキラに鍛えてもらったんだ。俺が尊敬する千冬姉と同等以上の力を持つ友達からな！ そしてこの剣は千冬姉から受け継いだ大切な剣だ！ だから俺は強くなるうと努力してきた!!」

雪片式型とプラズマ手刀が何度もぶつかると。だが、一夏はキラとの訓練をしている時に一度だけ様子を見に来た千冬の事を思い出した。

あの時、千冬は刀を二本持つてきており、片方を一夏に渡して一つ、技を見せてくれたのだ。その技は、今の一夏なら完璧ではないにしろ、使えないという訳ではない。

「見せてやるぜ！ お前が尊敬して、そして俺も尊敬する千冬姉の技を!!」

雪片式型を抜刀の構えに持ち、上体を低くしながら前のめりになる。その状態でスラスタ^{イグニッションブースト}を全開にして、瞬時加速を使用、一瞬でラウラの目の前に移動した。

「っ!?!」

「くらえ!!」

前のめりになっていた上体を起こしながら振り上げられた雪片式型、上体移動の力も加わった強力な抜刀式斬撃が抑えようとしたラウラのプラズマ手刀を砕きながらシールドエネルギーを大きく削り、追撃の突きで壁際まで吹き飛ばした。

「があっ!?! (馬鹿な、この私が・・・負ける? 負けるのか?)

こんな、極東の平和ボケしたイエローモンキー如きに? 教官の

千冬がモンドグロツソで活躍した最強のIS、暮桜と、その武器である雪片、シュヴァルツエア・レーゲンが形を変えたその姿は、
セカンドシフト二次移行とは違うナニカだ。

「ふざけやがって！ 千冬姉と同じ姿？ 同じ武器だと？ 千冬姉の弟の俺の目の前でそんな真似をするなんて、馬鹿にしてるのかよ！？」

「落ち着きなさいな一夏さん！ 私も何が起きたのかは解りませんが、今の状況はあなたが落ち着かなければならないのですわよ？」
「うっ……ごめん」

セシリアに叱責されて何とか落ち着いた一夏は改めてシュヴァルツエア・レーゲンを見る。その黒い姿は、姉の嘗ての栄光の姿、それが汚されたような気がして、非常にムカつく一夏だが、だからこそ、今日の前にいるソレの存在を許す訳にはいかない。

「セシリア、援護してくれ。今日最後のイグニッションブースト瞬間加速と攪乱加速を使って、零落白夜で一気に決める」
「今の状況を見る限り、そうですね。たった一度のチャンスですが、決めるしかありませんわ！！」

4つのビットを射出して雪片を構えるシュヴァルツエア・レーゲンを包囲するセシリアだが、シュヴァルツエア・レーゲンは瞬間加イグニッションブ速で全てを避け、一気に一夏に近づいてきた。

一夏は近づいてきたソレに合わせて自分も本日最後の瞬間加速イグニッションブを行い、シュヴァルツエア・レーゲンの目の前で攪乱加速と同時デンベストブーストにを零落白夜を発動する。

「これで決めてやる！！」

一夏のシールドエネルギーは残り10、本当に全てを出し切った一撃がシュヴァルツェア・レーゲンを捉えた。

バリアを無効化して本体を直接切り裂き、更に援護としてセシリアのブルーティアーズが四方向からの射撃で切り口を大きくする。その切り口からは意識を失いかけて朦朧としたラウラの姿が見え、一夏は無理やり穴を押し広げるとラウラの身体を確りと掴み、シュヴァルツェア・レーゲンから引きずり出した。

「あ・・・」

引きずり出されたラウラは朦朧とする意識の中、自分を助け出した一夏の姿を確かに視界に収めた。

その真剣な表情、意識を失っていく自分を心配している瞳、何もかもがラウラの冷め切っていた心を温かくする。

「（ああ、これが、教官の言っていた・・・）」

そこでラウラの意識は完全に落ちた。

一夏は自身の腕の中で眠るラウラを一目見てから、元のシュヴァルツェア・レーゲンに戻ったソレを見て強制的に待機状態へ戻すとセシリアに預ける。

「セシリア、俺はラウラを保健室に運ぶから、ラウラのISを千冬姉に渡しといてくれるか？」

「判りましたわ。早く連れてお行きなさいな」

「おう！」

シュヴァルツェア・レーゲンが暴走した時に塞がっていたピットへの入り口が開いたので、ラウラに負担が掛からない様に飛んで戻ると、白式を解除、そのまま保健室まで走った。

それを管制室から眺めていたキラと千冬、ラクスの三人は苦笑しながらモニターに再生されたシュヴァルツェア・レーゲン暴走の瞬間を険しい目で見ている。

「ヤマト、お前はどうせ知っているのだろう?」

「ええ、間違いなくこれは・・・」

「VTシステムですわね」

「ああ、しかも私のデータを使っているらしいな」

シュヴァルツェア・レーゲンはドイツのIS、そしてドイツは千冬が嘗て教官として訪れていた国であり、亡国機業が起こした織斑一夏誘拐事件での情報提供を行った国でもある。

「きな臭いとは思っていたが、ビンゴかもしれんな」

「東さんに調べてもらいますか?」

「ああ、頼む」

「一応、僕の方でも調べておきます」

ラクスが東に今回の事を伝えてくれるので、キラの方でも少し調べる事になった。千冬も今回の事でドイツに対する疑惑が大きくなったので、キラや東が行おうとしている事を咎める気が無いらしい。

「ああ、誰に喧嘩を売ったのか、思い知らせてやれ」

「勿論です」

第十八話 「第二試合、最強の後継」(後書き)

V Tシステムを見た時に少し怪しいかな？ って思ったんですよ
え。

仕事忙しいです。中々執筆する時間が無いんですよ。

第十九話 「千冬の覚悟、シャルロットの涙」 (前書き)

今回はまだクラスにシャルの女バレはしません。

第十九話 「千冬の覚悟、シャルロットの涙」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第十九話

「千冬の覚悟、シャルロットの涙」

タッグマッチはシュヴァルツェア・レーゲンの暴走によって中止となった。一応、全生徒の力を見る為に一回戦だけは全試合を行い、2回戦以降は全て中止だ。

キラはシュヴァルツェア・レーゲンの暴走の後、千冬に言われて束と連絡を取りながらドイツと亡国機業、織斑一夏誘拐事件当時の事を調べていた。

調べてみて判った事だが、シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されていたVTシステムに使われている千冬のデータは彼女がドイツへ教官として赴いた時に取られた実戦や訓練、模擬戦のデータから取られているのだ。

「東さんの方は如何でした？」

「うーん？ 東さんが得た情報もキー君のと大差ないんだけどねえ。でも随分と頭にくる情報が見つかったかなあ」

「もしかして、見つかったんですか？ クローン技術」

「さっすがあ！ そうなんだよねえ、ちーちゃんがドイツに行つて少ししてから急にドイツがクローン技術を完成させてるんだよ、もしかしたらサイレント・ゼフィルスを盗んだちーちゃんソックリさんはドイツで生まれたのかもねえ」

まだ亡国機業とドイツの繋がりは見つからないが、恐らく間違い

なくビンゴだろう。

「千冬さんにはクローンの事、知らせますか？」

『良いよ、ちーちゃんは知っておくべきだと思っもん』

「後はドイツが何故、一夏を亡国機業に誘拐させてまで千冬さんを欲したのか、ですね。ブリュンヒルデの実力が欲しいからっていうのは判ります。VTシステムに千冬さんのデータが欲しかったからというのもあるんでしょうけど、それだけじゃない気がするんですよ」

『それを調べるのは束さんの役目だよ、丁度良く紅椿は完成して、そっちに集中出来るから』

「どうやら完成したらしい。白式と共にキラと束が開発した二機目の第四世代型ISにして、“彼女”の専用機が。」

『あ、それとラーちゃんにも良い物を用意しておいたから、そっちの臨海学校の時にでも紅椿と一緒に持っていくから』

「良い物？」

『そう！ラーちゃんの為に作り出したオペレーター専用のISがね！！』

「ラクス専用のIS、それもオペレーターが乗る事を前提として束が開発した新型のIS、それが完成して、紅椿と共に届けると言っているのだ。」

「ラクスに専用機って！それは不味いんじゃ・・・」

「只でさえラクスをIS操縦者にしようと学園上層部や日本、国際IS委員会が煩いのに、専用機を持たせてしまっっては不味い状況になる。」

『だから、そのためのオペレーター専用ISなんだよ』

「どういう事ですか？」

『それは公開してからの楽しみ！ まあ、キー君も納得出来るスペックにはなってるから、安心して良いよ』

束の事だからその辺の事は任せても大丈夫だという信頼はあるが、如何も心配になってしまいうきは、過保護なのだろうか。

「じゃあ、臨海学校の時にまた」

『うん！ 会えるの楽しみにしてるよ、じゃねえ！！』

電話が切れたので、キラは集めたデータをUSBメモリーに入れて部屋を出た。向うのは寮長室、つまり千冬の部屋だ。

「織斑先生、僕です」

『ヤマトか、少し待て』

ノックをすると中から千冬の声が聞こえ、少しの間だけ待たされる。その間に中からは何かを片付けているのであろう音が聞こえ、5分くらいで漸く扉が開いた。

「待たせたな、入れ」

「失礼します」

寮長室の作りは他の寮生の部屋と大差ない作りになっていた。ただ、部屋の彼方此方には、片付けてはいるのだろうが、服が散らばっており、ゴミ箱には大量のビールの缶が捨てられている。

「少しは片付けましよう？」

「一夏と同じ事を言うな。それで、調べたのだな？」
「ええ、東さんと共同で調べて、随分と見つかりました」

先ず見せたのは先日、東から送られて来たイギリスでのサイレント・ゼフィルス強奪事件の監視映像だ。そこに映っている人間の顔を見た時、千冬の米神には青筋が浮かび、憤怒の表情になった。

「クローンか」

「恐らく、織斑先生がドイツに行つて少ししてから、ドイツはクローン技術を完成させたみたいですね」

「それに、VTシステムのデータ、これも私がドイツにいる間に取つたものを使つているのだな」

実に面白くない。VTシステムを完成させる事と、千冬のクローンを作る為に、その為に千冬が利用されていたなどと、気に入らない話だ。

「これで、間違いなくドイツと亡国機業の繋がりは確かな物になったが、証拠が見つからんか」

「ええ、これだけでは証拠として不十分です。一夏誘拐事件を起こした亡国機業が、ドイツの依頼で行つたという確かな情報が見つかってません」

「歯痒い、な・・・」

とりあえず、証拠の搜索は引き続き束がやってくれるので、キラも暇な時にはそれに協力する事になった。

それと、もしかしたら本当に暮桜・真打が必要になるかもしれないという事実が発覚してしまった。千冬も覚悟を決め、いざという時は躊躇無くラクスから受け取ると約束してくれた。

「それじゃあ、ヤマト、お前は大浴場にも入って来い。大浴場の男子入浴時間が作られたからな、IS学園学生寮自慢の大浴場をたっぷり堪能して来ると良い」

「判りました、それではお言葉に甘えて」

「ああ、一夏はもう入ったみたいだからな、今なら一人で広い風呂を楽しめるぞ」

「それは楽しみです」

キラも広い風呂は好きだ。アークエンジェルの天使湯にもキラは毎日浸かっていたくらいで、実は天使湯がアークエンジェルに作られたのはラクスとキラ、二人の要望だったりするのだ。

「それでは、データは置いて行きますね。失礼しました」

「ああ、すまないな」

寮長室を出たキラは部屋に戻って着替えとタオルを取りに行き、部屋の中に居たラクスに大浴場に行ってくるという旨を伝えて部屋を出ると、丁度シャルロットと遭遇した。

「あれ？ キラ、何処か行くの？」

「あ、うん、大浴場に。男子の入浴時間が出来たって聞いて、今が丁度その時間らしいんで入ってこようかなって」

「そう、なんだ・・・」

「うん、それじゃあね」

シャルロットと分かれて大浴場に来たキラは、早速その広い風呂を堪能していた。予想以上に広い風呂に、風呂好きのキラは大満足で、前に入った事があると言っていたラクスの話通りの良い湯加減だった。

「天使湯は戦艦内の温泉だったから、そんなに大きくなかったけど、ここは凄いね」

やはり部屋のシャワーや小さいバスユニットだけでは満足出来る筈も無い。こうして足を伸ばしてゆっくりと湯に浸かっているのが一番だ。

その時、脱衣所への入り口が開く音が聞こえた。それと同時に足音が二つ、その足音の軽さから女子のものと判断出来る。

「うそ、如何しよう・・・？」

慌てて隠れるかしようとしたキラだったが、入ってきた人物が視界に入ってきて驚いた。入ってきたはラクスとシャルロットの二人なのだ。

「ら、ラクス、シャルロット？」

「失礼しますわね、キラ」

「えっと、お邪魔します・・・」

何故か、ラクスとシャルロットはキラが入っているのにも関わらず、入ってきてしまった。ラクスはキラの裸を見るのも、自分の裸をキラに見られるのも慣れてるので、今更恥かしがらる事も無い。

しかし、シャルロットはそうもいかず、初めて異性、それも歳の近い異性との入浴という事で顔を真っ赤にして、タオルで必死に身体を隠しながらゆっくりと湯に浸かった。

「あの、ラクス？　なんでシャルロットと一緒に・・・その、僕が入ってるの知ってるのに」

「あら、私はお友達とご一緒に入浴したかっただけですわ。シャルロットさんは私のお友達ですもの、キラもシャルロットさんのお友

達でしょう?」

「いや、だから年頃の女の子が恋人でもない異性と一緒に風呂って
いうのは……」

「ぼ、僕は別にキラと一緒にでも、その……良いよ?」

「いやあのね……」

正直、目のやり場に困る。ラクスは裸は見慣れているので今更だが、シャルロットは恋人ではない。何より、恋人であるラクスが横ににいるのに、シャルロットの裸を見る訳にはいかない。

「それに、少しお話したい事がありましたから、私も、シャルロット
さんも」

「話……?」

急に真剣な表情になったラクスに、キラも表情を変えた。こういう
真剣な表情をする時のラクスは、冗談を言ったり、からかったり
する事は無いのだ。

「先ず、シャルロットさんですが、学園に残ることを決意したみた
いですわ」

「……本当に?」

「うん、僕はやっぱり学園にいたい。キラやラクス、一夏たちと・
・友達と一緒にいたいから、だから僕は、生まれて初めて父に逆ら
うよ。もう、僕の人生を父に決められて動きたくないから、僕自身
の意思で、僕の進むべき道を決めるんだ」

「そっか、良いと思うよ」

シャルロットがそう決めたのなら、それを尊重する。自分の意思
で決めた事を、他の誰かが否定したり、口出しする資格は無い。シ
ャルロットが自分で決めたのなら、それを応援するだけだ。

「それから、私からのお話ですが、シャルロットさんを私とキラの妹として引き取りませんか？」

「……え？」

「学園を卒業したら、シャルロットさんは間違いなくフランスへ強制送還されるでしょう。ですから、卒業と同時に私とキラの妹として正式に引き取るのです。幸いにもシャルロットさんはデュノア社長の娘となっていていますが、戸籍上は養子縁組も何もしていませんでしたから」

だから、卒業と同時にシャルロットをキラとラクスの妹として引き取り、フランスに手出しをさせない。シャルロットが卒業する頃にはキラは23歳、ラクスは24歳、既に成人しているので、別に問題も無いだろう。

「私とキラは、卒業と同時に結婚します。ですから、シャルロットさんはそのままヤマト家の人間として戸籍登録をしまえば宜しいのですわ」

「凄いこと考えるね、でも良いかもしれない。シャルロットは間違いなくこのままだと卒業して直ぐにフランスへ強制送還、恐らくは女だとバレた事で牢獄行き間違い無しだからね」

シャルロットの意見は如何かと彼女の様子を伺っていると、目尻に涙を浮かべながら震えていた。

「シャルロット？」

「シャルロットさん？」

「い、良いの？ 僕、そんなに迷惑かけちゃって、キラとラクス、フランスに恨まれちゃうかもしれないのに、それでも僕を、妹に、してくれる、の？」

「勿論、僕は構わないよ。迷惑でもない、シャルロットを守る為なら僕もラクスも、迷惑なんて思わないから」

ラクスも笑顔で頷いた。キラもラクスも、シャルロットの幸せの為ならフランスを敵に回す覚悟もあるし、戦って勝つ自信もある。

「卒業したら、私はお姉さんですわ。キラはお兄さん、妹が姉と兄に甘える事は、決して悪い事ではございませんわよ」

「う、うん、うん！　ありがとうございます、キラ、ラクス・・・ううん、お兄ちゃん！　お姉ちゃん！」

涙を流しながらラクスに抱きつくシャルロットの頭を、キラは近寄って優しく撫でた。ラクスも抱きついてくるシャルロットを優しく抱きしめ、まるで姉というより母のような慈愛に満ちた表情で見つめていた。

第十九話 「千冬の覚悟、シャルロットの涙」(後書き)

今回はシャルロット転入し直し、一夏を嫁事件、そしてお買い物です。

束が言っていたラクス専用機についてはまだ謎、ただ言えるのはオペレーターが乗る事を前提としたオペレーター専用のISになります。

第二十話 「臨海学校準備」(前書き)

ちょっとシリアスっぽい何かが入ります。

第二十話 「臨海学校準備」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十話

「臨海学校準備」

タッグマッチが中止になった翌朝、HRで教卓に立つ真耶が酷く困惑しているというか、何とも言えない表情をしていた。

「えつとお・・・きよ、今日は皆さんに転校生？ を紹介します」

転校生という言葉が疑問系なのは如何いう事なのか、生徒は誰もが首を傾げるのだが、その理由を知っているキラとラクス、千冬の三人は若干だが苦笑している。

「なあキラ、シャルルがまだ来てないんだけど・・・朝も先に行つててくれって言つて、遅刻かあ？」

「あはは・・・まあ、大丈夫だよ」

「でも遅刻したら千冬姉が怖いぞ？」

そう、シャルロットの席は未だに誰も座っていない。今回の転校生？ と何か関係でもあるのだろうか。

「ど、どござ」

真耶の言葉と共に入ってきたのは金髪の髪が美しい女子生徒、IS学園の女子の制服をミニスカートにして着ているフランス人の美

ついていたのだらう鈴音は双天牙月を出して一夏に振り下ろした。

しかし、巨大な刃が一夏の身体を縦に真つ二つにする事は無かった。一夏の前に回りこんだラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのAICによって双天牙月が止められ、筭の刀はISの腕に遮られている。

「た、助かったよラウラ、ありが・・・んむ!？」

「あ、あああ、あああああああ!!???」

一夏を助けたのだらうラウラは、お礼を言おうとした一夏の唇に、自分の唇を強引に重ねた。その光景を目の前で見せられた筭と鈴音は、一気に頭に血が上る。

「お、お前を私の嫁にする！ 異論は認めん!！」

「よ、嫁え!？」

この後、教室が大いに荒れたのは言うまでも無い。主にISとか刀とか、出席簿とか・・・。

シャルロットが女として改めて転入しなおした翌日、休日なのでキラとラクスはシャルロットを連れて街に出てきていた。

目的はデートではなく買い物、もう直ぐ臨海学校があるので、その為に必要な物をいくつか買いに来ているのだ。

「い、良いの？ せっかくお兄ちゃんとお姉ちゃん、デートなのに・・・」

「あら、折角ですもの、シャルロットさんも一緒に買い物を楽しみたいですわ」

「うん、それにシャルロット言っただでしょ？ 水着は学園指定の

物も申請し直してるから一つも持ってないって」

女子として転入しなおしたばかりなので、学園指定の女子の水着を持っていないシャルロットは、現在手持ちの水着は一着も無い。だから正直な話、今回誘われたのは彼女としても助かった。

「でもお兄ちゃんとお姉ちゃんは持ってないの？ 水着」

「僕もラクスも海で遊ぶって経験は殆ど無いから、実は今まで水着を買ったことが無いんだ」

オーブに居た頃も子供達が海で遊んでいるのを眺めているだけだった二人は、生まれてこの方、水着という物を買った経験が皆無だった。

なので今回、初めて買いに行く事になるのだが、どんな水着を買えば良いのか判らないので、シャルロットには水着を見立てて貰いたいという思惑もある。

「そういえば、折角家族になれたのにシャルロットって呼び方は固いよね」

「え？」

「それでしたら、何か別の呼び方など宜しいのではありませんか？何か可愛らしい呼び方が良いでしょうね」

「そ、そんないいよ！別にシャルロットでも僕は・・・」

この辺、変に遠慮する所はまだ直らない。最早癖と言ってもいいのかもしれないが、出来ればもう少し甘えて、我俣を言って欲しい二人だった。

「そうだね・・・シャル、なんて如何かな？ 縮めただけだけど、結構可愛いと思うよ？」

「あら、良いですね。シャルさん、何だか親しみやすいですわ」
「シャル・・・うん！　良い！　良いよ！！　凄く良い！！」

最初こそ遠慮していたシャルロットだが、シャルという名前を縮めただけの愛称でも、付けられた彼女本人も可愛いと思ってしまう呼び名を決められ、思わず興奮してしまった。

特に、シャルロットが兄と姉と慕う二人と、これで更に距離が縮まったような感覚が込み上げてきて、余計に嬉しくなる。

「じゃあ、行こうか、シャル」

「行きましょう？　シャルさん」

「うん！　お兄ちゃん！　お姉ちゃん！」

キラとラクスの間で、二人に手を繋がれながら歩くシャルロット。まるで本当の家族の様な光景を作り出す三人の姿は、誰もが振り返り、そして思わず微笑んでしまうか、見惚れてしまう程、自然な姿に映っていた。

三人が訪れたのはIS学園からモノレールで数駅離れた所にあるシヨッピングモールにある水着シヨップだ。水着を専門に扱う店らしく、幅広い年代の女性から人気があると雑誌にも出ている。

「まあ、男物があるのは良かった」

無い筈が無いので、男用水着のコーナーで青と白のコントラストが美しいトランクスタイルの水着を買ったキラは、いくつか見繕って試着室に入っているラクスとシャルロットを待っていた。

「お待たせしましたわ、キラ」

先に着替え終わったラクスがカーテンを開いた。ラクスが着ている水着は彼女のピンク色の髪に合う様にと、水色のセパレートビキニで、胸は少し大きく見える様に寄せて上げられるタイプになっている。

「うん、良いんじゃないかな」

「キラ・・・前にもお洋服を見に行った時に同じ事を言いましたわよね？」

「えっと・・・」

「もう！」

「ごめん、でも似合ってるよ。凄く綺麗だ」

「最初からそう言ってくださればよろしいのに」

拗ねた様に言うが、頬を若干だが赤く染め、嬉しそうな表情でカーテンを閉めたラクスは、満更でもなさそうだった。

「お兄ちゃん、こっちも見てくれる？」

隣の試着室のカーテンが開き、シャルロットが出てきた。オレンジ色のセパレート水着だが、ラクスより大きい胸は寄せて上げる必要が無いのか、見事にその大きさを自己主張している。

「シャルも可愛いよ。後は髪を三つ編みにしたら良いかもしれない」

「可愛い・・・えへへ、うん！　じゃあこれにするね！」

キラに可愛いと言われて心の底から嬉しそうな、シャルロットスマイルになったシャルロットはカーテンを閉めて着替え始めた。

シャルロットの笑顔を見たキラは、前までの、シャルルの時のような、どこか無理をしている作られた笑顔ではなく、心の底からの

笑顔になつた今の彼女に安堵する。

「・・・っ！」

ふと、キラは視線を感じて勢い良く振り返つて、店の外を鋭い眼差しで見つめた。先ほどの視線に、不吉な予感を感じて、軍人としての勘が警告を鳴らしている。

「僕を探っていた？ いや、僕とラクスか、それとも僕とシャルか・・・、亡国機業かフランスかは判らないかな」

前者なら亡国機業だろうし、後者ならフランスだろう。果たしてどちらなのか、それは判らないが、キラが振り返った瞬間から既に視線は感じなくなっている。恐らく、もう既に逃げた後だろうから、追つても無駄だ。

「キラ？」

「お兄ちゃん？」

着替え終わつて出てきたラクスとシャルロットが何事かとキラの顔を見上げて、心配そうな眼差しを向けてくるが、キラは何でもないと首を振り、微笑んだ。

「それより、会計を済ませようか。この後はカフェでお昼にしよう」
「ええ、でしたら行きたいカフェがありますわ」

「僕も！ お姉ちゃんと決めた所なんだけど、ケーキが美味しいらしいよ？」

「へえ、珈琲とかも美味しいと良いな」

ケーキが美味しいのなら、紅茶や珈琲も期待出来るだろう。

会計を済ませたキラ達は早速カフェに向かい、昼食とデザートを食べ、午後からはウインドウショッピングを楽しんだ。

ただ、キラが先ほど感じた視線は、その後一度たりとも感じる事は無く、誰かに話しかけられるという事も無かったのが、唯一の気がかりだったのだが、その答えは近い未来、キラの怒りという形で出されるのだった。

第二十話 「臨海学校準備」(後書き)

次回からは臨海学校！！ 水に濡れる水着！ オイルに濡れる柔肌
！ 波と戯れる二房の果实！ さあ！ 鼻血の準備は万端か！？

第二十一話 「海、戦いを忘れる楽しい時間」 (前書き)

さあ！ みんなの水着を想像しながら読むのだ！！ そこに天国は
パラダイス
ある！！！！！！

第二十一話 「海、戦いを忘れる楽しい時間」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十一話

「海、戦いを忘れる楽しい時間」

真夏の日光が照りつける白い砂浜、快晴空の色をそのまま映し出した青い海、IS学園1年生の臨海学校は海水浴から始まった。

1年の全クラスが皆、水着姿で年相応に海を楽しんでいる。ある者は早速泳ぎ、ある者はビーチバレーをして、日光浴をする者もいた。

「なあキラ、箒たちはまだか？」

「女の子は着替えに時間が掛かるものだよ。もう少し待とう」

「そういうもんか？」

そういうものだ。

キラは適当な場所にビニールシートを敷いて、パラソルを立てると荷物を置いていく。セシリアがサンオイルを塗りたいから用意しておいて欲しいと言っていたのだ。

「い、一夏・・・待たせたな」

「やつほー一夏！」

「キラ、お待たせしましたわ」

「キラさん！ さあ！！ 私の水着、如何ですか？」

着替えが終わったらしい。箒は白いビキニで、豊満な胸を面積の

少ない布が強調している。鈴は胸が残念だが、動きやすそうなビキニ、セシリアは箒と同じタイプの青い水着を着ていて、ラクスはキラとシャルロットと共に買いに行った水着だ。

「あれ？ ラウラとシャルロットは？」

「ああ・・・あれね」

一夏がラウラとシャルロットがいない事に気付き、何処かと尋ねると、向こうから歩いて来るオレンジ色のセパレート水着を着た三つ編みの髪を前に垂らしているシャルロットと、バスタオルミイラが歩いてきたのが見えた。

「シャル、うん、三つ編みも可愛いよ」

「お兄ちゃん、ありがとう！ でも、僕は良いんだけど、ラウラがねえ」

シャルロットの隣にいるバスタオルミイラ、見れば眼帯をしているのでラウラだというのが直ぐに判った。

「ら、ラウラ？ 何があつたんだよ」

「い、いや・・・その・・・」

「ほらラウラ、恥かしがってないで見せたら良いのに」

「し、しかし・・・」

如何やら一夏に水着姿を見せるのが恥かしいので、全身をバスタオルで覆っているみたいだ。あのラウラが、随分と乙女になったものである。

「もう、なら箒や鈴たちが一夏と一緒に、ラウラ抜きで遊んじゃうんだけど・・・いいのかなあ？」

「そ、それは！・・・っ、ああもっ！！ えい！！！」

シャルロットも中々策士だ。ラウラはシャルロットの言葉で意を決したのかバスタオルを剥ぎ取る。紺色のフリル付きビキニだが、鈴と同じく胸は残念、しかし小柄な彼女がフリル付きの水着を着ていると、何故だか可愛らしく見えた。

「ど、どうだ？」

「え、あ、うん、可愛いぞラウラ」

「か、かわいい・・・そ、そうか、私は、可愛いのか」

途端に顔を真っ赤にしたラウラを微笑ましく見守っているシャルロット、何故だか恥かしがりやの妹を見守る姉か、もしくは娘を見守る母親のような母性溢れる笑みを浮かべていた。

「あらあら、一夏さんも中々のプレイボーイですね」

「そんな言葉、何処で覚えたの？」

「マリューさんですわ。ムウさんへの愚痴を聞いたときに、ムウさんはプレイボーイで困ると仰ってましたから」

「マリューさん・・・ムウさん・・・」

キラにとってはバルトフェルドと同じ、兄と姉の様な存在と慕う二人に、今は呆れていた。ムウにはマリューという恋人がいるのに、も拘らず、オーブ軍でも女性にモテているので、恐らくは女性たちに良い顔しているのだろうと。マリューにはそんな愚痴をラクスに聞かせている事である。

「後はカガリさんですわ。アスランとメイリンさんの事で」

「カガリ、アスラン・・・」

実の姉と幼馴染までもか、と深い溜息を吐いたキラは、何故か頭が痛くなつたのだが、無理も無いだろう。

「マリユールさんもカガリさんも仰ってましたわ。少しはキラやシンさんを見習ってほしいと」

「僕？ まあシンはルナマリア一筋だから、納得」

キラもラクス一筋なので、それでだろう。ついでに言うならデイアツカもミリアリア一筋なのだが、当の本人は未だにミリアリアと復縁していないので、除外されたのだろう。

「あれ？ でもイザークもだよな？ シホさん一筋じゃなかった？」

「・・・あら」

マリユールもカガリもイザークとは顔見知りなのに、何故彼の名前を出さなかったのだろう。

だが、久しぶりに元の世界の友人達を思い出したものだ。マリユールとムウから始まり、カガリ、アスラン、メイリン、シン、ルナマリア、ミリアリア、ディアツカ、イザーク、シホ、本当に懐かしい。

「皆、元気にしてると良いね」

「はい」

懐かしい友人達を思い出し、その思い出に充分浸つたので、二人は言い争っている筈、鈴を苦笑しながら見ているシャルロットとセシリア、更に未だ呆然としているラウラの所まで歩み寄り、8人で遊ぼうと言いに行く事にするのだった。

早速だが、キラは只今ピンチである。それはキラの目の前、ビー

チパラソルの下のシートにうつ伏せで横になる英国淑女が原因だ。

「さあ、キラさん。サンオイル、塗って頂きますわよね？ バスで約束しましたもの」

「い、いや、その・・・」

確かに約束はした。しかし、恥かしい話なのだがキラは海水浴というものに行った経験が無い。つまり、サンオイルというのも何なのか知らないのだ。

オイルを塗るというからには、腕とかその辺に塗るものだろうとは予想していたのだが、まさか身体全体に塗るとは思ってもいなかった。

「キラ？」

「お兄ちゃん？」

しかも、キラの直後ろではラクスとシャルロットの輝かしい笑顔があった。だが、その誰もが見惚れるであろう笑顔は、目が笑っていない。寧ろ絶対零度の冷たい光を宿している様な気がするのだ。

「さあ、キラさん」

「キラ？」

「お兄ちゃん？」

「・・・えっと」

サンオイルの瓶片手に、キラは未だ嘗て無い人生最大の危機を、迎えていた。

「えっと、背中だけで良いなら・・・」

結局、約束をしたのだから守らないという選択を出来ないキラは、背中だけという条件で塗ることとなり、背中に突き刺さる冷たい視線と殺気は、我慢する事にした。

「それでは、お願いしますわね」

セシリアは背中に手を回し、水着の紐を解いて完全に背中を露わにした。今セシリアが身体を起こせば歳の割りに発育の良い胸がキラ達の目の前に曝される事だろう。

「そ、それじゃあ」

オイルを手に塗り、それをセシリアの背中に当てた。

「ひゃん!?!」

「うえ!?!」

「お、オイルは手で少し温めてから塗ってくださいな」

「あ、ごめんね。その、初めてだったから」

「初めてでしたの・・・それなら、仕方ありませんわねえ」

何処か嬉しそうなセシリアだった。

それを見てラクスとシャルロットの全身から黒いオーラの様なモノが噴出した様に見えたのだが、周りのクラスメート達は見なかったフリをする。懸命な判断だろうと、後に千冬が語ったらしいが、定かではない。

「ん・・・んふう・・・ああ、キラさん、とってもお上手ですわあ。何だか私、眠くなってまいりましたあ・・・」

「いや、寝られたら困るというか」

実際、困る。このままではキラの後ろにいる修羅二人の相手を、キラ一人でしなければならなくなるのだから。

「ZZZ・・・」

「うそ・・・」

本当に眠ってしまった。そして遂にピンクの修羅とブロンドの修羅がそれぞれキラの肩に細く女性らしい綺麗な手を置いた。ただし、その手は万力を思わせるほど力強く肩を握り、キラの両肩からはミシミシという嫌な音が聞こえてくる。

「っ！ えっと・・・ごめんなさい」

「許しません」

地獄、光臨だった。

何故かポロポロで、何処かやつれたキラと、イイ笑顔で、艶々とした肌のラクスとシャルロット達は砂浜を歩いて適当に見て回っていたのだが、丁度ビーチバレーのコートで一夏とラウラ、箒を含んだクラスメート6名が試合をしようとしている所に出くわす。

「お、キラ！ ビーチバレーやるか？」

「いや、見てるだけで良いよ・・・疲れたから」

「？」

グロッキーなキラを見て首を傾げる箒とラウラだが、その後ろで微笑むラクスとシャルロットが怖くなって慌てて目を逸らした。

「そっか、なら俺たちの試合でも見ててくれよ」

「そつさせてもらうね」

試合開始、流石に男の一夏と剣道部の篤、軍人のラウラのチームは強い。相手のチームは運動部の人間もいるのだが、流石にのほほん・・・布仏本音というマイペース少女が足を引つ張っている。まあ、それでも彼女のラッキータックが時々脅威になるのだが。

「あ、ビーチバレーですかあ、面白そうですね」

その時、見回りをしていた真耶がやってきて、ビーチバレーに参加したそうな目を向けてきた。引率の教師とは言っても、本日は教師としての仕事は簡単な見回りだけで、遊ぶのも自由なのだ。

「先生も一緒にやらない？」

「いいですね、織斑先生も一緒に如何ですか？」

どうやら千冬も一緒だったらしい。スタイル抜群の身体で、黒いビキニを着た千冬の姿は女子生徒だろうと、実の弟だろうと見惚れてしまう。

もつとも、キラはそれ所ではないし、もしも見惚れようものなら再び地獄が光臨する事になるので、少し視線を逸らした。

「では」

「はい！ 負けませんよ？」

真耶が一夏のチームに入り、千冬が本音のチームに入った。4対4の試合だが、この二人の参入で試合は激戦となる。

本音のチームは千冬が強力なアツカーとなり、強烈なスパイクが何度も炸裂、一夏のチームは逆に真耶の高い反射神経が鉄壁のブロックカーとなって一進一退の試合展開を繰り広げるのだ。

「皆さん、楽しそうですね」

「うん、後は明日だね。明日、束さんが来る」

「紅椿と私の専用機、何が待ち受けているのでしょうか？」

「間違いなく、明日は何か起きる。紅椿とラクス専用機のお披露目としてね」

シャルロットがいつの間にか来ていた鈴音と一緒にビーチバレーを応援している後ろで、キラとラクスは明日の事を考えていた。

明日、束が来る事になっていて、その時、白式の兄妹機である紅椿と、ラクスの専用機が届くことになっているのだ。

「問題は」

「箒さんですわね」

キラとラクスは、アタックを決めてハイタッチをしている一夏の、その向かいで照れながらも応えている箒を見つめていた。

「何事も無ければいいけど」

「箒さんの最近の様子を考えると、可能性が高いですわ」

果たして、二人の心配は現実のものとなるのか、それは明日になつてみなければ判らない。

第二十一話 「海、戦いを忘れる楽しい時間」 (後書き)

次回は、千冬の弟が欲しければ私を倒せ宣言！ と登場、世紀の大天才！！ です

第二十二話 「弟が欲しいなら姉から奪え」 (前書き)

サブタイはネタですww

第二十二話 「弟が欲しいなら姉から奪え」

ISS(インフィニット・ストラトス)
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十二話

「弟が欲しいなら姉から奪え」

臨海学校の夜は温泉旅館での豪華な夕食だ。座敷席とテーブル席に分かれて用意された海の幸一杯の夕飯を楽しめる。

「うん、美味しい！ 流石は本ワサ！」

「旅館で栽培してる本ワサビって話だからね、美味しい」

キラと一夏は向かい合わせで座り、一夏の右には篤、左にはラウラが座っている。キラの右にはラクス、左にはシャルロット、シャルロットの隣にはセシリアが座って、正座に慣れてないセシリアとラウラは少し足が痺れてきたのかソワソワしていた。

「シャル、足は痺れてない？」

「あ、うん。フランスで正座の練習もしてきたから、まだ平気だよ」

キラは日系の家系なので幼い頃から正座には慣れてるし、ラクスも日系の物が好きなのか、正座はそれなりに慣れているので平気だが、シャルロットはかなり意外だった。

「セシリアは・・・ちよつと辛い？」

「い、いえ！ その、大丈夫ですわ！ このセシリア・オルコットが、高々正座くらいで・・・」

「えい」

「~~~~~つ!?　しゃ、しゃるろつとしゃん!?　にや、にやにしましゅの!?!?」

突然、シャルロットに足を突かれたセシリアが声にならない悲鳴を挙げて、涙目に舌足らずな口調でシャルロットを睨んだ。

「もう、無理しないでテーブル席に行ったら良かったのに」
「それだけは出来ません!?!?」

キラの隣になれなかったとは言え、それでもキラの近くの席になったのに、離れてしまつては折角のチャンスを逃してしまう。

「そうなんだあ、じゃあ足が痺れてもう限界なんて言わないよね?」
「も、ももも勿論んですわ!?!?」
「あは」

黒いシャルロット、満面の笑みは何故か、見る者全ての頬を、引き攣らせるのだった。

夕食が終わつて、キラは自室として宛がわれている一人部屋から千冬と一夏が泊まつている二人部屋に来ていた。

来る途中にラクスと会つたので、彼女も一緒に来ている。呼ばれた理由は簡単、千冬に一夏からマッサージでもして貰えと言われたのだ。

「織斑先生からのお礼でしょうか?」

「多分ね、僕が一夏の護衛をして、更に鍛えているから、そのお礼みただよ」

素直に礼を言えない千冬なりの感謝の気持ちなのだろう。何と云うか微笑ましい気持ちになり、二人そろって苦笑していると、軽く旅館のパンフレットで頭を叩かれた。

「まったく・・・しかし、先に私からで良いのか？ 本当はヤマトを先にと思っていたのだが」

「ええ、織斑先生もお疲れでしょうから、姉弟なんですし遠慮する事はないでしょう？」

「そうだな、千冬姉、横になれよ。早速始めっからさ」
「う、うむ」

敷かれた布団の上につつ伏せて横になった千冬にマッサージを始める一夏、その心地よさから千冬は思わず声を出してしまうのだが、これは声だけを聞いていると勘違いしてしまう者が出てしまうのではと思ってしまう。

「ん？」

ふと、部屋の外から気配を感じた。それも5人分の気配だが、何となく予想出来てしまった。

「キラ？」

「え？ ああ、うん。それよりラクスも一夏にしてもらったら良いんじゃないかな？」

「私もですか？ 良いですわね」

ガタツ！ という音が部屋の外から響き、キラ達はそちらを向く。すると襖が倒れ、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの5人が倒れこんできた。

「何をやっているのだ、馬鹿者ども」
「みんな・・・何やってるんだ？」

織斑姉弟の呆れと、キラとラクスの溜息が、5人を居た堪れなくして、乾いた笑いが部屋に響き渡る。

「まったく！ 何をしてるか馬鹿者が！」

改めて、千冬が椅子に座りなおして5人を叱り始めた。容疑者5人は椅子に座る千冬と一夏、キラ、ラクスの前で並んで正座させられている。

「マッサージだったんですか・・・」

「しかし良かった、てつきり」

「？ 何やってると思ったんだよ」

「それは勿論」

シャルロットの心配はラクスの事なのだろうが、ラウラは違った。そしてこの場で言うてはいけない事を言おうとした彼女は他の4人から慌てて口を塞がれてしまう。

「べ、別に！」

「と、特に何とは！」

「ほ、ほほほ・・・」

何となく理解出来たキラと千冬は溜息を吐き、ラクスは苦笑、唯一理解していない一夏は頭の上に？ が浮かんでいた。

「こいつ見えて、こいつはマッサージが上手い。本当はキラにでもと

思っていたのだがな、キラの好意で私が先にやってもらっていた」

因みに、千冬はプライベートではキラとラクスのは名前で呼ぶ事になっていた。キラとラクスも先ほどプライベートでは名前で呼べと言われていた。

「順番に箒と鈴、ラウラ、お前達もやってもらえ」

そして、箒と鈴の事も千冬は昔からプライベートでは名前で呼んでいる。つまり、今は彼女にとってはプライベートという事だ。

「よし、じゃあ最初は箒からだ」

「わ、私からか!？」

まさか自分からとは思っていなかった箒が驚愕して、そして顔を真っ赤にした。

「ほら、箒、マッサージするからここに寝てくれ」

「う、うむ・・・それでは」

早速、箒は先ほどまで千冬が横になっていた布団にうつ伏せで横になり、一夏が腰からマッサージを始める。

「んっ・・・! ああ、良い。これは、予想以上だ」

「そうか? 痛かったら言ってくれ、優しくするから」

「う、うむ、しかし・・・んあ、これは、思わず、うんん、声が、あはあ、出てしまう、な」

「ホントに出てるよ・・・」

何気に鈴音がツッコミを入れたが、夢見心地の箒は気付いていな

い。
そして、箒にとつて本日最大の羞恥が訪れた。他の誰でもない、千冬の手によつて。

「ほう？ 薄いピンクのレースか・・・随分と乙女心満載の下着だな」

「っ！？ きゃああ！？」

なんと、千冬が箒の浴衣を捲り、彼女の下着・・・ショーツを晒しだしてしまつたのだ。慌てて一夏とキラは目を逸らしたが、突然の事でバツチリと見てしまつた為、その光景は脳裏に焼きついてしまった。

「な、な、ななな、何をするんですか千冬さん！？」

「いや何、あの頃の小娘がどれだけ成長したのか気になつてな。しかし・・・随分と可愛らしい勝負下着だな・・・教師の前で淫行を期待するなよお？ 15歳」

「っ！？ い、いいい・・・」

「冗談だ」

本当にプライベートの千冬は何と言うか、流石は天才にして破天荒な束の親友だと思つたキラと一夏だつた。

「おい一夏、ちょっと飲み物を買つて来い」

「え？ あ、ああ・・・」

千冬に言われるまま、財布を持って一夏は部屋を出て行つた。

一夏が部屋を出て直ぐに千冬は部屋に備え付けている冷蔵庫からビールのを缶を三つだして、二つをキラとラクスに手渡す。

「キラは5月で21歳になったんだっとな、ここはプライベート席だ、気にしないで飲め」

「えっと、それでは・・・頂きます」

ブルタブを開けてキラはちびちびと、千冬は豪快に飲み始めた。

「つぶはあ！ それで？ 篝と鈴、それとラウラ、お前ら、あいつの何処が良いんだ？」

「くっくっく」

「まあ、確かにあいつは役に立つ。家事も料理も中々だし、マツサージも上手い。付き合える女は得だな」

確かに、一夏は顔も悪くないし炊事洗濯などの家事全般は得意、マツサージも上手で、男としてはかなりの優良物件だろう。

「どうだ、欲しいか？」

「くっくくれるんですか!？」

「やるか、馬鹿」

「くっくえー・・・」

本当に千冬も人が悪い。一夏に恋する三人を煽って、そして突き落とすなど、中々の悪女だ。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくて如何する。自分を磨けよ？ ガキども」

よつするに、弟が欲しければ姉である自分が納得出来る女になつてから奪いに来いと言っているのだ。ブラコンもここまで来ると笑えてくる。

「ああ、それと、オルコットとデュノア、お前達はキラの事を如何思う？ こいつにはラクスという恋人がいる訳だが」

「えええ！？ そ、そんな、私は・・・」

「えっと、僕はその・・・確かに恋心っていうのはあるかもしれない。多分、初恋なんだと思います。でも、今はそれよりも大切なお兄ちゃん、という所でしょうか？」

「ほう？ なるほどな、中々モテるではないかキラ」

正直、先ほどから脹脛を抓ってそっぽを向くラクスが怖いので、止めて欲しいキラだった。

「まあ良い。それよりキラ、先ほどから進んでないではないか、私は二本目に行くぞ？」

「ビールは飲んだ事が無いので・・・、ワインやカクテルなら何度かあるんですけど」

「ふん、ビールの良さを知らないとは、やはりまだまだ子供だな」

「そういう問題でしょうか？」

千冬理論ではそうなのだろう。兎に角、こうして夜は更けていく。千冬の珍しい一面を見た面々は、改めて彼女には逆らえないという事を学んだのは、良い経験なのだろうか。

翌朝、キラと一夏は少し早起きをして旅館の中を散歩していた。すると中庭へ入れる廊下の途中で篝がしゃがみ込みながら、庭の一部をジッと見つめているのが見える。

「篝？」

何を見ているのか気になった二人は近づいていくと、庭の一部、

箒の目の前に機械的なウサミミが生えており、その後ろには“ひっぱってください”と書かれた看板が刺さっている。

「なあ、これってもしかして……」

「知らん、私に聞くな」

キラもだが、一夏もそれが何なのか気付いたのだろう。そしてその脳裏には当然だが一人の女性の姿が映し出されている。

「おい、ほつといて良いのか？」

一夏の問いに答えず、箒は立ち去ってしまった。仕方ないとキラは庭に出て一夏が見ている前でウサミミを引き抜こうとする。

「何してますの？」

その時、ちょうどキラ達と同じで散歩に出てきていたらしいセシリアが来た。

「いや、ちょっとな」

キラはセシリアに手を振って挨拶をすると、ウサミミを思いっきり引き抜いた。

だが、何も出てこない。ウサミミだけがキラの手に握られており、誰かが出てくるといったことは無かった。

「？ 何の音だ？」

「っ！ 上？」

「ふえ？」

空を見上げると、人参型のミサイルと思しき物が飛来してきた。人参ミサイルは真っ直ぐ一夏目掛けて落下してきて、その足元に突き刺さった。

「うおわあああ!?」

思わず尻餅を着いて人参を見上げた一夏と、呆然とするセシリア、そして呆れて何も言えなくなったキラの耳に、女性の笑い声が聞こえてきた。

『うふふふふ、あはははははは!!』

すると、突然人参が縦に割れ、煙を出しながら中から一人の女性が出てくる。キラが引き抜いたウサミミと同じ物を頭に乗せたアリス服の女性、彼女こそ・・・世紀の大天才こと、篠ノ之 束だ。

「引つかかったねキー君！ ブイブイ！」

「はあ・・・」

「お、お久しぶりです・・・束さん」

「あゝ！ いっくん！ うんうん！ お久だねえ、ホントに久しぶりねえ!!」

笑顔で人参ミサイルから飛び降りた束はキョロキョロと辺りを見回した。何かを探している様だ。

「ところでキー君、いっくん、篝ちゃんは何処かな？」

「え、えつと・・・」

「向こうへ行きましたけど」

「そうなの？ まあ、私が開発したこの篝ちゃん探知機ですぐに見つかるよ！ じゃあねキー君、いっくん！ また後でね!!」

本当に嵐のような登場で、嵐の様な立ち去り方だった。

「き、キラさん、一夏さん、今の方は一体・・・？」

「篠ノ之 東さん、篝の姉さんだ」

「そして、ISの生みの親、世界中で指名手配されている篠ノ之博士本人だよ」

「・・・・・・はえ!？」

セシリアの驚きも無理は無い。指名手配中にして行方不明の彼女が、こんな所に現れたのだから。

今日、東が来る事を知っていたキラは、まさかこんな馬鹿みたいな方法で来るとは思っていなかった。米神を押さえながら深い溜息を吐いた。

第二十二話 「弟が欲しいなら姉から奪え」(後書き)

次回！ 遂に登場する紅き椿と、ラクス専用機！！

第二十三話 「紅い椿と永遠の代わり」 (前書き)

遂に！ ラクスと箒の専用機が到着！！！！

第二十三話 「紅い椿と永遠の代わり」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十三話

「紅い椿と永遠の代わり」

臨海学校2日目、専用機持ちのキラ達と篤、ラクスが千冬と共に旅館近くの川原に来ていた。因みに千冬とラクス以外は全員ISスーツを着ている。

「よし、専用機持ちは全員揃ったな？」

「ちよつと待ってください。篤とラクスは専用機を持ってないですよ」

「それに、クラインはIS操縦者ではなくオペレーターだと聞いてます」

千冬という言葉に鈴音とラウラが意見を出した。確かに篤は専用機を持っていないし、ラクスはそもそもオペレーターとしてIS学園に入学したのだ。

「それと、4組在籍の日本の代表候補生も来てませんよ？ 確か、更識 簪さん、ですよね？」

キラが言ったのは4組の専用機持ち、日本の代表候補生で、日本の第三世代IS、打鉄・式式を持つ更識 簪の事だ。

「あいつはまだ専用機が完成していないからな、今日は呼んでない。」

それと、篠ノ之とクラインの事だが、実はだな・・・」

その時、この場にはない筈の女性の声が聞こえてきた。

『やあああつほおおおおおお！！！！』

見ると、崖を駆け下りる一人の女性の姿、束が一直線に千冬へ向って走っていた。しかも、途中で大きくジャンプして、真っ直ぐ千冬へと落下していく。

「ちーちゃああああああん！！」

しかし、千冬は冷静に右腕を突き出し、束の顔をアイアンクローで掴みながら勢いを殺し、掴んだ顔をそのまま思いつきり締め付けた。

「やあああ会いたかったよちーちゃん！ さあハグハグしよう！

愛をたしかめぐっ！？」

「嫌いぞ束！」

「相変わらず容赦の無いアイアンクローだね！」

アイアンクローから逃れた束は彼女が来てから隠れてた筈の真後ろに移動して、久しぶりに会う妹に満面の笑みを向けた。

「じゃじゃ〜ん！ やあ！」

「・・・どうも」

「えっへへ〜、久しぶりだね〜。こうして会うのは何年ぶりかな〜？ 大きくなっただね篝ちゃん！ 特におっぱいが・・・ブツ」

何処から出したのか、木刀で束のセリフを遮る様に顔面へ強力な

突きを入れた筈、その顔は大変ご立腹だった。

「殴りますよ！」

「殴ってから言ったあ、篝ちゃんひどおい！！」

果たして、酷いのはどちらだろう？ 最も、束にとってこの程度はほんの挨拶程度でしかないのです、特に気にしたものでもないのだが。

「ねえ！ いつくん、キー君、酷いよねえ？」

「は、はあ・・・」

「束さんが悪いです」

「え〜！ キー君は束さんの味方じゃないの！？ ラーちゃんは！？」

「黙秘させて頂きますわね？」

「わ、満面の笑みで拒否された！？ ラーちゃんの拒否ってキー君にスルーされるよりキツツイよ〜」

ラクスにまで笑顔で拒否された束は涙目で崩れ落ちながらわざとらしくしくしく泣いていた。

「おい束、自己紹介くらいしろ」

「え〜っ！ メンドクサイなあ」

とは言え、此処には束と直接面識の無い者もいるので、束自身が自己紹介しなければ進まない話もあるのだ。

「私が天才の束さんだよ〜、ハ口〜。終わり〜」

何とも簡素な自己紹介だが、束はこの場にいる中で身内と認識し

ているのはキラとラクス、千冬、一夏、箒のみななので、それ以外の有象無象など如何でも良い。自己紹介として仕方なくやったに過ぎない。

「束って！」

「IS開発者にして、天才科学者の！」

「篠ノ之 束……！」

ISをこの世に生み出した張本人であり、現在進行形で行方不明だった筈の存在が目の前に現れば、こんな反応も当然だろう。

「んっふっふ、さあ！ 大空をご覧あれ……！」

束が指差した先、上空から何かが降ってきた。それも二つ、それは銀色の立体水晶体の様な何か、それが一夏の一步手前に落下してきたのだ。

「じゃじゃ〜ん！！ これが箒ちゃん専用機とラーちゃん専用機……！」

束が持つリモコンを操作すると、落下してきた物体が開き、それぞれの中から紅いISと灰色のISが出てきた。

「紅い方が箒ちゃんの専用機で、紅椿！ 灰色の方はラーちゃん専用機で、オルタナティブ！！ どちらも全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよ〜！」

箒の専用機、紅椿と、ラクスの専用機、オルタナティブ。見た限りでは他の第三代と変わらないが、束が作った物だ。何かあるだろうと皆予測していたのだが、紅椿の開発にも関わっていたキラは

当然だがスペックは完全に把握している。

「何せ紅椿とオルタナティブは、束さんが作った第四世代型ISと第五世代型ISなんだよ〜！」

紅椿が第四世代なのはキラも知っている。しかし、ラクス専用機であるオルタナティブが第五世代というのは驚いた。第五世代という事はオルタナティブにはビーム兵器が搭載されているという事で、束はビーム兵器の開発に成功したという事になるのだ。

「第四世代と第五世代・・・！」

「各国でやっと第三世代型の試験機が出来上がったばかりなのに、白式やストライクフリーダムに続いて二機目だなんて・・・」

第四世代機の二機目として紅椿、第五世代機の二機目としてオルタナティブ、それぞれが完成しているという事実がこの場の代表候補生達が驚きを露わにする。

「そこがほれ、天才束さんだからあ」

「とは言っても、僕が学園に入学する直前まで紅椿開発は僕も手伝ってましたよね？」

「うっ、それを言われるとなあ〜」

とりあえず、小話はこの辺にして、箒とISスーツに着替えたラクスが実際に乗り込んで紅椿とオルタナティブの最適化と適合化を始める事にした。

箒の方を束が、ラクスの方をキラが行う事になり、お互いに同等のスピードでキータッチをしながら高速調整を行う。

「うそ、篠ノ之博士もキラも速い・・・」

「篠ノ之博士と同じ天才だと言うのか、ヤマトは」

鈴音とラウラの眩きを余所に、東とキラはほぼ同時に作業を完了させた。これで紅椿は第の、オルタナティブはラクスの専用機として、真の意味で完成した事になる。

「ところで東さん、ラクスの機体・・・オルタナティブなんですけど、大丈夫ですか？ 正直、ラクスが専用機持ちになるのは」

「キー君の言いたい事は判るよ。だから東さんも色々と考えて、そして出された結論と結果がオルタナティブなんだよね」

如何いう事だろうか、ラクスがオペレーターとして学園に入学して、IS適正ランクがAという結果に学園上層部が操縦者にしようと画策しているのだから、専用機は不味い筈なのに。

「ラーちゃんのIS、オルタナティブはね、なんと！ 世界初のオペレーター専用のISなんだよ」！

「オペレーター専用の、IS？」

「そう！ 確かに武装は積んでるけど、それはあくまでも自衛用。オルタナティブの本当の使い方は仲間のISのオペレートにあるんだよね」

東が言うにはオルタナティブには通常のISの3倍はある高出力ハイパーセンサーが搭載されており、戦況を逐一把握出来る様に得られた情報を展開されたマップに映し出す事が出来るらしい。

「何より、オルタナティブの見所はナノマシン生成ファクトリー！

このファクトリーによって生成されたナノマシンは自分や他のISの傷を修復したり、シールドエネルギーを回復させる事が出来るんだよ」

ただし、それも一度に一機ずつでなければ出来ないのだが、それでもサポートとしては充分過ぎる能力だろう。

「更に！ 装甲にはストライクフリーダムと同じVPS装甲ヴァリアブルフェイスソフトを採用して、推進システムもヴォワチュールリュミエールシステムを使っているから、動力にはハイパーデュートリオンエンジンを載せてみました〜！」

驚いた。確かに調べてみれば、オルタナティブにはVPS装甲ヴァリアブルフェイスソフト、ヴォワチュールリュミエールシステム、ハイパーデュートリオンエンジンが使われている。勿論、ストライクフリーダムの物と比べれば大分劣化した物なのだが。

「？（オルタナティブ、人型ではあるけど、足や背中の翼みたいなものとか、まるでエターナルに似てる）」

確かに、束にはストライクフリーダムに保存されていたエターナルのデータや画像を見せた事があるが、まさかこの機体、そしてオルタナティブという名前、それで納得が出来た。

「永遠の代わり、という訳ですか」

「キー君せいかい〜い！」

まだ何か隠されているみたいだが、成る程確かに、この機体はラクスに丁度良いのかもしれない。専用機を持った事でIS操縦者になれと煩い学園上層部を黙らせる事が出来るし、オペレーター専用という事で、戦場でもオペレーターとして動く事が出来る。

「キラ」

「ラクス？」

「また、私もキラと共に戦えるのですね」

「・・・うん、そうだね」

嘗てエターナルに乗って戦場に出ていた歌姫は、永遠の代わりとして、オルタナティブで戦場に出る。全ては、自由の戦士の為に、自由の剣が何人にも憚られる事無く振るえる様に。

第二十三話 「紅い椿と永遠の代わり」 (後書き)

ラクス専用機、オルタナティブの設定は設定の所に載せます。ネタバレもあるので見るときはお気をつけください。

第二十四話 「銀の福音」(前書き)

連投しました。そして寝ます。

第二十四話 「銀の福音」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十四話

「銀の福音」

フィッティング
最適化が終了して、早速だが紅椿とオルタナティヴのテスト飛行が始まった。

箒とラクスが飛行イメージを浮かべ、そのイメージにあわせて紅椿とオルタナティヴはスラスターを吹かし、ゆっくりと地表から離れ、次の瞬間、紅椿が上空へ飛び上がり、オルタナティヴが灰色の装甲をピンク色に変えながらバレルロールをしつつ飛び上がって行った。

紅椿は確かに第四世代という事で第三世代機よりも速かったが、オルタナティヴはそれ以上に速かった。紅椿よりも後に飛び上がったのに、オルタナティヴは既に紅椿を遥か後方へと追い越してしまっただ。

「何コレ、どっちも速い！」

「これが、第四世代と第五世代の加速、という事？」

紅椿は同じ第四世代である白式より若干だが速く、オルタナティヴはリミッターを掛けた状態のストライクフリーダムと同等か、若干だが劣るのスピードだ。

つまり、どちらも第三世代のスピードなどでは到底追いつけない速さだという事になる。

「どござう？ 篝ちゃんとラーちゃんの思つ以上に動くでしょう！？」

『ええ、まあ・・・』

『キラより少し遅いくらいですわね。でも、これくらいなら私には丁度良いですわ』

「じゃあ、篝ちゃんは刀を使ってみてよ。右のが雨月で、左のが空裂ね。で、ラーちゃんは自衛用の武装を使ってみて！ 右腕に搭載されてる砲身はビーム、全身にはミサイル発射管とCIWS、両肩には連装レールガン、両手の甲にはビームシールドが搭載されてるから！ 武器特性のデータ送るよん」

そう言つて、束は巨大な連装ミサイルポットを二つ展開して、全てのミサイルを発射した。

ミサイルはそれぞれ上空の篝とラクスに向つていくが、雨月と空裂を出した篝の斬撃と突きから放たれた紅いレーザーが全てを撃墜して、ラクスの方は右腕のビーム、全身からのミサイルやCIWS、両肩の連装レールガンの一斉掃射によつて撃ち落される。

「！？ 束さん、まさかオルタナティブに、マルチロックオンが搭載されてるんですか？」

「まあね、束さんが唯一完全再現出来たのはマルチロックオンだけだったから、あれは外せなかつたんだ」

何より、ナノマシンを使う上で、マルチロックオンは如何しても必要だったらしい。だから修理・補給用としても、自衛用としても使える様に設定してあるとの事だ。

兎に角、束は予想以上の仕上がりに大変満足しているのか、ご機嫌そうに笑っている。だが、その時、真耶の切羽詰った声が聞こえてきた。

「た、大変です！ 織斑先生！！」

見れば、片手に何かの端末を持った真耶が駆け足でこちらに走り寄って来ている。何かの緊急事態だというのは彼女の表情を見れば一目瞭然だろう。

「これをつ！」

真耶に渡された端末を開いた千冬の顔色が変わった。教師から軍の教官時代のソレへと……。

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……。テスト稼働は中止だ！ お前達にやってもらいたい事がある」

束が現れたその日の内に特命任務レベルAの事件、キラはそつと束の顔を見た。すると彼女はそれに気付いたのか笑顔を向けてきて、右手人差し指を伸ばして唇に当てた。

「安全は保障してあるから、大丈夫。キー君に任せるよ」

「安全とは、一夏や篝の事ではなく……敵の事、ですね？」

「それは秘密」

篝とラクスが降りてくるのを眺めながら、キラは待機状態にしているストライクフリーダムをそつと撫でた。リミッターを外しておいて良かったと思いつながら。

旅館の一室、緊急作戦司令室として用意されたその部屋で、千冬と真耶、多くのオペレーターの教師の他に、キラ達、専用機持ちが集められていた。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあった、アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代のIS“シルバリオ・ゴスペル”通称“福音”が、制御下を離れて暴走、監視空域を離れたとの連絡があった。情報によれば、無人のISとの事だ」

無人、とは言うが、間違いなく有人だろう。束の言葉、それを思い出したキラは、それを伝えるべきか如何か、それを迷っている。一応、束にとってはこれが幕の専用機デビュー戦と一夏の実戦経験を積む為のものだから、余計な情報を与えるべきではないのかもしれない。

それに、束の言葉を信じるのなら、福音のパイロットの安全は保障されているらしいので、変に遠慮する必要は無いのかもしれないのだ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はこの先2kmの空域を通過することが判った。時間にして50分後、学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処する事になった」

先ず、教員は学園の訓練機、つまり打鉄とラファール・リヴァイヴを使って空域と海域の封鎖を行う事になっている。全教員が封鎖に駆り出されるので、本作戦の要となるのはキラ達、つまりは専用機持ちが担当する事になったのだ。

「えっと、如何いう事？」

「つまり、暴走したISを我々が止めるという事だ」

「マジ！？」

「一々驚かないの！」

一夏が意味を理解していなかったが、ラウラの説明で驚愕、それ

を鈴音に注意されてしまった。

「それでは作戦会議を始める！ 意見がある者は挙手するように」
早速手を挙げたのはセシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」
「うむ、だが決して口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも2年の監視が付けられる」
「了解しました」

モニターに映し出された福音の詳細なスペックデータ、データによると広域殲滅を目的とした特殊射撃型のISであるらしい。

ストライクフリーダムやブルーティアーズと同じ、オールレンジ攻撃が可能な機体だ。速度もブルーティアーズと同等か、それより速いくらいだろう。正に攻撃と機動、両方に特化した機体だ。タイプで言えばブルーティアーズよりもストライクフリーダムに近いと言える。

「この特殊武装が曲者って感じだね。連続しての防御は、難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数・・・偵察は行えないのですか？」

「それは無理だな、この機体は現在でも超音速移動を続けている。アプローチは一回が限界だ」

一回きりのチャンス、つまり一撃必殺の攻撃が出来る機体で当たるしかない。そしてそれが可能な機体は二つ、零落白夜を持つ一夏の白式と、圧倒的な火力を誇るキラのストライクフリーダムだけだ。

「織斑先生、僕が偵察に出ますか？」

「ストライクフリーダムでか・・・最高速度はどれ位になる？」

「今はリミッターを切ってますから、福音の4倍は出ます。瞬間加^{イケンニッションプ}速^{イケンニッションプ}や二重瞬時加速を併用すれば更には」

それに、キラにはまだ切り札がある。ミーティアを使っても良いのだが、あれだとアプローチした時に小回りが利かなくなるので、別の切り札だ。

「ふむ、ならばヤマト、お前が先に偵察に出て更に詳細なデータを集めて転送しろ。そして白式がアプローチしたら零落白夜で一気に決める」

「え、俺が!？」

「当たり前だ馬鹿者、お前以外に白式を使える者はいないのだからな」

だが、問題もある。ストライクフリーダムはレーザー核融合炉とハイパーデュートリオンエンジンを搭載しているから、エネルギー切れを起こさずに動けるが、一夏の白式を福音の所までエネルギーを消費させずに移動させる手段が無い。

移動に機体エネルギーを使えば、当然だがシールドエネルギーも激減する。零落白夜がアプローチするときには使えなくなりましてでは話にならない。シールドエネルギーと機体エネルギー、全てを零落白夜に使わなければ一撃で落とす事は出来ないのだ。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ! お、俺が行かないとだめなのか

!？」

『当然!』

「ゆ、ユニゾンで言うな!！」

「織斑、これは訓練ではない・・・実戦だ。もし覚悟が無いのなら、

無理強いはしない。その時はヤマトに偵察ではなく殲滅を頼むからな」

勿論、その時のキラへと掛かる負担は大きい。だからこそ、一夏の作戦参加は必要なのだ。

「・・・やります。俺が、やって見せます!」

「よし。それでは現在、専用機持ちの中で、最高速度が出せる機体は・・・」

『ちよつと待ったあ!』

場の空気を読めていない能天気な声が聞こえた。

何故か、作戦司令室の天上から逆さまに顔を出す束が居て、作戦に待ったを掛けてくる。

「とっ!」

そんな掛け声と共に空中で回転しながら飛び降りてきた束は一瞬で千冬の前に移動する。ああ、千冬の胃はキリキリ痛み出すのが手に取るようにわかる光景だ。

「ちーちゃんちーちゃん! もつと良い作戦が私の頭の中にナウプリンディング!」

「出て行け・・・!」

「聞いて聞いて! ここは断然、紅椿とオルタナティブの出番なんだよ!」

「・・・何?」

なるほど、確かに紅椿もオルタナティブも最高速度はストライクフリーダムを除いてこの中では一番と二番だろう。

そして戦闘も意識した場合は紅椿が白式の運び手に、戦場でのオペレーターとしてオルタナティブが出るのは最も効率が良いと言える。

川原に移動した一同は箒とラクスがそれぞれのISを展開するのを待っていた。

箒の左手首に巻きつけられた金と銀の鈴が一对になってついている赤い紐と、ラクスの右手薬指に詰められたピンクサファイアの指輪が輝き、箒は紅い光、ラクスはピンク色の光に包まれる。

「紅椿、行くぞ・・・！」

「さあ、歌いましょう・・・オルタナティブ、平穩を願う歌を」

紅椿とオルタナティブが展開されたのを見て、束とキラがそれぞれ担当の機体に歩み寄り、調整を始めた。

それを後ろで見ていた千冬と真耶だが、真耶が束の姿を見ながら神妙そうな表情を作る。

「織斑先生、篠ノ之博士が此処に居る事を、学園上層部は」

「連絡は着いている。今は暴走したISを止める事が最優先だ」

一先ずの調整を済ませた束が紅椿から離れると、一つ指示を出した。

「よし、それじゃあ箒ちゃん、展開装甲オープン！」

束の指示と共に展開された紅椿の全身に搭載されている展開装甲、その姿は白式の雪片・弐型に似ている。

「展開装甲はね、第四世代型の装備で、一言で言っちゃうと、紅椿は雪片・式型が進化した機体なんだよね」

だから、雪片・式型を持つ白式も第四世代型になる。最も、それは以前キラが説明しているので、この場にいる全員が知っていた。

「じゃあ、ラクスはヴォワチュールリユミエルシステムを展開してみても？」

「はい・・・それでは」

ラクスが目を瞑ってイメージをすると、スラスター・・・背中of ウィングを思わせる大型スラスターバインダーの部分から桜色掛かった光の翼の様なモノが現れた。

「ラクスのオルタナティヴに搭載されているヴォワチュールリユミエルシステムは、僕のストライクフリーダムにも搭載されているんだけど、光パルス高推力スラスターの事なんだ。このシステムのお蔭で通常のISを大きく超える高速機動が可能になる」

ただし、ストライクフリーダムの場合はドラグーンをパージしなければ使えないので、ドラグーンとの同時操作が必要となるが、オルタナティヴはその必要は無い。

「それにしてもアレだね、海で暴走って言うと、10年前の白騎士事件を思い出すね」

東の言葉で千冬の顔色が若干だが変わった。

10年前の白騎士事件の事はキラも東から聞いて知っている。当時、東が開発した最初のIS、それが白騎士であり、その白騎士が世界各国のハッキングされ日本に向けて発射されたミサイル234

1発をたった一機で全て撃墜した事件だ。

「白騎士って誰だったんだろうね？　ね、ね、ちーちゃん？」

「知らん」

「うんうん！　私の予想ではバスト88cm・・・ウグツ！？」

千冬の出席簿が、今までで一番の威力でもって束の頭に振り下ろされた。

「きゅーっ、酷いちーちゃん！　束さんの脳は左右に割れたよ！？」

「そうか良かったな。これからは左右で交互に考え事が出来るぞ？」

「おお！　そっか！　さっすがちーちゃん、あつたま良い！？」

そういう問題でもないし、そもそも脳が左右に割れているのは元からだ。

束に抱きつかれたうっとおしそうにしていた千冬は、強引に束を引き剥がすと紅椿とオルタナティブの調整にどれ位掛かるのかを聞いてきた。

「織斑先生」

「何だ？　オルコット」

「私とブルーティアーズなら、必ず成功して見せますわ！　高機動パッケージ、ストライクガンナーが送られて来ています」

「そのパッケージは、量子変換してあるのか？」

そこで押し黙ってしまった。つまり、まだ量子変換をしていないという事だ。量子変換には時間が掛かる、それも分ではなく時間だ。逆に、紅椿とオルタナティブなら、調整に掛かる時間は束とキラという天才二人が行う為、7分もあれば余裕だろう。

これで決まりだ。今回の作戦はキラとラクス、一夏、箒が行う事になった。

先ず、ストライクフリーダムが偵察に出て、高速機動で移動しながら戦闘と偵察を行い、後からオルタナティブが合流、偵察情報を超高出力ハイパーセンサーにて即座にキャッチ、白式と紅椿に送信して、紅椿は白式を乗せながら福音へ接近、射程圏内に入ったら一気に白式の零落白夜で落とす。

「作戦開始は30分後、各員準備に掛かれ!!」

千冬の合図と共に、各自が準備に入る。作戦を行うのはキラ達4人だが、残りの4人もサポートを行うのに準備をしなければならぬ。

この30分間、和気藹々としていたメンバーにも殺伐とした空気が醸し出され、誰もが緊張する時間となるだろう。

「キー君」

「束さん？」

「本当に不味いと思った時は、お願いね？」

「撃墜以外で、ですか？」

「うん」

「・・・わかりました」

キラはラクスから預かっていた暮桜・真打を取り出し、それを束に渡すのだった。

第二十四話 「銀の福音」(後書き)

次回はいよいよ実戦！ 今までは試合だけでしたが、キラにとって久しぶりの実戦であり、このIS世界でリミッター解除した状態での初戦闘です。

第二十五話 「慢心」(前書き)

戦闘シーン入りましたあ!!

第二十五話 「慢心」

IS〈インフィニット・ストラトス〉
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十五話

「慢心」

昨日は生徒達で溢れていた海水浴場、今はキラ達のみが静かに水平線を見つめていた。

「時間だ、ヤマト、クライン、準備は良いか？」

「はい」

「行けますわ」

キラは手首の、ラクスは指の、待機状態にしているISに手を添えた。

289

「行こう、ストライクフリーダム」

「参りましょう、オルタナティヴ」

キラとラクスはそれぞれ灰色のIS、ストライクフリーダムとオルタナティヴを展開する。そしてラクスのオルタナティヴがVPSヴァリアブルフェイズシフト装甲を展開して、機体の色をピンクに変えると、若干浮き上がった一つのシステムを立ち上げた。

「ナノマシンカタパルト展開、キラ！」

ストライクフリーダムの前に桜色に輝くナノマシンの光が集まり、

カタパルトを作った。オペレーター専用ISの本領の一つ、ナノマシンを使ったカタパルトシステム、ナノマシンカタパルトだ。

キラがナノマシンカタパルトにストライクフリーダムを接続したのを確認したラクスはハイパーデュートリオンエンジンからの電力をカタパルトに通す。

「ナノマシンカタパルト接続、システムオールグリーン、進路クリアー、X20Aストライクフリーダム、発進どうぞ！」

「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きます！！！」

カタパルトから発射されたストライクフリーダムがバレルロールをしながら上空へと飛び上がり、ヴァリアブルフェイズシフト VPS装甲を展開してイクニッションブースト 瞬時加速に入る。

一気にトップスピードまで加速したストライクフリーダムは途中で何度かイクニッションブースト 瞬時加速を繰り返しながらハイパーセンサーに福音が引つ掛かる距離まで飛び続けた。

「っ！ こちらキラ、目標をハイパーセンサーで確認、これよりアプローチを仕掛けます」

『了解した。こちらも既にクラインが発進している。詳細なデータをクラインに転送してくれ』

「了解！」

千冬の指示を聞き、キラは一気に福音との距離を詰める為、切り札の一つを切った。

イクニッションブースト 瞬時加速の中から更にイクニッションブースト 瞬時加速を掛けるダブルイクニッションブースト 二重瞬時加速、そしてその中から更にもう一度、イクニッションブースト 瞬時加速に入るといふ、千冬ですら不可能だった神業、トリプルイクニッションブースト 三重瞬時加速へと突入して、ほぼ一瞬で福音との距離を詰めた。

「はあっ！」

先ずは不明だった格闘性能を調べるためにビームサーベルを二刀流にして切りかかる。だが、福音は高速機動の中でそれを瞬時に避けると距離を取ろうとした。

しかし、キラがそう簡単に相手の得意とする間合いまで移動させるなど許す筈も無く、トリプルイグニッションブースト三重瞬時加速で背後に回り、両腕に切りかかった。

「っ！」

距離を取るのには難しいと考えたのか、福音は高速後ろ回し蹴りを叩き込もうとしてきたので、避ける。

本来ならVPS装甲のおかげで回し蹴りなど効かないのだが、ヴァリアブルフェイスソフトこの速度だ。当たれば衝撃だけは凄まじいモノになる。そうなれば当然だがバランスだって崩しかねない。

「ならこれで！！」

ドラグーンを全てパージすると、ビームサーベルからビームライフルに持ち替えて全方位からの射撃を開始。

全方位からの射撃に対して福音は反撃するのではなく避ける事では無く、ストライクフリーダムとの距離が開いた瞬間、上空に瞬間加速で飛び上がると、全身に装備された全砲身36門からのエネルギー弾、シルバーベル銀の鐘を発射してきた。

飛来するエネルギー弾の雨を掻い潜る様に飛びながら福音に近づいたストライクフリーダムは両腰のレール砲を発射、福音に確かなダメージを与える。

「なるほどね、ラクス！」

『データ受信しましたわ。一夏さん！ 箒さん！』
『了解！！』

一夏と箒が到着するまで少し時間が掛かる。それまでキラが福音の足止めをするのが作戦の第二段階だ。

再び放たれた銀の鐘シルバベルの弾丸を、キラはマルチロックでロックオンすると、ドラグーンフルバーストにて全てを撃ち落した。

キラが得た情報をラクスが受信して、それが一夏と箒に送られて来たのを確認した二人は、展開していたISのスラスターを吹かして、一気に飛び上がるうとしていた。

「織斑一夏、白式！ 行くぜ！！」

「（私も、言ってみようかな）篠ノ之 箒、紅椿・・・参る！！」

飛び上がり、海上で一度停止した二人は紅椿に白式を乗せる為の準備を始める。

「じゃあ箒、よろしく頼む」

「本来なら、女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが・・・今回だけは特別だぞ？」

白式を紅椿に乗せようとした所で、一夏はふと思った事を口にした。それはこの作戦が始まるまでキラから散々言われていた事で、その時は一夏しかいなかったたので、その場にいなかった箒にも伝えようと思ったのだ。

「いいか箒、これは訓練じゃない。充分に注意して取り組め・・・」
「無論解っているさ。フフ、心配するな、お前はちゃんと私が運ん

でやる。大船に乗ったつもりでいれば良いさ」

「・・・何だか楽しそうだな？ やつと専用機を持てたからか？」

「え？ 私はいつも通りだ。一夏こそ、作戦には冷静に当たる事だ。キラが足止めをしてるからって、油断などするなよ？」

「わかつてるよ」

だが何だか腑に落ちない一夏だった。箒自身は否定しているが、幼馴染である一夏の目から見ても、今日の箒は何処か浮かれている様な、何となく・・・そう、自信過剰に見えるのだ。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

「はい」

「よく、聞こえます」

千冬からの通信が入った。一夏はとりあえず考えていた事を一度放棄して通信に集中する事にする。

『今回の作戦の要は、一撃必殺だ。ヤマトが足止めをしている福音の懐に一気に飛び込み零落白夜で落とす。短時間での決着を心掛ける。討つべきはシルバリオ・ゴスペル、福音だ。』

「了解」

そこで通信終了かと思いきや、箒がまだ何かを話そうとしている。やはり今日の箒は何処かおかしい、一夏は再びその考えを浮上させた。

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすれば宜しいですか？」

『そうだな・・・。だが、無理はするな、お前は紅椿での実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が起きるとも限らない。ヤマトも

フォローはするだろうが、それも完璧に出来る状況になるとは限ら
んのだからな』

「わかりました。ですが、出来る範囲で支援をします」

これで確信した。一夏は箒を今回の作戦から降ろすべきではない
のかと考え始めた時、一夏に千冬からのプライベートチャンネルが開
く。

『一夏』

「は、はい！」

『はあ、これはプライベートチャンネルだ、篠ノ之には聞かれない』

千冬も同じ事を考えていたのだろう。だからこそ、プライベート
チャンネルで助かった。こんな話、箒に聞かせる訳にはいかないのだ
から。

『どうも篠ノ之は浮かれてるな、あんな状態では何かを仕損じるや
もしれん。いざという時は、サポートしてやれ』

「なあ、箒を今回の作戦から降ろした方が良いんじゃないか？ こ
のままだとキラに余計な負担を掛けちまいかねないぜ？」

『本当は私もそう思うのだがな、状況が状況だ。ヤマトに偵察から
足止め戦闘、そして殲滅戦までやらせるのは負担が大き過ぎる。奴
なら可能かもしれないが、一教師として、それは容認出来ん』

「・・・わかりました。箒の事は俺の方で意識しておきます」
『頼んだぞ』

プライベートチャンネルが終了して、再びオープンチャンネルに切り
替わった。

『よし、では・・・始め！！』

千冬の合図と共に一夏は白式を紅椿の上に乗せて、肩を掴んで固定させる。それを確認した篤は少し微笑んで、真っ直ぐ前を見た。

「行くぞ」

「おう」

紅椿のスラスターが一気に全開まで吹かされ、急激に加速しながら上空まで一直線に進んだ。そのあまりの加速によるGが一夏を襲うが、何とか堪えつつハイパーセンサーとラクスから送られて来た情報の確認を始めた。

「福音の近接戦闘用武装は無し。36門の砲身から放たれるエネルギー弾による特殊射撃がメインの戦闘法か」

「なら、その特殊武装を使われる前に・・・」

「ああ、零落白夜で落とす！」

問題なのはそのスピードだ。福音は現在、一夏が白式で出せる最高速度を超えて動けるらしいので、避けられる可能性がある。そうなればエネルギーは一気に減少してしまい、勝機を失ってしまう。

「その為のラクス、か」

「だろうな、オルタナティブにはナノマシンを使った仲間のISのエネルギー補給が可能らしいから、もしも避けられた時はキラと篤が時間稼ぎをして、俺はラクスにエネルギーを補給してもらった方がいい」

「なら、もし一撃で落とせなかった時、避けられた時はそうするか」「ああ！」

二人が福音とアプローチするまでもう直ぐ、漸く前方にピンクの

IS、オルタナティブを見つけた。

「よし、もう直ぐだ!!」

「一気に行くぜえ!!」

だが、一夏はこの時にも、心の隅で簿に対する不安を抱えていた。千冬と自分が見抜いた簿の現状、それは致命的なミスを起こす前兆ではないかと、そしてそのミスが、もしも取り返しの付かない重大なミスに繋がったら、その時の事を考えると、堪らなく怖かった。

第二十五話 「慢心」(後書き)

次回も戦闘…そして。

第二十六話 「白が落ちる時」(前書き)

原作でも起きた撃墜！

第二十六話 「白が落ちる時」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十六話

「白が落ちる時」

福音とストライクフリーダムが戦闘をしているポイントへ飛ぶ白式を乗せた紅椿とオルタナティヴは、暫時衛星リンク接続によってより詳しい位置を確認、紅椿は展開装甲を、オルタナティヴはヴォワチュールリユミエールシステムを展開して更に加速した。

そして、遂にハイパーセンサーが戦闘中の福音とストライクフリーダムの姿を捉える。高速機動をしながらの激しい銃撃戦をしているのが見えて、ストライクフリーダムに目立った被弾は無い事に安心する。

「見えたぞ一夏」

「あれが、シルバリオ・ゴスペル・・・」

目視出来たのなら問題無い。ラクスは此処で停止して待機、紅椿は更に加速をする事にした。

「加速するぞ、接触まで10秒だ」

紅椿が更に加速する中、一夏は雪片・弍型を構え、ワンオフアビリティ単一仕様能力、零落白夜を発動させた。

「うおおおおおおおおおおお!!!!!!」

咆哮、それと同時に紅椿が一気に福音の懐に飛び込んだ。

一夏の咆哮が聞こえた時には既にキラも一時攻撃を中断して、ドラグーンを展開したまま作戦最終段階を見届ける。

福音の機動に、紅椿は確かに追いつけた。だが、一刀両断する勢いで振られた雪片・式型はかわされ、逆に銀の鐘シルバベルによって白式と紅椿を分断されてしまう。

「失敗！？ つ！」

こんな事なら福音の機動力をもう少し奪っておけば良かったと悔やんだキラだが、今はそれよりも逃げようとする福音を止める事が先決だ。ドラグーンをもう一度動かして逃げ場を塞ぐ様にビームを発射しながら、白式と紅椿が福音の左右から同時に迫るのを確認した。

「キラ！ そのまま奴の退路を抑えててくれ！ 私が動きを止める！！！」

そう言っただけは背部にある展開装甲の二つを射出してビットとして使用、それを突撃させながら自分も切りかかって鏢迫り合いになりながら確実に動きを止めた。

「一夏！ 今だ！！！」

「おう！！！」

一夏がもう一度、零落白夜を発動させようとした時だった。急降下する一夏の目に信じられない物が映ったのは……。

「（密漁船！？ 不味い！！）」

遙か下の海、そこに浮かぶ一隻の船の存在。海域を封鎖されたこの場所に船・・・それも漁船がいるという事は、それはつまり密漁船という事になる。

一夏は福音を通り過ぎて、一気に密漁船と福音の間まで加速を始め、福音から放たれた銀の鐘シルバールベルを弾き返した。

「一夏!?!」

「キラ! あそこに船が!! このままだと戦闘に巻き込まれる!」

「っ! 箒!! 攻撃中止!!」

「馬鹿な事を言うな! 折角のチャンスを投げ捨てる気か!?!」

「下を見るんだ! このままだと一般人を巻き込む!」

「キラ! お前ともあるう者が犯罪者の味方をすると言っのか!?!」

確かに箒も船の存在は確認した。しかし、密漁船だというのなら箒は構う必要など無いと判断して、密漁船に攻撃が当たるのも構わず攻撃を続行すべきだと主張する。

「キラ! 如何する!!!?」

「一夏は兎に角そのまま!! 福音からの攻撃を弾いて! 福音は僕が・・・」

「いい加減にしるキラ! 一夏! 奴らは犯罪者だぞ!? 庇う必要が何処にある!?!」

「いい加減にするのは箒の方だ!?!」

珍しく、キラが大声で怒鳴りつけた。それに怯んだのか箒は動きを止めてしまい、単一仕様能力を発動させようとして身動きを取れなくなったキラは最悪の光景を目にする。

福音が一気に飛び上がり、回転しながら大量の銀の鐘シルバールベルを撒き散ら

したのだ。その大半は、箒を射程に捕らえている。今の無防備な箒では、避けるのは無理だ。

「ほう……」

「箒……っ！！！！」

慌ててミーティアの展開を緊急キャンセルしようとしたキラより早く、一夏が動いた。残り少ないエネルギー全てを使って瞬間加速に入った一夏は、箒の前に出て全身を大きく広げると、彼女の盾となつて銀の鐘をその身全てに受けてしまったのだ。

「い、ちか……」

「一夏！ つ！ ラクス！！ 一夏を回収！！ 僕は箒を連れて行く！！ 織斑先生！ 作戦は一時中断！ これより福音の動きを止めて戦線離脱します！！！」

『了解しましたわ！』

『頼む！』

通信を終了させたキラは、展開したままだったドラグーンを操り、福音のスラスターを狙いながらビームを撃ち続け、そのまま呆然とする箒の腕を掴んで離脱した。

見ればラクスも意識を失った一夏の、ポロポロになった白式の腕を掴んで離脱を始めている。

「いちか……一夏……っ！！！！！！」

ドラグーンがストライクフリーダムに戻され、動きを止めた福音。その戦場に箒の悲痛な叫びが響き渡り、静寂が戻るのだった。

現在、旅館の一室、緊急作戦司令室になっている部屋には、千冬と真耶、キラ、ラクスが画面を険しい顔をしながら見つめていた。

「やはり、お前に無理をしてもらってでも篠ノ之の出撃は見送るべきだったな」

「いえ、僕も福音のスラスターをもう少し破壊していれば良かったんですけど・・・」

「お前の所為じゃないさ。いや・・・誰の所為でもないな」

福音は現在、先ほどの戦闘空域で停止したまま動いていない。そして本部、学園上層部からの指示も出ていない。つまり作戦の継続をしろという事だ。

「次の出撃、僕はミーンティアを使用するつもりです」

「小回りが利かなくなるから、使用しないつもりだったのではないのか？」

「ええ、本来ならそのつもりでした。だけど、後方からの殲滅戦に専念すれば問題はありません」

「前衛は如何する？ クラインは前衛どころか戦うのすら不利な機体だ。他の小娘共に、貴様の相方が勤まるとも思えん」

だからこそ、キラはここに戻ってくる時に束から返してもらっていた物を千冬に差し出した。

「織斑先生、次の戦闘・・・一緒に出撃してください」

「私に、か・・・？」

「正直、僕が全力で後方からの攻撃に徹した場合、その前衛で戦えるのは織斑先生しかいません」

だからこそ、千冬にはもう一度、暮桜を手にとってもらいたいの

だ。

「暮桜・真打…」

キラの掌に乗るソレを見つめた千冬は、何故か一瞬だがキラリと光ったソレが、千冬を待っているかのように感じた。

「私を、待っているのか…？ 現役を引退して、お前を束に返した私を、お前はまだ…待っていてくれたのか？」

震える手で、待機状態の暮桜・真打を手に取った千冬は、一度だけ目を閉じて、そして開いた時には、確かな決意をその瞳に宿していた。

「わかった…次の出撃には私も出よう。弟を落とされて、私も丁度奴を切り刻みたいと思っていたところだ」

暮桜の待機状態、桜の花の形をしたペンダントを首から下げ、千冬は予備のISスーツを用意しておくよう、真耶に伝える。

「すまんが、私は束の所に行く。調整をしないと不味いからな」

「ええ、後はお任せください」

「ああ、それとヤマト、お前には非常時のIS部隊隊長をやってもらう。指揮権を今だけ預けておくから、山田先生とクラインの二人と協力して、煩い馬鹿どもを抑えておけ」

「はい」

医務室の代わりに使われている部屋では、撃墜されてからずっと

意識が戻らない一夏が眠っていた。

心拍数などに異常は無い。ISの絶対防御のお蔭で重症にこそならなかったものの、無数のエネルギー弾が直撃して、更には爆破した衝撃が直接身体にダメージを与えたのだ。相当な負担が掛かってしまい、意識を取り戻すのがいつになるのか未だに判らない。

「……っ、私は、違う……違うんだ！ 犯罪者を守って、それでこんな事になって……一夏とキラの考えが、私には……っ、でも、だから二人は強いのか……お前やキラに比べて、私は、力の赴くままに、暴力を振るっていただけなのだろうか……」

キラも一夏も、密漁船を見つけたら躊躇い無く守ろうとしていた。向こうは犯罪者だというのに、それでも守ろうとした。だが箒は、そんなものを守る必要など無い、ただ福音を倒す事だけを、考えていたのだ。

「箒さん」

「……ラクス」

「一夏さんの様子は如何ですか？」

「相変わらずだ……ずっと、眠ったまま」

「そうですか」

箒の様子を見に来たラクスが、箒の隣に正座する。ラクスの顔にいつもの微笑みは無く、ただ真剣な表情で、眠っている一夏を見ていた。

「箒さんは、お休みになられないのですか？」

「ここに、いたいんだ」

「では、次の出撃には参加するのですか？」

「……わからない」

わからない。もう、箒にはISを操縦する意義が見えなくなったのだ。自分は弱い、キラは勿論の事、他の代表候補生達や一夏と比べて、全然弱くて、力を手に入れた途端に、何もかも見えなくなってしまうた自分が、何よりも怖かった。

「私は、もう如何すればいいのか、判らないんだ」

「如何すればいいのか、判らないのでしたら見つければ宜しいのですわ」

「っ！ 見つかるわけ！・・・ないじゃないか」

「如何してですか？ それは、箒さんが見つけようとしなないからですわよ。箒さんは、自分が如何するべきなのか、その答えを見つけて努力をしましたか？ 一夏さんが落とされてからずっと、こうして塞ぎ込んで、何か努力をしたのですか？」

「それは・・・」

何もしてない。ただ、一夏が落とされた事にショックを受けて、それが自分の所為だと思い込んで落ち込み、ただ此処で無為な時間を過ごしてただけだ。

「少し、外に出てみては如何でしょう？ 今の箒さんには、一人で考える時間が必要だと、私は思います」

「・・・ああ、そうだ、な・・・そうするか」

静かに立ち上がった箒を見上げつつ、ラクスは箒のストレートに下ろされた髪に気付いた。先ほどの戦闘で、一夏に庇われた時の爆発で起きた炎に、いつも着けていた白いリボンが燃やされたのだ。

「ラクス」

「何でしょう？」

「ありがとう」

「いいえ、それは、答えを見つけた時にもう一度お聞きしますわ。今はゆっくり、お考えになってください」

「ああ」

部屋から立ち去った箒の後姿を見送り、ラクスは中庭にでも移動する事にした。右手薬指に待機状態で詰められているオルタナティブを軽く撫でて、少し歌でも歌おうかと思いつながら……。

第二十六話 「白が落ちる時」(後書き)

次回は遂に!! 嘗ての世界最強が再び立ち上がります!!

第二十七話 「フリュンヒルデが蘇る」(前書き)

尊が可愛いと思う。今更ですが…。

第二十七話 「ブリュンヒルデが蘇る」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十七話

「ブリュンヒルデが蘇る」

ラクスに勧められて気分転換も兼ねた散歩に出た篤は、そのまま夕暮れの砂浜を歩いていった。散歩をしていて思い出すのは幼い頃、まだISが生まれる前の、一夏との楽しかった日々や、学校で虐められて泣いていた自分を助けてくれた一夏の姿。

「一夏……」

初恋だった。昔から剣道をやっていた為、男女と呼ばれて男子に虐められていた自分を、一夏はいつも庇ってくれて、昔は剣道で常に自分の上を行っていた憧れの存在で、一緒に剣道をやっている事が本当に楽しかった。

「紅椿……、私は」

左手首に巻き付いている待機状態の紅椿、それを見つめながら、初めて紅椿に乗ったときの自分を思い出す。

あの時は自覚していなかったが、今改めて思い出すと、確かに自分は浮かれていたのだろう。一夏はそれに気付いていたのだ。

「篤！」

「っ」

突然、後ろから声を掛けられた。振り向かなくても声で判る、鈴音だ。自分と同じ、一夏の幼馴染で、そして・・・自分と同じ、一夏が初恋で、今尚恋するライバル。

「はあ、あ、判りやすいわね。あのさ！一夏がこうなったのって、アンタの所為なんでしょ!？」

「・・・・・・・・」

そう、全て自分が悪い。初めての専用機で浮かれて、慢心して、油断して、キラの指示も聞かず、自分なら出来ると過信して、その拳句にキラに叱責されて動きを止めてしまった自分を庇って、一夏は落とされた。

「で、落ち込んでますってポーズ？　っ！　っざけんじゃないわよ!！」

鈴音に胸倉を掴まれ、真正面から睨みつけられた。その真っ直ぐな視線、箒に対する強い怒りの籠った瞳、それが今の箒には堪らなく怖い。

「やるべき事があるでしょうが!!　今、戦わなくて如何すんのかなよ!！」

「・・・・・・・・もうISは、使わない」

ISに乗っただけで自分は浮かれ、そしてあんな悲劇を起こしてしまった。こんなにも弱くなってしまった。だから、もうISに乗らない。いや・・・ISに乗るのが、怖いのだ。

「~~~~っ!！」

バシン！ という音と共に、箒は鈴音に思いっきり引っ叩かれた。いつもの自分だったら、それに反撃するぐらいのことはしたというのに、それすらしようという気になれない。もう、本当に弱くなっってしまったのだと、心のどこかで思っていた。

「甘ったれんじゃないわよ！！ 専用機持ちつつーのはね、そんな我侭が許される立場じゃないの！！ それともアンタは、戦うべきときに戦わない臆病者な訳！？」

「・・・っ、どうしろと言っんだ、もう敵の居場所もわからない！ 戦えるなら、私だって戦うー！！」

でも、キラが足止めをして、それでも既に移動をってしまった福音の居場所が判らない以上、戦う事なんて出来ない。

「やっとやる気になったわね」

「あ・・・」

鈴音が目を向けた先、箒も目を向けると、セシリア、シャルロット、ラウラが揃って立っていた。

「あゝあ、めんどくさかった！」

「な、何・・・？」

皆、笑っている。箒を嘲笑っているのではない、挑戦的な意味合いの笑みを浮かべているのだ。

「みんな気持ちは一つって事！」

シャルロットが・・・。

「負けたまま終わっていい筈がないでしょう?」

セシリアが……。

「泣き寝入りするには、まだ早い」

ラウラが……。

皆、まだまだ自分達の負けを認めていない。代表候補生として、戦意はまだ失われていないという事だ。

「ラウラ、福音は?」

「確認済みだ」

ラウラが開いた空中ディスプレイに映ったのは福音の現在地を示す地図とマーカー、ラウラは既に福音の居場所を見つけていた。

「ここから30km離れた沖合いの上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見した」

「流石ドイツ軍特殊部隊! やるわね」

「お前達の方は如何なんだ? 準備は出来ているのか?」

「甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済み!」

「こちらも完了していますわ」

「僕も準備オツケーだよ、いつでも行ける」

皆、準備もやる気も充分、後は行動に移すだけだ。

「待ってくれ! 行くと言うのか? 命令違反ではないのか?」

それでは命令違反になる。戻ってきた時に、千冬からどんな処罰が待っているのかも判らないのに、それでも行くと言っただろうか。

「だからあ？ アンタ今、戦うって言ったでしょ？」

「お前は どうする？」

「私、私は・・・戦う、戦って勝つ、今度こそ、負けはしない！」

「決まりね！ 今度こそ確実に落とすわ」

命令違反だろうが何だろうが、そんな事は関係無い。やる事が決まったのなら、直ぐに行動に移すだけだ。

全員、ISを機動させようとした時、5人の中心の地面に一筋のビームが撃ち込まれた。5人とも、何かと警戒しながらビームが飛んできた方を見ると、ストライクフリーダムを展開して、ビームライフルの銃口を向けるキラの姿があった。今までに無い、憤怒の表情を浮かべて。

「皆、何をしている？」

「お兄ちゃん・・・」

「君達のやろうとしている事は命令違反だ。それを理解していない筈もないでしょ？ なら、ここで射殺される覚悟も出来ているという事だね」

ドラグーンをパージして、それぞれの銃口を5人に向けた。

「キラ！ 邪魔しないで！！」

「私たちは負けたままで終わる気は毛頭無い！！」

「たとえキラさんでも、私達を止められませんか！！」

「そう、なら・・・」

ビームが5人を貫く、そう思った時だった。ドラグーンがビーム

を撃つ事無くストライクフリーダムの翼に戻されたのは。

「キラ・・・？」

「はぁ、織斑先生、これで良いですか？」

「ああ、充分だ。小娘どもの気概を見せてもらったからな」

ビームライフルを下ろしたキラが目を向けた先、そこにはISSスーツを着たラクスト、千冬が立っていた。

「教官！？」

「お姉ちゃんも！」

ラクストは判る。オルタナティブというISSを束から受け取ったのだから、ISSスーツを着ていても違和感はないのだが、それでは千冬がISSスーツを着ている理由は・・・。

「篠ノ之、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィツヒ、貴様等に命令だ。これより福音殲滅戦を行う、その殲滅戦に参加しろ」

「え、それって・・・」

「正式に、福音と戦えるという事ですよ？」

「そうですね、そして今回の殲滅戦、キラを隊長としたISS部隊を限定的に発足、そのメンバーとして皆さんを登用する事にしました」

しかし、それでは千冬がISSスーツを着ている理由にはならない。千冬は確かにモンドグロツソの制覇者で、世界最強の名を持つブリュンヒルデだが、それも昔の話、現役を引退して嘗ての愛機も無い筈なのに。

「心配はいらん、私も専用機が届いたので・・・行くぞ、暮桜・真打！！」

千冬の首から下げられていたペンダントが光り輝き、彼女は白いボディを基本として、所々に桜色のラインと花模様を浮かべたISを纏った。

「それって・・・!」

「千冬さんの、嘗ての愛機・・・」

「篠ノ之、織斑先生と呼べ! それと、これは嘗ての暮桜を束が改良した第四世代型のIS、暮桜・真打と言う、私の新たな剣だ」

暮桜は元々、第一世代のISだった。それを改良して一気に第四世代にした機体、そして白式と紅椿のプロトタイプ、それが暮桜・真打だ。

「殲滅戦、私も出る事になった。まあblankこそあるが、まだまだ貴様ら小娘に遅れは取らん」

千冬が、嘗ての世界最強が共に戦う、これほど心強い事は無いだろう。皆、沸き上がる感動を抑えきれず、気合いを入れて自分達の愛機の名を呼ぶ。

「紅椿、行くぞ!」

「行くわよ、甲龍!」

「参りますわよ、ブルーティアーズ!」

「行くよ、ラファール・リヴァイヴ・カスタム?!」

「教官との初の共同戦だ、シュバルツエア・レーゲン!」

全員、ISを纏った。ラクスも、いつの間にかオルタナティヴを展開しているので、これで準備は完了、いつでも行ける。

「ラクス、カタパルトを」

「ええ、ナノマシンカタパルト展開、システム接続」

合計、7つのカタパルトが砂浜に造られた。その上にそれぞれが乗り、接続する。

「それでは、皆さん、宜しいですか？」

『おっ！』

オルタナティブが飛び上がり、ハイパーデュートリオンエンジンからのエネルギーをナノマシンカタパルトに通す。

「Nカタパルト接続、システムオールグリーン、進路クリアー、X20Aストライクフリーダム、発進どうぞ！」

「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きます！！！」

ストライクフリーダムが発進して、バレルロールをしながらVPSインシフト装甲を展開しながら上空へと飛び上がった。
ヴァリアブルフェ

「続いてブルーティアーズ、発進どうぞ！」

「セシリア・オルコット、ブルーティアーズ！ 参りますわ！！！」

ブルーティアーズが優雅に上空へと舞い上がり、ストライクフリーダムと並ぶ。更に、それを追う様に、鈴が下半身に力を込めた。

「続いて甲龍、発進どうぞ！」

「鳳 鈴音、甲龍！ 行くわよ！！！」

力強さを感じさせる勢いで飛び上がった甲龍を見送り、今度はシヤルロットの番だ。

「続いてラファール・リヴァイヴ・カスタム？、発進どうぞ！」
「シャルロット・デュノア、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？
！ 行きますす！！！」

オレンジ色の軌跡を残しながら、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？が飛び上がり、ストライクフリーダムに並んだ。

次は黒い兔、ラウラの出番である。

「続いてシュバルツエア・レーゲン、発進どうぞ！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ、シュヴァルツエア・レーゲン！ 行くぞー！！！」

シュバルツエア・レーゲンが発進して、箒は先ほどまでの迷いを完全に打ち払った瞳で茜色から夜空に変わり始めた大空を見上げる。

「続いて紅椿、発進どうぞ！」

「篠ノ之 箒、紅椿！ 参る！！！」

先の戦いで失態を、汚名を返上するべく、箒は姉から受け取った相棒を夜空へと舞い上がらせた。

「久しぶりの実戦だ。また頼むぞ・・・暮桜」

「続いて暮桜・真打、発進どうぞ！」

「織斑千冬、暮桜・真打！ 出る！！！」

最後に、現役引退から数年経って再び復活したブリュンヒルデがスラストから桜吹雪を思わせる光を放ち、生徒達が待つ空へと、数年ぶりに舞い上がるのだった。

全員の目標、福音の撃破、それを目指して8機のISが今、星空

を進む。

第二十七話 「ブリュンヒルデが蘇る」(後書き)

次回は遂にちーちゃん交えての福音戦第二ラウンド！ 暮桜・真打
の単一仕様能力がチートです。

第二十八話 「海上決戦」 (前書き)

連投しました！ 黄金週間の間なるべく多くアップしたいなあ。

第二十八話 「海上決戦」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十八話

「海上決戦」

満月が綺麗な夜空で、ステルスモードで浮かぶ福音に向けて砲戦パッケージ“パンツァー・カノニア”を搭載したシュバルツェア・レーゲンのレールカノンを放った。

放たれた弾丸は真っ直ぐ福音に向かい、着弾と同時に爆発を起さず。福音の姿は煙の中に消えた。

「初弾命中!!」

シュヴァルツェア・レーゲンの後ろにはそれぞれ、強襲用高機動パッケージ“ストライクガンナー”を搭載したブルーティアーズ、機能増幅パッケージ“崩山”を搭載した甲龍、防御パッケージ“ガーデン・カーテン”を搭載したラファール・リヴァイヴ・カスタム？が浮いている。

更に、その上空には高機動で動く紅椿、暮桜・真打が居て、その後ろには空中待機をしているオルタナティヴと、その隣で何かを準備しているストライクフリーダムが浮いていた。

ワンオフアビリティ
「単一仕様能力発動、ミーティアリフトオフ!!」

【ミーティア、発動】

ストライクフリーダムのワンオフアビリティ
単一仕様能力が発動、その背後にミーテ

イアが現れ、ストライクフリーダムがドッキングされた。

「ミーティアドッキング完了、全システムオールグリーン」

ミーティアのブースターが点火され、加速すると同時に^{イグニッション}瞬間加速^{リスト}を超える。

「続けて砲撃を行う！」

煙を掃いながら攻撃準備に入った福音を見て、ラウラは更に砲撃を続けた。だが、その弾丸は尽くがかわされ、ラウラに接近してきたのだが、それをセシリアが突撃して吹き飛ばすと、体勢を整えたセシリアのスターライトmk？からのレーザー、ストライクフリーダムからの大量のミサイルが福音を襲う。

「篠ノ之！ 合わせろ！！」

「はい！」

ミサイルとレーザーを回避している福音に、高機動で接近した千冬と箒はそれぞれ、紅椿のメイン武装である雨月と空裂、暮桜・真打のメイン武装である雪片・壱式を振るった。

千冬と箒、同じ道場で剣を学んでいたので、その太刀筋は全く同じ、その三振りの刀からの斬撃が同時に福音を断ち切るうと迫ってきたのだが、翼の様な非固定浮遊部位^{ファンロックユニット}によって防がれ、至近距離^{シルバール}からの銀の鐘を浴びせられる。

「箒！ 千冬さん！ このおっ！！」

二人が弾かれた瞬間、鈴音が連結させた双天牙月を頭上で回転させて、その勢いそのまま振り下ろす。

しかし、その大振りな一撃は簡単にかわされ、箒や千冬のように至近距離からの鈴の鐘を受けそうになったのだが、間一髪の所でシャルロットが両手のライフルを福音へと乱射したので、福音は射撃を中断、一気に加速して距離を取った。

「お兄ちゃん！ 今！！！」

「了解！」

ストライクフリーダムから放たれたミーティアフルバースト、しかしそれは銀の鐘の乱射によって殆どを相殺された。福音に命中したのはほんの数発程度に留まる。

「っ！ まさか、ミーティアフルバーストを防がれるなんて…銀の鐘が厄介だね」

ミーティアフルバーストにはキラも絶対とは言い切れないまでもかなりの自信があった。元の世界でもミーティアフルバーストで多くの敵を撃破してきた。だからこそ、ミーティアフルバーストは切り札としての自信が大きかったのに、それを防がれてしまった。それに若干だが動揺してしまうものの、キラもプロだ、直ぐに切り替えてミサイルやビームを撃って兎に角援護射撃をする。

キラ、セシリア、シャルロット、ラウラの射撃と、千冬、箒、鈴音の近接戦が福音を追い詰めるのだが、中々決定打になりえない。そんな中、千冬は雪片・壱型を握り締め、暮桜・真打との同調を高めた。

【絢爛・零落白夜、発動】

暮桜・真打の単一仕様能力、絢爛・零落白夜が発動した瞬間、残りシールドエネルギーが150になっていた暮桜・真打が黄金の光

に包まれ、一気にシールドエネルギーが満タンになる。

「おおおおおおお!!!」

雪片・弐型と同じ展開装甲を用いた雪片・壱型、桜色のエネルギー刃が現れて発光する。その瞬間、千冬は咆哮を発しながら二重瞬時加速シンクブーストに入り、福音の懐へと飛び込み、バリアー無効化の一撃を放った。

バリアー無効化攻撃である絢爛・零落白夜の直撃を受けた福音はそのまま海へと叩き落され、静かに海底へと沈んでいく。

しかし、福音が落ちた水面が突然盛り上がり、大きな水柱を立てながら中から光に包まれた福音が現れた。それも明らかに尋常じゃない様子でだ。

「ま、さか・・・」

「まずい、二次移行だ!」

光の中で福音が傷を修復して、非固定浮遊部位アンロックユニットから白い翼の様な物が生えてきた。福音が危機的状況の今、ここで二次移行セカンドシフトをしたのだ。

「ヤマト! ミーティアをパージしろ!! 先ほどよりも速度が上がっている筈だ!!!」

「っ! ミーティアパージ!!」

確かに、一時形態でも速度が驚異的だったのに、それが二次移行セカンドシフトをしてしまったら、更に速度が脅威になる。その状況では返ってミーティアが邪魔になってしまう。

「来るわ!!!」

鈴音の声、それが聞こえた時には既に福音の姿はこの場にいる誰よりも高い所に移動していた。

「速っ！？」

上空の福音から、先ほど以上の数の銀の鐘シルバールが放たれた。その数はキラのミーティアフルバーストを超えている。

「総員回避！ 無理なら防御だ！！」

千冬の声が聞こえた。同時に全員が防御の姿勢を取り、キラとラクスもビームシールドを展開して迫り来るエネルギー弾の雨を見た。空を覆いつくさんとばかりに迫り、降り注ぐエネルギー弾が次々と仲間達のシールドエネルギーを削り取り、着弾した海は水柱が絶えずに立ち上る。

「しまった！ 今で散り散りになったか！」

見れば全員、防御だけでは間に合わないと思ったのが、避けられる物は避けて何とか耐え切ったのだらうが、その所為でセシリアと鈴音と一緒に、シャルロットとラウラと一緒に、千冬とキラ、ラクスが一緒になっていたが、それでも距離が離れてしまった。そして何より、箒が一人、一番離れた所にいる。

箒が一人になってしまって好機と見たのか、福音は白い翼を頭上に掲げると、巨大なエネルギー砲を一瞬でチャージして、放った。

「箒！」

「箒さん！」

鈴音とセシリアが叫ぶが、遅い。

砲撃に気付いて避けようとした筈だったが、数瞬遅く、エネルギーの直撃を受けて海へと向って落ちていく。

それを追おうと飛び出したセシリアだったが、いつの間にかセシリアの背後に福音が迫っており、何とか振り切ろうとしたのだが、翼を大きく広げてセシリアを覆い尽くし、その逃げ場の無い翼の内側で四方八方から放たれた銀の鐘シルバールによってシールドエネルギーの殆どを失い、セシリア自身も意識を失って落ちてしまった。

「セシリア！」

助けに行こうとしたシャルロットもまた、それに気付いた福音の砲撃が放たれ、ガーデン・カーテンで防いだものの、威力が高すぎて弾かれてしまう。

そして、福音は一番の脅威と認識したキラと千冬を排除する為に飛び出し、途中で邪魔をしてくる鈴音とラウラを銀の鐘シルバールで威嚇しながら一直線に二人へと迫った。

「舐めるな！！」

絢爛・零落白夜によってシールドエネルギーが回復した千冬は迎え撃とうと雪片・壱型を構えて瞬間加速に入り、ビームサーベルを二刀流で構えて同じく瞬間加速に入ったキラと共に高機動近接戦を仕掛けるのだが・・・。

「クソッ！　なんて速さだ！！」

「っ！　はあっ！」

正直、福音のスピードはストライクフリーダムに迫るモノがある。第三世代ではあるが、二次移行をした機体の力とは脅威としか良い

様が無い。

「ならこれで!!」

ドラグーンもパージして射撃と近接戦の同時攻撃、ヴォワチュールリユミエールシステムをフルに活用して更なる速度を叩き出したキラは、何とか福音を超えるスピードに達する。

「もう一度行くぞ!!」

千冬もまた、再び絢爛・零落白夜を発動、そして切り札を切った。
イグニッションブースト 瞬時加速に入った千冬が福音の手前で分身をした。イグニッションブースト 瞬時加速の中から攪乱加速に入る瞬時攪乱加速、これで福音も混乱をする筈だ。

「決まれえ!!」

バリアー無効化、その効果を持った斬撃を放ち、今度こそ福音を撃破する・・・筈だった。しかし、福音は千冬が分身をした瞬間にテンベストブースト 攪乱加速を使って逃げており、千冬が切ったのは幻影だったのだ。

「まだだ!!」

だけど、福音が逃げた先にはキラがいる。キラが振るうビームサイベルを光り輝く翼で弾いたのだが、キラの腹部、カリドウス複相ビーム砲が福音の胴体を捕らえ、直撃した。

そのまま海に叩きつけるはずだったが、やはりそう上手くは行かない様で、福音は持ち直して再び上空へと昇る。

「お兄ちゃん・・・」

いつの間にか、セシリアを回収したシャルロットとラウラ、鈴音がキラの傍に来ていた。正直、これ以上となると福音を止める手段が見当たらないのだが、そこでキラに、皆にラクスから通信が来たのだ。

『キラ！ 白式の反応です！ 白式が高速で此方に！！』

「白式・・・一夏！？」

「そんな！ 一夏は怪我して意識不明だったのに！？」

無茶だ。意識が戻ったのだろっが、ダメージも抜け切らない状態で今の福音と戦ったところで勝てる筈が無い。

だけど、追いついてきた一夏の姿を見た時、誰もが言葉を失った。白式の姿が、今までと大きく変わっていたのだから。

「よ、キラ・・・それと皆」

「一夏・・・それは」

「ん？ ああ・・・夢の中でさ、力が欲しいか？ って誰かに聞かれて、それで頷いたんだ。それで目が覚めて起動させてみたらもうこうなってた」

つまり、白式がセカンドシフト二次移行を果たしたという事だ。

「一夏、アンタ・・・怪我は大丈夫なの？」

「そうだよ！ 一夏、さっきまで意識を失ってたんだよ？」

鈴音とシャルロットが心配するが、当の本人はピンピンしている。本当に大丈夫そうだった。

「い、ちかさん・・・」

セシリアも丁度、目が覚めたみたいで、セカンドシフト二次移行を果たした白式を見て驚いている。

「・・・一夏」

「千冬姉・・・」

「遅刻だ、馬鹿者」

「うん、ごめん」

千冬はそれだけ言うのと背を向けてしまう。だが、一夏にはそれだけで充分だったのだろう、これ以上は千冬の泣き顔を見てしまう事になるのだから、一夏本人としても遠慮しなかった。

「さて、じゃあ反撃開始だぜ！！」

白式が加わって戦闘が再開された。

今まで以上のスピードで動く白式を操り、一夏はキラの援護の下、福音に接近する。途中で放たれた銀の鐘はシルバール・・・。

「雪羅、シールドモードへ切り替え！」

白式の第二形態、雪羅が一夏の指示に従ってシールドモードへ移行、翳した掌から深緑のシールド、零落白夜に使われているシールドが展開され、銀の鐘を完全シルバールに防ぎ切って見せた。

「あれは、零落白夜のシールド・・・！」

復活した筈が雪羅のシールドを見て、一夏が使っていた零落白夜を思い出した。雪羅は零落白夜の力をシールドとしても使えるらしい。

「っ！」

今度は箒に向けて放たれた銀の鐘だが、二刀で弾きながら何とかかわし、高機動で避けながら飛ぶ。

「箒！」

「私は大丈夫だ！ 構うな！！」

箒と一夏が奮戦しているのを見ながら、キラ達はラクスの周りに集まっていた。

「さあ、オルタナティヴ・・・皆さんへの癒しの歌を届ける出番が参りました」

【歌姫、発動】

オルタナティヴの単一仕様能力“ワンオフアビリティ歌姫”、それが発動した瞬間、ラクスは歌い始めた。

元の世界で何度も歌ったラクスの持ち歌、そして・・・“彼女”も歌っていたラクスにとって思い入れの深いあの歌、“静かな夜に”を。

「これは・・・」

ラクスが歌い始めた瞬間、オルタナティヴを中心とした特殊なフィールドが展開され、ラクスの周りにいる全てのISを包み込む。フィールド内は多くのナノマシンで溢れており、そのナノマシンによってフィールド内全てのISの傷が癒え、シールドエネルギーすら満タンにしてしまった。

「これが、オルタナティヴの単一仕様能力・・・」

「良い歌、ですわね」

「ああ、何故だろう、心が癒される」

ISの事もそうだが、ラクスの歌は皆の心も癒してくれた。セシリアとラウラ、それに何も言わないがシャルロットや鈴音、千冬も、キラも・・・、全員の心を癒してくれたのだ。

「よし、これで全員戦えるな？ なら行くぞ！」

「よし来た！」

「今度こそ蜂の巣にしてさしあげますわ！」

「絶対に負けないよ！」

「これ以上、嫁の前で不甲斐ない所を見せる訳にはいかん！」

千冬の確認の言葉に、皆が気合を入れたのを見て、キラはそつと、ラクスの方を振り向いた。

「行ってくるね」

「はい、お気をつけて・・・必ず、帰ってきて下さいね、私の下に」
「うん」

福音との戦い、その最終ラウンド、その最後の戦いが幕を開ける。

第二十八話 「海上決戦」 (後書き)

やべ、そろそろ原作の続き買わないとネタが…。

次回は決着です。福音の操縦者は果たして…？　そして東は…？

第二十九話 「福音との決着」(前書き)

種、割れます。

第二十九話 「福音との決着」

ISS（インファイニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第二十九話

「福音との決着」

オルタナティブの単一仕様能力ワンオフアビリティ、歌姫で足止めをしている白式と紅椿以外全てのISSの傷が癒え、シールドエネルギーが満タンになった。

二人を援護する為に、再び飛び出した一同、ラウラのレールカノンが福音を襲い、かわされる事を承知で撃ち続けて一夏たちから引き離れた。

「すまん、回復に遅くなった」

「さあ、反撃のお時間ですわよ！」

「ラウラ、セシリア……！」

ラウラとセシリアが一夏に追いつき、自分達はまだ戦えると笑みを浮かべた。それに対して一夏も安堵して、それから他の皆の事も見る。

「一夏、さっさと片付けちゃおうよ」

「エネルギーは充分、僕達の心配はいらないよ」

「鈴、シャルロット……」

鈴音もシャルロットも戦意はまだ失われていない。むしろ一夏の登場で更に高まったと言っても良いだろう。

「遅刻した罰だ、確実に福音を仕留めろ」

「僕も、本気を出すから」

『もし被弾しても、私が確実に癒して差し上げます』

「千冬姉、キラ、ラクス……」

全員、まだまだ戦える。それだけでも一夏には心強い、仲間達と世界最強の座にいる姉と、誰よりも強い師匠と、心を癒してくれる歌姫の存在、それが一夏を更に強くしてくれる。

「よおっし！ はあ！」

気合充分に飛び立った一夏を追って、キラ達も飛び出した。

その後姿を見送る箒も、一夏たちがまだ戦うつもりで、それだけの気合が残っている事に安心する。

「一夏……（私は、共に戦いたい。あの背中を、守りたい！！）」

いつの間にか、自分を遥かに超えて強くなった一夏の背中、箒は改めて、自分がISに乗る意味を見出した。

箒は一夏と共に戦いたかったのだ。共に戦い、そして箒自身の手で、一緒に戦う一夏の背中を守りたい。他の誰でもない、箒自身の手で。その為に、箒は自分の専用機を望んで、今この紅椿に乗っている。

もう大丈夫、慢心も油断も、絶対にしない。一夏を守る、ただその為に箒は紅椿に乗って、戦場に立つのだ。だから………。

「紅椿……私に、一夏を守る力を！！」

その時だった。紅椿が光に包まれ、全身が黄金の光を放って紅い

装甲が金色に変わる。

【絢爛舞踏、発動】

これは、ワンオフアビリティ紅椿の単一仕様能力が発動したのだ。絢爛舞踏、それが
ワンオフアビリティ紅椿の単一仕様能力の名前で、紅椿の切り札。

「ワンオフアビリティ単一仕様能力・・・絢爛舞踏」

絢爛舞踏が発動した瞬間、紅椿の残存シールドエネルギーが一気に回復して、満タンになってしまった。

「これは・・・千冬さんの暮桜・真打の絢爛・零落白夜と同じ・・・」

千冬は絢爛・零落白夜によってシールドエネルギーを全快してバリアー無効化攻撃をしていた。紅椿に零落白夜の機能は無いので、ただシールドエネルギーが回復するだけなのだろうが、エネルギー効率の悪いこの機体にはピッタリの能力だろう。

「これは・・・！」

そして、絢爛舞踏の事を少しだが調べた箒は、その真価とも言うべき力を見つけた。それは箒の願い通りの事を実現してくれる力であり、白式と紅椿が姉弟機だという証明でもある。

箒はずっと下ろしっぱなしだった髪を、先ほど一夏からプレゼントされた白いリボンでいつもの髪型に戻すと、先に飛び立った一夏たちを追った。

「行くぞ、紅椿！」

福音との戦いは白熱していた。ラウラとセシリア、シャルロットの射撃が福音の動きを限定させて、一夏と千冬が接近戦で兎に角ダメージを与えていき、キラが時には射撃を、時には接近戦を行って福音の判断能力を奪っていく。

「うおおおおおおお!!!!」

だが、エネルギー効率の悪い白式は、第二形態になった事で更に消費効率が悪くなっている。もう残りエネルギーは10%しか無い。

「やばい、エネルギーが・・・!」

短期決戦用の機体と言っても良い白式では、こんな長時間の戦闘には不向きだ。それが仇となって、シールドエネルギーが限界に近づいている。

その時だった。一夏の隣に追いついてきた箒が並んだのは。

「一夏! これを受け取れ!!」

近づいてきた箒が白式の手を取り、握り締めると、繋いだ手を中心に黄金の光が二人を包み込んで、白式のシールドエネルギーをフルまでチャージした。

「なんだ? エネルギーが・・・回復!??」

「一夏、奴を倒すんだ!」

「・・・おう、行くぞ!!」

改めて、千冬は絢爛・零落白夜を発動、オルタナティブも歌姫を

発動していつでも回復出来るように準備をする。

そして、一夏と篝の事を黙って見つめていたキラは、フツと目を閉じると、少しだけ深呼吸をして目を開く。

「出し惜しみはしない・・・行こう、ストライクフリーダム！」

ストライクフリーダムを発進させた瞬間、キラの脳裏で種が弾ける様な衝動が起きる。キラの瞳からハイライトが消え、思考がクリアーになる感覚は、何度も戦場でキラを助けてきたSEEDの覚醒だ。

そしてSEEDを覚醒させたキラを見ていたルクスもまた、ハイパーセンサーを全開にして戦況を把握、全ての情報が頭を流れ、同じようにルクスの脳裏でも種が弾けた。

「皆さん、福音のシールドエネルギーも残り少ない筈です。あと一息、頑張ってください」

『了解!!』

最後の決戦が始まった。篝の紅椿が高機動で福音に切りかかりながら追い詰め、動きをどんどん封じていく。

「一夏！ 今だ!!」

篝の合図で一夏が雪片・弍型を構えながら飛んでくる。しかし、福音の目の前で押さえつけていた篝の目に福音の白い翼から銀の鐘シルバーベルが放たれるのが映り、至近距離で直撃してしまった。

紅椿から離れた福音は白式と切り合い、至近距離からの銀の鐘シルバーベルを浴びせようとするが、速度の上がった白式には当たらない。

「ラウラ！ 頼む!!」

「任せろ!!!」

ラウラが小島に着陸して構えていたレールカノンが発射され、弾丸が福音を掠める。それに振り返った福音は一夏に対して決定的な隙を見せた。

「はあっ!!!」

その隙を狙って切りかかった一夏だが、バク転でかわされ、レールカノンの弾丸も次々と避けられる。

その中で放たれた銀の鐘シルバールが地上にいたラウラを襲い、ラウラは間一髪で防御をするが、ダメージが大きい。

しかし、福音がラウラに向けて銀の鐘シルバールを撃っている背後からセシリアのブルーティアーズが4機、レーザーを撃ち込み、見事背中に直撃させる。

「私がここにおりましたよ!!!」

今度はセシリアの方を向こうとしていた福音に、鈴音が放った衝撃砲が直撃して、攻撃の隙を与えない。

「一夏! もう一回よ!!!」

だが、福音は衝撃砲の中、何とか飛び上がり、全方位に向けて銀シルバールの鐘を解き放った。

「鈴!」

衝撃砲の構えを解こうとしていた鈴音は避ける事が出来ない。シヤルロットがガーデン・カーテンを展開しながら鈴音を庇い、銀シルバールの

鐘を防ぐ。

「一夏、急いで！ もう持たない！！」

回復したとは言え、これだけの弾丸の嵐だ。ガーデン・カーテンを持ってしてもシールドエネルギーは大きく削られていく。

上空で銀の鐘シルバールを放つ福音の後ろからストライクフリーダムが接近してきて、ビームライフルとドラグーンによる射撃、ビームサーベルによる斬撃を繰り返して来る。

SEEDの覚醒をしたキラが出すその速度は今までの比ではなく、一つ一つの攻撃も威力、鋭さが増していた。

「一夏！ 千冬さん！！」

トドメだ。福音の上空から太陽をバツクに千冬が先に急降下してきて、バリアー無効化の斬撃を胴体に叩き込んで離脱、それに気を取られた福音は更に頭上から急接近してくる一夏に気付くのが遅れた。

「今度は逃がさねえ！！！！」

雪片・弍型を持っていない左手、その掌から零落白夜のエネルギーが溢れ、エネルギー爪、雪羅が展開されて、福音に叩き込んだまま近くの島まで飛んだ。

「動く暇なんて、与えるかよ！！！！」

その状態から一夏は千冬ですら出来なかつた芸当を遣つて退けた。イクニッションブースト通常の瞬時加速ではなく、瞬時に機体限界を大きく超えた速度を叩き出す瞬時大加速を使い、ハイパーイクニッションブースト島まで一瞬で移動すると、その砂浜に福

音を叩き付けた。

砂浜に横たわる福音に零落白夜を発動した雪片・弐型を突き付ける一夏だが、それを堪えて首を絞めようとしてきた福音だが、千冬とキラが追いついてきて腕を切り落とし、雪片・弐型のエネルギー刃が装甲に当たるのと同時に福音のシールドエネルギーが0になり、機能を停止させる。

「はあ、はあ、はあ……」

「……終わったな」

「ああ、やつとな……」

立ち上がって荒い息を吐く一夏に、近づいてきた筈が労いの言葉を掛けた。それに一夏も返すと、今度は千冬とキラの方を向く。

「千冬姉とキラもサンキューな、あのまま首を絞められてたら不味かった」

「ふん、まだまだ詰めが甘い……が、まあ、なんだ……よくやった」

「うん、本当に強くなったね一夏」

そっぽを向く千冬だったが、確かに声に出して一夏を褒めた。勿論、見えている耳は真っ赤に染まっている。それを指摘する勇気のある者は、残念ながらこの場にはいないが。

「帰ろっか!」

「うむ、帰ろっ」

「そうだな、山田先生に司令室を任せつきりだ」

「帰って、ゆっくり温泉にでも浸かろっか」

福音との戦いは終わった。

機能停止した福音はキラが運ぶことになり、セシリア達も追いついてきて一同、旅館へと戻るのだった。

今はただ、戦いの疲れを癒す為に、旅館の温泉を目指して……

第二十九話 「福音との決着」(後書き)

今回は福音の操縦者の登場と、学園への帰還です。でもその前に温泉で…ムフフ。

第三十話 「戦いが終わって」(前書き)

序盤、鼻血を準備してください。

第三十話 「戦いが終わって」

IS(インフィニット・ストラトス)
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十話

「戦いが終わって」

旅館に帰ってきて直ぐに全員大浴場へ向った。キラと一夏は当然男湯で、たった二人で広い露天風呂を楽しんでいる。

一方、女湯では千冬やラクス達が露天風呂に入っており、スタイルの良い千冬、箒、セシリア、シャルロットが、胸が小さい事を気にしているメンバー、鈴音、ラクス、ラウラの標的となっていた。

「ちょっと箒！ 何で同じ一夏の幼馴染なのにアンタとあたしでこんなに胸の大きさに差があるのよ！！」

「な！？ そ、そんな事、私を知るか！？ って、んあ！？ こ、こら！ む、胸を・・・揉むなあ・・・」

鈴が箒の後ろから手を回して豊満な乳房を揉みしだいていた。思わず声を出してしまった箒だが、直ぐに怒鳴り引き剥がそうとしたのだ。

だが、鈴の指が胸の先端を摘んだ瞬間、電流が奔ったかのような感覚が身体を駆け巡り、下半身にお湯以外のヌルツとした熱い何かを感じながらへたり込んでしまう。

「セシリアも大きいな・・・むう、やはりイギリス人は胸が大きいモノなのか？」

「ひゃん！？ ら、ラウラさん！？ やあ！ そ、そこはらめれす

「さあさあ！ みんなも楽しんでることだし、私もちーちゃんのバスタを揉ませぶぎゆるっ！」

「やらせるか馬鹿者」

「え〜！ ちーちゃんのイケズ〜！ じゃあじゃあ、東さんの胸を揉んでも良いからあ〜」

「風呂から叩き出すぞ」

「ぶう〜」

脹れて湯船に口まで浸かった束だったが、何を思ったのか目がキラッと光った。

「ねえねえちーちゃんちーちゃん！！」

「煩いぞ、何だ？」

「隣の男湯にはキー君といっくんが入ってるんだよね！？」

「その筈だが・・・まさか貴様」

「にゅふふふふ・・・そう！ そのまさかなのだよ！！」

湯船から飛び出した束は何処から取り出したのかステルスマント・
・ステルスバスタオルを身体に巻いて男湯と女湯を隔てる壁をよじ登り始めた。

「させるか馬鹿者が！！」

千冬が咄嗟に近くに置いてあった桶を掴み、全力で投げる。一直線に風を切り裂く音と共に桶は束の後頭部に直撃、凡そ人の頭に桶が当たったとは思えない爆音が露天風呂に響き渡った。

夜、キラとラクスは夕食も食べずに二人で砂浜を歩いていた。

月明かりと星の輝きに照らされる夜の海が静かに小波の音を奏で、寄り添いながら歩く二人の姿を幻想的な演出で映し出す。

「静かですわね・・・」

「うん、戦いがあつたなんて思えない、静かな夜だね」

適当な場所で足を止め、夜闇に染まった漆黒の海を眺める。小波の音以外、お互いの呼吸の音しか聞こえない静寂の世界で、二人は何を思うのか。

「ラクス・・・オルタナティブの事だけど」

「はい、“472個目”のコアを使っているみたいです」

「やっぱり・・・紅椿が“471個目”だから、これから色々大変な事になるよ。ラクスも、箒も」

コアは現在、世界に普及している数が467個、その内ナンバー001のコアは白式に、ナンバー002のコアは暮桜・真打に使っている。

だが、紅椿はナンバー471のコアを、オルタナティブにはナンバー472のコアを使っていて、この二つは世界の公表されていないコアだ。

「今まで以上に学園上層部や日本政府、世界各国の政府や国際IS委員会が煩くなる」

「はい」

「・・・守るよ、一夏やシャルだけじゃなく、箒も・・・そして何よりも、ラクスを」

「キラ・・・」

「僕には、ラクスが託してくれたフリーダムが今もこうして此処にある。僕はまだ、守る為に戦う事が出来るんだ。フリーダムで、ず

「っとラクスを守っていくよ・・・いつまでも」

それがキラの誓い、ラクスの祈りの形であるストライクフリーダムを託されるよりも前、嘗ての自由の剣を駆り、永遠の戦艦に乗るラクスと共に戦場を駆け抜けたあの時からの誓いなのだ。

「それでしたら、オルタナティブで私は歌い続けます。戦っているキラに、ずっと・・・私の歌を届けますわ」

「うん、ずっと、僕に君の歌を・・・届けて」

「はい、ずっと、永遠に」

改めてお互いの誓いを述べて、口付けを交わした。

自由と永遠、お互いが背負う二文字の力、その全てをお互いの為に、キラはラクスを守る為、ラクスはキラに歌を届ける為、その誓いを胸に、長く、深い口付けを交わすのだった。

翌日、IS学園一同は学園に帰る為にバスに乗り込んでいた。

「ねえ一夏、何でそんなにボロボロなの？」

「・・・聞くな」

昨夜、彼は箒と一緒にだったらしいのだが、そこで何があったのか、それは不機嫌そうなるウラと鈴音の姿、それと何処か呆けている箒の姿を思い出して納得する。

「俺の事より、なんかセシリアの奴が物凄え落ち込んでねえか？」

「みたいだね」

バスの後ろを見ると、暗い影を背負って落ち込んでいるセシリア

の姿があった。

ブツブツと何かを呟いている様子にも見えなかったが、残念ながらバスの最前列に座っている二人には聞こえない。

隣に座っている本音は、何故か“キス”という単語が聞こえ、何かを察したのか慰める様にセシリアの肩を優しく叩いていた。

「織斑、お前に会いたいという奴がいる」

突然、バスに乗り込んできた千冬そう言っつて、バスの外から知らない女性を招き入れた。

金髪のアメリカ人女性、その彼女に一夏は見覚えが無いだろうが、キラには見覚えがある、というか直接見ている。何故なら彼女は……。

「キラ君には昨日会ってるわね。織斑一夏君は始めまして、私はナターシャ・ファイルス、シルバリオ・ゴスペルの操縦者よ」

そう、キラ達が倒した福音こと、アメリカ・イスラエル共同開発の軍事用IS、シルバリオ・ゴスペル銀の福音の操縦者が彼女、アメリカのISテスト操縦者のナターシャ・ファイルスだ。

「シルバリオ・ゴスペルって、福音!? あれって無人じゃなかったのか!？」

「あ、一夏には言っつてなかったね。彼女、ナターシャさんはあの後、福音から回収されたんだ。福音は最初から有人機だったんだよ」

最も、ナターシャを救出したのはキラと千冬、ラクス、真耶だけなので、一夏が知らないのも無理は無い。ずっと無人機だと思っつていたのだから、まさか有人機だったなどと思っつてもいなかっただろう。

「あ、キラ君とは昨日挨拶してるわよね？」

「ええ、でも改めて、ストライクフリーダム操縦者のキラ・ヤマトです」

「え、つと、白式操縦者の織斑一夏です」

「よろしくね、それで・・・これはお礼」

一夏が呆然としてみると、唐突にナターシャの唇が一夏の頬に触れた。

「キラ君には昨日の時点でお礼言ってるから、一夏君には今日って思って、福音あの子を救ってくれて、ありがとう」

そう言つて微笑んだナターシャは静かに離れ、改めてキラと一夏の二人を視界に収めた。

「じゃあ、今度は二人とも戦場以外で会いましょう？ バイバイ！」

それだけ言い残してバスを去つて行つたナターシャ、後に残されたのはキスをされた頬に手を当てて呆然としている一夏、後ろから殺気を放つ箒とラウラと鈴音、それに苦笑するキラとラクス、驚愕に目を見開くクラスメートと真耶、呆れてため息を吐いた千冬だけだった。

第三十話 「戦いが終わって」 (後書き)

次回から夏休み！ キラとラクスは如何に過ごすのか。

第三十一話 「夏休み」 (前書き)

自分で何を書いているのか不明です。本当に…。

第三十一話 「夏休み」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十一話

「夏休み」

臨海学校が終わってから程なくして、IS学園は夏休みに入りました。

生徒達はそれぞれ実家へ帰郷する者、外国人は帰国する者が多く、IS学園に居残る者は結構少ない。

セシリア、ラウラ、鈴はそれぞれ自分達の国に帰国しており、一夏、箒は学園に居残り、そしてキラとラクスはシャルロットと共に日本国内だが小旅行をしてから、二人だけで日本を発った。

キラとラクスの目的地は臨海学校の時に束から教えてもらった現在の彼女の隠れ家なので、この旅も御忍びとなる。

「着いた・・・随分とまあ」

「人里から随分離れた所ですわね」

某国の空港を降りてから郊外まで移動して、更にISを部分展開して飛行しなければ辿り着けない秘境、そこに純和風の屋敷が建っている。

「キー君！ ラーちゃん！ やあやあ、待ってたよ」

インターフォンを鳴らすと、引き戸を開いて中から束が出てきた。海で会った時と変わらないいつもの束で、少し安心する。

「入って入って、待ってたんだよ」

「はい」

「東さん、これ、お土産ですわ」

中に入ってラクスが持つて来た紙袋を東に差し出した。

「んん？ こ、これは！ 東さんの大好物、辛さ10000倍力
レーのレトルト！！」

毒々しい真つ赤な箱を取り出した東はクルクル回りながら、小躍りして喜びを表した。それほど嬉しいのだろう。

「さてさて、二人に来てもらったのは他でもないんだよ……
・ちよつと小うるさい国際IS委員会の事だね」

「ラクスと箒の事ですか？」

「調べてみたらもう大変！ 箒ちゃんとラーちゃんが代表候補生でもないのに専用機を持った事でどこにISを帰属させるのかで大騒ぎで、更には箒ちゃんが日本所属なのは決定しているんだけど、ラーちゃんを如何するかで各国が騒いでるんだ」

このまま行けば箒は日本所属になる。紅椿も日本に帰属させる事になるのだから、問題は紅椿が第四世代という事で、その技術を欲する各国が箒はいらないから紅椿だけでもと狙っているのだ。

更に、ラクスは第五世代のオルタナティブという存在と、国籍だけは日本だけど、日本人ではない彼女の血が、大問題になっている。

「正直、第四世代も欲しいけど、第五世代はもっと欲しいみたいだねえ、更には言えばオルタナティブは世界初のオペレーター用のISで、余計に」

現在、第五世代のISはキラのストライクフリーダムとラクスのオルタナティブだけ、それからキラは世界で二番目のISを操縦出来る男という事で、キラとラクスの二人を欲しがる国が数多く存在しているのだ。

「正直、時間が残り少ないですわね」

「そうだね、計画を進めるスピードを少し上げないと、卒業までにじゃ間に合わないかも」

「東さんは引き続き量産型の計画進めていくとして、僕とラクスの方でも何か行動をしないと」

キラが目を移した先にあるのは、ラボの一角に置いてある企画書、その表紙に書かれた“アストレイ計画”と“ムラサメ計画”の文字。

「データは充分あるから、後はコアと装甲、それとビーム技術と変形機構の完成かな？ キー君の方は如何なの？」

「一人は確実かと、後は一夏たちです」

「そっか」

特に、一夏と篤の確保は絶対、この二人を自分達の陣営に入れなければ大変な事になるのだ。

「それにしても、戦争の兆候は今のところ見当たらないけど、世界中で極秘裏に開発されている武装、凄いや」

「これは・・・」

「戦争を意識した武装ですわ」

「いや、やはり馬鹿が多いよねえ。ISの戦争利用は禁止されてても、やっぱりキー君の予想通りの事をやってるもん」

確かに、たとえアラスカ条約でISの軍事利用を禁止していても、戦争目的の武装を極秘に開発している国は多い。中には大量殺戮兵器も存在しているのを見ると、本気で戦争をやるうとしていていると捉えて良いだろう。

「恐らく、本格的な戦争へ発展するのは僕と一夏が卒業してから、僕と一夏が何処かの国に所属した時が、幕開けでしょうね」

「第三次世界大戦・・・いえ」

「第一次IS世界大戦だね」

世界大戦まで残り少ない、そう考えて良いだろう。だから急がねばならない、戦争の抑止力となる力、その為の・・・。

「第五世代型量産機・・・」

東の隠れ家に着いた日の夜、キラとラクスは東が作った夕飯を食べていた。

「いやあ、ラーちゃんの手料理も食べたいけど、たまには東さんの手料理も食べてもらいたくて！　どうかな!？」

「美味しいですよ。まさか東さんが和食を得意としているとは思いませんでしたけど」

「そりゃあね、一応は神社の生まれだし」

篠ノ之家は神社だ。当然だが和食を幼い頃から食べてきた東は和食が好きだし、作る料理も和食がメインになってしまう。

「この肉じゃがはねえ、実はお母さんが作ってた味なんだよ。なので再現してみました！　お袋の味」

「なるほど・・・」

お袋の味、それを聞いてラクスが真剣な表情になった。如何やら味付けを覚えようとしているらしい。

「ねえねえキー君！ キー君は料理って出来るの？」

「まあ、それなりに」

一応、母からはロールキャベツの作り方を教わっている。キラも、ラクスも。

「そうだ。いつくんの白式が二次移行したよねえ？ キー君のストライクフリーダムは如何なのかな？」

「ストライクフリーダムですか？」

「調べてみたらストライクフリーダムって第一形態だから、もしかして二次移行もあり得るんじゃないかな？ って思うんだよ」

考えたことも無かった。ストライクフリーダムで充分満足しているキラだったが、確かにストライクフリーダムが第一形態なら、当然だがIS化している現在、二次移行をする可能性がある。

「正直ね？ ストライクフリーダムは私が作ったISじゃないから・・・っていうより、元々ISですらないから二次移行するかは不明なんだけど、面白い結果が出てきてるんだよ」

「面白い結果？」

「ねえキー君、今までストライクフリーダムに乗ってて何か感じなかった？ 何か語りかけられる様な感じとか」

「・・・いえ」

「そっか」

それ以上は何も言わなかったが、東が見つけた結果、そこにはストライクフリーダムの方からキラに対して語りかけている様な、アプローチしている様な、呼びかけている、そんな結果が出てきたのだ。特に福音戦の時には何度も、だからもしかしたらと思ったのだが、キラがそれに気付いていないのなら、今は言うべきではないのだろう。

「キー君」

「はい」

「もしも何かを感じたら、受け入れてあげて、それはキー君にとって本当に大切なものだから」

「・・・わかりました」

いつの日か、キラがその呼びかけに気付き、応える時がくるのだろう。その時、ストライクフリーダムが如何な進化を遂げるのか、楽しみで仕方が無い。

「さて！ 食べ終わった事だしオルタナティブの調整でも始めますか！」

食器を片付けた東はラボに戻った。まだまだ完成したとは言え、劣化版のビーム兵器やハイパーデュートリオンエンジン、ヴォワチユールリユミエールシステム、VPS装甲を更に完成へと高めなければならぬ。

「にゅふふふ！ 天才東さんに不可能はない！！ 必ず完成させてみせるよ〜！！」

マルチロツクオンを完全再現したプライドからか、オルタナティブの完全完成に躍起になっていた。

だが、完全に完成すればラクスの自衛能力は更に上がる、オペレーターとして戦場に立つ以上、自衛力の高さは絶対に必要なのだ。

「待っててねラーちゃん！」

今夜から暫く、キラとラクスが帰るまで、束は眠れない毎日となるのだった。

キラとラクスは束の隠れ家に一週間ほど滞在して、その間にストライクフリーダムとオルタナティブの調整を進めて本日、日本へ帰る事になった。

玄関先で帰る準備を終えていざ出発という状態になり、束は二人を見送りに出てきている。

「それじゃあね！　ちーちゃんといっくん、それと篝ちゃんによるしく〜！」

「ええ、束さんもお元気で」

「次にお会いするのは、また少し後ですけど、その間もお願いします」

「うんうん！」

それから、束は手に持っていた物を二人に手渡した。小さなチップだが、ISのパーツにも見える。

「それ、束さんが開発した剥離剤耐性チップだから、一応ストライクフリーダムとオルタナティブに搭載しておいてね」

「剥離剤？」

「どっかの馬鹿が造った強制IS装備解除兵器の事だよ、その耐性チップ。それを搭載することで耐性を付ける事が出来るから」

剥離剤リムーバーの効果は束の言う通りのもので、非常に強力な効果を持っている。しかし、実は欠陥兵器で、一度使われたISは耐性が出るから、二度と剥離剤リムーバーは効かない。その耐性となるものを束は造り、それをチップにしたのだ。

「それを搭載しておけばISを遠隔コントロールも出来る様になるよ。」
この辺は一度、剥離剤リムーバーを使われたISと同じだね!」
「ありがとうございます。学園に帰ったら直ぐに搭載しておきます」

これで全部だ。キラとラクスは隠れ家を離れ、来た道を戻り、空港へ向った。次に束と会うときは、恐らくまた、戦いになると予想しながら。

第三十一話 「夏休み」(後書き)

次回は…、何でしょうね？ そろそろ更識姉とか出そうとは思って
ですけどねえ…。いつにしよう？

第三十二話 「姉妹の一時」(前書き)

今回はほのぼの…のはずだったんですけどねえ。
シャル強化フラグです。

第三十二話 「兄妹の一時」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十二話

「兄妹の一時」

東の隠れ家から帰ってきたキラとラクスは、残りの夏休みをシャルロットと共に過ごす事にした。流石に旅行というには時間も残り少ないので、学園で過ごす事になるのだが、それでも充分だろう。

「ねえお兄ちゃん」

「どうしたの？」

「これ、何？」

現在、シャルロットはキラとラクスの部屋に来ているのだが、キラのデスクの上に乗っていた何かの資料を指差して尋ねてきた。その資料にはエクレール・リヴァイヴの文字が書かれており、それだけでシャルのISに何か関係あるのだという事がわかる。

「ああ、それ？ シャルをフランス・・・っていうよりデユノアから貰うのに恩を売っておこうと思って、それで僕が考案したリヴァイヴ系の第三世代型ISの企画書を作ったんだ」
「リヴァイヴ系の第三世代!？」

現在、デユノア社で作っているIS、ラファール・リヴァイヴは第二世代だ。第三世代は未だに基礎どころか企画段階にすら持っていない。

だが、キラはデュノア社の総力を挙げて未だに達成できていないリヴァイヴ系の第三世代の企画を完成させていたのだ。

「完成したらシャルの専用機にしようと思ってるんだ。で、データはデュノア社に送る代わりに、シャルを完全に僕の妹にする事を認めさせる」

「そ、そうなんだ・・・それで、その第三世代型のISの名前が、エクレール・リヴァイヴ？」

「うん、フラビッドスイッチ高速切替も可能にして、第三世代型兵器としてガトリングレーザー“ゴルジエ”と二連装パイルバンカー“グレート・スケール”、ジュービター・メッセンジャー近接レーザーブレード“ダルク”、超重力場発生用ビット“木星の使者”を搭載している」

その他にもラファール・リヴァイヴ・カスタム？に搭載されている武装は全て装備出来る様にしており、バスロット拡張領域も3倍になっているらしい。

「コアはラファール・リヴァイヴ・カスタム？のを使って、装甲も転用させてもらおうと思うんだ。フランス政府には第三世代の技術提供と、その試験機のテストデータ提供という形で許可を貰うつもり」

「へえ・・・」

最早スケールが大きすぎてシャルロットには付いて行けない。でも、自身のISが更に強くなるのならそれは歓迎すべき事だ。キラ達メンバーの中で、自分だけが第二世代という事に少しだけコンプレックスを抱き始めていたのもあり、余計に。

「でも、いくらなんでも足りなくない？僕のリヴァイヴを使うと言っても、パーツとか、全然足りないと思うんだけど」

「その辺は大丈夫、前のクラス對抗戦の時に襲撃してきた所属不明機、アレのパーツの使用許可も貰ってきたから、アレも使わせてもらうから」

他にも束の所から色々と貰ってきているので、IS一機を作る分には問題無い。

「後はもうフランス政府から許可貰ってシャルのリヴァイヴを預かるだけで良いんだ。夏休みが終わるまでに完成するから」

「じゃあ・・・」

「完成したらみんなでテストしてみよう？」

「うん！」

エクレール・リヴァイヴの話はこの辺にして、キラは珈琲を一口飲み、先ほどから編み物をしているラクスに目を向けた。

「ラクス、何を編んでるの？」

「マフラーですわ。冬には必要でしょうし、キラと、シャルさんの分を」

「僕の間も？」

ラクスの分も合わせて3人分を編んでいるので、今から編めば冬には間に合うらしい。

「私達、三人お揃いですわ」

「わぁ・・・！ うん！ 嬉しい！ すっごく嬉しいよ！ お姉ちゃん！」

「うふふふ」

感極まってラクスに抱きついたシャルロットを、優しく撫でるラ

クス、何処から見ても立派な姉妹だろう。

キラは珈琲を啜りながら微笑んで、手元の資料に目を落とした。そこに小さく書かれている『キラ・ヤマト、ラクス・クライン誘拐計画』という文字を。

「さて、フランスとドイツ、随分と面白い事を考えているね」

この計画はフランスとドイツにハッキングをして見つけたものだ。更にドイツにはストライクフリーダム、オルタナティブ、白式、紅椿、暮桜・真打、強奪計画の事も書かれている。

「予想が正しければ、学園祭かキャノンボールファストの時に来るね・・・フランスか、それとも亡国機業が」

もはやドイツと亡国機業の繋がりには確實、なら、ドイツが動くとしたら、間違いなく亡国機業が来る。その人員にもしかしたら来るのかもしれない、イギリスでサイレント・ゼフィルスを盗んだ千冬のクローンが。

「今まで、不殺を貫いてきた僕だけ・・・でも」

必要とあらば、容赦はしない。かつてストライクに乗り、連合の白い悪魔と呼ばれていた頃のように、人を殺す事も、厭わない覚悟を固めた。

昼の時間になり、部屋のキッチンではラクスが昼食の用意をしている。その間はキラとシャルロットはやる事が無いので、キラが趣味でやっているハッキングを後からシャルロットが見学をしているという、何とも変な光景が出来上がっていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「何？」

「ハッキングってさ」

「うん」

「犯罪だよな？」

「バレたらね」

バレなければ問題無いと言い張るキラは、何処がおかしい。

「えっと・・・今は何を見てるの？」

結局、それ以上は何も言えずにスルーしたシャルロットは、今は何を見ているのかを尋ねた。懸命な判断だろう。

「臨海学校の時の、福音のことだね。アメリカとイスラエルのホストコンピューターの福音計画を見てるんだ」

「福音の？」

「あの後、福音がどうなったのか気になってね。それで調べてみたら福音計画は凍結、機体も凍結処理されたらしいよ」

最も、更に調べてみたら福音の凍結は表向きで、ナターシャの専用機として、現在修復中らしい。

「せっかく第二形態に移行したんだから、凍結するのは勿体無いと判断したんだろうね」

「どこにでもあるんだあ、社会の裏側って」

「そういう事」

シャルロット自身、そういう社会の裏側が関係する立場に居た為、

驚きは無いのだが、やはりそういう世界を見てきた分、呆れも大きいのだ。

「キラ、シャルさん、出来ましたわよ」

「あ、わかった」

「今片付けるね！」

テーブルの上の資料を片付けて、そこにラクスが昼食を置いていく。今日の昼食はタマゴサンドとハムサンド、それとサラダにコーンスープと、洋風だった。

「わあ、美味しそう」

「今、紅茶を淹れますわね」

「じゃあ、僕は珈琲のお替りでも淹れようかな」

ラクスとシャルロットは紅茶を、キラは珈琲を淹れて、食事を始めた。

相変わらず、カリダから料理を教わっていたラクスの料理は絶品で、キラは勿論のこと、シャルロットもラクスの料理が大好きだった。

「ねえお姉ちゃん、僕も料理・・・やってみたいなあ」

「でしたら、今度一緒にやりますか？ 教えますわ」

「良いの！？ やる！」

「味見は僕かな、楽しみにしてるよ」

幸い、ラクスはフランス料理に関しても心得はあるので、フランス人であるシャルロットに教える事は出来る。勿論、シャルロットが他の国の料理を覚えたいのであれば、それでも問題は無い。

「明日から早速、始めましょうか？」
「うん！」

これは、明日からの食事が更に楽しみになった。キラはそれを楽しみにしつつ、タマゴサンドを口に運び、その甘さを楽しんでいるのだった。

昼食も終わり、夕方まで三人揃って部屋で映画を見たり、一夏が貸してくれたゲームをしたり、夕飯も楽しみつっ、本当に楽しい時間を過ごしていた。

もう直ぐ夏休みも終わり、また忙しい毎日がやって来る。そうなればこんな楽しい一日を過ごすのも大変になるので、今という時間を目一杯楽しんだ。

「さてと、そろそろ僕は入浴場に行ってくるよ」

「はい、それでは」

「ゆっくりしてきてね」

「うん」

着替えとタオルを持って部屋を出たキラは、大浴場に向う。

大浴場の前に着いた時、キラは足を止めて振り返ると隠し持っていた銃を近くの柱に向けた。

「・・・もう移動したんだ。流星は対暗部用暗部の家系、かな」

先ほどまで感じていた気配は、キラが振り返って銃を向けたときには既に移動していた。もう近くにはいないだろう。

「更識楯無・・・」

遂に学園上層部が動き出した。キラはその事を確信すると、今後の対策を練る必要があると考えた。

相手は学園上層部と生徒会、更にロシア、学園最強の生徒、何が起きてもおかしくないし、厄介な事態になっても不思議ではない。

「まあ、容赦はしないよ。もしも僕や、ラクス、シャルや一夏たちに手を出すのなら、僕は現・生徒会を敵に回す覚悟もある」

それも、向こうの出方次第だが、もしも敵に回るのであれば、容赦はしない。

第三十二話 「姉妹の一時」(後書き)

次回から二学期！ シャルの新型ISと生徒会長のあのお方が登場
です！

第三十三話 「キラ製のIS、最強の生徒会長」(前書き)

シャルの新型IS登場!! チート? なにそれ美味しいの?

第三十三話 「キラ製のIS、最強の生徒会長」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十三話

「キラ製のIS、最強の生徒会長」

一学期前日、つまり夏休み最終日にシャルロットの新しいIS、
第三代型IS“エクレール・リヴァイヴ”が完成した。

さっそくキラは一夏達と共にアリーナの使用許可を取ってエクレール・リヴァイヴのテストを始める事にして、全員で第三アリーナにきた。

「しかし、キラって本当に何でもアリだよな。ISの開発までしまうんだもんなあ」

「姉さんの所にいたからな、まあ・・・キラも天才だし、納得は出来る」

エクレール・リヴァイヴはキラが開発したと聞いたとき、一夏達は一様に驚き、納得して、何処か呆れてしまう。

「じゃあシャル、早速だけど展開して。直ぐに最適化フィッティングを始めるから」
「うん！ それじゃあ・・・行くよ、エクレール・リヴァイヴ！」

オレンジ色の光がシャルロットの身体を包み、光が弾けた後には、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？をスマートにした感じのオレンジ色の装甲のIS、エクレール・リヴァイヴを纏ったシャルロットの姿が現れた。

エクレール・リヴァイヴは嘗てのラファール・リヴァイヴの流れを組み、見た目こそスマートになっているが、共通する所がいくつも見られる。

胸の装甲部分はそのままなのが良い例だろう。非固定浮遊部位にはキラの知るレジエンドに近い形のビットが左右合わせて合計6機搭載されており、これが超重力場発生用ビットと呼ばれる物になるのだ。

「全体的にスマートで、流線的な装甲が美しいですわ」

「だが、そのおかげで速度は格段に上昇しているだろう。ガーデン・カーテンをそのまま搭載しているらしいから、防御も問題無い」

セシリアとラウラはキラが最適化フィッティングをしているエクレール・リヴァイヴを見て、そんな感想を抱いた。

エクレール・リヴァイヴはキラのストライクフリーダムからも少しだけデータを持ってきて、高速機動全距離対応型のISとして造られており、その要となるのが第三世代となつて切り替え速度が格段に上昇した高速切替ラビットスイッチなのだ。

「はい、最適化フィッティング終わり」

「はやっ!?!」

「もう終わったのか!?!」

本当に東並の速さに鈴音も筈も驚いていた。

一夏たちの驚きを余所に、早速だがエクレール・リヴァイヴのテスト飛行が始まる。一気に急上昇をしたエクレール・リヴァイヴは、紅椿ほどのスピードは無いものの、ブルーティアーズ、甲龍、シユヴァルツェア・レーゲンといった他の第三世代型ISと比べて随分と速い。

「速度は如何？ 問題無いかな」

『ラファール・リヴァイヴより速くて少し戸惑ったけど・・・うん、慣れれば問題ないかな』

「じゃあそのまま上空に居て、対戦相手を送るから」

そう言っただけでキラは箒とセシリアに目を向けた。

「という事で、箒とセシリア、相手になってくれるかな？」

「私とセシリアがか？」

「良いですけど、二対一ですよ？」

「エクレール・リヴァイヴは全距離対応だから、箒の前衛、セシリアの後衛を相手にどれだけ戦えるのか見たいからね」

それなら納得だ。

セシリアはブルーティースを、箒は紅椿を展開して直ぐに飛び上がった。

「じゃあ、早速だけど模擬戦、始め！！」

キラの合図と共にセシリアとシャルロットが放ったレーザーが空を覆った。

スターライトmk？から放たれるレーザーと、ゴルジエから放たれるレーザーの嵐が空を覆う中、レーザーの間を掻い潜って箒の紅椿がエクレール・リヴァイヴに近づく。

紅椿の空裂と雨月が振るわれて、紅いレーザーがスターライトmk？のレーザーに混じってエクレール・リヴァイヴに向うも、ガーデン・カーテンで防がれ、高機動で避けられるので、接近戦を考えた箒が一気に近づいて空裂と雨月で切り裂こうとすると、いつの間にかエクレール・リヴァイヴの手にはゴルジエではなくダルクが二本握られており、弾かれてしまった。

「ラビットスイッチ
高速切替！ 何という速さだ……」

ラファール・リヴァイヴの頃よりも更に速度が上がった高速切替ラビットスイッチによって、シャルロットは瞬時に全距離対応が可能となった。

先ほどはセシリアとレーザーの打ち合いをしていたかと思えば、不意を突いて切りかかってきた箒と一切のタイムラグ無しに近接戦をする。

箒との切りあいの中でセシリアがブルーティアーズでレーザーを撃つてきても、その機体速度が速すぎてレーザーが当たらない。

正に完璧な機体だった。攻撃、防御、速度、距離、全て完璧に対応出来るエクレール・リヴァイヴと、そしてその操縦者であるシャルロットは、現・IS学園一年生の代表候補生で最強と言っても過言ではないだろう。

「じゃあ、そろそろ行くよ！」

そろそろ頃合と見たのか、シャルロットは非固定浮遊部位アンロックユニットに搭載されているビット、ジュビター・メッセンジャー“木星の使者”を解き放った。

この木星の使者はセシリアのブルーティアーズとは違い、キラの知るレジェンドやカオスに搭載されていた搭乗者の特殊な空間認識能力に依存しないドラゴンの設計を元に造られている。

その為、シャルロット自身に特殊な空間認識能力が無くとも、問題なくビット操作と同時進行で機動や攻撃が可能となっているのだ。

「なっ！ なんだ、紅椿が……いや」

「身体が、重いですわ……っ」

ビット全てがセシリアと箒の周囲に展開された瞬間、ビットが光の輪で繋がり、輪の中心にいた二人の身体が突如重くなる。

ブルーティアーズも紅椿もその自重に耐え切れず地面に落下して、尚も地面に倒れたまま起き上がる事が出来なくなつた。

「これが超重力発生用ビット、木星の使者の能力、輪の中に強力な重力場を発生させるビットでね？ 今は木星並の重力を感じてる筈だよ」

木星は太陽系で太陽に次ぐ大きさの惑星であり、その予想される重力は地球の2.53倍、まず間違いなく宇宙空間や地球内での行動を基本思想としているISでは宙に浮いている事など出来る筈もない。

「はい、シャルの勝ち。如何？ エクレール・リヴァイヴは」

「問題ないかな？ これなら上手くやっていけそう！」
「良かった」

エクレール・リヴァイヴを待機状態・・・ラファール・リヴァイヴと同じネックレストップに戻したシャルロットはキラにエクレール・リヴァイヴの調子を尋ねられて、模擬戦での調子を思い出しながら問題ないと答えた。

むしろ、こんなISを造れるキラに改めて驚かされ、同時に尊敬の念を抱いてしまう。

「ふむ、超重力場か」

「ラウラ？ 如何したんだよ」

「一夏か・・・いや、あれは一度捕まれば抜け出すのはほぼ不可能に近いなと思つてな」

「ああ、確かになあ。木星並の重力とか、ぜってえにISの自重で地面に落ちるだろうし」

抜け出すとしたら自重に負けにくいくらいスラスタを全力で吹かして、落ちる前に重力場から抜け出る必要がある。現在、それが可能なのは核動力で動くストライクフリーダムくらいだろう。

機体の性能、シャルロットの操縦者としての腕前、全てが揃って、一年生代表候補生最強の存在がここに、生まれた。

IS学園の二学期が始まった。夏休みを隔てて久しぶりに会ったクラスメート達は相変わらず、特に変わったという者も見られない。それは教師二人、千冬と真耶も同じで、特に一学期と変わる事無く新学期の幕が開けるのだった。

「それで、夏休み中に会いに行ってきたのか？」

現在、職員室でキラと千冬が話をしている。内容は言わずもがな、束の事だ。

「ええ、話をしてくて、それでまあ・・・凄く不味い事が判りました」

「紅椿とオルタナティヴか」

「はい」

千冬も気付いていたみたいだ。あの二機が未登録のコア、つまり束が新しく造ったコアを使っている事に。

「暮桜・真打は昔の暮桜のコアをそのまま使っていたから問題らしい問題は特に出てこなかったが、そうか・・・紅椿とオルタナティヴは不味いな」

一応、対策も立てているので、暫くは問題なく過ごせるが、本当

に問題とするべきなのは事が起こってからだ。その時はキラも千冬も、覚悟を決めなければならぬ。

「とりあえず、今は深く考える必要も無い。しばらくはのんびりしている」

「ええ、そうさせてもらい・・・」

ます。と続けようとしたキラだが、視線を感じて言葉を止めた。千冬もそれに気付いて軽く溜息を吐いた。

「そうさせて貰う前に、やる事が出来たみたいですよ」

「みたいだな・・・まあ、あまり大袈裟にするなと言いたいのだが、無理だろうな」

「でしょうね」

「なら、せめて私の胃に穴を空けてくれるなと伝えておけ」
「わかりました」

失礼します。と言って職員室を出たキラは、教室には戻らず、屋上に上がった。そのままフェンスの前まで歩み寄ると、振り返って入り口の方に鋭い視線を向ける。

「いい加減、出てきては如何ですか？ ロシア代表IS操縦者、更識楯無生徒会長」

「やゝ、バレてたんだね。それでもストーキングは得意なんだけだね」

「気配の隠し方は確かに上手でしたけど、上手過ぎて逆に違和感がありましたから」

特に、こんな学園という人の多い所でそんな事をしていれば、多くの気配がある中で一人分の気配が感じられないポイントがあれば

違和感を感じるのは当たり前というのがキラの持論だ。

「それで、生徒会長自ら僕のストーキングなんて、何か御用でも？」
「まあね、キラ・ヤマト君。篠ノ之博士が発表した世界で二人目の男性IS操縦者、専用機はストライクフリーダムと呼ばれる第五世代型のISで、世界初のビーム兵器を搭載している。年齢は21歳で、同じクラスのラクス・クラインとは恋仲・・・これが私の持つヤマト君の情報なんだけど、間違いないかしら？」
「ええ、随分と調べたみたいですね。まるで僕の弱みでも握ろうとしたかのよう」

一瞬、楯無の笑顔がピクリと動いた。それを見逃さなかったキラは、彼女がキラの言う通り弱みを握ろうとしていたのだと核心して、同時に何も掴めなかったのだらうと予想する。

「それで、何の御用ですか？」

「そうね、生徒会への勧誘かしら。ヤマト君・・・織斑君もだけど、部活に入っていないわよね？ それで、現在一年生最強と言っても良い君がどこの部活動にも所属していないというのは、生徒会長として困るのよね」

「そうですか、でも僕は部活にも生徒会にも入る気はありませんし、織斑先生からも僕は部活動や生徒会に入らなくても良いという許可は頂いてますから」

だから、生徒会長としての権限など通用しないという事を暗に示した。

「それに、僕はどこそその暇な対暗部用暗部一族当主とは違って、忙しい身なので」

「っ、そ、そう・・・なら、仕方ないわね。でも、気が変わったら

いつでも歓迎するから生徒会室に来てね？」

それだけ言い残し、そそくさと屋上から立ち去った楯無の後姿を見送りつつ、キラはコンパクトノートパソコンを起動させて、昨夜にハッキングした情報を出した。

「更識楯無、IS学園生徒会会長にして、IS学園最強の名を持つロシアの代表IS操縦者。専用機はロシアが設計した第三世代型IS、霧纏ミステリアス・レイディの淑女。対暗部用暗部『更識家』の当主であり、17代目の楯無でもある」

これが楯無の情報だ。対暗部用暗部の事を知る者は一般人ではありえない、だからこそ彼女は、キラの先ほどの発言で相当な警戒心を抱いただろう。

「今後、如何出てくるのかだよ。僕の存在を危険として排除、もしくはロシアか更識家に僕を引き込むと言うのなら、絶対に敵対は避けられない。かと言って、何もしてこないのなら僕もそれで構わないんだけどね」

それなら特に警戒する必要も無い。

だが、キラは翌日早々、選択することになる。何故なら、翌日の放課後、更識楯無はキラに模擬戦を挑んできたのだから。

第三十三話 「キラ製のIS、最強の生徒会長」(後書き)

次回はキラVS楯無です。

仕事、まだまだ怒られてばかりですが、頑張っています！

第三十四話 「世界最強と学園最強」(前書き)

キラと楯無の模擬戦です。

第三十四話 「世界最強と学園最強」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十四話

「世界最強と学園最強」

放課後のISS学園第一アリーナ、そのピッドの片方にはキラとラクス、千冬の三人が揃っていた。

「更識と模擬戦をするらしいな」

「ええ、今朝になっていきなり。模擬戦をしよう、もし会長が勝ったら僕は生徒会に強制的に入会させられる事になるらしいです」

「ほう？ まあ、お前が負けるなどありえんが・・・まあ、奴もそれなりの自信家だからな。あの歳で更識家の当主を継ぎ、学園最強の名を持ち、更にはロシアの代表操縦者。それで天狗になる事はないが、やはりプライドもある。お前が勝った場合は如何なる？」

「今後、一切の生徒会及び学園の僕とラクス、シャルへの干渉の禁止です」

これがキラが楯無と模擬戦をする際の条件。キラが負ければキラは生徒会に強制入会で、勝てば今後の学園側からのキラ、ラクス、シャルロットへの干渉の禁止。

「そうか、お前が生徒会に入ると色々面倒だからな。さっさと勝つて来い」

「そのつもりです」

ストライクフリーダムを展開したキラは、カタパルトまで移動すると両足を接続させて、システムを繋ぐ。

「オルタナティブ部分展開、カタパルトシステムに接続」

ラクスがオルタナティブの両腕だけを部分展開するとオペレーターシステムをピッドのカタパルトシステムに接続した。

もはやラクスは管制室に行かなくても、ピッドに居るだけでオペレーター出来る様になったのだ。

「カタパルトシステムオールグリーン、進路クリアー、X20Aストライクフリーダム、発進どうぞ！」

「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きます！！」

カタパルトから射出されたフリーダムとキラ、アリーナに出ると丁度、対戦相手である楯無が出てきた所だった。

更識楯無の専用機、霧纏ミステリアス・レイディの淑女はロシア製の第三世代機である楯無の嘗ての愛機、モスクワの深い霧を基にして彼女が一人で組み上げたフルスクラッチタイプのISだ。

特徴としては、他のISと比べて少ない水色の装甲と、左右に浮いているクリスタル、“アクア・クリスタル”と呼ばれるパーツからナノマシンで構成された水のヴェールがドレスやマントの様に楯無を包んでいる点だ。

「へえ、ヤマト君のストライクフリーダムって、近くで見ると随分・・・天使って言うより本当に兵器みたいよね」

「そちらの機体も、水ですか・・・珍しい装備ですね」

互いに互いの機体の感想を述べて、試合が始まった。

楯無は蛇腹剣を構え、キラに突っ込んでくる。それに対してキラ

は両手のライフルを連射しながら後ろに加速して、楯無がビームを掻い潜りながら近づいてくると真横に向って更に加速、ドラグリーンをパージしてのオールレンジ射撃を開始した。

「誘導兵器使いながら高機動して、更に両手のライフルまで撃ってくるなんて・・・聞いていた通りの出鱈目な処理能力してるわ、ヤマト君」

大抵の人間ならこのオールレンジ攻撃で落とされるのだが、流石にロシアの代表操縦者であるだけあって、ギリギリではあるがドラグーンのビームを回避する楯無だったが、8機中4機のドラグリーンがビームソードを展開して突撃してくると、流石に焦りの色を見せた。

「っ！ 誘導兵器の射撃と近接戦、同時進行!？」

ビームを避ければビームソードが突っ込んできて、それを避ければライフル二挺からのビームが襲い掛かってくる。更にそれを避ければドラグリーンからのビームが飛んできて、避けるので手一杯の状況に追い込まれる楯無だった。

「くっ、まさか回避しかさせてくれないなんてね・・・でも、それで安心しちゃ駄目よ!」

突然、キラの周囲に霧が生まれた。その霧が何なのか解析しようとしたキラだったが、その瞬間、高熱を感知して、次の瞬間には霧が全て蒸発、強烈な衝撃と熱がキラを襲った。

「ぐっ!?! こ、これは・・・!」

「まだまだ行くよ!!」

再び霧がストライクフリーダムを包み込み、蒸発、その熱と衝撃が襲い掛かる。1500あったストライクフリーダムのシールドエネルギーが900まで減らされてしまった。

「ナノマシンの水が発生させた霧を、高温に発熱したナノマシンにより蒸発させて、膨大な熱と衝撃を与える兵器、ですか」

「へえ、気付いたのね。そうよ、これが霧纏の淑女の武装の一つ、ミステリアス・レイディ クリア・パッション 清き熱情よ」

そう、これこそが霧纏の淑女の武装の一つ、クリア・パッション 清き熱情だ。その力はキラの言ったとおり、ナノマシンで構成された水を霧状にして相手へ散布して、ナノマシンを発熱させる事で水を気化させて、その熱と衝撃で相手を破壊する。

「如何かしら？ クリア・パッション この清き熱情は貴方でも回避は無理だと思っわよ？」

「・・・なら、これで如何ですか？」

再び霧がストライクフリーダムを包んだ時、ナノマシンが熱を放出する前に霧が蒸発、霧散してしまう。

霧が消えた後に残っていたのは、ビームライフルをマウントしてアンビデクストラス・ハルバードモードにしたビームサーベルを回転させたストライクフリーダムだけだった。

「ビームサーベルを連結させて、それを回転させることで、ビームの熱を放出・・・そんな」

ビームサーベルのビームから発せられる熱が回転によって放出され、霧を吹き飛ばしたり蒸発させたりして、ナノマシンによる気化

の前に回避することに成功したのだ。

「期待通りよヤマト君……ますます貴方が危険だと思ったわ。同時に、絶対に貴方を生徒会に引き入りたいと本気で思ったけどね！」

キラがビームサーベルを二刀流で構えたのを見て、楯無は螺旋状の水のランスを展開して構えた。

「特殊なナノマシンで造られた槍、蒼流旋……結構えげつない武装よ」

「行きますす！」

ドラグーンを戻してハイマツトモードを維持したまま、高速機動で楯無に接近したキラを、彼女は蒼流旋で迎え撃つ。

ビームサーベルラスティ・ネイルの二刀流による斬撃を繰り返してくるキラに対して、楯無も蛇腹剣ラスティ・ネイルと蒼流旋で応戦しながら、斬撃の合間を縫って蒼流旋に装備された四門のガトリングガンを発射した。

だが、ガトリングガンは光学兵器ではなく、実体兵器。クリア・バッション清き熱情の様に熱量兵器であればストライクフリーダムのVPS装甲にも効果はあっただろうが、ガトリングガンでは一切のダメージが与えられない。

「成る程、実体兵器は一切無効化するというのは本当なのね」

ならばこれは意味が無い。ストライクフリーダムの蹴りが腹部に直撃して吹き飛ばされながらも、楯無は最後の切り札を切った。

「くらいなさい、これが霧纏ミスティアス・レイディの少女の切り札よ！！」

霧纏ミスティアス・レイディの少女の全身にあった水が蛇腹剣ラスティ・ネイルに集まり、それがストライ

クフリーダムに向けて振るわれた。

キラは咄嗟にビームシールドを展開して防ぐも、そのあまりの衝撃に大きく後ろへ弾かれてしまう。まるで複数の爆弾にでも吹き飛ばされたかの様なエネルギー量に、思わず焦りを滲ませてしまった。

「い、今のは・・・」

「これが霧纏ミステリアス・レイディの淑女の切り札、ミストルティンの槍よ」

防御用に全身を覆っているアクア・ナノマシンを一点集中させて、攻性成形させる事で強力な攻撃力とする霧纏ミステリアス・レイディの淑女が誇る一撃必殺の大技、そのエネルギー総量は小型気化爆弾4個分に相当する。

「まあでも、これで倒れなかったのはヤマト君が二人目なだけだね」

一人目は勿論、千冬だ。だからこそ、キラが二人目の存在。それでもキラはその威力に大きく弾かれたのだから、楯無としては充分な成果と言えるだろう。

「さてと、実は私も残りのシールドエネルギーが残り少ないのよね。ヤマト君は如何かしら？」

尋ねられて確認すると、ストライクフリーダムの残りシールドエネルギーは530まで減っていた。清き熱情クリア・パッションで大きく削られ、高速機動によって随分とエネルギーを消費していたのだ。

「そろそろ決めましょうか？」

「そうですね、僕も、ここで終わらせます」

ビームサーベルを戻して再び両手にビームライフルを構えたキラ

は脳裏で種が弾ける衝動を感じた。

瞳からハイライトが消え、クリアーになった思考、SEEDが発動した証だ。

「(ヤマト君の目からハイライトが消えた？ 何が起きたのかしら・
・・) どうやら、ヤマト君にはまだ何か秘密が多く隠されてるみたいね」

その秘密も気になる所だが、今はそれ所ではないと気を引き締め、
ラストイー・ネイル蛇腹剣を消すと、青流旋を腰溜めに構えた。

一触即発の空気が流れ、蒼流旋から滴り落ちた水がアリーナの地面に落ちた時、二人は同時に動く。

一気に突き刺そうとした蒼流旋を、キラは全身を大きく回転させながらバレルロールで回避して、擦れ違い様にレール砲を撃ち、背後に抜けて直ぐに連結させたビームライフルから強力なビームを発射、
ミステリアス・レイディ霧纏の淑女のシールドエネルギーを0にした。

「・・・あゝあ、負けちゃったかあ」

確かに楯無は負けはしたが、IS学園の生徒でキラをここまで追い詰められる人間は一人もない。それは間違いなく楯無の実力の高さを窺わせるのに充分だ。

「仕方ない、ヤマト君を生徒会に引き入れるのは諦めるわ。それに干渉も禁じられたし、もう何も出来ないしね」

それじゃあね。そう言つて楯無は自分が出てきたピッドに戻つて行った。

それを見送つていたキラは、まさか自分がここまで追い込まれるとは思つていなかったため、実力を過信するわけではないが、楯無

の実力の高さを思い出して改めて、学園最強の名を持つ彼女に、言
い知れぬ感情を持つ。

それは、不安とも言える感覚だと知るのは、もう少し先の話であ
り、今は兎に角、キラもラクスと千冬が待つピッドに戻るのだった。

第三十四話 「世界最強と学園最強」(後書き)

次回は……各部活動の一夏争奪戦と、学園祭準備です!!

第三十五話 「出し物」(前書き)

やっと原作の続きを買えたあ！！
∴痛い出費だぜ。

第三十五話 「出し物」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十五話

「出し物」

キラと楯無の模擬戦の翌日、朝からIS学園一年の生徒を全員講堂に集めて集会が行われた。内容はもう直ぐ開かれる学園祭の事についてなのだが、キラは朝から嫌な予感がしてならないのだ。

そんなキラの胸の内を余所に、壇上に現れたのは生徒会長である楯無、マイクを前にして今回の集会の概要を話し出した。

『さて、色々と立て込んで挨拶が遅れちゃったね。私は更識楯無、生徒会長だから、君達生徒の長よ。以後よろしく！』

まあ、挨拶もそこそこにして、今回一年全員を集めた理由なのだが、やはり学園祭の事だ。一年は初めての学園祭となる訳だから、説明という理由で集めたのは頷ける話だが、やはりキラは腑に落ちないらしい。

『まあ、学園祭の説明と言っても普通の高校で行われる学園祭と大差無いから特に語る事も無いんだけど、今年だけ新ルールを導入しました！』

その新ルール、その題名が楯無の後ろにあるスクリーンに投影される。そこに書かれていた文字を見た瞬間、キラは朝からしていた嫌な予感が当たったと目を覆いたくなっただけの言うまでも無い。

『名づけて！ “各部対抗織斑一夏争奪戦”！！ 織斑一夏を一位の部活に強制入部させましょう！！！！』

キラには生徒会から干渉禁止を約束されている以上、次に彼女たち生徒会が狙うのは当然、もう一人の男性IS操縦者である一夏だ。キラはその事をすっかり失念していた。

因みに、キラたちの中で部活に所属していないのはキラとラクス、一夏だけ。他の皆はというと、箒は剣道部、セシリアはテニス部、鈴音はラクロス部、シャルロットは料理部、ラウラは茶道部に所属している。

「やってくれたね・・・まさか、僕に手出し出来なくなった途端に一夏に狙いを変える、いや・・・もしくは一夏に狙いを絞ったのかな」

「生徒会として一夏さんに手を出し、更識家がロシア代表としてキラに接触するのでしょうか？」

「可能性は高いかな・・・兎に角、学園祭は一筋縄では終わらなさそうだよ」

一年生全員がハイテンションになっている中、キラとラクスはお互いに顔を見合わせ、神妙な面持ちで壇上の楯無に目を向けた。

「どうやったのかキラとラクスの視線に気付いたらしい彼女は、ニヤリという擬音が付きそうな笑みを浮かべ、まるでその表情が「手段は選ばないわよ」とでも言っているかの様に見えるのだった。

集会が終わり、直ぐに一年一組は学園祭の出し物を何にするか話し合っていた。部活の出し物もあるが、クラスの出し物もまた重要なのだ。

「山田先生、駄目ですよ。こういう可笑しい企画は」
「え！？ わ、私に振るんですかあ！？」

一夏も酷なことをする。明らかにこういう事態の対処が苦手な真耶に話題を振るなど、無謀を通り越して無茶だ。

「え、えっと……わ、私はポッキーのなんか良いと思いますよ……？」

何故か頬を紅く染めてトチ狂った事をのたまう真耶だった。

「とにかく、もっと普通の意見をだな！」

「メイド喫茶はどうだ？」

「……え？」

普通の意見を求める一夏に、まさかの人物からメイド喫茶という案が出てきた。

そのまさかの人物というのは、ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍人であり、少し堅物思考のある彼女の口から、まさかメイド喫茶なんて言葉が出てくるなどと、誰が予想出来ようか。

「客受けは良いだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら、休憩場としての需要もあるはずだ」

淡々とした口調ではあるが、ラウラの言っている事は正論だ。まあ、飲食店はという意味で、メイド喫茶にする意味は不明だが。

「あのね、ラウラ……メイド喫茶にしたとして、僕と一夏は如何

するの？ ずっと厨房なら別に良いけど」

暗に女装は勘弁してくれと、キラは言っていた。キラは女装にトウマがあるのだ、主にカガリやマリユ、エリカ・シモンズの所為で。

「キラと一夏には厨房と、それと執事の姿で接客をしてもらえば客も喜ぶだろう」

キラも一夏も、顔は良い。特にキラは元々の女顔が成長して中性的な超美形なので、執事の姿で接客をすれば学園の殆どの人間が鼻血を垂れ流しながら喜ぶ事請け合いだ。

「うん、良いんじゃないかな？ お兄ちゃんと一夏が執事服を着て接客ならみんな喜ぶと思うよ」

「じゃ、シャル……」

シャルまでラウラの味方になってしまった。

シャルは夏休み中にキラとラクスが束の所へ行っている間、ラウラと共にバイトをしていたらしく、夏休みを隔てて随分シャルとラウラは仲が良くなった。まるで姉妹の様に仲が良いので、キラもラクスも微笑ましい気持ちになって見守っていたのだが、まさかこんな所でラウラの味方をしてしまうとは……。

「織斑君とヤマト君の執事……良い！」

「メイド服と執事服はどうするの？ 私、演劇部だから縫えるけど……」

クラスの女子全員が賛同してしまった。

もっとも、キラも女装ではないので一応は安心しているのだが、

何とも言えない表情をしている。

「メイド服と執事服に関してはツテがある貸してもらえるか聞いてみよう……ごほん、シャルロットが、な」

「え、えつとラウラ……それって先月の？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね？」

『怒りませんとも！』

むしろシャルを怒れる人間がいるのなら見てみたい……千冬以外で。

かくして、学園祭でのキラ達1年1組の出し物はメイド&執事喫茶、“ご奉仕喫茶”に決まった。キラは執事の服装で女子達に接客をする事になるのだが、何となくラクスの方を見てみると……、背筋が凍った。

ラクスはニコニコと微笑んでキラを見ていた。美しい笑顔だともが口を揃えて言うだろうソレは、彼女の背後にゆらゆら揺れどす黒い瘴気によって千冬も裸足で逃げ出すであろう恐ろしさを感じさせる。

「キラ」

「……はい」

「お話、しますわよね？」

「……はい」

今夜は眠れないだろうと、キラは溜息を吐き、遠い目で窓から空を見上げるのだった。

第三十五話 「出し物」(後書き)

今回は布仏本音と布仏虚が出るのかな？

それとアンケート！ ストライクフリーダム第二形態の名称ですが、未だに決まりません。そこでアイデアを頂きたいです。

第二形態はストライクフリーダムとフリーダム、インフィニットジヤステイス、デステイニー、アカツキを混ぜ合わせたような機体です。何か良いものは無いかと。

第三十六話 「姑息な手段」(前書き)

楯無アンチみたいなのは表現は出てますけど、後々に和解させますので、ご安心を。

第三十六話 「姑息な手段」

ISS(インフィニット・ストラトス)
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十六話

「姑息な手段」

学園祭の出し物が決まったある日の事、キラとラクスは廊下を歩いていたのだが、生徒会室の前を通りがかった時、中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「一夏・・・？」

「それと、生徒会長の声ですわね」

何故、生徒会室から一夏の声が聞こえてくるのか、それは同じく聞こえてきた生徒会長の楯無の声が物語っている。

「やっぱり、標的を一夏に変えたんだ」

「どうします？」

「・・・立ち聞きは好きじゃないし、向こうに不干渉を言った僕が今更生徒会室に入るのはちよつとね・・・」

話なら後で一夏に聞けばいい。

二人は後で一夏に詳しい話を聞くと決め、急ぎ足で教室に戻る。教室に戻って少しすると、若干だが表情の固い一夏が帰ってきたので、丁度良いと話を聞く事にした。

「一夏、更識生徒会長と何を話してたの？」

「キラ？　なんで知ってたんだ？」

「私とキラが生徒会室の前を偶々通りがかつたら、中から一夏さんと更識会長のお声が聞こえましたもので……」

「そっか……実はさ」

一夏は楯無に勝負を挑まれたらしい。その勝負に一夏が負けたら楯無が一夏を鍛える。一夏が勝てば、その話は無し。

「最初はさ、キラが鍛えてくれるからいいって断ったんだぜ？　でももしたら先輩、顔色を変えて詰寄ってきたんだよ……」彼に教わってたら一夏君は取り返しのつかない事になる『なんて言われてそれでつい、カツとなって』

そこまで言うのならキラに鍛えられた实力を見せてやるという事になってしまったらしい。随分と安っぽい挑発に乗ったものだと思うが、楯無が言った取り返しのつかない事になるというのは少し、聞き捨てならない。

「成る程、一夏を僕から引き離す作戦か……」

「姑息な手段ですね」

一夏をキラから引き離して、そこからキラを中心として構成されているメンバーを崩し、キラの味方を全て楯無側に引き込む。

そして孤立したキラに、自分から楯無側に来るように仕向けるつもりなのだろう。本当に姑息な手段で、少し考えれば直ぐに判るような程度の低い作戦だ。

「一夏、正直に言っよ……一夏は多分、負ける」

「なっ！」

「たとえISだろうと、生身だろうと、一夏に更識会長と戦った時

の勝率は低いよ」

あれでも更識家の天才、ロシアの代表操縦者なのだ。IS操縦だろうと、生身の戦闘だろうと、今の一夏よりも実力は上のはずだ。

「一夏は剣道を辞めて長い。そして最近になってISでの戦闘の為に鍛え直し始めたばかり。その一夏が、現役学園最強の更識会長に勝てる？　今まで鍛錬を怠っていない相手に、今の一夏が」
「それは・・・」

無理だ。それは剣道をやっていた一夏が一番よく解っている事だろう。

キラの見立てだが、恐らく楯無は白兵戦においてはラウラと互角か、それ以上だ。ラウラに白兵戦で勝てない一夏が勝てる相手ではない。

「なあ、キラは勝てるのか？　先輩に」

「この前、ISでの模擬戦をしたけど、その時は勝ったよ。白兵戦でも、たぶん・・・勝てる」

キラは元々現役軍人だったし、アスランやバルトフェルド、ムウなどから徹底的に鍛え上げられたので、白兵戦に関しても自信はある。

そもそも、ナチュラルとコーディネイターとでは基本的に身体能力に差がある上、スーパーコーディネイターのキラの身体能力は軽く人間を凌駕しているのだから、勝てない道理はない。

「くそ・・・如何するかなあ。正直、鍛えてくれるのはキラが良いんだけど、会長に勝ち目無いとなるとマジで俺、先輩直々に鍛えられる事になるぜ」

正直、楯無の事が苦手な一夏は出来れば今まで通りにキラに鍛えてもらいたいのに、現実問題、それはもう不可能になってしまふ。

「……………一夏、もう一夏が会長に鍛えてもらうのは仕方ないとするよ。だから、少しだけ待ってて、僕もそれなりに準備を整えたら直ぐにでも一夏をまた僕が鍛えられる様にするから」

「本当か!?!」

「うん、僕もそれなりにコネはあるからね」

例えば世界最強とか、世界最高の天才とか、そして……………学園の支配者とか。

放課後、一夏が楯無と戦う為に武道場へ向つたのを見届けたキラはラクスと共に職員室に向かっていた。

二人の目的は只一つ、この学園の支配者との謁見許可を貰うため、その為に千冬に協力してもらおうのだ。

「そうか……………更識がな」

「ええ、生徒会長として僕に接触出来なくなり、更識家の方でも、ロシアの方でも、僕の事を詳しく調べられなかったから、今度は一夏を皮切りに僕の周りを会長側に取り込んで、僕を孤立させるみたいですよ」

「ふん、随分と姑息な手段に出たものだな……………あいつらしくもない」

「それだけ、切羽詰った状況なのか、只の興味本位なのか、負けず嫌いなのか……………ですわね」

だからこそ、なおさら会う必要があるのだ……………このIS学園の

裏の支配者、轡木十蔵に。

「わかった。彼に会う為の段取りは付けておく、恐らく会えるのは明日の放課後か、明後日の放課後になると思うぞ?」

「構いません」

「そうか・・・なら、手配しておく」

これでよし。一安心したキラとラクスは職員室を後にすると、特に用事も無いので寮に戻った。

寮の部屋に戻ってきた後、ラクスは大浴場に向ったので、キラは一人部屋に残されているのだが、ふと何気なくストライクフリーダムを部分展開して部屋全体をスキャンする。

「合計59個・・・随分と、仕掛けたものだね」

部分展開したストライクフリーダムを再び待機状態に戻すと、机の片隅の目立たない部分にある小さな窪みを押す。

するとその部分が開いて中から赤いボタンと青いボタン、黄色いボタンが出てきて、迷う事無く赤いボタンを押した。

「これで良しっ」と

ボタンを押した瞬間、部屋全体に電流が流れ、彼方此方で小さな機械が爆発する音が響いた。

「しかし、どうやって侵入したのかな・・・? まあ、パソコンは弄られた跡はあるけど、セキュリティは僕が開発したものを使ってるから何も得られなかっただろうけど、まさか盗聴器を仕掛けてくるなんてね」

先ほどの電流で爆発したのは部屋中に仕掛けられていた59個の盗聴器全てが爆発した音だった。

朝は特に異常が無かったので、昼間、キラたちが学校に行っている間に仕掛けたのだろう。他の部屋よりも破るのが難しい筈のドアを破って。

「はあ、千冬さんに頼んでドアの鍵をもっとセキュリティ性の高いものに変えてもらおう」

電子ロックなので変えてもらった後にキラが手を施せば例え楯無でも破れないだけのものにする自信があった。

「もし、本気で僕に敵対行動を取るなら・・・東さんにも動いてもらおうかな」

東が動けば、楯無は今後、二度とISを操縦する事が出来なくなる。更にキラが本気で動けば更識家を社会的・物理的にも潰す事など容易い。

「さてと・・・僕もそろそろお風呂の準備しないと」

男子入浴時間が出来てから寮の大浴場が使えるのが本気で楽しみになったキラは、ロッカーから着替えの下着とパジャマ、それから風呂道具とヒヨコの玩具を取り出した。

「うん、これで準備完了」

ラクスが帰ってくるまで、キラはパソコンを起動してハッキングを楽しむのであった。

・・・・・・ハッキング先がロシアと日本である事は、言わずも

がなである。

第三十六話 「姑息な手段」(後書き)

次回は学園祭開催！ まあ、ドタバタですね。

第三十七話 「学園祭開催」(前書き)

学園祭開催！ 長かった…。

第三十七話 「学園祭開催」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十七話

「学園祭開催」

あれから、一夏は楯無に敗北して随分と色々と心労の溜まる毎日を送っているらしい。毎日キラの部屋に来ては愚痴を言って、キラもそれに付き合いながら何処か楽しそうにハッキングをして、主に一夏の胃とロシアのコンピューター、日本のコンピューターが被害にあっていた。

そんな中、キラは千冬のツテでIS学園影の支配者である轡木十蔵と会う事が出来た。

「初めましてじゃな、キラ・ヤマト君」

「はい」

「用件は更識くんじゃな？」

「ええ、少し・・・彼女の行動に思うところがありました」

彼女の主観で、この学園で最も危険な存在と言えるキラとストライクフリーダムの情報は何としてでも引き出そうと、一夏を引き込むなど、手段を選ばなくなってきた事、その全てを話す。

「うむ・・・ワシの方からも言っておくが、恐らくは無駄じゃな。今度は更識家かロシア政府を裏で動かされる可能性が高い」

「その場合は僕の方で問題なく対処出来ます。何かあれば日本から

更織家という存在は消えてなくなり、彼女はロシアの代表から降ろされる事になるところか、彼女自身が二度とISに乗れなくなる様にしますから」

「随分と過激な報復じゃな」

過激には過激で返す。それがキラ流の報復術である。

「まあ、警告はしておいてやろう。それ以降の面倒は、ワシも見切れん」

「ええ、それで構いません」

「うむ」

こうして、学園の影の支配者と、世界最強の対談は終了するのだった。

そして、遂に学園の生徒たちが待ち望んだ学園祭が開催される。

キラ達一年一組は朝から出し物であるご奉仕喫茶の準備に追われていて、食材やメイド服、キラと一夏の着る執事服の用意が慌しく行われていた。

「じゃ〜ん！ どう？ お兄ちゃん、これ・・・似合うかなあ」

「こういう服は着た事がございませんが・・・キラ、如何でしょう？」

「うん、二人とも良く似合ってる。可愛いよ」

キラの目の前にはメイド服に身を包んだシャルロットとラクスの姿があった。

二人ともキラに褒めてもらいたくて、着替えてから真っ先に見せに来たのだが、実際に見せるとなると恥かしかった。しかし、褒め

られて悪い気はしないもので、二人とも満面の笑みを浮かべる。

「あ、あの・・・キラさん？ その、私の方は如何でしょうか？」

「セシリア？・・・うん、セシリアも、似合ってるよ」

「っ！ そ、そうですの・・・似合って、おりますのねえ」

微笑と共に褒められて顔を真っ赤にしながらセシリアは脳みそが蕩けてしまったらしい。ふらふらと覚束ない足取りでキッチンの方に歩いて行った。

「あらあら、セシリアさん・・・よほど嬉しかったみたいですね」

「お、お姉ちゃん・・・余裕の笑みが怖いよ？」

「うふふふふ」

因みに、キラは今のラクスのお笑みは、見たくなかった。

学園祭開催の時間が来た。

早速だがキラ達一年一組は学園中の女子から大人気で、主な理由はキラと一夏が執事服でご奉仕してくれる点だろう。メニューにはキラや一夏が客にあくしして食べさせてあげるといふものもあるのだ。

「一番席、ダーズリンとベリータルト入りました！」

「はい！ ヤマト君、4番席のオレンジジュースとサンドイッチ、持ってって！」

「了解」

本気で大盛況だった。

開店と同時に満席になり、客が一人である度にまた一人入ってきて、既に教室の前には行列がズラツと並んで、長さが目測だと5〜6m

はあるだろうか。

「あれ？ あそこにいるのは鈴？ ああ、一夏に食べさせてもらってるんだ……」

ふと、一夏は何処にいるのかと探してみると、チャイナドレスを着た鈴が来ており、彼女の注文であろう執事のご褒美セットのご褒美、一夏にあくんとお菓子を食べさせてもらっている。

「ん？ あれは……更識会長」

何故か、楯無がメイド服を着て混じっていた。

相変わらず神出鬼没、何処にでも現れる人だが、今回の事も目的は一夏なのだろうと思っていたのだが、何故か彼女はキラの方に来る。

「やあ。この前はどうも」

「約束、守る気が無さそうですね」

「……随分と面白いコネを持つてるのねえ。彼を使って警告してくるなんて」

「さて、何の事でしょうか？」

「いいわ、そっちがその気なら此方も考えがあるから」

挑戦的な目をキラに向けてきたが、恐らくは裏から更識家を動かすか、ロシア政府を動かすつもりでいるのだろう。キラの思っていた通りの展開なので、対処など容易い。

「会長が何をしても構いませんが……知ってますか？ 後悔先に立たずという言葉」

「私が何を後悔するということのかしら？ 貴方個人に出来る事なんて

高が知れてるわ」

「そうですか・・・警告は確かにしましたよ」

確かに警告は出した。後は楯無がどの様な行動に出るのか、だ。それ次第では日本という国から対暗部用暗部“更識家”は社会的にも物理的にも消えてなくなるか、ISそのものが二度と楯無に反応しなくなって、乗れなくなるか、若しくはその両方だ。

立ち去った楯無の後姿を眺める気も起きず、キラは改めて接客に戻った。スマイル全開、超が付くほどの美形であるキラの笑顔に、この日も多くの女子が墜ちたのは、言うまでも無い。

学園祭が開幕してから随分と時間が経った。漸く休憩を貰える事になったキラと一夏は二人で学園をぶらぶらする事になったのだが、如何やら一夏の友達が来る事になっているらしく、迎えに行く事になった。

「そんで、そいつ、五反田弾っていうんだけど、鈴とも知り合いなんだぜ？」

「へえ、五反田食堂か・・・今度連れてつてくれる？」

「おう！ すっげえ美味いから、気に入ると思うぜ」

来る事になっているという一夏の友達、五反田弾の話をしながら校門前に向かっていた二人に、スーツを着た一人の女性が近づいてきた。

一見するとOLの様に見えるのだが、キラは違和感を覚えた。明らかに訓練された人間の足運びをしているのだが、無理やり普通の人みたいに振舞おうとしているかの様な・・・そんな違和感が。

「ちょっといいですか？」

「はい？」

「失礼しました。私、こういう者なのですが・・・」

差し出された名刺を見ると、IS装備開発企業『みつるぎ』歩外担当・巻紙礼子と書かれていた。

「実は、織斑さんとヤマトさんには是非とも我が社の開発した装備を使っていただけならと思いましたが・・・」

一夏が言っていた。キラがラクスと共に東の所に行っている間、こういう企業の人間が何人も来て、白式に自分達の会社の装備を使つて欲しいと勧誘してきたと。

世界で唯一、ISが使える男子の専用機に装備を使つてもらつたというのは、相当な広告宣伝効果があるらしいのだ。

「残念ですが、僕はお断りします。ストライクフリーダムは現在の装備で初めて100%の性能を発揮出来るので、余計な装備は必要ありません」

「お、俺も・・・こういうのは学園の許可を貰ってからにしてください」

「そう言わずに是非！ 織斑さんでしたら此方の追加装甲や補助スラストー、ヤマトさんでしたら脚部ブレードなど如何でしょう!？」

しつこい、一夏ならそう思っているのだろう。しかし、キラは余計に違和感を覚えた。学園からの許可を取っていないのにこのしつこさ、何より先ほどから感じる匂い・・・これは、キラもよく知る戦場の匂いだ。

「と、兎に角！ 人を待たせてるので失礼します！ キラ、行こうぜ！」

「うん……もう少し、足運びに気をつけるべきですよ、フ
アントム・レディ？」
「っ！」

反応した。どうやら遂に動き出したらしい。キラと束が危惧する
相手が……織斑姉弟にとっても因縁のあるあの機業が。

「やっかいな事に……っ！」

一瞬、本当に一瞬だが感じた感覚、嘗ての戦争でレジェンドを駆
るレイ・ザ・バレル、そしてプロヴィデンスを駆るラウ・ル・クル
ーゼと戦った時に感じたアノ感覚が、一瞬だがキラの身体を突き抜
けた。

「ま、さか……」

「？ キラ……如何した？」

「……ううん、何でもない、よ……行こう？」

「？ おう」

何とか誤魔化したのが、キラの顔色は悪い。何故なら、アノ感覚、
レイ・ザ・バレルの様に憎しみの中に悲しみがあつたあの感じでは
なく、この世の全てに対する憎悪を孕ませた感じなのだ。

そして、そんな感覚を持つ者など、キラが知るかぎり一人しか存
在しない。

「でも、まさか……あの人は僕が殺した筈だ……ラウ・ル・ク
ルーゼは」

第三十七話 「学園祭開催」(後書き)

生きてます。クルーゼが…。

そして、最悪のMSが進化してISになりました。

第三十八話 「動く亡国（ファントム）、伝説の天帝」（前書き）

今回、出ます。あの男が。

第三十八話 「動く亡国（ファントム）、伝説の天帝」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十八話

ファントム
「動く亡国、伝説の天帝」

楽しい筈の学園祭、キラも楽しい時間を過ごせるのだと思っていたのだが、しかし・・・先ほど感じた感覚、この世の全てに対する憎悪を孕んだあの感覚を感じて、一気に緊迫感に包まれた。

「一夏、ごめん・・・用事が出来たんだ。五反田君の事はまた今度、紹介して？」

「え、どうしたんだよ？」

「ちょっと、行く所が出来たから・・・それじゃ」

「お、おい！」

正門前に向う最中にキラは一夏と別れて学園校舎側に戻りながらISのプライベートチャンネルを開き、千冬の暮桜・真打に繋ぐ。

『この回線はヤマトか・・・如何した？』

「織斑先生・・・いえ、千冬さん、緊急事態です。今から会えませんか？」

『・・・キラは今、何処にいる？』

「一夏と別れて校舎に向ってます」

『なら屋上に来い。あそこは今、誰もいないからな』
「はい」

千冬との通信を切って、今度はラクスオルタナティブに繋いだ。

「ラクス！」

「キラ？ 如何されました？」

「今どこ！？」

「これから休憩に入る所ですが・・・」

「なら直ぐに屋上に向って！ 千冬さんが待つてる」

「・・・何かあったのですね。わかりました、直ぐに屋上へ参りますわ」

ラクスとの通信も終わり、キラは更に走るスピードを上げた。既にオリンピック陸上の金メダリスト並みのスピードを出しているが、それ以上のスピードまでギアを上げて一気に校舎に入ると屋上まで駆け上がる。

屋上には既に千冬とラクスが待つており、キラは若干息を乱していたが、直ぐに整えて二人に歩み寄った。

「それで、何があった？」

「・・・先ほど、一夏と一緒に正門前に向かっていたんですけど・・・その時に学園敷地内で気配を感じたんです」

「気配、ですか？」

人の気配なら学園なのだから感じるのも当然だが、キラが言っている気配は違う。

「ラクスには判ると思う・・・この世の全てに対する憎悪を孕んだ気配」

「っ！？ ま、まさか・・・そんな！ 彼はキラが・・・」

「うん、確かに僕が殺した・・・それ以前に、あの人がこの世界にいる筈はないのに・・・でも確かに感じたんだ・・・ラウ・ル・ク

ルーゼの気配を」

「待て・・・何者だ？ そのラウ・ル・クルーゼという男は」

そう言えば千冬にはキラとラクスが別の世界から来た存在という事は話してあるが、詳しい事まで話してはいなかった。

当然だがラウ・ル・クルーゼの名前を出しても、それが誰なのか、何を意味しているのか、理解出来る筈もない。

「ラウ・ル・クルーゼとは・・・僕達の世界で起きた戦争の、第二次ヤキン・ドゥー工攻防戦で、僕自身の手で殺した男の名前です」
「私達の戦友、ムウ・ラ・フラガさんの父親、アル・ダ・フラガのクローンとして生み出された男でして、ザフト軍でも有名な知将でした」

そして、不完全な自分を生み出し捨てたアルと、それを招いた人類の競争を憎悪し、戦争の激化による人類の滅亡を図った狂人だ。

424

「随分とイカレた男なのだという事は理解した・・・それで、何故その男の気配を感じた？ キラが殺したと言っていただろう」

「ええ、間違いなく僕がフリーダムของทีมサーベルでコックピットを潰して、ジェネシスの線レーザーに焼かれたのを見ました・・・生きている筈が無いんです」

だけど、間違える筈が無い。一度、戦ったからこそ判るのだ、あの感覚はラウ・ル・クルーゼのものに間違い無いという事が。

「まあ、お前の軍人としての勘は信頼している。だから、その男が今、この学園の敷地内にいると仮定して話すぞ？ 如何すればいい？」

「一先ず、あの人も人が多い所で仕掛けてくる事は無いと思います。」

間違はなくあの人の狙いは僕でしょうから、余計な刺激は与えない方が得策ですね」

「下手に接触すれば殺されるか・・・」

人を殺す程度、クルーゼは何とも思わない。だから下手に学園の教員が接触をしなければ学園から死人が出てしまう。

それだけは絶対に避けなければならない。平和なこの学園を血で染めるなどあつてはならないのだから。

「それから、もう一つ・・・これは千冬さんにも関係のある話です」

「私にも、か？」

「亡国機業・・・その人間と思しき女性と接触しました」

「っ!」

一夏と千冬にとって亡国機業とは因縁浅からぬ存在だ。

嘗て一夏を誘拐した組織であり、おそらくはドイツ軍やドイツ政府と繋がっているであろう組織、その人間が学園内にいる。

「名刺を貰いました。巻紙礼子、おそらく偽名でしょう。IS武装開発会社の社員と偽っていますが、橋運びが訓練された人間のソレでしたし、この時期、このタイミングで一夏と僕に接触してくるとしたら、間違いないでしょう」

「ああ・・・顔写真はない、か。流石に」

「いえ、こっそりですけど、ストライクフリーダムに保存してあります」

「そうか、暮桜に転送してもらえるか？ 後で印刷して確認してください」

「はい」

ストライクフリーダムに保存しておいた巻紙礼子の映像を暮桜・

真打に転送した途端、ストライクフリーダムが一つの画面を映し出した。

それは学園の見取り図で、その一部に白い点が止まっていた。

「これは・・・一夏が更衣室に？」

「おいキラ、何だ・・・それは」

「これはキラが白式開発時に取り付けた発信機ですわ、一夏さんの現在位置を把握したり、白式に異変が起きれば知らせてくれるんです」

「・・・一夏にプライベートは無いな・・・いや、護衛を頼んでい
るのだから文句は言わんが」

弟にプライベートは無いのだなど、千冬は若干不憚に思ったが、キラとラクスとの立場を思い出して仕方が無いと強引に納得する事にした。

「でもここ・・・更衣室？ 何で更衣室になんっ!？」

一夏の現在位置を見て疑問に思っていた時だった。白式の異変を知らせる点滅が起きたのだ。

「白式に異変!？ 千冬さん!!」

「先に行け! 私は教師陣に知らせてくる、学園内でのIS行使は私の権限でキラとラクス、それと万が一の時を考えて一夏に出す!」

「了解! ストライクフリーダム!」

「オルタナティブ!」

「起動!!」

一瞬でキラとラクスはストライクフリーダム、オルタナティブを展開してVPS装甲をONにする。
ヴァリアブルフェイスソフト

「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きます！！」
「ラクス・クライン、オルタナティブ！ 参ります！！」

屋上から二機のISが飛び立ち、一気に更衣室前の壁まで移動すると、オルタナティブのCIWSを低出力モードで発射して壁を破壊する。

中に入るとISを装備していない一夏と霧纏ミスデアリス・レイディの淑女を展開した楯無、それから見慣れぬISを展開した女性・・・巻紙礼子がいた。

「今度はなんだ！」

「キラ！ ラクス！」

「ヤマト君と、クラインさん・・・」

「やあ一夏、会長・・・それと、巻紙礼子さん」

「チイツ、キラ・ヤマトかよ・・・」

巻紙礼子はもう一人のターゲットであるキラの登場に舌打ちをする。この状況ではもう一つの剥離剤リムパーを使うなど不可能なので、ストライクフリーダムを奪えない。

「まあ良いか・・・どうせテメエを殺せば手に入るんだからなあ！」

8本の装甲脚がストライクフリーダムに伸びて先端が開き、実弾射撃を開始した。

しかし、キラはそれを避ける訳でもなく、無防備に受けた。だが、ストライクフリーダムに一切のダメージは無く、巻紙礼子のISは無駄に弾を消費しただけに終わる。

「無駄です。僕の機体、ストライクフリーダムに実弾装備は一切効

きません」

「チツ、んだよその装甲・・・ならこれでどうだ!!」

「無駄なんです、アメリカ製第二世代型IS、アラクネは実体兵器しか装備されていない・・・勝ち目はありませんよ」

両手に日本のカタールを持って切り掛かってきたが、やはりストライクフリーダムの装甲に傷一つ付けられない。

逆にキラが抜刀したビームサーベルによって両腕が破壊され、8本の装甲脚も一瞬で持ち替えたビームライフルの連射で破壊されてしまう。

「クソがつ!!」

「っ! 一夏君、今よ! 願って! 白式は貴方に必ず応えてくれるわ!」

「白式が・・・、来い! 白式!!」

右手を押さえて白式を呼んだ一夏、すると巻紙礼子が奪った白式のコアが消え、一夏の右手の中に再構築される。

そのまま白式は展開されて、一夏の思いに応えるかの様にその純白の姿を現すのだった。

「な、なあっ!? てめえどうやって!」

「知るか! くらえ!!」

緊急展開された白式が雪片・弍型を構え、零落白夜を発動。手足を失って無防備なアラクネのシールドバリアーを突破して本体の絶対防御に直接切りかかり、その勢いのまま一夏はアラクネを蹴り飛ばした。

「ぐえっ」

壁に激突したアラクネは完全に大破している。そのまま拘束しようとして一夏がアラクネと、搭乗している巻紙礼子に近づいたその時だった。

キラは先ほどと同じ感覚と、背筋が凍る様なゾクツとした殺気を感じた。ラクスを壁際まで押し飛ばして自分達が破壊した壁と一夏の間立つとビームシールドを展開する。

「ぐうっ!!」

ビームシールドが展開された瞬間、壁に空いた大穴の向こうから緑色のビームが無数飛んできて、ビームシールドに直撃する。

「キラ!？」

「ヤマト君!？」

衝撃こそ凄かったが、何とか防ぎきったキラは穴の向こうを睨みつけた。

そこに居たのは見覚えのあるカラーリングのIS・・・背中にはドラグーンと思いきビットを無数取り付けたドラグーン・プラネットフォームがあり、ドラグーンの数こそ増えているものの、間違いなくあの機体の特徴を受け継いでいる。更にレジェンドが持っていたビームライフルの発展系と思われるライフルを持ち、特徴的なV字アンテナと白い仮面は・・・。

「久しぶりだね、キラ君」

「ラウ・ル・クルーゼ・・・」

「おや? どうしたのかね、そんな幽霊でも見たかのような表情をして」

「何故、貴方が此処にいるんです? 貴方は・・・僕が、殺した筈

なのに」

殺した。その言葉がキラの口から出て一夏と楯無の表情が驚愕に彩られる。

「ああ、そうだとも。確かに私は君に殺された・・・しかし、私は死の間に飲み込まれたのさ！ 君とラクス・クラインも経験しているであろう重力場にね」

「っ！ ジェネシスに焼かれる直前に、という事か」

「そういう事だ・・・さて、無粋なお客様もいる様だが始めようか。私と君の、因縁の決着を！！ 君の新しいフリーダムと、私の新たなプロヴィデンス・・・レジェンドプロヴィデンスでなあ！！」

最悪の展開になった。

キラの後ろには一夏と楯無、横にはラクスが居て、足枷になってる。クルーゼを相手にキラは足枷を嵌めた状態で勝てるとは思っていない。

一夏も楯無も、確かにIS操縦者としては強い方だろうが、残念ながらクルーゼを相手にすれば瞬殺されるのは火を見るより明らかだ。

「でも、やるしかない・・・今度こそ、僕があなたを！！」

その瞬間、キラの脳裏で種が弾けた。

SEEDを発動してクリアーになった思考は既に、この状況でクルーゼを相手に如何すれば有利に持ち込めるのかを考えている。

「来るがいい！ 人類の夢の形、キラ・ヤマト！ 我が憎悪が世界を滅ぼす前に、私を止めて見せるのだな！！」

「止めてみせる！ 例え戒めを解く事になっても、必ず貴方

を！！！
」

第三十八話 「動く亡国（ファントム）、伝説の天帝」（後書き）

次回は学園祭最中の学園上空で勃発するコズミック・イラ最強の存在
在土士の戦いです。

第三十九話 「自由（フリーダム） VS 天帝（プロヴィデンス）」（前書き）

キラVSクルーゼ！

第三十九話 「自由（フリーダム） VS 天帝（プロヴィデンス）」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第三十九話

フリーダム

プロヴィデンス

「自由 VS 天帝」

嘗て、キラが殺した筈の男、ラウ・ル・クルーゼが生きていた。
クルーゼはISと化した新たなプロヴィデンス、レジェンドプロ
ヴィデンスを駆り、キラの前に降り立つ。

「はあああ！！」

キラは両手にビームサーベルを構えてクルーゼに切りかかる。
クルーゼは右手にビームシールドを展開して受け止めると後ろに
飛び、二人は校舎の外に飛び出していった。

「ほう？ 以前のフリーダムよりも速いのだな」

「はあっ！！」

クルーゼはストライクフリーダムのスピードに若干感心を示すが、
キラのビームサーベルの嵐に思考を中断すると、自分も両手にビー
ムジャベリンを持って迎え撃った。

「なるほど、君自身の腕もあの時以上か」

「僕は、あれからオーブ軍准将として戦って、そして今はザフト軍
の白服だ！」

「フ……私と同じ地位にいたのか」

面白い、とクルーゼは晒うと全てのドラグーンをパージした。その数、全部で48基、嘗てのプロヴィデンスやレジエンドを大きく超える数のドラグーンが一機につき三つのビーム、合計144ものビームを放つ。

「っ！ グウッ」

直撃しそうなビームはビームシールドで防いだり、ビームサーベルでビームを切るなどして対応していたが、それでは間に合わない。とビームサーベルからビームライフルに持ち変えると、スーパードラグーンをパージしてレジエンドプロヴィデンスのドラグーンを何とか減らそうとした。

「甘い、甘いよキラ・ヤマト！ たった8基のドラグーンでは、私のドラグーン48基に対応し切れまい！！」

事実、スーパードラグーンは瞬く間に落とされ、キラ自身の被弾も増えていく。

「・・・キラ君、いつまで無粋な枷を填めているつもりかね？」

「気付いていたんですね」

「待っててやるう、さっさとリミッターを切りたまえ」

「・・・」

キラはリミッターを切る為にキーを立ち上げると高速タッチで作業を始めた。

しかし、その作業中に思いもしない人物の乱入があった。キラが苦戦しているのを見て参戦しようと思った楯無だ。

「会長！ 駄目だ！ 今すぐ逃げてください！！」

「あら、私だつて伊達にロシアの代表じゃないわよ。ヤマト君も苦戦してるみたいだし、二人で戦った方が良いでしょ？」

「あなたが敵う相手じゃない！！」

「それは私を甘く見すぎよ・・・まあ、何してるのかは知らないけど、時間稼ぎくらいはしてあげる」

ラストイー・ネイル

蛇腹剣を構えた楯無はクルーゼと対峙して優雅に微笑む。クルーゼと自分の実力差を、見抜けていないのだ。

「ふん、無粋なお客様が、私とキラ君の因縁に横槍を入れるか・・・
雑魚は下がっていたまえ」

「言ってくれるわね、ロシア代表をあまり舐めない方が身の為よ？」

イグニッションブースト

瞬時加速でクルーゼに接近して、一気に懐から切り掛かろうとした楯無だったが、クルーゼは鼻で嗤ってビームジャベリンを一閃、
ラストイー・ネイル
蛇腹剣が一撃で砕かれてしまった。

「っ！ 嘘っ！？」

ならばとナノマシンの霧をレジエンドプロヴィデンスの周りに展開しようとしたのだが、その瞬間、楯無は全方位からドラグーンによる一斉射でシールドエネルギーを一瞬で0にされる。

「きゃあああああっ！！！！」

「っ！ リミッター全解除完了！」

ISが解除された楯無をキャッチして隣に来たラクスに託すと、直ぐに一夏の所へ戻るよう指示を出した。

「キラ、お気をつけて」
「何とか、やってみる」

オルタナティブが校舎に入ったのを見届けて、キラはクルーゼを睨みつけた。

「てつきり、ラクスを狙うかと思ってました」

「ふん、それも良かったのだが、今は君との戦いに集中したかったのだよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

一瞬の静寂、そして……。

「行けえ!!」

「受けて立とうではないか!!」

キラのハイマツトフルバーストに対してレジェンドプロヴィデンスのドラグーン一斉掃射が炸裂した。

リミッターを切った事で先ほどよりも威力の増したビームやレーザー砲はドラグーンのビームを相殺していく。

更に、キラはドラグーンから放たれるビームの嵐の中を飛び、レジェンドプロヴィデンスに接近すると、近距離から胸部の複相ビーム砲を発射した。

「スピードが桁違いか……それにこの威力、イージスのスキュラ以上と見ていい……成る程、確かに強くなったよキラ君も、フリーダムもなあ!!」

キラとクルーゼの实力は互角、勝敗を決するのはお互いの機体の

性能差になるだろう。ストライクフリーダムとレジエンドプロヴィデンス、ドラグーンの数こそフリーダムは負けていて、既に全てのスーパードラグーンを落とされているフリーダムは、勝ち目が無い。

「そつだ、一つ教えておこうか。このレジエンドプロヴィデンスは元々、ISに変化したプロヴィデンスがセカンドシフト二次移行した機体なのだよ

！」

「つ！ セカンドシフト二次移行！？」

「見たところ、君のフリーダムはまだセカンドシフト二次移行をしていないみたいだ、今の状態では私には勝てんよ！！！」

すると、レジエンドプロヴィデンスが黄金の光に包まれた。ワンオ単一仕様能力を発動した証だ。ファビリティ

「さあ、このレジエンドプロヴィデンスの単一仕様能力、ジエネシスを受けるが良い！！！」

「つ！ ジエネシス！！！」

最悪な展開になった。

幸い、ここは学園上空で、ストライクフリーダムとレジエンドプロヴィデンスの高度は並んでいる。地上に放たれる事は無いが、ジエネシス・・・あの線レーザーを放たれば如何なストライクフリーダムと言えど、無事では済まない。

「その前に！！！」

レジエンドプロヴィデンスの持つビームライフルが変形して小型のジエネシスを思わせる形に変化したのを見て、ビームライフルを連結させ、発射した。

だが、レジエンドプロヴィデンスは余裕で回避して、ドラグーン

「キラあああああ！！！！」

ストライクフリーダムが敗れ、爆散したのを見ていた一夏は一目散に飛び出し、落下するキラを受け止める。

全身ポロポロで、頭から血を流して意識を失っているキラは、一目見ただけで重傷だという事が判った。

「ラクス！ 千冬姉に連絡してくれ！！ キラが不味い！！」
「っ！ はい！！」

ラクスも急いで一夏に追いついて来て、キラの状態を見て涙を流しながら青褪めていたが、一夏の指示を受けて急ぎ千冬に連絡を取る。

学園、それどころか世界最強と信じて疑わなかったキラと、ストライクフリーダムの敗北、それは一夏たちと、知らせを受けて医務室に駆け込んできた篤たちに、大きな動揺を与える事になるのは、当然の結果だった。

第三十九話 「自由（フリーダム） VS 天帝（プロヴィデンス）」（後書き）

敗北したキラ、一夏たちは何を思うのか。

第四十話 「落ちた自由」(前書き)

案外、呆気なく起きる男 W W

第四十話 「落ちた自由」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十話

「落ちた自由」

IS学園学園祭は中止になった。

亡国機業の構成員が“二人”、侵入してきて、逃がしてしまった事と、謎の第五世代ISと思しき存在にキラが敗北した事で厳戒令が学園全体に敷かれたのだ。

そして、レジエンドプロヴィデンスに敗北して重傷を負ったキラは現在、医務室のベッドの上に寝かされてる。全身と頭に巻かれた包帯が痛々しく、未だに意識を取り戻さない彼に、負傷したと聞いて駆けつけてきた箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの五人も、キラを医務室まで運んだラクス、一夏、千冬も痛ましげに見ていた。

「お兄ちゃん・・・どうして」

「キラさんが、負けるだなんて・・・」

この場にいる千冬とラクス以外の誰もが、キラが負けたという事を未だに信じられずにいた。

キラの実力、ストライクフリーダム性能、その全てが桁違いで、それ故に最強と想っていたのに、そのキラが一方的に落とされたなど、誰が信じられようか。

「失礼します・・・織斑先生」

「山田先生か・・・ストライクフリーダムは如何だ？」

入ってきたのは真耶だった。先ほどまでストライクフリーダムの検査をしていて、それが終わったために来たのだろう。

「ダメージレベルD、正直・・・修理出来なくはないですけど、修理した所で以前程の性能を発揮出来るかは・・・判りません」

「そんな・・・それじゃあキラ、もう前みたいに動かせないって事！？」

「ストライクフリーダムの性能低下・・・そうだ！ 姉さんなら、ストライクフリーダムを造った姉さんなら！」

「無駄だ」

鈴がストライクフリーダムの性能低下に危惧する中、箒が束なら完璧に修理出来るのではと提案したのだが、千冬がそれをばっさり切り捨てた。

「教官・・・それは何故ですか？ ストライクフリーダムは篠ノ之博士が造った機体だと聞いています。なら、博士なら直せない筈は・・・」

「無駄だ、ストライクフリーダムは束が造った機体ではない・・・いや、そもそもこの世界にアレを造った人間は存在しない」

千冬の言葉にパイプ椅子に座ってキラの手を握っていたラクスが慌てて立ち上がった。それはキラとラクスの秘密、束と千冬のみが知る話だ。

「千冬さん！ それは・・・」

「ラウ・ル・クルーゼが出てきた以上、もう隠す事は出来まい・・・そうだろう？ 束」

え？ と皆が千冬が目を向けた先、医務室の窓の方を向いた。
窓の向こう、窓枠の所に機械的なウサミミが見えた。そんなものを身に付けているのはこの世に一人しかいない。事実、箒は心底嫌そうな顔をしている。

「あちゃく、ちーちゃんにはバレちゃうか」

「篠ノ之博士・・・」

「やつほく箒ちゃん、いつくん、ラーちゃん」

窓を開けて中に入ってきた束はキラの容態を見て少しだけ表情を歪めると、いつもの笑顔に戻ってこの場にいる全員の顔を見渡した。

「ちーちゃんがこの場の皆に話すって決めたなら私は文句は無いよ、でもラーちゃんは覚悟出来てるのかな？ 流石にもう隠しておけないよ？」

「・・・そう、ですわね。彼が出てきた以上、もう隠せませんわ」

そういう事で、話す事になったのだが、その前に千冬は束にこの部屋を調べさせて、自分は医務室のドアを開けた。

ドアの向こうには聞き耳を立てている楯無の姿、キラとラクスの秘密を盗み聞きしようとしていたのだろう。

「あれ？」

「更識・・・グラウンド300周と両手両足の生爪剥がしと、今すぐこの場を立ち去るのと、好きに選べ」

「あ、あははは・・・失礼します」

楯無が立ち去ったのでドアを閉めて鍵を掛けると、束が差し出してきた物・・・キラのベッドの下に仕掛けられていた盗聴器を受け

取って握り潰した。

「さて、話すか・・・」

「それは、僕から話しますよ」

突然、キラの声が聞こえた。

全員、目を向けると、キラが目を覚まして上半身だけ起こしていたのだ。

「キラ！」

「ごめん、ラクス・・・心配掛けたね」

「・・・ご無事で、よかった・・・」

駆け寄ってきたラクスに微笑みかけて、安心させると、ラクスは限界を迎えたのか涙を流してキラに抱きついた。

抱きついて泣いているラクスを抱きしめながら、キラはラクスの後ろで涙を溜めてキラを見ているシャルロットも手招きする。

「っ！ お兄ちゃん！！」

シャルロットもキラに抱きついてラクス同様、泣き出した。

「おいキラ・・・お前、大丈夫なのかよ・・・？　　すげえ大怪我してるのに」

「うん・・・もう殆ど治ってきてるから」

事実、キラが負っている怪我は自然治癒力で殆どが治りかけてきている。

「馬鹿な事を言うな！　お前は全治3ヶ月と言われたんだぞ！？」

それが治りかけているなどと」

箒の言う事も最もなのだろうが、それはあくまでナチュラルの話だ。キラはコーディネイター、それもスーパーコーディネイター、自然治癒力はナチュラルの比ではない。

「それも含めて、全部話すよ・・・僕とラクスが抱える、秘密を」

漸く泣き止んだラクスとシャルロットはパイプ椅子に座り、他の面々は立ったまま話を聞く事に。キラとラクスの事情を知る千冬と束はキラの傍に立った。

「まず、第一に僕とラクスは・・・この世界の人間じゃないんだ」
「・・・は？」

当然の反応だろうが、今はそれに構わず話を進めた。

「僕とラクスの居た世界の年号はC・E、石油資源の枯渇や環境汚染の深刻化、民族・宗教戦争の激化などもあって地球の国家、勢力が統合されて西暦という年号から新たな年号としてC・Eが始まったんだ」

「私とキラはそんな世界のC・E・75年の世界から事故によって来たのです」

石油資源の枯渇や環境汚染の深刻化、それは今現在、この世界でも将来的に心配されている問題だ。

「僕達の世界では人類は既に宇宙にも進出していて、いくつかのステーションに人が住める環境を作り、そこで生まれ育つ者も多い」
「ですが、私達の世界の特徴として最も大きいのは・・・コーディ

ネイターという存在ですわ」

「コーディネイター？ どういう意味ですか？」

「コーディネイターというのはそのままの意味、受精卵の段階で遺伝子をコーディネイトされた存在、コーディネイターは普通に遺伝子操作などを受けずに生まれてきたナチュラルとは違い、頭脳や身体能力、自然治癒力、それに容姿や病気に対する抵抗力が高い」

「そして、私とキラも・・・そのコーディネイターですわ」

衝撃、キラとラクスがコーディネイターだという事に一夏たちは驚いていた。確かにキラもラクスも容姿はモデル以上に良く、頭も良い。他にも身体能力はラクスは普通の人より少し高い程度だったが、キラは異常に高かった。

そして何より、今回のキラの傷の癒える早さ、それはキラがコーディネイターで、自然治癒力がナチュラル以上に高かったからなのだ、知らされる。

「そもそも、何故コーディネイターなんて存在が生まれたのかは、C・E・15年に起きたジョージ・グレンという一人の男の告白が発端なんだ」

「ジョージ・グレンという男は幼い頃から学問、スポーツ万能で、ノーベル賞すら受賞していた男です。更には人類初の有人木星探査機、木星住還船『ツイオルコフスキー』設計に携わり、完成したそれで木星へ行っている時に地球への通信から自分がコーディネイターである事を告白したのです」

それが、人類初のコーディネイターの存在が世間に知らされた出来事であり、製法がネットによって公開された事によって禁止されたコーディネイター製造を、一部の裕福層が我が子をコーディネイターにして、多くのコーディネイターが誕生した切欠にもなった。

「そして、成長したコーディネイターの子供達は自然と、ナチュラルの子供達と、ヒトとしての差が出来上がって、それが社会問題にもなりました」

「コーディネイターは地上に自分達の住む場所が無くなって来た。だから宇宙にプラントを造り、そこに移り住んでいったんだ。でも、C・E・53年、遂に事態は大きく動いた」

「ファーストコーディネイター、ジョージ・グレンが暗殺されたのです。その二年後に再び遺伝子改変禁止に関する協定・・・通称、トリノ議定書が採決された事によって、ナチュラルの反コーディネイターの感情が最悪になりました」

そして、ナチュラルとコーディネイターが互いに殺しあう戦争に発展した決定的な事件がC・E・70年2月14日、世間ではバレンタインデーと呼ばれるこの日に・・・。

「地球連合軍は多くのコーディネイター・・・それも一般市民が住むプラントの一つ、食料生産コロニー、ユニウスセブンに核ミサイルを撃ち込んだんだ」

「っ！」

「それが、後に血のバレンタインと呼ばれる事件となり、コーディネイターがナチュラルを憎む決定的な原因となりました」

第四十話 「落ちた自由」(後書き)

次回から少し昔語りです。まあ、私は長々と昔語りを書く気はありませんけどねww面倒だしww

さて、一番の問題はストライクフリーダムです。修復は、形だけなら可能、だけど完全修復するのは不可能だから以前までの性能は無くなるという現状。オルタナティブのナノマシンを使っても完全修復は不可能な状態ですからね。

これは…二次移行セカンドシフトフラグ？

第四十一話 「異邦人の真実・1」 (前書き)

昔語りです、面倒です。

第四十一話 「異邦人の真実・1」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十一話

「異邦人の真実・1」

血のバレンタイン、それは多くのコーディネイターの命が奪われた最悪の事件。地球連合が放った核ミサイルによって崩壊したユニウスセブンにいた24万3721名もの民間人が死亡した。

「何で・・・何で民間人が住んでるところに核ミサイルなんて!!」

「核ミサイルを撃つたMAのパイロットは反コーディネイターを掲げる組織、ブルーコスモスの人間だった。彼等はコーディネイターをこの世から廃絶する事を目的としていたから、民間人であろうとコーディネイターである以上、殲滅する対象だったんだ」

「酷い・・・そんなの、人間が、同じ人間にする事じゃありませんわ」

「そうだね・・・僕も、そう思う。でも、彼等はコーディネイターを人間とは思っていないかった。宇宙の化物そゴキと言っていたから」

中にはこんな事を子供達に教えている所もあった。良いコーディネイターは死んでくれたコーディネイターだけだ、と。悪いコーディネイターは生きているコーディネイターだと。

「それがブルーコスモスのやり方、教えか・・・軍人としての意見を言わせて貰うなら、下衆の集まりだな」

「そうね、あたしもラウラに同意見よ。ブルーコスモスこそ化物な

んじゃないの？　って言いたいくらいだわ」

血のバレンタインから、戦争は激化していった。

南アメリカ侵攻、世界樹攻防戦、第一次ヴィクトリア攻防戦、世界中にニュートロンジャマーが散布されたエイプリル・フル・クライシス、カーペンタリア制圧戦、第一次ヤキンドゥー工攻防戦、グリマルディ戦線、第一次カサブランカ沖海戦、スエズ攻防戦、新星攻防戦、そして……。

「C・E・71年1月25日、この運命の日……僕はいつもの様にオーブの資源コロニー、ヘリオポリスのカレッジで友達と一緒にいたんだ」

そう、いつもと変わらない毎日のはずだった。それがこの運命の日、全てが崩れ去ったのだ。

「オーブは中立国、プラントにも地球軍にも属さない、ナチュラルとコーディネイターの差別もしない、完全な中立国だったんだ」

「ですが、一部の者がオーブのモルゲンレーテ、そのヘリオポリス工場で地球軍に依頼されるとある物を造っていたのです」

「とある物？」

「G……僕はガンダムと呼んでいる当時、最新型のMSを造っていたんだ」

MSはプラント、つまりザフト軍の主力兵器であり、MAが主力の地球軍が劣勢にならざるをえなかった人型機動兵器だ。

「造られていたのはGAT-X102デュエル、GAT-X103バスター、GAT-X105ストライク、GAT-X207ブリッツ、GAT-X303イージスの五機、地球軍はこの五機のデータ

を取ってMS量産計画を練っていた」

「ですが、ザフトでも地球軍がMSを開発している事を掴んでいました。そこで行われたのがG奪取作戦、その指揮官として……ラウ・ル・クルーゼがいたのです」

クルーゼの名前が出てきた所で皆、一瞬だが身体を硬直させた。キラを落とした男の名であり、キラと因縁のある人物の名に、緊張が高まる。

「作戦は見事に進んだみたいだね。事実、イージス、ブリッツ、バスター、デュエルは奪取された」

「? ではストライクは奪取されなかったのか?」

「うん、だって、ストライクには当時学生だった僕が乗って、ザフトを撃退したんだから」

それが、キラの人生の分岐点となった。

ただのヘリオポリスの学生だったキラが、MSに乗り、そしてそれ以降、長きに渡る戦いに身を置くことになったのだから。

「それから、僕は幼馴染と再会したんだ。ザフト軍の軍人としてイージスの奪取に来た……幼馴染、アスラン・ザラと」

「幼馴染……だと?」

「そう、一夏と篤みたいに、小学生くらいの年齢のときの親友で、親の都合で離れ離れになった一番の親友だったアスランと……再会して、それから敵同士として、戦う事になったんだ」

「っっ!」

一夏と篤、二人が息を飲んだ。一夏と篤も小学生の頃は一番の親友とも言って良い幼馴染で、都合により離れ離れになった。けど今はこうして、再会してからは共に学び、時には共に戦う仲間とし

と一緒にいる。

しかし、キラとアスランは敵同士として、命を掛けた戦いをして
いたのだ。

「地球軍の新型艦、アーケンジエルに僕とカレツジの友達・・・
サイ、カズイ、ミリアリア、トールも一緒に乗り込んで、地球に向
っていたんだ。その途中で何度も戦ったよ、アスランと、アスラン
の仲間とも・・・ストライクに乗って、彼等が奪取したガンダムを
相手に」

そして、地球への道程の途中で、キラはラクスと出会った。ユニ
ウスセブン慰問に訪れていたラクスは地球軍に襲われ、慰問船団は
壊滅、ラクスは救命ポッドに乗って漂っていたのをユニウスセブン
で氷を集めていたキラのストライクに拾われ、アーケンジエルに
回収されたのだ。

「それから戦いは続いた。漸く合流した地球軍の仲間、だけどザ
フト軍との戦いでヘリオポリスの民間人を収容した時に一緒に収容
されたカレツジのもう一人の友達・・・僕の初恋だったフレイ・ア
ルスターの父親が、乗っていた船ごと落とされて、その後、ラクス
はザフトに帰して、そしてアーケンジエルは・・・攻撃を受けな
がらも何とか地球に下りる事が出来た」

フレイには激しく罵倒され、守りたかったヘリオポリスの民間人
が乗っていたシャトルはデュエルに落とされたが、それでもキラは
戦わなければならなかった。

戦える者はキラとムウだけ、ストライクに乗れるのはキラだけ。
だから戦わなければならなかった。たとえ精神的にボロボロになっ
て追い詰められていても、フレイと肉体関係を結んで強迫観念に突
き動かされる様に、戦い続けた。

「その結果、僕はアスランの友達・・・ブリッツに乗るニコル君を殺し、アスランは僕の友達、ツールを殺した・・・その後は、僕もアスランも、お互いがお互いを憎しみ合い、敵として殺す事のみを考えて・・・・・・・・殺し合った」

今でもあの時の事は鮮明に覚えている。

ブリッツのコックピットを切り裂いた感触、目の前でツールが乗るスカイグラスパーのコックピットが潰される光景、アスランへの憎しみ、アスランからキラへの憎しみ、憎しみだけが突き動かした雨の中の殺し合いを。

「僕とアスランの殺し合いの結果は、アスランのイージスが僕のストライクに組み付いての自爆で決まった。アスランは自爆寸前に脱出、爆風で海岸に叩きつけられ、僕はストライクの中で辛うじて生きていたけど、重傷で・・・ジャンク屋のロウさんに助けられて近くに住んでいたマルキオ導師の伝手もあって、プラントの・・・ラクスの家には運ばれ、療養していた」

「キラが私の家に運ばれてから、暫くは何も無い平穏が続いていました。しかし・・・その間に遂に始まってしまったのです。戦争に終止符を打つ為に可決されたザフトの作戦、オペレーション・スピットブレイクが」

「戦争に、終止符を・・・」

オペレーション・スピットブレイクは地球軍の残された宇宙港があるパナマ基地を襲撃する作戦だった。

だが、その作戦目標は直前で変更され、地球連合軍最高司令部の存在するアラスカ基地・・・アークエンジェルの目的地になったのだ。

「え、つまりアークエンジェルって・・・」

「うん、敵の襲撃に遭った。それも捕虜として捕らえたディアツカの乗っていたバスターとスカイグラスパーしか無い状況で」

しかもバスターにもスカイグラスパーにもパイロットはいない。バスターは言わずもがな、スカイグラスパーのパイロットであるムウは転属になってアークエンジェルには居なかったのだ。

「その知らせをアイリオン・カナーバさんの通信で聞いた僕は、再び戦場に戻る決意をしたんだ」

「だが、ストライクを失ったお前には戦場に立つ為の剣が無い。違うか？」

「うん、ラウラの言う通りだった。だから」

「私が、キラに新たな剣を授けたのです」

それこそが、当時新開発されたばかりの最新鋭機、ZGMF-X10Aフリーダムだ。

「えっと、つまりストライクフリーダムの前の機体って事か？」

「そうなるね。僕はラクスに託されたフリーダムに乗り、地球を目指した」

「私はフリーダム強奪の手引きをした疑いを掛けられ、追われる身となりましたので、一時身を隠しました」

その後、フリーダムに乗ったキラは地球に到着、一気に大気圏を降下するとアラスカ基地で苦戦していたアークエンジェルの危機を救った。

「だけど、問題が一つあったんだ。アラスカ基地の地下には大量破壊兵器サイクロプスが設置してあった。一度作動すればアラスカ基

地の全てが溶鉱炉になる程の代物がね」

「ま、さか・・・」

「そう、アークエンジェルを含む軍上層部で不要と切り捨てられた軍人達を囚にして司令部の人間は既に避難していた。そして作動したサイクロプスは逃げ遅れた連合軍の軍人も、ザフトの軍人も、見境無く消滅させてしまった」

「ひどい・・・」

「味方諸共、なんて・・・」

何とか脱出したアークエンジェルとキラは合流を果たし、敵前逃亡をってしまった形のアークエンジェルは今更軍には戻れない。

なので、オーブに行く事になった。中立国オーブなら、事情を話せば匿ってくれるからだ。

「でも、オーブでの平穏も、長くは続かない。マスドライバーが無い地球軍は宇宙に上がる術が無い。だからオーブのマスドライバーと、モルゲンレーテの技術を欲した」

「侵攻してきたのだな」

「ラウラ正解、地球軍は量産する事に成功したMS、ストライクダガーと、新型MS三機・・・GAT-X131カラミティ、GAT-X252フォビドゥン、GAT-X370レイダーを投入してきたんだ。その侵攻艦隊の指揮官はブルーコスモスの盟主、ムルタ・アズラエル。戦争をゲームかビジネスとしか考えてない男だった」

アズラエルに関する情報はキラが独自に調べた事だが、事実その通りの男だった。

「こちら側の戦力は僕のフリーダムと、回収して修理した後になチユラル用のOSを載せ、ムウさんがパイロットになったストライク、オーブ防衛の要とも言える量産MS、M1アストレイの部隊、ア

クエンジェルと巡洋艦数十隻、それと途中で捕虜から開放されて僕達と共に戦う事を選んでくれたディアツカの乗るバスターだった」

キラ以外は皆、ストライクダガーの相手で精一杯になり、キラ一人で新型三機を相手しなければならなかった。その為、苦戦は必至で、殆ど防戦一方だったのだ。

「そんな時だったね。フリーダム兄弟機、ジャスティスに乗ってアスランが僕達を助けてくれたのは」

ラクスに叱咤されて、命じられるまま戦う事、ナチュラルを殺す事に躊躇いを見せていたアスランだったが、ジャスティスでキラを助け、地球軍が一時撤退した後の会話で遂に、二人は数年ぶりに親友として向き合う事が出来たのだ。

「だけど次の日、再び侵攻はあった。いくらジャスティスが増えても苦戦は必至、このまま行けばオーブは負け、モルゲンレーテもマストライバーも地球軍の手に渡ってしまう。だからウズミ様は僕達を宇宙に逃がし、民間人を国外に避難させて、オーブを焼いた」

第四十一話 「異邦人の真実・1」 (後書き)

次回は何とかエンジェルダウン作戦まで一気に行きたいですけど、無理かな？

第四十二話 「異邦人の真実・2」 (前書き)

SEED 編終了です。運命の話は省く事にしました。

第四十二話 「異邦人の真実・2」

IS〈インフィニット・ストラトス〉
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十二話

「異邦人の真実・2」

中立国オーブの自爆、それと同時に宇宙へと上がったアークエンジェルとイズモ級戦艦クサナギはL4ポイント、嘗てブルーコスモスによって崩壊したコロニーであるメンデルに到着した。

「メンデルに一時身を隠してクサナギを完成させる事になったんだけど、アスランが父親に戦争の事を如何考えているのか聞きにプラントに戻ったんだ」

「さて、そのアスラン・ザラは確か・・・」

「うん、ジャスティスに乗ってフリーダム奪還、もしくはフリーダムの完全破壊とパイロットの抹殺、関係した全ての破壊を命じられていた。だけどアスランは僕達と共に戦うという選択をしたから」

「戻れば間違いなく裏切り者扱いですわね」

アスランが一度戻ってから、アスランはやはり裏切り者として拘束、後に拷問に掛けられることになっていたのだが、プラントで動いていたルクス率いるクライン派が助け出し、バルトフェルドが艦長を務める高速戦艦エターナルで脱走、迎えに来たキラの協力もあって追手を退け、アークエンジェルとクサナギに合流を果たした。

「でも、直ぐに敵は来た。また地球軍・・・それもアークエンジェル級2番艦ドミニオンと、あのオーブで襲ってきた新型MSも一緒

に。そして、ドミニオンの艦長は嘗てアークエンジェルの副長をしていた仲間、ナタル・バジルールさんだった」

嘗ての仲間との戦い、それはお互いに勝手知ったる戦法での戦いになったが、マリユールよりもナタルの方が艦長として、指揮官としての資質は高かった。

当然、戦法はナタルの方が上手で、アークエンジェルは窮地に立たされる。

「僕もアスランも、ムウさん、ディアッカも新型MSやストライクダガーを相手に苦戦した。当然だよ、相手は数では上なんだから」

たとえキラとアスラン、ムウ、ディアッカがずば抜けた操縦技術を持っていても、数の暴力には苦戦も必至だ。

だが、そこで不味い事態になったのだ。ムウがラウ・ル・クルーゼの気配を感じて、ザフトが来ている事を察知した。

「ちょっと待て、気配って・・・そんな曖昧なもので判るものなのか？ 俺も剣道とかやってたし気配とかは理解出来るけどよ、ロボットに乗ってて、しかも宇宙でだろ？ 無理じゃないか？」

「普通ならね。でも、ムウさんとクルーゼの間には特別な何かがあった。それによってお互いが近くに居れば察知出来るんだ」

まだ話すときではないので、詳しくは話さなかったが、もうそろそろ話す時が来る。クルーゼの正体と、キラの出生の秘密を。

「ムウさんと、それを追ったディアッカがメンデル内部に入って、僕とアスラン、M1アストレイ部隊だけで戦う事になったけど、Nジャマーキャンセラーを搭載して核エンジンで動くフリーダムとジヤステイスとは違い、バッテリー式の敵機はそろそろパワーダウン

を起こす時間だった。だからドミニオンは撤退、僕はアスランをアークエンジェルとエターナル、クサナギの護衛に残してメンデル内部に侵入していったんだ」

メンデル内部ではディアツカのバスターとイザークのデュエルが対峙していて、話をしていた。キラは自分とアスランの様な事にはならないように言い残し、先を行ったムウを追う。

追った先でランチャーストライカーを装備したストライクがクルーゼの乗るゲイツに苦戦していたので、キラはクルーゼのゲイツを瞬殺、戦闘不能に追い込んだのだが、クルーゼはそのままゲイツから降りるとメンデルの研究所に逃げてしまった。

「メンデル内部は・・・何て言えば良いのかな、まるで人の欲望の結晶とでも、言えば良いのか」

「如何いう事よ？」

「メンデルは遺伝子研究を行っていた研究施設なのです。当然、ここでは実験体となったモノも」

『っ！』

「そして、メンデルは僕の故郷でもあったんだ」

「お兄ちゃんの、故郷・・・？」

「うん、僕はメンデルの研究所で生まれた・・・スーパーコーディネイターだから」

スーパーコーディネイター、ここまでの話で初めて聞いた単語だ。コーディネイターと名が付いているから、コーディネイターに間違いは無いのだろうか。

「スーパーコーディネイターっていうのはね、元々はコーディネイター作成で、受精卵へのジェネティックエンハンスメントにおいて、クライアントのオーダーに基づき技術者にデザインされた塩基配列

どおりの形質が胚の育成過程で発現しなかったという例が少なからずあった事が発端とされているんだ」

「それはつまり、たとえば蒼い瞳の子供が欲しくてオーダーしたが、実際に生まれてきた子供の瞳が蒼ではなかったという事か？」

「はい、この現象は生物である母体という装置が不均質であり、それが様々な変数となって胚の育成に影響を及ぼすからと考えたのが、ユーレン・ヒビキ博士です」

そこで考えられたのが母体の影響を胚が受けない様にする為の人工子宮だ。

「人工子宮・・・」

「ラウラは技術的な問題で人工子宮じゃなかったけど、たしか試験管の中で育ったんだよね？」

「ああ、そうだ」

「人工子宮と試験管・・・違いは無いよね」

「全くだ・・・人間らしく母親から産まれた訳ではないからな、両方とも」

ラウラは人工子宮の話で深く思う事があったのだろう。自身の出生の事、母親というものが存在しない自分の事。

「話を戻すよ。ユーレン博士は人工子宮を開発した後、考えたんだ。自分の子供を身体、頭脳共に極限まで高めた生命体、スーパーコーダイネイターとして生み出そうと」

「ま、まさかキラ・・・お前は」

「筈は気付いたんだね・・・いや、皆も気付いてるか。そう、多くの失敗の果てに僕はユーレン・ヒビキとヴィア・ヒビキの双子の受精卵の内の一つを使われて、唯一成功したスーパーコーダイネイターなんだ。僕の本名はキラ・ヒビキ、姉はカガリ・ヒビキ」

オーブ代表、ウズミ・ナラ・アスハの娘、カガリ・ユラ・アスハはキラ・ヤマトの双子の姉だった。方やナチュラル、方やスーパーコーディネイターの成功体の姉弟。

「それから、ラウ・ル・クルーゼもメンデルの生まれなんだ」

「あの男がですよ!? まさかあの男もスーパーコーディネイターなのですか!?!」

「落ち着きなさいセシリア、キラが言っただでしょ? キラが唯一成功したスーパーコーディネイターだって」

「そう、クルーゼはスーパーコーディネイターでも、普通のコーディネイターでもない、ナチュラルだよ。ただし、アル・ダ・フラガというナチュラルのクローンだけだ」

クローン、その言葉に誰もが驚いた。クローンは確かに現代でも存在するが、それは牛や豚などの家畜のみ、人間のクローンなんて誰も聞いた事がなかった。

「ファミリーネームから判る通り、アル・ダ・フラガはムウさんの父親なんだ。彼は資産家だった為、後継者として自分のクローンを作る事にした。息子ではなく、クローンとしての自分が家を継いでくれる事を期待して、大金をユーレン博士に渡してクローン製作を依頼したんだ」

その結果、生まれたのはラウ・ラ・フラガという少年だった。後のラウ・ル・クルーゼと呼ばれる彼は確かにクローンとしてこの世に生を受けたが……。

「彼は、クローンとしては失敗作だった。生まれつきテロメアが短く、早い段階で老化してしまい、寿命も短い。だからアル・ダ・フ

ラガはラウ・ラ・フラガを捨てた。結果、彼は失敗作として自分はこの世に生んだ存在を憎み、アル・ダ・フラガを殺して尚、この世の全てを憎んだ」

それから名をラウ・ル・クルーゼと変え、ザフトに入隊して現在に至る。

「人間を憎むだけの理由があつたという事か・・・確かに私も失敗作と呼ばれ、随分と周りを憎んでいた事もあつたが・・・それで人類全てを憎むというのは、筋違いも良い所だ」

「思えば、クルーゼはアル・ダ・フラガを殺した時点で狂気に捕らわれていたのかもしれないね・・・その狂気が人類を滅ぼすという選択に導いてしまった」

話は戻る。メンデルでキラは自分とクルーゼの出生の秘密を知り、アークエンジェルに戻るとザフトが攻めてきた。それと同時にドミニオンも攻めて来て、三つ巴の戦いが始まったのだ。

「その戦いの最中、アラスカでアークエンジェルから降りたフレイがザフトの救命ポットに乗って戦場に全体通信を開いたんだ・・・
・・・戦争を終わらせる鍵を持っていると言って」

「鍵？ お兄ちゃん・・・如何いう事？」

「戦争を終わらせる鍵・・・か、妙な言葉を使ったものだが、何か意味があるのだな」

幕の推察通り、フレイが持っていたのは正に鍵と言える。何故ならフレイが持っていたのはフリーダムとジャスティスの機体データ・・・つまり。

「ちょっと、不味いじゃない！ フリーダムとジャスティスのデー

タつて事は、Nジヤマーキャンセラーのデータも入ってるって事でしょ!？」

「あ、そうか！ 確か地球にはニュートロンジヤマーがあつて、地球軍は核を使えないんだよな。つまり、それが地球軍の手に渡つたら・・・」

「一夏の言う通り、データが地球軍に渡れば間違いなく再びプラントに核が放たれる。その時はそんな事を知らなかったから僕はただフレイを助きたい一心で助けに行こうとしたんだけど・・・結局、助けられなかった・・・フレイはドミニオンに回収されたんだ」

それが意味するところは一つ、地球に再び核の力が戻つたという事だ。

「そして始まるのです。地球軍の核ミサイルと・・・ザフトの核兵器、レジエンドプロヴィデンスがキラを落とした兵器、ジエネシスを使ったお互いが相手を滅ぼし合う最終戦争が」

その激戦の中、キラはアスランと共にフリーダムとジャステイスにミーティアを装備して戦い、プラントに核ミサイルが着弾するのを防ぐ事が出来た。

しかし、ザフトは撃ってしまったのだ。大量破壊兵器、ジエネシスを。

「ジエネシスから放たれる線レーザーは敵味方問わず、多くのMSや戦艦を一瞬のうちに消滅させて、第二射が放たれる準備に入りました」

「ジエネシスは地球をも射程に捉えた兵器だった。もしアレが地球に放たれれば・・・」

「地球上の生命は死滅、してしまいますわね」

だから戦った。だが、戦いの最中、出てきたのだ。クルーゼが駆る、最悪のMS・・・ZGMF-X13Aプロヴィデンスが。

プロヴィデンスによってバスターは大破、ストライクも中破してしまい、ストライクとムウはアークエンジェルに戻る途中、ドミニオンが放ったローエン格林からアークエンジェルを守り・・・爆散した。

「僕とクルーゼは戦った。激しい戦いの中、ドミニオンから脱出した脱出艇を見つけたんだ・・・中にはフレイが乗っている。クルーゼはそれを落とそうとしたから、僕は守りながら戦ったんだけど・・・結局、目の前でプロヴィデンスのドラグーンから放たれるビームに貫かれる脱出艇を見ているしかなかった」

フレイはそこで死亡、初恋だった少女の死がキラの中で何かを燃やした。クルーゼへの憎しみという炎を。

「もうクルーゼは戦闘能力を奪うというやり方じゃあ止まらない。だから僕は死力を尽くして戦って、無我夢中で戦って、ビームサーベルがプロヴィデンスのコックピットに突き刺さった」

そして、自爆と同時に放たれたジェネシスの光の中にプロヴィデンスは消え、ジェネシスも内部でジャステイスが自爆した事で起きた核爆発によって崩壊、長かった戦争は停戦を迎えたのだった。

第四十二話 「異邦人の真実・2」 (後書き)

次回は軽くこの後にこんな戦争があったんだよって話して、これからの事になると思います。

第四十三話 「これからの事」(前書き)

あれ？ また10分で書き終わった？

第四十三話 「これからの事」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十三話

「これからの事」

第二次ヤキン・ドゥー工攻防戦と停戦の話まで終えると、キラはその後の戦争やデュランダル議長の話を経くして、最後にこの世界に由来した原因である重力場と、ストライクフリーダムがISに変化した事を話して、全ての話を終わらせた。

「とまあ、これが僕とラクスの秘密、千冬さんと東さんにしか今まで話していなかったんだけど」

「・・・まあ、キラとラクスの事は解った。確かに考えてみればキラの強さって並じゃないとは思ってたしな。俺は納得だ」

だが、別にキラとラクスがコーディネイターだから如何とか思う事は何も無い。コーディネイターだからって、別に二人が友達である事に変わりはないのだから。

「それよりも、今はラウ・ル・クルーゼの事ですね。そんな危険な方がこの世界にいる事、それが一番の脅威と考えるべきではなくて？」

「そうだね・・・お兄ちゃんが殺したと思われてた相手が、実は生きていて、この世界にいるんだから」

クルーゼとまともに戦えるのはキラだけだ。だが、問題はキラの

IS・・・ストライクフリーダム的事だ。先の戦いで大破して、修復しても前ほどの性能は発揮できないのだから。

それに、逃げた巻紙礼子を追っていたラウラとセシリアが遭遇したもう一人の亡国機業の人間、それもイギリスで開発して、強奪されたティアーズ型二号機、サイレント・ゼフィルスの操縦者の事もある。

「多分だけど、クルーゼは亡国機業と共に行動しているんだと思う」「何故だ？」

「タイミング、良過ぎるから」「なるほどな」

巻紙礼子のピンチに現れたクルーゼ、余りにもタイミングが良過ぎるのだ。

「千冬さん」

「ああ、今は国際IS委員会からの指示を待っているが・・・無駄だろうな」

「だね、あの無能共なんて期待するだけ無駄無駄」

「ええ、僕もラクスも、国際IS委員会に何かを期待なんてしてません。だから僕は独自に調べようと思ってまして」

「ふむ、なら構わん」

「それから束さん」

「なに？」

「暫く、学園に留まってもらえませんか？」

キラの提案に一番驚いたのは箒だった。未だに姉との間に確執のある彼女としては、束が傍にいるというのは落ち着かない。

「箒には悪いと思うけど、でも今はそれを気にしている余裕が無い

んだ。僕と東さん、二人で調査をしないと手遅れになる可能性が高いから」

「クルーゼが表舞台に出てきた以上、私たちに選択の余地はございません」

「それは、そうだが・・・」

「東さんはオツケく、ちーちゃん、部屋の用意お願いね?」

「はあ、存在の秘匿は自分でやれよ?」

「もち!」

今まではキラと東が離れていた為、調査もバラバラだったから亡国機業の情報を掴む事が出来なかった。しかし、今度は天才二人が同じ場所に集まり、同時に調査を進めるのだから今まで以上の情報が得られるはず。

「それと、東さん・・・出来る限りで良いのでストライクフリーダムの修理をお願いします」

「わかった。多分、私でも完全修復は無理だと思うけど良い?」

「ええ」

ストライクフリーダムの技術に、東はまだ完全に追いつけていない。だから完全修復は不可能だが、学園の技術者がやるよりはマシンレベルまで修理出来るだろう。

「あ、それと・・・君」

「え、あ、はい!?!」

東が指差したのは、シャルロットだった。

「君だよな? キー君が作ったISの持ち主」

「はい・・・」

「後で見せてね？ キー君が作ったISに興味あるし」
「わ、わかりました」

ストライクフリーダムは現在、学園地下の修理工場に置いてある。千冬に案内されて医務室を出て行った束を見送り、キラはベッドに倒れこんだ。

「お、おいキラ！」

「キラ！」

「お兄ちゃん！」

「キラさん！」

何事かと心配して駆け寄ってみれば、随分と顔に疲労を滲ませているキラの姿が映った。

「ゴメン、ちょっと疲れた・・・もう少し、寝る事にするよ」

「び、びっくりしたあ・・・でも、お兄ちゃんも疲れてるんだもんね」

「ゆっくりお休みください、キラ」

「うん・・・」

そのまま眠ったキラを起こさない様に、全員医務室から出た。

学園祭は中止になったので、皆は自分達の部屋に戻るだけなのだが、何故か部屋に戻る者は一人も居らず、そのままアリーナに来る。

「キラがあんなになっちまう相手か・・・俺たちじゃ戦いにすらならないよな」

「ああ、歯がゆいな・・・私も一夏も、第四世代のISを持っていないとは言え、実力が伴っていないのだから」

第四世代のISを持っていても、一夏と箒の実力はこの中では低い方に入る。

第三世代を持つメンバーを含めれば実力的に一番高いのはシャルロットとラウラが同レベルで一番高く、次に鈴とセシリアと一夏、その次に箒となるのだ。

「箒はあれね、今はまだ紅椿の性能を100%引き出せる様にならないとまだだよ」

「わかつている。だが、努力をしている時間があるのかどうか・・・」

「

「ですわね・・・ラクスさん、クルーゼという男の事で、何かご存知ありませんの？」

「一つ、言えるのは亡国機業にも第五世代のISが後々に登場する可能性が高い事でしょうか？ クルーゼという男は自分の持つ技術を流出する事に躊躇いを持たない方ですので」

つまり、亡国機業のIS全てがビーム兵器を搭載して現れる可能性があるという事だ。此方でビーム兵器を搭載しているのはキラのストライクフリーダムとラクスのオルタナティヴだけ、後は箒の紅椿とセシリアのブルーティアーズと、シャルロットのエクレール・リヴァイヴ、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに搭載されているレーザー兵器だ。

「もしも亡国機業のISにPS装甲フェイスシフトやTP装甲トランスフェイス、VPS装甲ヴァリアブルフェイスシフトを搭載してきたら、鈴さんには勝ち目が無いでしょうね」

「あたしの甲龍には双天牙月と衝撃砲だけ・・・その装甲には効かないわよねえ」

鈴音の甲龍の第三世代としての武装が衝撃砲なのだ。それでは効果が無いのは確かで、もう一つの武装である双天牙月も実体兵器、

効く筈がない。

「でも衝撃砲はダメージは与えられないでしょうけど、隙を作るのには有効ですわ」

「あ、ダメージ無くても衝撃で体勢を崩したり出来るのよね、確か」

最も、あれこれ考えてもあくまで普通の相手に対して有効であるというだけであって、クルーゼには兎戯にも等しいのだろう。

「ストライクフリーダムが機能低下するのは、痛いものだな」

「うん、如何したら良いんだろう・・・」

この世でクルーゼに勝てる人間がいなくなる。クルーゼの性格から考えて、この世界でも大きな戦争を起こす可能性が高い事を考えると、厳しい状況だ。

「私たちも、今以上に強くならないといけませんわね・・・ブルーティアーズ！」

「うむ、私も紅椿を使いこなせる様にならないと、せめて絢爛舞踏を任意で発動出来る様にならないと駄目だ・・・だろ？ 紅椿！」

「あたしも近接戦を磨くわ・・・甲龍！」

「僕はエクレール・リヴァイヴをもっと使いこなすよ・・・頑張ろう、エクレール・リヴァイヴ！」

「私も、今のままヤマトの足手纏いになる気は無い・・・軍人の意地を見せるぞ、シュヴァルツェア・レーゲン！」

「俺だって、キラの弟子なんだ。絶対に、強くなってやる！ そうだよな、白式！」

ラクスは6人がISを展開しながら宣言した決意を後ろで眺めていたのだが、ふとアリーナの入り口に人影を見た。

「あれは・・・更識・・・簪さんですわね」

アリーナの入り口に見えたのは楯無と同じ髪型で眼鏡を掛けた少女、一年四組所属で、日本の代表候補生である更識 簪だ。

部分展開したオルタナティブのハイパーセンサーから捉えた映像には、何かの端末を持っている姿が映されており、恐らく一夏たちのISのデータを取ろうとしているのだろう。

「確か、打鉄・式式は未完成なのですよね・・・」

ラクスは模擬戦を始めた一夏達を残して、こっそりとアリーナの入り口に向った。もしかしたら、彼女も力になってくれるかもしれない。その為の協力として専用機の完成を手伝う事になるとしても、選択の余地が無い今、手段を選ぶ気は無かった。

第四十三話 「これからの事」(後書き)

次回はラクスと簪の接触、何とか回復したキラと簪が色々と楯無に
対して悪巧みをします。和解の為だよ・・・？

第四十四話 「コンプレックス」(前書き)

簪、登場!!

第四十四話 「コンプレックス」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十四話

「コンプレックス」

アリーナの入り口、そこには端末を持って現在、アリーナで模擬戦をしている6機のISのデータを収集している少女の姿があった。少女の名は更識 簪、IS学園一年四組の生徒であり、日本の代表候補生でもあり、そして生徒会長の妹でもある。

「……………」

「あら、ここからだと良く見えますわね」

「っ!?!」

突然、背後から聞こえた声に驚き振り返ると、そこにはラクスが立っており、片手にはベレッタM84を持って構えていた。

「ごめんなさいね、本当はこのような物、人には向けたくないのですが……………」

「……………いい、専用機のデータを勝手に取っていたのは、私だもん」「ありがとうございます。それで、何故……………この様な事を？」

銃を降ろしたラクスが簪の横に並んで模擬戦をしている一夏たちの様子を眺めながら尋ねてきた。最も、ラクスは予想は出来ているので、確認の為の質問なのだが。

「私の事は、知ってるよね？」

「ええ、日本代表候補生の更識 簪さん。専用機は純日本製の第三世代機、打鉄・式式・・・ですが、打鉄・式式は開発を行っている倉持研が白式の方に掛かりつきりになってしまった為、未だに未完成だと聞いてます」

「うん、だから開発途中の打鉄・式式を私が引き取って、それで・・・」

「御自分で完成させて、お姉さんへのコンプレックスを少しでも解消したかった・・・ですか？」

周囲から天才と言われている簪の姉、楯無に対して簪はコンプレックスを抱いていた。姉は天才と言われ、更に自分の専用機を自分で造ってしまった。だが自分はそんな姉にいつも勝てない、天才の姉と比べられて、誰も自分を見てくれない。

だから、開発途中の打鉄・式式を引き取り、自分の手で完成させれば周囲は認めてくれる。天才・楯無の妹ではなく、更識 簪としての個人を見てくれると思ったのだ。

「でも、打鉄・式式は・・・」

「まだ完成していない・・・上手くいかないのですか？」

「やっぱり、私じゃ無理なのかなって、何度も思った。所詮、私じやお姉ちゃんの真似事をしてても上手くいかないんだって、思った。だけど、諦められなくて・・・それで」

「一夏さん達の専用機を見て、データを取ることで打鉄・式式の開発に取り入れようとしたのですね」

特に、白式と紅椿は天才・東が造った第四世代型のISだ。そのデータを反映させれば、もしかしたら姉以上のISを造る事が出来るかもしれない、そう思ってデータを取っていた。

「でしたら、私と共に来ませんか？」

「え？」

「私と、キラのことは知ってますか？」

「うん、もう一人の男性IS操縦者だよな」

「はい、そのキラも含めて、簪さんのIS開発をお手伝いさせていただきます」

キラもラクスもISの開発に関しては東に色々と教わっている。更に言えばキラはシャルロットのエクレール・リヴァイヴを造ったという実績があるので、協力者としては申し分無いだろう。

「でも……」

「お一人でやりたいというお気持ちは、理解出来ます。ですが、それで行き詰っているのなら、誰かに助力を求めるのも必要な事ですわ。それを恥だなんて思う事は、何もありません」

「……じゃあ、お願い。打鉄・式式の開発、手伝ってください？」

「勿論です」

簪が差し伸べてきた手を、ラクスは優しく受け止めるのだった。

クルーゼとの戦いで負った傷も、大分治り、普通に立って歩けるくらいまで回復したキラはラクスと共に学園のIS整備室に来ていた。

そこには既に簪が来ており、その後ろには組み立て途中の打鉄・式式の姿もある。

「お待たせしました。簪さん」

「あ、ラクスさん……それと」

「初めまして、キラ・ヤマトです」

「更識 簪です・・・えと、お姉ちゃんをご迷惑をお掛けしてます」

楯無の事は聞いていらっしゃるらしい、その事をまず謝ってきた。

「気にしないで、お姉さんの事は君が気にする事じゃないから。それより、今日は簪さんのISの事だよな？」

「は、はい・・・その、開発に行き詰ってまして・・・手伝って頂けたらと」

「わかった、じゃあ先ずは現状の開発進行状況とOSを見せてもらうね？」

「はい」

簪に一言断ってキラは端末から打鉄・式式の開発進行状況と武装、システムの完成度、OSの画面を開く。

高速でキーを叩くキラの姿を見て、簪は呆気にとられてしまう。

あまりに速すぎて、一度だけ見た事がある姉のキータッチよりも何倍も速いのだ。

「・・・」

「あ、あの・・・どうですか？」

「少し、正直な感想を言わせて貰うと・・・全体的に中途半端かな」「中途半端、ですか・・・」

「うん、先ずこの春雷と呼ばれる連射型荷電粒子砲だけど、このままだと2〜3発撃っただけで砲身が融解する。それから夢現は想定している振動数がこの状態だと出せないよ。後は山嵐はマルチロックスシステムが未完成で本来の性能を発揮出来ない。ブースターや推進システムも第三世代機として作っているのなら出力が低すぎる。OSは全然駄目かな、これだとまともに動かないと思う」

ほぼ全てに駄目出しされてしまった。簪は話を聞いている内にと
んどん俯いていき、目尻に涙を浮かばせていく。

「でも……」

「っ、ぐす……え？」

「ここまで形に出来たのは凄いなと思うよ。普通なら一人で此処まで
形にするとしたら何年も掛かるのに。元々倉持研で開発途中だった
のを考慮しても充分凄い事だよ」

「そ、そう……ですか？」

「君の努力の賜物、誇って良いよ。後は僕達が協力して、完成させ
るだけなんだから」

「……っ」

初めてだった。簪の努力を認めてくれる他人は、今まで誰一人と
して居なかった。姉は確かに褒めてくれたが、その姉にコンプレッ
クスを持つ簪は素直に受け入れられず、ずっと誰にも褒められない
事が辛かったのだ。

だが、キラは確かに現状に随分と駄目出ししてはいたが、それで
も此処まで形にしたことを、純粹に褒めて、そして……簪の努力
を認めてくれた。

「ラクス、この山嵐なんだけど……」

「はい、ストライクフリーダムとオルタナティブのマルチロツクオ
ンシステムを使えば従来の設計以上の効果が期待できますわ」

「荷電粒子砲はフリーダムのレール砲の砲身を参考にすれば何とか
なるかな……それと夢現は超振動か……確か束さんの所で読ん
だ資料に超振動兵器の概要があったな……それを基にしてみよう。
OSの構築は……これくらいなら一日あれば完璧に仕上がるから
……よし」

あつと言つ間にこれからの開発スケジュールと設計資料を作り上げてしまった。

「あ、あの・・・」

「大丈夫、これなら順調に行つて半月もあれば完成するよ」

「は、半月つて・・・!」

簪ですら此処まで造るのに何ヶ月も掛かったのに、キラは此処から完成まで半月で終わると言ったのだ。正直、年内に完成するのは無理かな、と半分諦めかけていたのに、それが半月、今度は別の意味で涙を浮かべた簪はキラとラクスに向けて深く頭を下げるのだつた。

「ありがとうございます・・・」

「それじゃあ、頑張ろう？　それでお姉さんをビックリさせるんだ」

「え、それは・・・」

「実際に組み立てるのは簪さんですわ。私たちがするのは設計をするだけ、御自分で組み上げて、お姉さんに見せて差し上げましょう？　あなたの努力の結晶を」

「っ・・・はい!」

それから、三人は打鉄・式式の開発を進めた。

その途中で、簪は少し気になつた事をキラに尋ねる。少し前、キラが模擬戦で楯無に勝利した事、楯無がキラとラクスの事を調べまわっている事を。

「ああ、それね。確かに僕は彼女に勝つた。それで勝負の条件として僕が勝つたら僕とラクス、それからフランス代表候補生のシャル、この三人に対する不干渉を約束させたんだけど・・・如何にかして僕たちの事を調べたいみたいだね。実家や日本政府、ロシア政府ま

で使って調べてるみたい」

「そ、そんな・・・お姉ちゃん、それじゃあ約束を」

「うん、最初から守る気は無いみたいだ」

「酷い・・・」

だが、楯無のやっている事は決して間違っているのではない。日本政府としても、ロシア政府としても、キラの実力、ストライクフリーダムとオルタナティブという第五世代ISの技術が欲しいのだから、約束など無い様なもの。裏で調べる分には文句なんて言わせないという事なのだ。

「・・・決めた」

「？ 簪さん？」

「私、打鉄・式式が完成したらお姉ちゃんと模擬戦します」

「えっと・・・？」

「そして、勝つたらもう二度と裏でだろうと表でだろうと、キラさんとラクスさんの事を調べるなんて、止めさせます。そして・・・」

キラとラクスの子になる。そう、確かに言った。

「・・・え？」

「・・・あら？」

「お姉ちゃん、少しは懲らしめませんか？」

「えっと・・・懲らしめるのは、良いけど。何で僕とラクスなの？」

「何か、キラさんとラクスさんってお兄ちゃんとお姉ちゃんって感じで・・・」

シャルロットに続いて簪までもが、などとキラは少し思考が現実逃避をしそうになってしまったが、何とか踏みとどまり、逆に考え

てみた。

「ラクス、如何かな？」

「良いのではないですか？ 最近の会長は少し、行動が目にも余るものがありますし」

「うん、まあ・・・それに、簪さんも会長の事が嫌いだから言っている訳じゃないでしょ？」

「それは・・・はい。それに、お姉ちゃん・・・何だかんだ言っても私の事を大切にしてるのは、何となくですけど、理解出来ますから。だから揺さぶる事が出来るかと思ひまして」

まあ、間違いなく動揺して支離滅裂なことになるのは確かだろう。

「それに、これは私の為でもあるんです。お姉ちゃんに対するコンプレックスを、模擬戦で解消する為の・・・。多分、今の私なら勝つても負けても、満足出来る筈なんです」

「そっか・・・なら、頑張つて完成させよう？」

「はい！」

きつと、簪は勝つたとしてもキラとラクスの妹にはならないだろう。楯無を揺さぶる為のブラフ、ただその為の虚偽、随分と腹黒い事を考えているが、キラもラクスも、こういうのは嫌いじゃないので、乗る事にした。

「頑張ろうね、打鉄・式式・・・私、もうお姉ちゃんから逃げないから」

何となく、打鉄・式式を見上げて呟いた簪に、打鉄・式式の装甲が一瞬だけキラリと光って応えるのだった。

第四十四話 「コンプレックス」(後書き)

キラとラクスに対して敬語になったのは、二人が年上だからですね。礼儀正しい良い子ですから、簪は。

第四十五話 「歴史が変わる時」 (前書き)

原作との違いが出てきます。

第四十五話 「歴史が変わる時」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十五話

「歴史が変わる時」

簪の専用機、打鉄・式式の開発を手伝っていたキラは、時間が空いた為、学園の地下深く、機密保管室に来ていた。

そこには嘗てクラスリーグマッチの時に襲ってきたゴーレム？が保管してある他に、現在修復中のストライクフリーダムがあるのだ。

「東さん」

そして、今は東が一人でストライクフリーダムの修理を行っている。学園の技術者では東ほどの技術を持っていないのと、彼女が他人嫌いなので、自然と東一人で修理を行う形になってしまった。

「やあキー君、どしたの〜？」

「いえ、フリーダムは如何かと思ひまして」

「う〜ん・・・正直ね、私でも完全修復は無理かな。直っても以前より性能が30%は落ちると考えた方が良いね」

幸い、レーザー核融合炉エンジンとハイパーデュートリオンエンジンは無事だったので、エンジン出力は問題無いのだが、武装やスラスタ、ブースターなど、ほぼ全てが爆散してしまっているの、いくつかはオルタナティブの技術から流用しなければ直らない。

「完全に修復出来るのはマルチロックオンシステムだけかな、あれしか私では完全再現出来ないから」

「まあ、30%ダウンで済んで良かったと思えば良いでしょうね」

「まあね、この技術者なんか任せたら更に性能が落ちちゃうもん。下手したら80%以上落ちるかもね。それどころかビーム兵器も無くなっちゃう」

代わりにレーザー兵器でも積まされる。流石にそれでは第五世代とは言えなくなる上に、ストライクフリーダム^{イレイスト}の性能がガタ落ちしてしまうのだ。

「どれ位で直ります？」

「半月つて所かな？ 天才・東さんに掛ければこの程度もまんたゝい！」

「そうですか・・・」

なら、この場は東に任せて打鉄・式式の方に戻ろうとしたキラだったが、千冬が何やら鬼気迫る勢いで入ってきて、キラの腕を引張った。

「千冬さん？」

「来てくれ、不味い事態になった」

連れてこられたのは一つ上の階にある情報収集室だ。ここでは世界中の合法IS関連施設に関する情報が入ってくる。

「これを読め」

「えつと・・・北アメリカ北西部にある第十六国防戦略拠点。通称
地図にない基地が崩壊・・・崩壊！？」

「それだけじゃない・・・その下を読んでみる」

「……そこに封印されていた銀の福音が奪取され、専属操縦者のナターシャ・ファイルスと、アメリカ代表操縦者にしてアメリカ第三世代機“フアング・クエイク”操縦者のイーリス・コーリングが……意識不明の重体、フアング・クエイクは大破……」

襲撃者は……イギリスから奪取されたサイレント・ゼフィルスと、レジエンドプロヴィデンスだった。

「っ！ クルーゼが……」

セカンドシフト

「ああ、奴が動いた。そして二次移行をした福音を……奪っていった」

アメリカは直ぐに国家所属のIS全てを動かしてサイレント・ゼフィルスとレジエンドプロヴィデンスを追ったが、追撃したIS部隊は全滅、結果としてアメリカは現状、動かせるISの全てを失ってしまった。

「アメリカは暫くIS関連では表舞台に立てなくなった。量産したアラクネ型も、試作の第三世代機も全てを失ったからな。一からISを造る所から出直しになってしまった」

「死傷者100名以上……国家、企業に所属していたISは全てが大破で、操縦者も皆、戦死や操縦者として復帰が望めない程の重体……」

壊滅的打撃だ。この報告を受けた各国は第三世代機開発に躍起になる国もあれば、襲撃を恐れて自粛しようという国もある。

「これでイギリス、アメリカ、両国のISが亡国機業に奪取されたわけだ。アラクネ、サイレント・ゼフィルス、シルバリオ・ユースヘル銀の福音……キラ、お前なら次に奪取されるとしたら何処だと思う？」

「・・・イギリスのメールシュトローム型か、イタリアのテンペスタ？型・・・でしょうか？ドイツのシュヴァルツエア・ツヴァイクは無いでしょうね・・・機体を奪取しなくても、レーゲンを含めてデータは間違いなくドイツ政府か軍のどちらかから亡国機業に行っている筈ですし」

アラクネの件もあるから、第二世代のメールシュトローム型の量産機を盗まれる可能性は高い。イタリアのテンペスタ型の量産機も可能性はあるが、第三世代のテンペスタ？型の方が高いだろう。

「幸いなのは既にメールシュトロームもテンペスタも解体してコアを初期化している事か・・・」

「後は、IS学園二年と三年にそれぞれ操縦者がいるコールド・ブラッドとヘル・ハウンドver.2、5も可能性として挙げるべきかと・・・クルーゼがいるので、操縦者を殺して奪うという可能性がありますから」

「そうだ。操縦者が決まっているからと安心してはいけない。クルーゼがいる以上、殺して奪うなど容易い事の筈なのだから。」

「学園も、安心は出来ないか・・・」

「ええ、正直、ここは最新のISが豊富ですから」

IS学園には二年と三年の二機に加え、白式、紅椿、ブルーティーズ、甲龍、エクレール・リヴァイヴ、シュヴァルツエア・レーゲン、霧纏ミスティアス、レイディの淑女、打鉄・式式、暮桜・真打、オルタナティブ、ストライクフリーダム、と多くの第三世代や、第四世代と第五世代のISが存在しているのだ。

「もし、またラウ・ル・クルーゼが来た場合・・・キラ、お前は勝

てるか？」

「・・・フリーダムのが性能がガタ落ちしてしまう現状を考えて言わせて貰うのなら、無理です」

「私でも足止めや時間稼ぎが限度だろうな、全盛期まで力を戻したとしてもだ」

「ええ、一番の脅威はドラグーンの数、ですか」

「だろうな、48基は流石に不味い」

この学園で、クルーゼに勝てる者はいない。唯一勝てる可能性のあったキラも、ストライクフリーダムの性能が落ちてしまえば勝てなくなる。

「亡国機業も、これから更に脅威になるな」

「現状、判っているだけでサイレント・ゼフィルス、アラクネ、福音。福音は二次移行セカンドシフトまでした機体ですから、その性能は第三世代を凌駕してます」

操縦者の腕も代表候補生並か、代表並と考えて良いだろう、一夏たちも苦戦は必至だ。

「キラ、重傷を負ったばかりで、更には更識妹の機体の開発までやっている時に悪いが、一夏たちのことを頼む。今まで以上に強くなつてもらわねばならないから・・・正直、更識姉では役不足だ」
「ええ、承知してます。このままでは駄目だというのは、僕も理解してますから」

楯無は確かにロシアの国家代表で、実力的には申し分無いのだが、亡国機業にクルーゼがいるという事は、向こうのIS操縦者だって並以上に鍛えられている。

クルーゼと同レベルの者が鍛えなければ対抗するには心許ない。

楯無ではクルーゼと同レベルとは言えないからこそ、キラでなければならぬのだ。

「それより、更識妹と何やら悪巧みをしているらしいな」

「やはり知ってましたか・・・ええ、彼女が会長へのコンプレックスを振り払う為にと言っていました」

「そうか・・・まあ、更識姉には良い薬になるかもしれないな」

溺愛する妹からの悪巧み、確実に面白い事になりそうだ。と、千冬は何処か楽しみだと言いたげな表情をする。

「楽しんでます?」

「ふ・・・当たり前だ。私は楽しむ時はとことん楽しむのが信条だ」

「・・・流石、束さんの親友です」

「失礼な」

もし、今の千冬表情を篝が見たら、間違いなく束にそっくりだと言っだろう。一夏も同じく、束の事をよく知るからこそ、篝と同じ事を言う。

是非とも、この場に一夏と篝の二人が居てほしかったと思うキラだったが、直ぐにその考えを振り払った。

「それでは、僕は打鉄・式式の方に戻りますね」

「ああ、早く完成させてやれ」

「はい」

千冬を残して情報収集室から出たキラは、少し歩いた所にあるエレベーターの前まで行くと、少し俯いて右拳を壁に叩き付けた。

「何処まで・・・何処まで世界を壊せば気が済むんだ・・・」

右拳から滴り落ちる血を気にする事も無く、キラは福音の操縦者だったナターシャのことを思い出した。

また会おう、そう約束した彼女は・・・今はアメリカで生死の境を彷徨っている。

「ラウル・ル・クルーゼ・・・貴方は、貴方だけは！！絶対に、僕が・・・っ！！！」

いつもの穏やかで、儂げな優しい表情は、今は憤怒に歪んでいる。そして、静かにエレベーターが到着した音が響き、扉が開いたので、キラは陥没した壁をそのままに、その場を立ち去るのだった。

第四十五話 「歴史が変わる時」(後書き)

今回は、完成した打鉄・式式と、修理を終えたストライクフリーダムが登場！

そして、姉と妹の戦いが幕を開けます。

第四十六話 「日本の力、姉妹の衝突」 (前書き)

眠いです。

第四十六話 「日本の力、姉妹の衝突」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十六話

「日本の力、姉妹の衝突」

打鉄・式式の開発にキラとラクスが協力する様になってから半月、キラとラクスと簪は第三アリーナに来ていた。

既にオルタナティブを起動しているラクスとは違い、キラと簪はISスーツを着たままだ。

「じゃあ、先ずは僕から・・・ストライクフリーダム、起動！」

東の手で修復されたストライクフリーダムを起動する。外見は前のまま、特に問題は無いのだが、調べてみれば一目瞭然、以前と比べて性能が27%ほど落ちていた。

「やっぱり、性能が落ちるか・・・」

「でも、想定より3%ほど性能を高く再現出来たのは流石と言うべきですわ」

次は簪の番だ。指輪になった自身の専用機を呼び出す。

「おいで、打鉄・式式！！」

白と黒の装甲が特徴的な機体、打鉄・式式が展開された。

早速だが各所のチェックを済ませると、キラと簪による完成した

打鉄・式式と修理が終わったストライクフリーダムの機能チェックも含めた模擬戦が始まる。

「じゃあ、まずは荷電粒子砲から撃ってみて」

「はい！ 春雷、起動・・・照準、OK！」

まずは試しという事でターゲットロックも全てゆっくりと行った。ターゲットになっているストライクフリーダムはビームシールドを展開して、荷電粒子砲を受ける用意を整えている。

「発射！」

放たれた荷電粒子砲、一直線にストライクフリーダムへ向かい、ビームシールドに中る。出力は申し分無い、後は連射性と、連射した時の砲身なのだが・・・。

「まだ！」

次々と荷電粒子砲が連射される。連射速度は想定より少し速いといった所だろう、連射が終われば今度は砲身のチェックが行われたのだが、砲身は熱融解している所も、罅割れている所も見受けられない。

「如何？」

「はい、春雷は完璧です」

「そっか、なら次」

春雷に問題が無いのなら次は夢現だ。ストライクフリーダムがビームサーベルを抜いて、打鉄・式式は超振動薙刀、夢現を展開して構える。

「いきますー！」

ビームサーベルもやはり出力が下がっていた。もうこれではキラお得意のビームをビームサーベルで切るといふ離れ業は発揮できないだろう。

夢現の方は思っていた以上の振動数を出してしまい、そこから想定される切れ味は、背筋が凍るの一言だった。

「じゃあ、最後・・・ラクス」

「はい」

最後は山嵐のチエツクだ。ラクスが全身から発射したミサイル48発、簷は目の前に展開されたマルチロックオンシステムで全ミサイルをロックすると、フルバーストの勢いで山嵐・・・独立稼働型誘導ミサイル全48発を発射、ラクスが放ったミサイル全てを撃墜する。

「すごい・・・これが、マルチロックオンシステム」

元々、打鉄・式式には日本のマルチロックオン・システムというシステムを搭載する予定だったのだが、マルチロックオン・システムは完成せず、ほぼ諦めかけていた所にこのストライクフリーダムに搭載されているマルチロックオンシステムの導入だ。

元々のマルチロックオン・システムよりも高性能なそれに、簷は知らず知らずの内に口元に笑みが浮かんでしまった。

「如何かな？ マルチロックオンシステムの方は」

「凄く、良いです。これなら山嵐の性能をフルに発揮出来ますから」

「そう、それじゃあ後は完成した打鉄・式式を完璧に使いこなせる

様にならないとだね」

「・・・がんばります！」

この後は、簪が打鉄・式式を使いこなせる様になるまで徹底的に模擬戦を行う事に。勿論、簪の為というのもあるのだが、キラが機能低下したストライクフリーダムに慣れる為の訓練でもあった。

ストライクフリーダムの修理が終わったという知らせを受けた一夏たちは直ぐにでもキラとラクスがいる第三アリーナに行きたかったのだが、第一アリーナで行っていた模擬戦の途中で乱入してきて鍛えてあげると言い出した楯無に今は訓練に集中しなさいと言われ、てしまい、誰一人として行く事が出来ずにいた。

「ねえ会長、僕は行っても良いと思うんですけど・・・確かお兄ちゃんも約束してましたよね？ 僕にも干渉しない様になって」

「あら？ 約束っていうのはね、破る為にあるのよ。それに、貴女だって鍛えないと今のままじゃ全然駄目、ヤマト君を落とした敵になんて勝てないわ」

「っ、でも・・・会長だって勝てなかったのに、その会長に鍛えられても意味が無いと思うんですけど」

「・・・言ってくれるわね」

あの時、クルーゼに手も足も出なかった事を、楯無は未だに引き摺っていた。ロシア代表としてのプライドがああ瞬間、ズタズタに引き裂かれたのは言うまでも無い。

「まあ、向こうへ行かなくても良いです」

「あら、随分と素直ね」

「だって、もう呼んでますから」

「・・・え？」

その時、楯無の霧纏ミスティアス・レイティの淑女がロックオンされた事を知らせるアラートが鳴る。

ラフスナイパー慌てて蛇腹剣を振ると、一発のミサイルを切り裂いた。

「い、今のミサイルは・・・」

セシリアのブルーティーズではない、シャルロットは目の前にいる、他のメンバーでミサイルを搭載している者はいない。

なら、誰が放ったのかとミサイルが放たれた場所を見ると、ストライクフリーダムに乗ったキラとオルタナティヴに乗ったラクスの姿と、そして・・・打鉄・式式に乗った愛する妹の姿があった。

「か、簪ちゃん・・・」

「お姉ちゃん、最低だよ。約束を破る人間だったなんて、思わなかった。私が憧れて、嫉妬していたお姉ちゃんが、実は人との約束をどんな理由があつたとしても平気で破る様な最低な人だったなんて・・・」

「ち、違う・・・違うの簪ちゃん！ こ、これには・・・わ、訳が・・・！」

「聞きたくない・・・お姉ちゃん、もう私、お姉ちゃんの妹、辞めるね」

「え・・・？」

今、何を言われたのか理解出来なかった楯無だったが、だんだんと意味を理解して一気に青褪めた。

「ちよつと簪ちゃん！ 何を言ってるのよ!？」

「私、キラさんとラクスさんの妹になる。シャルロットさんの姉妹

だよ」

「・・・あれ？ 僕の知らない所で何があったの？」

シャルロットが首を傾げていると、何事だと一夏たちが集まってきた。シャルロットに尋ねてくるが、正直こつちが聞きたい。

「簪ちゃんのお姉ちゃんは私！ 私だよ！？」

「人との約束を破るようなお姉ちゃんはいらない。私は、打鉄・式を完成させるのを手伝ってくれた優しいキラさんとラクスさんの方が、お姉ちゃんより好きだから」

「っ！！！！」

楯無が殺意の籠った目でキラとラクスを睨みつけてきた。

「あなたがやってきたこと、全部彼女に話しておきましたから」

「自業自得、因果応報、後悔先に立たず、良い言葉ですわね」

「・・・許さない、簪ちゃんに手を出すなんて」

「先に一夏たちに手を出してきたのは貴女です。目には目を、歯には歯を。ハンムラビ法典には良い言葉がありますね」

それを聞いて歯軋りした楯無はここでキラに模擬戦を挑もうかと思っただが、以前負けている事を思い出した。

なら如何したら良いのかと考えていたら、簪が夢現を出して楯無に向けて構えるのが見えた。

「お姉ちゃん、私の考えを改めさせたいのなら、私と・・・戦って」
「簪ちゃん！？」

「私が負けたら、さっきの言葉は撤回する。でも、もし私が勝ったら、お姉ちゃんには二度と裏表問わずキラさんとラクスさんの事を調べるのを止めてもらうのと、お姉ちゃんの妹を・・・本気で辞め

るから」

「・・・本気で、勝てると思ってるの？ お姉ちゃんに」

「もう、私はお姉ちゃんの影で周囲の目に怯えてる私じゃない・・・だから、負けないよ」

「・・・わかった。なら、これから始めましょうか」

楯無もラスティーンネイル蛇腹剣を構え、距離を取った。

突然、模擬戦が始まる事になったので、一夏たちは急いでキラ達の所・・・アリーナ入り口まで移動すると、模擬戦は始まる。

「なあキラ、何が起きたんだ？」

「ごめん、後で説明するよ・・・今は、見ててあげて。天才の姉を超えようとする妹の努力の形を」

その言葉に、篝が息を呑んだ。そして、簪が自分と似た境遇にあるのだと感じて、自然と簪の姿が目焼きつくのを見覚える。

「凡人でも、天才に追いつける・・・追い越せるんだって、簪さんは証明しようとしているんだ」

その力強く、そして美しい姿を、見てくれ。キラは、言葉に出さないが、間違いなくそう言っている。ならば見よう。天才を凡人が超えようとする、その姿を。

第四十六話 「日本の力、姉妹の衝突」 (後書き)

次回は更識姉妹の戦い!!

第四十七話 「天才の姉、凡人の妹」 (前書き)

姉妹対決です！

第四十七話 「天才の姉、凡人の妹」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十七話

「天才の姉、凡人の妹」

第一アリーナ、そこに霧纏ミスティアス・レイディの淑女を纏った楯無と、打鉄・式式を纏った簪の更識姉妹が向かい合っていた。

「簪ちゃん……手加減はしないよ」

「うん、私も……全力でお姉ちゃんと戦う。もう、絶対に逃げない」

ラストイー・ネイル
蛇腹剣を構える楯無と夢現を構える簪、お互いに用意は整った。

【試合、開始】

模擬戦開始の合図と共に、楯無と簪は一気に接近して、ラストイー・ネイル蛇腹剣と夢現が火花を散らしながら交差する。

「そこ!!」

ラストイー・ネイル
蛇腹剣と夢現が鏝迫り合いをしている中、近距離から簪は春雷を発射した。慌てて避けた楯無だったが、そこから連射された荷電粒子砲に翻弄され、何発か受けてシールドエネルギーを消費してしま

「っ！ まさか、近距離からの射撃なんて・・・っ」

「キラさんに教えてもらった戦法だよ。近距離からなら、避けるのは難しいから」

「くっ、余計な事を！！」

簪が自分の知らない所で誰かに戦い方を教わり、強くなる。それが面白くない、それがキラに教わったものだというのが、何よりも気に入らない。

本当なら、簪の専用機作りも手伝ってあげたかった。頼ってくれば何時だつて手伝ったし、完成したら自分が簪に色々と教えてあげたかったのに、簪が専用機作りで頼ったのはキラ、手伝ったのもキラ、完成してから色々と教えたのもキラ・・・全部キラ、何故・・・何故、簪の実の姉である自分ではなく、赤の他人でしかないキラが、簪にこんなにも頼られ、慕われているのか、それが・・・憎かった。

「簪ちゃん・・・本当にお姉ちゃんの妹を辞めるの？」

「・・・お姉ちゃんは、少しやり過ぎ。もう、任務とか関係なくキラさんに対して敵意を持って行動してるから・・・そんなの、今までのお姉ちゃんじゃない。私が憧れたお姉ちゃんのやり方じゃないだから・・・」

だから、簪は自身の力で楯無の目を覚まし、そして・・・長年のコンプレックスを、今ここに、晴らしてみせる。

「打鉄・弑式！！！！」

連射していた春雷を止めてマルチロックオンシステムを立ち上げると、霧纏の淑女の各所をロックしていく。

「山嵐、フルバースト!!!」

48発のミサイルが一斉射され、逃げ回る楯無を追いかける。

楯無は追いかけて来るミサイルに舌打ちしながらも、命中しそうになったミサイルを清き情熱クリア・パッションで落として行きながら、簪に反撃に出る用意を整えた。

「そろそろ準備運動もこの辺にしますか・・・簪ちゃん、覚悟してね」

蒼流旋を展開して構えると、ミサイルの合間を縫って飛び、一気に簪の前まで移動した。そのまま突き入れようとしたのだが、夢現に阻まれる。しかし、蒼流旋はその程度では防いだとは言わない。

「きゃあああああ!?!」

蒼流旋に内蔵されたガトリングガンから無数の弾丸が放たれ、打鉄・式式のシールドエネルギーを一気に削っていく。

このままトドメと清き情熱クリア・パッションを使おうとしたのだが、背後からミサイルが迫るのを見て離脱しようとしたのだが、その瞬間・・・。

「ぐっ!?! か、簪ちゃん!?!」

「逃がさない・・・一緒に受けて貰うよ、お姉ちゃん」
「っ!」

簪にガツシリと掴まれて離脱出来なくなってしまった。もう振り払っても間に合わない距離にミサイルが迫ってきたので、せめてもの抵抗とばかりに蒼流旋のガトリングでミサイルを落として被弾する数を少しでも少なくする。

「はあ、はあ、はあ・・・む、無茶するわ、簪ちゃん。自分だって落ちる可能性があったのに・・・？」

ふと、気が付くと楯無の後ろには簪が居なかった。何処に行ったのかとハイパーセンサーを駆使して探すと、自分より遙か上の所に浮いていた。

見れば山嵐と春雷の砲門を展開して構え、マルチロックオンシステムで楯無をロックしている。

「ま、まさか・・・」

「キラさん直伝！ ハイマツトフルバースト！！！」

打鉄・弑式にはハイマツトモードが無いので、正確にはハイマツトフルバーストではないのだが、何となくだけこの名前を気に入って付けてみた簪だった。

山嵐のミサイル48発と、春雷の連射型荷電粒子砲が一斉射され、一直線に楯無に迫る。今度は先ほどの山嵐のみのフルバースト以上の速度で襲い掛かる攻撃に流石の楯無も冷や汗が流れた。

「って、避けないと不味い！！！」

残りシールドエネルギーが300を切っているのだ。これ以上の被弾は流石に不味いので必死になって避けながらミサイルを落とすていく。

だが、次々と連射されてくる荷電粒子砲を避けながら無数のミサイルを落とすのは容易ではなく、何発かミサイルや荷電粒子砲が掠ってシールドエネルギーが残り147になった。

「くっ・・・なら、使っしか無いわね」

ミステリアス・レイディ
霧纏の淑女の全身に覆われていた水が急速に引いて一箇所に集中していく。

攻撃を回避しながらなので、集中力を分散しながらの作業に一苦勞してしまうが、少し発動まで時間が掛かる程度、天才・更識楯無にはその程度、問題ではない。

【ミストルティンの槍、発動】

ミステリアス・レイディ
霧纏の淑女最大の攻撃、ミストルティンの槍が発動した。一箇所に集められたナノマシンの水が膨大な攻性エネルギーとなって発射され、ミサイルや荷電粒子砲を薙ぎ払いながら一直線に打鉄・式式に襲い掛かり、飲み込んだ。

「そ、そんな・・・っ！ きゃあああああああ！！？」

この一撃で、打鉄・式式のシールドエネルギーが469から21まで減ってしまった。ギリギリで残っていたが、機体各所がスパークして、これ以上動くのは不味い状態になっている。

「これで終わりよ、簪ちゃん」

「っ・・・まだ、まだ負けない。私は、まだ諦めてない！！」

夢現の振動数を最大にして振り上げる。まさかの抵抗に驚いて咄嗟に蛇腹剣で受け止めたのだが、振動数を最大に引き上げた夢現の刃を受け止めた時、蛇腹剣の刃が罅割れ、砕け散った。

そのままの勢いで夢現の刃は霧纏の淑女のボディに当たり、装甲を削りながらシールドエネルギーを10まで落とす。

「っ！ これでー！！」

「それは、こっちのセリフよー！！」

「はああああああああつ！！！！！！！！」

お互い、最後の一撃と夢現を振る簪と、蒼流旋を振る楯無。その決着の行方は・・・蒼流旋によって大きく逸らされた夢現が空を切った状態で制止して、打鉄・弍式のボディに蒼流旋が突き刺さっているのを見れば明らかだった。

【勝者、更識楯無】

「・・・私の勝ちだよ、簪ちゃん」

「うん・・・負け、ちゃった」

確かに簪は負けた。ギリギリまで追い詰めたのに、一步届かずに敗れてしまった。なのに、負けた簪本人の表情に悔しさという感情は見られない。逆に清々したと言いたげな晴れ晴れとした笑顔が浮かんでいる。

「何で、簪ちゃん・・・笑ってるの？」

「だって、私、お姉ちゃんをここまで追い詰める事が出来たんだもん。今まで、ずっとお姉ちゃんには追いつけないって思ってたのに、私・・・ここまでお姉ちゃんと戦えたんだもん。凄く、満足してるよ」

今まで、簪は楯無には勝てないと思って、自分に自信が無くなり、臆病になっていた。だけど、今回の戦いで楯無のシールドエネルギーを10まで削る事が出来たのだ。

学園最強と言われている楯無を相手に、天才である楯無に比べれば凡人でしかない簪が、だ。それは簪にとっても大きな意味を持っている。

「ねえお姉ちゃん、キラさんとお話しようよ。ちゃんと真正面から

話せば、あの人はちゃんと向き合ってくれるから」

「それは、嫌」

「お姉ちゃん！ いい加減にしないと、本気でお姉ちゃんのこと、嫌いになるよ？」

「そ、それは！ そんな！？」

「なら、お願い・・・ちゃんとキラさんと向き合って話して」

「・・・はあ、わかったわよ」

何でだろう、随分と姉妹の間の会話が無かったのに、今は二人とも何も憚る事なく話が出来る。楯無は簪と、ずっとちゃんと話したかったから、嬉しい事だけど、簪は何故なのか。

それは、多分・・・簪の中で、楯無に対するコンプレックスが消えたからなのだろう。姉を見る目が、今までと全く違う。怯え、嫉妬、そういった負の感情が消えて、姉妹は再び笑い合いながら手を取るのだった。

第四十七話 「天才の姉、凡人の妹」(後書き)

次回はキラと楯無の会話、和解シーンです。

第四十八話 「和解」(前書き)

和解？ です。

第四十八話 「和解」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十八話

「和解」

楯無と簪の試合を見ていたキラ達だったが、キラとラクス以外は事情が飲み込めていない。ただ、二人が似ている事から姉妹なのだろうという事は理解出来る。

「なあ、キラ・・・結局、何があったんだ？」

「それにあの方は・・・確か4組の方でしたわよね？」

「うん、更識 簪さん。4組の生徒で、日本の代表候補生」

「日本の？ という事はあの機体は打鉄の発展機か？」

篝の言う通り、打鉄・式式は純国産第二世代、打鉄の発展機でもある。

「今まで完成が遅れてたけど、この前まで僕とラクスが手伝って完成させたんだ」

「完成が遅れていた？ いや、確かドイツに居た頃に聞いた事があるな、白式のデータ収集や白式専用の武装を造るのに倉持技研が掛かりつきりになって、日本の第三世代機の開発が遅れていると」

「そう、それを簪さんは引き取って一人で造ってたんだけど、行き詰って僕とラクスが手伝ってたってわけ」

それから更識姉妹の事情も話した。天才の姉の影でいつも自分を

見てくれない周囲に怯えて過ごしてきた簪の事、そのコンプレックスを拭い去る為に、完成した打鉄・式式で姉に模擬戦を挑んだ事、それからキラの事を影でコソコソと調べまわっている楯無の事、楯無がキラから一夏たちを遠ざけて孤立させようと計画していた事まで全て、話す。

「下らないわね、そんな事の為にキラを孤立？ あの会長、天才とか言われてる割に結構バカじゃないの？」

「さあ？ でも、ロシア政府と日本の政府、更に実家まで使って僕の事を調べようとしていたみたいだよ」

「お兄ちゃんの事を・・・かあ。まあ、何となくだけど解らなくはないかな？ だって、知らない人からしたらお兄ちゃんって結構謎の人だもん」

シャルロットの言葉に、ちよつとグサつと来たキラだった。

「しかし・・・流石は代表候補生と、キラが開発を手伝った機体だ。まさか学園最強を相手にここまで追い詰めるとは・・・」

「ラウラから見ても、簪さんの実力は如何？」

「ああ、間違いなく私達の中でも最強に近いだろうな・・・いや、もしかしたら私たちの中で最も強いかもしれん」

「潜在能力は高かったから、僕も少し鍛えてみたんだけどね」

「余計にか・・・まったく、これは私もうかうかしてられんな」

実際の所、簪の実力はシャルロットとラウラの次くらいのものだ。今回、楯無を相手に此処まで戦えたのは、この模擬戦に掛ける簪の想いの大きさが起因している。

「さてと、そろそろ僕は簪さんの迎えに行こうかな・・・たぶん、会長とも話す事になるだろうから」

「え？ キラ、先輩と話つて何だ？」
「ちよつとね」

一夏の問いを笑顔で誤魔化してキラはラクスと共にピットに入った楯無と簪のところに向つた。

ピットには既にISを解除してスポーツドリンクを飲んでいる更識姉妹の姿があり、入ってきたキラとラクスの姿に楯無は表情を強張らせ、簪は笑顔で手を振る。

「お疲れ様、簪さん」

「良い試合でした」

「ありがとうございます・・・でも、負けちゃいましたけどね」

「負けたとしても、あそこまで会長を追い込んだのは、君の努力と、想いの強さの現われだから、誇つて良い事だよ」

「はい！」

何故だろう、キラに褒められた簪のお尻に犬の尻尾が見えた気がする楯無だったが、直ぐに萌えそうになるのを堪えてキラに鋭い視線を向けた。

「さてと、それで・・・会長、何か御用でも？」

「っ・・・そうね、どうやって私の可愛い妹を手懐けたのかしら？」

「別に特別なことはしてませんよ。ただ、彼女が困っていたから手を貸した・・・ただ、それだけです」

「そう・・・気付いているわよね？ 私があなたの事、まだ調べてるって事」

「ええ、部屋の鍵を変えてからも侵入しようとした痕跡がありましたから。今度は入れませんでしたか？」

「・・・」

沈黙は肯定と受け取る。キラはストライクフリーダムの腕だけ部分展開すると、一つの映像を映し出して見せた。

「これ、何だか判りますか？」

「・・・ウイルス？」

「そうです。僕が作った自己消滅型のコンピュータウイルスです」

「それが、どうかしたのかしら？」

「実は、貴女がこれ以上、僕のことを嗅ぎ回るのでしたら、日本とロシアのホストコンピュータにこれを流そうかと思っていたんです。ついでに更識家のコンピュータにも」

「・・・脅しかしら？」

脅しだ。このウイルスはキラが全力で作ったもので、密かに束も手を加えた世界最強のコンピュータウイルスなのだ。これを流されたコンピュータは全てのデータというデータが消滅して、更にはそのコンピュータが二度と使えない状態にまでしてしまうえげつないもの。

「因みに、あらゆるワクチンソフトに抗体を持つ特殊なタイプです」

「・・・わかったわ。もう、今度こそ本気で貴方たちに手を出さな
いって誓う。一夏くん達の事も、あなたから遠ざけようとしたのは、
悪かったわ」

「はい」

「ただ、あの子たちの特訓に付き合うくらいは良いでしょ？」

「それくらいなら・・・正直、一夏たちには今以上に強くなっても
らわないといけないので」

「それって、学園祭の時の仮面男の事で？」

「ええ」

クルーゼの事、楯無も実際に戦ってみて解っている。あの男が亡

国機業にいる以上、一夏たちには今以上のレベルアップが要求されるのだから。

「キラさん、学園祭の時の仮面男というのは……？」

「そっか、簪さんは知らないのか……これ」

ストライクフリーダムに保存してあったクルーゼとレジェンドプロヴィデンスの画像を映し出した。

「この男の名前はラウ・ル・クルーゼ……僕と少なくとも因縁がある男で、昔……確かに僕が殺した筈の男なんだ」

「っ！ こ、殺した……？」

「穏やかじゃないわね……その殺した筈の男が生きていたって事よね？」

「はい、そして使っている機体は僕が昔、彼と戦った時に、彼が使っていた機体が二次移行セカンドシフトした機体です」

「……それは、危険ね」

恐らく、アメリカで起きた福音奪取事件は既に楯無も知っているだろう。それを前提にして話す。

「アメリカにも、クルーゼは現われました。正直な話、これ以上クルーゼに好き勝手させる訳にはいかない。だから会長に依頼したい事があります」

「クルーゼって男の事ね？」

「その通りです。クルーゼと、亡国機業の動向を追ってもらえますか？ 更識家を使って」

「……まあ、今回のアメリカの件もあって、本家も何かしら動くうとしていたから丁度良いわ。受けてあげる」

「それと、もう一つ……ドイツを調べて欲しいんです」

「ドイツ？」

何故、ここでドイツが出てくるのか理解出来ないという顔をしている。まだキラと束が行き着いたドイツと亡国機業の繋がりには知らないらしい。

「これは僕と、とある人が調べ上げた事なんですが・・・ドイツ軍、政府と亡国機業には繋がりがあります」

「ちよつと待って・・・マジ？」

「本当ですわ。この画像を見てください・・・イギリスで起きたサイレント・ゼフィルス奪取の時の監視カメラの映像です」

今度はラクスがオルタナティブを部分展開して映像を出した。サイレント・ゼフィルスが盗まれる瞬間の映像で、そこには犯人の顔も映っている。

「荒かった映像を修正したものです」

「これって・・・織斑先生ですか？」

「顔は似てる・・・っていうか、本人のコピー？」

「これはまだ推測の域を出ていませんが、おそらくクローンかと」「クローンって・・・」

そこで、千冬がドイツに教官として出向する事になった経緯と、出向してからドイツで急激に進歩したクローニング技術の話をする。その話をした途端、楯無も納得出来たのか、少し険しい顔になった。

「それが真実であった場合、ドイツは世界中を敵に回す事になるわ」「そうです。ドイツはそれを理解している筈だから徹底的に隠していると思われます」

「だからこそ、更識家の力で調べて欲しいって事ね……良いわ、ちよつとばかしこれは見過ごせないし、やってみる」「お願いします」

こうして、キラと楯無の和解は成立して、同時に亡国機業を調べる為に手を組む事になった。

だが、一番の問題となっているのは、クルーゼの事。再びクルーゼと戦う事になった時、今のままでは勝てない。たとえレベルアップしたとしても、一夏たちではクルーゼには勝てない。

そして、キラも……。

第四十八話 「和解」 (後書き)

次回からキャノンボール・ファストの準備が始まります。

第四十九話 「高機動」(前書き)

フラグ…。

第四十九話 「高機動」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第四十九話

「高機動」

夢・・・そう、これは夢なのだろう。今、キラが見ているこの光景は夢なんだと、理解した。

キラの目の前で、まだMSだった頃のストライクフリーダムがレジェンドと戦っている。これは、メサイア攻防戦の時の光景なのだろう。

「なんで、今更・・・」

既に終わった戦争を夢に見ているのか、そう呟いた瞬間、見ている光景がガラリと変わった。キラはいつの間にか草原の上に立っており、辺りは青空と果てしなく広がる草原のみの光景となっている。

「・・・此処は」

何時だっただろう、ラクスと二人つきりでデートをした草原に似ている。沢山の八口と一緒に、ラクスが遊んでいた草原だ。

「懐かしいな・・・」

本当に、懐かしい。まだキラがフレイの死で塞ぎ込んでいた頃、ラクスと共にこの場所に来て、随分と心癒されたものだ。

「この世界にも、こんな場所があったら、またラクスと一緒にいきたいな」

きつとラクスも喜ぶだろう。そう思いながら草原を歩き出したキラだったが、いつの間にか遠くに人影らしきものが見えた。

「……え、あれは」

見覚えのある人影、赤い髪を腰まで伸ばした少女の姿は……キラの初恋の少女、フレイ・アルスターだった。

「ふ、フレイ……なの？」

『久しぶり……キラ』

間違いなくフレイだった。あの頃と全く変わらない姿、あの頃と同じピンクのワンピースの姿で、肩には何故か蒼い鳥を乗せている。

「フレイ……何で、僕の夢に？」

『言っただしょう？ 私の本当の想いが、貴方を守るって……今、弱った剣を持つしかなかった貴方に、伝えたい事があったの』

「伝えたい事……？」

『そう、この子がずっと……貴方に話しかけていたの、知らないのよね』

この子、というのはフレイの肩に乗っている蒼い鳥の事だろう。

「その鳥は？」

『貴方がよく知っている子……ずっと貴方と共に戦い、今も尚、貴方と共に在り続ける翼であり、剣』

「まさか・・・その鳥は、フリーダム・・・なの？」

「ピィ！」と、まるで肯定するかのようには鳥が鳴いた。

「やっぱり、フリーダムなんだ」

『そう、この子はずっと、貴方に語りかけていたの。だから、それを伝えたかった』

「そうなんだ・・・ねえフレイ」

『・・・何？』

「ごめんね・・・君を守れなくて」

『良いのよ、言ったでしょう？ あれで良かったって・・・』

「うん。今、僕は幸せだよ・・・守りたい人が出来て、共にこれらを歩みたいって思える人が、出来た」

『良かった・・・キラ、幸せになってね。貴方は、幸せにならないと駄目よ・・・必ず』

「うん、君を守れなかった分も、彼女を守って・・・きっと、幸せになるよ」

急に、辺りの風景と、フレイの姿が薄れてきた。夢の終わりが近づいてきているのだろう。

「時間、だね」

『そうね・・・キラ、もう私が貴方に会う事は、多分・・・二度と無いと思うの。だけど忘れないで、いつでも私の本当の想いが、貴方を守っている事』

「・・・うん、ありがとう。さようなら・・・フレイ」

草原と、フレイの姿が消えて無くなり、辺りは真っ暗な闇に包まれる。ただ、その中でキラの目の前にはフレイが消えても残っていた蒼い鳥・・・フリーダムが今も残っていた。

「フリーダム・・・？」
『ヒィ！』

羽ばたいた。そのままキラの周囲を飛び周り、肩に乗る。

『で』

「・・・？」

『ブ ト ダム』

フリーダムから声が、確かに聞こえた。だが、耳元にいるというのに、何故か声が遠く聞こえ、殆ど聞き取れなかった。

そこで完全に夢は終わり、キラは夢の世界から現実の世界へと意識を戻すのであった。

寮での夕食の席、ここではキラ達はいつものメンバーに簪を加えた9人で食事をしていた。その席で一夏の誕生日が今月である事を知り、それを知っていたであろう一夏のダブル幼馴染がジト目で見てるラウラから目を逸らすという光景が広がっている。

「一夏の誕生日・・・9月27日だっけ？ 確かその日ってキャンノンボール・ファスト当日だよな？」

「らしいな、だから大会が終わったら俺の家で中学の時の友達とかも呼んでパーティーするんだけど」

「でしたら、その日は私たちも一緒に、お祝いしませんと」

決まりだ。一夏の誕生日には、ここに居るメンバー全員で一夏の家に行つてパーティーをする。

それから、もう一つ考えなければならぬのは、キャンノンボール・

ファストの事だ。明日から大会の為に専用機には高機動整備が始まる。

「でもよ、高機動整備って、具体的に何をやるんだ？」

「ふむ、基本的には高機動パッケージのインストールだが、お前の白式には無いだろう？」

プチトマトを頬張りながらラウラが説明した。確かに、白式にはパッケージが存在しない、というか白式の方がパッケージを拒絶しているのだ。

「お兄ちゃんのストライクフリーダムと簪さんの打鉄・式式と箒の紅椿もだけど、その場合は駆動エネルギーの配分整備とか、各スラスタの出力調整とかかなあ」

ストライクフリーダムの場合、機能低下していても素の状態で充分速いので必要無いのだが、白式と紅椿、打鉄・式式には必要だろう。

「ふうん、確か高機動パッケージっていうとセシリアのブルーティーズにはあるんだっただよな？」

「ええ！ 私、セシリア・オルコットの駆るブルーティーズには、主に高機動戦闘を主眼に据えたパッケージ『ストライク・ガンナー』が搭載されていますわ！」

立ち上がり、腰に手を当てながら高らかに宣言したセシリアだが、キラから見た感じ、最近の落ち込んだ様子は見られない。

学園祭の時、クルーゼや巻紙礼子とは別に来ていた亡国機業の間を逃がしたのが原因で、暫くは落ち込んで、一人で訓練している事もあったらしいのだが。

まあ、仕方が無いだろう。何せセシリアが相手をしたのはイギリスで強奪されたサイレント・ゼフィルス、つまりセシリアの愛機ブルーティアーズの姉妹機なのだから。

「つかさ、今回の大会で有利なのはセシリアと一夏と篤、それにキラよね」

大会には出ないラクスを除いて、白式と紅椿、ストライクフリーダムとストライク・ガンナーを搭載したブルーティアーズは正直、今回の大会では有利だろう。

「つつかさあ、うちの国は何をやってんだか。結局、甲龍用高機動パッケージ間に合わないし。シャルロット、あんたは？」

「僕のエクレール・リヴァイヴは出来立てだし、元々はお兄ちゃんが造った機体だから・・・リヴァイヴ用のパッケージで規格が合うのはガーデン・カーテンだけなんだよね。まあ、まだ第三世代が開発されてないフランスで、パッケージがある訳もないし、スラストの整備くらいかなあ」

それから、ラウラのシュバルツエア・レーゲンは姉妹機であるシュバルツエア・ツヴァイクの高機動パッケージを調整して使う事になるらしい。

「それより、キラさん・・・ストライクフリーダムは大丈夫ですか？ 機能低下しているって聞いてますし、リミッターも掛けるの大会ですよね？」

「うん、多分リミッターを掛けて紅椿と直角くらいのスピードになるかな？ だから問題は無いと思うよ」

機能低下して、更にリミッターを掛けて紅椿と同等のスピードと

か、既に次元が違いすぎると頬を引き攣らせる一同だった。

「キラ、その・・・姉さんでも完全修復は無理だったのか？」

「まあ、ストライクフリーダム自体が束さんの技術力を超えた機体だから、流石にね」

「そうか・・・」

「呼んだ？」

『っ!!!?!?』

突然、幕の後ろに束が現れて、そのまま幕に抱きついてきた。

「ね、姉さん!? は、離れてください!!!」

「えゝ、いいじゃんゝ。折角、時間が空いて幕ちゃんを堪能したいのにゝ」

「じ、時間が空いたって、今まで何を・・・」

「エクレール・リヴァイヴを見てたのゝ」

え？ と、キラとラクス以外がシャルロットの胸元を見ると、確かに、待機状態のエクレール・リヴァイヴが見当たらなかった。

「キー君凄いなゝ、現行第三世代の中では最強って言うても良い機体だよ、あれ」

「一応、ブルーティアーズや甲籠、シユバルツエア・レーゲンのデータを見ながら、それを上回る様に造りましたから」

「それにゝ、木星の使者だっけ？ あれは束さんもビックリ！ まさか束さんが思いつかなかった重力兵器とは、恐れ入るよゝ」

どうやらキラの造ったエクレール・リヴァイヴは束の御眼鏡に適った様だ。

「それで、スラスターとブースターの方なんですけど・・・束さんから見て問題とかはありました?」

「ん〜? そうだねえ・・・第三世代というコンセプトならあれで充分じゃないかな? 特に問題らしい問題は無かったよ〜」

「そうですか」

「それなら安心だな束・・・そして、何時まで箒に抱き付いているつもりだ貴様は」

「・・・あれ? ちーちゃん?」

その瞬間、束の頭に中身の入ったビールの缶が落ちた。

「きゅ〜、ひ、酷いよちーちゃん! それ、中身入ってるよ!?!」

「知ってる。だから使った」

「確信犯!?!」

「千冬さん、今日はもう仕事は終わりですか?」

「ああ、だからこうしてビールが飲める」

イイ笑顔でプルタブを開けて、飲み始めた千冬だった。そんな姉の姿に一夏は頭を抱え、仕方ないとばかりに立ち上がるとカウンタ―につまみを取りに行くのだった。

「一夏、スルメで頼む」

「はいはい、あんま飲み過ぎんなよ」

「ふん、そんなへまはしない」

「はあ」

一夏がカウンターに行ったのを見届けて、千冬はビールに入れていたビールの缶を二本取り出してキラとラクスに差し出す。飲み、目がそう言っていた。

「い、頂きます」

「キラ、ラクス、お前達はもう少しビールに慣れる。カクテルやワインなんて私の前では許さんぞ」

「あゝ、ちーちゃん！ 私も私も！ キー君やラーちゃんと一緒に飲みたいって前から思ってたんだ」

「ほら」

はたして、生徒が見ている前で良いのだろうか。そう思っているキラとラクスだったが、千冬には何を言っても無駄な気がして、仕方ないとプルタブを開けるのだった。

第四十九話 「高機動」(後書き)

次回はキラとラクス、シャル、一夏、箒の5人が出かけます。
後輩になるあの子、登場！

第五十話 「楽しい時間」(前書き)

そういえば、本日6月13日は私こと、剣の舞姫の誕生日なんですよねえ。すっかり忘れてました。

第五十話 「楽しい時間」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十話

「楽しい時間」

週末、息抜きも兼ねてキラとラクスはシャルロットと一夏、箒を誘って街に遊びに行く事になっていた。

既にシャルロットと箒、ラクスの三人は待ち合わせ場所に行っている、キラと一夏は準備を整えてから向う事に。

「キラの私服、それ・・・何か格好良いな」

「これ？ 前の世界で好んで着ていた服を特注で作ってもらったんだけど」

キラが着ているのは前の世界でもよく来ていた全身にベルトが付いている黒いズボンとジャケットに赤いインナーだ。

「特注・・・良いなあ」

「一夏も白式のデータ提供とかしてるし、お金も貰ってるんだから自分好みの服を特注してもらったら？」

「うーん、考えとく」

そんな他愛ない話をしながら待ち合わせ場所に行くと、何故かシャルロットと箒が軽薄そうな男二人の腕を締め上げていた。

「ナンパか？」

「へえ、ナンパって初めて見るよ」
「そういう問題じゃねえって」

それにしてもあの男二人は随分と命知らずな事をする。確かにシャルロットと箒、ラクスは誰の目から見ても美人だ。しかし、シャルロットはフランスの代表候補生で、箒は剣道全国優勝者、ラクスに至っては軍人に直接指導を受けていたのだ。そんな三人をナンパするとは、本当に運が無い。

「とりあえず、キラは銃を仕舞え」

「え？ でもマリユールさんからナンパ男は射殺して良しって教わってるんだけど」

「それ、間違いだからな？」

そもそも、キラは不殺を貫いているのではなかったのか。というツッコミを入れた一夏だったが、キラの目を見れば解る。ラクスに手を出す者は滅すると言っているのだ。目は口ほどにものを言うとはよく言ったものだ。

「取り合えず、行こうぜ？」

「うん」

「・・・銃、仕舞え」

「わ、わかってるよ」

やっと銃を仕舞ったキラを連れてラクス達のところに行くと、丁度箒が殺気混じりの鋭い眼光で男たちを睨みつけ、腰を抜かした男二人が逃げ出す所だった。

「ラクス、シャル、お待たせ」

「箒、あんま睨んでやるなって」

「キラ、遅いですわ」

「そっだよ！」

「全く、待たせすぎだ」

文句を言ってくる三人娘、キラと一夏が早く来ていればナンパなんてされなかったのと言いたいのだろうが、そもそも待ち合わせにしたいと言い出してきたのは三人の方だ。

「取り合えず、ここで話してもあれだから、行こう？」

キラに言われて渋々と三人娘が立ち上がると、キラの両サイドにラクスとシャルロットが、一夏の隣に箒が並んで歩き出した。

目的地はシヨップピングモール、息抜きの買い物したいとラクスとシャルロットが言い出したので、地元の一夏と、たぶん一夏が一緒なら喜ぶであろう箒も誘ったのだ。

「あれ？ ちょっと待っていてくれ……………おい！ 蘭！」

一夏が目を向けた先、全員、其方に目を向け、そしてキラだけ目を逸らした。

そこは女性物の下着を扱っている店で、その店先に立っている少女（一夏の知り合いらしい）が手に持っているのは、白と黒のストライプの下着だ。

「え！？ い、一夏さん！？」

少女……………五反田蘭が顔を真っ赤にして手に持っていたものをカートの戻した。

一夏は特に気にする事なく……………というより、気付きもしないで歩み寄り、その後ろでシャルロットと箒が顔を真っ赤にしている。

ラクスは少し頬を染めて苦笑して、キラは店に近づくのを拒否して顔を逸らしていた。

「こんにちは、一夏さん」

「おつす。今日は一人？」

「あ、はい。ぶらつと買い物に」

というか、こんな店に友達と一緒にでないのなら一人しか考えられない。彼女の兄なんて連れてこれる筈もないだろう。

「あ、この間の件、ごめんな。学園祭、見たかったよな？ 来年入学するんだし」

「そ、そうですね。できれば次からは優先的に私にチケットを譲って頂けると……」

そこでラクスは理解した。つまりこの子も一夏の事が好きなら、一夏に落とされた女の子の一人なのだ。

「一夏、シャルロットたちに紹介しなくて良いのか？」

「あ、そうだったな。シャル、ラクス、キラ……って、キラ？ なんでそんなに離れてるんだよ？」

「……一夏、その店、なんの店？」

「え？ ……」

やっと気付いたらしい。今、自分たちがいる所が女性物の下着の店、所謂ランジェリーショップである事を。

「わ、悪い蘭……その」

「い、いえ……」

取り合えず、ランジェリーショップを離れて近くの喫茶店に入る
ことになった。

キラと一夏、箒は珈琲を頼み、ラクスとシャルロット、蘭は紅茶
を頼んで、改めて、紹介という事になる。

「先ず、こいつが俺と同じ男性IS操縦者って事になってるキラ。
で、キラの隣にいるのがキラの恋人で俺や箒、キラと同じクラスの
ラクス、それとフランス代表候補生のシャルだ」

「キラ・ヤマトです、よろしく」

「ラクス・クラインですわ。よろしくお願いいたします」

「シャルロット・デュノアです。よろしくね？」

「は、はい！ 五反田蘭です・・・よろしくお願いします」

桁違いの美形三人に蘭は緊張している。ラクスもシャルロットも
モデルや芸能人並、それ以上に美人で、キラも男なのに女顔で、や
はり絶世の美形。そこに同レベルの美人である箒と、男の中では美
形に入る一夏もいるのだから、今のところ一般人ではない蘭とし
ては緊張するなという方が無茶だ。

「キラとラクスは知らないか、俺の友達に五反田弾って奴がいるん
だけど、蘭は弾の妹なんだ」

「あ、確か僕が急用が入って会えなかった一夏の友達だっけ？」

「おう」

「そういえば、先ほど一夏さんが仰ってましたけど、蘭さん・・・
と呼んでも宜しいですか？」

「は、はい！」

「ありがとうございます。蘭さん、IS学園を受験するのですね」

「はい・・・その、ISの簡易適正ではAランクを出しています」

Aランクという事はセシリアやシャルロット、ラクスと同じラン

ク、つまり国家代表候補生レベルのランクだ。

「Aランク・・・凄いな、中学生なのに」

「篠ノ之先輩は因みにランクは・・・？」

「わ、私は・・・その、Cだった」

「僕はAだっただよ」

「私もAでした」

因みに一夏はB、平均だった。

「えっと、ヤマト先輩は・・・？」

「僕は、Sランク」

「え、Sランク！？ え、ブリュンヒルデやヴァルキリーと呼ばれるような人たちと同じランクなんですか！？」

「まあ、ね」

他にキラが知る限り、Sランクの人間は千冬と束だけだ。

「そうだ。あのチケット、まだいけたはず・・・蘭、ケータイ持ってる？」

「は、はひ！？」

声が裏返って顔を真っ赤にしながら、蘭が携帯電話をポーチから取り出して、一夏が自分の携帯電話からキャノンボール・ファストのチケットを送信した。

「これって・・・」

「今月行われるキャノンボール・ファストの特別指定席。見たいだろ？」

「あっ、はい！ ぜひぜひ！」

ただ、このチケット、一人一枚しか無いので、一夏が招待できるのはもういない。蘭だけになってしまい、彼女の友達の分は無いのだが、蘭としてはこれだけで充分、友達には悪いが、我慢してもらう事にした。

「何なら、僕とラクスが持つてるチケットもあげようか？ それなら友達も連れてこられるよね？」

「え、その・・・良いんですか？ お二人も、その・・・お知り合いとかに」

「日本には僕もラクスも知り合いはいないから、誰かを招待する事も無いし、別に良いよ」

「ええ、えつと・・・携帯電話は・・・」

キラとラクスも携帯を取り出す。キラの携帯はスライド式の携帯で、色は白。ラクスは折りたたみ式でカメラの機能が高いピンクの携帯だった。

「はい、送信完了。これで友達も連れてこられるよね？」

「あ、ありがとうございます！ その、友達と一緒に見に行きますので!!」

「悪いなキラ、ラクス・・・」

「構いません、招待する方も居りませんもの」

「なら僕もあげるよ」

「そつだな、私も」

結局、蘭は合計5つのチケットを買った。蘭と、後は友達四人は誘って見に行けるだろう。ただし、兄がその数に入っていなかったのは、ご愛嬌だ。

第五十話 「楽しい時間」(後書き)

W 次回は、前半は続きで甘々W W 後半は高機動の授業でキラ無双W

第五十一話 「高速機動の貴公子」(前書き)

キラ無双WW

第五十一話 「高速機動の貴公子」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十一話

「高速機動の貴公子」

あれから、キラ達は蘭も交えてショッピングモールを周る事になった。今は時計店を見ているのだが、シャルロットが一夏の誕生日プレゼントとして腕時計を買うという事になったのだ。

「気に入ったのあった？」

「うん……」

そもそも、一夏は時計をしない人間だ。時間は携帯の時計か白式を使えば良いので、特に必要としていなかったのだが、折角シャルロットがプレゼントしてくれると言うのだから、何か気に入った物を選ぼうとしている。

そんな迷っている一夏を眺めながらキラはラクスと共に店内を見渡して様々な時計を見ていた。実を言うとキラも腕時計はあまりしない人間なのだ。

「あ……」

「キラ？ あら……」

ふと、キラの目に止まった時計、ブルーシルバーの金属ベルトにサファイアガラスを使ったアナログ時計、ワールドタイムやストップウォッチ機能、ソーラー電池に電波時計機能まであり、防水機能

まで装備した高性能且つ見た目も美しい時計だった。

全体的にスマートで、あまりゴツゴツしていないのも魅力的で、キラの好みにも合う時計の値段は、手頃な6万円。・・・6万円で手頃という辺り、キラの金銭感覚もズレている。

「これ、買おうかな・・・」

「良いのではないでしょうか・・・あら、これは色違いですわ」

キラが目をつけた時計の横には同じデザインで色違いのピンクシルバーがあった。

「これ、お揃いで買おうか？」

「はい」

店員を呼んでディスプレイの中から選んだ二つを出してもらうと調整を済ませて会計をした。そのまま腕に着けて行くので、箱だけ袋に入れてもらい、未だに迷っている一夏たちのところへ行く。

「一夏、まだ決まらない？」

「あ、悪いなキラ、ラクス・・・その、何かパツとしないんだよね
あ」

「でしたら、シャルさんが選んでは如何でしょうか？」

「え、僕が？」

「良いのではないか？ シャルロットならセンスも良いだろう」

「それなら・・・うん、じゃあ僕が選ぶね」

蘭を連れて時計を選びに行ったシャルロットは、ゴールドホワイ
トの時計を選び、一夏に贈った。

その後はパスタの店で昼食を採り、付け合せのアイスを食べ
た時、一夏が自分のアイスを箒や蘭と食べさせ合い、箒も蘭も顔を

真つ赤にするという光景が見られた。

「一夏つたら・・・あ、お兄ちゃん、お姉ちゃんまで」

見ればキラとラクスもお互いのアイスを食べさせ合っていた。隣同士に座り、顔を寄せ合いながらスプーンで掬ったアイスをお互いの口に運ぶ。

見ているシャルロットの方が恥かしくなる光景で、同じく見ていた一夏も少し恥かしそうに、箒と蘭は・・・何故かメモを取っていた。

また授業が始まった。本日は第六アリーナに一組と二組、それから四組が合同で授業を行う事になっている。

「はい、それでは皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

この第六アリーナは中央のタワーと繋がっており、高速機動実習が可能な造りになっている。高速機動が得意な生徒はよく此处を使って自習をしているのだとか。

「それじゃあ先ずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

真耶がそう言って手を向けた先にはキラと一夏、セシリアがいた。

「まずは、高速機動パッケージ、ストライクガンナーを装備したオルコットさん！ それと通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑君！ そして、通常装備で既に

高速機動型のヤマト君！ この三人に一周してきてもらいましょう！」

一夏とセシリアは高速機動補助用バイザーを掛けているが、キラは掛けていない。その事を疑問に思った生徒が一人、手を挙げた？

「あの、ヤマト君は高速機動補助用バイザーは使わないんですか？」「えつとですねえ、ヤマト君は先ほども言いましたがストライクフリーダムが通常の状態で既に高速機動型のISでして、普段から高速機動に慣れているんです。それで補助用バイザー無しでも問題無いという事ですね。でも、皆さんは必ず着用してくださいね？ 本来、ヤマト君みたいにバイザー無しでも問題無く高速機動出来る様になるには時間が掛かるんですから」

高速機動補助用バイザーが無ければ周囲の流れる速度に視界が追いつかず、何かに激突したり、酔ったりして本当に危険なのだ。キラの様に常日頃からISで高速機動をしながらの戦闘をしていなければバイザー無しなんてとてもではないが無理というもの。

「一夏、何かわからない事でもある？」

「あ、キラか・・・いや、このバイザー、モードを切り替えなきゃいけないんだよね？ どれだ？」

「一夏さん、それでしたらモードをハイスピードモードにするのですわ。それと各スラスターを連動監視モードにしますの」

「わかった。こうだな」

セシリアに教えてもらって一夏はバイザーのモードをハイスピードモードに切り替え、スラスターを連動監視モードにすると、準備を整えた。

「慣れないと酔うから、気をつけてね」

「おう、サンキュ」

「では、……………3、2、1、ゴー!!!」

真耶の合図で一夏とセシリアはスラスターを全開にして飛び上がり、キラは足を曲げて大きくジャンプをしながら全てのスラスターを全開にすると、ハイマツトモードのまま一気にトップスピードまで速度を上げた。

「つて、キラ速っ!」

「知ってはいましたが、速すぎですわ」

ブルーティアーズも白式も、やっとトップスピードまで速度が上昇してきたというのに、ストライクフリーダムとの距離は一向に縮まらないどころか、更に広がっている。

そして、キラはタワーの外周にトップスピードのまま突入して、カーブの手前で速度を落とさず、更にスピードを上げると神業的なハイスピードカーブを見せた。

「なあ、セシリア」

「なんですの?」

「あれ、出来る?」

「無理言わないでくださいまし!」

あんな真似、キラ以外に出来るわけがない。やっとカーブに入った一夏とセシリアでさえ、スピードを少し落としたというのに、キラはスピードを落とさず、更にスピードを上げて曲がって行ったのだ。既に人間業じゃない。

そして、一方のキラはというと、現在リミッターを切った状態のストライクフリーダムの高速機動に不満を感じていた。

「やっぱり、スピードが落ちてるな・・・それに、カーブの入りか
思った以上に負荷が掛かってる。今のフリーダムだと、これが限界
なのかな」

現在のトップスピードですら遅いと感じてしまう。いや、実際に
キラからしたら遅いのだ。レジェンドプロヴィデンスに落とされる
前なら、今以上のスピードが出せたのだから。

「OSはもう調整してあるから、これ以上はもう無理なんだよね」

正直、不満は多々あるが、これが現在の限界である以上、納得す
るしかない。

スピードを落とす事無くタワーの頂上から折り返して、ドラグー
ンをパージすると、ヴォワチュールリユミールシステムを起動、
レーザー核融合炉とハイパーデュートリオンエンジンからのエネル
ギーを推力に回し、最高スピードまで速度を上昇させる。

最高スピードのままアリーナ地表まで戻ってきたキラは、速度を
一気に殺して静かに着地して見せた。

「ヤマト・・・やり過ぎだ」

「あれでも、結構不満は残ってるんですけどね」

「あ、あはは・・・み、皆さんはヤマト君みたいな事、しちや駄
目ですよ？」 あれはヤマト君だから出来る事ですから」

いや、見ていて怖くなるような機動、誰も真似しようとは思わな
い。実際、キラの機動を見ていた生徒達の大半が肝を冷やし、内緒
だがちびりそうになった子もいたらしい。

そして、一番ビックリしたのは簪だった。凄いという感想と同時
にキラの機動に身を縮こまらせ、プルプルと子犬の如く震えている。

「ああ、それと・・・自分の授業に戻れ更識姉！」

「そ、そんなあ！ 簪ちゃんの子犬の如き愛らしさをカメラに収めるまで待つてください！」

「・・・ふん！」

何処から出てきたのか、カメラ片手にプルプル震えている簪を映していた楯無に、千冬は近くにいた鈴音を投げた。

「ちよつ！ 千冬さん！？ 何するんですか！？」

「織斑先生だ。それで、更識姉、さつさと戻る気になったか？」

「はい」

鈴音をキャッチした楯無は渋々とアリーナを出て行き、簪はやっと落ち着いたのか、姉の醜態に溜息を吐くのだった。

第五十一話 「高速機動の貴公子」(後書き)

次回は授業の続きと、遂に始まるキャノンボールファストです。

第五十二話 「教えて、キラ先生！」（前書き）

高速機動の授業、続きです。

第五十二話 「教えて、キラ先生！」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十二話

「教えて、キラ先生！」

キラ、一夏、セシリアの三人による高速機動実習を終えて、訓練機組の選出を行う為に各自割り振られた機体に取り込んだ。

専用機を持つ者はそれぞれグループに分かれる事になっている。

セシリアと鈴音は高速機動パッケージ組、機体出力調整組には一夏と箒と簪、増設スラストター組にはラウラとシャルロット、リミッターを掛けるだけで特に何もしないキラとキャノンボール・ファストに出ないラクスは専用機持ちたちの見回りという事になっていた。

「あ、一夏」

「ん？ キラ、どうかしたか？」

「東さんから一夏に新しいISスーツが届いてるんだけど、キャノンボール・ファストで使って欲しいって」

「新しいISスーツ？」

「そ、東さんが作った僕のスーツと同タイプの色違い」

「マジ？ やった！ キラのスーツって全身タイプだから羨ましかっただよなあ」

今まで一夏が着ていたISスーツは着るのも脱ぐのも面倒だと前に言っていた。その点、キラが使っているISスーツは束が作ったもので、キラがこの世界に来た時に着ていたパイロットスーツを基にして最初はブカブカだが、手首のスイッチを押せばピタリフィ

ットする全身タイプのスーツ、着るのも脱ぐのも楽なのだ。

「後で束さんに貰って、今は束さんが持ってるから」

「あれ？ 束さん、まだ学園に居るのか？」

「うん」

束には今も学園に留まって貰っている。キラと共に亡国機業の事を調べる為にいるのだが、近々“娘”を呼ぶとか言っていた。おそらくキラも知る彼女だろう。

「おいヤマト、悪いがデュノアとボーデヴィツヒを見てやってくれ」

「あ、わかりました」

「それと織斑、お前はいつまでも喋ってないで篠ノ之とエネルギー分配整備の相談でもしろ、いいな？」

「は、はい・・・」

一夏が筈の方に行ったので、キラもシャルロットとラウラの所に向かった。

「あ、お兄ちゃん！」

「キラか、見回りか？」

「そんな所、二人は如何？」

「今ちよつど二人とも増設スラスタの量子変換インストールが終わったところ。これから調整に入ろうって、ね？」

「ああ、その通りだ」

シャルロットとラウラは二人ともISのヘッドギアを部分展開していた。シャルロットはヘアバンドを、ラウラはウサミミを着けているみたいで何だか可愛い。

「そつだ、キラ・・・悪いが私とシャルロットの調整を見てもらえるか？ 高速機動の専門家からの意見が欲しい」

「良いよ、チャンネルは？」

「私が305、シャルロットが304だ」

「わかった。じゃあ、ちょっと見させてもらつね」

I

ISに備わっている機能、ダイレクト・ビュー直視映像によって視覚の共有をする為にストライクフリーダムのヘッドギア（顔の部分）を部分展開するとチャンネルを合わせて準備を整える。

「お兄ちゃん、準備はOK？」

「うん、大丈夫」

「じゃあラウラ、行こつか」

「ああ」

シャルロットとラウラはエクレール・リヴァイヴとシュバルツェア・レーゲンを展開して浮遊すると、上昇して一気に増設したスターを全開にすると飛翔して行った。

それぞれの視覚映像を見ていたキラは、二人の高速機動の問題点や注意点、その他諸々と、良い部分を洗い出していく。

「シャルモラウラも、流石は代表候補生つてだけあって上手いね・・・あ、シャルは少し加速する時に力みすぎる癖がある。これはちょっと危険かな？ ラウラは・・・加速は問題無いけど、加速した時に少しだけ姿勢制御に小さなブレがある。問題とは言えないけど、機体に掛かる空気摩擦を考えると、後々直していかないと駄目か」

普段の飛行なら二人とも問題は無いのだが、流石に高速機動ともなると問題点がいくつか出てきてしまう。慣れていないのもあるの

だろうが、実戦で高速機動が必要な時に備えて直しておかなければならない。

「あ、戻ってきた」

二人ともタワーの折り返しから戻ってきた。キラの前に着地してISを再びヘッドギアのみの部分展開に戻すと、キラに歩み寄る。

「お兄ちゃん、どうだった？」

「シャルは加速する時に少し力みすぎ、あれはちよつと危ないよ。それからカーブの減速だけど、少し早過ぎ、あれだと高速機動戦では不利になるかな。それから、エクレール・リヴァイヴのスラストの位置、ちよつとだけ問題ある点が・・・元々のスラストと同じ時に吹かしてバランスが少しおかしくなってる所があった」

「あう・・・やっぱり問題あったかあ」

「私はどうだった？」

今度はラウラだ。まるで軍の新兵が教官に教わっている時の様な目を向けてきている。実際、キラはオーブ軍の准将とザフト軍特務隊の白服を兼任している軍人だ。ドイツ軍少佐のラウラからしたら世界も国も違うが上官みたいな存在になるのだろう。

「ラウラは加速した時に姿勢制御で少しだけブレがあったかな、問題とは言わないけど機体に掛かる空気摩擦の事を考えると追々直していった方が良いね。それとカーブの減速が遅すぎ、あれだとミスしたら壁に激突するよ。後は、少しレーゲンの重さを考えてなんだろうけど、スラストが強すぎかな？ 結構制御出来るギリギリまでやったでしょ」

「ああ、少し制御に手間だが、慣れれば問題無いと思ったのだが・・・」

「スラスター、少し減らして一つ一つの出力調整してみたら？ それでも充分だと思うよ」

「・・・そうだな、やってみるか」

問題点のピックアップをしたら、今度は褒める番だ。キラだって、何も鬼ではない。褒める所は確りと褒める、ザフトに居た頃も新兵にはこうやってきたのだから。

「後はシャル、姿勢制御が上手だったよ。全体的にバランスを取ろうと意識して、別の思考で前に進む事も考えて飛んでたでしょ？ 流石だった」

「え？ そ、そうかなあ」

「ラウラは加速の仕方が良かった。ラウラらしい思い切りの良さが出てたから」

「う、うむ・・・レーゲンは重いからな、加速とかは前から意識していたのもあるのだろう」

二人とも照れながらも、何処か嬉しそうにしている。ザフトに居た頃から言われていた事だが、何でもキラは褒め上手なのだとか、特に女性に対しては。キラのルックスでの微笑みと共に褒められる、それだけで女性は大抵が大喜びしていた。

「じゃあ、僕は他の所も見て周るから、二人も調整、頑張つて」

「うん！」

「任せておけ！」

手を振ってその場を去ったキラは、他の所にも顔を出し、この後モセシリア、鈴音、簪、箒、一夏から高速機動の調整を見てくれといわれるのであった。

キャノンボール・ファスト前夜、キラはラクスと共に東の部屋に
来ていた。東の部屋には既に千冬も来ていて、既に話し合いが始め
られる様になっている。

「キー君、ラーちゃん、いらっしやうい！」

「遅いぞ」

「すいません、持ってくる資料が少し多かったので」

「申しわけ御座いません」

「まあいい、座れ」

東と千冬の真向かいのソファーに腰掛けた二人は持って来た資料
をディスプレイに映し出し、早速だが話し合いを始めた。

「まず、更識家に頼んでドイツ軍及び政府の調査をしてもらう事にな
りました。同時に、ラウル・クルーゼの事も」

「そうか、クローン・・・か」

「ちーちゃんのクローンと仮面が一緒に行動しているって見た方が
良いのかな、これ」

東がズームした資料には此処最近になって多発している各地のI
S武装研究所の襲撃事件に関する資料だ。

キラがお得意のハッキングで得た情報なのだが、どの事件にも共
通しているのはレジエンドプロヴィデンスとサイレント・ゼフィル
スが襲っているという事だった。

「それと、若干の音声データからサイレント・ゼフィルスの操縦者
の名前・・・というより、コードネームですね、それが判明しまし
た。M、そう呼ばれています」

「M・・・か」

「こっちは面白い名前だけどね、織斑マドカだっつて」

マドカ・・・頭文字のMだけを使ってコードネームにしているよ
うだ。

「・・・・・・・・」

「千冬さん？ どうかありませんか？」

「いや、何でもありません」

何か、考えているのだろう。眉間に皺を寄せて険しい表情で資料
を見ている千冬は、何処か不安を感じさせる。

「あと、私がハッキングして得た情報だとね、国際IS委員会はキ
ー君を何処かの国に所属させるより、委員会所属のIS操縦者にし
ようと考えてるみたい。ただし、ストライクフリーダムは解体して
技術を世界中に振り撒こうとしているらしいよ」

「身の程知らずも良い所だな、バカな爺どもの考えそんな事だ」

「まあ、その計画書が入ってるコンピュータにはキー君お手製の最
強ウイルス“ハ口”を送っておきました！」

「ナイスです、束さん」

今頃、国際IS委員会は大混乱しているだろう。他の機密情報も
合わせて全てが消滅してしまったのだから。

「ああ、そう言えば明日はキャノンボール・ファストだったな・・・
お前たちも朝早いから、手早く進めよう」

「はい、すみません」

「なに、謝るのはこちらだ。気にする必要はない」

こうして、話し合いを急ピッチで進めて、夜は更けていき、翌朝、

遂にキャノンボール・ファストが開催されるのだった。

第五十二話 「教えて、キラ先生！」（後書き）

次回はキャノンボール・ファストが始まり、そして再び襲ってくる二人…。

第五十三話 「キャノンボール・ファスト開幕、再来する恐怖」(前書き)

遂に始まりましたキャノンボール・ファスト！ すぐ終わるとい
う。。。。

第五十三話 「キャノンボール・ファスト開幕、再来する恐怖」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十三話

「キャノンボール・ファスト開幕、再来する恐怖」

キャノンボール・ファスト当日、見事な秋晴れの空に花火が上が
り、会場となるIS学園は外来からの来場者でアリーナが満員にな
っていた。

キャノンボール・ファストの日程は最初に二年生のレースから始
まり、その次に一年生の専用機持ち組のレース、その次は一年生の
訓練機組のレースが行われ、最後に三年生によるエキシビジョン・
レースが行われる事になっている。

「良い天気……だけど」

空を見上げて、綺麗な澄み渡った青空を眺めていたキラの胸の内
には、言い知れぬ不安が渦巻いていた。

朝、目が覚めてからというもの、ずっと胸の内にあつた不安は、
今日……このキャノンボール・ファストの日にか何か良くない事が
起きるのではという予感だ。

「キラ、そろそろ会場に行きませんか」

「うん……」（今日のレース、優勝を捨ててでも皆と並んで
飛んだ方が良いかな）」

それから、本来はリミッターを掛けておかなければならないのだ

が、今日のキャノンボール・ファストだけは、リミッター無しにしておく事にする。皆には悪いが手加減をする事になってしまっけど、この嫌な予感が拭い去れない以上、必要な事なのだ。

キラとラクスが一夏たちの居るピットに行くと、既に二年生のレースが始まっていた。二年生は皆、抜きつ抜かれつの大混戦を繰り広げ、誰が優勝してもおかしくない状況だ。

「みんな、遅くなつてごめん」

「お、キラか、遅いぜ」

「我々は既に準備を終えている。お前も早く準備をしておけ」

確かに、既に一夏たちはISを展開して自分達のレースがいつ始まっても良いように準備を整えていた。

キラもストライクフリーダムを展開すると、ヴァリアブルフェイスシフト VPS装甲をONにして簪の横に並ぶ。

「どうかしたんですか？」

「え？」

「あの、何だか顔色が優れませんけど・・・」

「・・・ちよつと、ね」

簪に心配されてしまうものの、何とか笑って誤魔化し、一夏たちのISを見渡した。

一夏と箒、簪はスラスターの出力調整のみなので、特に見た目が変わった部分はない。だが、シャルロットとラウラはそれぞれ三つの増設スラスターを装備して、セシリアはストライクガンナーを、鈴音は中国から届いたばかりの高速機動パッケージ『フェン風』を装備している。

「そういえば、一夏・・・新しいISスーツ似合ってるよ」

「そ、そうか？ サンキュー。それにしても、本当に着やすいよなあ」

「気に入ったなら何よりだよ」

一夏は束から貰ったISスーツを早速だが着ていた。キラの蒼いISスーツと色違いで、白地に青いラインの入ったスーツだ。

「あ、二年生のレースが終わったよ！」

「それでは、いよいよ私たちの出番ですわね」

「そうね、負けないんだから！」

シャルロットの声にアリーナを見ると、二年生のレースが丁度終わった所だった。いよいよ、一年生の専用機持ち組のレースが始まる時間だ。

『みなさん、準備は良いですか？ スタートポイントまで移動しますよー』

放送から真耶の間延びした声が聞こえてきた。その指示に従ってキラ達はスタートポイントまでマーカー誘導の案内で移動を開始する。

『それでは、一年生の専用機持ち組のレースを開催します！』

各自、スタート位置にスタンバイすると、スラスターを点火する。シグナルが光り、赤いランプが一つ、二つ、三つと消えて・・・青になった。

先頭と後方でバトルレースが繰り広げられている中、中間を飛ぶキラとシャルロット、簪はレースをしながらも周囲に気を配り、何が起きても良いように警戒を始める。

そして、レースが二週目に差し掛かったその時、キラの嫌な予感に当たってしまった。突然降り注いできたレーザーとビーム、咄嗟にキラが前に出てビームシールドで防いだから誰も被弾はしなかったので問題無かったが、襲撃者が二人・・・二人ともISを身に纏っており、そのISは忘れる筈も無い、サイレント・ゼフィルスと・・・レジェンド・プロヴィデンスが静かに見下ろしている。

「キラ！」

「ラクス!?!」

サイレント・ゼフィルスとレジェンドプロヴィデンスが襲撃してきた時、ラクスがオルタナティブを展開して飛んできた。

クルーゼがいるというのに、ラクスがこの場に来てしまつては不味い。クルーゼの事だ、キラを殺す為なら平気でラクスを殺す。

「皆はサイレント・ゼフィルスの相手を!!　ラクスは後方に行つて、決して近づいちゃ駄目だ!　レジェンドプロヴィデンスの相手は・・・僕がする」

「キラ!　無茶だ!　お前、ストライクフリーダムが・・・俺も一緒に!」

「止める一夏!　お前ではキラの足を引っ張るだけだ」

「けどラウラ!　キラは!」

「その今のキラの相手にもならない私達に何が出来る!?!」

「・・・くそっ!」

仕方なく、一夏はサイレント・ゼフィルスの相手をする事になり、キラは一人でクルーゼの相手をする事となった。

予めリミッターを切っていた事に安堵しつつ、ビームライフルを構え、クルーゼを見上げた。クルーゼはキラを見下ろしながら口元が喜びという感情に歪んでいる。

「久しぶりだねキラ君・・・どうやらフリーダムの修理も終わったみたいだ」

「世界中で、随分と好き勝手していたらしいですね」

「ほう？ どうやら知っていたみたいだね。そうさ、私はこれでも亡国機業の一員なのだから、上からの命令には従わざるを得んのだよ」

「・・・黙って従ってるような人間ではないのに」

「ククク・・・確かにな」

そこで会話は止んだ。お互いにビームライフルを構え、静かににらみ合っている。サイレント・ゼフィルスと一夏たちの戦いの音を背景に、因縁の戦いが始まるその瞬間を見極めていた。

「くっ！！」

その瞬間、キラとクルーゼはその場を移動して、その場所にビームが過ぎ去った。

キラもクルーゼも高速機動で動きながらビームサーベルとビームジヤベリンに持ち替え、切り掛かって鏝迫り合いになっては離れ、イグニッションブーストまた切り掛かり、瞬時加速を連発しての亜音速戦闘を繰り広げる。

「はははははは！！ 遅い、遅いぞキラ君！ やはりこの世界では修理してもその程度か！！」

「くっ！！ このお！！」

キラが切り掛かっても簡単に避けられ、逸らされるが、逆にクル

ーゼが切り掛かるとキラはギリギリで防ぐのが精一杯だった。

今度はキラとクルーゼが同時にビームライフルに持ち替え、中距離からの射撃戦が始まる。

お互いに全てのドラグーンをパージして、レジエンドプロヴィデンスの一斉射撃にストライクフリーダムが落とされないうちに回避しながら、ヴォワチュールリュミエールシステムが起動した事で速度の上昇したストライクフリーダムで高速機動をしながら飛び回り、レジエンドプロヴィデンスのドラグーンを一機一機確実に落とそうとした。

「ほう、機能低下した今のフリーダムでも、此処まで出来るか・・・ふ、流石はキラ君だ、流石・・・人類の夢の形、人類の業の集大成！！！」

「違う！ 僕は、それだけが僕の全てじゃない！！ 僕は、悲しみもすれば喜びもする・・・キラ・ヤマトという、一人の人間だ！！」

キラとクルーゼ、合わせて56機のドラグーンが飛び交い、その中を高速機動で飛びながらビームライフルを連射するストライクフリーダムとレジエンドプロヴィデンス、その光景は人の動体視力に映ることは無く、だからこそ、その戦闘を行う二人に畏怖の感情を向ける者が、多かった。

第五十三話 「キャノンボール・ファスト開幕、再来する恐怖」(後書き)

次回、再び始まるキラとクルーゼの戦い。そして、遂に……。

第五十四話 「守る為に、自由の剣を」(前書き)

キラVSクルーゼ二回目！

第五十四話 「守る為に、自由の剣を」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十四話

「守る為に、自由の剣を」

キラが駆るストライクフリーダムと、クルーゼの駆るレジェンドプロヴィデンスの戦いは激化の一途を辿っていた。

ビームの連射速度が撃つ度上がり、ドラグーンもより複雑な機動で動きながらビームを撃ち、相手を追い詰めようとする。

一見互角に見えるこの戦いだが、会場の誰もが目で追えない中、千冬だけは暮桜・真打のハイパーセンサーを使って追う事が出来ていた。その為、判る・・・この戦い、キラが押されているのを。

「くそ、私も出られれば良いのだが・・・教師という立場が、今ほど邪魔だと思つた事はないな」

クビを覚悟で戦闘に介入する事は、確かにやろうと思えば出来るだが、それをしてしまえば大切な弟を自分自身の手で、身近に居て守る事が出来なくなる。

たとえキラとラクスが護衛として居ようとも、千冬は一夏の姉だ。だから最終的には自分が弟を守ると、二人に誓っている。それ故に、教師をクビになるのは不味いのだ。

「頼むキラ・・・負けるなよ」

今は、祈るしかない。力を衰えさせてしまった自由の剣が、それ

でも天帝に負けない事を。

キラとクルーゼの射撃戦は更に激化した。キラとクルーゼが戦っている場所が緑色のビームが飛び交って一つのフィールドと化していたのだ。

飛ぶ方向、姿勢、速度、全てをミスすれば一瞬で無数のビームが蜂の巣にしてしまう緑色の嵐の中、蒼い翼を広げる白き自由と、王者の如き威圧を放つ黒き天帝、両者とも無限のシールドエネルギーを駆使した強力な射撃を幾度となく撃ち続け、避け続け、それでも疲弊した様子を見せない。

「ええい!!」

「むん!!」

ビームが降り頻る中、再びビームサーベルとビームジャベリンがぶつかった。キラが右手に持つビームサーベルと、クルーゼが左手に持つビームジャベリンが火花を散らす。

激しいスパークの中、キラは得意とする二刀流による左のビームサーベルによる斬撃を放ったが、クルーゼも右手でもう一本のビームジャベリンを振り、合計4本のビームの刃が交差して、離れた。

「くっ!」

「ぶっ」

離れた瞬間にキラが放ったレール砲は余裕で避けられるが、その避けた先に向って、複相ビーム砲を発射。

ここで初めてクルーゼがビームシールドによる防御を行ったのだ。

「でえいつ!!」

「だからこそ、私も本気で戦わせて貰おうか!!」
「っ!」

48機のドラグーンの内、38機がビームを一斉射して、残りの10機がビーム突撃砲となりフリーダムを貫こうと飛んできた。

「その身で味わうが良い! これこそ、レジェンドプロヴィデンス最高の戦術だ!!」
「っ! くそっ! ぐっ」

レジェンドプロヴィデンスまでビームライフルからビームを撃ちながら高速機動で接近して来ようとする。

先ほどよりビームの数は減ったものの、何処からともなく飛んでくるビーム突撃砲やレジェンドプロヴィデンスを避けるのに精一杯になり、今度こそキラは反撃する余裕が無くなってしまった。

「不味い・・・っ! このままじゃ・・・あ、あれはっ!?!」

一瞬の判断ミスが命取りとなる状況の中、高速機動で移動しながら、避けきれないビームをビームシールドで防ぎながら飛び回り、そして・・・見てしまった。キラとクルーゼ、一夏たちとサイレント・ゼフィルスの戦いを逐一把握するのに超高感度ハイパーセンサーを駆使していたラクスの方へ銃口を向けた10基のドラグーンの姿を。

「無駄だ! もう間に合わんよ。この学園で流す最初の血は、歌姫の血となるのだ!!」
「やめろおおおおおおお!!!!」

キラの悲痛の叫びも空しく、ドラグーンからビームが放たれ、オ

プレートに気を取られていたラクスがビームに気付いた時には、もう回避不能な状況になっていた。

「ラクスーーーーーっ！！！！！！」

トリプルイグニッションブースト

三重瞬時加速に入り、それでも間に合わないと判断したキラは脳裏で種が弾ける衝動を感じた。

SEEDが発動した瞬間、全スラスタのリミッターを一瞬で切

トリプルイグニッションブースト

り、機体限界を超えたスピードで三重瞬時加速のスピードの中を一直線に飛び、ラクスにビームが直撃する前に何とかラクスとビームの間に割り込む事が出来た。しかし、ビームシールドを展開する時間は無い。もはや絶体絶命、絶対防御すら貫通するであろう高出力のビームがキラに直撃しそうになったその瞬間、キラの意識は……あの草原にあった。

「え……?」

『よ　で、僕　を』

キラの目の前で翼を羽ばたかせながら制止している蒼い鳥……フリーダムから声が聞こえた。

「フリー、ダム……?」

『呼ん　、僕の　前を!』

段々とハッキリ聞こえる様になってきたフリーダムの声、掠れていた部分が……鮮明に聞こえてきた。

『呼んで!　僕の名前を!　人々の自由と運命を守る暁に照らされた正義の輝きの名を!!』

「人々の自由と運命を守る……暁に照らされた正義の、輝き……」

「……」
『そう！ その名は！！』

一気に意識が現実呼び戻された。あの草原での事は一秒にも満たない時間だったのだろう、迫り来るビームがまるでスローモーションの様に見えて、キラを貫こうとしている。

しかし、そのビームがキラに届より数瞬早く、キラは……言葉を紡いでいた。人々の自由と運命を守る暁に照らされた正義の輝き、その真の名を。

「ブリリアントフリーダム！！！」

【Second Sift stand by ready set up】

ストライクフリーダムが蒼い光に包まれるのとビームが直撃するのはほぼ同時だった。

だが、ドラグーンから放たれたビームは蒼い光に霧散され、直撃しても装甲を傷つける事すら出来ずに消えてしまい、アリーナ所かIS学園全体に眩い蒼い光が広がったのだ。

「な、何だ……これは」

「キラ……」

目の前で起きた事に驚くクルーゼとラクス、それは少し離れた所で戦闘をしていた一夏たちやサイレント・ゼフィルスの操縦者……^{エム}Mも同じだった。

何が起きたのか、それを理解するのに数瞬の時間を要し、そして理解する。あの輝きは、間違いなく……。

「ストライクフリーダムが……二次移行する」
セカンドシフト

「綺麗な、光ですわ・・・」
「そうね・・・キラの心みたい」
「お兄ちゃんみたいな、温かい光」
「キラが、ストライクフリーダムと・・・」
「心を通わせたって事かよ・・・」
「キラさん・・・」

思わず見惚れてしまう程、綺麗で、温かな光だった。

「クルーゼ・・・っ！ くそ、キラ・ヤマト！」

ストライクフリーダムが二次移行セカンドシフトをしたら、クルーゼでも流石に不味い。そう判断したのかMエムは一夏たちが呆然としている隙にストライクフリーダムを包む蒼い光に突っ込んでいく。

二次移行セカンドシフトする前に、キラを殺す。その為にサイレント・ゼフィルスのBT兵器、エネルギー・アンブレラを射出したのだが、蒼い光の中から放たれた無数のビームがビット全てを破壊して、更に迫ってきたビームを避けたサイレント・ゼフィルスの回避先にビームは既に来ており、武装の全てと手足を破壊されてしまうのだった。

「な、何っ!?!？」

皆が見る中、蒼い光は漸く消え、中から現れたのは・・・12対24枚の蒼い翼を広げ、銃身が少し長くなったビームライフルを両手に持ち、全体的に変わった所は少ないが若干角ばった装甲の新たな姿。

「・・・さあ、ラウル・クルーゼ、ここから本当の勝負だ」

「ほう、それが・・・君の新たな剣か」

「そう、これが、ストライクフリーダムの第二形態。人々の自由と

運命を守る暁に照らされた正義の輝き、ブリリアントフリーダム！
」！

第五十四話 「守る為に、自由の剣を」(後書き)

遂に、セカンドシフト二次移行したフリーダム！ その性能は次回！！

第五十五話 「ブリリアントフリーダム」(前書き)

ブリリアントフリーダムの名前はa b a井さんのアイデアです。ありがとうございます！

第五十五話 「ブリリアントフリーダム」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十五話

「ブリリアントフリーダム」

ストライクフリーダムが二次移行セカンドシフトをした。新たな名はブリリアントフリーダム、12対24枚の蒼い翼を広げ、両手のビームライフルを構えてレジェンドプロヴィデンスに相對するその姿は、正に機械天使の如く。

「このタイミングで二次移行セカンドシフトをするか・・・ふ、運まで味方に付けたとは、やはり君は規格外だな、キラ・ヤマト」

「運？ 違う、これは偶然の移行シフトではない。これは、フリーダムと僕の、ラクスを守りたいという想いが起こした必然、奇跡でも、偶然でもない！」

「必然か・・・なるほど」

同時に構えたレジェンドプロヴィデンスとブリリアントフリーダム、一瞬の静寂が流れた時、二機の姿が人々の視界から消えた。

いや、消えたのではなく、消えた様に見えた。一切視界に映らないスピードで飛び、レジェンドプロヴィデンスのドラグーン48基と、ブリリアントフリーダムのハイパードラグーン24基がパージされる。

「面白くなってきたよ！ 君も私と同じ第二形態で戦うのだからなあ！...」

「今度こそ、貴方を！！」

両者のドラグーンが一基につき3つのビームを発射して先ほど以上のビームの嵐が出来上がった。

ビームの嵐の中を飛び回っていたクルーゼはブリリアントフリーダムの高パイロドラグーンが異常に速い事に気付く。見ればハイパードラグーンから蒼い光の帯が出ている・・・あれは、現在もブリリアントフリーダムの翼から発せられている蒼い光、ヴォワチュールリユミエールシステムの光と同じ。

「ドラグーンにまで搭載したか！」

それだけではない、ブリリアントフリーダムのスピードは以前の、落とす前のストライクフリーダム以上のスピードとなっている。これはクルーゼも本気にならなければ追いつけない。

「厄介だよ！ 君も、お姫様も、フリーダムもなあ！！」

「何を！」

「それほどの力！ それほどの才能！ それほどの魅力！ 何より

！ 君という存在！！ この世界の人間が知れば何を思う！ 何を願う！！」

「それは・・・！」

「知れば誰もが思うさ！ あの世界と同じ、羨み、妬み、恐怖する！ 以前にも言ったな、故に君の存在は許されないと！！」

確かに、一夏たちはキラを認めてくれた。だが、それがこの世界全ての人間に当て嵌まるとは言えない。キラの存在の真実を知った時、世界は間違はなくクルーゼの言う通り、羨み、妬み、恐怖して、いつかはこの世から排除しようとする。

嘗てのブルーコスモスがコーディネイターを排除しようとした様

に。

「それでも、僕は戦う！僕は確かにスーパーコーディネイターだ。でも、それ以前に、一人の人間だ！！だから戦う！その覚悟も出ている！！」

「っ！ふん、あの頃から随分と成長したものだ・・・だからこそ尚更、厄介なのだよ君はあ！！」

両手でビームジャベリンを抜いたレジエンドプロヴィデンスが瞬間加速でブリリアントフリーダムに切り掛かってきた。

キラも超高エネルギービームライフルをマウントすると、シュペールラケルタビームサーベル？を抜き、切り掛かる。

「ぐっ！」

「ぬうっ！」

大出力のビームの刃同士がぶつかり合って激しいスパークをする。だが、キラの手札はこれだけではない。右足でレジエンドプロヴィデンスに蹴りを入れる。

それに対してレジエンドプロヴィデンスも右足の蹴りで対抗しようとしたのだが、その瞬間、ブリリアントフリーダムの右足に展開されたグリフォン2ビームブレイドによって、レジエンドプロヴィデンスの右足が破壊されてしまった。

「ぬっ！これは！」

「嘗ての世界で、インフィニットジャスティスが装備していた両足のビームブレイドだ」

「アスランの機体か・・・」

「そしてこれが！」

レジェンドプロヴィデンスのドラグーンのビームを今度は避けずに直撃した。いや、直撃して跳ね返り、ビームを撃ってきたドラグーン5基を落としてしまう。

見れば、ブリリアントフリーダムが全身が黄金に変わっており、直ぐに元の色に戻った。

「ムウさんの新しい剣、アカツキのビーム防御・反射システム、ヤタノカガミ2」

「ムウだと・・・生きていたのか！」

ならばラクスをもう一度と狙い、ドラグーンからビームを発射したのだが、ブリリアントフリーダムのハイパードラグーン24基の内6基がラクスの周りに集まって防御フィールドを作り上げ、レジェンドプロヴィデンスのドラグーンのビームから守りきった。

「これも、ムウさんのアカツキの力です」

「ぐうっ！ おのれムウ、この場に居なくとも私の前に立ち塞がるか！！」

ムウとクルーゼの因縁も、此処まで来ると呪いの域ではないかと思う。この世界にムウはいない、しかしキラの新たな剣の一部としてムウの機体の力が宿り、クルーゼの前に立ち塞がるのだから。

「ならば此処で、私とムウ、そして君との因縁の全てを断ち切るのではないか！！」

「やらせはしない！！！」

ビームサーベルをマウントして両肩にある武装を掴み投擲した。デステイニーから継承した武装、フラッシュエッジ3ビームブーメランだ。

「この様な玩具で！　ぬうつ！？」
「はあ！！！」

ビームブーメランを弾き飛ばしたクルーゼの目の前にキラが既に迫っていた。右掌を広げ、咄嗟に左腕で防御しようとしたクルーゼの、その左腕をそのまま掴むと、右掌から放たれたビームによってレジェンドプロヴィデンスの左腕を破壊してしまう。

「これは・・・！」

「あなたは知らないと思うけど、さっきのビームブーメランと今のビームはデステイニーと呼ばれるMSに搭載されていた武装」

デステイニーから継承したパルマファイオキーナ2掌部ビーム砲、これでレジェンドプロヴィデンスは右足と左腕を失った事になる。

「おのれえ！！！」

ビームライフルを構え、ドラグーンと共に大量のビームを発射してきた。

キラもビームライフルを構えると、ライフルとパルマファイオキーナ2掌部ビーム砲を接続して、ビームの威力、連射速度を上昇させる。

「ぐっ！」

「まだ！」

段々と、レジェンドプロヴィデンスが避け切れなくなってきた。次々と掠りだすビームに冷や汗を流し、ドラグーンの数も48基から既に35基まで減らしていた。

「まさか、二次移行をしただけで此処まで追い詰められるとは・・・
本気を出しても相打ち覚悟、何とも無様だな」

ドラグーン13基を失い、右足と左腕を破壊されてしまった今、
クルーゼの勝ち目は無いに等しいだろう。

「だが、まだ負ける訳にはいかないのだよ！ この世界を戦火に包
み込み、ヒトの滅びという予言の日が訪れるその日までなあ！！」

レジェンドプロヴィデンスが黄金の光に包まれた。単一仕様能力
が発動したのだ、あの最悪の兵器が。

【ジェネシス、発動】

レジェンドプロヴィデンスのビームライフルが変形して、ジェネ
シスの形になる。それを構えてドラグーンを操りながらキラの動き
を何とか制限すると、ジェネシスを最大出力に設定した。

「ここで死ぬがいい！ キラ・ヤマト！！」

「させない！！」

ジェネシスにはチャージの為に発射まで若干のタイムラグがある
という弱点がある。その隙を突いてキラはマルチロックオンシステ
ムを起動、全てのドラグーンとレジェンドプロヴィデンスの持つジ
エネシス・ライフル、右腕、左足、ドラグーン搭載用のバックパッ
クをロックすると、ハイマツトフルバーストの準備を終えた。

「いけえ！！」

両手の超高エネルギービームライフル、両腰のクスイファイアス4
レール砲、腹部のカリドウス2複相ビーム砲、翼の中に収納してい
たのを展開した両肩のパラエーナ3・プラズマ収束ビーム砲、周囲
に展開した24基のハイパードラグリーンビーム突撃砲を一斉掃射し
た。

ハイマツトフルバーストにより100を超える数のビームがドラ
グリーン全てを撃ち落とし、ジエネシス・ライフルを破壊、レジエンド
プロヴィデンスを達磨状態にして地上に落としてしまう。

だが、途中でレジエンドプロヴィデンスを解除したクルーゼは近
くの屋根に着地すると、そこに居たMを^{エム}抱かかえた女性と共に消え
てしまった。

「あれは・・・」

クルーゼを逃がしてしまったのは痛い、如何やら一夏たちも無
事だったみたいだから良しとする。会場に来ていた観客も学園の人
間も、誰一人として被害は無かったので、今回ばかりは、キラの勝
利という事だ。

「でも・・・」

これからが大変だ。ストライクフリーダムが二次移行^{セカンドシフト}をしてブリ
リアントフリーダムになった。

その事で世界中がより一層、騒ぐ事になるだろう。キラとブリリ
アントフリーダムの処遇、亡国機業のこれからの出方、全てが大変
な事になってくる。

「・・・」

「キラ」

「ラクス・・・」

「今は、考えても仕方ありませんわ」
「そう、だね」

だから、今だけは・・・飛んでくる一夏たちに、笑顔で手を振ろう。それからの事は、また後で考えれば良い。

第五十五話 「プリリアントフリーダム」(後書き)

次回は一夏の誕生日パーティー！ キラ、落ちなくて良かったね。

第五十六話 「織斑マドカ」(前書き)

今回、出てきます。

それと、キラがチートというか、神業を見せますWW

第五十六話 「織斑マドカ」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十六話

「織斑マドカ」

サイレント・ゼフィルスとレジエンドプロヴィデンスの襲撃で中止になったキャノンボール・ファストの日の夜、キラ達はIS学園の外、織斑姉弟の家に来ていた。

一夏の誕生日のパーティーをする事になっており、リビングにはキラとラクス、一夏、箒、鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、布仏姉妹の他に一夏の友人である五反田弾、五反田蘭、御手洗数馬、そして何故かIS学園新聞部エースの薫、薫子も集まって、リビングがパンク寸前だ。

『一夏、誕生日おめでとう!!』

パァン！ とクラッカーが鳴り響き、集まった皆が拍手をすると、一夏が照れた様に頬を掻いた。

「お、おう、サンキュー」

現在、午後5時、外も大分暗くなり、織斑家の中は大いに盛り上がるうとしていいる。

一夏は蘭が作ってきたケーキや鈴音の作ったラーメンを食べているし、キラもキラでラクスと共にワイン片手に騒いでいる皆の様子を微笑ましげに眺めて、他もそれぞれ料理を食べ、話をして、本当

に盛り上がった。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは皆と話、しないの？」

「あら、シャルさん・・・そうですね、したいとは思いますが・

」

「この中で一番年上の僕達が羽目を外しすぎるのは不味いから、ほどほどにね」

まあ、この後来る事になっている千冬と真耶、束が来たら少しは混ざろうとも思うが、多分、五人で酒を飲んでいるかもしれない。

最も、キラもラクスも、こういう場で騒ぐ様なタイプでもないので、こうして騒いで楽しんでいる面々を見守っている方が性に合っている。

「あ、キラ、ラクス、これサンキューな」

「気に入ってもらえればそれで良いよ」

「ええ、これから必要でしょうから」

キラとラクスの所に一夏と箒が来た。一夏の手にはキラとラクスからの誕生日プレゼントが握られている。

「しかし、一夏の為とは言え・・・誕生日プレゼントに刀と銃というのは如何かと思うぞ？」

「あはは・・・」

「それ以外に良いと思える物がなくて・・・」

「まあ、これはこれで良いと思うから俺は構わないぜ」

そう、キラからは銃、ラクスからは刀がプレゼントとして贈られたのだ。

キラからのプレゼントである銃はグロッグ17の第4世代の改造

版だ。従来のプラスチック素材のフレームを取り外してカスタムパーツである金属フレームを使っており、キラがパーツ全て、新品の物を探し出して購入後、組み立てた代物である。

ラクスからのプレゼントである刀は一般的な日本刀なのだが、かなりの業物で、無銘ではあるが切れ味は抜群らしい。

「銃は身を守る為に使えるし、刀はISを使わない時に振って練習する事も出来るから、丁度良いと思うけど」

「ああ、助かるよ」

他にもシャルロットからは腕時計、ラウラからは軍用ナイフ、セシリアからはイギリスから取り寄せたティーセット、箆からは着物、鈴音からは本場の中華包丁、更識姉妹からは万年筆とIS簡易整備セット、布仏姉妹からは最新ゲームと、何故か着ぐるミを貰っている一夏、なんだろう・・・何名か誕生日プレゼントとしてはおかしい者がいる。

「そういえば一夏・・・あれ」

「ん？ あれって弾と・・・虚さん？」

「あの二人って何か接点でもあった？」

「いや・・・覚えが無い」

「？」

何となく、弾と虚が良い雰囲気になっていた。

まあ、一夏の話では弾も彼女が欲しいと言っていたし、虚の方も出会いが無いIS学園に通っているの、男性と接する機会も無く、当然だが彼氏が居た事も無い。なので丁度良いとは思いつし、キラとしても青春だなあと微笑ましげに見ているのだが。

「っと、そうだ・・・そろそろジュースが無くなるし近くの自販機

に買いに行くよ」

「僕も行く？ 一人で持つには厳しいだろうから」

「あ、悪いな、頼む」

「うん、じゃあラクス、ちょっと行って来るね」

「はい、いつてらっしゃいませ」

キラと一夏、二人揃って外に出ると、もう真っ暗になっていた。

直ぐに最寄の自販機まで移動すると足りなくなった分のジュースを購入して、一夏とキラの二人で分けながら持つと戻ろうと踵を返したその時だった。

自販機の明かりが届かないギリギリの所に人影が見える。背格好から少女だと思われるその人影が一步前に出たとき、自販機の明かりによってその顔が鮮明に見える様になったのだ。

普通の少女……ではなかった。何故ならその顔は………。

「ち、千冬姉………？」

「っ！ (不味い、こんな時に！)」

そう、少女の顔は間違いなく一夏の姉、織斑千冬の顔だった。だが本人ではない、背格好が全く違うのだから彼女が千冬である筈がない。

「いや、私はお前だ、織斑一夏」

「な、何……？」

「今日は世話になったな……それに、キラ・ヤマト、貴様にもな」

「……君が、亡国機業のM^{EM}……いや、サイレント・ゼフィルスの操縦者」

「ああ、そうさ。私の名は……織斑マドカだ」

少女、マドカが名乗ったその時、キラはジュースの缶を投げ捨て

て懐から銃……この世界に来てから愛用しているコルトM1991A1を取り出して発砲、数瞬早く発砲したマドカの銃弾に銃弾を中てて弾き飛ばした。

「っ！ くそ、銃弾に銃弾を中てるなど、非常識だな……流石は最高のコーディネイターという奴か」

「クルーゼから聞いたのか」

「貴様があの人の名を軽々しく口にするな!!」

「……やっぱり」

キラがクルーゼの名を出した途端、マドカの表情が嘲笑いから憤怒に変わる。

「ちよ、ちよつと待て！ なんでお前、千冬姉と同じ顔なんだよ!？」

「ふん、貴様を知る必要は無い。何故なら、貴様も、キラ・ヤマトも、此処で死ぬのだからな」

「それは如何かな？」

突如、ラウラの声が聞こえてキラと一夏、マドカの間にシュヴァルツエア・レーゲンが降り立った。

「ラウラ!」

「すまん、発砲音が聞こえて駆けつけたのだが……」

「ナイスタイミングだったよ」

「そうか、それで……貴様は亡国機業の人間と考えて良いのだから？ 教官と同じ顔……大体は想像出来る」

「ふん、ドイツの出来損ないか」

「っ！ 貴様!!」

ラウラが怒りを露わにしてマドカを捕らえようとしたのだが、既にポロポロのサイレント・ゼフィルスを展開し終えたマドカは飛び去ってしまった。

追おうにも市街地戦をする訳にもいかず、見逃す他に無いので、シユヴァルツエア・レーゲンを解除したラウラはキラが投げ捨てた缶を拾い集めると一夏とキラの傍に寄って来る。

「すまん、取り逃がした」

「いや、いいよ。流石にこんな時間から市街地戦をするのは不味いからね」

「ああ、だがキラと一緒に良かった。そうでなければ一夏は今頃……」

「あ……脳天に風穴が空いてたな、俺」

そうだ、キラが居なければ今頃一夏は死んでいた。

「ていうか、キラってスゲエな！ 銃弾を銃弾で弾くなんて」

「何？ そんな芸当が出来るのか？」

「殺気は感じてたし、銃は持つてるって予想してたからね。動きを見ていれば一瞬で銃口の向き、トリガーに掛かった指の動きからタイミングを計れるよ」

「ラウラ……出来るか？」

「いや、流石に私でもそれは不可能だ」

その辺り、流石はスーパーコーディネイターと言うべきか。何にしてもキラのおかげで一夏は命拾いした訳だ。

「ラウラ……今回の事、みんなに話すのは月曜日にしよう」

「良いのか？」

「ま、俺もキラに賛成かな。あそこには一般人も居るんだから、下

手な話ではできねえさ」

「それもそうか」

先ほどの銃声は近くで打ち上げ花火をしている馬鹿がいたという事で誤魔化す事にして、三人は皆が待つ織斑家に戻る事になった。

だが、一夏の胸の内では、先ほどの少女、マドカの事で不安が渦巻いていたのは、言うまでも無いだろう。

第五十六話 「織斑マドカ」(後書き)

今回は大人組が騒ぐ子供たちを眺めながら酒を片手に大人の会話、
そして亡国機業内で少し…。

第五十七話 「大人達」(前書き)

すみません、亡国機業の話は次回で…。

第五十七話 「大人達」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十七話

「大人達」

キラと一夏、ラウラの三人が織斑家に戻ると、千冬と東、真耶の三人が既に到着していた。

千冬達とラクスは子供達を眺められるテーブルに着き、千冬が持つて来たのであるうビールや焼酎、日本酒がテーブルの上に並べられている。

「お、キラ、遅かったな」

「やつほ〜キー君！ 早く飲もうよ！」

「お待ちしてましたよ、ヤマトくん」

「ご丁寧にツマミも用意して準備万端、キラは苦笑しながらラクスの隣に腰掛けると日本酒をグラスに注いだ。

「千冬姉、頼むから飲みすぎるなよ？ 明日も仕事なんだから」

「馬鹿者、それくらい理解している。それに、明日は山田くんに殆ど押し付けるつもりだ」

「ちょ！？ 先輩！？」

山田真耶、明日の仕事は押し付けられる事が確定して、シクシク泣きながらISS学園学生時代の先輩である千冬に逆らえず、手にした焼酎を煽るのだった。

「姉さんも、飲みすぎは良くないですよ・・・その、研究が忙しいのですから」

「大丈夫だよ、篝ちゃんの見てる前では東さんもセーブするから！」

「まるで見てない所ではセーブしないみたいない方ですね」

「ギク！」

実は、行方不明になっている間も、暇を見てはコツソリ千冬と飲みに行っていた彼女、その時は千冬同様セーブしないのだ。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは・・・あれ？ 酔ってる所、見た事ないかも・・・」

「僕とラクスは酔い潰れるまで飲まないからね」

「それに、コーディネイターは基本的にお酒に強い者が多いですから」

キラの脳裏に浮かぶのは幼い頃の事、キラの父であるハルマ・マトとアスランの父であるパトリックがよく酒の飲み比べをしていたのだ。

飲み比べでハルマはいつもパトリックに負けていて、飲むたびに酔い潰れる傍ら、パトリックはあまり酔った所を見た事が無い。

「とまあ、アスランのお父さんもお酒に強かったかな、バルトフェルドさんもだけど」

「私の父と母も強かったですね。酔った所は見た事ありませんし「へえ」」

勿論、絶対に酔わないという訳ではない。酒に弱いコーディネイターも中には居るし、飲み過ぎればコーディネイターと言えど酔い

潰れる事はある。

「まあ、程ほどにするよ」

「ですわね」

「お願いだよ？」

念を押してくるシャルロットの頭を撫でて安心させたキラは日本酒を一口、それで咽た。

「ゴホツ、ゴホツ・・・これ、辛口ですか？」

「当たり前だ。甘口など邪道！」

「んゝ、でも東さんは甘口の方が好きかな？ キー君、これ飲む？」

「・・・頂きます」

東が入れてくれた日本酒は甘口だった。これならキラも好みの味なので、問題ない。

「あら、クラインさんは焼酎ですか？」

「ええ、味わい深くて、こついうのは好みです」

「ですよね！」

ラクスは真耶と同じ芋焼酎をお湯割りで飲んでいた。ロックは流石に焼酎初心者のラクスではキツイので、お湯割りにしたのだが、中々の味わいでラクスの舌を満足させるものだ。

「しかし、ガキ共は元気だな。これだけ騒いでも翌日に響かないのだから」

「ですねゝ、若いって良いですよ」

「さて、私たちはまだ若いぞ？」

「あ、あはは〜・・・なのに、如何して出会いが無いんでしょう〜・・・」

「山田くん、酔うの早いな」

出会いが欲しい〜、と泣き出す真耶を呆れた目で見ながら近くにあったミネラルウォーターの尾ペットボトルの蓋を開けると、中身を彼女の頭から注いだ。

「つ、冷たいです〜!?!」

「酔うのが早すぎだ」

「はあい」

真耶の酔いが若干醒めたところで、大人たちは少し真面目な話をする事になった。近くに一夏達がいるが、まああれだけ騒いでいれば聞こえる事も無いだろう。

一応、用心としてリビングとダイニングの間のガラス戸を閉めておいたので、万が一にも聞こえはしない。

「先ず、キラ・・・お前のストライクフリーダム・・・いや、今はブリリアントフリーダムだったな。ブリリアントフリーダムに対して国際IS委員会からの報告が来た」

「やはり、ですか」

「ああ、国際IS委員会の緊急会議の結果、キラは学園卒業後、国際IS委員会直属の操縦者として働いてもらいたいそうだ。ブリリアントフリーダムは解体、その技術の解明をして各国に提供するらしい」

「まあ、ぶつちやけるとキー君は委員会の傀儡として使うけど、フリーダムは反乱されたら困るから取り上げるって事だね〜。馬鹿な爺共の考えそんな浅はかな考えだよ」

それから、ラクスは卒業後にアメリカへ渡ってアメリカの代表候補生になってもらうとの事だ。フリーダムと同じく、オルタナティブは解体して技術吸収、専用機をアメリカで作って提供するらしい。

「それとねえ、篝ちゃんも卒業後は紅椿共々日本所属の代表候補になってもらうみたいだよ。いつくんは白式共々国際IS委員会が引き取って実験に参加してもらったって・・・死ねば良いのにな」

気に入らない。何もかも委員会に都合の良い方向へ進もうとしている現状が、何よりも気に入らない。

「あ、あの・・・でも委員会の決定は絶対ですし、仕方の無い事では・・・？」

「あのねおっぱい眼鏡、私は篝ちゃんといっくん、キー君とラーちゃん馬鹿な爺共の思惑で動かされるのが気に入らないって言うてるの。理解してる？」

「ひ、ひう・・・」

「彼女を責めるな、それよりも如何するか、だ。私としても委員会の思うままに事を進めるのは気に入らない。だが、卒業までの間に準備は整うのか？」

「ん〜・・・本来なら間に合わなかったかな」

「本来なら？」

本来なら、という事は、間に合う算段が付いたという事だ。

「キー君のフリーダムが二次移行セカンドシフトしたからねえ。お蔭で私はブリリアントフリーダムを堂々と調査する口実を得た訳！ 今まで以上に準備が早く進められるんだよ」

成る程、フリーダムは束が造った事になっている。その二次移行セカンドシフト

をした機体の調査も、当然だが束でなければ進められないとしても脅したのだろう。

「でしたら、残る問題は亡国機業と」

「ラウ・ル・クルーゼだけだな」

「はい。今日はブリリアントフリーダムになったばかりで、力を知らなかった彼も戸惑っていたから勝てましたが、次はまた、互角になると思います」

「だろうな。まあ、サイレント・ゼフィルスとレジエンドプロヴィデンスが大破したんだ。暫くは動けまい」

アラクネもまだ修理中のはずだ。それだけ壊しておいたのだから、亡国機業としても動きが遅くなるだろう。

「今のところ把握しているだけでも、亡国機業側で動かせる機体は福音だけです。僕と束さんがハッキングして調べてみても今まで出てきてませんでした。恐らく今の状況を見れば、動かさざるを得ないかと」

「となると、今の福音の操縦者も判るか・・・」

「あ、あの・・・ヤマトくん、ハッキングって・・・犯罪ですよ？
って言っても、無駄なんでしょうね」

福音が動けば操縦者も調べられる。向こうの戦力となる人間を把握して、情報戦で勝利する事は、戦いで大きな有利となるのだ。

「今のところ、把握している敵はクルーゼ、巻紙礼子、M、^{エム}クルーゼを回収した女性、こんな所ですわ」

「そうだな・・・」

「うつつむむ・・・そうだ！」

突然、束が立ち上がってキラの手を取った。何故か目がキラキラしているのは、嫌な予感を感じさせる。

「キー君！ 模擬戦してみて!!」

「突然どうした、遂に気でも狂ったか？」

「ちーちゃん失礼だよ！ ブリリアントフリーダム戦闘データを取りたいから模擬戦してって意味で言ったの！」

「話が繋がっていないぞ」

「え？ だって今思いついたんだもん」

「・・・」

「せ、先輩！ さ、流石に日本酒の瓶は不味いですよ!! 博士が死んじゃいます!!」

一升瓶を振り上げて束の脳天に振り下ろそうとした千冬を真耶が必死に押さえつけていた。

「そうだね・・・出来れば一対多のデータが欲しいから、キー君一人といつくん達全員の模擬戦で！」

「それは・・・まあ、僕は良いですよ？ 元々、一対多は得意分野ですし」

「え、でもヤマトくん、それは流石に無茶なのは・・・？ 相手は代表候補生や国家代表もいるんですよ？」

「問題ありません、キラは一対一よりも一対多の方が本領ですし」

「し、しかし！」

「許可しよう。アリーナの使用許可も私が取っておく」

「先輩！」

まあ、真耶が何だかんだ言っているが、キラVS一夏たちの模擬戦が決定した。目的はキラがブリリアントフリーダムに慣れる為とというのが表向き、裏の理由は束とキラの計画の為、行われる。

「久しぶりの一対多ですから、楽しみにしてます」

「ああ、あいつ等に一対多のスペシャリストの戦い方を見せてやれ。あいつ等にとっても勉強になるだろう」

そして、一夏達の更なるレベルアップの為に、模擬戦決行は絶対となる。C・E・最強クラスの実力者相手に、如何戦うのかを、一夏たちに学ばせる為に。

第五十七話 「大人達」 (後書き)

次回は亡国機業オンリー、その次はキラVS一夏たち全員の模擬戦の予定です。

第五十八話 「亡国の天帝」(前書き)

少し短いですが、亡国機業側のお話です。

第五十八話 「亡国の天帝」

ISSーインフイニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十八話

「亡国の天帝」

某国某都市の地下深くにある明かりの無い部屋では、二人の男女が産まれたままの姿でベッドに腰掛けていた。

男は金髪の髪に奇妙な仮面で顔半分を覆っており、女・・・いや、少女の方は整った顔立ちで、かのブリュンヒルデと瓜二つの顔だ。

「マドカ、今日は会ってきたのかね？ 君自身に」

「ああ、ついでにラウ、貴方の宿敵ともね」

「ほう？ 彼にも会ってきたのか」

男はレジエンドプロヴィデンス操縦者のラウ・ル・クルーゼ、少女はサイレント・ゼフィルス操縦者のM・^{エム}・織斑マドカだった。

この二人、初めて会った時はお互いに何の関心も無い仕事だけのパートナーだったのだが、お互いの秘密を知ってからはこうして男女の関係にまで発展して、公私共にパートナーとして動いている。

「ラウ、薬の時間だ」

「ああ、ありがとう」

マドカが差し出したのは錠剤、それはクルーゼが元の世界で飲んでた薬と同じ物、この世界に来たときに持っていた予備を解析して、亡国機業の科学力にて同じ物を作ったのだ。

これが無ければ今頃クルーゼは生きていない。この世界で薬を作れるのは亡国機業だけ、だからクルーゼは亡国機業に従わざるを得ない。勿論、クルーゼも目的があつて、その為に従つていていゝものもあるのだが。

「ラウ、もう少し待つてろ。必ず私が、見つけてみせるから・・・
テロメア治療の方法を」

「ハハハ・・・そうだな、楽しみに待つていゝとしよう」

抱きついてきたマドカの頭を撫でたクルーゼの口元は、キラが見たら驚愕するだろう。そして、今は亡きレイ・ザ・バレルが見たら懐かしむだろう。クルーゼは・・・優しい笑みを浮かべていたのだから。

その時、二人がいる部屋をノックする音が聞こえた。クルーゼが入室許可を出すとマドカはシーツを身体に纏い、クルーゼの隣に座り直す。

「入るわよ、ラウ、エム」

「おや、スコールか。何か御用かな？」

「ええ、エムに少しね」

入ってきたのは金髪が豊かな女性、亡国機業の幹部でもある女性で、名をスコールと言う。

「昨日の無断接触の件だけど、説明してもらえる？ 織斑マドカさん」

「・・・別に、ただ見ておきたかっただけだ。ラウが危惧する男と、私……自信を」

「そう、でもね。あまり勝手な真似は謹んで欲しいわ。こちらとしても困るのよ、無軌道に動かれるとね」

「・・・わかつている」

「貴方の任務はラウと共に各国のISの強奪よ。それ以外の事に、あまりISを使わないようにね。只でさえ、サイレント・ゼフィールはダメーシレベルB、危なかつたんですもの」

キラのブリリアントフリーダムに落とされたサイレント・ゼフィールのダメーシレベルはB、レジエンドプロヴィデンスはCと、少し危険な状態だったので、現在はラボにて修復中だ。

「ラウ、貴方も少しはこの子の手綱を握っていて貰わないと困るわ」

「フ、善処しよう」

「ええ、お願いね」

それから、スコールはもう一つ言っておきたい事があるとマドカを見た。

「ねえエム、あなたが織斑マドカであろうとなかろうと、私には関係無いわ。けれど、ラウの前以外ではなるべくエムでいて頂戴ね。亡国機業の一人、エムとしてね」

「・・・決着を着けるまではそのつもりだ」

「決着・・・織斑一夏との？」

「ふっ・・・・・・・・。あれは敵ではない。殺そうと思えば、いつでもできる」

「となると・・・織斑千冬との決着、かしらね」

千冬の名が出ると、今までスコールが来てから無表情だったマドカの口元に歪んだ笑みが浮かぶ。

「織斑千冬ねえ・・・何か何時の間にかISを再入手していたみたいだけど、現役引退して長いから、それほど手こずる相手にも思え

ないけど」

その瞬間、スコールはマドカの掌打を受け流して後ろに飛び、蹴りを避けた。

見ればマドカは激しい怒りの表情を浮かべ、スコールに殺意の籠った瞳を向けている。

「侮るな・・・貴様など、ねえさんの足元にも及ばない」

「はいはい、わかったわよ。でもその投げナイフは止めなさい。壁紙に傷が付くから」

「これは元から投げるつもりは無い。ラウとの部屋を、私が傷つけるものか」

「あゝはいはい、ごちそうさま」

マドカはナイフをホルダーに戻してサイドテーブルに投げ置くと、再びクルーゼの隣に座って、クルーゼの膝を枕に寝転んだ。

「まったく、見せ付けてくれるわ」

「君もオータムとしたら如何なのかね？」

「あゝ・・・あの子にね・・・考えておくわ」

そんな事よりも、スコールは懐から資料を取り出すと、其処に書かれていた内容をクルーゼとマドカに伝えた。

「レジエンドプロヴィデンスとサイレント・ゼフィルスの修理はまだ少し掛かるわ。まあ、修理中に任務は入らない・・・というより、暫く任務は無いから安心しなさい」

「そうか、それでは私も少しはのんびりさせてもらおうとしよう」

「そうね、エムと一緒に何処かに出かけたら？」

「なっ！ す、スコール！」

「それも良いな」
「ラウ!？」

顔を真つ赤にしながらクルーゼの膝に顔を埋めたマドカの頭に手を置きながら、クルーゼはスコールの方を向いた。

「ああ、そういう事・・・なら私も戻るわ。一眠りしたいし・・・
ごゆっくり〜」

スコールが去って、クルーゼはマドカの頭を膝から退けて立ち上がると近くにあったデスクの引き出しを開ける。

中を少し漁ると目的の物を見つけたのか、口元に笑みを浮かべて取り出し、引き出しを閉めた。

「マドカ」

「何だ？」

「確か、前に行きたいと言っていた映画があったね。そのチケットをオータムから譲ってもらったのだが、明日は空いているか？」

「・・・っ! も、勿論だ!」

「ふむ、私もこういうSF物は好きなのでね。丁度良いと思っただのだよ」

「そ、そうか」

明日、クルーゼとのデートになったので、ご機嫌なマドカはベッドの上で座りなおすと足をブラブラさせる。

「では明日、行くのでしょうか。夜はディナーでも奢ろう」

「む、高い店じゃないと許さんぞ?」

「何、その辺はスコールから聞いて把握してある。安心すると良い」

「そうか・・・まあ、奴のセンスは信用に値するから、楽しみにし

ておく」

「そうしてくれ」

チケットをデスクの上に置いたクルーゼは振り向いてマドカの前に立つと、そのままベッドに押し倒した。二人の夜は、まだまだ終わりそうにない。

第五十八話 「亡国の天帝」(後書き)

クルーゼに違和感を感じた方、ごめんなさい。でもこれ、実は裏があつての事なんです。

プリリアントフリーダム 設定 7月22日、暮桜・真打を追加（前書き）

スペックが鬼です。

ブリリアントフリーダム 設定 7月22日、暮桜・真打を追加

ZGMF-X30Aブリリアントフリーダム

使用者：キラ・ヤマト

名前の意味：人々の自由と運命を守る暁に照らされた正義の輝き
動力：小型核分裂炉エンジン、ハイパーデュートリオンエンジン、
小型レーザー核融合炉エンジン

武装：超高エネルギービームライフル×2

シュペールラケルタビームサーベル？×2

クスイファイアス4レール砲×2

カリドウス2複相ビーム砲×1

バラエーナ3・プラズマ収束ビーム砲×2

パルマファイオキーナ2掌部ビーム砲×2

グリフォン2ビームブレイド×2

フラッシュエッジ3ビームブーメラン×3

ハイパードラグリーンビーム突撃砲×24

近接防御機関砲×2

ビームシールド×2

推進システム：ハイパードラグリーン機動兵装ウイング

ヴォワチュールリユミエールシステム

ミラージュコロイド

装甲：全身装甲タイプ

フルスキン
ヴァリアブルフェイスシフト

VPS装甲

ON/OFF切り替え式ビーム防御・反射システム“ヤタ

ノカガミ2”

ワソファアビリティ

単一仕様能力：ミーティア

セカンドシフト

詳細：ストライクフリーダムが二次移行を果たした機体。ストライクフリーダム本来の力にフリーダム、インフィニットジャスティス、デステイニー、アカツキの武装もプラスされ、機体出力も大幅に上

昇した結果、その扱い難さはストライクフリーダムとの比ではない。完全にキラ・ヤマト専用として完成されているので、キラ以外の者が乗っても動かすだけで精一杯、加速で意識を保つのも難しい機体となっている。

また、超高エネルギービームライフルはグリップ部分の接続口にパルマファイオキーナを接続する事でビームの出力、連射速度が上昇する仕組みになっている。

ワンオフアビリティ単一仕様能力を発動する時、ストライクフリーダムの時はドラグーンも封印しなければならなかったが、ブリリアントフリーダムはビームライフルのみの封印で発動可能となり、より凶悪な広域殲滅も可能となった。

ZGMF-X23Aレジェンドプロヴィデンス

使用者：ラウ・ル・クルーゼ

動力：ハイパーデュートリオンエンジン

武装：ピクウス近接防御用機関砲×2

高エネルギービームライフル×1

ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

デファイアント3ビームジャベリン×2

ドラグーン・システム×48

推進システム：ヴォワチュールリユミエールシステム

装甲：全身装甲タイプ

フルスキン
ヴァリアブルフェイスシフト

VPS装甲

ワンオフアビリティ単一仕様能力：ジエネシス

詳細：クルーゼがISの世界に来た時にMSからISに変化したプロヴィデンスが二次移行を果たした機体。
セカンドシフト

見た目はプロヴィデンスよりもレジェンドに近い形になったが、ドラグーンを搭載しているバックパックの形はプロヴィデンスのまま、バックパックと肩、腰に所狭しとドラグーンが搭載されている。

ワンオフアビリティ
単一仕様能力であるジェネシスは完全に小型化されたジェネシスで、
ビームライフルが変形してジェネシスの形になる。

エクレール・リヴアイヴ

使用者：シャルロット・デユノア

動力：通常のISと同じ

武装：近接戦闘用レーザーブレード“ダルク”×2

中距離戦闘用ガトリングレーザー“ゴルジエ”×2

遠距離戦闘用レーザーライフル“フシル”

二連装パイルバンカー“グレート・スケール”

アサルトカノン“ガラム”

連装ショットガン“レイン・オブ・サタデイ”

近接ブレード“ブレッド・スライサー”

グレー・スケール
灰色の鱗殻

超重力場発生用ビット“木星の使者”×4
ジュピター・メッセンジャー

その他多数所持

単一仕様能力：無し

詳細：ラファール・リヴアイヴ・カスタム？を参考にしてキラが製作した第三世代型のIS。性能は他国の第三世代機よりも高性能で、
ラビットスイッチ
高速切替も可能に出来ている。

バスロット
拡張領域はラファール・リヴアイヴ・カスタム？の三倍で、武装が更に豊富に搭載出来る様になっている他、コアや装甲、武装などの殆どはラファール・リヴアイヴ・カスタム？から持ってきているので、当然だがコアはラファール・リヴアイヴ・カスタム？と同じで、武装もそのまま搭載されている。

第三世代兵器として搭載されているのが超重力場発生用ビット“木星の使者”
ジュピター・メッセンジャー
で、四つのビットが光の輪で繋がれると、その輪の中が木星並の重力になって相手を地面に落とし、そのまま自重で押し潰す事が出来る。

IS：暮桜・真打

使用者：織斑千冬

動力：通常のISと同じ

武装：雪片・壱型

ワンオフアヒリテイ
単一仕様能力：絢爛・零落白夜

詳細：嘗て千冬が白騎士の代わりに使っていた機体でもあり、世界最強の座に至った相棒でもあった暮桜を、束とキラが改修、改良を施して第四世代として新生させた新しい暮桜。

燃費の悪さは白式や紅椿よりも悪く、通常の零落白夜では白式以上の短期決戦型の機体になってしまっただが、絢爛・零落白夜によってエネルギー増幅効果も付加されたので、ほぼ無限のバリアー無効化攻撃が可能になった。

プリリアントフリーダム 設定 7月22日、暮桜・真打を追加（後書き）

ハイマツトフルバーストをしたら危険ですね、相手が…。

第五十九話 「フリーダムの本領」(前書き)

本日もキラ無双、ただ戦闘描写は期待しないでください。

第五十九話 「フリーダムの本領」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第五十九話

「フリーダムの本領」

一夏の誕生日の翌日、つまり月曜日、この日の放課後に早速だがキラVS一夏達の模擬戦が始まるうとしていた。

キラのブリリアントフリーダムに対して、一夏の白式、箒の紅椿、セシリアのブルーティアーズ、鈴音の甲龍、シャルロットのエクセル・リヴァイヴ、ラウラのシュバルツェア・レーゲン、楯無の霧ミスの淑女、簪の打鉄・式式、虚のラファール・リヴァイヴ、本音の打鉄が相手をする。

「あゝ、何で私とお姉ちゃんまで？」

「あら、だって虚と本音も実力はあるじゃない」

「お嬢様、お言葉ですが、私と本音は専用機持ちではありませんよ？」

「だから？」

「・・・何でもありません」

明らかに巻き込まれた虚と本音の目尻に涙が浮かんでいたのは、言うまでも無い。

ピットには既にISを装着して準備をしている面々が揃っており、後は出撃するだけになっている。管制室にいるラクスが発進合図を待つばかりだ。

『皆さん、準備はよろしいですか？』
「僕はいつでも」

ラクスの声にキラが返し、他のメンバーも確りと頷いたのを確認する。

最初にキラがカタパルトまで歩き、足を接続すると、カタパルトに電源が入った。

『X30A - ブリリアントフリーダム、発進どうぞ！』
「キラ・ヤマト、フリーダム！ 行きます！！」

カタパルトからブリリアントフリーダムが発進して、空中でバレルロールをしながらVPS装甲が展開されると、所定の位置に着いた。

後は一夏達だけだ。ラクスはピットに目を向けると、既にカタパルトに接続している一夏の姿が見えた。準備は充分という事だろう。

『白式、発進どうぞ！』
「織斑一夏、白式！ 行くぜ！！」

白式が発進して、次は篤が接続して、その後ろにセシリア達も並んだ。

『続いて紅椿、発進どうぞ！』
「篠ノ之 篤、紅椿！ 参る！！」

『続いてブルーティアーズ、発進どうぞ！』
「セシリア・オルコット、ブルーティアーズ！ 参りますわ！！」
『続いて甲龍、発進どうぞ！』

「鳳 鈴音、甲龍！ 行くわよ！！」
『続いてエクレール・リヴァイヴ、発進どうぞ！』

「シャルロット・デュノア、エクレール・リヴァイヴ！ 行きます
！！」

『続いてシュバルツェア・レーゲン、発進どうぞ！』

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ、シュバルツェア・レーゲン！ 行くぞ！！」

『続いてミステリアス・レイディ、発進どうぞ！』

「皆、熱血ね〜。えっと、更識楯無、ミステリアス・レイディ
！ 行くわ！」

『続いて打鉄・式式、発進どうぞ！』

「更識 簪、打鉄・式式！ 行きます！！」

『続いてラファール・リヴァイヴ、発進どうぞ！』

「布仏 虚、ラファール・リヴァイヴ！ 推して参る！」

『続いて打鉄、発進どうぞ！』

「布仏本音、打鉄！ いくよ〜！」

漸く全員が発進した。使っているのは第一アリーナなので広いの
だが、これだけの人数だと少し狭く感じる。

管制室では模擬戦を今か今かと待ち侘びている束と、データ収集
準備を始めた真耶、模擬戦を見守る千冬とラクスが模擬戦開始の合
図を待った。

【模擬戦、開始】

模擬戦が始まった。

始まった途端に一夏達は遠距離武器を一斉射、キラを蜂の巣にす
る勢いで連射したのだが、実弾やレーザー、荷電粒子砲、衝撃砲の
嵐の中を高速機動で飛びながら全てを避け、そして接近して来る。

「散開！！」

楯無の合図で全員、散り散りになったのだが、キラを相手にそれは悪手だ。

一夏達が散開した途端、キラは両手のライフルを左右に向けて連射、ビームは一直線に移動中だった本音の打鉄とラファール・リヴアイヴに直撃して、シールドエネルギーを一瞬で0にしてしまった。

「う、うそ・・・!」

「早いよキーヤン!」

文句は受け付けない。キラは背後に迫ってきたブルーティアーズのビットに気付いてレーザーをバク転で避けると、バク転中に射出したドラグリーンでビットを全て破壊、更に紅椿のビットまで飛んできたのをグリフォン2ビームブレイドで蹴り、切り裂く。

「は、早すぎますわ!?」

「足にビームブレイドだと!?」

箒とセシリアは驚愕していたが、直ぐにドラグリーンから放たれたビームを避けて、セシリアは後方からの射撃位置へ移動、箒は一夏、箒と共に接近戦に入った。

「くらええええ!」

テンベストウースト
攪乱加速で接近した一夏は雪片・弐型と左手のレーザークロウで一気に切り裂こうとしたのだが、ビームサーベル一本に阻まれ、グリフォン2で切られそうになった。そこを箒の空裂が押さえ、雨月を振った。

しかし、雨月はもう一本のビームサーベルに抑えられ、背後から接近してきた箒の夢現はドラグリーン3基で展開したバリアーに阻まれた。

「っ！ 固い！」
「っ！」

ブリリアントフリーダムの頭部の近接防御機関砲から弾丸が連射され、シールドエネルギーを少量だが消費しながら離れた一夏と篤だったが、簪の後ろに攪乱加速テンベストフーストで移動したキラが蹴り飛ばした打鉄式式と激突、ドラグーンからのビームの嵐を受けてしまう。

その隙を狙ってラウラがレールカノンを発射して来たのだが、弾丸を切り裂いたキラは両肩のビームブーメランを投擲、ラウラは避けはしたものの、背後から戻ってきたビームブーメランが直撃しそ
うになる。

「ラウラ危ない！」

二本のビームブーメランはシャルロットのダルクに落とされた。だが、既にキラはシャルロットとラウラの背後に移動しており、レール砲の直撃を受けてしまう。

「ぐっ！？」
「わあっ！？」

そのまま更にレール砲を連射しようとしたキラの横から鈴音の双天牙月ラステイー・ネイルと楯無の蛇腹剣による斬撃が迫ったので、両手で受け止めるとパルマファイオキーナで武器を破壊、更にバク転しながら鈴音と楯無の後ろに移動するとバラエーナを連射、ラウラ、シャルロット、鈴音、楯無は直撃を避ける為に再び散り散りになった。

「き、キリが無いわ・・・」
「て言うか、俺達のシールドエネルギーがもう半分以下なのに、キ

ラは未だに被弾0って何だよ・・・」

鈴音の愚痴に近くに居た一夏が現状を嘆いた。

一夏達は既にシールドエネルギーが半分近くまで減っているのに、キラは未だに被弾が無い。つまり、シールドエネルギーを攪乱加速テンベストクリーストのみでしか減らしていないという事だ。

「そろそろ、本気で行くよ」

キラは、そう宣言してSEEDを発動させる。

ハイライトの無くなった瞳、クリアーになった思考で戦局を把握すると、ドラグーンを再度動かして一夏達を更に翻弄、その隙にマルチックオンシステムを展開して一夏達の手足、武器、そしてたつた今発射された簷の山嵐をロツクすると、ドラグーンフルバーストを発射した。

「いけえええ!!」

フルバーストによって放たれたビーム、レール砲の嵐の中、一夏達は避けながらキラに接近しようとした。

だが、未だ嘗て、キラのドラグーンフルバーストを避けきれた者は居ない。それがブリリアントフリーダムに進化した今のドラグーンフルバーストなら余計にだ。

一夏たちは全員、手足、武器を破壊され、シールドエネルギーが0になる中、被弾が最も少なく、何とか持ちこたえた楯無だけがミストルティンの槍の発射準備を整えていた。

【ミストルティンの槍、発動】

「発射!!」

放たれたナノマシンの水の攻勢エネルギーはキラを撃ち落そうと迫ったのだが、再度ドラグーンが展開したビームバリアーに阻まれ、もう動くだけのエネルギーが無くなってしまふ。

残り3しか残っていない霧纏ミステリアス・レイディの淑女のシールドエネルギーは、目の前に降り立ったブリリアントフリーダムフリーダムのビームサーベル一閃によつて0になつた。

「ねえヤマト君・・・君つて、本当に何者？」

「さあ・・・何者なんでしょうね」

既にSEEDの目ではなくなつたキラ本来の瞳を見つめて、楯無は尋ねたのだが、キラにはぐらかされたので、仕方が無いと肩を竦める。

【模擬戦終了。勝者、キラ・ヤマト】

結局、一夏達はキラに一撃も与える事が出来ずに負けてしまつた。だが、この模擬戦の経験は決して無駄ではなく、クルーゼが相手だと、この結果と同じ・・・いや、もしかしたら死んでいたかもしれないと、改めて思い知らされる事となるのだつた。

第五十九話 「フリーダムの本領」(後書き)

キラの圧勝、ブリリアントフリーダムとSEED、キラの実力を合
わせるとこんなものかな？

今回は全学年合同タッグマッチの話、かな？

第六十話 「夕飯の席で」 (前書き)

夕飯の席でのことです。

第六十話 「夕飯の席で」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十話

「夕飯の席で」

模擬戦が終わり、全員で寮の食堂で夕食という事になった。千冬と真耶は流石にまだ仕事が残っているとの事なので、後から参加するという事になり、他は皆揃っている。

「「襲われた!？」」

その夕飯の席で、昨夜の出来事を話すと、一夏の幼馴染コンビが声を揃えて大声を上げる。当然、あの場に居たキラとラウラ、前もって聞いていたラクス以外も一様に驚きを見せていた。

「ああ、昨日の夜にな」

流石に織斑マドカという名は伏せたが、サイレント・ゼフィルスの操縦者だという事は話している。キャノンボール・ファストの時にラウ・ル・クルーゼと共に現れた正体不明の少女、その顔はバイザーに隠れていたもので、素顔を知っているのはキラと一夏、ラクス、ラウラ、楯無、簪だけだ。

「サイレント・ゼフィルスの操縦者・・・一体何が目的なんだろう？ 一夏、何か心当たりある？」

「いや、無い・・・」

シャルロットの問いに無いと答えた一夏だったが、その胸の内には織斑マドカと名乗った少女の事で渦巻いていた。

一夏の家族は姉一人だけ、妹など居ないし、織斑姉弟を捨てた両親の事に関しては一夏と千冬の間で暗黙のタブーとなっているから聞けない、聞きたくないというのが本音だ。

「一つだけ言えるのは、ISの操縦技術が国家代表クラスという事と、白兵戦も凄腕だという事、かな」

「キラさんがそこまで仰る程ですか・・・」

マドカのIS操縦技術が高いのはこの場に居る誰もが認める所、そこに白兵戦技能の高さをキラが評価した所に、誰もが驚く。

「何を言っている。白兵戦においてキラの方が上だろうに・・・銃弾を銃弾で弾くなど、普通は出来んぞ」

「じゅ、銃弾を銃弾でって・・・キラ、アンタって何処まで規格外なのよ」

「やろうと思えば刀で銃弾を弾く事も出来るけど、これは鍛えれば一夏や筈でも出来ると思うよ？」

「いや、無理だから」

「私も流石に刀で銃弾を弾くのはな・・・」

寧ろ、キラなら銃弾を刀で弾くのではなく、刀で銃弾を切り裂く位はしそうで困る。

「あの、キラさんと一夏さんは・・・顔を見なかったのですか？」

「あ、顔？・・・いや、見てないよ」

「あ、ああ・・・キラの言う通りだ、バイザーグラス掛けてたからな」

此処でキラと一夏は嘘を吐いた。織斑マドカの事を話す訳にいかない以上、顔も見なかった事にするしかない。

ラウラもチラツと二人の顔を見て、話を合わせてくれたので、皆には悪いが上手く騙せた。

「何だ、夕飯時だというのに随分と雰囲気暗いな」

「皆さん、如何したんですか？」

「あ、千冬姉、山田先生・・・」

「・・・まあ、今は良いか」

仕事も終わって食事時なので、此処は家族として接するのも問題ない。

「ところで、お前達はいつもこの面子で食事をしているのか？」

「あ、はい。会長と布仏姉妹は初めてですけど、大体は」

「そうか・・・」

「あら？ 織斑先生、もしかして気になるんですか？」

「山田先生、後で食後の運動に近接格闘戦をやるうか・・・私は暮桜で、山田先生は生身で」

「死んじゃいますう!？」

照れ隠しには物騒過ぎる千冬の言葉に涙を流す真耶だったが、誰も慰めなかった。この二人のやり取りは最早慣れたものなのだ。

「それで、何故雰囲気暗くなっていた？」

「あ、えつと・・・昨日、俺がサイレント・ゼフィルスの操縦者に襲われた事を話したんだよ」

「・・・ああ、そうか・・・昨夜のか」

千冬と真耶も昨夜の事は聞いていた。そして特に千冬はサイレント・ゼフィルスの操縦者の正体、マドカの事を知っているのだ。それ故に思うところがある。

「まあ、あれは現在調査中だから気にしていても仕方ないだろう。それより貴様ら、もうそろそろ全学年合同タッグマッチがあるのを忘れてはいないだろうな？」

『あー！』

キラとラクス、楯無以外は全員忘れていたらしい。千冬の米神に青筋が浮いてトレーを振り上げたので、三人は目を逸らした。

その瞬間、食堂内に鈍い音が複数響き渡ったのだが、食堂に居た生徒達は誰も気にしなかったと言う。

「さて、全学年合同タッグマッチの事でキラとラクスに話しておきたい事がある」

「僕とラクスですか？」

「ああ、学園上層部の決定だが、先ずラクスは今回、強制参加になるらしい」

「あら・・・オペレーター候補生というのは無視ですか」

ラクスの強制参加、それはオペレーター候補生というラクスの立場を完全に無視した決定だった。オペレーター専用とは言え、専用機を持っているのだから操縦者としてタッグマッチに参加しろという事らしいのだ。

「それと、キラとラクスはタッグを組めという事だ。学園側もキラが学園最強である事は承知済みらしいからな、オペレーター専用のISであるオルタナティブと組ませて他の生徒に勝つチャンスを作ろうとしているみたいだな」

キラがいくら強くとも、パートナーであるラクスが弱ければ他の生徒にも勝つチャンスがあるだろうと睨んだのだろうが、この場に居た誰もが思った。寧ろ勝つチャンスが完全に無くなってしまった、と……。

「他は自由にパートナーを決める、特に一夏！」

「な、何だよ……」

「お前はパートナーを決めるときに騒ぎすぎるなよ？」

「騒がねえよ！」

「……まあ、言っても無駄だとは思っがな」

一夏のパートナーになろうと筭、鈴音、ラウラ、本音、楯無が騒ぎそつだ。

「なら簪さん、僕と組もうか？」

「シャルロットさん、とですか……？ は、はい……」

こちらはこちらで凶悪コンビが誕生していた。どちらもキラが関わった機体を使っている、シャルロットはキラが作ったエクレーリ・リヴァイヴ、簪はキラが造るのを手伝った打鉄・弐式、本当に凶悪なコンビである。

「お嬢様、お嬢様は私とです」

「え、虚ちゃん、私は一夏君と……」

「……」

「……はい」

虚が無表情で楯無を睨みつけると、楯無は文句を引っ込めて大人しく従ってしまった。この主従、時々どちらが上なのか判らなく

なる。

「うえ！？　こんなに早くみんなパートナー決めちゃうのかよ！？」

「お、俺はじゃあ・・・」

「一夏！　当然、私だろうな！？」

「あたしよね！？」

「一夏、私の嫁なら選択は決まっているだろう？」

「おりむ」

一夏の所は暫く決まりそうになかった。あぶれてしまったセシリアはと言うと、一夏のパートナーになれなかった誰かと組む事にしたらしい。

「本当はキラさんと組みたかったのですが、学園の決定は覆せませんもの・・・」

と、口では納得している様に言っていたが、その後におかわりをした所を見るに、自棄食いなのだろう。

「ねえお兄ちゃん、一夏と誰が組んだら面白いかなあ？」

「あの中で？」

「うん」

「そうだね・・・筈とだったらどちらも近接戦型だから相性としては悪いと思われるけど、二人の単一仕様能力ワンオフアビリティを考えれば最も理想的なタッグになると思う」

それに、紅椿も白式も中距離戦の武装も持っているので、組まれば案外強敵になるだろう。元々、白式と紅椿は対二機をコンセプトにしている機体で、二機揃って初めて暮桜・真打に乗る千冬と同じ事が出来る様になるのだ。

「鈴とだったら箒と同じ、どちらも中距離が出来るから動きとしては変則的になるだろうから面白いかな、パワー型の鈴とスピード型の一夏、ちよつと厄介になる」

「へえ、ラウラは？」

「ラウラだと一夏が前衛、ラウラが後衛で一番バランスの良いペアだろうね。バランスが良いから一夏たちも戦い易いだろうけど、まあ・・・だからこそ攻略し易いというのもあるかな」

本音だと、まだ本音の実力が未知数なので何とも言えない。

「そっかぁ・・・因みにお兄ちゃんが一夏と組んだら如何戦うの？」

「一夏を前衛に置いて、僕が後方からハイマツトフルバースト連射」

「あ、あはは・・・だよねえ」

もしくはドラグリーンフルバーストかミーティアフルバーストで殲滅する。

「僕と簪さんと二人とも全距離対応だからなあ・・・うん、でも面白い戦法をいくつか思いついたよ」

「そっか、じゃあ試合を楽しみにしてるね」

「うん！ 負けないよ？」

とりあえず、今は火花を散らしている箒、鈴音、ラウラ、本音の四人を何とかする為、キラは千冬に視線を送る。

千冬はそれに頷くと再びトレーを振り上げ、食堂内に先ほど以上に鈍い音を響かせるのだった。

第六十話 「夕飯の席で」 (後書き)

今回は、キラとラクスト、一夏と篤が出かけます。取材、らしいです
ね。

第六十一話 「取材」(前書き)

取材です。そのままですわ W W

第六十一話 「取材」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十一話

「取材」

本日、キラとラクス、一夏、箒の四人は学園の外に居た。

何故、この四人が学園の外に居るのかと言うと、一言で言えば取材と呼ばれたから、だろう。インフィニット・ストライプという雑誌を作っている編集部取材させて欲しいという事で、世界初の男性IS操縦者であるキラと一夏、束から直接ISを貰った箒とラクスが呼ばれたのだ。

「ねえ一夏、パートナーはもう決めた？」

「いや、まだ決まってねえんだよなあ・・・ホント、誰にしようか悩んじゃって」

「相性で言えば箒かラウラだけど、鈴と組んでスピード＆パワーの近接戦オンリー戦闘も面白いと思うけど・・・のほほんさんは、未知数だから判らないなあ」

「そうなんだよ、色々戦略とか考えてさ。だから余計に決まらなくて・・・」

キラの隣を歩く一夏は未だにパートナーを決められずに悩んでいる様だ。キラが教えたそれぞれの候補者と組んだときの利点を考えると、魅力的過ぎて困っているらしい。

「なあラクス、その・・・私が一夏に選ばれる様にするしたら、

如何したら良いだろう?」

「そうですねえ・・・もう少し積極的に、素直になる事でしょうか。それから紅椿を完全に使いこなす事、これくらいですわ」

「そうか・・・もっと積極的に、素直に・・・うう」

箒は想像して真つ赤になると俯き、私服のスカートを握ってモジモジし始めた。何となく、ラクスは微笑ましい気持ちと一緒に、イケナイ感情を持ってしまいそうになったが、思いとどまる。

「あ、そう言えば箒、その服いいな、どこで買ったんだ?」

「うえ!? あ、えと・・・この前、友達と買い物に行った時に」

今日の箒の服装は黒のミニスカートに白いブラウス、アウターに薄手の秋物パーカーコートだ。

「わ、私よりラクスとキラの服装も良いと思うぞ?」

「キラのは前に見たやつと同じだな、確か特注なんだっけ?」

「うん」

「ラクスは、何ていうかお嬢様って感じだな」

「こつという服が好きなもので・・・」

キラはいつも通りの服、ラクスは白い長袖のワンピースに桜色のカーディガン、ピンクの小さいポシェットを肩からぶら下げている。

「一夏も格好良いと思うけど」

「そうか? 適当に買ったやつだけだな」

一夏の服はグレーのジーンズに白いワイシャツ、黒のジャケットと、年齢に見合わぬ大人っぽい服装だった。

「それより、今日は少し寒いな・・・お、あそこに珈琲ショップがあるから、何か買うか？」

「そうだね、ラクスと箒は？」

「構いませんわ」

「私も、構わない」

という事で、珈琲ショップでホット珈琲を購入、店オリジナルブレンドを買ったのだが、歩きながら飲んで、その感想は・・・。

「ちょっと、ブレンドに不満かな・・・苦味が強すぎる」

「前に飲んだバルトフェルドさんの失敗作に似てますね」

キラとラクスには不評だった。

「うーん、まあ苦味は強いかなって思うけど、豆が悪いのか？」

「豆は問題ないんだけど、ブレンドした種類が悪いかな。もう少し苦味を抑えた豆もあるから、それを混ぜたら良くなると思うけど・・・」

「本当に、キラは珈琲に嫌いというか、拘りすぎだな」

箒の言う通りなのだが、これがバルトフェルドなら更に珈琲ショップに対する罵倒まで飛んでくるだろう。

「まあ、体も暖まったし良いかな。そろそろ着くよ」

「ん？ お、見えてきた」

漸く到着した。

受付で名前を出すと直ぐに案内され、エレベーターで上がった所にある編集部の待合室に通されて少し待つ。

それから数分で人が入ってきた。入ってきたのは女性なのだが、

見覚えのある顔つきだった。それはこの取材の話を持ちかけてきた二年生、新聞部のエースこと、黛 薫子だ。

「どうも、私は雑誌『インフィニット・ストライプ』の副編集長をやってる黛 渚子よ。今日はよろしく」

この女性、渚子は薫子の姉なのだ。彼女が取材をしたいという旨を薫子に伝え、薫子からキラ達に話が持ちかけられたのだ。

「あ、どうも、織斑一夏です」

「篠ノ之箒です」

「キラ・ヤマトです」

「ラクス・クラインですわ」

早速、インタビューから始め、その後で写真撮影という事になった。渚子はペン型のICレコーダーを取り出して一度回すと、インタビューの準備を整える。

「それじゃあ、早速質問いいかしら？ 織斑くんとヤマトくん、女子校に入学した感想は？」

「いきなりそれですか・・・」

「だってえ、気になるじゃない。読者アンケートでも君達への特集リクエスト、すっごく多いのよ？」

「僕はそうですね・・・気を使う事が多いのが少し疲れます。目線だったり、話題だったり」

「俺は・・・使えるトイレが少なくて困ります」

キラの答えはまあ、何となく理解出来たのだろう。だが、一夏の答えを聞いて渚子は噴出して笑ってしまった。

「あははは！ 妹の言ってたこと、本当だったのね。異性に興味無いハーレムキングの片割れって」

「あの、僕はラクスと付き合ってるので、ハーレムとか興味無いんですけど」

「そういえば、そんな話もあったわね。それも後で聞かせてもらうから、次は篠ノ之さんとクラインさんに篠ノ之博士の事を聞かせてもらおうかしら」

東の事が出てきた所で筈は帰ろうと立ち上がったのだが、報酬のデイナー券のことがあって、結局座り、大人しくインタビューされる事に。

「篠ノ之さんとクラインさんは篠ノ之博士から直接専用機を貰ったみたいだけど、その感想は？ どこかの国家代表候補生になる気はないの？ 日本は嫌い？」

「紅椿は、感謝してます。・・・今のところ、代表候補生に興味はありません。勧誘は多いですが。日本は、まあ、生まれ育った国ですから、嫌いではないですけど」

「私もオルタナティブに関して感謝しています。代表候補生にはなれる気ありませんわ。元々、オペレーターとして学園に入学しましたし、オルタナティブ自体がオペレーター専用の機体ですから、戦闘は出来ませんので。日本は好きですわ、色々面白い国ですから」

渚子の矢継ぎ早の質問に全て答えた二人、どちらも代表候補生に興味無しというのはまあ、誤魔化して記事にするのだろう。流石に東から直接最新鋭のISを貰っておきながら代表候補生になる気が無いというのは批判を浴びそうだから。

「じゃあ次はヤマトちゃんとクラインさん、二人は恋人同士って事だけど・・・付き合ってる何年？」

「5年になります」

「へえ、長いのねえ。二人は年齢的に結婚とかは考えてないの？」

「卒業したらとは、考えておりますわ」

「わお！ これは凄い情報を聞いたかも！？」

隣で一夏と箒も驚いていた。まあ、友人が卒業したら結婚すると言っただから、驚くなという方が無理だろう。

「キラとラクス、卒業したら結婚かあ。結婚式には呼んでくれよな」

「うむ、必ず行かせてもらっぞ」

「勿論、必ず招待するから」

実は、よく見ればラクスの左手薬指には婚約指輪が填められていた。シルバーに10カラットのダイヤモンドが装飾された綺麗な指輪だ。

「オーケーオーケー。じゃあヤマトくん、織斑くん、篠ノ之さん、

三人って誰が一番強いの？」

「それは勿論、キラ」

「あらら、ヤマトくんってそんなに強いんだ？」

「模擬戦で俺達、一度も勝ったこと無いし」

「事実上の学園最強でもあり、世界最強と言っても過言じゃ無いです。ちふ・・・織斑先生もキラの方が強いって認めますから」

「うそ！？ 織斑先生って、織斑千冬様よね！？ あのブリュンヒルデの！？」

「その、織斑先生です。俺の姉ですね」

凄いスクープに驚愕する渚子だが、一夏と箒が事実だと証明して、余計にビックリだった。

「えっと、それじゃあ織斑くんと篠ノ之さんだとどっちが強いのかな？」

「私です！」

「そうなの？」

「いえいえ、模擬戦だと今のところ59戦30勝で俺が勝ってますよ？」

「待て、あれはまだ紅椿を貰ったばかりだったから負けたんであって、今は私が勝つ事の方が多いぞ！」

「いや、でも短期決戦になったら俺が勝つだろ！」

「短期決戦限定だろうが！」

実際、キラから見たらどっちもどっちなのだが、まああえてどちらと問われれば・・・キラは一夏だと答える。

これは同じ男だからという訳ではなく、実際に一夏は短期決戦においてはキラを除いて最強と言えるだけの实力があるのだ。勿論、その短期決戦に持ち込めるか如何かはまだまだ一夏の実力だと未知数なのだが、上手く持ち込めれば本当に強い。

「えっと、ヤマトくんから見ても、如何なのかな？」

「短期決戦なら確かに一夏は強いです。逆に時間が長引けば箒の方が強いんですね。どちらの機体も単一仕様能力ワンオフアビリティの能力が真逆ですから」

零落白夜はエネルギー消滅、絢爛舞踏はエネルギー増加、だから戦いだと短期決戦では白式が有利だが、長引けば紅椿が有利になる。

「つまり・・・」

「ええ、どっちもどっちですね」

「」「」「」

「あらあら・・・お二人とも、お気を落とさないてくださいな」

キラのどっちもどっちというセリフに、落ち込んでしまった一夏と篤を、ラクスが慰めていた。一夏も篤も、キラに教えを乞うている以上、少しは強くなったという自信があったのだが、まだまだキラに満足してもらえない域には、達していないのだ。

「ヤマトくん、実は毒舌？」

「いえ、人にモノを教える時の癖、ですね」

「軍人みたいよ？」

「あはは・・・」

軍人でしたから、とは言えないキラであった。

第六十一話 「取材」(後書き)

今回は写真撮影と、お食事でキラとラクスは初めての五反田食堂です。

第六十二話 「撮影、ドキドキの時間」(前書き)

五反田食堂まで行きませんでした。でも、今回は2828成分豊富ですよ！

第六十二話 「撮影、ドキドキの時間」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十二話

「撮影、ドキドキの時間」

インタビューも凡そ終わり、次は写真撮影となった。

撮影は地下のスタジオで行うのだが、何でもスポンサーの用意した服に着替えないと渚子の首が飛ぶらしいので、着替えることに。

「う……こ、これは」

「あら、可愛い服ですわね」

「それは私も思うが……わ、私よりラクスの方が似合うのではないか？」

「いえ……その、胸が……」

「……あ」

箒が着替える事になっている服はかなり大胆に胸元が開いたブラウスにフリルが可愛いミニスカート、ショート丈のジーンズアウターだ。

正直、この服は胸の大きい箒の方が似合うタイプで、胸が少し小さいラクスでは着こなせない。

「ら、ラクスはどのような服を買ったのだ？」

「私ですか……？ これです」

ラクスが着る事になっている服はフリルがあしらわれた薄桃色の

ブラウスと紺色のフレアスカート、箒が着るジーンズアウターの色
違いだ。

「う、私もこういう物の方が良かったな・・・」

フリルが付いたブラウスは少し考え物だが、胸元が開いたブラウ
スよりはまだマシだった。

「さあ、いつまでも迷っていたらキラ達をお待たせしてしまいます。
早く着替えましょう」

「む・・・う、わかった・・・」

服を脱いで着替えを始めた二人だったが、ラクスは箒の胸を間近
で見て、そして自分の胸を見下ろすと深い溜息を吐きながら着替え
る。

溜息を吐いたラクスを見て、箒は何事だろうかと思っただが、ラク
スの視線が自分の胸と彼女の胸に行っていたのを思い出して頬を赤
く染めると、いそいそと着替えるのだった。

着替え終わった箒とラクスはスタジオの椅子に腰掛けてキラと一
夏が出てくるのを待っていた。だが、中々出てこないのだ。

男の着替えとは女よりも早いと話に聞いた事があるのだが、どう
も遅すぎる。

「箒さん、一夏さんがその服を褒めてくださったら、必ず誘うので
すよ？ 今夜は一緒に夕食に行きましょう」と

「う、うむ・・・一夏が褒めてくれたら、私が誘う・・・私が、誘
う・・・誘う」

ラクスのアドバイスを受けて頬を染めながら呪文の様に呟く筈、
ラクスから見ても緊張し過ぎているのがよく判る。

「はいはい！ お待たせしました！ ヤマトさんと織斑くんのご
入場でーす！」

渚子が随分なハイテンションでスタジオに入ってきた。その後ろ
からは見事にカジュアルスーツを着こなしたキラと、まだ着慣れて
いないのか、少し微笑ましいカジュアルスーツ姿の一夏が入って
くる。

「うーん・・・何かこれ、変じゃないですか？」

「ぜんぜん！ 超似合ってるわよ！ 十代の子のスーツ姿っての
もいいわねえ」

「でも、キラの方が似合ってる気がするんですけど」

「あゝ・・・何ていうか、ヤマトくんは反則よね。凄く似合ってる
んだけど・・・ホストみたい」

「あ、あはは・・・」

一夏のスーツ姿は何処か新人サラリーマンみたいな印象を受けて、
格好良いのだが、何処か微笑ましく思える。

しかし、キラの場合は21歳だというのに随分と着こなし過ぎで、
その美形の顔と相まってホストにも見えなくない。ていうか、寧ろ
ホストだ。

「お待たせラクス・・・うん、よく似合ってるよ」

「ありがとうございます。キラも、素敵ですわよ」

「ありがとうございます」

キラが自然と腕を差し出し、ラクスがそこに腕を絡ませながら抱

きつく。それだけでピンク色のオーラが溢れ出し、スタジオにいる
独り身の男女全てが、その甘ったるさにブラック珈琲を飲みたくな
った。

「い、一夏……」

「お、おう。待たせたな、箒」

「う、うむ……に、似合っているな……その、何だ、わ、
悪くないぞ」

「お、おう、サンキュ。箒も、その……可愛いぞ」

「か、かわつ　　っ!？」

一方、一夏と箒は、お互いに見慣れる服装である為か、二人そろ
って頬を赤く染め、目を逸らしながらも、ちらちらと目を向け、目
が合つと直ぐに逸らしてしまう。

付き合いたてのカップルみたいで微笑ましいのだが、やはり甘っ
たるい空気を醸し出してしまったのか、スタジオにいたスタッフは
全員、事務所に内線を入れて珈琲を注文していた。

「あゝ、はいはい。それじゃあ撮影始めるわよ！　時間押してるか
ら、サクサクいきましょう！」

渚子が手を叩いて撮影準備をしていたスタッフを動かした。あっ
と言つ間に準備が整い、漸く撮影は始まる。

撮影ブースに入った四人は言われるままポーズを取って、カメラ
マンもその都度指示を出しながら撮影をしていく。

四人だけ、キラとラクス、一夏と箒、キラと一夏、箒とラクス、
キラと箒、一夏とラクスと、様々なパターンでの撮影も粗方終わり、
後は最後の写真を撮るだけとなった。

「じゃあ、最後にヤマトちゃんとクラインさん、織斑ちゃんと篠ノ之さ

んのペアで写真を撮りましょうか」

「……はい」「」

「先にヤマトくとクラインさんがブースに入って」

キラとラクスがブースに入ると、カメラマンがカメラを構え、渚子からの指示が来た。

「ヤマトくん、クラインさんの腰に手を回して抱き寄せて、クラインさんはヤマトくんの胸板に顔を寄せる……というか、もう頭を預けちゃって」

「こう、ですか？」

「これで、よろしいでしょうか？」

「オーケーオーケー、よし！」

シャッターが押され、キラとラクスの撮影が終わる。次は一夏と篝の撮影になるので、二人がブースを出ると、入れ違いで一夏と篝が入った。

「じゃあ、二人はその椅子に座って……あゝ、織斑くんはもう少し篠ノ之さんの方に寄ってちょうだい」

「え、でもそれじゃあ……」

篝とピツタリくっ付いてしまう。そう言おうと思ったのだが、先ほどのキラとラクスの撮影を見て、キラとラクスがくっ付いて撮影した時のラクスの幸せそうな表情を思い出した。

「……（篝も、ラクスと同じ女の子なんだ。もしかしたら、ああいう風によったら、喜ぶのかな？）」

試しにと一夏は篝の方に寄って、自分から篝の腰に手を回して抱

き寄せてみた。

「い、一夏!？」

「お、いいねえ織斑くん大胆! でも、もう少しインパクトが欲しいかなあ……」

一夏の手が腰に回されて抱き寄せられた箒は顔を真っ赤にして、先ほどから心臓がバクバクと煩い。

そんな箒を見ながら渚子が少しだけ思案すると、何か思いついたのか笑顔になった。

「篠ノ之さん、織斑くんの首に腕を回してみたら良いんじゃない? うん、いい、いいわ!」

言われた通りに箒は一夏の首に腕を回してみたのだが、より一層密着して、更には顔まで近くなってしまった為か、箒は完全に頭の中が沸騰しそうな程にお花畑となってしまう。

一夏も箒の顔が目の前にある為なのか、いつもの鈍感は何処に行つたと言いたくなるほど頬を赤くして、篠ノ之箒という女の子に……織斑一夏という男が反応しそうになった。

「う……(一夏の顔が、近い!? あ、ああ、後ちよつとで、きキス……してしまいそうじゃあ!?)」

「……っ! (ほ、箒……何だが、いつもより可愛い……良い匂いだし、何だろう。こんな感覚、初めてだ)」

最高のショットが撮れた。付き合いたての初々しいカップルの様な二人の姿は無事にフィルムに納まり、渚子も最高の笑顔で右手の親指を立てる。

「はい、撮影しゅ〜りよ〜！ 腕を回す必要も無かったわねえこれは」
「っっ！！」

バツと離れた二人にグツジョブと内心微笑んでいた渚子の笑顔と、その後ろで一夏と箒の親とでも言いたげな慈愛の表情を二人に向けているキラとラクスが嫌に印象的だった。

第六十二話 「撮影、ドキドキの時間」(後書き)

さて、次回はやっと五反田食堂です。

今回のお話、実は一夏のターニングポイントにもなっています。フ
アース党の方、如何でした？

第六十三話 「五反田食堂」(前書き)

やっとキラとラクス、初の五反田食堂です。

第六十三話 「五反田食堂」

ISS(インフィニット・ストラトス)
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十三話

「五反田食堂」

撮影が終わり、各自着替えをしているのだが、男子更衣室で着替えをしている一夏はキラに尋ねたい事があるとやってきた。

「あのさ・・・今日、箒と撮影してて感じたんだけど、今日の箒ってさ、何かいつもより可愛かったよな」

「それは、うん・・・僕も思うよ？」

「でさ・・・何て言えば良いのかな、箒の隣にいた時、凄い心臓が高鳴って、その、胸が苦しくなったんだけど」

「・・・一夏、それが何なのか、解る？」

「いや、ラウラや鈴と居た時だってこんな事は無かったのに、箒だけって、如何いう事だ？」

呆れた。何故に一夏は自分の感情に気付かないのか、ここまで色恋に鈍いとは流石のキラも思わなかったのだ。

「それ、ラウラや鈴に聞いてちゃだめだよ？ 他かに話すなら千冬さんかセシリアにする事。それから、僕から言えるのは・・・ちゃんと箒を見てあげる事だね」

「お、おう・・・箒を、ちゃんと見る、か・・・っ!？」

また一夏の頬が赤く染まった。恐らく箒の顔でも思い出したのだ

るうが、まあ大した問題でも無いので、見守る事にする。

「さ、着替え終わったから行こう。ラクスと箒も待ってるから」
「そ、そうだな」

着替え終わり、撮影に使った服はくれるという事なので貰った鞆に入れると更衣室を出た。

編集部からの帰り道、キラ達は分かれてそれぞれ食事と思ったのだが、箒がどうしてもキラとラクスにも付いて来て欲しいと言ったので、ダイナーには四人で行く事になった。

まだ箒も二人だけでダイナーというのは緊張し過ぎて耐えられないらしく、キラ達が一緒に居てくれればリラックス出来るらしい。

「それで・・・ダイナーって、何処に行くの？」

「あ、それはだな・・・えっと、あった。これだ」

キラに尋ねられ箒は持っていたバックから一冊の雑誌を取り出して、ページを捲ると目的のページを見せてきた。

書かれていたのは今話題のカップルがデートで行くお店ベストテンという見出し。その一番人気の店に印が付いている。

「ここは帰りの地下鉄から近いから、ここにしようと思うんだ」

「まあ、素敵なお店ですね。お値段も学生に優しい手頃な価格で、お料理も美味しい、ですか・・・楽しみです」

「へえ・・・って、カップル？」

一夏が首を傾げたが、それは無視する。

確かに、この店なら地下鉄から近い所にあるし、雰囲気もあるの

で箒と一夏の為には良いのかもしれない。

「でも、五反田食堂も美味いぜ？」

「い、いや、そのだな・・・ここに行ってみたいのだが、駄目・・・か？」

「っ！ いや！？ そ、そうだな！ 偶にはこういう店も良いかもな！」

「そ、そうか！ ならここにしよう、うん」

こうして、箒が行きたいと行った店、針葉樹の森に向ったのだが・・・。

「あー、満員だな」

「日曜日のデイナertimeだからね」

「これでは入るのに何時間掛かるのでしょね」
「・・・」

見事に満員で、店の外にまで人が並んでいた。

キラとラクスは余りにも不憫な箒の方を見たのだが、当の彼女は啞然として、若干だが白く煤けて見えてしまった。

「どうする？ 二時間待ちって書いてるけど、下手したらそれ以上に待たされそうだぜ？」

「う・・・うう・・・」

遂には涙目になった箒、ちょっと可哀想になったので、キラは一夏に何処が良い店は知らないかと聞いたのだが、それで紹介された店が、よりにもよって箒にとってはライバルでもある少女の実家でもある五反田食堂だった。

「五反田食堂？」

「あれ？ 箒はまだ来た事無かったっけ？ ここは俺の友達の実家だよ」

五反田食堂の前、そこに四人は立っている。

箒は呆然と食堂を見上げ、キラとラクスはもう此処まで来ると苦笑しか出て来なくなった。何故、よりもよってこの店をチョイスしたのか、本気で一夏の頭をかち割って中を見てみたくなってしまう。

「っ！？ き、キラ？ 今、お前の方から不穏な空気を感じたんだけど・・・」

「気のせいだよ」

「え・・・でも」

「気のせいだよ」

「・・・」

「気のせい」

「はい」

とりあえず、ここでこうしていても仕方が無いので、中に入る。中はそれなりに人が入っていたが、キラ達四人くらいなら問題なく座れそうだった。

「お、弾だ」

「おお？ 一夏か！ って、女子連れか？ 彼女かよ」

「馬鹿、よく見ろって、前に話しただろう？ 同じ男のIS操縦者のキラと、その彼女のラクス、それからファースト幼馴染だよ・・・っていうかこの前の俺の誕生日パーティーの時に居ただろ！」

「馬鹿野郎、俺が虚さんからアドレス聞き出すのにどれほど苦労したと思って・・・」

確かに弾と虚は良い雰囲気だったが、まさかアドレスを聞き出していたとは……。だが虚も満更では無さそうだったので、これはこれで良いのかもしれない。

「虚さんがどうしたって？」

「ゴホンゴホン……。なんでもねーよ、それでえっと、何て言っただけ？　しののさん？」

「篠ノ之箒だ」

「ふむふむ。あ、俺、弾。よろしくな」

「あ、ああ……」

キラとラクスの事は覚えていたので、改めて自己紹介する必要は無さそうだ。

四人席に案内されて、弾がカウンターに入っただのを見送ると、メニューを開いて早速だが何を食べるか決める事になった。

「キラ達は何食う？」

「僕はそうだね……。この生姜焼き定食にする」

「私は焼き魚定食にします」

「箒は？」

「む、……。こ、ここのお勧めは何だ？」

出来れば一夏のお勧めを食べてみたい。箒の乙女心から出た言葉だった。

「そうだな、どれも美味しいけど……。あえてすすめるなら、魚系かなあ……。あ、このカレイの煮つけとかほんとに美味しいぞ？」

「そ、そうか……。ふむふむ」

箒はまだ迷っているみたいだが、一夏は既に決めていたらしく、弾を呼ばうとしたのだが、箒が一夏の服の裾を掴んで止める。

「ん？ どうした？」

「あ、いや・・・その、い、今・・・料理の練習をしているのだが、良ければ今度、試食をしてくれないか？ 此処に来て思い出したのだが・・・」

「お、マジ？ 箒は料理上手いからなあ・・・そりゃ楽しみだ！」
「そ、そうか！ そうか・・・そうか・・・うん！」

何と言うか、傍から見ていて本当に微笑ましいのだが、一夏は気付いているのだろうか、この店に居る一夏に恋するもう一人の女の子がこの光景を見たら、何を思うのかを。

「さてと、俺は焼き魚とフライの盛り合わせ定食にしようかな、箒は？」

「え！？ えっと、私は・・・」

「ああ、この業火野菜炒め定食っていうのもいいぞ、何せ看板・・・鉄板メニューだからな」

「そうなのか。では、それにするとしよう」

やっと決まったらしいので、一夏は弾を呼んだ？

「ほいほい、決まったか？」

「ああ、俺は焼き魚とフライの盛り合わせ定食、箒は業火野菜炒め定食、キラが生姜焼き定食、ラクスが焼き魚定食で」

「ん、了解。じゃあちよつと待っていてくれ」

素早く伝票に注文の品を書いていった弾は厨房へ消えていった。料理が来るまで少し暇なのだが、箒は隣に座ってキラと話す一夏を

チラリと見て、少しだけ椅子を寄せる。

それを見ていたラクスは、ずっと微笑みながら水を一口飲んで、持ってきていた小説を読み始めるのだった。

第六十三話 「五反田食堂」(後書き)

次回は、見つかります。彼女に…そして、泣きます。

第六十四話 「複雑な乙女心」 (前書き)

思った様に進まないなあ…。

第六十四話 「複雑な乙女心」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十四話

「複雑な乙女心」

注文も終わり、後は料理を待つだけになったので、雑談をして時間を潰していたキラ達だったが、店の奥から一人の男性が出てきて近づいてきた。

この五反田食堂の店長であり、弾や蘭の祖父でもある五反田蔵、一夏もよく知る気さくな親父さんだ。

「よう！ 一夏、元気そうじゃねえか！」

「あ、蔵さん。どうも、お邪魔してます」

「おう、それで・・・友達とダブルデートか？」

「違うって。キラ、ラクス、箒、この人は弾と蘭のお祖父さんで蔵さんだ」

一夏が蔵をキラ達に紹介したので、キラ達も自己紹介をする。

「キラ・ヤマトです」

「ラクス・クラインですわ」

「篠ノ之箒、です」

「おう！ 俺は五反田蔵、この店の店長やってるぜ！ よろしくな
！」

なるほど、見た目こそ頑固そうな人だが、笑顔がキラや一夏とは

別の意味で男前、別の魅力が感じられる。

「そつだ、おーい！ 蘭！ おーい！」

何を思ったのか、蔵が母屋に通じる廊下に向って大声で呼びかけると、二階からなのだろう、「なにー？」という声が聞こえた。

「店に来い！ 今すぐにな！」

『なんでー？』

「いいから来い！」

二分後、蘭が母屋の玄関から出て店の入り口から入ってきた。

「おじいちゃん、何？ 私、宿題やってただけど………つ

て、ええ！？ い、一夏さん！？」

「よっ

孫の登場に事態を面白がっているのか、蔵は笑いつぱなし。蘭は今の服装……人目は気にしているが間違いなく部屋着と一夏の顔を見比べて、みるみる顔を真っ赤にして目尻に涙を浮かべると……。

「うあああああん！！」

泣きながら出て行った。

「あらあら……災難ですわね、蘭さん」

「何ていうか、弾の性格が誰に似たのかを理解した気がするよ」

蘭が泣きながら出て行った事で弾と蔵が言い合いをして、一夏が

首を傾げ、箒が少し表情を暗くしながらも蘭を心配するかの様な表情をしていた。

蘭が出て行って、入れ替わるように店に一人の女性が出てきた。蘭に似ている所を見るに、弾と蘭の母親だろう。

「あら？ あらら？ 一夏くん、隣の女の子は彼女？」

「違いますっつてば」

「あら、そうなの。よかった」

彼女の名は五反田蓮、弾と蘭の母親にして、五反田食堂の自称看板娘とは一夏の談だ。

10分後、お出かけ着にエプロン姿という格好になった蘭が戻ってきて、真の看板娘の登場に店中が歓声に包まれる。

「い、いらつしやいませ。一夏さん、ヤマト先輩、クライン先輩、篠ノ之先輩」

「あれ？ なんだよ蘭、着替えたのかよ」

「ええ、まあ・・・」

「一夏、あまりその辺は触れないであげなよ」

「ん？ 何で？」

ラクスが箒に目伏せで合図をすると、箒が心得たとばかりに頷き、一夏の足を思いつきり踏み付けた。

「いつ!?!」

「い、一夏さん!?! どうかしたんですか？」

「いや・・・な、なんでもない・・・」

相当、力を込めて踏みつけられたのだろう。涙目になった一夏が無理やり笑顔を作っているが、思いつきり引き攣っていた。

「箒、普通に踏んだ？」

「いや、足の裏に紅椿を部分展開して踏み潰した」

「あらあら」

それは骨に罫が入るレベルだと思うキラだが、一夏なら普段から殴られたり蹴られたりして慣れているだろうからと、スルーしてあげる事にした。

決して、箒の見せた笑顔が怖かったからではない。断じてない。

「おい、蘭！ 料理できたから運べ！」

「わ、わかってる！ 大声出さないでよ、おじいちゃん！」

丁度キラ達の料理が出来上がったらしく、蔵が蘭を呼ぶと、料理を受け取りに来た蘭が四人分の料理が乗ったトレーを受け取ると、ぷいっとそっぽを向いた。

「なんだあ・・・？ おい、弾、お前なんか蘭を怒らせるようなことしただろ！」

「俺じゃねえよ！」

「ウソつくと為にならんぞ！」

「だあ！ なんで決めつけんだよ！ じいちゃんのせいだよ、じいちゃんの！」

蔵と弾が喧嘩している。最も、それはこの店にいる人間にとって
は日常茶飯事らしく、気にする人間は一人もない。

キラとラクスも血の繋がった祖父と孫の戯れだと思ってスルーしているが、箒だけは少し心配そうな視線を向けていた。

「い、一夏さん！ おまたせしました」

「おう！ サンキョ」

テーブルに料理が並べられ始める。

「はい、ヤマト先輩の分です」

「うん、ありがとう」

「それから、クライン先輩の分です」

「はい、ありがとうございます」

そして、最後に筍の分だ。

「お、お待たせしました・・・えと、お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな。ありがとう」

料理を並べ終えたのだが、蘭はその場で立ち尽くして一夏と筍を交互に見ていた。

「（一夏さんと篠ノ之先輩・・・今日はデートなのかな？ でもヤマト先輩とクライン先輩もいるし・・・も、もしかしてダブルデートとか・・・？ それだと嫌だなあ・・・）」

「蘭？ 何かしたか？」

「は、はい！？ ど、どうもしてないですよ！？」

「蘭ちゃん、そのね・・・見られてると食べ難いんだよ」

「っ！？ し、失礼しました・・・！」

キラに指摘されて顔を真っ赤にした蘭はカウンターに戻って行った。

やっと落ち着いたので、四人は割り箸を手に早速だが一夏が勧める五反田食堂の料理を食べ始める。

「あ、美味しい」
「本当に、優しいお味です」

キラとラクスの口に合ったみたいだ。一夏もそれを聞いて我が事のように喜びながら箸を進めている。

「箸は如何だ？ 美味しいだろ」
「ああ、これは・・・美味しいな、醤油の味付けが良い」

箸も気に入ったらしい。元々、和食が好きな彼女なら、こういう店の料理は好みなのだが、特にこの店の味は彼女の舌を大変満足させた。

「だよなあ、それ美味しいよな」
「た、食べてみるか？」
「いいのか？ じゃあ早速・・・」

箸を伸ばして少し貰おうとした一夏だったが、箸が自分の箸で取った分に手を添えて一夏の口元に運ぶ。

「た、食べさせてやるう」
「え・・・？・・・っ!？」

頬を赤くして食べさせると言ってきた箸の言葉、顔を見て、一瞬で一夏の頬が真っ赤に染まった。

その横では、キラとラクスが食べさせ合いつこをしていたが、実は箸を焚きつける為の行為だと気付いた者はいない。

第六十四話 「複雑な乙女心」(後書き)

次回はやっと、泣かせますよー夏が。

第六十五話 「涙」 (前書き)

涙、それは一つの意味ではありません。

第六十五話 「涙」

ISS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十五話

「涙」

ラクスと食べさせ合いっこをしていたキラは、一夏が箸に食べさせてもらおうとした時に蘭の視線を感じた。

見てみれば蘭は一夏と箸に注目しており、何処か絶望したかのような表情をして、目尻には涙を浮かべている。

「一夏」

だから、キラは一度止める事にしたのだ。一夏と箸、そして蘭・他にもラウラや鈴音の事もあるが、今はこの三人の事と、それから・・・一夏自身の気持ちを、そろそろハッキリさせた方が良く思うから。

「そろそろ、一夏は答えを出すべきだと思うよ」

「答え？」

「うん、君は何を思っこの場所での夕食を選んだのか、僕は知らない。ただどね、一夏・・・君は何も知らずに、知らないが故に傷つけてしまう」

「き、傷つけるって・・・誰を？」

「それは・・・弾、蘭、こっちにきて」

キラが弾と蘭、二人を呼んだ。呼ばれた二人は何事なのかと首を

傾げながらも、敵に許可を貰ってキラ達の席まで来る。

様子を厨房から窺っている敵と、カウンターで窺っている蓮の表情は、真剣だった。恐らくはキラの意図を察したのだろう。そしてこれは孫の、娘のこれからの人生において、とても大切な事なのだと察して、何も言わずにキラへ視線だけで宜しくと頷いた。

周りの客も、全員理解したのか食べ終えた者は勘定を済ませて店を出て、食べ終えてない客も急いで食べ始める。

「さてと、一夏と篝・・・本当はこの場にラウラと鈴も居たら良かったんだけど、賢沢は言わない。今、やらないといけないのは一夏の考え方を変える事だから」

「俺の考えを？」

「そう、弾・・・弾から見て、一夏が今日、ここに来た事を如何思う？」

キラに問い掛けられ、弾は真剣な話なのだと思います。いつもの様は態度を仕舞って、真剣な表情でキラとラクス、それから一夏と篝の順に視線を向けた。

「正直な話、キラとラクスと一夏だけならまあ・・・文句は無かった。キラとラクスが付き合ってるってのは知ってるし、蘭もそれは知ってる。だからそれなら良かったさ。だけど、彼女・・・篠ノ之さんを悪く言うつもりは無いけど、彼女を連れて来た事は・・・正直、一夏をぶん殴りたいくらい怒ってるぜ」

「だ、弾・・・何を」

「一夏、黙っててくれ・・・正直な、今まで言わなかったけど、俺はお前のそういう所は嫌いなんだ」

ショックを受けた一夏だったが、やはり弾が何を怒っているのか、理解していなかった。

「箒、箒はこの店で食事をするって一夏が決めた時、如何思った？」
「わ、私は・・・その・・・正直、嫌だった。この店の料理は凄く美味しいし、また来たいと思うけど、正直に言うなら・・・今日は、この店に来たくなかったな」
「箒・・・」

箒まで何を言っているのかと、一夏は視線を向けたのだが、箒はチラッと一夏の方に視線を向け、直ぐに俯く。

「さて、此処からが重要ですよ。蘭さん、貴女は箒さんがこの店に来て、如何思われました？」

「え、と・・・、嫌、でした」

「蘭まで・・・」

「一夏、誤解はしないでね。弾も蘭も、箒が嫌いだから言ってるんじゃないから」

「だったら何なんだよ！ さっきからキラの言いたい事、全然解らねえよ！！」

何が何だか、もう解らなくなった一夏が立ち上がって叫んだ。だが、キラもラクスも、それを見ながら冷静に座る様諭すと、先ほどから立ちっぱなしの弾と蘭にも座る様に言う。

「一夏さん、何故・・・蘭さんが箒さんがこの店に来た事を嫌だと言ったのか、箒さんが何故、この店に来るのは本当は嫌だったと言ったのか、考えてみてください」

「そんな事、言われても・・・」

「言い方を変えようか、一夏・・・例えば僕の事が好きだって女の子が居るとする。ラクスも、その子が僕の事が好きだって事を知っているとするよ。僕とラクスがデートの帰りに外食して帰ろうと思

つて、僕はその女の子がアルバイトをしているレストランに、その女の子がシフトに入っている時間なのにも関わらず行ったら、ラクスは如何思つか、解る？」

「それは・・・」

いくら鈍感な一夏にだって、それは解る。

「ラクスとしては、嫌だろうな・・・だって、自分の彼氏の事が好きだって女の子がバイトしてる店に、しかもその女の子がシフトに入ってる時間に一緒に行くなんて、ラクスとしたら面白くないだろ」

「はい、私だって嫉妬くらいしますから、そんな事になれば当然、嫌だと思います」

「じゃあ、今度は一夏、今回の場合に置き換えてみようか？」

「いや、だって簿は俺の彼女じゃねえし、蘭だって、別に俺の事が好きとは限らないだろ？」

これだ。何故、自分の事になるとここまで鈍感になれるのか、寧ろ蘭が可哀想で可哀想で、蘭など今にも泣きそうな顔になっている。

「はぁ・・・ねえ、何でそう思うの？　じゃあ、今度は弾の場合に置き換えるよ？　弾、もし虚さんの事が好きって男の子が他にも居て、弾と虚さんが休日と一緒に出かけたとする、それで夕食に虚さんが行きたいと言った店にはその男の子がアルバイトをしていて、丁度シフトに入ってる。弾なら、如何思う？」

「・・・嫌だな。この際だから誤魔化しもしねえけど、俺は虚さんに惹かれてるから、もしデートに誘えて、それで晩飯に誘って行った店にそんな男がいるなら、俺は嫌だぜ」

「ありがとう、弾。それで一夏、これを今回の場合に置き換えたら如何？　弾は別に虚さんとは付き合っていないよ」

これでもまだ解らないなら、一夏は救いようが無いと思う。が、
漸く一夏も何となくだが理解してきたみたいだ。

「まさか・・・え、でも・・・俺、何も聞いてないし」

「何も聞いてないのに誰が一夏が好きなんて、判らないと思うよ」

後は蘭と箒次第だ。ラクスが箒を促す前に弾が蘭を促した。

「兄い・・・」

「言うなら、今しか無いぜ。折角、キラがこんな場を作ってくれて、
この馬鹿もやつと気付き始めたんだからよ」

「・・・わかった。一夏さん！」

「お、おう・・・」

「わ、わた、私・・・その、い、いい、い、一夏さんの事が・・・
す、好き、です・・・」

「っ！」

ラクスは蘭が先に告白をしたので、箒は後にするべきだと思い、
箒にプライベートチャネルを開くと、学園に戻ってから、ラウラと
鈴音を交えて、改めてするべきだと伝えた。

箒も最初は渋っていたが、確かにラウラと鈴音の事も考えれば、
その方が良くと考え、学園にはまだ入れない蘭に、この場を譲る事
に。

「お、俺は・・・その、今まで蘭の事、そんな対象として見た事、
無かったんだよな。親友の妹、だからさ。だから俺にとって蘭は妹
分みたいな感じで」

「っ」

「それに・・・」

それに、何と言おうとしたのかは判らないが、そこで一夏の言葉が止まった。

「（それに・・・俺は、如何なんだ？ 俺は・・・誰かの事、好きなのか？ そんな事、今まで考えた事も無かったけど・・・）」

チラツと、箒の方に視線を向けた。

俯いているので表情は判らないが、何となく昼間の事を思い出して、その時に感じた事を、その時の箒に対して思った事を、思い出す。それから、ラウラ、鈴音と二人の顔を思い出し、二人とのこれまでの事を思い返して、やっと気が付く。

「（ああ、そうか・・・俺、好きになってたんだ。今までそんな事、考えた事も無かったのに。でも、気が付いたら好きになってたんだな・・・）・・・ごめん、蘭・・・俺、蘭の気持ちに伝えられない」「っ!?!? それって・・・」

蘭の目尻に、涙が浮かび、本当に泣きそうな顔になって、改めて気付かされた。蘭は、ここまで一夏のことを想ってくれていた。好きでいてくれたんだという事を。

「本当に、ごめん・・・今、気付いたんだ。蘭の事も、本当に申し訳ないことをしたと思う、殴られても文句言えないよな・・・でも、俺は、好きな女の子がいるんだ。好きだって、気付いたんだ・・・その子の事が好きだって」

「っ・・・そ、う・・・ですか・・・。あ、あはは・・・ふ、ふられ、ちゃったあ・・・うぐっ、っ!」

ポロポロと蘭の瞳から涙が流れる。ラクスは立ち上がって蘭を抱きしめると、堪えきれなくなった蘭がラクスの胸の中で泣き始めた。

もう店に客は誰も残っていないので、盛大に、大声で。

「クラインさん、でしたっけ？ 換わりますよ」

「はい……さ、蘭さん」

蓮がラクスに近づいてきて泣き続ける蘭を受け取り、自分の胸に抱きしめる。こういうときは母に抱きしめてもらって泣くのが一番なのだ。

「弾……」

「何だ、一夏」

「お前にも、色々と謝る。お前にとって、蘭は大事な妹なんだもん
な……」

「……ああ、そうだな。だから」

そう言つて、弾は一夏の胸倉を掴んで立ち上がらせると、思いっきり殴り飛ばした。殴られて店の床を転がる一夏は、黙って俯くと、もう一度だけ謝る。

「一夏……大丈夫か？」

「筈……ああ、ごめん。今は、近づかないでくれないか？ 今、筈に近づかれると、蘭にも、弾にも、五反田家に申し訳ないから」

「あ、ああ……」

筈は蓮の胸で泣き続ける蘭を見て、一夏に近寄るのを止めると席に座りなおす。

「一夏、今のは蘭を泣かせた分と、今まで蘭の気持ちに気付かなかつた分だからな」

「ああ」

殴られ、腫れた頬をそのままに、一夏は床に座り込んで俯いたまま、一筋だけの涙を流す。それは、今まで蘭の事を気付けなかった事を思い出して、その自分の不甲斐なさと、蘭を泣かせる結果となった今の自分の惨めさの表れだった。

第六十五話 「涙」(後書き)

次回は五反田食堂から帰ります。まあ、一夏も色々考える事が多々ありますね。

第六十六話 「人を好きになる事」 (前書き)

ついに一夏が男を見せました。

第六十六話 「人を好きになる事」

ISS(インフィニット・ストラトス)
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十六話

「人を好きになる事」

弾に殴り飛ばされ、床に座り込みながら涙を流した一夏、そんな彼に近づく者がいた。

やっと泣き止んだ蘭が、一夏に歩み寄り、視線を合わせる様にしがみ込んで一夏の顔を覗き込む。

「蘭……」

「一夏さん、ごめんなさい」

「え……っ！」

パン！ と乾いた音が響いた。蘭が一夏の頬を引っ叩いた音だ。

「私をつつた事、今までの事、これで許します。だから、一夏さんは一夏さんで、頑張ってください」

「蘭……」

「好きな人がいるんですよね？ 私をつつたんですから、絶対にその人を振り向かせてください」

「……ああ」

やっと立ち上がった一夏は、改めて蘭に頷き返すと、弾の方を向く。

「弾も、ごめん。色々と迷惑を掛けて・・・それと、サンキュウな」
「へん！ 妹を泣かせたんだからな、お前はお前で確りと変われよ！ それと、ちゃんと告白したら連絡跨越せ」
「勿論だ」

一夏と弾は拳をぶつけ合い、お互いにニツと笑った。
そんな二人の様子にキラもラクスも箒も、それに蘭や蔵、蓮も安心した様に笑い、キラ達四人は五反田食堂を後にする。

学園に帰る途中、一夏はキラを呼び止め、全員その場で足を止めると、一夏の方を振り向いた。

「キラにも、礼を言うよ。サンキュウな・・・キラのお蔭で俺が蘭を、箒を傷つけていた事に気付けた」

「そう・・・それで、一夏の中で答えは出た？」

「ああ、だから・・・箒、明日・・・昼休みに屋上へ来てくれ。ラウラと鈴も連れて」

「・・・わかった」

恐らく、明日の昼休みに、一夏は決めるのだろう。タッグマッチのパートナーを、そして・・・自身の内に芽生えた恋心に対する決意を。

「一夏さん、今・・・凄く良いお顔ですわ」

「うん、凄く力強い瞳をしてる」

「そ、そうか？ それなら・・・嬉しいかな」

成長した証だ。一人の女の子の告白を受け、それを断る事で泣かせてしまったが、一夏の中で何かが大きく成長したのだろう。

「さ、早く帰ろう。もう随分と暗くなっただからね」

「はい」

「だな」

「うむ」

こうして、波乱の休日は終わりを迎えた。

学園に帰った後、一夏は翌日の放課後にラウラや鈴音たちを呼んで答えを出すと宣言して、同時にその時にタッグマッチのパートナーも決めると言っていた。その時の一夏の瞳は、確固たる決意を固めた漢の瞳だったのは、言うまでも無い。

翌日の放課後、一夏は篤と鈴音、ラウラを屋上に呼び出した。理由は勿論、昨夜の事とタッグマッチのパートナーの事、そして……一夏の気持ち。

「それで一夏、決めたんでしょうね？」

鈴音の問いに、一夏は無言で頷いた。つまりは肯定、三人に緊張が走る中、一夏は先ず昨夜の五反田食堂での事を鈴音とラウラに話す。

二人は黙って聞いていたが、蘭をフツたという所で喰い付いてきた。一夏の好きな人、それが誰なのか、もしかしたら自分なのかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、続きを促すのだ。

「俺は、今からパートナーになって欲しい奴の名前を言う……それが、俺の好きな人だ。だから、告白も込めて、言おうと思う……だけど、その前に聞かせて欲しいんだ。三人の、気持ち……もし、もしも俺に向けているのなら、聞かせて欲しい」

一夏の言葉、それはもし、彼女たちが一夏の事が好きなのだとし

たら、教えて欲しいという事、自分から伝えたいと思う。だけど、一夏はあえて言っていて欲しいと思ったのだ。残酷かもしれないけど、もし三人とも一夏の事が好きだとしたら、その中から一人を選ぶ。それはつまり、他の二人を選ばないという事。

だから、せめて失恋してしまいう前に、気持ちを伝える時間をも思っ
つて、先に言っていて欲しかったのだ。

「わ、私は・・・一夏、私は一夏の事が、好き・・・だ・・・ずっと、幼い頃から、一夏の事を想って来た」

「あ、あたしも一夏、アンタの事が好き・・・箒より後に出会ったあたしだけど、でも箒に負けたくないくらい、一夏の事が好きよ」

「私もだ。二人に負けたくないくらい一夏の事が好きだ・・・お前を嫁にする、その決意は今も変わらない」

三人とも、顔を真っ赤にしながらも、自分の気持ちを一夏に伝えた。だから一夏も、その三人の想いに敬意を表し、自分の偽らざる気持ちを、素直に伝える。

「俺は・・・」

タッグマッチのパートナーとして、これからの人生を共に歩むパートナーとして、一夏が漸く気付いた思い人、それは・・・唯一人。

「箒、俺は・・・お前が好きだ・・・だから、俺の、パートナーになっ
てくれ」

篠ノ之箒、一夏の幼馴染・・・そして、やっと気付く事が出来た一夏の心を占める唯一人の女の子だ。

「っ！ わ、私を・・・一夏の、パートナーに・・・？ ほ、本当

に、私を・・・？」

「ああ、俺は箒が好きだ。ずっと気付かなかった・・・だけどキラのお蔭で、俺は自分の気持ちに漸く気付く事が出来たんだ。俺は、箒を愛してる」

真つ直ぐ、箒の目を見つめて、自分の気持ちを伝えた。嘘偽り無い一夏の本当の気持ち、誰も否定する事は許されない、大切な気持ちだ。

「・・・そつか、箒を、選んだかあ」

「・・・私は、一夏に選ばれなかったのだな・・・」

「・・・鈴、ラウラ・・・ありがとう。こんな俺なんかを好きになつてくれて・・・それと」

「ストップ」

ごめん、そう言おうとした所で鈴音が止めた。

「ごめんなんて言わないで、あたしやラウラの為を思ってくれてくれるのなら・・・お願い、謝らないでちょうだい」

「ああ、そうだ。謝れば一夏、お前は私と鈴を侮辱している事になる・・・だから、その先は言うな」

「・・・わかった」

何となく、一夏も理解出来た。だから、ごめんという言葉を引き込め、改めてお礼を言う。こんな自分を、好きになってくれた事、想ってくれた事を。

「辛気臭い顔すんじゃないわよ一夏、箒、確かにあたしもラウラも失恋したわけだけど、別にあたし達が親友である事に変わりはないじゃないの」

「私も鈴も、二人の友だ。それは変わるつもりも無いし、拒否も許さんぞ？」

「鈴・・・ラウラ・・・ああ、そうだ。俺達はどんな形になっても友達だ」

「うむ・・・その通りだ。私も、二人の友達だ」

例え、鈴音とラウラが一夏にふられても、これまで築いてきた友情は変わらない。共に戦ってきた記憶や、絆は不変のものなのだから。

「あゝあ・・・しゃあない。セシリアでもパートナーにしてきますかね、あたしは」

「む、私もセシリアを狙っていたのだがな・・・」

「ほほう？　なら、どっちが先にセシリアをパートナーにするか、競争しようじゃないの」

「望む所だ!!」

鈴音とラウラは、一夏と筈に目もくれず、振り返る事無く屋上を出て行った。ただ、筈には二人が振り返る際に涙を流していた事に気づき、心の中で礼を捧げる。

「さてと、それで筈・・・改めて、俺のパートナーになってくれますか？　そして、俺と付き合ってくださいますか？」

「・・・勿論だ。ずっと、この日を待ち侘びていたのだから」

二人はお互いに見つめ合い、やがて二人の影は一つになる。白と紅が一つになり、騎士が咲かせる椿の花は・・・静かに花卉を開かせるのだった。

第六十六話 「人を好きになる事」 (後書き)

次回は失恋したラウラと鈴、それを慰めるセシリアとシャルのお話と、一夏と箒が恋人になったことを伝えるに行きます…シスコンの姉とブラコンの姉に。

第六十七話 「失恋と成長、恐怖のダブルお姉ちゃん」(前書き)

失恋した鈴とラウラのお話と…ガクガクブルブル。

第六十七話 「失恋と成長、恐怖のダブルお姉ちゃん」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十七話

「失恋と成長、恐怖のダブルお姉ちゃん」

一夏にふられた鈴音とラウラは二人揃ってセシリアの所に向うはずだった。しかし、途中でラウラがセシリアの所には行かないと言い出したのだ。

「如何したのよ？」

「セシリアのパートナーにはお前がなれ・・・私は布仏と組む」

「良いの？」

「ああ・・・まあ、その前に私はシャルロットのところに行つて来る」

「・・・あゝ、なるほど」

何を言いたいのか理解出来た。鈴音も丁度セシリアの所でやろうと思っていた事で、ラウラはセシリアではなくシャルロットにやつてもらおうと思ったのだらう。

「そう言えば、アンタはシャルロットのルームメイトだもんね」
「うむ」

という事で、鈴音はラウラと別れるとセシリアの部屋に向った。セシリアのルームメイトは丁度出掛けているらしく、セシリア一人だったので丁度良い。中に入れてもらった鈴音は紅茶を一口。

「それで、如何されましたの？」

「うーん、まあ・・・セシリア、パートナーは決まってるのよね？」

「ええ、鈴さんは・・・ああ、なるほど」

「あはは、気づかれるわよねえ。そういう事、ついでにふられたからさ、パートナー、なってるくない？」

鈴の言葉を聞いて、セシリアは何を思ったのか突然、鈴音を抱き寄せて、豊満なその胸に鈴音の頭を抱きしめ押し付けた。

「せ、セシリア・・・？」

「パートナー、なって差し上げますわ。ですから、もう良いのですよ・・・お泣きになってください」

「・・・っ」

「その為に、来たのでしょうか？ でしたら、友人として、ちゃんと受け止めて差し上げますよ」

「・・・っ、う・・・せ、せしりあ・・・」

セシリアの胸に顔を埋めて泣き出した鈴音を、優しく抱きしめて、頭を撫でるセシリア。その表情は慈愛に満ちており、何処か母親を思わせる顔だったのだが、それを知る者は居なかった。

鈴音と別れたラウラはメールで本音にパートナーになって欲しい旨を伝えると、了承を貰えたので、足早に部屋に戻ってきた。

部屋ではシャルロットがベッドの上で紅茶片手に本を読んでいた。丁度良いとラウラはシャルロットの隣に座ると、その細い腰に抱きつく。

「ラウラ・・・如何したの？」

「うむ・・・その」

「もしかして、一夏の事？」

「っ」

「・・・そっか」

本をサイドテーブルに置いたシャルロットは膝の上にラウラの頭を置いて、その頭を優しく撫でながら続きを促す。

「一夏は、箒を選んだ・・・私は、失恋というものを、したらしい」
「うん」

「初めてのことばかりだ・・・人を好きになるのも、告白するのも・・・ふられるのも」

「うん」

「こんなに・・・辛い、のだな・・・っ」

「そうだね」

ラウラの頭を撫でながら、シャルロットは相槌を打つ。この場合、ラウラの言いたい事を全て言わせた方が良くと理解しているし、その方がラウラの為でもあるから。

「い、ちかを・・・私、嫁に・・・っ、でき・・・なかった」

「うん・・・」

「私が、駄目だった、のか・・・？ 私が、失敗作、だから・・・」
「それは違うよラウラ・・・一夏はラウラが駄目だったなんて思っていない。失敗作なんて思っていないよ・・・ただ、一夏の気持ちを掴んだのが筈だったっただけだから・・・ラウラは何も悪くない」
「っ・・・な、なんだ・・・私は、悪くないの、か・・・っ」

それ以上、言葉は出てこなかった。ただ、シャルロットの膝に顔

を埋めて、声押し殺して泣いている。

「一杯、泣いて・・・ラウラは初めての恋をして、初めての失恋をしたけど、きつと・・・ラウラなら、新しい恋が出来るから・・・だから今は、いっぱい泣こうね？」
「・・・っ・・・っ・・・！」

今日は、一緒のベッドで寝てあげよう、それから、いっぱい抱きしめて、せめてラウラの為に・・・一晩限りの姉か、母親になろう。そう決めて、ラウラが泣き止むまでずっと、頭を撫で続けるのだった。

一夏と箒は、屋上でのキスからずっと、お互いに顔を赤くして、実に初々しいカップルっぷりを周囲に誰も居ないのを良い事に曝していた。

どちらからともなく手を握り、寮に向って歩いていたのだが、もう少して寮だという所で一夏が足を止め、何かを考える素振りを見せる。

「一夏？」

「ん？ ああ・・・そのな、箒と俺・・・その、恋人、じゃん？」

「あ、う・・・うん」

「だからさ・・・千冬姉と束さんに、報告した方が良いと思って」

一夏の言いたい事は理解出来た。確かにブラコンの千冬とシスコンの束には、その弟と妹である二人が恋仲になった事を報告する義務がある。

特に、箒は臨海学校の時に千冬から一夏が欲しければ奪ってみろと言われているのだから、余計に。

「今日は東さんは？」
「ブリリアントフリーダム^①の調査は今日は休みだと言っていた。千冬さんの部屋で飲むとも……」
「そっか、ならこのまま千冬姉の部屋に行こうぜ。そして、二人にちゃんと報告しないと」
「う、うむ」

職員室に千冬が居なかったのは確認済み、つまり既に自室に戻っているという事だ。

一夏も箒も、極度の緊張に包まれながら千冬の部屋を目指す。何故だか千冬の部屋が近づいてくるにつれてひしひしと重圧が重苦しフレッシャーく感じられるのは、出来れば気のせいだと思いたい。

「ほ、箒……大丈夫か？ 何か、顔色が悪いけど……」
「あ、え……う、む……だ、大丈夫……だぞ？」
「いや、聞かれてもな……」

箒の顔色が青を通り越して真っ白……所か紫になりそうな勢いで悪くなっている。身体も全身に冷や汗を流し、ガタガタと震えが止まらない。

まるで死刑執行直前の死刑囚みたいな様子に、何となく心情が理解出来る一夏だったが、出来れば一夏も同じ反応をしたところだった。ただど惚れた女の手前、そんな情けない真似は出来ないと無理やり恐怖を押し込めているのだ。

「つ、着いたぞ……千冬姉の部屋」
「……（真っ青）」

何故だろう。千冬の部屋の扉が、見えない重圧で空間が歪んでいフレッシャー

る様に見えるのは……。

だが、ここでこうしていても仕方が無い。意を決してノックをすると、中から千冬の声が聞こえて、入れと言ってきた。

「し、失礼します」

「失礼しましゅ!？」

噛んだ箸は可哀想なのでスルーしてあげて、中に入ると丁度、千冬と束がビールの缶を開けて何処で買ってきたのかマグロの刺身を食べていた。

「ん？ 如何した一夏、箸、随分と面白い顔をしているな」

「おやおやく？ 箸ちゃんといっくん、もしかして何かあったのかなあ？」

座れと言われたので、箸と二人、ソファアに座ると、向かい側にビールとマグロを持って千冬と束が腰掛ける。

「その、話があつて……」

「ふむ……それは、今貴様等が手を繋いでいることと関係があるのか？」

「「っ!」「」

忘れていた。今、一夏と箸は手を繋いだままだったのだ。

「にははは! いっくんも箸ちゃんも仲良いね〜! キー君とラーちゃんみたい!」

「ふむ、まあ良い……話せ」

話せ、その言葉は非常に低い声で発せられた。その瞬間、部屋全

体に重苦しい空気が漂い、体感温度が急激に低くなった気がする。

「その、俺と篝・・・付き合う事になった」

「あの・・・今日、屋上で」

屋上でのことを全て話すと、千冬は目を瞑って何を考えているのか判らなくなり、束は相も変わらずニコニコと・・・していなかった。

「そうか・・・一夏が篝と、な」

「へえ・・・そうなんだあ」

目を開けた千冬の鋭い視線が二人を射抜き、束の真剣な表情が更に部屋の空気を重くした。

「いつくん・・・篝ちゃんの事、本当に好き？ 他の女の子をふつて、それで篝ちゃんを選んだ・・・そうだよな？」

「はい・・・」

「篝ちゃんは？ 束さんとしても篝ちゃんの旦那はいつくんが良いとは思ってたけど、流石にちゃんとお互いに真剣でないと許さないよ？」

「本気です！ 私は一夏が好き・・・子供の頃から、ずっと・・・離れ離れになつてからもずっと！」

「俺も、キラのお蔭で気付いたんです。篝が、隣に居てくれるだけで俺は心強かった。再会してからずっと、俺は篝に支えられていたんだって気付いたんです。篝じゃないと駄目だ、これからもずっと俺の隣に居て欲しいのは篝なんだって、気付いたんです」

それを聞いて、束はいつもの笑顔に戻った。それは、束は認めてくれたという証だ。

そして、一番の問題である千冬はというと・・・まだ中身が入っていたビールの缶を、握り潰していた。

「ひいっ!?!」

「箒・・・私は前に言った筈だな？ この馬鹿が欲しければ、奪えるだけ女を磨けと」

「は、はい・・・!」

「・・・お前は、私から一夏を奪うだけの気概があるのか？」

「・・・っ、あり、ます・・・!」

千冬の眼光に怯みながら、それでも力強い瞳で千冬を真つ直ぐ見つめる箒は・・・確かに、イイ女だと言えるだけの魅力を感じさせる。

「明日の放課後、第三アリーナに来い」

「・・・え？ あの」

「一夏と付き合う事を私に認めさせたいのなら、私に見せてみる・・・篠ノ之箒という一人の女を」

待機状態の暮桜・真打を見せる千冬の真意を悟り、箒は手首に巻いた待機状態の紅椿に視線を落とした。つまり、明日の放課後、第三アリーナで千冬と戦えという事だ。

「ちーちゃん・・・」

「東、今回はかりは黙っている。これは一夏の姉として、一夏の保護者としての私の問題だ。その私から一夏を奪うというこの小娘に、壁を見せてやらねばならないのだ」

「・・・試練、そういう事？」

「ああ」

だが、無茶だ。キラとクルーゼを除けば世界最強の千冬に、未だ
発展途上の箒では勝ち目など無い。

「千冬姉！　いくらなんでも箒と千冬姉じゃ・・・」

「お前も黙っている一夏、これは私と箒の問題だ」

「っ！？　・・・箒、大丈夫なのか？」

「・・・ああ、正直・・・凄く怖いけど、でも！」

女として、一夏の恋人として、箒は此処で逃げる訳にはいかない。
だから・・・。

「受けて立ちます！　私は、一夏の恋人として、必ず千冬さんに、
私という存在の全てを認めてもらう！」

「よく吼えたな小娘！」

世界最強と、大天才の妹の戦いが、行われようとしていた。

明日の放課後、第三アリーナで、一人の男を巡る壮絶な戦いが始
まる。ずっと守ってきた大切な弟、ずっと好きだった初恋にして恋
人の幼馴染、そのお互いの気持ち、火花を散らすのだった。

第六十七話 「失恋と成長、恐怖のダブルお姉ちゃん」(後書き)

次回は… 篇VS千冬、熾烈な嫁姑戦争勃発です。

第六十八話 「桜と椿」 (前書き)

始まります。世界最強VS大天才の妹

第六十八話 「桜と椿」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十八話

「桜と椿」

一夏の恋人となった箒だったが、彼の姉である千冬に認めてもらう為に模擬戦をする事になってしまった。

正直な話、箒に勝ち目は万に一つも無い。今尚、最強の代名詞とも言われるブリュンヒルデ、織斑千冬を相手に、まだまだ学生で、ISを動かす様になって数ヶ月の箒がでは年季も経験も、技術も、何もかもが違いすぎるのだから。

「それで、僕の所に？」

「ああ、放課後まで時間が無い。だから千冬さんより強いキラなら何か良いアイデアが無いかと思ったのだが・・・」

そこで、箒はキラに何かアドバイスを貰えればと思い、キラの所に来た。

現在は朝のHR前で、放課後までまだそれなりに時間がある。だからこそ、放課後までに何かキラに教えてもらえればと思ったのだ。

「確か、千冬さんと箒は同じ剣を使うよね？」

「うむ、篠ノ之流剣術だ」

「なら、千冬さんが使う技は当然だけど箒もよく知っている筈。それはつまり、対処法も知っているという事になる」

「それは・・・まあ」

千冬と箒、一夏の三人の剣は共通して篠ノ之流だ。だから三人とも剣筋は同じだし、使える技も篠ノ之流のもの。

特に箒は小学校からずっと剣道をしてきたので、当然だが実家が教えている篠ノ之流を鍛えてきたはずだ。実力こそ千冬には劣るものの、技という点では箒ほど熟知している者はいない。

「今回の場合、経験や技術といった面では完全に千冬さんが上。だから箒はその他のもので勝負するしかないかな」

「その他のもの・・・？」

「そう、付け焼刃になるとは思うけど、篠ノ之流の知識、これが勝敗を分けるポイントになる」

機体の性能差はほぼ互角、技術と経験では千冬が上なのだから、残るは技の知識のみ。勿論、千冬とて篠ノ之流の技の知識はある。

しかし、篠ノ之家が引越してからは殆ど独学で学んだ筈なので、箒の方が知識の面では上回っているのだ。

「千冬さんが使う技、その全てに対処出来るだけの知識が、箒にはある。それを生かして戦う事が一番大事だよ」
「なるほど・・・」

しかし、一番のネックは暮桜・真打ワンオフアビリティーの単一仕様能力と紅椿ワンオフアビリティーの単一仕様能力の相性の悪さだろう。

絢爛・零落白夜はエネルギーを完全回復した上でのバリアー無効化攻撃なのに対して、絢爛舞踏はエネルギー完全回復のみ、紅椿の方が不利なのだ。

「まあ、でも勝ち目という点では紅椿にもある」

「本当か!？」

「暮桜・真打は白式や紅椿よりも燃費が悪いから。絢爛・零落白夜も一度使えば次に使うまで少し時間が掛かる。そこを狙えば良い」

元々、暮桜・真打は白式と紅椿のプロトタイプだ。当然だが燃費の悪さは二機以上、それを補うのが絢爛・零落白夜でもある。

「まあ、如何に戦うか、それが一番大事だよ」

「そうだな・・・何とか、やってみる。一夏の恋人になったんだ、下手な戦いは絶対にしない」

此処最近、急激に強くなっていく一夏に置いていかれない為にも、一夏のパートナーとして相応しい女になる為にも、此処で無様な戦いは出来ない。

千冬に勝てるとは言わない。だけど、勝てないまでも千冬に認められる戦いをする為に、箒は放課後までの時間、全てを費やして戦略を練り続けるだった。

遂に放課後になってしまった。

現在、キラとラクス、それから一夏はピットで紅椿の最終調整をしている箒の所に来ていて、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、楯無はアリーナの観客席に居る。

箒の対戦相手である千冬は、反対側のピットで東に暮桜・真打の調整をしてもらっている所だ。

「箒・・・大丈夫か？」

「う、うむ・・・大丈夫、だと・・・いいなあ」

模擬戦を目前にして、箒は緊張がピークにまで達していた。まだピット内に居るというのに、何故だか千冬の殺気が感じられる気が

して、身体の震えが止まらない。

「箒、対策は大丈夫？」

「ああ、凡そはな」

同じ篠ノ之流剣術同士、一刀流と二刀流の違いはあれど、幼い頃から習ってきた流派の技を、箒が対策出来ない筈が無い。勿論、それは千冬にとっても同じなのだが、流派の知識という点では間違はなく箒が上、それが如何に勝敗を左右するのか。

「よし、調整完了・・・」

調整が終わり、ラクスが管制室に向ったので、紅椿を纏った箒はカタパルトに接続する。

「箒！」

「一夏・・・」

「頑張れ」

「・・・ああ！」

一夏の声援を受けて、箒の身体から緊張が抜け落ちた。リラックスした表情で少しだけ瞑想をすると、目を開いて真っ直ぐアリーナへ続く道を見つめる。

『カタパルトオンライン、進路クリアー、紅椿、発進どうぞ！』

ラクスの声がピット内に響いた。同時にカタパルトに電力が流され、後は発進するのみ。

「篠ノ之箒、紅椿！ 行くぞー！！」

カタパルトが発進して、紅椿はアリーナに飛び出した。

既に千冬が駆る暮桜・真打はアリーナ中央の空中で制止しており、箒を待っていた。目を閉じ、神経を集中して、箒がアリーナに出てきた所で全ての神経を箒に向けている。

「……千冬さん」

「……来たか、小娘」

箒が声を掛けると、千冬も目を開いて雪片・壱型を構えながら殺気を放つ。

「逃げずに来た事は、褒めてやろう。だが、それだけでは一夏との関係を、認める訳にはいかん」

「……はい」

「この試合で、見せて貰うぞ。篠ノ之箒という一人の女が、私……織斑千冬という織斑一夏の姉から弟を奪えるだけの女なのかという事を」

「……はい！」

雨月と空裂を構えた箒は、雪片・壱型を構える千冬を見据えて、試合開始の合図を待つ。

【試合、開始】

開始の合図と共に、千冬と箒はスラスタを全開にしながら一気に近づいて剣を交えた。雪片・壱型と空裂がぶつかり、火花を散らす。雨月が横から迫るのを確認した千冬は雪片・壱型を軸に側転をする要領で回転して避けると、その勢いそのまま回し蹴りを叩き込んだ。

「グッ…！ はあ…！」

回し蹴り自体はそんなにダメージとしては大きくないので、気にするまでも無い。なので空裂で回し蹴りに使った足を狙って切りつけるのだが、その程度のダメージなど気にしないと云わんばかりに千冬が足で空裂を弾いてきた。

だが、それで怯むほど篤は軟ではない、雨月による連撃へと繋いで千冬の胴体を横薙ぎに切り裂くと、暮桜・真打のシールドエネルギーが大きく削られる。

「ほう？ やるな小娘・・・だが、まだまだ甘い…！」

一瞬、千冬の姿が消えた。だが次の瞬間、千冬の姿が四つに増えて四方から切りかかってくる。

「テンベストレーザー攪乱加速・・・！ グッ!?」

千冬の分身、二つまでなら二刀流の篤でも対処出来た。だが、残る二つの分身・・・一方は本物なのだが、は流石に対処し切れず、斬撃を受けてしまった。

「なら…！」

少し距離を取って空裂のレーザー斬撃を放つのだが、避けられる。しかし、それは想定済みで、雨月からのレーザーを続けて放つと、千冬も避けるだけではなく雪片・壱型の展開装甲をオープンして展開されたレーザーの刃で弾くなどの行動もしていた。

「今だ！」

紅椿の展開装甲の一部を切り離してビットとして射出した。二つのビットがレーザーの刃を纏って暮桜・真打に迫る。

「ふん！」

箒の狙いはビットで少しでも千冬の意識が逸れる事だったのだが、甘かった。千冬はビットなど無視して真っ直ぐ箒に向って瞬間加速イグニッションブーストで接近して、雪片・壺型を構えると、いつかの一夏とラウラの戦いで一夏が使った技と同じ構えに入った。

「見せてやろう。私が一夏に教えた技だ・・・あの馬鹿はまだまだ未熟だが、私のこれと同じと思うな！！！」

低い体勢で下段から抜刀の要領で一気に振り上げる技、これこそ篠ノ之流剣術の一つ、霜月だ。別名は下月、下段から刀を振り上げ三日月の様な軌道を描きながら切り裂く斬撃特化、相手を切り裂く事にのみ特化した技でもある。

「なら！」

千冬が霜月を使うというのなら、箒はその対処法を取るまで。霜月に対抗出切る技は一つ、霜月の対の技として教えられている上段からの斬撃特化技だ。

雨月を一度消して、空裂を上段に構えると、全力でもって振り下ろす。ただそれだけのものなのだが、篠ノ之流ではこれも一つの技として扱っているのだ。シンプルであるが故に必殺、その一撃こそ霜月と対を成す上段からの斬撃、卯月。

「はあああああ！！！！！！」

霜月と卯月、雪片・壱型と空裂がぶつかって、激しい衝撃破と火花を放つ。

千冬と箒という同門同士の戦いは、今始まったと言えるだろう。弟を、恋人を賭けた女と女の意地のぶつかり合いは、激しさを増していく。

第六十八話 「桜と椿」 (後書き)

次回は戦いの決着、筭ははたして…？

第六十九話 「姉の役目が終わる時」 (前書き)

決着です。

第六十九話 「姉の役目が終わる時」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第六十九話

「姉の役目が終わる時」

一夏を賭けた千冬と箒の戦いは激戦となっていた。この誰もが予想していなかった試合展開に、言葉を発せる者は居らず、呆然としている者ばかりだ。

方や世界最強の座に君臨していたブリュンヒルデの千冬、方やISを生み出した大天才の妹でしかない発展途上の箒、試合の結果など火を見るより明らかかな筈だったのに、箒は千冬を相手に押されながらも善戦している。

「はあああああ!!!」

「剣筋が甘い!」

二刀による手数で勝負をする箒に対して、一刀のみの千冬は余裕で捌いているのだが、はたして学生の何人が今の箒みたいに千冬相手に此処まで粘れるだろうか。

機体の性能だけではない。箒は千冬にも負けない気持ちがあるからこそ、此処まで戦えるのだと気付く者は事情を知る者以外だ何人いるのだろうか。

「そろそろ終わりにしてやろうか・・・」

千冬の呟きと共に、暮桜・真打の動きが止まった。それが何を意

味するのか理解した筈は同じく動きを止めて、紅椿に呼びかける。

【ワンオフアヒリテイー単一仕様能力：絢爛・零落白夜、発動】

【ワンオフアヒリテイー単一仕様能力：絢爛舞踏、発動】

暮桜・真打と紅椿が黄金の光に包まれ、これまでに消費したシールドエネルギーが全快する。両者とも、ワンオフアヒリテイー単一仕様能力を発動した証だ。

「うおおおおお!!!」

気合と共に、千冬がダブルイグニッションブースト二重瞬時加速に入った。今の千冬の攻撃は中れば不味い、バリアー無効化攻撃が含まれている今、中れば絢爛舞踏を発動している紅椿でも危険なのだ。

「はあああああ!!!」

だから、両手の刀を握り締め、イグニッションブースト瞬時加速に入る。迫り来る千冬の姿は殆ど見えない、だがこれまでの鍛錬で培った勘が千冬の気配を明確に捉え、持ち前の反射神経を生かしてクロスした雨月と空裂で雪片・壱型を受け止めた。

「くっ!」

「グウツ!」

力押しによる鏝迫り合いになったが、お互いにそんな事を長くしているつもりは一切無い。だから千冬は両手の力を抜いて、筈のバランスを崩し、回し蹴りから斬撃に繋げようとした。

しかし、それよりも早く筈が動いていた。剣筋をずらしながら回し蹴りを入れて、更に千冬の背後から射出していたビット二つで背

中を切りつける。

「があっ!?!? くっ・・・やるではないか、小娘」

「いえ、まだまだ行きます!」

「調子に乗るな!」

ダメージを与えた事でチャンスと見た箒がたたみ掛けようとするが、千冬が攪乱加速デシベトブーストを発動して分身した。

勿論、同じ手を何度も受けるほど箒も弱くは無い。両手の二刀と、二つのビットで四人に分身した千冬の攻撃全てを受け止めた・・・箒だった。

「きゃあああああ!?!」

だが、五人目の千冬のバリアー無効化攻撃の直撃を受けてしまい、紅椿のシールドエネルギーが残り63まで減らされてしまうのだ。

「ふん、中々粘っていたが、まだまだ貴様は弱い。その程度で一夏の隣で一夏を支え守るなど不可能だ」

今までは千冬が世界最強の肩書きと力でもって一夏を守ってきたのだ。そしてこれからも、どんどん危うくなっていく一夏の立場、存在、その全てを千冬は守る覚悟を持っている。

「貴様に、その覚悟があるのか? 箒」

「・・・あります」

「本当に覚悟があるのか? まだ小娘の貴様に、どれだけ大きな覚悟が必要なのか、理解など出来る筈も無いのに」

「あります! 私は、一夏の為なら世界だって敵に回す覚悟がある

！ 一夏の為なら姉さんが変えたこの世界ですら壊す覚悟が、私にはあります！！」

姉は己の為に世界を一度壊した。なら、妹の自分は愛しい男の為に世界を壊す覚悟を持つと、それが箒の誓いだ。

「なら、次の一撃にその想いの全てを込める・・・でなければ、貴様の想いごと私が紅椿というお前の力を、破壊する」
「っ！ 望む所です！」

雪片・壱型と、雨月が構えられた。

お互いに一刀の、技も何も無い、ただの一撃になるだろう。その一撃に、千冬も箒も、己が背負う覚悟、想い、誓いの全てを込める。

「はあああああああああ！！！！！！」

二人とも同時にイグニッションブースト瞬時加速に入り、上段から、下段から、己が魂である刀を振る。

二振りの刃は互いに交差して、雨月は暮桜・真打の胴体に入りシールドエネルギーを290まで減らし、雪片・壱型は紅椿の胸の装甲を切り裂いてシールドエネルギーを0にした。

【紅椿、シールドエネルギーエンプティー。勝者、織斑千冬】

試合は千冬の勝利だった。だが、千冬表情は勝者のそれではなく、何処か憑き物が落ちたと言わんばかりの微笑みが浮かんでいる。

「ふん・・・まあ、良いだろう」

「はあ、はあ、はあ・・・え？」

今の一撃で体力の殆どを使い果たしてしまった筈が、息を荒くする中、小さな声だが聞こえた言葉、その意味を問おうと顔を上げた時には、千冬はピットに向っており、背中しか見えない。

「あの！ 千冬さん・・・？」

「・・・及第点だ、これからも精進して、あの馬鹿と二人で支え合える様になれ」

僅かに振り向き、フツと笑いながら残した言葉、それは・・・認めたとという事だろう。

千冬はそれ以上、何も語らずピットに戻り、残された筈はフラフラしながら自分が出てきたピットに戻ると、出迎えてくれた一夏に紅椿を消しながら抱きついた。

「一夏！ 認められた・・・認めてもらえた！！」

「ああ、見てたぜ・・・やっぱ凄いやな、筈は。俺もお前に吊り合う男になれる様、頑張らないとな」

「・・・大丈夫だ。寧ろ私がお前に吊り合える女にならないと駄目だ」

「そつか・・・なら、二人で頑張ろうぜ」
「ああ」

お互い、これからもっと強くなると誓い合いながら、千冬に認められて初めてのキスを交わす。今日という日は、一夏は筈の為、筈は一夏の為、今まで以上に強くなると、決意した新たな日になるのだった。

ピットに戻ってきた千冬が暮桜・真打を待機状態に戻してシャワー室に向おうとした時、同じくピットで待っていた束が近づいてき

たので歩みを止めた。

「お疲れ様、ちーちゃん」

「ああ………。東、お前の妹は強いな」

「ん〜？ そりゃ東さんの妹ですから！ そんなの当たり前だよ〜」
「そうだったな、箒はお前の妹なのだったな……」

箒が放った最後の一撃を思い出す。あの一撃に込められた箒の想いの大きさ、それを感じ取った時、何となくだが悟ってしまった。もう、一夏も箒も、千冬や東に守られているだけの子供ではないのだという事を。

「でもでも〜、ちーちゃんってホントに素直じゃないよね〜」

「……何が言いたい」

「だって〜、実は最初から箒ちゃんの事を認めていたのに、態々こんな事までしちゃうんだもん。いっくん大好きなお姉さんは大変だよね〜？」

「……」

「にゃああああ！？ 痛い痛い痛い痛い〜！！ 東さんの天才脳が潰れちゃうよお！ 潰れたトマトみたいに愉快でスプラッタな事に!?!?!?」

東の頭をアイアンクローで絞めながら、一夏と箒の姿を思い出す。今までは、二人一緒の姿を思い出すと幼い頃の二人の姿しか浮かんでこなかったのに、今では成長した今の姿の二人が浮かんでくるのだ。

恐らく、自分でも気付かない内に弟は姉離れをしていたのだろう。だというのに、肝心の姉である自分は、未だに弟離れが出来ていなかったなんて、随分と滑稽な話だこと。

「きゆう〜・・・」

「む？ 何だ束、こんな所で寝ては風邪を引くぞ？」

「ちーちゃんの所為だよ〜・・・」

「お前が余計なことを口走るからだ馬鹿者」

束の事は放置して、シャワー室に向った千冬、その足取りは何処か軽く、表情は息子の門出を祝う母親の様なものだったのは、言うまでも無いだろう。

第六十九話 「姉の役目が終わる時」(後書き)

次回は簪とシャルの凶悪ペアのお話にしようかなあとか、考えていたりします。

第七十話 「日本とフランス」 (前書き)

何が書きたかったのか、よく判りません。

第七十話 「日本とフランス」

IS(インフィニット・ストラトス)
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十話

「日本とフランス」

一夏のパートナーが筈に決まり、それに伴って鈴音はセシリアと、ラウラは本音と組む事になり、いよいよタッグマッチに向けた準備が本格的に始まった。

キラや一夏達も準備に追われる中、今度のタッグマッチではキラとラクスペアを除けば優勝候補とも言われている二人、シャルロットと簪のペアは整備室のワンフロアを貸しきって自分達の専用機の子エックを行ってた。

「簪さん、これは如何かな？」

「えと・・・もう少し、メインスラスターの出力を上げた方が」

「うーん、イグニッションブースト瞬時加速もあるから、これくらいが丁度良いと思うけど」

「でも、私の山嵐の中を飛ぶなら、もう少し速度があった方が・・・高速機動とまでは言いませんけど」

二人が立てている戦術に沿って調整しているのだが、中々難航しているらしい。

今、一番の問題としているのはエクレール・リヴァイヴのスピードに関する事で、打鉄・式式が山嵐を放った時、そのミサイルの嵐の中を掻い潜る様にエクレール・リヴァイヴが飛ぶ事を前提として調整をしているのだが、その際の速度に関する問題だ。

「速過ぎても駄目、遅すぎても駄目、丁度良い速度にするならスラスト出力の調整が一番だけど、実際問題、エクレール・リヴァイヴは第三世代の中では一番速度が出せる機体だからねえ」

「キラさんが造ったISですから・・・調整も、如何しても難しくなります」

エクレール・リヴァイヴは第三世代でありながら、その技術力は第四世代に匹敵すると言っても過言ではない。だからこそ、調整や整備も第二世代や第三世代のISよりも難しく、大変なのだ。

「それにしても、凄いですね・・・キラさんって」

「そうだよねえ。お兄ちゃんが凄いつていうのは理解していたつもりだったんだけど、エクレール・リヴァイヴを見ると、更に凄いか思っちゃうもん」

「もしかして、キラさんってコアを造れたり・・・」

まさかあ、と二人で笑い合っていたのだが、何故か二人の後頭部には一筋の汗が流れていた。キラなら造りかねないと、心の底では思っていたりするのだ。

最も、キラはコアの作り方は教えてもらっていないので造れないが、束が教えれば間違いなく造れるだろうと予想していたりする。

「ねえ簪さん、ちょっと休憩しようよ」

「はい・・・」

展開していたエクレール・リヴァイヴと打鉄・式式を待機状態に戻して、二人揃ってシャワー室に向う。

シャワーを浴びる為に着ていたISスーツを脱いだのだが、簪はシャルロットの胸を見て、次いで自分の胸を見下ろして、凹んだ。

「か、簪さん？」

「ずるい……シャルロットさん、胸……大きい。同い年なのに」
「え、え……」

シャルロットと箒、セシリア、楯無の四人はキラと一夏を中心としたグループで胸が平均より大きい。逆に、ラウラと鈴音、簪、ラクスは胸が平均より少し小さいので、どうしても羨んでしまう。

「如何したら大きくなるんですか……？」

「う、うん……僕は別に、特別何かをしたって訳じゃないんだけど……えと、フランス人だから？」

理由になっていない。ならドイツ人であるラウラは如何なのかと問いたい。ヨーロッパの人間は皆、胸が大きいなんて言い訳は通用しないのだ。

「で、でもほら！ 日本人は慎ましやかなのが良いつて前に本で読んだよ？」

「それ、和服の場合……。でも、男の人はやっぱり、胸が大きい方が良いつて聞く」

「か、簪さん、気になる人、いるの？」

「………キラさん」

「……っ！？ だ、駄目！！ お兄ちゃんは駄目だよ！？ お兄ちゃんにはお姉ちゃんがいるから絶対に駄目！！」

「……冗談」

強ち嘘でもないのだが、キラにラクスが居るのは理解しているし、キラとラクスがお似合いなのは重々承知だ。だから簪もラクスからキラを奪おうなんて考えていないし、寧ろ二人には幸せになって欲しいとも思っている。

まあ、少しはキラに女の子として見て欲しいなあ、という願望が無いとは言わないが、精々その程度だ。

「でも、シャルロットさんもキラさんの事・・・好き、なの？」

「え！？ い、いやああの・・・お、お兄ちゃんだし・・・それ以外に無い、とは言わないけど、でもお・・・」

服を脱ぎ終わったシャルロットは、問いには答えず、顔を真っ赤にしながらシャワー室に駆け込んだ。

簪も服を脱ぎ終えたので、シャルロットの後を追ってシャワー室に入ると、シャルロットが入ったブースの隣のブースに入ってシャワーの栓を捻り、お湯を出す。

「あの、シャルロットさん」

「な、何かな？」

「もし、タッグマッチでキラさんとラクスさんのペアに当たったら、如何戦いますか？」

「・・・難しいね。正直、僕と簪さんが二人揃って挑んでも、お兄ちゃんには勝てない。じゃあお姉ちゃんを狙うのかと言われれば、先ず間違いない狙う前にお兄ちゃんに落とされるだろうし」

ラクスに近づくのは実質的に不可能だろう。キラという鉄壁の壁を越えなければ近づく事は夢のまた夢、キラを相手に勝てる人間は、IS学園の生徒に存在しない。

「多分、学園はお兄ちゃんの足枷にする為にお姉ちゃんを組ませたんだろっけど・・・」

「正直、逆効果ですよね・・・。キラさんは、守る人が後ろに居るとき、その時が一番強いですから」

足枷どころかドーピングに等しいだろう。キラに守る者を後ろに与えるなど、ドーピング以外の何物でもない。

「そう言えば、織斑先生がこんな事を呟いてたなあ」

「・・・？」

「この学園の上層部は、人の想いの強さというものを軽視しているって」

「軽視、ですか？」

「うん。ほら、前に簪さんが会長と戦った時も、勝てなかったけど、でも後一步の所まで追い詰めたでしょ？」

そう、あの模擬戦では確かに簪は楯無に後一步という所まで追い詰める事が出来た。だが、それ以降の模擬戦で、そこまで楯無を追い詰めた事は無い。

「あれって、あの模擬戦では簪さんの会長に対する想いの強さが生み出した結果だと思うんだ。昨日の筈と織斑先生の模擬戦も同じように」

「・・・あ、なるほど」

「人って、想いの強さでいくらでも強くなれる。お兄ちゃんが言った事なんだけどね？ その想いが何であれ、強ければ強いほど、戦いの結末は左右されるんだって」

それが憎しみであろうと、愛情であろうと、その想いの強さが、戦いに大きな影響を与えるという事を、キラは知っているし、シャルロット達も実際に体験したり、見たりしている。

だが、学園の上層部は想いの強さを軽視して、寧ろ想いの強さなんかで人の戦局を左右するなどナンセンスだと言い切っているのだ。

「僕はお兄ちゃんと戦う事になったら、エクレール・リヴァイヴを

造ってくれた事への感謝と、エクレール・リヴァイヴを使いこなした所を存分に見てもらいたい。その想いを強く持って戦おうと思うんだ」

「・・・それなら、私も同じ。打鉄・弍式の完成を手伝ってくれた事への感謝と、お姉ちゃんへのコンプレックスを拭い去った今の私の力を、見てもらいたい」

「うん、頑張ろう！」

「はい！」

そして、学園に、世界中に見せ付けてやるんだ。人の想いの力を、その力が人を無限に強くしてくれるのだという事を。

人は、想いの大きさでいくらでも強くなれる。キラから教わった事を、見せ付けて、認めてもらうんだ。キラに、自分たちが強くなった事を、キラ達がいる最強の座には程遠いかもしれないけど、それでも・・・誇れるくらい強くなったのだという事を、知ってもらいたい。

第七十話 「日本とフランス」(後書き)

次回はついに始まります、全学年合同タッグマッチ!!

第七十一話 「全学年合同タッグマッチ」(前書き)

キラとラクス、久しぶりだあ。

第七十一話 「全学年合同タッグマッチ」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十一話

「全学年合同タッグマッチ」

全学年合同タッグマッチ当日の朝、キラとラクスは朝の5時には既に起床しており、ブリリアントフリーダムとオルタナティブの最終チェックを行っていた。

「そう言えば、今日の対戦組み合わせは開会式の時に発表されるのでしたわね」

「うん、今回のタッグマッチで盛り上がるのは間違いなく専用機持ちだと思う。注目は必至かな」

現在、IS学園の専用機持ちの人数は12人、キラとラクス、一夏、篝、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、それから二年のフォルテ・サファイア、三年のダリル・ケイシーだ。

「この中で、私とキラがペア、一夏さんと篝さん、セシリアさんと鈴さん、シャルさんと簪さん、フォルテ・サファイアさんとダリル・ケイシーさんがペアでしたか・・・」

「そう、それでラウラと本音さん、会長と虚さんだよな」

注目すべきカードは合計7組、この他にも専用機持ちではないが代表候補生の間は何人が居るから、随分と面白い大会になりそうな予感がする。

「・・・よし、ブリリアントフリーダム、システムオールグリーン。チェック完了」

「オルタナティブ、システムオールグリーン。チェック完了ですわ」

チェックを終えたのは良いのだが、まだ時間は6時を過ぎたばかり。特にする事も無くなったので、ラクスは紅茶を、キラは珈琲を淹れて、のんびりと雑談をしながら時間を潰すのだった。

開会式が始まった。壇上には虚が立っており、司会進行を行っている。

「それでは、開会の挨拶を更識楯無生徒会長からしていただきます」

虚が後ろに下がると、今度は楯無が前に出てきて、マイクの前に立った。こうして見ると、ちゃんとした生徒会長に見えるのだから不思議である。

「どうも、皆さん。今日は専用機持ちと、その専用機持ちのパートナーになった生徒のタッグマッチトーナメントですが、試合内容は皆さんにとってとても勉強になると思います。しっかりと見ていてください」

専用機持ちのパートナーになったのは本音と虚の布仏姉妹のみ、後の生徒は皆、観客として試合を見て、それで今後の勉強に役立てる。それがこの大会の趣向でもある。

「まあ、それはそれとして！」

おもむろに楯無は持っていた扇子を開いた。その扇子には何故か『博徒』の文字が書かれている。

「今日は生徒全員に楽しんでもらう為に生徒会である企画を考えました。名づけて『優勝ペア予想応援・食券争奪戦』！」

その瞬間、全生徒が歓喜に包まれた。明らかかなギャンブルなのだが、楯無が根回しをしていたのだらう。何故なら、頭を抱える千冬と、オロオロしている真耶以外の教師は全員、黙って何も言わないのだから。

「まあ、学生の内は騒げる時に騒ぐのが一番だけど」
「少し、騒ぎすぎですわ」

苦笑しているキラとラクスは、楯無に文句を言っている一夏の様子を眺めていた。同じく生徒会に所属する彼は、何も聞いていないみたいだ。

「では、対戦表を発表します！」

楯無の後ろに現れた空中投影ディスプレイに対戦表が掲示される。一回戦、第一試合はキラとラクスのペアVS一夏と箒のペアとなった。

「げえ！？ キラとラクスが一回戦の相手！？」

「……………終わった」

物凄い勢いで一夏と箒が落ち込んだ。一回戦から優勝確実のペアに当たれば、落ち込むのは当然だらう。

他のメンバーも二人に不憫な……なんて言いたげな視線を向け

ている。唯一例外なのはフォルテとダリルの二人、二人はキラの実力を噂でしか知らないなので、実際に戦ってみたいと思っていたのだが、一回戦で当たらなかった事が少々残念なご様子だ。

「ハロハロ、キー君、ラーちゃん」

「東さん・・・」

試合会場になる第4アリーナに向っている途中で、キラとラクスの所に束が来た。何か嫌な予感がするのは、気のせいではないのだろう。

「もしかして、何かするんですか？」

「うん！ 実はもう、くーちゃんにお願いしてゴーレム？全5機をこっちに向かわせてるんだよ」

「ゴーレム？を！？」

学園を襲撃すると、本人の口から言われた二人はどんな反応をすれば良いのやら。

「大丈夫、死なない様にしてるから。ゴーレム？の時はキー君がやっちゃったけど、今回は・・・ね？」

「一夏の成長の為にも、手出しはしないで欲しい・・・そういう事ですか？」

「せいかゝい！ だって、いくらゴーレム？でも、キー君が相手だと唯の鉄の塊に過ぎないもん」

ゴーレム？は、一夏と箒の所に一機、シャルロットと簪の所に一機、フォルテとダリルの所に一機、ラウラと本音の所に一機、鈴音とセシリアの所に一機が向っている。

あと数分もすればゴーレム？が襲撃してくる手筈になっているの

だ。

「それで、僕とラクスは何を？」

「学園の外の警戒、かなあ？ 亡国機業がもしも混乱の中で侵入してきたら大変だし、ゴーレム？のコアを奪われるわけにはいかないもん」

「確かに・・・」

未登録のコアが5個、それを奪われるのは不味い。出来る事なら学園の方で回収してくれば、後で束がコッソリと回収出来るのだから。

「という事は、ゴーレム？のコアは・・・」

「ラーちゃん鋭いねえ。もち！ 束さんが既に回収しました」

そう言っ束が見せたのはゴーレム？のコアだ。

「実はね、これを使って束さんの専用機を造ろうかと思ってるんだよね」

「束さんの・・・？」

「そう！ これでもちーちゃんやキー君と同じ、IS適正ランクSだからねえ。無問題だよ」

束の専用機、どんな機体になるのかはまだ判らないが、間違いなく第五世代の高性能機になるだろう。

「さて、そろそろかな？」

不意に、束が時計を確認すると、四箇所のアリーナから五つの爆音が聞こえてきた。

「ゴーレム？、」到着」

ゴーレム？が襲撃してきた。全校放送で真耶が避難を呼びかけている声が聞こえてきているから間違いないだろう。

こうなつては仕方が無いとキラとラクスは学園外の警戒をしようと思つたのだが、如何やらこちらから何もしくとも、向こうから来たみたいだ。

キラとラクス、束の周囲には誰も居ない。だからこそ、三人の前に堂々と現れた二人の女性、一人は前にも見たアラクネの操縦者である巻紙礼子、もう一人は金髪の女性だった。

「篠ノ之束博士、我々と共に来てもらいます」

「は？ 何言つてんの？ そう言われて素直に従うとも思つてるなら、随分と頭が悪いんだね」

「てめえ！ スコールが来いっつってんだから大人しく来やがれ！」

巻紙礼子の口から出てきた名前、金髪の女性はスコールと言つらしい。

「まあ、大人しく来るとは思つてませんよ。だから力づくでお連れしますから・・・そちらのお二人のISも、ついでですから頂いていきますけど」

「亡国機業・・・、随分と大胆だね。こんな時に堂々と出てくるなんて」

「ええ、こんな時だからこそです」

束を下がらせ、オルタナティブを展開したラクスに預けると、キラはブリリアントフリーダムを展開した。

それを見て、巻紙礼子もアラクネを展開して、スコールの前に出

る。

「今度は前みたいにはいかねえぜ？ 前は運良くてめえが勝ったが、今回は負けない。クルーゼと互角の実力とか言われてるが、男なんかに負ける訳がないんだからな」

「・・・相手との実力差も見抜けないなら、貴女は3流以下ですね」「っ！ 調子に乗るなよ小僧が！！」

突っ込んできたアラクネを余裕で避ける。その避ける際に抜刀したビームサーベルで8本の足を全て切り落とすと、巻紙礼子は無様に地面に転がる姿を晒してしまった。

「なっ！？」

「遅すぎる、貴女、クルーゼよりも自分の方が女性だから強いって思っているみたいですけど、全然ですよ」

「て、めえ！？」

ビームライフルに持ち代えると、アラクネの両腕を破壊する。これで巻紙礼子に出来る事は何も無くなった。

「こ、こんな・・・こんな事、あつてたまるか！？ この私が・・・このオータム様が、男なんか二度も負けるなんて、ありえるか！！」

達磨状態で転がって叫ぶ巻紙礼子・・・オータムを余所に、キラはスコールに向き合った。

キラにとってオータムは相手にすらならない程度の実力だが、このスコールという女性は別だ。クルーゼよりは弱いだろうが、それでもその微笑からは油断の出来ない不気味な威圧を感じられる。

「仕方が無いですね・・・オータムは役に立たなかつたみたいだから、私がお相手するしかありませんか」

そう言つて、スコールは左手首に巻いた金のブレスレットに触れる。

「私の第五世代型IS、インフェルノが!!」

スコールを包む黄金の光、それがまるで炎の様に揺らめきながら、その身体を装甲が包んでいく。

紅蓮の炎を彩つた紅い装甲が目立つIS、見た目はキラが知るガンドムタイプの形に似ているが、全身装甲ではない。

左右の非固定浮遊部位は機械で出来た翼のような見た目で、右手には装甲と同色のライフルが握られている。

「第五世代・・・!?!」

「そうよ・・・これはラウのレジエンドプロヴィデンスのデータから造り出した亡国機業製の第五世代型ISの試作機であり、私の専用機、インフェルノ」

「・・・」
「さあ、キラ・ヤマトくん・・・お相手、願えるかしら?」

翼を羽ばたかせ、スコールはキラと向き合った。

キラも両手のビームライフルを構えて向き合つと、感じられる威圧感に全神経を研ぎ澄ませると、脳裏で種が弾ける衝動・・・SEEDを発動させる。

「わかりました・・・ここで、貴女を捕らえさせてもらいます」

「ええ、良いわよ・・・出来るのならね!」

第七十一話 「全学年合同タッグマッチ」(後書き)

次回はキラVSスコール！と見せかけて、ゴーレム？と戦う一夏
たちになります。

第七十二話 「ホームレスとの戦い・1」 (前書き)

今回、キラは登場しません。

第七十二話 「ゴーレムとの戦い・1」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十二話

「ゴーレムとの戦い・1」

突如、襲撃してきた5機の無人機、それぞれは分かれて各アリーナに落ちてきた。

前に襲撃してきた無人機、鋼の巨人という言葉がピッタリのゴーレム？とは違い、このゴーレム？は何処かスマートで、戦乙女という言葉が似合いそうな姿をしている。

女性的に見えるスマートな漆黒の装甲版、バイザー型ライン・アイはゴーレム？の時の複眼レンズよりも広い視野を確保しているのは明白、羊の巻き角の様なハイパーセンサーアンテナが特徴的で、右腕は肘の所から巨大なブレードになっており、左腕はゴーレム？と同じ巨大な腕になっていて、その掌には四門の超高密度圧縮熱線を放つ砲門が追加されていた。

「一夏・・・」

「ああ、前に襲撃してきた無人機の発展型、だな」

第四アリーナで既に待機していた一夏と筈は、襲撃してきたゴーレム？と対峙して、それぞれの武器を構えていた。

ゴーレム？の姿を見て、ゴーレム？の姿を思い出したが、間違いなく以前よりも強くなっているのは明白で、油断ならない相手に一瞬の隙も見せられない。

「だけど、こつちだつて前より強くなっている。私は紅椿を手に入
れ、一夏は白式が二次移行を果たしているのだからな」
「そうだな、前みたいは無様な戦いはしないぜ！」

気合充分に一夏と箒は左右に分かれて挟み込むようにゴーレム？
に接近した。

ワンオフアヒリテイー
【単一仕様能力：零落白夜、発動】

一夏は先手必勝とばかりに零落白夜を発動して、雪片・式型の展
開装甲をオープンすると、レーザー刃を展開、黄金の光に包まれな
がら瞬時加速で一気に切り掛かる。

同時に、箒は雨月と空裂の二刀を構えて瞬時加速に入り、展開装
甲のビットを展開して、合計4つの刃で切り掛かった。

「なっ!?!」

「そんなっ!?!」

だが、二人の刃は空を切る。何故ならゴーレム？は瞬時加速でそ
の場を離脱して、二人の攻撃を避けたからだ。

まさか無人機が瞬時加速を使えるとは思っていなかったので、数
瞬だけが二人に隙が生まれる。

その隙を狙ったかの様にゴーレム？の左掌から放たれたレーザー
が二人に襲い掛かり、シールドエネルギーを大幅に削られてしまっ
た。

「ぐう……ほ、箒……大丈夫か？」

「くっ、ああ……問題ない。シールドエネルギーは半分ほど削ら
れたが」

一夏のシールドエネルギーも零落白夜を発動していた為、三分の一まで減ってしまった。先ほどのレーザーの威力を考えると、このままでは危険だ。

ワンオフアビリティ
【単一仕様能力：絢爛舞踏、発動】

このままでは負けると考えた筈は絢爛舞踏を発動した。紅椿が黄金の光に包まれ、シールドエネルギーを完全回復させると、そのまま白式に触れて、白式のシールドエネルギーも補給をする。

「サンキュ、筈。これでまだ戦えるぜ」

「ああ、行こう。一夏」

まだまだ勝負はこれからだ。一夏と筈はそれぞれの武器を構え、再び瞬間加速に入ってゴーレム？へと切り掛かるのだった。

「このおおおー!!」

襲撃してきたゴーレム？に対して、鈴音は双天牙月を大きく振りかぶり、切り掛かる。

ガギンツッ！ という大きな金属音と共に、ゴーレム？の右腕・・・肘から先のブレードに止められるのだが、その勢いを殺す事無く、鈴音はゴーレム？の横腹に蹴りを叩き込み、そのままピット内の壁まで蹴り飛ばした。

「いつ、性懲りも無く何の用よー!!」

壁際まで蹴り飛ばしたゴーレム？に対して、追い討ちを掛ける様

に肩部ユニットである衝撃砲“龍咆”を何発も撃ち込んだ。

この狭いピット内での衝撃砲連射を壁際で叩き込まれたゴーレム？は、普通なら粉々になっただけでもおかしくはないのだが、ゴーレム？は龍咆が直撃する寸前に機体の周りに浮遊していた黒い球状の物がゴーレム？の前に並んで強力なシールドを発生して、龍咆を完全に防ぎきるのであった。

「何なのよコイツ！ 前のは違って防御型ってわけ！？」

「鈴さん、下がって！」

聞こえたセシリアの声に反応して、鈴音はその場で身を屈め、低くする。

その瞬間、鈴音の頭上をセシリアが乗るブルーティアーズが飛び抜き、一回転して空中静止すると、その手に持つスターライトmk？を連射した。

「ぐう！ なんて硬いシールドですの！？ …… ですが！」

ブルーティアーズの周囲に展開していたピット、ブルーティアーズ4基がレーザーを一齐射する。そのレーザーはゴーレム？に向って真っ直ぐ…行かず、明後日の方向へと飛んで行ってしまった。

「いただきますよ！」

だが、それこそセシリアの狙い。つつ…とセシリアが指を宙に滑らせると、ブルーティアーズから放たれたレーザー全ての軌道がグニヤリと曲がり、無人機の死角から一斉の襲い掛かる。

偏向射撃、これこそがBT兵器の真骨頂、BT兵器の精神感応制御だ。
サイコ・シンパ

死角から襲い掛かったレーザーに対して、ゴーレム？の搭載され

ている人工知能は可変シールドユニットの展開は間に合わないと判断する。仮に間に合ったとしても、レーザーを防御すれば衝撃砲が襲い掛かるのは確実なので、防御を捨てて回避を選択、襲い掛かるレーザー全てを空中で踊るように身をくねらせる事で避け切った。

「じよ、冗談でしょう？ あの防御力で、あの機動力！？ それに・・・」

無人機だからこそ出来る複雑奇怪な回避を披露したゴーレム？は、セシリアと鈴音に向けて巨大な左腕を向ける。

その掌にある四つの砲門からはチャージを開始したレーザーの光が覗いていた。

「火力もありそうねえ・・・」

セシリアのセリフに被せる様に鈴音が呟くと、爆発がビット全体を揺るがし、二人の姿は爆炎の中に消えるのだった。

ラウラと本音が居るビットにもゴーレム？が襲撃してきた。

シュヴァルツェア・レーゲンを展開したラウラと、打鉄を展開した本音が迎撃に当たっているのだが、ゴーレム？の高い機動力は第二世代の打鉄と、第三世代の中では機動力が最も低いシュヴァルツェア・レーゲンでは追いつく事が出来ない。

「クウツ、このー!!」

接近して切り掛かってきたゴーレム？を、ラウラはプラズマ手刀で迎え撃ち、ゴーレム？の背後から本音が近接ブレードを構えて切り掛かる。

「うそ〜!?!」

だが、本音の近接ブレードは可変シールドユニットによって展開されたシールドに阻まれてしまう。しかし、本音は少し驚いた程度で、直ぐに目線でラウラに合図を出した。

「了解だ!」

ラウラは右肩のレールカノンに至近距離からゴーレム?に向けて発射、背後の本音を抑えているゴーレム?は無防備の状態で胴体にレールカノンの砲弾の直撃を受ける。

レールカノンがゴーレム?に直撃した瞬間、本音がその場を飛び退くと、ゴーレム?はそのまま吹き飛ばされ、本音の打鉄に後付装備として装備されたアサルトライフルの一斉射を浴びた。

「やったか・・・?」

「どうかな?」

アサルトライフルの着弾による煙に包まれたゴーレム?は、その姿が見えなくなった。油断無く煙を睨みつけていたラウラだったが、煙の一部が膨らみ、中からゴーレム?が出てきたのを確認した。だが、そのゴーレム?が瞬間加速イクニッションブーストを使ってきた事に驚き、決定的な隙を作ってしまう。

「しまっ!?!」

「ラウラウ〜!」

一気にゴーレム?がシュヴァルツェア・レーゲンに肉迫してきて、右手の巨大ブレードがレールカノンを切り落とし、零距离からのレ

ーザーを胸の装甲に直撃させた。

絶対防御が発動したものの、その熱、衝撃は殺せる筈も無く、ラウラの意識が一瞬だが飛んだ。そのままラウラはピット内の壁に叩きつけられ、その場に座り込んでしまう。

「ラウラウっ!?!」

本音がラウラに駆け寄ろうとした。しかしそれはゴーレム?のレィザーが襲い掛かってきた事で阻まれ、第二世代の打鉄に出せる限界の速度で回避しながら、ラウラの様子を伺うと、ラウラは眼帯をむしり取っていた。

「やってくれたな・・・鉄屑があああ!!!」

ヴォーダン・オージェによって反射速度が劇的に上昇したラウラはAICを最大出力でゴーレム?に向けて展開する。

本音に切り掛かろうとしていたゴーレム?の動きは最大出力のAICによって凍り付いたかの様に急停止し、そこにラウラの大口径リボルバーカノンの連射を叩き込んだ。

「うおおおおおおおっ!!!!!!」

本音もラウラに続く様にアサルトライフルを連射して、一気に勝負を決めようとする。

これで決まった。二人がそう思った時だった。AICによって動きを封じられていたゴーレム?が急に動きだしたのだ。それも圧倒的な出力を誇る瞬間加速イグニッションブーストを使って。

「ラウラウ!!!」

「っ!?! 不味いつ!?!」

リボルバーカノンを連射していたラウラは、イグニッションブースト瞬時加速で接近してきたゴーレム？の動きに対応出来ない。

本音は動けるのだが、打鉄の性能ではゴーレム？に追い付けず、ゴーレム？は大型ブレードでラウラの身体を切り裂いた。

第七十二話 「コーレムとの戦い・1」(後書き)

次回はシャルと簪、そこに登場するお姉ちゃんの戦いです。

第七十三話 「ゴーレムとの戦い・2」 (前書き)

ゴーレムとの戦いの続きと決着です。

第七十三話 「ゴーレムとの戦い・2」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十三話

「ゴーレムとの戦い・2」

シャルロットと簪が待機していたピット内にもゴーレム？が襲撃してきた。

突然の襲撃に驚いた二人だったが、直ぐにエクレール・リヴァイヴと打鉄・式式を展開すると、臨戦態勢を整えて、それぞれの武器を構える。

ゴルジエを構えたシャルロットは、一気にガトリングレーザーを連射、更に簪は夢現を構えてガトリングレーザーの合間を縫って飛び、ゴーレム？に切り掛かった。

「っ！ 速い・・・」

夢現やレーザーは全て避けられた。ゴーレム？の速度は二人の予想以上ではあるのだが、二人はこれ以上に速い存在を知っている。

「でも、お兄ちゃん程じゃないよ!!」

ラピッドスウィッチ

高速切替でゴルジエからフシルに武装を切り替えたシャルロットは、高出力のレーザーを連射、正確無比の射撃でゴーレム？の回避ルートを限定する事で簪が攻撃し易いようにする。

「簪!」

「はい！」

山嵐の一部を発射して、同時に瞬間加速に入った簪は夢現を構え、レーザーとミサイルを回避していたゴーレム？の回避先に移動、夢現を振った。

だが、夢現はゴーレム？の巨大ブレードに止められ、ミサイルやレーザーは可変シールドユニットが展開したシールドに阻まれてしまふ。

「くうっ！」

「簪！ そのまま抑えて！！」

「っー！」

一度離れようとした簪だったが、シャルロットの指示を受けて更に力を込めると、ゴーレム？を身動き取れなくする。

シャルロットは簪がゴーレム？を抑えている間に高速切替ラピッドスイッチによって切り替えたダルクを二本、キラと同じスタイルで構えると、瞬間イグニッション加速で一気に突っ込んで、擦れ違い様に巨大な左腕と頭部にレーザー刃を滑らせた。

「まだまだ！」

左腕を切断され、頭部を潰されたゴーレム？の背後から高速切替ラピッドスイッチでダルクを一本だけ切り替えてグレート・スケールを構えると、その無防備の背中に叩き込もうとする。

しかし、グレート・スケールの先端は可変シールドユニットのシールドによって阻まれたのだが、簪が至近距離からの荷電粒子砲“春雷”を放ち、ゴーレム？の胴体に直撃させ、シャルロットが離脱した瞬間、その巨体が壁際まで吹き飛ばされた。

「簪！」

「はい！」

ラビットスイッチ
高速切替で再びゴルジエに切り替えたシャルロットは、ガトリン
グレーザーを、簪は山嵐と春雷を放ち、ゴーレム？に追い討ちを掛
けた。

煙に包まれたゴーレム？は、姿が見えなくなる。既に左腕を落と
され、頭部を破壊されたゴーレム？、これで終わりかと思われたが・
。。。

「うそ……」

「そんな……」

可変シールドユニットでシャルロットと簪の追い討ち射撃を全て
防ぎきったゴーレム？がイグニッションブースト瞬時加速で二人の後ろに移動する。

即座に反応した二人は夢現とダルクを構えて切り掛かってきたゴ
ーレム？のブレードを受け止め、簪は春雷を再び至近距離から放つ
たのだが、ゴーレム？の速度が先ほどよりも上がっており、イグニッションブ
ースト瞬時加
速で避けられてしまう。

「さつきより……」

「速い……！」

そして、更に驚く事が起きた。

ゴーレム？は切り落とされた左腕に切断面を近づけると、中から
コードが延びて接続、そのまま左腕をくっ付けてしまったのだ。

「うそ！？」

「……無人機だからこそ……ですね」

ゴーレム？が復活した左腕のレーザーを連射してきた。それを避けながら接近しようとする簪だが、放たれるレーザーの数が多すぎて回避するのに瀕死一杯になってしまう。同じく避けながらフシルを構えたシャルロットは、レーザーの間を縫う様にレーザーを連射、しかしそのレーザーは可変シールドユニットにより防がれてしまい、打つ手無しとなった。

「どうすれば・・・！」
「避けるので、精一杯だなんて・・・！」

このままではジリ貧だ。何か打つ手は無いのかと起死回生のチャンスを伺っていた二人だったが・・・。

【ミストルティンの槍、発動】

ゴーレム？の真横から放たれた攻勢エネルギーの水が槍となってゴーレム？を吹き飛ばした事でチャンスが訪れた。

「お姉ちゃん！」
「やほー、簪ちゃん。シャルロットちゃん、今よ！」
「はい！..！」

吹き飛ばされて体制を整えようとしているゴーレム？に向けて、シャルロットはビットを飛ばした。

ゴーレム？を囲む様に展開された四つのビットが光の輪で繋がれ、輪の中心に居たゴーレム？は突如発生した超重力に押し潰される。

「簪！」
「っ！..！」

楯無とシャルロットが作ったチャンスを逃すまいと、春雷を最大出力で発射する。

最大出力の荷電粒子砲は身動きの取れないゴーレム？の胴体を貫き、中枢機能とコアの全てを破壊して、ゴーレム？を完全に機能停止させるのだった。

ゴーレム？のブレードに切り裂かれた筈のラウラだったが、そのブレードの刃はラウラの手で押さえられ、ギリギリの所で止められている。

「本音！」

「了解だよ〜！」

本音が近接ブレードを構え、ゴーレム？の頭上から股下まで突き刺すと、急いでその場を離脱する。

串刺しにされたゴーレム？はラウラから離れようとしたのだが、ブレードの刃を握るラウラがそれを逃す筈も無く、その胴体にレールカノンの銃口を突き付け、弾丸を発射した。

レールカノンの弾丸が胴体を貫いてコアを破壊した。動きを止めたゴーレム？をその場に投げ捨てると、眼帯を付け直したラウラはシユヴァルツエア・レーゲンを解除して安堵の溜息を吐く。

「ラウラウ、お疲れ〜」

「ああ、お前もナイスアシストだった」

「えへへ〜」

正直、本音の実力には目を見張る物があつた。代表候補生クラスとは言わないが、それでも高い実力を持っている。それは本音自身の戦闘能力の高さを示しているのだ。

「まあ、良い・・・他の皆は、如何しているだろうか」

とりあえず今は、破壊したゴーレム？を回収することから始めよう、そう思つて再びシュヴァルツエア・レーゲンを展開しようとしたのだが、考えてみればシールドエネルギーが残り少ないことを思い出して、教師が来るのを待つ事にした。

爆炎に飲み込まれたセシリアと鈴音だったが、絶対防御で命に關わることは無いと炎の中を突き進んだ。

炎から抜け出ると、ゴーレム？の真上に居た。それをチャンスと思ひ、セシリアはブルーティアーズ4基からレーザーを発射、偏向射撃^{シブル}で死角から直撃させて、更に畳み掛ける様にミサイルを発射、可変シールドユニットのシールドを使わせる。

「鈴さん！」

「まっかせなさい！！！」

既に鈴音はゴーレム？の背後に移動していた。

連結させた双天牙月を振りかぶり、思いつきり投擲すると胴体を切断、更に龍咆をゴーレム？が機能停止するまで叩き込む。

「このおおおおおー！！！」

ゴーレム？の装甲がボロボロになり、両腕や頭部が砕けた所で完全に機能停止した。

「ふう・・・」

「終わりましたわ・・・」

ゴーレム？が動かなくなったのを確認して、二人は漸く一息吐いた。ISを解除することも忘れて、その場に座り込んだ二人は、ロボロのピット内の天上を見上げ、この後が大変だなあと苦笑するのだった。

「一夏！」

「おう！」

シールドエネルギーが完全回復した白式を駆る一夏は再び零落白夜を発動、同時に攪乱加速テンベストフーストに入り、ゴーレム？の四方から襲い掛かる。

ゴーレム？は四人に分身した一夏にAⅠが対処し切れず、一瞬だがフリーズしてしまい、背後の本物の一夏の斬撃を受けてしまった。

「箒！」

「ああ！」

一夏が離脱したのを確認して、箒は空裂を一閃、レーザー刃がゴーレム？の左腕を切断する。

「まだまだあー！」

更に箒は雨月を振りかぶってゴーレム？に切り掛かるが、ゴーレム？はブレードでそれを防ぎ、背後の一夏には可変シールドユニットのシールドを展開して攻撃を防ごうとした。

しかし、零落白夜の前でシールドなど意味を成さず、シールドは紙を切り裂くように簡単に突破され、雪片・式型のレーザー刃が胴体に突き刺さる。

「今だ！ 行くぞ紅椿！！」

トドメを刺す為に気合を入れた筈の呼びかけに、紅椿は新たな力を示した。肩部ユニットがスライドして形を変える。その姿は巨大な矢じりを添えたクロスボウだ。

【戦闘経験値は一定量に達しました。新装備を構築完了しました。出力可変型ブラスター・ライフル“穿千”は最大射程に優れた一点突破型の射撃装備です】

「穿千・・・よし！」

両肩の穿千の矢じりがゴーレム？に向けられる。PICを全て機体制御に回すと、ターゲットスコープを右目に表示させた。

「一夏！」

その声に反応して、一夏は雪片・弐型を引き抜くとその場を離脱する。

これで何の憂いも無くなり、筈は穿千をゴーレム？の右腕目掛けで発射した。

「右腕、貰ったぞ！！」

穿千、展開装甲にも使われている深紅のエネルギーレーザーと違ってゴーレム？の右腕の直撃、ゴーレム？の右腕は一点突破の高出力レーザーによって吹き飛ばされてしまい、これでゴーレム？の武器は全て失われた。

「おおおおお！！！」

このチャンスを逃すまいと、一夏が最後の零落白夜でゴーレムの胴体を袈裟切りで切断する。

穿千と零落白夜でシールドエネルギーが0になったゴーレム？は完全に機能を停止させ、その場で沈黙するのだった。

第七十三話 「ゴレムとの戦い・2」 (後書き)

次回はキラVSスコールの第五世代対決！

第七十四話 「キラVSスコール」(前書き)

お待たせしました。七十四話です。

第七十四話 「キラVSスコール」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十四話

「キラVSスコール」

蒼い翼を持つ白き天使ブリリアントフリーダムと、紅の翼を持つ紅き凶鳥インフェルノ、それぞれを駆るキラとスコールは今正に激突しようとしていた。

「貴方の事はラウから聞いているわ。コズミック・イラでも最強ク
ラスの実力者だと」

「・・・」

「私はね、ラウと一度だけ戦ったことがあるの。勿論負けたわ・・・
だからこそ、興味があるのよ。そのラウに勝ったキラ・ヤマトの実
力というものに」

スコールは理解していた。自分の実力ではキラの足元にも及ばな
いという事、たとえ第五世代型に乗っていてもその差は埋められな
いという事を。

「でも、私はどうしても止められない・・・貴方と戦ってみたいと
いう欲求を！ この胸の奥から溢れ出る欲望を！ 私は止められな
いのよ！」

インフェルノのビームライフルが火を吹く。

緑色のビームが銃口から放たれ、ブリリアントフリーダムに向っ

て一直線に伸びる。それをキラは抜刀したビームサーベルで弾き飛ばすと、戦いの火蓋が切つて落とされた。

「始めましょう！ 貴方と私の！ 戦いを！！」
「はあ！！」

スコールがインフェルノの翼連結部分に収納されていたビームサーベルを抜くと、キラに切り掛かってきた。

それに迎え撃ったキラのビームサーベルとスコールのビームサーベルがぶつかり、激しくスパークする。

「ラウから聞いていたけど、ビームをビームサーベルで弾くなんて、本当に出鱈目だわ」

「この程度！」

キラは右足を振り上げ、疎かになっているインフェルノの左腕を狙ったのだが、そこから展開されたビームシールドによってグリフオンを防がれる。

しかし、それでも蹴りの衝撃は殺せなかった為、スコールは真横に蹴り飛ばされてしまい、バランスを取るのに一瞬だが隙を見せた。

「っ！ これで！！」

その隙を逃すキラではなく、両手に構えなおしたビームライフルを連結して、更にパルマファイオキーナをライフルのグリップ部分にあるコネクターに接続すると、通常の何倍もの威力まで出力、貫通力を高めたビームを発射する。

「ぐっ！？」

ビームシールドを展開したままだったので、そのビームを防いだスコールだったのだが、しかしインフェルノのビームシールドはレジエンドプロヴィデンスのビームシールドの劣化コピーでしかない。当然だがデストロイのスーパースキュラをも防ぎきる事が可能な本来のビームシールド程の出力は持ち合わせていないのだ。

ブリリアントフリーダムのビームライフルを連結させてパルマフイオキーナを接続した状態でのビームは、スーパースキュラほどではないものの、イージスやカラミティに装備されていたスキュラよりも数倍強力なのだ。そのビームの直撃を受けて劣化ビームシールドが防ぎきるなど不可能だろう。

「くっ！！！」

故に、インフェルノの左腕はビームシールドを貫通したビームによって破壊され、スコールはこの後、右腕一本のみでキラと戦わなくてはならなくなる。

「仕方ないわ・・・受けなさい！ 灼熱の翼を！！！」

ビームサーベルを抜刀して接近してきたキラの姿を見て、艶美に微笑んだスコールはその場で飛び上がり、非固定浮遊部位アンロックユニットでもある紅翼を大きく広げた。

「これがインフェルノ最強の武装よ。受けてみなさい！！！」

翼にある機械の羽が一本一本、紅い光を帯びる。そのまま羽が全て紅い軌跡を描きながら射出され、インフェルノに接近しようとして加速していたキラに襲い掛かった。

「っ！ これは！？」

無数の翼が紅いビームを纏った刃となって襲い掛かる。まるで銀の福音の使った銀の鐘シルバールの様な攻撃に一瞬だが戸惑ったキラだったが、左腕にビームシールドを展開しながら全てを回避、防御していく。しかし、避けたからと言って接近出来たのかと言われれば、不可能だった。何故ならキラが避けた翼は軌道を大きく変えながら再びキラに襲い掛かったのだから。

「これは・・・誘導兵器!？」

「いいえ、違うわよ。私は流石に誘導兵器の適正を持ち合わせていないから。その羽・・・紅き灼熱クリムゾン・インフェルは自動追尾機能を搭載しているの」

自動追尾機能、つまりそれはスコールが戻る様に指示を出さなければ延々と相手を追い続け、やがては紅いビームの刃で敵を切り刻むのだ。

更に、自動追尾という事はスコールが操っているのではないので、BT兵器などとは違い、適正の無い彼女が紅き灼熱クリムゾン・インフェルを使用中でも他の行動が可能という事になる。

「羽の枚数は全部で2万5千枚、さあどんどん射出するわよ!」

翼に羽が無くなると、新しく量子変換で搭載していた羽を補充して射出してくる。全てを射出すれば、その羽の枚数は全部で2万5千枚、一枚一枚が薄いからこそ搭載出来るのだろっが、インフェルノ自体の容量も相当なものだ。

「貴方やラウのドラグーンよりも圧倒的に多い弾幕、これを避けきれぬのかしら?」

「こんなもの!」

ドラグーンの射出は危険だ。この数の弾幕があるのだから、ドラグーンは恐らく役に立たないだろう。

ならば使う武装は限られてくる。ビームサーベルを両手に構え、両足にグリフォンビームブレイドを展開すると、一直線にインフェルノ向かってイグニッションブースト瞬時加速に入った。

「はああああああ！！！！」

両手両足にあるビームの刃を縦横無尽に振るい、迫り来る羽の全てを叩き切った。避けれる物は全て避け、その他の物は全て切り落としたがインフェルノの目の前に来たキラはチャージしていた腹部の複相ビーム砲を至近距離から発射する。

「ぐうっ！？」

あっと言う間の出来事にスコールは対応出来ず、辛うじて展開したビームシールドも至近距離からのビーム砲によって貫通、残された右腕も破壊されシールドエネルギーが0になってしまったのだ。

「ま、まさか・・・ここまでとは」

スコールが予想していたよりもずっと上の実力を示したキラに対して、スコールは恐れや畏怖といった感情を抱くことは無かった。

何故なら、そのキラの実力を実際に戦って知り、この先に起きるであろう亡国機業とキラの戦いが更に楽しみになってしまったのだから。

「仕方が無いわね・・・今日はこの辺で失礼するから、次はもっと楽しみましょうっ？」

「逃げられるとお思いですか？」

「ええ、だつて・・・」

突如、スコールが地面に飲み込まれてしまった。同様に倒れていったオータムも。

見れば彼女達の居た場所に一人が通れる程の大きさの穴が開いていた。まさかここまで用意周到だとはキラも予想していなかった。

「・・・これは」

いつの間にか、ブリリアントフリーダムの翼に手紙が張り付いていた。それを広げて読んでみると、やはりと言うか、スコールからキラ宛の物だ。

「・・・今日は楽しかった、また戦いましょう・・・亡国機業幹部、スコール。行動が読めない人だね」

戦いには勝った。だが、何故か釈然としない気分になったキラは、ブリリアントフリーダムを解除して、東とラクスの方に振り返った。

「ラクス、東さん、怪我は無い？」

「はい、私も東さんも、何ともありません」

「私も、それよりもキー君の戦いをこんな間近で見たの初めてだから興奮してるよ〜！」

オルタナティブを解除したラクスは先に千冬の所へ報告に行くと言つて立ち去った。

残ったキラと東はその場にある二つの穴を見ながら、深刻そうな顔で話し合いをしている。

「亡国機業は東さんの頭脳と技術力を欲していた。それはつまり、

第五世代の試作機は完成したけど、そこから改良するに至っていないという事ですよね」

「だね・・・でも今回の事で私の誘拐は不可能だと考えた筈だから、後は時間が解決してしまう。たとえ馬鹿でも時間を掛ければ問題ないんだから」

「近い内に、亡国機業は第五世代を増やしてくる・・・不味い事態になりそうです」

特に第五世代のコンセプトである天候に左右されないビーム兵器だ。現在の第三世代機は全てレーザー兵器くらいしか光学兵器は存在していない。

レーザーとビームでは威力などが桁違いで、特にレーザーではビームシールドを破る事は不可能と言っても良いだろう。

「東さん、急いだ方が良いかもしれません。第六世代の開発を」

「コンセプトは既に完成しているから、後はその先を考える段階に入ろうとしているし・・・そうだね」

既にキラと東の間で第五世代型ISの量産計画は始まっている。だが、その裏では第五世代の上に行く第六世代型ISの設計も進めているのだ。

「まあ、今ここで話していても仕方が無いよ。ちーちゃんの所に行こう?」

「そうですね・・・」

キラはもう一度、スコールとオータムが逃げた穴の方を振り返り、そして何も言わずに背を向けると東の横に並んで千冬の所に向かうのだった。

第七十四話 「キラVSスコール」(後書き)

更新が遅れました对不起。転職しまして、研修が忙しかったもので…。

明日も研修です。本当に、仕事を始めると忙しいですねえ。また次回も遅れるかと思えます、どうかお待ち下さい。

第七十五話 「戦後の緊急会議」 (前書き)

次の更新は未定です。仕事が休みになれば…ですね。シフト制なので、いつになるのやら。

第七十五話 「戦後の緊急会議」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十五話

「戦後の緊急会議」

今年は何われているのか、全学年合同タッグマッチまでもが中止になってしまった。

生徒たちの殆どが寮の自室に戻り、一年の専用機持ちと楯無は皆、第一アリーナの管制室に呼ばれ、集まっていた。

他にも管制室には千冬と真耶、それから東の姿もある。

「さて、お前達に集まってもらったのは他でもない。今日、学園を襲撃して来た無人ISの事についてだ」

真耶がスクリーンに映像を映し出した。そこに映っていた映像は襲撃してきた5機のゴーレム？と、それと戦う一夏たちの姿だった。

「この無人機、以前のクラス対抗タッグマッチの時に襲撃してきた奴と同系統の発展機だと思われる。そして、これを送りつけてきた犯人に関してだが・・・ヤマト」

「はい。無人機が襲撃してきたのと同時刻に亡国機業の構成員、巻紙礼子・・・彼女はオータムと名乗っていましたが・・・その人と幹部と思われる女性、スコールの二人が学園敷地内に侵入、僕とラクス、IS奪取及び、篠ノ之博士の身柄拘束が目的と思われる言動をしていました」

ゴーレム？は束が造り、束の命令で学園を襲撃してきたのだが、束が思いついたのは亡国機業に罪を押し付ける事だった。

勿論、真相を知る者はいる。キラとラクス、それから先ほど二人つきりで束を締め上げて聞き出した千冬の三人だ。

「篠ノ之博士がIS学園に居る事を嗅ぎ付けて襲撃してきたという事、ですね」

「最初に無人機で学園を混乱させて、その隙に篠ノ之博士を狙う。なるほどな、手段としては上等だろう」

セシリアとラウラの二人はキラの説明から凡その事を想像して、それを信じてしまった。この二人の場合、頭が良すぎるから逆に騙しやすい。

皆を騙している事にキラやラクスに罪悪感が無いとは言わないが、一夏と箒を鍛える為の事だとは言えないし、亡国機業のことは何とかなければならない以上、こうして亡国機業をダシにして罪を押し付けるのが一番なのだ。

「それからもう一つ、亡国機業は第五世代型ISの試作機を完成させて、実戦に投入してきました。操縦者は先ほど述べました幹部、スコールという女性で、ISの名前はインフェルノ」

千冬が真耶に指示を出すと、投影型スクリーンに新しい画像が映し出される。スコールと、彼女が身に纏うインフェルノの画像だ。

「第五世代型ISインフェルノ、ラウ・ル・クルーゼのレジエントプロヴィデンス、僕のブリリアントフリーダム、ラクスのオルタナティブ同様、第五世代型のISです。ここで改めて第五世代の特徴を挙げていきますと、一番の特徴は天候に左右されないビーム兵器・・・これはビームライフルやビームサーベル、ビームシールド、そ

れからブリリアントフリーダムのカリドウスやバラエーナなどがそれに当たりますね。その他に拡張領域パススロットには予備の弾丸などを入れるのみに留めて、ほぼ全ての武装を機体の表面に装備、露出しておく事で武器切り替えのタイムラグを少なくした事です」

そう、第五世代のISの拡張領域パススロットには武装らしい武装は一切搭載されていない。唯一例外なのはブリリアントフリーダムの単一仕様ワンオフアビリティ能力でもあるミーティアくらいで、後は殆ど消費した弾丸の予備弾くらいだ。

一言で言えば第五世代は武装で身を固めた機体、と言った所だろう。

「このインフェルノはビームライフルとビームサーベル、ビームシールドを基本装備として、他に目立つ武装は一つだけ。この非固定アンロッキングユニット浮遊部位にもなっている翼、彼女は紅き灼熱と呼んでいましたが、これが最強の武装らしいです」

「何コレ・・・羽をビームコーティングしながら射出する武装で、その合計が2万5千って、避けるの難しくない!？」

「僕のガーデン・カーテンでも防ぎきるの難しいかな・・・」

速度のある白式や紅椿は、操縦者である一夏と篝の技量が足りないの、逆にその速度が原因で直撃を受けてしまうだろう。

高速機動で避けたり、直撃しそうな物を弾くなど、キラほどの技量が無ければ不可能な芸当なのだ。

「千冬姉・・・これ、避けれるか？」

「織斑先生と呼べ・・・いや、今の私ではギリギリで避けるのが精一杯だろうな。弾いたりもいくつかは出来るだろうが、接近するのは不可能だろう」

暮桜・真打の性能なら可能かもしれないが、肝心の千冬が全盛期よりもやはり衰えてしまっている為、不可能だ。

シュヴァルツェア・レーゲンは重量がありすぎて回避不能、打鉄・式式とエクレール・リヴァイヴは白式や紅椿と同様である。

「しかし、これで試作機という事は、この先・・・出てくるのか、完成された第五世代が」

「第・・・」

「正直、私と一夏が第四世代を使っているからといって、安心出来る相手ではない。それだけ、第五世代の機体は恐ろしいんだ。ブリリアントフリーダムは・・・キラは味方だから安心出来るけど、レジエンドプロヴィデンスとインフェルノは敵だから、それが怖い」

第の言いたい事は、この場の誰もが理解出来た。

だからこそ、キラと束の二人は計画をいくつも立てていたのだから、それをこのタイミングで発表する。

「皆に話しておきたい事があるんだ。これは僕と束さんが計画していた事なんだけど・・・多少のリスクを犯してでも第四世代の技術を提供する事にした」

キラの言葉、それは千冬すらも寝耳に水だったらしく、キラとラクス、束以外の全員が驚愕していた。

「白式と紅椿以外の全て・・・ブルー・ティアーズ、甲龍、エクレール・リヴァイヴ、シュヴァルツェア・レーゲン、打鉄・式式、霧ミス纏テリアス・レイディの淑女、これら全てに展開装甲技術を搭載して、第四世代として改造する」

「監修は私こと、天才束さん！ 設計は同じく天才のキー君！ ブイブイ」

「それから、同時に白式と紅椿を第五世代として改造する事にした。第四世代技術に第五世代技術を搭載した新たな機体として」

今回の事、戦力強化の意味もあるが、キラとラクス、そして束の一番大本にある計画の為に必要だと判断した為の事だ。

世界中に第四世代の技術を広める事にはなってしまったが、それを埋める意味でも第六世代計画もあるので問題は無い。

「俺の白式と・・・」

「私の紅椿を・・・第五世代に？」

いきなり第五世代を託される事になった一夏と箒の二人、何故この二人に第五世代なのか、それは二人が白式と紅椿の操縦者だからというだけではない。

キラとラクスが最も注目している人間が、この二人だからだ。この二人、今はまだ覚醒していないが、段々とキラのSEEDとしての感覚が教えてきているのだ、二人の内に眠り、覚醒の時を待つ種子の存在を。

「第五世代を二人に託すにあたって、一夏と箒には皆とは別メニューの訓練を施す事になる。これは完全に僕とラクスが二人で行うから、覚悟していて・・・多分、数日は死にたいって思えるから」

「・・・」

二人に第五世代を託すまでに、やらなければならぬ。キラとラクス、二人の手で、若きこの二人に眠る種子の覚醒と、覚醒してからの訓練を。

「お、お兄ちゃん・・・？ 二人にどんな訓練をするの？」

「・・・知りたい？」

「っ！？ う、ううん！？ 絶対に知りたくないよ！？」

キラの微笑みが、何故か黒いオーラを纏っている様に見えて、シヤルロットは慌てて首を横に振った。

キラといい、ラクスといい、このカップルは似たところが多すぎる。今回の黒いオーラも、ラクスが時折出しているオーラと全く同じなのだから、正直・・・勘弁して欲しかったりする。

「とりあえず、皆の国からは許可も貰っている。第四世代技術データとの交換だね。まあ、明日から少しずつ作業を始めていくけど、その間は専用機が使えないなんて事は無いから安心して」

大きい作業は休日を使って行うので、平日の間は主にシステム面での作業だけだ。それはキラと束の二人掛りでやれば数日で終わる。

「それから会長」

「ん？ 実家を使えば良いのね？」

「はい」

「任せて、その代わり・・・簪ちゃん、手伝ってね？」

「え・・・お姉ちゃんの手伝い？」

「そ、私一人じゃ手が回らなくて・・・やる事が多いけど、頑張ってもらおうから」

簪に見せる様を開いた楯無の扇子には『勤労』の文字が書かれていた。

「よし、やる事は決まったな。ならば今日はもう解散だ。疲れをゆつくりと癒すと良い」

皆が解散した後、管制室にはキラと千冬、ラクス、束の四人だけが残った。

四人が見ているのはとあるデータ、それはキラと束が進めているプロジェクトである第五世代量産計画の資料と・・・もう一つ、第六世代型ISの試作機的设计データだ。

「ムラサメにアストレイ・・・これが量産化計画の要か。片方は汎用性を極めた機体であり、もう片方は・・・ほう？ 高速機動形態への変形機能か。構造上難しいだろうに、解決したのか？」

「ええ、凡そは」

「最初は無理かなあ？ なんて思ったんだけどねえ。なんか出来ちゃった」

それから、話は第六世代の話に移る。

「こちらが束さんとキラが考案した第六世代の設計ですわ」

「因みに、前のゴーレム？のコアを使って束さんの専用機にしようと考えてまゝす！」

「お前の専用機だと・・・？ それに第六世代か・・・本当に貴様等は世界に喧嘩を売るのが好きだな」

今だに第三世代の量産化に難航している世界を余所に、第四世代、第五世代と造り、更には第六世代、もはや世界に喧嘩を売っているとしか言えないだろう。

「それで、第六世代のコンセプトは何だ？」

「第六世代は第三世代の発展型で、自立行動兵器を搭載した機体になる予定です」

「自立行動、だと？」

「そう！ 操縦者の脳波とリンクして、兵器に搭載されたコンピュ

「ターA Iが独自に判断して行動する兵器、それが第六世代のコンセプトだよ」

「凄い物を考えたものだが、千冬からの観点で言わせてもらうのなら、実現したら面白い、だった。」

「そうか・・・ああ、そうだ東」

「ん〜？」

「今回の件、上には黙っていてやる。その代わり・・・暮桜・真打に第五世代の兵器を搭載してくれ・・・いや、正確には雪片・壱型を第五世代兵器として改造してくれ」

「良いよ〜」

簡単だった。簡単に答えてしまった。

だが、千冬の言いたい事も理解出来る。この先の戦いで、ビーム兵器の存在は必要不可欠、戦いの要となる一夏と篤が第五世代を手にするのなら、千冬もまた、第五世代の兵器が必要だと判断したのだ。

「私は、今のまま満足するつもりはない。福音事件以来、まだ暮桜を動かしていないが、もう迷わん。世界最強のIS操縦者・・・ブリュンヒルデとして、再び実戦へ正式に戻るとするさ」

勿論、学園の教師も続けるが、操縦者として現役に戻ると、千冬は宣言した。

「キラ、あいつ等への訓練で忙しいとは思って・・・少し、実践の勘を取り戻すのに協力してくれるか？」

「・・・勿論です」

こうして、世界最強の頭脳と世界最強の操縦者は、世界最高のトと共に立ち上がるのだった。

第七十五話 「戦後の緊急会議」(後書き)

第六世代、束専用機フラグと、主要人物の専用機強化と世代アップフラグ！

第七十六話 「大人なデート」 (前書き)

今夜は学園に帰りません！

第七十六話 「大人なデート」

ISSインフィニット・ストラトス
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十六話

「大人なデート」

ゴーレム？の学園襲撃と、亡国機業の篠ノ之東博士誘拐未遂事件の日の夜、キラとラクスは学園の食堂ではなく学園外にある高級ホテル最上階にあるレストランに来ていた。

黒いタキシードを着こなすキラと、桃色のドレスが美しいラクス、この二人の姿はホテルに入った時から周囲の視線を釘付けにしたのは言うまでも無いだろう。

「こちら、お飲み物は如何なさいますか？」

「僕はフランス製のシャトー・シャロンを」

「私はイタリア製のスフォルツァート・デイ・ヴァルテツリーナを
お願いいたします」

「畏まりました」

注文を終えてワインが来るのを待つ間、キラとラクスは窓際の席なのでホテル最上階から見える見事な夜景を楽しみながら話に花を咲かせていた。

「綺麗な景色ですわね」

「うん、雑誌に載っていたのを見て、是非ともラクスと一緒に来たいって思ったんだ」

学園からは少し離れた所にあるが、ホテル自体が大きいので、最上階からなら遠くの位置に学園が見える。

今の時間でも電気は点いているので、見つけるは容易かった。

「学園でも、今頃は食堂で皆、夕飯かな」

「一夏さんと篤さんは別のレストランでお食事だと仰ってましたし、シャルさん達はそうでしょう」

「お待たせしました。こちら、シャトー・シャロンとスフォルツァート・デイ・ヴァルテッリーナでございます」

ワインが来た。ソムリエの資格を持つ店員がワインのコルクを抜くと、キラとラクスのグラスにそれぞれのワインを注ぎ、再び栓をしてテーブルの上に置いた。

「それでは、もう直ぐお料理の方をお持ちいたしますので、それまでお楽しみください」

店員が去ったので、キラとラクスはお互いにワインの入ったグラスを持って乾杯する。

チン、と綺麗な音色の音と共にグラスが軽く触れ合い、二人は一口だけワインを口に含み、その香り、風味、味を楽しんだ。

「良いワインだね。シャルに教えてもらったフランスで有名なワインだけど、確かに良い」

「私のは以前の世界でも飲んでいたワインです。この世界でも美味しいですわ」

それから、前菜が来て、スープ、魚料理、肉料理、デザートと食事を食べ進め、高級ホテルの高級レストランが誇る味を楽しんでいた。

「美味しかったね・・・ここはまた来たいって思える」

「はい、メニューを見ると、ワインの種類も豊富ですし、今度は別のワインを楽しみたいですわね」

食事も終わり、ワインも程よく飲んだので、二人はレストランを後にした。

この後、学園に戻るのかと言われればNOだ。明日は今回の事件の影響で急遽、学園が休みになってしまったので、この後はキラとラクスが学園に入学してからの行き着けであるバーに寄って、その後・・・。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

行き着けのバーは近い、歩きで向い、バーに着くといつもの席に座っていつものカクテルを注文する。

「乾杯」

バーの雰囲気は、少し薄暗いながらも照明の明かりが幻想的な風景を彩る大人な雰囲気だった。まあ、バーは得てしてそんなものだが、この店は特に雰囲気を重視しているのか、店内は本当にキラとラクス好みなのだ。

「キラ」

「どうしたの？」

「私たちがこの世界に来て、もう一年経ちました」

「うん」

「長い様で、短い一年でしたわね」

本当に、この一年はあつと言つ間に過ぎ去つて行つた。

この世界に来て束と出会い、愛機であるストライクフリーダムがISに変化して、それから訓練の日々。学園に入学してからは一夏を始めとして篝、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、楯無、簪と、本当に様々な人と出会い、友として、仲間としての絆が出来た。

「でも、時々思うのです。私たちの世界では、今頃・・・皆さんが何をしているのか。私達が目の前で消えて、バルトフェルドさんが如何しているのか」

「それは・・・僕も考えていた。いつかは元の世界に戻りたいって思うし、今でも元の世界に戻る方法を探している」

だが、一年掛けても見つからず、今ではキラも守りたい居場所や仲間が存在しているのだ。嘗ての世界での、共に戦う仲間ではなく、キラが成長を見守り、一人前になるまで守り続けたいと思える者達だ。

だからだろうか、最近はキラもラクスも、元の世界に戻る事を考えなくなってきたのは。諦めた訳ではないが、もしこのまま見つからないのなら、この世界に永住しても良いのではないか・・・、そう考えてしまふ。

「キラ」

「・・・何？」

「たとえば、どんな世界だろうと、私はキラを愛しています」

「それは僕も同じだよ。僕も、元の世界でだろうと、この世界でだろうと、ラクスの傍に、これからも永遠に居続ける。ずっと、君一人を愛し続けていくよ」

寄り掛かってきたラクスに手を回して抱き寄せると、二人は静かに目を閉じ、お互いの温もりを確かめ合いながら、決して切れる事の無い絆を感じていた。

バーを出た二人は、普通の人間なら既に立ち上がる事も出来なくなるであろう量の酒を飲んでいるのにも関わらず、確かな足取りで今夜の寢床にもなる場所を目指した。

ピンクのネオンが眩しいホテル街、その中でもキラとラクスが此処に来る度に世話になっているホテルの中に入る。

フロントで鍵を貰い、いつもの部屋に向った二人の手は、確かに、固く結ばれていた。

「いつか・・・」

「？」

「いつか、会いたいですわね。もう一度、あの世界の皆さんに。たとえ帰れないのだとしても、一目で良いですから」

「そうだね」

部屋に入った二人は、その後明け方近くまで起きていた。

何をしていたのかは、問うまでもないだろうが、何故かこの日の夜は、いつも以上に熱く、お互いの胸の内では何かが大きく燃えていたのは、言うまでも無い。

朝、キラはベッドの上で目を覚まし、まだ眠っているラクスを起こさない様に起き上がると、床に落ちていたバスローブを身に纏って窓の傍に歩み寄った。

「変わらないね・・・何処の世界だろうと、朝の日差しは」

時間を見ると、チエックアウトの時間まで充分時間があるので、シャワーを浴びる事にした。

シャワーを浴びながら、キラはこれからの事を考える。一夏たちのこと、自分達の事、束との計画の事、亡国機業のこと、そして・
・ラウ・ル・クルーゼの事を。

「僕は、迷わない。この世界でも変わらず不殺を貫くつもりだったけど・・・・クルーゼ、貴方だけは、この手で殺す事を、絶対に躊躇わない。そして、亡国機業の人間も・・・もしもの場合は、僕が・・・」

決意は固まった。もしもの場合は、キラは己に科した不殺の信念を破ってでも、己が手を血に汚す事を躊躇わないと。

「それから、もしもこの世界でやる事が無くなったら・・・そうだね」

その時は、ラクスと二人で、何処か静かな場所で生涯を終えるまでのんびりと暮らしていこう。

元の世界に戻る事に固執するのは止めた。もし見つかればラッキ―だった程度に考え、この世界に骨を埋める覚悟で生きていこう。まだ若く、青い彼等の成長を、見守る。

「うん」

決意を新たに、シャワーを終えたキラは身体を拭いて着替えると、ホテルに来る前にコンビニで買っておいた缶コーヒーを冷蔵庫から取り出すと、プルタブを開けて飲み始めた。

「・・・・・やっぱ、缶コーヒーは缶コーヒーだね」

自分で淹れた方が美味しい。そう思いながら、椅子に座ってラク
スが起きるまで、その寝顔を楽しむのであった。

第七十六話 「大人なデート」 (後書き)

次回からオリジナルに入ります。

原作の8巻が出たらそれも交えていくでしょうが…。

原作の8巻って、いつ発売するんでしょうねえ？

番外編 1 「初めてのIS」(前書き)

番外編です。要望がありましたので。

番外編1 「初めてのIS」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

番外編1

「初めてのIS」

キラとラクスがコズミックイラの世界からISというパスワードの存在する世界に来て数日が経ったある日の事、キラは自身の愛機でもあるMSであり、この世界に来た時にISに変化してしまったストライクフリーダムの初起動をする事になった。

立会人としてデータを記録するのに束と、ストライクフリーダムをキラに託した責任のあるラクスが同席して、庭で初起動を始めようとするキラを今か今かと待ち侘びている。

「それじゃあ教えた通り、ISは持ち主の意思で起動する様になっているから。君が念じればちゃんと動いてくれる筈だよ」

「わかりました……フリーダム、起動！」

念じた途端、待機状態だったストライクフリーダムから蒼い光が溢れ、キラの全身を覆うと、0.6秒後にはMSの時のストライクフリーダムをそのまま小さくしたかの様な姿になったISを纏うキラの姿がそこにあった。

「これは……」

「へえ、珍しいね。フルスキン全身装甲タイプのISなんて」

「キラ、ヴァリアブルフェイズシフトVPS装甲は展開できますか？」

「ちよっと待って……えと」

ボタンらしき物は何も無い。ならば如何するのかと考えながらV
ブルフェイスシフト
PS装甲を展開していたときのフリーダムを思い出した。

すると、ディアクティブモードだったストライクフリーダムの装
甲色に変化して、灰色から白と黒に、間接は黄金、翼は青になる。

「念じただけでVPS装甲を展開出来た・・・」

「当然だよ。ISは基本的に操縦者のイメージ通りに動いたりシス
テムを起動したりするから、その色が変わった装甲も同じなんだと
思う」

「なるほど・・・」

すると、束が用意していたケーブルをストライクフリーダムに接
続して、自身の移動型ラボ「我輩は猫である(仮)」と繋ぐと、デ
ータを調べ始めた。

「あ、何だ。ファーストシフト一次移行は済んでるんだね。ならもうこのまま飛行と
武装のテストを始めようか」

「わかりました」

「飛ぶのも問題無いよね？ ロボットに乗って飛ぶのとは訳が違う
けど、何となくイメージ出来るでしょ？」

「はい」

MSだった頃のストライクフリーダムに乗って空を飛んでいた時
の事をイメージすると、スラスタが点火され、少しずつ宙に浮き
始めた。

「・・・よし！」

明確なイメージが出来上がると、その瞬間、ストライクフリーダ

ムと、それを纏うキラの姿は大空に飛び立っていた後だった。

物凄いスピードで空気を切り裂きながら飛び、超高速機動とも言える速度で飛び回る姿はまるで機械天使の如く。

「じゃあ今からミサイルを撃つから、武装を使って落としてみて」
『了解です』

束の傍に展開されたミサイルランチャーから大量のミサイルが発射されて、空を舞うキラに迫ってきた。

キラはMSとISの操縦の違いや視線の違いに戸惑いながらも両手のビームライフルを構え、ミサイル全機にマルチロックオンシステムで狙いを定める。

「いけえ!!」

両手と両腰、胸の合計5つのビームやレール砲によってミサイルは全て撃ち落されてしまった。だが、束が更に撃ってきたミサイルを確認すると、ビームライフルをマウントしてビームサーベルを抜刀、高速機動でミサイルに接近し、擦れ違い様にビームの刃をミサイルに奔らせた。

そしてキラがミサイルから離れた所で、ミサイルは全て真っ二つに切り落とされ爆発する。

『ねえ、その羽も武器なんでしょ？ 使ってみてよ』

「いえ、これは大気圏の中では使えないんですけど・・・」

『ん？ でもデータを見る限りだと大気圏内でも使用に問題は無いって書いてあるよ?』

「・・・え?」

まさか、と思いながら、確認の意味も込めてキラは恐る恐るドラ

グリーンをパージしてみた。

すると、パージした瞬間に重力で落下するだろうというキラの予想を裏切り、宇宙空間で使っていた時と変わらない動きを見せるドラグリーンに驚く。

「本当に使えた・・・」

ならば問題ない。更に飛来してきたミサイルをドラグリーンで次々と撃ち落しながら、大量にロックオンしていった。

「これで!!!」

ドラグリーンフルバースト、13の光がミサイルを貫き、全てを爆破していく。

テストを終えたキラはラクスと束の所に戻り、ストライクフリーダムを解除するとデータ収集をしていた束の傍に歩み寄った。

「如何でした?」

「ん〜・・・とりあえず言えるのは、機体も操縦者の君も規格外過ぎるって事かな? IS適正ランクも調べたけど、Sって・・・私やちーちゃんクラスだよ」

ISの適正ランクSは世界にも数えるほどしか存在しないらしい。日本人では今のところ確認されているのはIS開発者でもある彼女、篠ノ之束と、その親友にして第一回モンドグロツソ優勝者であるブリュンヒルデこと織斑千冬のみ。

「後は過去のモンドグロツソでブリュンヒルデになった選手くらいかな?」

千冬は総合優勝だったが、他にも部門優勝をした選手にもSランクはいる。だが、それでもSランクはほんの一握りしか存在していないのだ。

「まあ、とりあえず動かし方とかはこれから何度も練習しておけば完全に覚えるでしょ？ それじゃあ研究の手伝いを早速だけどもお願い」

特に疲れたという事は無いので、着替えたキラは早速だが束と共に研究室に入り、開発中の白式と紅椿、暮桜・真打のプログラミングを開始した。

束と同時進行で行うのだが、キータッチは二人ともほぼ同スピードで、正確性も同じ、そのお蔭で束が一人で行っていた時の倍の進行速度で作業が進んだ。

「凄いね、まさか天才の束さんと同クラスの速度でキータッチ出来て、尚且つ同じ正確性のあるプログラムを作れるんだから」

「プログラミングは得意でしたから」

それから二人はラクスが夕飯の支度を終えるまでずっと開発室に籠って作業を進めていた。

作業の間、それから食事の間にも束がキラとラクスに対して何か話しかけることは殆ど無く、そんな生活が一月ほど経ったくらいだろうか、漸く心を開き始めた束がキラに対して一つ試験を出したのだ。

「暮桜・真打の単一仕様能力ワンオフアビリティの構築……ですか？」

「そう、前の零落白夜だと白式と被っちゃうから、新しい単一仕様ワンオフアビリティ能力を構築しようと思ってねえ。それを君に任せようと思うの」

「はぁ……」

白式の零落白夜は既に構築が終わっており、残すは回路のみの段階になっていた。

だが、束が親友の為に用意する暮桜・真打は単一仕様能力で難航ワンオフアビリティしていたのだ。

前のままだと零落白夜のままになってしまい、白式と同じになっ
てしまう。それでも良いとは思うのだが、やはり被せたくはないし、
そもそも暮桜・真打は白式以上に燃費の悪い機体になってしまった
ので、零落白夜では白式以上の短期決戦機になってしまう。

「少し、見せてもらっても？」

「いいよ〜」

暮桜・真打のデータと白式のデータを出してアイデアを練る。普
通の零落白夜では駄目なら、零落白夜から進化させてみれば良いと
キラは考えた。

勿論、それは束も考えたが、なら如何する？ という話なのだ。

「あ、そう言えば紅椿のデータってありますよね？」

「ん？ これだよ〜」

「ありがとうございます」

紅椿のデータも出して三つのデータを同時に眺めながら考えた。

暮桜・真打は名目としては白式と紅椿のプロトタイプとして開発
している。ならばこの二機の基となる機体に仕上げなければならな
いのなら……。

「絢爛舞踏がエネルギーを回復させる単一仕様能力だから……」
ワンオフアビリティ

試しにとキラはキーを叩き、暮桜・真打の単一仕様能力に設定さ
ワンオフアビリティ

れている零落白夜を弄りだした。

シールドエネルギーを消費するという点を変えず、そこに新しく加えるという形で絢爛舞踏のエネルギー増幅効果を持つてくると・・。

「あ、良いかもしれない」

「お？ 出来た？・・・。。おお！ これは良いね！ 正に白式と紅椿のプロトタイプに相応しい能力だよ！」

「絢爛・零落白夜と名づけました。安直ですが、絢爛舞踏と零落白夜、この二つの力を併せ持つ単一仕様能力として構築してみたんですけど・・・。」

確かに安直ではある。しかし、その分凄い機体になってしまった。燃費の悪さは相変わらずだが、単一仕様能力を発動すると、消費したシールドエネルギーを完全回復して、尚且つそこからエネルギーを使ってバリアー無効化攻撃をする。

連続での使用は不可能だが、それでも30分待てば再び使える様になるのだから、ほぼ無限の零落白夜を放てる能力になったのだ。

「うんうん！ これは凄い！！ これならちーちゃんにピッタリの機体になるよ！ ありがとねキー君！！」

「・・・き、キー君？」

「キラ・ヤマトだからキー君！ もう束さんはキー君を気に入っちゃった！ キー君は束さんと話しが合うし！」

「はあ・・・。」

すると、夕飯が出来たのか、ラクスが開発室に顔を出す。

「キラ？ 束さん？」

「あ、ラクス・・・。」

「ご飯出来たの〜?」

「はい、ですのでリビングに来てくださいな」

という事で、リビングに来ると、それぞれの席に座ってラクスの手作り料理を食べ始めた。

「いや〜、今日は良い日だね〜。ねえラーちゃん!」

「・・・え?」

「ラーちゃん、ラクス・クラインだからラーちゃん」

「えと・・・何故でしょう?」

「だって、キー君の恋人だし、いつも美味しい料理を作ってくれてるからね〜」

何事かと、ラクスがキラに視線を向けると、キラは先ほどの事をラクスに教えた。

納得はしたのだが、ラクスとしてはあだ名で呼ばれるという経験が皆無なので、少し恥かしそうにしている。

「キー君が恋人に選んだラーちゃんだもん、束さんだって認めるよ〜」

自分と同じ天才が恋人として認めた人物なのだから、束としても興味の対象に入る。ならば束としても身内と認めて良いだろうという事らしい。

「さ! 夕飯を食べ終わったら早速始めよう? 暮桜・真打と白式、

紅椿の開発の続きを!」

「・・・ええ」

「頑張ってくださいね」

それから、世間に初の男性IS操縦者として織斑一夏の名が現れるまで、三人は初めて出会った時とは比べ物にならないくらい仲が良好になり、年齢も近い事もあって友人としての絆を深めていくのだった。

番外編 1 「初めてのIS」 (後書き)

次回は…書いてます。

第七十七話 「優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子」 (前)

サブタイながっ！？

第七十七話 「優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十七話

「優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子」

全学年合同タッグマッチが中止になって数日、キラとラクスは夏と篝の二人を連れて第四アリーナに来ていた。

先日、この二人にキラとラクスが直接指導をしながら特別な訓練を施すと話をしているので、早速この日、それを行う事になったのだ。

「な、なあキラ、ラクス、俺達がやる訓練って、何なんだ？」

「そうだ、そもそも訓練なら他の者も一緒に良いと思うのだが・・・」

一夏と篝の言いたい事は理解出来るが、この訓練はこの二人だけの方が良いのだ。キラとラクスが感じ取った二人の内に眠る種子の気配、それを覚醒させる為の訓練は他の人間にさせても意味が無い。

「二人にはこれから訓練に入る前に実感してもらおう。ISを展開して」

「実感？・・・まあ、とりあえず・・・来い、白式！」

「む・・・紅椿、行くぞ！」

二人がISを展開したのを確認して、キラもブリリアントフリーダムを展開した。

リミッターは一切無し、その状態で宙に浮き上がると、二人にも同じように構える様に言う。

「先ず、二人にはこれから僕が使う力を見せよう・・・っ！」

そう言うと、キラの脳裏で種が弾ける衝動が起きた。アメジスト色の瞳からハイライトが消え、微笑みを浮かべていた顔からは表情らしい表情が抜けて無表情となる。

「そ、それは・・・一体」

「それにこの威圧感・・・何だ、この力」

今までキラとの訓練で感じた事の無い威圧感、表情、瞳、その全てに二人は戸惑った。

思わずラクスの方を見たのだが、そこでも驚く。いつの間にかオルタナティブを展開していたラクスマでもが無表情になり、瞳からハイライトが消えた状態になっていたのだから。

「これが僕とラクスの切り札、SEEDだよ」

「SEED・・・？」

「種・・・？」

SEEDと言われれば、確かに日本語訳の種が連想されるだろう。だが、キラが言っているSEEDとは別の意味だ。

「SEED、正式名称は“Superior Evolutionary Element Destined-factor”・・・

・優れた種への進化の要素である事を運命付けられた因子の事」

「コーディネイター、ナチュラル問わず現れる因子なのです。ヒトの遺伝子に何かしらの要素があつて発生した因子であり、その因子

を持つ者は優れた種への進化の要素であるという運命が課せられるのです」

SEEDが覚醒すると、今のキラやラクスの様に瞳のハイライトが消え、表情も怒の感情を残して消失する。

更に戦闘能力だったり、指揮能力だったり、脳内演算能力だったり、凡そ戦いに必要な能力が爆発的に上昇するのだ。

「なあ、キラ、ラクス・・・そのSEEDってのが、俺と等に何の関係があるんだ？」

「判らない？」

「まさか・・・」

箒は気付いた様だ。そして一夏も少し考え、可能性に至ったのかまさか、という顔をしてキラの顔を見た。

「二人とも気付いたね。そう、二人の中にも眠っているんだ・・・SEEDに覚醒するための因子が」

「俺と等にも・・・」

「因子がある、だと・・・」

しかし、そこで気になるのは何故、キラとラクスがその事に気付いたのかと言う事だ。察するに遺伝子を調べなければ普通は判らないはずなのに。

「SEEDを持つ者であるが故に気付けた・・・からかな。何となく、SEEDに覚醒してから長いから、
同じSEEDを持つ者の気配が判る様になったんだ」

唯一例外としてSEEDを持つ者の気配が判るのはキラ達の世界

のマルキオ導師だろう。彼は盲目であるが故に気配といったものには敏感で、偶然にもSEEDの気配を察知することが出来る様になったのだ。

「二人にはSEEDを覚醒してもらおう。亡国機業との戦いがこれから激化していくのは間違いないし、二人は今まで以上に強くなってもらわないと。その為のSEEDでもあるんだ」

「しかし、どうすれば覚醒出来る？ 私と一夏にその因子があるのは判った。だが、簡単に覚醒出来るものではないのだろうか？」

「うん、正直言っただって初めてSEEDに覚醒したのは仲間の危機で咄嗟に、という状況だったから」

だが、二人に同じ真似をさせる訳にはいかない。ならば残る手段はキラ達SEEDを持つ者が覚醒する時の状態を無理やり作れば良いのだ。

「SEEDに覚醒する時、僕達は極限まで集中力を高めているんだ。後は勝手に覚醒してしまうから詳しいアドバイスは出来ないけど」

「ですので、お二人には戦闘を行いながら集中力を極限まで高める訓練をしていただきます」

その為の戦闘訓練もある。

「それって・・・」

「うん、僕とラクス、二人を同時に相手しながら集中力を高める訓練をする」

「・・・」

言葉も出ない。キラとラクスのコンビ、未だ公式戦どころか模擬戦でも組んで戦った事が無い。それ故に未知数だと言えるのだ。

最も、一つだけ判るのは後ろにラクスが居るといふ状況下でのキラは、無敵だといふ事だ。

「じゃあ、早速始めようか」

「行きますわよ」

「気が重いぜ・・・」

「ああ・・・」

刹那、無数のビームとレール砲、ミサイルが一夏と箒の下に飛来してきた。

必死に避け続ける二人を嘲笑うかの様に次々とビームが来て、時にはキラが自ら接近してきてビームサーベルが襲い掛かる中、二人は開始10分もしない内に悲鳴を上げるのだった。

模擬戦が開始30分で終わった。

最初といふ事でキラが随分と手加減をした為30分だったが、恐らくキラが本気で行っていれば10分で終わっていただろう。SEEDを発動中のキラはそれくらい強い。

「まあ、最初だから仕方ないかな」

既にSEEDも解除して、ISも待機状態に戻してあるキラは同じくISを待機状態に戻し、アリーナの地面に膝を着いて荒い息を吐き続ける一夏と箒の傍に歩み寄る。

ラクスはオルタナティブを展開したまま先ほどの模擬戦の結果を解析しながら三人の様子を眺め、何を考えているのかずっと微笑んだままだ。

「き、キラ・・・いつもの、模擬戦、より・・・強え・・・」

「あれが、し、SEEDを、発動した……者の、力なのか……」
「あれでも大分手加減はしたけどね。でもSEEDを発動したら当然だけど戦闘に必要な要素全てが大幅に強化される。だから今までの模擬戦以上に余裕はあったのは事実だよ」

そして、それはこれから一夏と筈が習得しなければならないものだ。

「今日は最初だったから集中なんて出来なかつただろうけど、明日からは集中力を高める事を意識しながら戦ってね」

「む、無茶……言うなって、の……」

「あれで、どうやって、集中……しろと」

無茶は承知の上で言っている。正直な話、一夏と筈のISのバージョンアップは並ではない予定なのだ。だからSEEDを覚醒出来なければ簡単に機体を暴走させてしまう恐れがある。

「二人のISは、二人がSEEDを覚醒させられる事を前提でバージョンアップする予定だから、出来なければISを暴走させる事になるよ」

「マジか……」

「……SEEDを覚醒させる事を前提に……」

どんな化物ISに進化する予定なのだろうか、白式と紅椿は。そんな事を考えていても、束とキラという二人の天才が自ら行うバージョンアップなのだから、性能の馬鹿高さなど当然と考えて良いだろう。

「じゃあ今日はここまで。今夜はゆっくり休んで、明日から本格的に行くからね」

オルタナティブを解除したラクスと共にアリーナを去るキラの後姿を眺めながら、漸く息が整ってきたのか深い溜息を吐いた二人、しかしその胸の内には自身の可能性に高鳴っていた。

「なあ箒」

「何だ？」

「俺達、更に強くなれるんだな」

「ああ」

勿論、それは二人の頑張り次第だ。

「SEED・・・優れた種への進化の要素である事を運命付けられた因子かあ。そんな凄えものを、俺達が持つてるなんてなあ」

「修練次第ではキラのいる高みに、行けるかもしれない・・・いや、無理か」

キラは二度の戦争で多くの戦い・・・ISの試合ではない命を懸けた戦いを何度も経験している。その経験から来る実力は今の一夏や箒では遥か雲の上に行く。

「でもさ、せめて千冬姉クラスには、届きたいな」

「・・・そうだな」

キラクラスとは言わない、だがせめて千冬クラスにはなりたいたいと心底願う二人であった。

アリーナから立ち去ったキラとラクスはシャワーを浴び終わると寮への帰路に着いた。

寮までの道程を歩きながら、キラはラクスに先ほどの戦闘での解析結果を聞いている。戦闘以外にも記録していた事があるのだ。

「それで、二人のIS適正ランクは如何だった？」

「驚きました。お二人の入学当時のランクは一夏さんがB、箒さんがCでしたのに、今回の模擬戦での記録ではお二人揃ってSを出しています」

Sランク、つまり一夏と箒は千冬やキラといった最強クラスと同ランクの適正を持っているという事になるのだ。

つまり、鍛え方次第では間違いなく最強クラス、ブリュンヒルデクラスにはなれるという事。

「二人が強くなる日が待ち遠しいよ」

「はい」

キラと束の計画の要でもある二人、この先の未来において重要なポジションにいる一夏と箒のレベルアップが、今から楽しみで仕方が無い。

二人の兄貴分、姉貴分として、キラとラクスは才能溢れる弟分、妹分のこれからの成長を、期待しながら、寮の中に入ることだった。

第七十七話 「優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子」(後

明日も早番…転職してから仕事が楽しくて楽しくて…。

次回はまだまだ続くよ！ 地獄の訓練！ それとISのバージョンアップについてのお話。

第七十八話 「新たな力とは」 (前書き)

今回は質が良くないかなあ。

第七十八話 「新たな力とは」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十八話

「新たな力とは」

一夏と箒がSEEDに覚醒する為の訓練が始まった翌日、早速だが二人への訓練は激化した。

昨日以上のビームの嵐が二人に襲い掛かり、最早回避する余裕すら無い状況の中でも極限まで集中して避ける方法を模索する、そこから反撃する術を見つけなければならぬという訓練は、正直に言うて地獄以外の何物でもない。

「はい、今日もこれで終わり」

「・・・・・・・・・・」

訓練を終えた後の一夏と箒はグロッキー状態で、言葉を発する余裕も無かった。

指一本、その指先すら動かすだけの体力も無くなってしまっ程度の訓練を、見学していたセシリア達はというと、絶句を通り越して見ていられなくなってしまっ。

本当にこれが一夏と箒の為になるのかという疑問も湧いてくるのは、SEEDの事を聞かされていないからこそなのだが、それは仕方が無い。

「じゃあ、二人は立ち上がれる様になったらシャワーを浴びて寮に帰って良いよ。僕とラクスは束さんの所に行くてくるから」

「それでは、お疲れ様でした」

未だにアリーナの地面に倒れて返事をする事が出来ない二人を放置して、キラとラクスはシャワーを済ませると、束が待っている学園地下の極秘開発室に向った。

極秘開発室、此処はキラがエクレール・リヴァイヴを造った場所でもあり、束に与えられた研究室でもあるのだ。

「束さん」

「お疲れ様です」

「あ、やっと来た。もう、遅いよ」

先に一夏達のISのデータを開いて眺めていた束は、部屋に入ってきた二人の方を振り向くと、少し頬を膨らませる。

「すみません。それより、如何ですか？」

「うーん、このブルーティアーズとエクレール・リヴァイヴ、それから打鉄・式式に関してはキー君に任せるよ。甲龍とシユヴァルツエア・レーゲンは束さんとラーちゃんできちんとしておくから」

「まあ、適任でしょうか。フリーダムと同じ戦闘タイプのブルーティアーズと、キラが手掛けた二機は、キラが一番やり易いでしょう」

ならばと、早速だがキラはブルーティアーズのデータから展開を始め、新しく第四世代として改造する為のプランを練り始めた。

「BT兵器に関しては操縦者の空間把握能力に依存しないドラグーンのデータを応用して作り直すとして、展開装甲を如何しようかな・・・」

ブルーティアーズのデータを片手でスクロールさせながら、もう片方の手では設計図を作成していく。

二つの作業を同時進行させているのだが、キラにとって、この程度は朝飯前の作業だ。

「BT兵器に搭載してみるのも面白いかな。射撃一辺倒にするんじゃないくて、紅椿みたいに展開装甲でレーザーの刃を展開しながら射撃をしたり突撃させたりするのも・・・」

「いつそ、BT兵器をドラグーンとして作り直しても良いのだが、それだと第五世代にしないとキラの気が済まないので、あくまでBT兵器として考える。」

「スターライトmk?も改造しておこう。いつその事、インターセプターの刃をレーザー刃に変えて、ライフルに接続して銃剣の様に使える様にしてみるのも有りかな」

もしくは完全にインターセプターとライフルを一緒にしてしまつて、銃剣として作り直すのも良い。そうすればインターセプターの分の容量が空くので、新しい銃型の兵器を搭載出来る。

「よし、後はブースター周りを展開装甲にしておけば速度も今まで以上に出せるから、射撃ポイントへの移動もスムーズになる。これでブルーティアーズは決定かな」

次にエクレールリヴァイヴだが、これは正直、キラが全霊を込めて造った機体だから、弄りようが無い。なので、紅椿と同じ全身展開装甲にしてしまう事にして、次は打鉄・式式だ。

「これはブースターと夢現を展開装甲にしまえば良いかも」

夢現は雪片・壱型や弐型の様に展開装甲を使った武器にして超振動の刃とレーザーの刃、二つを使い分けられる様にしてしまう。

「うん、これで打鉄・弐式も完成」

ブルーティアーズはキラが手掛けた機体じゃないので、色々改良する点が見つかったが、その他の機体に関してはキラが関わった機体なので、特に弄る必要は無い。

束とラクスの方は如何なのかと見てみると、甲龍は双天牙月に展開装甲を使ってレーザー刃を展開出来る様にしただけで、特に変化は無かった。

シュヴァルツエア・レーゲンは全身展開装甲にして、レールカノンの部分を実弾のレールカノン、レーザーのレーザーカノンと、両方を使い分けて発射出来る様にしている。

「キー君の方は設計終わった？」

「ええ、後は・・・」

「白式と紅椿、それから暮桜・真打ですわ」

第五世代としてバージョンアップさせる三機、特に白式は^{セカンドシフト}二次移行を果たした機体なので、細かい調整をしながら第二形態のまま第五世代としてバージョンアップさせなければならない。

「まず、レーザーの部分は全部ビームに変更、紅椿と暮桜・真打にはビームシールドを搭載して、白式にはパワーエクステンダーを搭載しようと思うんだ」

「いつその事、白式と紅椿はエネルギーを全てデュートリオンエネルギーにしてみても如何ですか？」

インパルスの様にデュートリオンエンジンを搭載して、紅椿には絢爛舞踏を発動すると、白式へのデュートリオンエネルギー送電システムが発動する様にすれば、よりスムーズにエネルギー補給が可能になる。

「暮桜・真打にもパワーエクステンダーを搭載して、デュートリオンエンジンも載せる？」

「そうですね、これで第五世代としては完成ですね」

ただし、もう一つ白式には搭載した兵器がある。それは掌に雪羅以外の武装として搭載したパルマフィオキーナ掌部ビーム砲の事だ。

「それから、第五、第四全ての機体をTP装甲トランスフェイスにしてしまえば実体兵器は効果が無くなります」

フェイェスシフト ヴァリアブルフェイェスシフト
PS装甲やVPS装甲はISのエネルギーでは不可能、第五世代にする三機なら可能だろうが、燃費の悪い三機には不向きなので、トランスフェイス
全機ともTP装甲にしたのだ。

「設計図、けっこう簡単だったね」

「まあ、僕はこの後もブルーティアーズに新しく搭載する武器のアイデアを練り上げなければならぬんですけど」

「銃系統ですか？」

「うん、セシリアには完全に遠距離型に固定してしまう事にしたんだ。精々スターライトが銃剣になった程度しか近接戦闘手段は無い」

だが、それで良い。元々、ブルーティアーズは一对多を想定されている機体だが、セシリアは学園に来てからは仲間と共に多対一の戦闘が多くなったのもあり、どちらにでも対応出来る機体にしてしまった方がセシリアも使いやすくなるのだ。

「まあ、後は実際にバージョンアップしていただけたねえ。改造が楽しみだよ」

基本設計が完成したので、一先ず作業を終える。

後は特にやる事が無いので、キラが淹れた珈琲を飲みながら（ラクスは自分で淹れた紅茶）、それぞれのバージョンアップ作業日を決める為の話し合いを行った。

「一番時間が掛かるのは白式、紅椿、暮桜・真打、ブルーティアーズですので、キラはエクレール・リヴァイヴを、東さんが打鉄・式を始めては如何でしょう？」

「その後で僕がブルーティアーズを、終わり次第、東さんが先に始めているであろう第五世代へのバージョンアップに加わる形かな？」
「だね」

作業日程も凡そ決まり、後はのんびりとお茶を楽しむ。

三人の後ろでは、束が作っていたのであろう第六世代型ISの設計図が、静かにディスプレイに表示されていた。

篠ノ之束専用、第六世代型IS。コードネーム……“樂園の兎”。

第七十八話 「新たな力とは」(後書き)

次回は未定…明日は遅番の仕事orz

第七十九話 「キラの地力」(前書き)

大変お待たせしました！ 最新話更新です！！

第七十九話 「キラの地力」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十九話

「キラの地力」

キラと束による一夏たちのIS強化が進んでいるある日、キラと千冬は道場の中央で向かい合っていた。千冬は木刀を一本の一刀流キラは木刀を二本持った二刀流で相對する。

そんな二人の様子を一夏たちお馴染みのメンバーが道場の片隅で心配そうに窺っていたのだが、そもそも何故こんな事になったのか、それは前日の夜に話は遡る。

「なあ、キラってIS使わないで戦うと、どれくらい強いんだ？」

いつも通り、皆揃っての夕飯の席で、一夏が何となく聞いたこの言葉が事の発端だった。

「僕の地力って事？ まあ・・・それなり、かな？」

まだキラがスーパーコーディネイターだという事を話していない楯無と簪が居たので、言葉を濁したが、この場にはキラの実力に興味を示す者が一人居るのを忘れてはいけない。

「ほう？ それなりか・・・私も興味がある。如何だ？ 一つ手合わせするか？ キラ」

「えと・・・千冬さん？」

千冬がキラの実力に興味を示した。

今まで、キラと千冬は生身でも、ISでも戦った事が無い。だからだろうか、千冬はキラの実力に興味があったのだ。

ISでは確実に敵わないのは見ていれば理解出来るが、生身の戦いなら如何なのか、それが気になるのもあるし、スーパーコーディネーターの身体能力にも興味がある。

「明日の放課後、空けておけ。道場でお前の生身の實力を確かめさせてもらおう」

「え」と・・・一夏

「諦める、千冬姉がこう言った以上、もう止められねえんだ」

「え」・・・

諦めるしか無かった。そもそも、千冬に目を付けられて逃げられる筈が無いのは彼女を知る者なら悟って当然で、彼女の性格上、逃げれば地の果てまで追いかけてくるのは間違いない。

「キラ、ファイトですわ」

「頑張つてね、お兄ちゃん」

「キラさん、怪我だけはしないでくださいね」

ラクスとシャルロット、簪の言葉が、妙にプレッシャーとなってキラの背中に重く押し掛かってきて、キラは引き攣った笑みを浮かべる事しか出来ないのであった。

道場の中央で相對するキラと千冬。

千冬は勿論、始めから気合充分で既に全身からは剣気を放ってお

り、対するキラはというと、道場に来るまでは乗り気ではなかったのに、こうして千冬と対峙してからは表情が一気に引き締まり、普段の儂げな微笑は消え、全身から歴戦の戦士のみが放つオーラを身に纏っていた。

「では・・・」

審判を務める事になった真耶が、二人とも準備は整ったことを確認して、右腕を上げ・・・。

「始め！」

振り下ろすのと同時に二人が動いた。

千冬の振り下ろした木刀が鋭い軌跡を描きながらキラの脳天目掛けて迫り、それをキラが身体を捻りながら避け、その流れから両手の木刀を一閃、二閃と振るう。

「むん!!！」

だが、キラが放った二本の木刀の斬撃は、容易く流され、弾かれた。だが、キラもそれは予想済みで、キラの木刀を弾いた千冬が鋭い突きを打ってきてても左手の木刀で逸らし、右手の木刀を振るといふフェイントを掛けると千冬の足元を自身の足で払った。

「っ! しまっ!？」

「はあっ!!！」

キラのフェイントに引つ掛かったのは油断か、それともキラが木刀のみしか使わないとも思っていたのか、それは定かではない。

しかし、このチャンスを逃す筈も無く、キラは腰まで下げていた

木刀を一気に振り上げ千冬の木刀の破壊、或いは彼女の手から木刀を弾こうとする。

「くっ！ 嘗めるな！！」

「ゲウツ！？」

アンバランスな体勢から千冬はキラの木刀目掛けて己が木刀を渾身の力でもって振るい、互いに腕を大きく弾かれる結果となった。

互いに弾かれて距離を取る。まだ二人とも息切れをしているという事も無く、まだまだ戦えそうさ。

「キラ、お前の剣技はザフトの軍隊式剣術か？」

「いえ、剣技の方はザフトではなくオーブです。刀はザフトよりオーブの方が栄えていたので」

剣と言えばオーブは刀が主流で、大西洋連邦や地球連合軍は西洋剣が主流、ザフトは剣ではなくどちらかと言えばナイフの方が盛んだった。

「特に、僕に剣を教えてくれた人が凄かったですから」

思い出すのは刀の扱い方、刀での戦い方を教えてくれたキサカだ。カガリの護衛も兼任しているオーブ軍一佐で、オーブ軍一の刀の使い手とも言われている。

普段は重火器を扱っているイメージがあるが、刀の腕が超一流だと知った時には驚いたものだ。

「そうか・・・では、いくぞ！！」

「っ！！」

先ほどよりも速く、鋭く、重くなった千冬の一撃、受け止めた木刀を持つ腕が一気に痺れてしまった。

「まだだ!!」

「クツ・・・はあ!!」

両腕が痺れてしまったキラだが、まだ戦えると判断して受けの姿勢から避けの姿勢に入り、速過ぎて切っ先が見えない木刀を避けつつも自身の姿勢を低くして一気に千冬の懐へと飛び込んだ。

「はあっ!!」

「グウツ!?!」

すれ違い様に放ったキラの斬撃が千冬の木刀を破壊し、腹部にめり込んだ。同時にキラの左の木刀が粉碎し、千冬の左拳がキラの右脇腹に入っていた。

「ゴホツ、ゴホツ!・・・僕の、勝ちですね」

「グツ・・・ああ、今のが真剣なら、私は胴体を断ち切られて真っ二つだっただろうな」

結果としてキラが勝った。しかし千冬はナチュラルの身で軍人として鍛え上げたスーパーコーデイネイターであるキラと生身で互角に戦ったのだ。

正直、千冬の白兵戦能力はザフトでも通用するであろう。並のコーデイネイターの上を行っているのだから。

「良い勝負だった。キラ、また今度、相手を頼めるか? お前となら昔の勘を取り戻すのも容易そうだ」

「・・・そう、ですね。千冬さんはそれもありましたっけ」

最初は乗り気ではなかったキラも、これが千冬の為であり、今後の為だと思えば吝かではない。手を差し出してきた千冬の手を握り、確りと握手をしてからキラは男子用シャワー室に向った。

「・・・ふう」

頭から冷水を浴びて、その後で熱い湯を浴びると、いつの間にか全身に流れていた汗が一気に洗い流されていく。

シャワーの心地よさを楽しんでいたキラだったが、ふとシャワー室に入ってくる人の気配を感じた。ここは男子用に指定されたシャワー室なので、入ってきたのは間違いなく一夏だ。

「一夏、如何かしたの？」

「あ、いや・・・サンキューなキラ、千冬姉の相手をしてくれて」「？」

「その、さ・・・千冬姉って最近、少し焦ってたんだよな。隠してたみたいだけど、弟の俺から見れば一目瞭然でさ、早く昔の勘を取り戻そうと少し焦ってたんだ。でもさ、そこにキラとの手合わせで先が見えたみたいで、千冬姉、すげえ喜んでた」

「そっか・・・」

ならば良かった。

キラは一夏が改めて頭を下げたのを気配で感じながら、もう一度シャワーのお湯を頭から被り、今度こそ気持ちの良い汗を流した。

第七十九話 「キラの地力」(後書き)

次回はどうしようかなあ……。今回は千冬の話だったので……アンケート。

? シャルロットとキラ、二人きりの話

? キラと簪、二人きりの話

? 一夏と箒、二人きりの話

? キラとセシリア、二人きりの話

? キラと東、二人きりの話

以上の中からアンケートを取ります。次回はどれにしましょう？

第七十八話 「強くなる為に」(前書き)

大変お待たせしました!! アンケートの結果、今回のお話は一夏と第メインです。

第七十八話 「強くなる為に」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十八話

「強くなる為に」

キラとラクスの指導の下、SEED覚醒の為の訓練を続ける一夏と箒だが、中々芳しくない状況が続いていた。

確かに訓練を始める前よりも強くなったという自覚はある。今なら一夏も箒も、一年の専用機持ちの中で最も強くなったという自信だつてある。だが、それでもSEEDに目覚める兆しが見えてこない。

そしてこの日、一夏と箒はキラとラクスが専用機の世代アップの為の作業という事で訓練が休みになったのにも関わらず、二人で第4アリーナを借りて自主訓練を続けていたのだ。

【ワンオフアビリティ単一使用能力：零落白夜、発動】

【ワンオフアビリティ単一使用能力：絢爛舞踏、発動】

「おおおおおおあああああああ！！！！」

「はあああああああああああ！！！！」

互いに黄金の光に包まれながら雪片・式型を振るう一夏と、雨月と空割を奔らせる箒、消滅の力と増幅の力、相反する矛盾の力がぶつかり合って激しくスパークし、弾ける様に白と紅が大きく距離を取った。

「はあ、はあ、はあ……そろそろ、止め shouldn't か？」

「う、うむ・・・そう、だな」

結局、この模擬戦でもSEEDを覚醒させる事が出来なかった。確かに今までの模擬戦と比べればレベルが桁違いで、既にIS学園の生徒というレベル所か、代表候補・・・否、国家代表クラスの戦闘を行っていたのだが、それでも駄目だった。

「なあ、本当に俺達にSEEDがあるのかな・・・？」
「・・・如何いう事だ？」

ISを解除してアリーナの中央に座り込む一夏と箒だったが、突如一夏が問いかけてきた内容に、箒は若干だが困惑しながら聞き返す。

「いやさ、俺達がSEED覚醒の為の特別訓練を受け初めて2週間が経つたろ？ 確かに実力に関しては上がったっていう実感があるけどさ、正直なことを言うとSEEDが目覚める気配が一向に無いってのはな」

「だから、キラとラクスが私たちにSEEDの因子があると思ったのは勘違いだったのではないかという事か？」

「まあな」

確かに、一夏と同じ疑問を箒も持ち始めていたのは確かだ。一向に目覚める気配の無いSEEDの因子、それが本当に自分たちにあるのだろうか、そんな考えがここ最近になって芽生えてきている。

「まあ、もしもSEEDが目覚めなくても訓練のおかげで前より断然強くなったから、全くの無意味だとは思わないけどな」
「そうだな」

今の一夏と等なら学園最強の楯無とも良い勝負が出来る。いや、戦い方によつては勝てる可能性だってあるだろう。

「さて、と！ そろそろシャワー浴びて飯食いに行こうぜ？ みんなも待つてるだろうし」

「う、うむ・・・あ、その一夏」

「ん？」

「ゆ、夕飯は一夏の部屋で・・・ふ、二人っきりで食べないか!？」
「・・・・・・・・へ!？」

顔を真っ赤にして誘ってきた筈に、一夏もまた同じように真っ赤になった。

現在、一夏の部屋は一夏一人で使っている。その部屋に付き合いたてとは言え、恋人と二人っきりというのは、色々と想像してしまうのも無理は無い。一夏も思春期の男の子なのだ。

「だ、駄目…か？」

「え!？ あ、いや……駄目じゃ、ない。むしろその…来てくれると、すっげえ嬉しい」

「そ、そうか…そうかそうか、嬉しい、か…」

これ以上は会話が続かなくなり、二人は顔を真っ赤にしながそれぞれロッカールームへ向かい、シャワーを浴びると寮への帰路に着く。

寮の一夏の部屋に着くまで、お互いに会話が無かったのは、言うまでも無い。

一夏の部屋に着いて、夕飯には篝の手料理が振舞われ、食事中は何とか会話が弾むまで持ち直したのだが、食事も終わり、食後のお

茶を飲み始めると再び会話が途切れてしまった。

時間的にはそろそろ女子が大浴場を利用し始める時間で、一夏も後2〜3時間もしたら大浴場が使える時間になる。

「ほ、筈は行かないのか？ その…風呂」

「あ、ああ……そうだな。あ、いや今日はシャワーだけにしようと思ってる」

「そ、そっか」

どうしたものか、会話が続かない。何とか話題を見つけようとは思っているのだが、一夏も筈も緊張がピークに達していて上手く思考が働いてくれないのだ。

「……あ」

そのとき、一夏の脳裏に閃いた。この空気を打開出来て、尚且つ二人の共通の話題となるたった一つの話。

「あのさ筈、キラに改造してもらおう紅椿の第五世代、何かリクエストしたか？」

「む……？ まあ、いくつか」

「へえ、因みに何をリクエストしたんだ？」

「キラのプリリアントフリーダムに搭載されているグリフォンとかいうビームブレードとフラッシュエッジというビームブーメランを搭載してもらおう事になった」

「ああ！ あれかあ……」

両手両足で相手に切りかかる筈を想像して、何となくえげつないものをイメージしてしまった。

「一夏は何をリクエストしたんだ？」

「俺はパルマファイオキーナっていう掌部ビーム砲と予備としてビームサーベルにアーマーシユナイダーとかいうナイフ。この二つは格納領域が無いから装甲の中に収納出来る様にするってさ。後は近接防御機関砲かな」

一夏がキラに注文して搭載する事になったアーマーシユナイダーはキラが乗っていたストライクの標準装備であるナイフだ。キラはこれをISサイズで再現して、更に少々改造を加えてスイッチ一つで刃にビームを纏わせる事が可能になった。

「なんていうか・・・俺達ってとことん近接戦闘型だよな」
「だな」

お互いに雪羅の荷電粒子砲、穿千といった射撃兵装を手に入れたというのに、あくまで近接戦闘に拘る。似たものカップルという言葉が浮かぶが、正にその通りだろう。

「……………」

二人とも同じことを考えていたのか、再び真っ赤になって沈黙してしまった。

「あの、さ……」

「一夏、その……」

「……………」

第三者がこの場に居たら、間違いなくイライラしているだろう。

雰囲気は甘いのに、お互いに何も言わない、何もしない。付き合いたてなのだから仕方が無いとは言え、じれった過ぎる。

「一夏…今日、泊まっても良いだろうか」

「っ！ い、良いのか？」

「ああ……勿論だ」

箒が言った言葉の意味を理解し、本当に良いのか尋ねた一夏に対して、箒も覚悟を決めたという表情で、それでも真っ赤な顔で、肯定する。

この日、一組の幼馴染兼恋人のカップルは、また一つ大人の階段を登り、より一層互いの絆を深め合うのだった。

そして、遂に待ちに待った日が訪れる。

一夏と箒は未だにSEEDを覚醒させてはいないものの、漸く完成したのだ。一夏たちの専用機の、バージョンアップが。

第三世代は第四世代に、第四世代は第五世代に生まれ変わり、それぞれの主の下に戻って、その進化した性能が明かされる。

「みんな、よく聴いてね」

一夏たちの前にキラが立ち、隣にラクスと束、後ろに千冬と真耶が控えて人払いをした整備室のモニターを開く。

遂に、亡国機業と戦う為の性能が明らかになるのだった。

第七十八話 「強くなる為に」(後書き)

次回はバージョンアップが完了した一夏たちのISのお披露目！
……はあ、お正月も仕事とか……。

第七十九話 「新たな力・1」 (前書き)

いえい、今回は設定集も兼ねてます。

第七十九話 「新たな力・1」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第七十九話

「新たな力・1」

IS学園整備室、そこにはキラを始めとしたいつものメンバーと、千冬、束、真耶が揃っており、この日、遂に完成した一夏たちのバ―ジョンアップしたISのお披露目が行われる。

「じゃあ、まずはセシリアのブルーティアーズから」

キラが取り出したのはセシリアから預かっていた青いイヤークラス：待機状態のブルーティアーズだ。

それをセシリアに手渡すと、モニターの前に立つ束に視線で合図を送り、大型スクリーンにバ―ジョンアップしたブルーティアーズのスペックデータを展開した。

「第4世代型IS、ブルーティアーズ改修機、通称“スターダストティアーズ”」

名称：スターダストティアーズ

世代：第4世代

装甲：TP装甲
トランスフェイズ

推進システム：ストライクガンナー

ヴォワチュールリユミエールシステム

武装：銃剣型特殊レーザーライフル“スターライトmk?”

長距離用大型レーザーライフル“スターダストシューター”

超長距離狙撃用レーザーライフル“ブルーピアス”

射撃方特殊兵装“ブルーティアーズ”

弾頭型特殊兵装“ブルーティアーズ”

画面に映し出された新型ブルーティアーズ、スターダストティアーズのスペックデータを見て、驚いたのは武器が全て中遠距離オンリーになった事と、強襲用高機動パッケージ“ストライクガンナー”が標準装備されている事、そして何より、ヴォワチュールリユミエールシステムだろう。

「元々のスターライトにインターセプターを繋げた銃剣タイプの新しいライフルに改造して、一つの武器にしたんだ。その分、スターダストシューターとブルーピアスを一緒に搭載出来る用になったのが特徴で、完全中遠距離戦闘用の機体にしたんだ。更にストライクガンナーの弱点であるブルーティアーズ封印をオミット、代わりにヴォワチュールリユミエールを搭載してブルーティアーズを使いなからストライクガンナーのスピードを出せる様にしてある」

更に言えば、ブルーティアーズは特殊な空間認識能力を有しなくても使用可能な第二世代型ドラゴンのデータを基にして造り直し、ブルーティアーズを操りながら自身も高機動戦闘が可能にしてある。何よりの特徴は全身とブルーティアーズの展開装甲、これにより元々の紅椿を超えるスピードを出せる様になり、ビットを展開装甲の刃を出しての突撃を行える用になったのが、大きな特徴だ。

「これが、私の新しい力…ですね」

手渡されたスターダストティアーズの待機状態、イヤークラスを見つめるセシリアの表情は、どこか緊張に引き攣っていた。

「次は鈴さんの甲龍ですわ」

次の説明はラクスがする。キラの時と同じようにラクスは東に視線で指示を出してスクリーンに新型の甲龍のデータを投影した。

「第4世代型IS、甲龍改修機、その通称は“シエンフー甲武”ですわ」

名称：甲武

世代：第4世代

装甲：TP装甲トランスフェイス

推進システム：風フエン

武装：大型青龍刀“双天牙月2”

空間圧縮衝撃砲“龍咆・蓬萊”

高電圧縛鎖“ボルテックチエーン”

新たな甲龍、甲武は双天牙月を展開装甲にしてレーザー刃を展開出来る様にした事と、衝撃砲が崩山標準装備なので、4門がデフォルトになっている点が特徴だろう。

勿論、これによって衝撃砲が不可視ではなくなるという欠点をキラと束が残す筈も無い。4門全てから放たれる衝撃砲は全てが不可視の弾丸となり、連射性、圧縮性が以前の倍以上もあって、それについて燃費とバランスが良いという至りに尽くせりの機体となった。

「推進システムとして高機動用のパッケージ、風も小型化して装備させましたので、速度も以前とは比べ物になりませんわ」

「あはは……マジ？」

次はシャルロットのエクレール・リヴァイヴだ。スクリーンに映ったエクレール・リヴァイヴは、特に変わった点が見当たらないのだが、そのスペックこそが最大の強化ポイントだろう。

「第4世代型IS、エクレール・リヴァイヴ改修機、通称“エクレ

「ル・ラピッド」は全身展開装甲にした事意外は特に変更点が無いんだけど、その代わり格納領域はエクレール・リヴァイヴの三倍になって、より一層多くの武装を収納出来る様になったんだ。そして瞬間切替に関しては改造を加えてシャルの脳波に反応するから、常に戦況に合った武器へシャルは無意識で切り替えられる」

名称：エクレール・ラピッド

世代：第4世代

装甲：TP装甲
トランスフェイズ

推進システム：変更点無し

武装：変更点無し（ただし格納武装数は3倍以上に増えている）

更に、ここに標準装備としてガーデン・カーテンが非固定浮遊部位に固定装備として取り付けられているので、防御力が格段に上がっていた。

「エクレール・リヴァイヴの時点でお兄ちゃんは完成させてたもんね」

「うん、だから特に目立った変化は無いけど、許してね？」

次はラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの番だ。ラクスが束に指示を出すと、モニターにシュヴァルツェア・レーゲンが映し出される。

「第4世代型IS、シュヴァルツェア・レーゲンの改修機、名称は“シュヴァルツェア・クラーゲン”です」

「シュヴァルツェア・クラーゲン：黒い洪水か、黒い雨から洪水になる。なるほどな」

名称：シュヴァルツェア・クラーゲン

世代：第4世代

トランスフェイス
装甲：TP装甲

推進システム：変更点無し

武装：大型陽電磁砲“ローエン格林”

ワイヤーブレード

プラズマ手刀

アクティブイナーシャルキャンセラ

慣性停止結界“AIC”

遠距離狙撃用レールカノン“ブリッツ”

大きな変更点と言えば大型レールカノンを廃して代わりに陽電子砲を装備させた点だ。しかも、その陽電子砲の名はキラにとって思い入れ深いローエン格林、タンホイザーとどちらにしようか迷ったが、やはりキラにとって陽電子砲と言えばローエン格林なのだ。

「陽電子砲か：取り扱いには十分気をつけなければならぬな」

「そうですね、誤射すると危険ですもの」

楯無の霧纏ミスティアス・レイディの淑女は特に大きな変更は無い。こちらもエクレール・リヴァイヴ同様、完成度が高かった為、改造する点が殆ど無かった為だ。精々が少ない装甲部分に展開装甲とTP装甲トランスフェイスを使っている点だろう。新名称は霧纏ミスティアス・チエーヴァの乙女。

次の打鉄・式式についても同じく、特に変更点はない。夢現が展開装甲式になっている点と全身がTP装甲トランスフェイスである点、そして一番の大きな変更点と言えるのは両肩の日固定浮遊部位が展開装甲アンロックユニットを採用していて、それらを広げると擬似的なハイマツトモードになれるという点だ。新名称は打鉄・参式。

「それと最後に一夏の白式、箒の紅椿、千冬さんの暮桜・真打だよ」

そして遂に明かされる。キラのブリリアントフリーダム、ラクスオルタナティヴに続く第5世代型ISに進化した三機のISの、

その全貌が。

第七十九話 「新たな力・1」 (後書き)

次回は白式、紅椿、暮桜・真打が第5世代になって登場！そして
明かされる第6世代型ISの正体……。そして

第八十話 「新たな力・2」 (前書き)

これで寝ます。

第八十話 「新たな力・2」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第八十話

「新たな力・2」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、楯無、簪、6人のISのお披露目が終わり、続いて行われるのは千冬、箒、一夏、この3人の第5世代へと進化したISの番となった。

最初にモニターに映ったのは白式と紅椿のプロトタイプでもある千冬の暮桜・真打、嘗ての世界最強がこれから担う事になる新たな剣だ。

「第5世代型IS、暮桜・真打改修型、通称“暮桜・春風”」

名称：暮桜・春風

世代：第5世代

装甲：TP装甲
トランスフェイズ

動力：デュートリオンエンジン

推進システム：ヴォワチュールリユミエールシステム

ミラージュコロイド

武装：雪片・真打

ビームシールド

第5世代へと進化した暮桜は装甲に一部の展開装甲とTP装甲を
トランスフェイズ
採用、更にスラスタにはヴォワチュールリユミエールシステムと
ミラージュコロイドを搭載する事で今まで以上の加速を可能とし、
デステイニーと同じような加速が出来る様になった。

そして、一番の難点であるエネルギー面に関してはデュートリオ

ンエンジンを搭載して、そこにパワーエクステンダーも採用している
るので、大幅なエネルギー量アップを果たしている。

中でも、暮桜が第5世代になったという大きな特徴はビームシールドと、雪片・真打だろう。雪片・真打は展開装甲タイプであるのは壱型の時と同じなのだが、そこから発生するエネルギー刃がレーザーからビームに変更されている点だろう。

「これでちーちゃんの全力の戦いが出来る様になったよ」
「そうか、感謝する」

第1世代から一気に第4世代になり、そして今や第5世代になった相棒を受け取った千冬は、これからの戦いに思いを馳せ、静かにだが確かに晒った。

「次は紅椿ですわ。第5世代型IS、紅椿改修型、通称は“紅椿・煉華”」

名称：紅椿・煉華

世代：第5世代

トランスフェイス

装甲：TP装甲

動力：デュートリオンエンジン

推進システム：ヴォワチュールリユミエールシステム

武装：雨月

空割

穿千

展開装甲ビット

グリフォンビームブレイド

フラッシュエッジ2ビームブーメラン

新型紅椿最大の特徴は全身の展開装甲からヴォワチュールリユミエールシステムの光が出てくる点だ。全身スラスタールになったと思

えは解り易いだろうか。

更に雨月と空割から放っていたレーザーは全てビームに変更、穿千からはプラズマビーム砲が放たれる。そして単一使用能力ワンオフアビリティの絢爛舞踏はよりスムーズなエネルギー増幅を行えるデュートリオンエネルギー送電システムとのリンクが構築されていて、支援という点でも前以上のものになった。勿論、紅椿にもパワーエクステンダーが搭載されているので、燃費の悪さから来るエネルギー切れの早さも改善されているのが特徴だ。

「凄い…これが新しい紅椿」

「でも気をつけて、紅椿は元々のスピードが速かったのに、そこに加えて全身の展開装甲からヴォワチュールリュミエールの加速を行える様になったから、正直最高速度は以前のストライクフリーダムに並ぶよ」

「そ、そんなに…」

まさかスピード面でストライクフリーダムに並ぶ程になるとは思いもよらなかった。最高速度はという事は、普段はそれほどでもないのだから、出そうと思えば出せるという事なのだ。

「最後は白式。一夏が担う新しい剣だよ」

「・・・ああ」

「第5世代型IS、白式・雪羅改修型……名称、白騎士・雪羅」

「……は？ しろ、き……し……はあ!？」

名称：白騎士・雪羅

世代：第5世代

装甲：PS装甲
フレイクシフト

動力：デュートリオンエンジン

推進システム：ヴォワチュールリュミエールシステム

武装：雪片・参型

多機能武装腕“雪羅”

パルマファイオキーナ掌部ビーム砲

ヴァジュラビームサーベル

アーマーシユナイダー

驚く一夏を他所に、スクリーンに映し出される新たな白式…白騎士・雪羅、セカンドモード第二形態のまま世代アップしているので、性能は世代アップした全てのISの中ではトップに君臨する。

勿論、消費エネルギーはヴォワチュールリユミエールシステムとフェイスソフトPS装甲のおかげで更に悪くなったのだが、パワーエクステンダーの上位版、ハイパワーエクステンダーを搭載する事でシールドエネルギー最大値がブリリアントフリーダムとオルタナティブ、レジエンドプロヴィデンスを除く全てのIS中最大になった。

雪片に関しては暮桜と同じなのだが、名称が白式から白騎士にした理由はただ一つ、コアナンバー001が持つ搭乗者への治癒能力を最大に引き上げ、嘗ての白騎士としての力を取り戻したからに過ぎない。

「白式が…白騎士のコアを使っているって」

「雪羅のスピード、白騎士として覚醒したコアの扱い難さは白式の比じゃないから、この点には十分気をつけてね」

「ちょ、ちよつと待って！ 一夏の白式が白騎士のコアを使ってるって！ 何よそれ！ マジなの！？」

あまりの事に皆が驚く中、鈴が何とか気を取り直してキラと、千冬、そして束に向けて皆が共通で抱いた疑問を投げかけた。

「…ああ、本当だ。この天才が何をトチ狂ったのか白式に白騎士のコアを使ったのさ」

「いや、いつくんの為のISだもん。ただのISじゃあ束さんと

しては納得できなかつたからねえ」

「一夏、白式って漢字の読み方、変えて並べ替えてみて？」

「白式の読み方？ びやくしき…しろしき？ しきしろ…しろき、
し……！……！」

一夏が、それに他の皆も気がついた様だ。白式の読み方を変える
と白騎士になるという事に。

「じゃ、じゃあ俺って」

「白騎士の後継者、って所かな？」

「マジかよ……」

白騎士の継承者、それ即ち千冬の後継者でもある。その事につ
いてはまだ話さないが、千冬としては内心、嬉しいやら心配やら、複
雑な心境らしい。

「あら？ キラさん、もう一つデータがあるみたいですが……」

「あ、うん……」

セシリアが気がついたのは、白騎士・雪羅のデータの次のデータ
が開ける状態になっているアイコンだった。

セシリアの指摘に鈴音やシャルロット達も気がつき、まだ何かあ
るのかと、ラクスの方を向いた。キラのブリリアントフリーダムは
改造の必要が無いので、可能性としてはラクスのオルタナティブだ
けなのだが、その予想は外れる。

「東さん」

「おっけ〜」

東が操作して開いたデータ、それはこの場にいる者のISではな

い。全く別の機体のデータであり、見たことの無い機体データだった。しかも、そのデータの世代のところに書かれている文字は……。

『第6世代!?!』

「そう、僕と束さんで開発を進めている第6世代型のIS、開発コード“楽園の兎”、正式名称“^{ラクト}楽兎”」

第八十話 「新たな力・2」 (後書き)

いえい、正月の休みは1月2日だけとか。

第八十一話 「戦う決意をした天才」 (前書き)

第6世代、樂兔のスペック公開！

第八十一話 「戦う決意をした天才」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第八十一話

「戦う決意をした天才」

モニターに映し出された機体データ、第6世代型IS“ラクト樂兔”、未だに世界中が第3世代の開発、実験、量産化に苦労している中、遂に東とキラは第4世代、第5世代を更に超えて第6世代の開発に着手してしまった。

それはつまり、世界に対して真正面から喧嘩を売る行為であり、世界中で行われている第3世代開発を無意味にしている行為でもある。

「これは…誰が乗るんですの？」

セシリアの問いは至極当然のものだ。この場のIS操縦者の中で専用機も持っていないのは元日本の代表候補生である真耶だけ、その他は全員専用機を持っているのだから、樂兔の操縦は誰がするのだろうか。

「これはだな…」

「はいはい！ これはなんと！！ 天才東さんの専用機なんだよね〜！」

「ね、姉さんの専用機、だと？」

「そだよ〜」

まだ機体自体の作成に着手はしていないものの、設計自体は終わ

つて、予定スペックのデータは完成しているので、それも並べて展開すると、当然だが高スペック過ぎる機体であり、それにもまた、驚きの声が上がった。

名称：樂兎

世代：第6世代

ヴァリアブルフェイスシフト

装甲：VPS装甲

推進システム：ヴォワチュールリユミエール

動力：ハイパーデュートリオンエンジン

武装：高エネルギービームライフル

ラケルタビームサーベル

ビームシールド

イーゲルシュテルン

遠距離プラズマビームライフル“大和”

中遠距離広域殲滅用ブラスターライフル“星光”

自立行動ユニット“アリス・イン・ワンダーランド”

第5世代の基本装備に加え、第6世代のコンセプトである自立行動兵器であるアリス・イン・ワンダーランドを搭載した第6世代機、樂兎は中遠距離戦闘に主眼を置いた機体になっている。

更に特筆すべきは機体自体に掛かっているリミッター機能だ。それもただのリミッターではなく、そのリミッターを外す事で樂兎は本来の性能の何倍もの力を引き出す事が出来る様になる…が、代償として機体に掛かる負担、操縦者に掛かる負担が大きすぎて、三段階にリミッターが分けられ、三段階目のリミッターを外した時は操縦者も機体自体も、自壊しかねない程の出力を發揮するのだ。

「これがもう一つの第6世代型ISのコンセプト、リミットブレイク機構だよ」

「リミットブレイク機構…そのリミッターを外した時の性能はVTシステムで暴走したISの比ではなさそうだな」

「そう・・・だね、乗る、の…怖そう」

束はこのリミットブレイク機構にバスターシステムと名付けた。このシステムは云わば諸刃の剣、使えば絶大な力を得るが、代わりに自身も傷つく危険なシステムでもあり、これを操縦する束の決意の証でもあった。

「まあ、第6世代の技術に関しては束さんとも相談して世界にはまだ広めない事にしたんだけどね。バスターシステムはまだ安全性が確立されてないから、正直に言えば束さんが使うのだって反対なだけだ」

キラの言う事は最もだ。このような危険なシステムを積んだ機体に乗るなど、束が決意の証として使うにしても正気の沙汰ではない。

「束さん、マジでこの機体、使うのか？」

「姉さん、私は正直反対だ。これは人が乗って良い機体じゃない」

「いっくんも箒ちゃんも心配性、大丈夫だよ。このバスターシステムはあくまで予備、本命はアリス・イン・ワンダーランドの方なんだから」

アリス・イン・ワンダーランド、見た目は小型のIS…否、MSに似ている。ユニット自体は5機あって、それぞれの見た目はストライク、イージス、バスター、デュエルAS、ブリッツ、キラもよく知るGシリーズ初期の5機だ。

それぞれの名称、性能も見た目どおり、ストライク型はストライクで、性能としては汎用性に優れているユニット。イージス型はイージス、変形機構を持ち、全距離対応で戦えるユニット。バスターは遠距離からの射撃、砲撃専用のユニットで、デュエルASは中近距離専用のユニット、ブリッツは中近距離だがミラージュコロイド

を搭載しているので、姿を隠した電撃戦を可能としている。

ユニットにも当然だがVPS装甲を搭載していて、ビームライフルやビームサーベルも持っている。それぞれが独立したAIによって束の脳波をキャッチしながら独自の判断で動く兵器なのだ。

「ユニット一つ一つが通常のIS一機分に匹敵する性能ですか…さすがはヤマト君と篠ノ之博士でなんですかねえ」

「ああ、まったく馬鹿げている。楽兎は一機でありながら六機分の戦力を持っているのだから、しかもユニットはあくまで楽兎の武装の一つとしてカウントされるから、一対一でも反則にはならない」

完全に競技用ではなく実践用の機体であるのは間違いない。当然だが、こんな機体のデータは世界に流せる筈も無いだろう。

「因みに、AIのプログラミングはキー君がやってるんだよねえ」
「ええ、僕がストライクを使っていた時のデータ、アスランやイザーク、ディアツカ、ムウさん、カガリ、ニコル君の仮想データが組み込まれてますので、性能としては高水準のものになってます」

C・Eでも最高、最強クラスのパイロットのデータが使われているのだ。これで並のIS操縦者がユニットに勝てる可能性は完全に消えたと考えて良い。

「ふうん、そのデータに使われた人のことは知らないけど、でも篠ノ之博士が乗る機体ならこれくらいは必要じゃないかしら？正直な話をさせてもらうけど、博士はISの開発者であって操縦者じゃない。当然だけどISを使った戦闘なんて行ったことが無い筈だし、本体である楽兎を扱う博士の自身の実力は代表候補生に劣るでしょうから」

楯無の言葉も最もだ。確かに、東は操縦者ではないから、ISに乗っての戦闘など未経験で、それをカバーするのが自立行動ユニットでもあり、ブラスタースystemなのだから。

「それで東、キラ、樂兎自体の組み立ては何時ごろから始める予定なんだ？」

「うーん…実を言うとまだ未定」

「……何？」

「僕も東さんも、設計したのは良いのですが、まだ技術が若干ですけど追いついていなくて、パーツも足りませんし、組み立て所か、部品造りすら始めてないんですよ」

つまり、まだ机上の空論状態なのだ。まだ技術的に完全な再現が出来ていないVPS装甲やハイパーデュートリオンエンジンを完全再現させられるまで、造るのは待っている状態で、部品を造る為の資材については東の隠れ家から送ってもらう予定だ。

「送ってもらう？ 誰にだ？」

「くーちゃんだよ」

「…何者だ？」

「本名は篠ノ之 久遠さん、東さんが拾った孤児でして、戸籍上は東さんの義理の娘ですわ」

「近々学園に合流する予定ですが、今は東さんの隠れ家で色々と後処理を行っているんです」

もう驚く声も出てこなかった。いや、筈だけは顔一杯に驚愕の表情を浮かべて、いつの間にか義理の姪が出来ていた事に驚きや、複雑な感情を胸の内に渦巻いている。

「はあ…まあ、もういい。とりあえずお披露目はこれでお終いだ。」

お前達はアリーナにでも行って新型機のテストでもやって来い」

千冬の言葉で我に返った一夏たちはそれもそうだとばかりに駆け足でアリーナに向かった。残されたキラ、ラクス、束、千冬、真耶の大人たちは一夏たちには見せなかった。否、見つからない様に隠していたデータを開き、真剣な表情でそれを見ている。

「束、結局のところ如何だった？」

「このMって子？ まあ、クローンではないのは確かかな」

「やはりか…」

最初はクローンの可能性を考えていた織斑マドカという少女、千冬と瓜二つの顔で、一夏より年下と思しき背格好、クローンにしては技術が確立してからの年数とマドカの年齢が合わない。

「僕も独自に調べましたが、まず間違いなく織斑秋奈と織斑春文は生きてます。最後の目撃情報は千冬さんが第一回モンドグロツソで優勝した翌日、モンドグロツソの会場です」

「生きていたのか・・・しかもあの会場に居たとはな」

織斑秋奈と織斑春文、名前から判る通り、千冬と一夏の両親の名であり、一夏が生まれてすぐに失踪した二人だ。

「では考えられる可能性としては一つだな」

「織斑先生…」

「いや、気にする必要はない。私の家族は弟である一夏だけだ、それ以外の人間など誰であろうと家族だなどと認めるつもりはない…
纂以外はな」

本人の目の前では絶対に言わないが、千冬も纂の事は妹の様に見

ている。まあ、一夏の幼馴染なのだから、当然だが鈴音の事も、少なからず妹分の様に見ている事も否定しない。

だから千冬としては一夏と付き合うのであれば、篤か鈴音なら許せた。千冬は千冬なりに篤と鈴音の事を可愛がっているのだ。第三者には絶対に判り難いだろうが。

「千冬さん、一つだけお尋ねします。今後、織斑マドカさんが現れたときは、戦えますか？」

「…ラクス、私を見くびるなよ？ 相手が誰であろうと、敵として目の前に立つのであれば切り捨てる。一夏の障害になるのであれば問答無用で私が一夏を守る。それが幼い頃、あの二人に捨てられた時に自身へ誓った誓いだ」

「それを聞いて安心しましたわ」

そう、相手が例え両親であろうと、血を分けた“妹”であろうと、絶対に容赦はしない。千冬は改めて暮桜を握り締めながら己と、己が手の中にある相棒に誓うのだった。

第八十一話 「戦う決意をした天才」 (後書き)

くーちゃん、一夏と千冬の両親、マドカの設定についてはオリジナルになります。

第八十二話 「舞い戻る日常、冬休み前最後の大イベント」(前書き)

や、やっと書けたあ。仕事が忙しくて書いてる暇がないなんて…。
鬱だ死のう…。なんて思ってる暇すら無いとは!!!!!!!!!!

第八十二話 「舞い戻る日常、冬休み前最後の大会イベント」

IS（インフィニット・ストラトス）
自由の戦士と永遠の歌姫

第八十二話

「舞い戻る日常、冬休み前最後の大会イベント」

一夏たちの新型ISが完成して一月が経った。その間に亡国機業で大きな動きは無く、一夏たちも新型機の訓練とテストに集中する事が出来たので、問題は無い。

そして、季節は早いもので既に冬、冬休みが間近に迫ったこの季節、IS学園では冬休み前最後の大会イベントが始まるうとしているのだった。

IS学園全生徒参加型、冬の雪山温泉合宿。IS学園の全生徒が北海道の雪山にある巨大温泉旅館を貸し切ったの合同合宿、厳しい環境下での操縦技術と整備技術、オペレート技術といった総合技術力強化の名の下に行われるイベントで、合宿中は生徒達全員が雪山の、時として猛吹雪となる環境下でISに触れる事となる。

現在、IS学園生徒達は一年、二年、三年に分かれて飛行機に乗り込み、一路北海道へ向けて機上の人となっていた。

「北海道かあ、そっぴや去年だか一昨年にこの季節だったかな、お土産だって白い 人を買ってきたよなあ」

「そっぴなのか？ 私も日本中各地を転々としたが、北海道は初めてだから楽しみだな、その白い恋 というのも気になる」

機内で隣同士になった一夏と篤は人生初の北海道に胸を躍らせながら、お互いに手を握り締め、周囲の女子たちにジェラシーを感じ

させつつ和気藹々と恋人との一時を過ごしている。

そんな二人の後ろにはこれまた一年生組みもう一組のカップル、キラとラクスの二人がイチャイチャと…していかない。ただ手元にある資料を真剣な表情で見つめていて、周りに居たセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪に何事かと心配されていた。

「キラさん、ラクスさん、どうなさいましたの？」

「ん？ ああ、ちょっとね」

「その手元の資料は何だ？ 何かの報告書の様だが」

「いえ、報告書ではないのですけど…」

ならば何なのかと鈴音とシャルロットが二人の手元を覗き込んだ。

「……あんだ達ねえ」

「あ、あはは」

資料には“北海道産毛蟹の美味しいお店”と書かれていた。

「毛蟹…北海道の蟹は、美味しい、から」

「シリアスな表情でコメディちつくなことすんな!!」

鈴音の渾身のツツコミに、周りで聞いていた全員がその通りだと頷くのだった。

飛行機が北海道の新千歳空港に到着して、そこからはバスでの移動となる。飛行機の時間の差から三年と二年は既に旅館に向かっているらしく、一年が一番最後になるとの事だ。

バスに関してはクラスごとに分かれる事になっているので、二組の鈴音と四組の簪とは暫しの別れで、キラたち一組と担任である千

冬、副担任である真耶が先頭のバスに乗り込んで、一路旅館へと向けて出発した。

「すつげえ、12月にもなると北海道つて雪が積もるんだな」

「地域によつては積雪になるのは十二月下旬の所もあるみたいだけど、山岳地域になれば初雪は11月からつて話だしね」

バスに揺られる事2時間、窓の外は完全に雪景色で、一面銀色の世界が広がっていた。

「ラクス、姉さんは確か一緒に来る筈では？」

「東さんでしたら極秘に旅館へ向かっている所ですわ。一応、指名手配中の身ですし」

「指名手配中というのも、楽ではありませんのね」

本当に大変だ。だからシャルロットとラウラは窓の外に見えた“空飛ぶ人参”を見なかったことにするのだった。

旅館に着いて先ず行われたのは部屋割りだ。IS学園の全生徒が泊まってもまだ余裕のある超巨大旅館の一年フロア、その教員フロアと生徒フロアの境界にある部屋にはキラと一夏が、その隣には千冬と真耶が泊まる事になり、後はその周辺にいつものメンバーの部屋が並ぶという形で落ち着き、初日は移動の疲れもあるだろうからという事で旅館内であれば好きにしてい、つまりは自由行動が許された。

この合宿は7泊8日と長い日程を組まれているので、初日に遊ぶだけの余裕はある。夕飯まで後2時間ほど、それまでの時間は生徒たちも旅館敷地内で自由に過ごすことになるのだった。

「一夏、白騎士には慣れた？」

「キラ…いや、正直に言つて白式の時より扱い難い。スピードは桁違いだしパワーも並じゃないからコントロールし切れない」

「冪も似たような事を言つてたけど、慣れるしかないかな。SEEDを発動した時、その力を120%発揮出来る様にしないとイケないからね」

そのSEEDが自分の中に本当にあるのかに悩んでいる一夏にしてみれば、プレッシャーが大きい。

ただでさえ10年前の事件の象徴とも言つべき白騎士に乗っているのに、ここに来て更に世界に7機しか存在しない第5世代型ISの担い手で、SEEDなどという超常の力の可能性に目覚めなければならぬのだから。

「まあ、今はSEEDの事もあるけど他に考えなくちゃいけない事があるからね」

「他？」

「明日から始まる雪山での操縦訓練、戦闘訓練は今までの比じゃないから。局地戦闘つていうのは想像以上に機体にも精神にも、体力にも負担が大きいよ」

「マジかよ」

「機体の設定なんかも通常の設定とは異なるからね」

キラも砂漠や海、雪山でのMS戦闘経験がある身だけに、局地戦闘の大変さを理解している。

「飛べるから関係ない訳じゃない。飛んでいても戦闘中に地面に降りる場合だつてあるから、その時に足場が滑つて転んで死んだなんて言い訳にもならないよ」

「つつか滑つて転んで負けましたなんて間抜けにも程があるな」

だからこそ、局地戦闘を行う際には設定にも慎重にならないといけない。小さなミスが命取りになり得るのはどの戦いも同じだが、局地戦闘はそれ以上なのだから。

歴戦の戦士であるキラの言葉は、何よりの重さを秘めており、戦いに関する意見には現実味が溢れていた。

夕食後、全学年の専用機持ちは他の生徒達が入浴している時間を使って自分達の専用機の設定変更を行っていた。

翌日から早速始まる局地戦闘実習の授業の為に前の晩からセッティングしておく様にと千冬に命じられていたのだ。

「キラ、この接地面における対雪流動計算設定は合っているだろうか？」

「これは…紅椿は元々高機動性に優れてるから若干だけど他のISと比べて重量が軽い方だし、もう少し抑え目に設定しても大丈夫かな」

「僕のは？」

「エクレール・ラピッドは逆に重い機体用の設定にしておいた方が良いかもしれない。シャル自身が射撃多めの戦法を採っているからこれだと踏ん張りが利かなくなるよ」

キラ指導の下、一年生たちは初めての局地戦闘用設定のセッティングを行う一方、楯無、ダリル、フォルテの三年、二年は初めてではないため自分達のセッティングをこなしつつ、キラの設定の話を自分達の設定に取り込む作業を行っていた。

「おい楯無、ヤマトって楯無より強いらしいな？」

「ダリル先輩、もしかして気になるのかしら？」

「ダリル先輩だけじゃないっすよ、あたしも気になってるっす。学園最強の更織よりも強い一年、その実力はブリュンヒルデすら敵わないとまで言ってるらしいじゃないっすか」

学園最強の楯無、世界最強の千冬、この二人を大きく超えた実力の地位に立つキラの存在は世界各国の国家代表、代表候補生に少なからず興味や関心を与えていた。

勿論、全てが好意的な感情ばかりではなく、中には所詮は男だから、高性能な機体に頼るだけの似非最強などと呼ぶ者もいるが。

「（まあ、そんな考え方をしている時点でその人の実力の程度が知れてるのだけどねえ）」

楯無自身、キラと剣を交え、更にはキラと同レベルの操縦者であるクルーゼに敗北してよく解っているし、知識として理解している事もある。

男だからと言っても、ISを使える時点でキラと他の女の立場は同等、そして高性能な機体は素人が乗って直ぐに最強の名を手に入られるまで戦える訳ではない。むしろ高性能な機体ほど操縦が複雑で、熟練された腕と実力が無ければ宝の持ち腐れ所か足枷になってしまう事すらあるのだ。

「彼は間違いなく世界最強と言っても過言じゃないわ。最強の機体に、最高峰の腕と実力を兼ね備えた存在、それがキラ・ヤマトという人間なのだから」

楯無が何気なく開いた扇子には「人は見かけによらない」と書かれている。

「そっか、なら明日の局地戦闘実習初日恒例の見本演習、あたしが

ヤマトと戦ってみるっスかね」

そう言つて、フォルテはセツティングが丁度終わった自身の専用機、コールドブラッドの装甲を軽く叩く。

「あ、フォルテずるいな。せつかくだしあたしがやりたかつたのによ」

「珍しいわね、普段は戦闘なんて面倒だつて言つてる二人がそこまですぐで彼と戦う事に意欲的だなんて」

「興味っスよ、ロシアの国家代表である更織に勝つたつていう一年の実力がどれ程なのか気になるんスよ」

「フォルテもあたしも中々彼と戦うチャンスが無えからな」

二人の話を聞いていて楯無の脳裏に浮かんだのは“驕り”の文字、ダリルもフォルテもキラ・ヤマトという人間を侮っている。

キラが楯無や千冬よりも強いなどと、恐らくは信じていないであろう二人の目、むしろどこから沸いてくるのか余裕の色すら見えた。

「はあ、知らないわよ。代表候補生としての自信を失つても」

だから明日は二人に現実を知ってもらおう。戦う事を面倒だと言ふ二人、なまじ実力があるからこそその余裕という名の驕りを、キラ・ヤマトという別次元の強さを持った存在の壁の前に叩き潰されれば二人も楯無と同じように学生の内に国家代表になれる可能性が出てくるだろうから。

ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイヤ、実力という点では既に国家代表クラスまでであるというのに、共通して持っているめんどくさがりな性格が災いして候補生止まりしているのだが、明日はどんな現実を見せられるのか、楽しみになつてきた楯無であった。

第八十二話 「舞い戻る日常、冬休み前最後の大イベント」(後書き)

次回！ 始まる局地戦闘実習、真冬の雪山での今までにない厳しい授業が待ち受けている。そして急展開を迎える事態とは……！！
真夏の空で白銀に輝いていた翼は闇に染まり、静かな蝶は新たな進化を遂げて舞い降りる。

ネタだと思えます？

第八十三話 「局地戦闘、凍てつく鮮血と地獄の猟犬」 (前書き)

局地戦闘、のつもりです。

第八十三話 「局地戦闘、凍てつく鮮血と地獄の猟犬」

IS〈インフィニット・ストラトス〉
自由の戦士と永遠の歌姫

第八十三話

「局地戦闘、凍てつく鮮血と地獄の猟犬」

雪山合宿二日目、朝から早速始まった実習には一年から三年までの全学年全クラスが合同で行われている。

各学年に一機ずつ学園から用意されている機体は打鉄、ラファール・リヴァイヴ、テンペスタ、メールシュトロームの4機、一学年4クラスなので、用意されたのはそれら4種類12機、全て学園で用意している訓練用の機体だ。

「ていうか、あつたんだな、学園に打鉄とラファール以外の訓練機」
「メールシュトロームはイギリス、テンペスタはイタリアの第2世代機。数は確かに打鉄やラファールより少ないけど、一応は用意してあるよ？ 他にもアメリカのアラクネや中国の龍^{ロン}、ドイツのヴァイスリッター？とかも」

全て各国の第2世代型の量産機だ。この他にロシアやオーストラリア、韓国、カナダ、イスラエルの第2世代型量産機が訓練用として用意されている。

「無駄話はそこまでにしろ。専用機持ち達も集まった事だからそろそろ始めるぞ」

キラの話を聞いていた一夏だったが、千冬の声でピタリと話を止

めると前を向く。見れば唯でさえ寒いISスーツしか着ていない生徒達の前で完全防寒装備の千冬と真耶が前に立っていた。

「うわ、ずりい」

「ほう、織斑：貴様は教師が指導中に風邪をひいても良いというのか？」

「滅相もないです!!」

出席簿（寒冷地仕様）を投擲する構えを見せる千冬に首を横に振る一夏、いつも通りの光景だった。

「さて、今日から実際に始まる雪山での局地戦闘実習だが、先ず初めての一年生には局地戦闘が通常戦闘と如何違うのか理解出来かねていると思う。夕べは設定の変更を行ってはいただろうが、恐らくはイメージがし切れていないだろう。そこでだ、局地戦闘経験のある二年、三年の専用機持ちも一緒だから手始めに見本を見せてもらう。見て学ぶ、通常戦闘と比べて何処が違うのかをな。それからヤマト、お前は局地戦闘も経験があるだろう。更識、サファイア、ケイシーと一緒に見本側に入ってもらおうが、構わないか？」

「はい」

寧ろキラに経験の無い戦闘フィールドは無い。雪山だろうが、市街地だろうが、砂漠だろうが。ただし、キラが最も得意としている戦闘フィールドは言うまでもないが宇宙空間での戦闘だ。

「では先ず局地戦の為に必要なセッティング、設定だが、これは諸君も昨夜に行ったからどの様な設定をすれば良いのか知っているだろう。なら、なぜその様な設定が必要なのか……更織妹、答えてみる」

「えと……通常空間での戦闘と比べ、地面に降りた時に足場が、不安

定、だから…です」

「そうだ、設定については寒冷地、砂漠、海、様々な戦闘フィールドで異なるが、今回の寒冷地仕様の設定は何が特徴だ？ ボーデヴィット」

「足場となる雪が滑るといふ事、崩れ易いといふ事、機体の熱で溶けるといふ事を考慮した設定を主としている点です」

次々と局地戦用設定の特徴を生徒に答えさせていた。寒冷地仕様から始まり、砂漠仕様、海上仕様、海中仕様、これらは二学期の授業でも触れている内容なので、一年生であろうとスラスラと答えられる。……一夏を除いて。

「織斑、確にお前はISに触れて一年も経っていないから理解するのに時間が掛かるのは当然だが、せめて局地戦実習があるのは判っているのだから予習くらいしておけ馬鹿者」

「あだあっ!？」

出席簿（寒冷地仕様）が一夏の脳天に向かって飛んできた。通常の出席簿のスパーン！ という音ではなく、ズドムツ!!! という明らかに出席簿としてはおかしい音を立てて一夏は雪の中に沈む。

「あ、あのちふ…織斑先生、その出席簿、材質は何ですか？」

「鳳、あまり命を粗末にするな」

「……」

鈴音が命がけの質問をして、千冬の答えに真っ青の顔を隠すことも忘れて縮こまる。

因みにこの出席簿（寒冷地仕様）は二人の天才が作った特別性で、中の材質は確かに紙だが、表紙の材質にはISの装甲が、それも背表紙に内蔵されたバッテリーで作動するTP装甲トランスフェイスが使われているの

だ。

「無駄話はそこまでだ。そろそろ始めてもらおう、ヤマト、更織姉、サファイア、ケイシー、タッグマッチになるが局地戦闘の見本として模擬戦をしてみたい」

「なら先生、あたしはフォルテと組むぜ？ ヤマトと戦いてえですし」

「好きにしる。ならヤマトと更織姉ペア、サファイアとケイシーペアでの模擬戦とする。ISを展開しろ」

そう言われてキラと楯無はブリリアントフリーダムと一霧纏の乙女 ミステリアス・チェーヴァ を、ダリルとフォルテはヘル・ハウンド ver 2.5 とコールド・ブラッドを展開して、上昇した。

「では、開始！」

合図と共に動いたのはダリルとフォルテのペアだった。

オーストラリア代表候補生であるダリルは専用機であり、第3世代への足掛かりとして開発された2.5世代型ISヘル・ハウンド ver 2.5の主武装である大型レーザーマシンガン“バリスタ”を連射し、カナダ代表候補生であるフォルテは専用機であり第3世代初期の機体であるコールド・ブラッドの第3世代兵器、一鮮烈の赤 ヴィヴィッドレッド というレーザーソードを構えた。

「レーザーソード…通常のレーザーブレードとは違うみたいだけど、気をつけた方が良いわヤマト君、フォルテの一鮮烈の赤 ヴィヴィッドレット は曲者だから」

名の如く血の様に赤いレーザーの刃を展開する一鮮烈の赤 ヴィヴィッドレット に対して、バリスタの連射されているレーザーを

避けながらキラはビームライフルをマウントしてビームサーベル二本を構え、パルマファイオキーナとコネクター部分を接続させると通常より強力なビームの刃を展開する。

楯無もまた、バリスタをかわしつつ、蒼流旋を構えフォルテに突撃した。寒冷地仕様という事で一清き情熱 クリア・パッションを展開出来なくなっている代わりに、蒼流旋に関しては水の温度を上げて出力を上昇させているので、威力は設定変更前の比ではない。

「遅いぜ更織！ てめえの機体は速度は並なんだからあたしのマシンガンの嵐の前に突っ込むのは無謀だつて忘れたかあ！？」

「あら、どうかしらね？ フォルテ先輩は知らないかもしれないけど、今の私のISは…第4世代だもの。展開装甲、全展開！！」

瞬間、一霧纏の乙女 ミステリアス・チエーヴアの展開装甲が開き、今まで以上の加速に入り、更には瞬間加速で高機動戦に入った。

「なっ！？」

今まで、ダリルは楯無に勝てないまでも接近された事は無かったし、させた事も無かった。それだけバリスタの連射速度は高いという自負を持っている。

だが、楯無は今日初めて、今まで出来なかったダリルに接近するという事をやったのけたのだ。第4世代へと進化した機体を完全に使いこなして。

「それと、蒼流旋も今までの物じゃないわ！ 形状変化！ 蒼流旋・穿」

水の槍である蒼流旋が螺旋状から普通のランス状に変化した。た

だし、普通のランスと思う無かれ、螺旋という貫通力を殺してまで無駄を省き空気抵抗を減らした新たな蒼流旋は突進力という一点に特化している。

「はあああああああ！！！！」

その突進力に展開装甲の加速と瞬間加速イグニッションブーストの加速、二つが加わる事により貫通力も補える様になった。

何発かレーザーが掠り、シールドエネルギーが減らされるが、驚異的な速度で楯無の蒼流旋がダリルのヘル・ハウンドver2.5の胸部装甲に直撃する。

「ぐうっ！？ こ、のおおお！！」

一気にシールドエネルギーを持っていかれたダリルではあるが、そこは国家代表クラスの実力を持つ者、瞬時にバリスタを持つ手とは反対の手に展開したバスターソード“モラルタ”を振る。

しかし、モラルタは実体剣であり、楯無の一霧纏の乙女 ミステリアス・チエーヴァ は装甲にTP装甲トランスフェイズを使っている。つまり……。

「…ふ」

「なっ！？」

楯無には一切のダメージが通らない。

「これで……」

ランスティール・ネイル

蛇腹剣を展開し、新機能として追加された機能、刀身に大量の水を圧縮して纏わせるという機能を発動させながらヘル・ハウンドver2.5を切り裂き、刀身が直撃した瞬間に圧縮していた水を開

放した。

「がああああっ!?!?」

ヘル・ハウンドver2.5のシールドエネルギーが0になった為、二人の戦いは楯無の勝利に終わる。そして楯無がキラの方を見ると、既にコールド・ブラッドのシールドエネルギーが0になって、一切のダメージも負わず、シールドエネルギーが全く減っていないキラの勝利している姿が見えた。

「ま、当然の結果よね」

第八十三話 「局地戦闘、凍てつく鮮血と地獄の猟犬」 (後書き)

次回はキラとフォルテの戦いを少しだけ触れてから新たな展開に進みたいですねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0006s/>

IS ~インフィニット・ストラトス~ 自由の戦士と永遠の歌姫

2012年1月14日01時45分発行